日本戲曲全集
第四十六卷

菊池寛
山本有三

現代篇第十四輯

東京
春陽堂版

「敵討以上」の了海（市川猿之助）

「屋上の狂人」舞臺面

「父歸る」舞臺面

「奇蹟」舞臺稽古の後・右より三人目尾上菊五郎・四人目菊池寛

「玄宗の心持」舞臺面

「生命の冠」の　有村恒太郎（井上正夫）

「嬰兒殺し」の女土工（澤村宗之助）

「海彦山彦」右 澤村宗之助 左 守田勘彌

「同志の人々」舞臺面

「熊谷蓮生坊」の熊谷（中村吉右衛門）

菊池寛・山本有三

日本戯曲全集　第四十六卷　目次

菊池寛篇

山本有三篇

菊池寛篇

父歸る

時
明治四十年頃

所
南海道の海岸にある小都會

人
黒田賢一郎　二十八歳
その弟　新二郎　二十三歳
その妹　おたね　二十歳
彼等の母おたか　五十一歳
彼等の父宗太郎

情景
中流階級のつゝましやかな家。六疊の間、正面に簞笥があつて其上に目覺時計が置いてある。前に長火鉢あり。湯罐から湯が立つて居る。卓子臺が出してある。賢一郎役所から歸つて和服に着更へたばかりと見え、寛いで新聞を讀んで居る。母のおたかが縫物をして居る。午後七時に近く戸外は闇し。十月の初。

賢一郎　おたあさん、おたねは何處へ行つたの。
母　仕立物を屆けに行た。
賢一郎　まだ仕立物をしとるの。もう人の家の仕事やこし、せんでもえゝのに。
母　さうやけど、嫁入の時に、一枚でも餘計えゝ着物を持つて行きたいのだらうわい。
賢一郎　（新聞の裏を返しながら）　此間云ふとつた口は何うなつたの。
母　たねが、ちいと相手が、氣に入らんのだらうわい。向うは呉れ〱云うて、せがんどつたんやけれどものう。
賢一郎　財產があると云ふ人やけに、えゝ口やがなあ。
母　けんど、一萬や、二萬の財產は使ひ出したら何の益にもたゝんけえな。家でもおたあさんが來た時には公債や地所で、二三萬圓はあつたんやけど、お父さんが道樂して使ひ出したら、笹につけて振る如しぢや。
賢一郎　（不快なる記憶を呼び起したる如く默して居る）……………。
母　私は自分で懲々しとるけに、たねは財產よりも人間のえゝ方へやらうと思ふとる。財產がなうても亭主の心掛がよかつたら、一生苦勞せいでも濟むけにな。
賢一郎　財產があつて、人間がよけりや、なほいゝでせう。
母　そんな事が望めるもんけ。おたねがなんぼ器量よしで

も、家には金がないんやけにな。此頃の事やけに、少し支度をしても、三百圓や五百圓は直ぐかゝるけにのう。

賢一郎　おたねも、お父樣の爲に子供の時隨分苦勞をしたんやけに、嫁入の支度丈でも出來る丈の事はしてやらないかん。私達の貯金が千圓になつたら半分はあれにやつてもえゝ。

母　そんなにせいでも、三百圓かけてやつたらえゝ。其後でお前にも嫁を貰うたら私も一安心するんや。私は亭主運が惡かつたけど、子供運はえゝ云うて皆云うて吳れる。お父さんに行かれた時は、何うしようと思つたがのう：：：。

賢一郎　（話題を轉ずる爲に）　新は大分遲いな。

母　宿直やけに、遲うなるんや。新は今月からまた月給が昇る云ふとつた。

賢一郎　さうですか。あいつは中學校でよく出來たけに、小學校の先生やこしするのは不滿やらうけど、自分で勉強さへしたら、なんぼでも出世は出來るんやけに。

母　お前の嫁も探して貰ふとんやけど、えゝのがなうてのう。園田の娘ならえゝけど、少し向うの方が格式が上やけに、吳れんかも知れんでな。

賢一郎　まだ二三年はえゝでせう。

母　でもおたねを外へやるとすると、ぜひにも貰はないかん。夫で片が附くんやけに。お父さんが出奔した時には、三人の子供を抱へて何うしようと思つたもんやが……。

賢一郎　もう昔の事を云うても仕方がないやけえに。

（表の格子開き新二郎歸つて來る。小學教師にして眉目秀れたる青年なり）

新二郎　只今。

母　やあ、おかへり。

賢一郎　大變遲かつたぢやないか。

新二郎　今日は調べものが澤山あつて、閉口してしまうた。あゝ肩が凝つた。

母　先刻から御飯にしようと思つて、待つとつたんや。

賢一郎　御飯がすんだら、風呂へ行つて來るとえゝ。

新二郎　（和服に着更へながら）　おたあさん、たねは。

母　仕立物を持つて行つとんや。

新二郎　（和服になつて寛ぎながら）　兄さん！　今日僕は不思議な噂を聞いたんですがね。杉田校長が古新町で、家のお父さんによく似た人にあつたと云ふんですがね。

母と兄　うーむ。

新二郎　杉田さんが、古新町の旅籠屋が並んどる所を通つとると、前に行く六十ばかりの老人がある。よく見ると何うも見たやうな事があると思つて、近づいて横顏を見ると、家のお父さんに似て居たと云ふんです。何うも宗

太郎さんらしい、宗太郎さんなら右の頬にほくろがある筈ぢやけに、ほくろがあつたら聲をかけようと思つて、近よらうとすると水神さんの横町へ、コソ〳〵とはひつてしまうたと云ふんです。

母　杉田さんならお父樣の幼な友達て、一緒に槍の稽古をして居た人やけに、見違ふ事もないやらう。けどもうお前、二十年にもなるんやけにのう。

新二郎　杉田さんもさう云ふとつたです。何しろ二十年も逢はんのやけに、しつかりした事は云へんけど、子供の時から交際うた宗太郎さんやけに、まるきり見違へたとも云へん云うてな。

賢一郎　（不安な眸を輝かして）ぢや。杉田さんは言葉はかけなかつたのだね。

新二郎　ほくろがあつたら、名乘る心算で居たのやつて。

母　まあ、そりや杉田さんの見違ひやらうな。同じ町へ歸つたら、自分の生れた家に歸らんことはないけにのう。

賢一郎　然し、お父樣は家の敷居は一寸越せないやらう。

母　私はもう死んだと思ふとんや。家出してから二十年になるんやけえ。

新二郎　何時か、岡山で逢つた人があると云ふんでせう。

母　あれも、もう十年も前の事ぢや。久保の忠太さんが岡山へ行つた時、家のお父さんが、獅子や虎の動物を連れて興行しとつたとかで、忠太さんを料理屋へ呼んで御馳走をして、家の樣子を聞いたんやて。其時は金時計を帶にさげたり、絹物づくめでエライ勢であつた云ふとつた。それからは何の音沙汰もないんや。あれは戰爭のあつた明くる年やけに、もう十二三年になるのう。

新二郎　お父さんは、なか〳〵變つとつたんやな。

母　若い時から家の學問はせんで、山師のやうな事が好きであつたんや。あんなに借金が出來たのも、道樂ばつかりではないんや。支那へ千金丹を賣り出すとか云うて損をしたんや。

賢一郎　（やゝ不快な表情をして）おたあさん、お飯を食べませう。

母　あゝさうや〳〵。つい忘れとつた。（臺所の方へ立つて行く。姿は見えずに）杉田さんが見たと云ふのも何ぞの間違やろ。生きとつたら年が年やけに、ハガキの一本でもよこすやろ。

賢一郎　（やゝ眞面目に）杉田さんが、その男に逢うたのは何日の事や。

新二郎　昨日の晩の九時頃ぢやと云ふ事です。

賢一郎　どんな身なりをして居つたんや。

新二郎　あんまり、えゝなりぢやないさうです。羽織も着て居らなんだと云ふ事です。

賢一郎　さうか。
新二郎　兄さんが覺えとるお父さんはどんな樣子でした。
賢一郎　私は覺えとらん。
新二郎　そんな事はないでせう。兄さんは八つであつたんやけに。僕だつてボンヤリ覺えとるに。
賢一郎　私は覺えとらん。昔は覺えとつたけど、一生懸命に忘れようと、かゝつたけに。
新二郎　杉田さんは、よくお父樣の話をしますぜ。お父さんは若い時は、えゝ男であつたさうですな。
母　（臺所から食事を運びながら）　さうや、お父樣は評判なえゝ男であつたんや。お父さんが、大殿樣のお小姓をして居た時に、奧女中がお箸箱に戀歌を添へて、送つて來たと云ふ話があるんや。
新二郎　何のために、箸箱を呉れたんやらう。はゝゝゝ。
母　丑の年やけに、今年は五十八ぢや　家にぢつとして居れば、もう樂隱居をしてゐる時分ぢやがな。
（三人食事にかゝる）
母　たねも、もう歸つてくるやらう。もうめつきり寒うなつたな。
新二郎　おたあさん、今日淨願寺の椋の木で百舌が啼いとりましたよ。もう秋ぢや。……兄さん、僕はやつぱり、英語の檢定をとる事にしました。數學にはえゝ先生がないけに。
賢一郎　えゝやらう。やはり、エレクソンさんの所へ通ふのか。
新二郎　さうしようと、思つとるんです。宣教師ぢやと月謝がいらんし。
賢一郎　うむ、何しろ、一生懸命にやるんだな。父親の力は借らんでも、一人前の人間にはなれると云ふ事を知らせる爲に勉強するんぢやな。私も高等文官をやらうと思ふとつたけど、規則が改正になつて、中學校を出とらな、受けられん云ふ事になつたから、諦めとんや。お前は中學校を卒業しとるんやけに、一生懸命やつて呉れないかん。
（この時、格子が開いて、おたねが歸つて來る。色白く十人並以上の娘なり）
おたね　只今。
母　遲かつたのう。
おたね　また次のものを頼まれたり、何かしとつたもんやけに。
母　さあ、御飯おたべ。
おたね　（坐りながら、やゝ不安なる表情にて）　兄さん、今歸つて來るとな、家の向う側に年寄の人が居て、家の玄關の方をぢーと見てゐるんや。（三人とも不安な顏に

なる）
賢一郎　うーむ。
新二郎　どんな人だ。
おたね　暗くて、分らなんだけど、脊の高い人や。
新二郎　（立つて次の間へ行き、窓から覗く）……
賢一郎　誰か、居るかい。
新二郎　いゝや、誰も居らん。
（兄弟三人沈默して居る）
母　あの人が家を出たのは、盆の三日後であつたんや。
賢一郎　おたあさん、昔の事はもう云はんやうにして下さい。
母　私も若い時は恨んで居たけども、年が寄るとなんとなしに心が弱うなつて來てな。
（四人默つて、食事をして居る。ふいに表の戸がガラツと開く。賢一郎の顏と、母の顏とが最も多く激動を受ける。然してその激動の内容は著しく違つて居る）
男の聲　御免！
おたね　はい！（然し彼女も起ち上らうとはしない）
男の聲　おたかは居らんかの！
母　へえ！（吸ひ附けられるやうに玄關へ行く。以下聲ばかり聞える）
男の聲　おたかか！

母の聲　まあ！　お前さんか、えらう！　變つたのう。
（二人とも涙ぐみたる聲を出して居る）
男の聲　まあ！　丈夫で何よりぢや。子供達は大きくなつたやらうな。
母の聲　大けうなつたとも、もう皆立派な大人ぢや。上つてお見まあせ。
男の聲　上つてもえゝかい。
母の聲　えゝとも。
（二十年振りに歸れる父宗太郎、憔悴したる有樣にて老いたる妻に導かれて室に入り來る。新二郎とおたねとは目をしばたゝきながら、父の姿をしみ〴〵見詰めて居たが）
新二郎　お父樣ですか、僕が新二郎です。
父　立派な男になつたな。お前に別れた時は、まだ碌に立てりもしなかつたが……
おたね　お父さん、私がたねです。
父　女の子と云ふことは聞いて居たが、えゝ器量ぢやなあ。
母　まあ、お前さん、何から話してえゝか、子供もこんなに大けうなつてな、何より結構やと思ふとんや。
父　親はなくとも子は育つと云ふが、よう云うてあるな、はゝゝゝゝ。
（併し誰もその笑に合しようとするものはない。賢一

郎は卓に倚つたまゝ下を向いて默して居る）

母　お前さん。賢も新もよう出來た子でな。賢はな、二十の年に普通文官云ふものが受かるし、新は中學校へ行つとつた時は三番と降つた事がないんや。今では二人で六十圓も取つて吳れるし、おたねはおたねで、こんな器量よしやけに、えゝ處から口がかゝるしな。

父　そら何より結構な事や。俺も、四、五年前迄は、人の二、三十人も連れて、ずーと巡業して廻つとつたんやけどもな。奥で見世物小屋が丸燒になつた爲にエライ損害を受けてな。夫からは何をしても思はしくないわ。其內に老先が短くなつて來る。女房子の居る處が戀しうなつてウカ／＼と歸つて來たんや。老先の長い事もない者やけに皆よう賴むぜ。（賢一郎を注視して）さあ賢一郎！その盃を一つさして吳れんか、お父さんも近頃はえゝ酒も飮めんでのう。うん、お前丈は顏に見覺えがあるは。

（賢一郎應ぜず）

母　さあ、賢や。お父さんが、あゝ仰しやるんやけに、さあ、久し振りに親子が逢ふんぢやけに祝うてな。

（賢一郎應ぜず）

父　ぢや、新二郎、お前一つ、盃を吳れえ。

新二郎　はあ。（盃を取り上げて父に差さんとす）

賢一郎　（決然として）止めとけ。さすわけはない。

母　何を云ふんや、賢は。

（父親、烈しい目にて賢一郎を睨んで居る。新二郎もおたねも下を向いて默つて居る）

賢一郎　（昂然と）俺達に父親がある譯はない。そんなものがあるもんか。

父　（烈しき忿怒を抑へながら）何やと！

賢一郎　（やゝ冷かに）俺達に父親があれば、八歲の年に築港からおたあさんに手を引かれて身投をせいでも濟んどる。あの時おたあさんが誤つて水の淺い處へ飛び込んだればこそ、助かつて居るんや。俺達に父親があれば十の年から給仕をせいでも濟んどる。俺達は父親がない爲に、子供の時に何の樂しみもなしに暮して來たんや。新二郎，お前は小學校の時に墨や紙を買へいで、泣いて居たのを忘れたのか。敎科書さへ滿足に買へいで寫本を持つて行つて、友達にからかはれて泣いたのを忘れたのか。俺達に父親があるもんか。あればあんな苦勞はしとりやせん。

（おたか、おたね泣いて居る。新二郎淚ぐんで居る。老いたる父も怒から悲しみに移りかけて居る）

新二郎　併し、兄さん、おたあさんが、第一あゝ折れ合つて居るんやけに、大抵の事は我慢して吳れたら何うです。

賢一郎　（なほ冷靜に）お母さんは女子やけに何う思ふと

るか知らんが、俺に父親があるとしたら、夫は俺の敵ぢや。俺達が小さい時に、ひもじい事や辛い事があつておたあさんに不平を云ふと、お母さんは口癖のやうに、「皆お父さんの故ぢや、恨むのならお父さんを恨め」と云うて居た。俺にお父さんがあるとしたら、夫は俺の子供の時から苦しめ抜いた敵ぢや。俺は十の時から縣廳の給仕をするし、お母さんはマツチを張るし、何時かもお母さんのマツチの仕事が一月ばかり無かつた時に、親子四人で晝飯を抜いたのを忘れたのか。俺が一生懸命に勉強したのは皆その仇を取りたいからぢや、俺達を捨てゝ行つた男を見返してやりたいからだ。父親に捨てられても、一人前の人間にはなれると云ふ事を知らしてやりたいからぢや。俺は父親から少しだつて愛された覺えはない。俺の父親は八歳になる迄家を外に飲み歩いて居たのだ。その揚句に不義理な借金をこさへて情婦を連れて出奔したのぢや。女房と子供三人の愛を合はしても、その女に叶はなかつたのぢや。いや、俺の父親が居なくなつた後には、お母さんが俺の爲に預けて置いて吳れた十六圓の貯金の通帳まで無くなつて居つたもんぢや。

新二郎　（涙を呑みながら）　併し兄さん、お父様はあの通り、あの通りお年を召して居られるんぢやけに……

賢一郎　新二郎！　お前はよくお父様などと空々しい事が云へるな。見も知らない他人がひよつくり這入つて來て、俺達の親ぢやと云うたからとて、直ぐ父に對する感情を持つことが出來るんか。

新二郎　併し兄さん、肉親の子として、親が何うあらうとも、養うて行く……。

賢一郎　義務があると云ふのか。自分でさん〴〵面白い事をして置いて、年が寄つて動けなくなつたと云うて歸つて來る。俺はお前が何と云つても父親はない。

父　（憤然として物を云ふ。併し夫は飾つた怒りで何の力も伴つて居ない）　賢一郎！　お前は生みの親に對して、よくそんな口が利けるのう。

賢一郎　生みの親と云ふのですか。あなたが生んだと云ふ賢一郎は二十年も前に築港で死んで居る。あなたは二十年前に父としての權利を自分で棄てゝ居る。今の私は自分で築き上げた私ぢや、私は誰にだつて世話になつて居らん。

（凡て無言、おたかとおたねのすゝりなきの聲が聞えるばかり）

父　えゝわ、出て行く。俺だつて二萬や三萬の金は取扱うて來た男ぢや。どなに落ちぶれたかと云うて、喰ふ位な事は出來るわ。えらう邪魔したな。（悄然として行かんとす）

新二郎　まあ、お待ちまあせ。兄さんが厭だと云ふのなら、僕が何うにかしてあげます。兄さんだつて親子ですから、今に機嫌の直る事があるでせう。お待ちまあせ。僕がどない事をしても養うて上げますから。

賢一郎　新二郎！　お前はその人に何ぞ世話になつた事があるのか。俺はまだその人から拳骨の一つや、二つは貰つた事があるが、お前は塵一つだつて貰つては居ないぞ。お前の小學校の月謝は誰が出したのだ。お前は誰の養育を受けたのぢや。お前の學校の月謝は、兄さんが、しがない給仕の月給から拂つてやつたのを忘れたのか。お前や、たねのほんたうの父親は俺だ。父親の役目をしたのは俺ぢや。その人を世話したければするがえゝ。その代り、兄さんはお前と口は利かないぞ。

新二郎　併し……。

賢一郎　不服があれば、その人と一緒に出て行くがえゝ。

（女二人とも泣きつゞけて居る。新二郎默す）

賢一郎　俺は父親がない爲に苦しんだだけに、弟や妹にその苦しみをさせまいと思うて、夜も寢ないで艱難したけに、弟も妹も中等學校は卒業させてある。

父　（弱く）もう何も云ふな。わしが歸つて邪魔なんやらう。わしやつて無理に子供に厄介にならんでもえゝ。自分で養うて行く位の才覺はある。さあもう行かう。おたか！　丈夫で暮せよ。お前はわしに捨てられて、却つて仕合せやな。

新二郎　（去らんとする父を追ひて）　あなたお金はあるのですか。晩の御飯もまだ喰べとらんのぢやありませんか。

父　（哀願するが如く眸を光らせながら）　えゝわ／＼。

（玄關に降りんとしてつまづいて、緣臺の上に腰をつく）

おたか　あつ、あぶない。

新二郎　（父を抱き起しながら）　之から行く處があるのですか。

父　（全く悄沈して腰をかけたまゝ）　のたれ死するには、家は入らんからのう。……（獨言の如く）　俺やつて此の家に足踏が出來る義理ではないんやけど、年が寄つて、弱つて來ると故鄕の方へ自然と足が向いてな。此街へ歸つてから、今日で三日ぢやがな。夜になると每晩家の前で立つて居たんぢやが、敷居が高うてはひれなかつたのぢや……併しやつぱり、這入らん方がよかつた。一文なしで歸つて來ては誰にやつて馬鹿にされる……。俺も五十の聲がかゝると國が戀しくなつて、せめて千と二千と纏つた金を持つてお前達に詫をしようと思つたが、年が寄ると夫だけの働きも出來んでな。……（漸く立ち

上つて） まあえゝ。自分の身體位始末のつかんことはないわ。（蹌踉として立ち上り、顧みて老いたる妻を一目見たる後、戸をあけて去る。後四人暫く無言）

母 （哀訴するが如く） 賢一郎！

おたね 兄さん！

（しばらくの間緊張した時が過ぎる）

賢一郎 新！ 行つてお父様を呼び返して來い。

（新二郎、飛ぶが如く戸外へ出る。三人緊張の裡に待つて居る。新二郎やゝ蒼白き顏をして歸つて來る）

新二郎 南の道を探したが見えん。北の方を探すから、兄さんも來て下さい。

賢一郎 （驚駭して） なに見えん！ 見えん事があるものか。

兄弟二人狂氣の如く出で去る）

―― 幕 ――

海の勇者

人物

老いたる母　およし
その夫
彼等の子　末二郎
隣人
その他の人々

所

土佐の國佐多の岬に近き海岸

情景

漁夫の家。異樣な臭氣を持つて居さうな暗い汚い部屋。正面の右に窓あり、左に戸口がある。窓よりは夕暮の薄明の裡にすさまじき跳躍をなしつゝある太平洋の姿が見える　初夏の一日。戸外はやゝ烈しき風の音。窓の直ぐ傍に漁具を繕つて居る老人が坐つて居る。闇は烈しく襲ひつゝある。

老人　（窓より海と空とを眺めつゝ）　また荒れやがる。およし！　およし！　何ぐづ／＼しとるんか。早うランプつけんかい。

およし　（戸口から内へはひつて來ながら）　夜さになつたら、また一荒れ荒れるやらう。また海奴が人間を欲しがつて居るわい。

老人　早うランプ點けたら。何ぐづ／＼しとるんか。

およし　（惡意ある口吻にて）　よう考へて見い。こなに風が吹いとるにランプが點くけ。

老人　（云ひ込められる習慣になれて居る如く）　もう舟は皆戻つとるんやらうな。

およし　あゝ、戻つとる。先刻助の舟が一番おしまひに戻つて居た。今日の時化では後家は出來んわい。

老人　末は遲いな。

およし　もう直き戻つて來る。荒れとるけに、舟を川上の方へ廻しとかないかんのやろ。…　（飯を佛壇に供へながら）　勝の死んだ晩は今日よりも荒れとつたのう。

老人　あの時とは比べもんになるけ。岸に寄りつかうとする舟が、大浪を喰つてバラバラに碎けるんやからな。岸から鼻の先まで來とつても寄りつけんのやからな。

およし　もうあの時の話はせんことにしよう。また勝の事を思ひ出すけに。

老人　海は俺達の飯の種や。なんぼ恐しうても寄りつかないかんわい。今度町へ行つたら澁を忘れるな。

およし　勝は鰹を釣らしたら、日に四兩や五兩は何でもなかつたな。あいつは小ひさい時から、他人の事云うたら先になつて働いとつたが、とう／＼他人のために命をはふつてしもた。

老人　まあ、えゝわ。此の濱の奴は疊の上で死ねんのや。身體丈でも歸つて來たらまあえゝ方や。町の奴が云ふとる、香西の奴棺桶入らずや、棺桶屋は香西にない云ふとる。

およし　（戸口から空を見ながら）まだ荒れるぜ、巽が眞黒やあ。

隣人　（戸口から物音もさせずに這入つて來る）村の舟は皆戻つとるんやらうな。

およし　今日は荒模樣になると皆逃げて歸つて來たのや。先度の事で懲りとるけにな。

隣人　さうやらう。えゝ若い者が五人も死んだんやからな。勝太郎さんが死んでえらう困るやらうな。（烈しき風の音）だん／＼酷うなつて來るなあ。

老人　今はさう云ふとんや。彼奴は勳章の金がはひるしな。腕はあるしな。年が寄つて彼奴にほつとかれては生きるせゐがないわ。

隣人　けれど。この村で死んだ奴は多いけど、知事さんから使が來たり、郡長さんが葬式の件をして吳れたのは勝太郎さん丈やないか。町の新聞やつてえらう書きよつたぜ。あの墓石を見いや。この近所には二つとない大きいもんやないか。

およし　えゝ死に方やろ。死に賃が七圓五十錢やと云ふからなあ。

隣人　おかあのやうに云うたもんでないわ。お上から下さる金やもの七圓五十錢やて貰いもんやないか。村の達藏が身投を助けた時やつて、たつた一圓五十錢やもの。それから見たら七圓五十錢云つたら大金ぢや。

およし　阿呆くさい。七圓五十錢位の端金、鰹を釣つたら二日か三日で儲けるわ。

隣人　お上から下さるもんやけに、第一名譽やないか。

およし　勝が死んでから、年に三百兩も違ふけになあ。難船の人が三人で皆助かつたのに、助けに行つた方が七人とも死んでしもて、こんな阿呆くさいことがあるもんけ。助けに行かん方が人間の數から云うてもよつぽど得や。

老人　愚痴を云ふな。お前は記念碑の式のときにも假病を起しやがつて、とう／＼出なかつたが、まだぐづ／＼云ふんか。

およし　（激して）當り前やないか。お前のやうなお人好しとはちいと違ふけにな。郡長さんに賞められて嬉しが

つて泣いたりしやがつて、それほど息子が惜しうないんか。息子をとられて七圓五十錢貰うて、オダテに乘つて嬉しがつとる馬鹿があるけい。難船があつたら救はならん云ふ青年會の規定が無茶や。年の寄つた二親をはふつて置いて、他人の命を助けて何になるんや。
老人　このあまあ、頰けたばち張り飛ばすぞ。
およし　何ぬかしやがるんや、おいぼれ。
隣人　（爭はんとする二人を止めて）まあえゝわ。あとになつた事は仕樣がないわ。
（室全く暗し。およし戸棚よりカンテラを下して火を點ける）
およし　風がひどいけにランプが點きやせん。之で辛抱するんや。
（この時戸口があいて吹き込む風と共に末次郞が歸つて來る。十七歳の少年、やゝ上品な顏立と黑い眸とを持つて居る）
末次郞　（上りがまちに寢ころびながら）おゝ腹が空いた。お母、飯を直ぐ喰べさして。
隣人　沖はどうだつた。
末次郞　雲が出たから、滅茶々々に漕いだんや。今日はええ工合に遠くへ行つとらんでな。岬が見えとつた。
老人　（戸外に吹き募る風の音に耳を傾けて）だん〳〵ひどうなつてくるな。
隣人　末さあ、兄が居らんけに骨が折れるやらうな。
末次郞　そやけんど、あゝ云ふ事で死んだんやけに仕方がないと思うて働いとんや。誰やつて難船したときに助かりたいからな。
隣人　勝さんが死んだんで青年會長の選擧がある云ふけんど、もう勝さんのやうなえゝ人はないわ。
およし　（飯の支度をしながら窓外を見て）また風がひどうなつてくるな。雨も降り出したぜ。末や、おかずはひじきのたいたんやぜ。
末次郞　何でもえゝけに、早う喰べさして。
隣人　（歸らんとして戸口へ出たが直ぐはひつて）誰かしらん走つて來るぜ。
外の聲　（風に交じつてかすかに）舟が歸つたぞう。舟が歸つたぞう。
末次郞　（老人。隣人。殆ど同時に）えゝ、舟が歸つて來た！　誰の舟やらう？
末次郞　（戸口から顏を出して）おい、誰の舟や、誰の舟やあ。
外の聲　（やゝ不明に）誰の舟やら分らんけど、灯が見えるんやあ。
隣人　誰のやらう。

末次郎　皆歸つたと思うたが、夫りや一艘遲れたんやな。

およし　この風ぢや、また岸に着けんやろ。ひどうなつて來とるけに。

隣人　難しい、とても着けやせん。どら、行つて見て來よう。（急いで退場）

末次郎　不思議やなあ。もう誰も殘つとらんと思ふとつたに。わしも一寸行つて見て來る。

およし（末次郎を引きとめながら）飯も喰べずに行かんでもえゝ。

末次郎　一寸行つて見て來るんや。

およし　行かんでもえゝ。さあ飯をお喰べ。

一人の漁夫（馳けこんで來ながら）濱で火をたいてやるんやけに、薪をかして呉れ。

末次郎　誰の舟や。

漁夫　誰の舟やら分らんけど、あの通りにわめいとる。今、川の方へ調べに行つたんや。

およし　やつぱり、助け舟を出すのけ。

漁夫　出さないかん。先度の事があるけんど、見殺しには出來んからな。

（この時初めて海上より悲鳴風に交じりてきこゆ）

漁夫　あの聲をきくと、三年命が縮まる。あれをきいたら、助けずには居れんわい。

およし　阿呆な。わしは生れてから、耳が痛うなるほど聞いとるけに、何ともないわ、お父の死んだ時にも、兄貴の死んだときにも、思ふ存分聞いとるけに。（薪を一束持つて來る）

漁夫　えらう、ケチ／＼すんやな。

およし　ケチ／＼せいでか。えゝ息子一人とられたんやからな。

漁夫　勝さんが生きとつた時は、こんな時は一番に飛び出したな。人のため云うたら、命でも惜しんどらん。

およし　その代りに、自分の親をほつたらかして苦勞させやがるんや。

漁夫（返事もせずに出てしまふ）

およし　話が分らん奴に、薪一束でも惜しいわ。

末次郎　お母、一寸行つて來るぜ。

およし　行くなと云うたら行くな　また勝のやうに助け舟に乘つて、岩に打ちあてゝ他人樣のために命をはふりたいか。

末次郎（苦笑して）何を云ふんや。まだ舟を出すとも出さんともきまつとらんのに。

およし　勝はな、わしに長年養うて貰ふとりながら、一文も貰うたことのない他人樣のために、命をはふりやがつたんや。お前もそんな眞似をするやないぞ。あんな石碑

が建つたつて、あれが何になるんや。年の寄つた兩親に何のたしになるんや。
末次郎　愚痴はえゝ加減にしとけ。
およし　云はいでか。何ぼでも云ふんや。生みの親を捨て行つたものを、皆よつてたかつて賞めやがつて、私に氣の毒や云うて吳れる奴は一人やつてありやせん。働き盛りの息子をとられて、何が名譽や。
（末次郎は母にかまはず窓から海上を見て居る。悲鳴は風の絕間にきこえて來る。やがて海濱に炬火が點ぜられたのが見える。多くの人々がその光に寫し出される。風に交りて喧噪の聲も聞える）
隣人　（戶口から馳けこんで）おい、およしさん、何か燃すものはないけ。
およし　もう先刻出したやないか。
隣人　斯う云ふ時ぢやけに、もつと出して吳れ。後で青年會から返すさうぢやけに。
およし　（いや〳〵薪を渡しながら）一體誰の舟や。
隣人　まだ分らん。（退場）
（舟はだん〳〵この家に近くなるらしい。舟の悲鳴も人々の喧噪の聲も間近にきこえる。風は少しも勢を減じない）
一人の男　（戶口に現はれて）綱がありや借して吳れ。
およし　誰か泳いで行くのかい。
男　先度の事があるけに、泳いで行つて綱を渡すことにしたんや。
およし　誰が行くのや。
男　まだ分らん。行くものがなけりや、靑年會員で籤引や。
およし　（不安に）末にも引けい云ふまいな。
男　心配せんでもえゝわ。末さんはまだ子供や。それに兄さんが死んどるんやもの。誰が末さんをやらすものか。
およし　（安心して）さうやらうな。（綱を出して來る）
末次郎　誰の舟やら分らんのか。
男　まだ分らん。
他の男　（戶口に現はれて）俺が行くことになつたんや。綱はあるけ。
男　お前が行つて吳れるんけ。
他の男　綱さへ摑んどりや大丈夫や。めつたに下手な事はやりやせん。
第三の男　（戶口に來て）おい、他村の舟らしいぜ。
他の男　何だ他村の奴か。
男　それでもやつぱり行つてやらな行かんやろ。村同志の交際ぢやから。
他の男　ウン、行つてやる。（三人退場）

（末次郎窓からぢつと沖を見て居る。母は監視するやうに傍に立つて居る）

隣人　（老人と一緒に歸つて來て）　何や、阿呆らしい〇〇の舟や。

およし　何や、〇〇の舟か。

隣人　淺見村の〇〇の舟や。權二も飛び込むのを止めてしもた。〇〇の爲に命でもはふつたら、笑はれ物やからなあ。

およし　さうや、それに淺見の〇〇が海へ出だしてから、この村の魚が價が下つたんや。此の村の魚まで〇〇がとつたんやと云はれてなあ。

隣人　〇〇なら誰も行き手はないわ。

およし　（初めて安心して末次郎の傍を離れる）　さうやらう。〇〇のために命をはふつたら、つまらんからのう。

村の男　（はひつて來て）　〇〇の舟やけど、火丈はたいてやらう。

老人　淺見へ知らしてやらんのか。

村の男　こんな雨風の晩に二里の道を行く奴があるけ。それに淺見の〇〇とは去年の事があるけに、ほつといてもかまやせんわい。

外の聲　（もう傍觀的な興味と安心とが含まれて居る）　だん／＼西へ流されるな。岩へぶつかるとおしまひやな。

末次郎　（凝視して居たが何かを耳にして）　子供が乘つとるんやな。

村の男　大人が三人と、七八つの子供が一人居る。

末次郎　（やゝふるへる聲で）　誰も行つてやらんのか。

村の男　それほど命の不用なものは居らんわい。（末次郎ふいと窓から飛降りる）

およし　（氣がついて戶口へ馳けよりながら）　末や。どこへ行くんや。飯を喰べんかい。末や、末やあ！

（返事なし。皆、やゝ不安に囚はれる。舟愈々近く、悲鳴手にとる如くきこえて來る）

外の聲　（急に）　やあ、誰かしらん綱を持つて飛び込んだぞ。誰や／＼。

およし　（烈しき不安に打たれながら外へ馳け出す）　末や、末やあ。（他の三人後よりつゞく）

（戶外には新しい喧噪と動搖とが風の裡に起る。その裡に交じつて次の叫びがきこえる）

種々の聲　綱を離すな。――一體誰や――岩の方へ流されるぞ――飛び込んだのは誰や――ほら、あすこへ浮んで出た――また沈んだぞ――。

およしの聲　（この喧噪を聞いて）　末や、末やあ！

種々の聲　おい、見えんぞ――見えんぞ――綱を離したんやないか。――おい――引つ張つて見い――手答がない

か——見い、綱ばつかりや。

およしの聲（狂亂に近く）末や、末やあ。

（烈しき風にこの叫びなほ續いて行く）

——幕——

屋上の狂人

人　物

狂　人　勝島義太郎　二十四歳
その弟　末次郎　十七歳の中學生
その父　義　助
その母　およし
隣の人　藤　作
下　男　吉　治　二十歳
巫女と稱する女　五十歳位

時代及所

明治三十年代、瀬戸内海の讃岐に屬する島

舞　臺

この小さき島にては屈指の財産家なる勝島の家の裏庭。家の内部は結ひ廻らした竹垣に遮ぎられて見えない。高い屋根ばかりが初夏の濃綠な南國の空を劃つて居る。左手に海が光つて見える。この家の長男なる義太郎は正面に見ゆる屋根の頂上に蹲踞して海上を凝視して居る。家の内部から父の聲が聞える。

義助　（姿は見えないで）義め、また屋根へ上つとるんやな。こなにカン〱照つとるのに、暑氣するがなあ。（緣側へ出て）吉治！　吉治は居らんのか。
吉治　（右手から姿を現す）へえ、何ぞ御用ですか。
義助　義太郎を降して吳れんか。こなに暑い日に帽子も被らんで、暑氣がするがなあ。何處から屋根へ上るんやろ。此間云うた納屋の屋根の所は針金を張つたんやろな。
吉治　そらもう、ちやんとえゝやうにしてありますぜ。
義助　（竹垣の折戸から舞臺へ出て來ながら屋根を見上げて）あなに燒石のやうな瓦の上に坐つて、何んともないやろか。義太郎！　早う降りて來い。そなゝ暑い所に居つたら暑氣して死んでしまふぞ。
吉治　若旦那！　降りとまあせよ。そなゝ所に居つたら身體の毒やがなあ。
義助　義やあ。早う降りて來んかい、何しとんやそなゝ所で。早う降りんかい、義やあ！
義太郎　（ケロリとしたまゝ）何や。
義助　何やでないわい。早う降りて來いよ、お日さんにカンカン照り附けられて、暑氣するがなあ。さあ、直ぐ降りて來い。降りて來んと下から竿でつゝくぞう。
義太郎　（駄々をこねるやうに）厭やあ。面白い事がありよるんやもの。金毘羅さんの天狗さんの正念坊さんが雲

の中で踊つとる。緋の衣を着て天人樣と一緒に踊りよる。わしに來い來い云ふんや。

義助　阿呆な事云ふない。お前にとりついとる狐が誑しよるんやがなあ。降りんかい。

義太郎　（狂人らしい欣びに溢れて）面白うやりよるわい。わしも行きたいなあ。待つといで。わしも行くけになあ。

義助　そなゝ事を云ふとるとまた何時かのやうに落ち崩るぞ。氣違の上にまた片輪になりやがつて、親に迷惑ばつかしかけやがる。降りんかい阿呆め。

吉治　旦那さん、そなに怒つたつて、相手が若旦那やもの利くもんですか。それよりか、若旦那の好きなあぶらげを買うて來ませうか、あれを見せたら直ぐ降りるけに。

義助　それより竿で突ついてやれ、かまやせんわい。

吉治　そなゝむごい事が出來るもんな。若旦那は何も知らんのや。皆憑いて居る者がさせて居るんやけに。

義助　屋根のぐるりに忍び返しを附けたらどうやらうな。どうしても上れんやうに。

吉治　どなゝ事しても若旦那には利き目がありやしませんの。本傳寺の大屋根へ足場なしに上るんやもの。こなゝ低い屋根やこしはお茶の子や、憑いとる者が上らせるんやけに、何うしたつて利きやせん。

義助　さうやらうかな。彼奴には往生するわい。氣違でも家の中にぢつとしとるんならえゝけれど高い所へばつかし上りやがつて、まるで自分の氣違を廣告しとるやうなもんや。勝島の天狗氣違云うたら、高松へ迄、噂が聞えとる云うて末が云ひよつた。

吉治　島の人は狐がとり憑いとる云ふけれど、俺は合點が行かんがなあ。狐が木登りすると云ふ事は聞いた事がないけになあ。

義助　俺もさう思ふとんや。俺の心當りは別にあるんや。義の生れる時にな、俺はその時珍らしい舶來の元込銃でな、此の島の猿を片つ端しから射ち殺したんや。その猿が憑いとるんや。

吉治　さうやらうな。それでなけりや、あなに木登りのおたつしやなわけはないからな。足場があらうがあるまいが、どなゝ所へでも上るんやけにな。梯子乘りの上手な作でも若旦那には適はん云ひよりますわい。

義助　（苦笑して）阿呆なことを云ふない。屋根へばかり上つとる息子を持つた親になつて見い。およしでも俺でも始終彼奴の事を苦にしとんや。（再び聲を上げて）義太郎！　早う降りて來んかい。義太郎！　降りんかい。……屋根へ上つとると人の聲は聞えんのや、まるで夢中になつとるんや。彼奴が登つて困るんで家の木は皆伐つてしまつたけんど、屋根ばかりはどうすることも出

來んわい。

吉治　私の小さい頃には、御門の前に高い公孫樹が御座んしたなあ。

義助　うむ、あの樹かい、あれは島中の目印になつた樹やがな。何時であつたか、あの樹の頂邊へ義太郎が登つてな。拾四五間もある上でポカンと枝の上に腰かけて居るやないか。俺もおよしも彼奴の命はないもんやと思つてあきらめて居ると、またスルスル降りて來てな。皆あきれて物が云へなかつたんや。

吉治　へゝえ。まるで人間業で御座んせんな。

義助　だから俺あ猿が憑いとると思ふんや。（聲を上げて）義やあ。降りんかい。（ふと氣を變へて）吉治！　お前上がつて吳れんかい。

吉治　けど人が上ると、若旦那はきつうお腹を立てるけんな。

義助　えゝわ。怒つてもえゝわい。上つて引つ張り降して來い。

吉治　へい〳〵。

（吉治梯子を持つて來るために退場。その時隣の人藤作がはひつて來る）

藤作　旦那さん、今日は。

義助　やあ。えゝ天氣やな　昨日降した網はどうやつたな。多少かゝつたかな。

藤作　根つからかゝりやしまへなんだ。もうちつと季が過ぎとるけにな。

義助　さうやらうな。もうちつと遲いわい。もう鰆がとれ出すな。

藤作　昨日淸吉の網に二三本もかゝりましたわい。

義助　さうけい。

藤作　（義太郎を見て）また若旦耶は屋根で御座んすか。

義助　さうや、相不變上つとるわい。上げとうはないんやけど、座敷牢の中へ入れとくと水を離れた鮒のやうにして居るんでな。つい、むごうなつて出してやると直ぐ屋根や。

藤作　けど若旦那のやうなのは傍の迷惑にならんけによござすんわな。

義助　あんまり迷惑にならんこともないでな。親兄弟の恥になるでな。こなに高い所へ上つて、をらんで居るとなあ。

藤作　けど弟さんの末さんが、町の學校でよう出來るんやけに、旦那もあきらめがつくと云ふもんやな。

義助　末次郎が人並に出來るんで、わしも辛抱しとんや。二人とも氣違であつたら生きとる甲斐がないがな。

藤作　實はな。旦那さん。よう利く巫女さんが、昨日から

島へ來とるんでな。若旦那も一遍御祈禱して貰うたら、何うやらうと思うて來ましたんやがな。
義助　さうけ。けど御祈禱も今迄何遍受けたか分らんけどもな、ちよつとも利かんでな。
藤作　今度御座らつしやつたのは、金毘羅さんの巫女さんで、あらたかなもんやつてな。神さまが乘りうつるんやて云ふから、山伏の祈禱とは違ふでな。試して見たらどんなもんですやろ。
義助　さうやなあ。御禮はどの位入るもんやろ。
藤作　謹らな要らんと云うて居りますでなあ。謹つたら應分に出せ云ふとります。
義助　末次郎は御祈禱やこし利くもんか云ふとるけど、損にならん事やけに賴んで見てもえゝがなあ。
（この時吉治梯子を持つて這入つて來る。竹垣の内へはひる）
藤作　そんなら私は金吉の處に居る巫女さんを呼んで來ますけにな。若旦那を降しといてお吳れやす。
義助　お苦勞樣やなあ。そんならえゝやうに賴んまつせ。
（藤作を見送つた後）　さあ義……おとなしう降りるんだぜ。
吉治　（屋根へ上つてしまつて）　さあ、若旦那……私と一緒に降りませう。こなゝ所に居ると、晩には大熱が出るからな。
義太郎　（外道が近よるのを怖れる佛徒のやうに）　嫌やあ。天狗樣が皆わしにおいで〳〵をしとる。お前やこしの來る所ぢやないぞ。何と思ふとるんや。
吉治　阿呆な事云はんと、さあ降りまあせ。
義太郎　わしに一寸でも觸ると、天狗さまに引き裂かれるぞ。
吉治　（義太郎に急に迫つて肩口を捕へながら下の方へ引下す。義太郎は捕へられてからは殆ど何の抵抗もしない）
さあ、荒ばれると怪我をなさりまつせ。
義助　氣附けて降すんやぜ。
吉治　（義太郎を先に立てながら降りて來る。義太郎の右の足は負傷のため跛になつてゐる）　巫女さん云うても、一寸とも利かん奴も御座んすからなあ。
義助　義はよう金毘羅さんの神さんと話しする云ふけになあ。金毘羅さんの巫女さん云うたら、利くかも知れんと思うてな。（聲を張り上げて）およしや、一寸出て來いよ。
およし　（內部にて）　何ぞ用け。
義助　巫女さんを賴んだんやがなあ。どうやらう。
およし　（折戶から出て來る）　そらえゝかも知れん。どな な事でひよいと癒るかも知れんけにな。
義太郎　（不滿な顏色にて）　お父う、どうしたから下すん

や。今丁度俺を迎へに五色の雲が舞下る所であつたんやのに。

義助　阿呆！　何時かも五色の雲が來た云ひよつて、屋根から飛んだんやらう。それでその通り片輪になつとるんや。今日は金毘羅さんの巫女さんが來て、お前に憑いとるものを追ひ出して呉れるんやけに、屋根へ上らんと待つて居るんやぞ。

（その時藤作、巫女を案内して來る。巫女は五十ばかりなる陰險な顏色した妖女の如き女）

藤作　旦那さん。之が先刻云うた巫女さんや。

義助　やあ今日は。よう御出下されました。どうも困つた奴で御座んしてな、あなた。全く親兄弟の恥さらしでな。

巫女　（無雜作に）　何にあなた樣。心配せんかつて、私が神さんの御威德で直ぐ癒して上げますわ。（義太郎の方を向きながら）　この御方で御座んすか。

義助　左樣で御座んす。もう二十四になりますのにな。高い所へ上る外は何一つ、ようしませんのや。

巫女　何時からこんな御病氣で御座んしたかな。

義助　もう生れついての事で御座んしてな。小さい時から高い所へ上りたがつて、四つ五つの頃には床の間へ上る。御佛壇へ上る。棚の上に上る。七つ八つになると木登りを覺える　十五六になると山の頂邊へ上がつて一日降りて來ませんのや。それで天狗樣やとか神樣やとかそんなもんと、話して居るやうな獨り言を絶えず云ふとりますのや。一體どうした譯で御座んせうな。

巫女　やつぱり狐が憑いとるに違ひ御座んせん。どれ私が御祈禱をして上げます。（義太郎の方へ步みよつて）　よくお聞きなさい！私は當國の金毘羅大權現樣のお使の者ぢやけに、私の云ふ事は皆神さんの仰しやる事ぢや。

義太郎　（不滿な顏をして）　金毘羅の神さん云うて、お前逢うたことがあるけ？

巫女　（白眼んで）　何を失禮な事を云ふのぢや。神樣のお姿が目に見えるもんか。

義太郎　（得意さうに）　俺は何遍も逢ふとるわい。金毘羅さんは白い衣物を着て金の冠を被つとるおぢいさんや。俺と一番仲のえゝ人や。

巫女　（上手に出られたのでやゝ狼狽しながら、義助の方を見て）　之は狐憑きもひどい狐憑きぢや。どれ私が神に伺つて見る。

（巫女呪文を唱へ奇怪の身振をする。義太郎はその間吉治に肩口を捕へられ乍らケロリとして相關せざるものの如し。巫女は狂亂の如く狂廻りたる後、昏倒する。再び立上つた彼女はキョロ／＼として周圍を見廻す）

巫女　（以前とは全く違つた聲音で）　我は當國象頭山に鎭

座する金毘羅大權現なるぞ。
皆　（義太郎を除いて皆腰を屈めて）へヽつ。
巫女　（莊嚴に）此の家の長男には鷹の城山の狐が憑いて居る。樹の枝に吊して置いて青松葉で燻べてやれ。わしの申す事違ふに於ては神罰立ち所に到るぞ。（巫女再び昏倒する）
皆　へヽつ。
巫女　（再び立上りながら空とぼけたやうに）何ぞ神さまが仰しやりましたか。
義助　どうもあらたかな事で御座んした。
巫女　神様の仰しやつた事は、早速なさらんと却つてお罰が當りますけに、念のため申して置きますぞ
義助　（やゝ當惑して）吉治！　それなら青松葉を切つて來んかな。
およし　なんぼ神さんの仰しやることぢや云うて、そなゝむごい事が出來るもんかいな。
巫女　燻べられて苦しむのは憑いとる狐や。本人は何の苦痛も御座んせんな。さあ早く用意なさい　（義太郎の方を向いて）神様のお聲を聞いたか。苦しまぬ前に立ち去るがえゝぞ。
義太郎　金毘羅さんの聲はあなゝ聲ではないわい。お前のやうな女子が、神さんが相手にするもんけ。

巫女　（自尊心を傷つけられて）今に苦しめてやるから待つて居れ。土狐の分際で神さまに惡口を申し居るにくい奴ぢや。
（吉治、青松葉を一抱へ持つて來る。およしはオロオロして居る）
巫女　神さんの仰せは、大切に思はぬと罰が當りますぞ。
（義助、吉治を相手に不承無承に松葉に火をつけ、厭がる義太郎を、その煙の近くへ拉し行く）
義太郎　お父う。何するんや。厭やあ。厭やあ。
巫女　それをそのお方の聲ぢやと思ふと燻べにくい。皆狐の云ふ聲ぢやと思はないかん。そのお方を苦しめて居る狐を、苦しめると思うてやらな、いきません。
およし　なんぼなんでもむごい事やな。
（義助、吉治と協力して顏を煙の中へ突き入れる。その時母屋の方で末次郎の聲がきこえる）
末次郎　（母屋の内部から）お父さん、おたあさん。歸つて來ましたぜ。
義助　（一寸狼狽して、義太郎を放してやる）末が歸つて來た。日曜でないのにどうしたんやら。
（末次郎折戸から顏を出す。中學の制服を着た、色の淺黑い凜々しい少年。異常な有様に直ぐ氣がつく）
末次郎　何うしたんです。お父様。

義助　（きまりわるさうに）え〻。

末次郎　何うしたんです。松葉なんか燻べて。

義太郎　（苦しさうに咳をして居たが弟を見ると救主を得たやうに）　末か。お父うや吉が、よつてたかつて俺を松葉で燻べるんや。

末次郎　（一寸顏色を變へて）　お父さん！　またこんな馬鹿な事をするんですか。私があれほど云ふといたぢや御座んせんか。

義助　そやけどもな、あらたかな巫女さんに神さんが乘り移つてな……。

末次郎　何を馬鹿なことを。兄さんが理窟が云へんかつて、そな〻馬鹿なことをして。

（巫女を尻目にかけ乍ら燃えて居る松葉を蹴り散らす）

巫女　お待ちなさい。その火は神樣の仰せで點いとる火ですぞ。

末次郎　（冷笑しながら踏み消してしまふ）……

義助　（や〻語氣を變へて）　末次郎！　私はな、ちつとも學問がないもんやけにな、學校でよう出來るお前の云ふことは、何でも聽いとるけんどな、なんぼなんでもかりにも神さんの仰せで點けとる火やもの、足蹴にせんかつてえ〻やないか。

末次郎　松葉で燻べて何が癒るもんですかい。狐を追ひ出す云うて、人が聞いたら笑ひますぜ。日本中の神さんが寄つて來たとて風邪一つ癒るものぢやありません。こんな詐欺師のやうな巫女が、金ばかり取らうと思つて……

義助　でもな、お醫者さまでも癒らんけにな。

末次郎　御醫者さんが癒らん云うたら癒りやせん。夫に私が何遍も云ふやうに、兄さんが此の病氣で苦しんどるのなら、どな〻事をしても癒して上げないかんけど、屋根へさへ上げといたら朝から晩まで喜びつゞけに喜んどるやもの。兄さんのやうに毎日喜んで居られる人が日本中に一人でもありますか。世界中にやつてありやせん。それに、今兄さんを癒して上げて正氣の人になつたとしたら、どんなもんやろ。二十四にもなつて何も知らんし、イロハのイの字も知らんし、ちつとも經驗はなし、おまけに自分の片輪に氣がつくし、日本中で恐らく一番不幸な人になりますぜ。夫がお父さんの望ですか。何でも正氣にしたら、え〻かと思つて、苦しむために正氣になる位馬鹿なことはありやせん。（巫女を尻目にかけて）　藤作さん、あなたが連れて來たのなら、一緒に歸つて下さい。

巫女　（侮辱を非常に憤慨して）　神のお告げを勿體なく取り扱ふものには神罰立ち所ぢや。（呪文を唱へて以前のやうな身振りをなし一度昏倒した後立ち上る）　我は金

毘羅大權現なるぞ。只今病人の弟の申せしことは皆己が利慾の心よりなり。兄の病氣の回復するときは此家の財産が皆兄の物となる故なり、夢疑ふこと勿れ。

末次郎　(奮然として巫女を突き倒し)　何をぬかすんぢや。馬鹿つ!　(二三度蹴る)

巫女　(立ち上り乍ら急に元の樣子になつて)　あいた!　何するんや、無茶な事するない。

末次郎　欺詐め。かたりめ!

藤作　(二人を隔てながら)　まあ坊ちやん、お待ちなさい。さう腹を立ていでも。

末次郎　(まだ興奮して居る)　馬鹿な事ぬかしやがつて!　貴樣のやうなかたりに兄弟の情が分るか。

藤作　さあ、一度引きとる事にしませう。俺があんたを連れて來たのが惡かつたんや。

義助　(金を藤作に渡しながら)　何分まだ子供ぢやけに、何うぞ勘辨してお呉れやす。彼奴はどうも氣が短うてな。

巫女　神さまが乘り移つて居る最中に、私を足蹴にするやうな大それた奴は、今晩迄の命も危いぞ。

末次郎　何をぬかすんや。

およし　(末次郎をさゝへながら)　默つておいでよ。(巫女に)　どうもお氣の毒しましたや。

巫女　(藤作と一所に去りながら)　私を蹴つた足から腐り始めるのや。(二人去る)

義助　(末次郎を見て)　お前あなゝ事をして、罰があたることはないか。

末次郎　あんなかたりの女子に神さんが乘り移るもんですか。無茶な嘘をぬかしやがる。

およし　私は初から怪しい奴ぢや思ふとつたんや。神さんやつたら、あなゝむごいこと云ふもんけ。

義助　(何の主張もなしに)　そら、さうやな。でも末!　お前兄さんは一生お前の厄介やぜ。

末次郎　何が厄介なもんですか。僕は成功したら、鷹の城山の頂邊へ高い〳〵塔を拵へて、そこへ兄さんを入れてあげるつもりや。

義助　それはさうと、義太郎は何處へ行つたんやろ。

吉治　(屋根の上を指しながら)　彼處へ行つとられます。

義助　(微笑して)　相不變やつとるのう。

(義太郎は前の騷動の間にいつの間にか屋根へ上つて居たらしい。下の四人義太郎を見て微笑を交ふ)

末次郎　普通の人やつたら、燻べられたらどなに怒るかも知れんけど、兄さんは忘れとる、兄さん!

義太郎　(狂人の心にも弟に對しては特別の愛情がある如く)　末やあ!　金毘羅さんに聞いたら、あなゝ女子知らんと云ふとつたぞ。

末次郎　（微笑して）　さうやらう。あなゝ巫女よりも兄さんの方に、神さんが乘り移つとんや。（雲を放れて金色の夕日が屋根へ一面に射かゝる）　えゝ夕日やな。
義太郎　（金色の夕日の中に義太郎の顏は或る輝きを持つて居る）　末見いや、向うの雲の中に金色の御殿が見えるやろ、ほら、見えてやろ、ほら一寸見い！　綺麗やなあ。
末次郎　（やゝ不狂人の悲哀を感ずる如く）　あゝ見える。えゝなあ。
義太郎　（歡喜の狀態で）　ほら！　御殿の中から、俺の大好きな笛の音がきこえて來るぜ！　好え音色やなあ。
（父母は母屋にはひつてしまつて、狂せる兄は屋上に、賢き弟は地上に、共に金色の夕日を見つめて居る）

――幕――

藤十郎の戀

人　物

坂田藤十郎　都萬太夫座の座元、三が津總藝頭と讃へられたる名人
霧浪千壽　立女形、美貌の若き俳優
中村四郎五郎　同じ座の立役
嵐三十郎　同上
澤村長十郎　同上
袖崎源次　同じ座の若女形
霧浪あふよ　同上
坂田市彌　同上
小野川宇源次　同じ座のわかしゆ形
藤田小平次　同上
仙臺彌五七　同じ座の道化方
服部二郎右衞門　同じ座の惡人形
金子吉左衞門　同じ座の狂言つくり
萬太夫座の若太夫　萬太夫座の持主
樂屋頭取
樂屋番　二三人
その他大勢の若衆形、色子など
宗淸の女中大勢
宗淸の女房お梶　四十に近き美しき女房
　その他重要ならざる二三の人物

時　代

元祿十年頃

場　所

京師四條河原中島

第一場

四條中島都萬太夫座の座附茶屋宗淸の大廣間。二月の末のある晩。都萬太夫座の役者達に依つて、彌生狂言の顏つなぎの饗宴が開かれて居る。百目蠟燭の燃えて居る銀の燭臺が、幾本となく立て並べられて居る。舞臺の上手に床の間を後に、どんすの鏡蒲團の上に、悠然と坐つて居るのは、坂田藤十郎である。髮を茶筌に結つた色白の美男である。下には鼠縮緬の引かへしを著、上には黑羽二重の兩面芥子人形の加賀紋の羽織を打ちかけ、宗傳唐茶の疊帶をしめて居る。藤十郎の右には、一座の立女形たる霧浪千壽が坐つて居る。白小袖の上に、紫縮緬の二つの重ねを著、天鵞絨羽織に、

紫の野良帽子をいたゞいた風情は、宛ら女の如く艶めかしい。二人の左右に、中村四郎五郎、嵐三十郎、澤村長十郎、袖崎源次、霧浪あふよ、坂田市彌、小野川宇源治、藤田小平次、仙臺彌五七、服部二郎右衞門、金子吉左衞門などが居ならんで居る。席末には若衆形や色子などの美少年が侍して居る。萬太夫座の若太夫は、杯盤の間を、取り持つて居る。

幕が開くと、若衆形の美少年が鼓を打ちながら、五人聲を揃へて、左の小唄を隆達節で歌ふ。

唄〽人と契るなら、薄く契りて末遂げよ。もみぢ葉を見よ。薄きが散るか、濃きが散るか、濃きが先づ散るものでそろ。

（歌ひ終ると、役者達拍手をして慰ふ。下手の障子をあけ、宗清の女中赤紙の附いた文箱を持つて出る）

女中　藤十郎樣に、お文がまゐりました。

若太夫　（中途で受取りながら）　火急の用と見える。（藤十郎に渡す）

藤十郎　（受取りて）　おゝいかにも、火急の用事と見えまする。一寸披見いたしまする。皆の衆御免なされませ。なに〳〵連子どの、巢林より、さて近松樣からの書狀ぢや。（口の中に默讀する、最後に至りて聲を上げる）　此度の狂言われも心に懸り候まゝ、かくは急飛脚を以て、一筆呈上仕り候。小長どのに仕負けられては、獨り御身樣の不覺のみにてはこれなく、歌舞伎の濫觴たる京歌舞伎の名折れにもなること、ゆめ〳〵御油斷なきやう御工夫專一に願ひ上げ候。（暫く考へて又讀み返す）　京歌舞伎の名折れにもなること、うむ！　何の仕負けてよいものか。はゝ……。が、近松樣も、此の藤十郎を思はればこそ、いかい御心勞ぢや。

千壽　（言葉も女の如く）　左樣でムりますとも、此度の狂言には、道の近松樣も二日三晚、肝腦を碎かれたとの事ぢや。ほんに、仇やおろそかには思はれぬわいのう。

彌五七　（道化方らしく誇張した身振で）　さればこそ、前代未聞の密夫の狂言ぢや。傾城買にかけては日本無類の藤十郎さまを、今度はかつきりと氣を更へて、密夫にしようとする工夫ぢや。傾城買の戀が、春の夜の戀なら、之はきつい暑さの眞夏の戀ぢや。身を焦すほど烈しい戀ぢや。

四郎五郎　夏の日の戀と云ふよりも、恐ろしい冬の戀ぢや。命をなげての戀ぢや。

三十郎　命がけの戀ぢやとも。まかり違へば、栗田口で磔にかゝらねばならぬ恐ろしい命がけの戀ぢや。

源次　昨日も宮川町を通つて居ると、われらの前を、香具

賣らしい商人が、二人聲高に話して行く。傾城買の四十八手は、何一つ心得ぬことのない藤十郎様が、密夫の所作を、どなに仕活すか、さぞ見物衆をアッと云はせることだらうと、夢中になつての高話ぢや。

長十郎　藤十郎の紙衣姿も、毎年見ると、少しは堪能し過ぎると、惡口を云ひくさつた公卿衆だちも、今度の新しい狂言にはさぞ駭くことでムりませう。

二郎右衛門　それにしても、春以來大入續きの半左衛門座の中村七三郎どのに、今度の狂言で一泡吹かせることが出來ると思ふと、それが何よりの樂しみぢや。半左衛門座に、引き附けられた見物衆の大波が、萬太夫座の方へ寄せ返すかと思ふと、それが何よりの樂しみぢや。

四郎五郎　さうは申すものゝ、新しい狂言だけに、藤十郎さまの苦心も、並大抵ではあるまい。昔から、衆道のいきさつ、傾城買、濡事、道化と歌舞伎狂言の趣向は、大抵極まつて居たものを、底から覆すやうな門左衛門さまの新趣向ぢや。それに京で名高い、大經師のいきさつを、そのまゝ取入れた趣向ぢやもの、此狂言が當らいで、何としようぞのう。

若太夫　（得意になりながら）　四郎五郎さまの云はれる通りぢや。（藤十郎の前にゐざり寄りながら）　前祝ひにもう一つ受けて下さりませ。傾城買の所作は、日本無類の御身様ぢやが、道ならぬ戀のいきかたは、又格別の御趣向がムりませうな。はゝゝ。

藤十郎　（役者たちの談話を聽いて居る頃から、だん〱不愉快な表情を示し始めて居る。若太夫の差した杯を、だまつたまゝ受けて飲み乾す）

千壽　（藤十郎の不機嫌に氣が附いて、やゝ取りなすやうに）　ほんに、若太夫の云ふ通り、藤十郎様にはその邊の御思案が、もうちやんと附いて居る筈ぢや。われらなど、たゞ藤十郎様を賴りにして、傀儡のやうに動いて行けばよいのぢや。

若太夫　（千壽の取りなしに力を得たやうに）　今度の狂言に比べますと、大當りだと云ふ傾城淺間ヶ嶽の狂言などは、淺墓な性もない趣向でムりまする。密夫の狂言とは、道は門左衛門様でムりまする。それに附けましても、坂田様にはかうした變つた戀の覺えもムりませうな。はゝゝ……。

藤十郎　（先刻から、益々不愉快な悩ましげな表情をして居る。若太夫の最後の言葉に傷つけられたやうにむつとして）　左様なこと、何のあつてよいものか。藤十郎は、生れながらの色好みぢやが、まだ人の女房と懇ろにした覺えはムらぬわ。

若太夫　（座興の積りで云つたことを、眞向から突き放さ

れ、興さめ默つてしまふ)
千壽　(再び取りなすやうに)　ほんに、坂田様の云はれる通りぢや。此の千壽とても、主ある女房と懇ろにしたことはないわいな。
他の役者たち　(皆一齊に笑ふ)　……。
彌五七　それは誰とても同じ事ぢや。女旱りがすれば格別、主ある女房に云ひ寄つて、危い思ひをするよりも、宮川町の唄女、室町あたりの若後家、祇園あたりの花車、四條五條の町娘、役者の相手になる上﨟たちは、星の數ほどあるわ。はゝゝ。
源次　だがのう。一盜二妾三婢四妻と云うて、盜み喰ひする味は、また別ぢやと云ふほどに、人の女房とても捨てたものではない。
長十郎　さては、そなたには覺えがあると見える。
源次　何の覺えがあつてよいものか。だがのう、磔が恐ければ、世に密夫の沙汰は絶えやうものを、絶えぬ證據は、今度の狂言に出るおさん茂右衛門ぢや。色事の道は又別ぢや。はゝゝ。
若太夫　(自分の悄氣たことを、隱さうとして)　座が淋しい。さあ……若衆達、連舞なと舞はしやんせ。
三四人の若衆　あいのう。(立つて舞ひ始める)
藤十郎　(默々として、ひそかに狂言の工夫をめぐらす如き有様なりしが、一座の注意が連舞に惹かれたる間に、ひそかに座を立つ。正面の障子をあけて、靜かに廊下に出づ)
(若衆達は、舞ひつゞけて居る。鼓の音が、烈しく賑かになる。役者たちも、浮れ氣味になる)
彌五七　(可笑しき様子にて立上りながら)　わしも連舞ひの群に入らうぞ。
四郎五郎　美しき若衆達と、禿げた彌五七どの、これは一段と面白い取合せぢや。鼓はわしが打たうぞ。
(若衆達と一緒に彌五七道化たる身振にて舞ふ。皆、笑ひさゞめく裡に、舞臺廻る)

第二場

宗清の離座敷。左に鴨の河原の一部が見える。右に母屋の方へ續く長い廊下がある。絹行燈の光が、美しい調度を艶かしく照して居る。
幕が開くと、藤十郎は右の廊下を、腕組みをしながら歩いて來る。時々、立止まつて考へる。廊下の柱に靠れて、考へる。又々、二三歩、歩みながら、簡單な所作の形を附けて見たりする。漸く離座敷に來る。障子を開けて、人は居らぬかと確めた後靜かに這入る。懷中から書拔きを取出す。

藤十郎　（書拔きを讀みながら、形を附けて見る）　かくなり果つるからは、縱令火水の苦しみも……（工夫附かざる如く、書拔きを投げ出して、考へ始める。立つて、女の手を取る如き形をして見る。又書拔きを開いてぢつと見詰める）　死出三途の道なりとも、御身とならば厭はじこそ……（又絶望したる如く、書拔きを投げ捨てゝ頭を抱へて沈思する。氣を更へて立ち上り、無言にて動いて見る。工夫遂に附かざる如く、後へ手を突いて坐りながら、低い嘆息の言葉を洩す。到頭工夫を一時中止したる如く、床の間に置いてあつた脇息を手を延ばして取り、それに右の肱を靠せながら、身を横にする）

（暫く何事もない。母屋の大廣間で打つて居る鼓の音や、太鼓の音などが、微かに聞えて來る。藤十郎は、靜かに目を閉ぢる。ふと廊下に人の足音が聞える。藤十郎は、一寸目を開き、又書拔きを額に當て、寢た振りをしてしまふ。廊下に現はれたのは、宗清の女房お梶である。足早に近づくと、何の會釋もなく障子を開ける。藤十郎の姿を見て駭く。）

お梶　あれ、藤樣でムりましたか。いかい粗相をいたしました。御免下さりませ。（直ぐ去らうとする。ふと、氣が附いたる如く）　ほんとに女子供の氣の附かぬ。このやうに冷える所で、さうして御座つては、御風邪など召すとわるい。どれ、私が夜の具をかけて進ぜませう。（部屋の片隅の押入から夜具を出さうとする）

藤十郎　（宗清の女房であると知ると、起き直つて居ずまひを正しながら）　おゝこれは、御内儀でありましたか。いかい御雜作ぢやのう。

お梶　何んの雜作で御座りませう。さあ、横になつてお休みなさりませ。

（藤十郎はふと、お梶の顏を見る。色のくつきりと白い細面に、眉の跡が美しい。最初恍然として居た藤十郎の瞳が、だん／＼險しくなつて來る。お梶は、藤十郎の不思議な緊張に、少しも氣附かぬやうに、羽二重の夜具を藤十郎の背後からふうはりと著せる）

お梶　さあ、お休みなさりませ。彼方へ行つたら、女どもに水なと運ばせませうわいな。（何氣なく去らうとする）

藤十郎　（瞳がだん／＼光つて來る。お梶の去るのを、ぢつと見て居たが、急に思ひ附いたやうに後から呼びかける）　お梶どの。お梶どの。ちと待たせられい。

お梶　（一寸駭いたが、併し無邪氣に）　何ぞ御用があつてか。（と坐る）

藤十郎　（夜具を後へ押しやりながら）　ちと、御意を得たいことがある程に、もう少し近く來てたもらぬか。

お梶　（少し不安を感じたる如く、もぢ〳〵して餘り近よらない。が、やはり無邪氣に）改まつて、何の用ぞいのう。おほゝゝゝ。

藤十郎　（低いけれども、力強い聲で）ちと、そなたに聞いて貰ひたい仔細があるのぢや。もう少し、近う進んでたもれ。

お梶　藤樣としたことが、又眞面目な顏をして、何ぞてんがうでも云ふのぢやらう。（ゐざり寄りながら）かう進んだが、何の用ぞいのう。

藤十郎　（全く眞面目になつて）お梶どの。今宵は藤十郎の懺悔を聽いて下されませぬか。この藤十郎は、二十年來、そなたに隱して居たことがあるのぢや。それを今宵は是非にも聽いて貰ひたいのぢや。思ひ出せば古い事ぢや。そなたが十六で、われらが二十の歳の秋ぢやつたが、祇園の祭の折に、河原の掛小屋で、二人一緒に、連舞を舞うたことがあるのを、よもや忘れはしやるまいなあ。（ぢつとお梶の顏を見詰める）

お梶　（昔を想ふ如く、やゝ恍然として）ほんに、あの折はのう。

藤十郎　われらが、そなたを見たのは、あの時が初めてぢや。宮川町の歌女のお梶どのと云へば、いかに美しい若女形でも、足下にも及ぶまいと、兼々人の噂には聽いて居たが、初めて見れば聞きしに勝るそなたの美しさぢや。器量自慢であつたこの藤十郎さへ、そなたと連れて舞ふのは、身が退けるほどに、思うたのぢや……（ぢつと、さし俯く）

お梶　（顏を火の如く赤くしながら、さし俯いて言葉なし）……

藤十郎　（必死に緊張しながら）其時からぢや、そなたを、世にも稀なる美しい人ぢやと思ひ染めたのは。

お梶　（差し俯きながら、愈々うなだれて、身體をかすかに、わなゝかせる）……

藤十郎　（戀をする男とは、何うしても受取れぬほどの澄んだ冷たい眼附で、顏さへ擡げぬ女を、刺し透すほどに、鋭く見詰めながら、聲丈には、烈しい熱情に顫へて居るやうな響きを持たせて）そなたを思ひ染めた當座は、折があらば云ひ寄らうと、始終念じては居たものの、若衆方の身は、親方の掟が嚴しうてなあ。寸時も己が心には、委せぬ身體ぢや。たゞ心丈は、燒くやうに思ひ焦がれても、所詮は機を待つより外はないと、思ひ諦めて居る內に、二十の聲を聞くや聞かずに、そなたは此家の主人、淸兵衞殿の思はれ人となつてしまはれた。その折のわれらが無念さは、今思ひ出しても、此の胸が張り裂くるやうに、苦しうおぢやるわ。（かう云ひながら、藤

十郎は座にも堪へぬげに、身悶えをして見せる。が、彼の二つの眸だけは、爛々たる冷たい光を放つて、女の息づかひから、容子を恐ろしき迄に、見詰めて居る）

お梶（やゝ落着いた如く、顏を半ば下げる。一旦蒼ざめ切つてしまつた顏が、反動的に段々薄赤くなつて來て居る。二つの眸は火の如く凄じい）……

藤十郎（言葉丈は熱情に顫へて）人妻になつたそなたを、戀ひ慕ふのは、人間の道ではないと心で強う制統しても、止まらぬは凡夫の思ぢや。そなたの噂をきくに附け、面影を見るにつけ、二十年のその間、そなたのことを、忘れた日はたゞの一日もおぢやらぬのぢや。（彼は舞臺上の演伎にも、打ち勝つたほどの巧妙な所作を見せながら、而も人妻をかき口說く恐怖と不安とを、交へながら、小鳥の如く竦んで居る女の方に詰めよせる）が、此の藤十郎も、縱令色好みと云はるゝとも、人妻に戀をしかけるやうな非道な事はなすまじいと、明暮燃えさかる心を、ぢつと抑へて來たのぢやが、われらも今年は四十五ぢや。人間の定命はもう近い。これほどの戀を：：二十年來忍んだこれほどの戀を、此世で一言も打ち開けいで、何時の世誰にか語るべきと、思ふに附けても、物狂はしうなる迄に、心が擾れ申してかくの有樣ぢや。のう、お梶どの。藤十郎をあはれと思召さば、たつた一言情ある言葉を。なあ！　お梶どの。（狂ふ如く身悶えしながら、女の近くへ身をすり寄せる。が瞳だけは刃のやうに澄み切つて居る）

お梶　わ……つ。（と云つたまゝ泣き伏してしまふ）

藤十郎（泣き伏したお梶をぢつと見詰めて居る。その脣のあたりには、冷たい表情が浮んで居る。が、それにも拘らず、聲と動作とは、戀に狂うた男に適はしい熱情を持つて居る）のうお梶どの。そなたは、藤十郎の噓僞りのない本心を、聽かれて、藤十郎の戀を、あはれとは思はぬか。二十年來、忍んで來た戀を、あはれとは思さぬか。さりとは、強いお人ぢやのう。

お梶（すゝり泣くのみにて答へず）……

（二人とも、おし默つたまゝで、暫くは時刻が移る。灯を慕つて來た千鳥の、銀の鋏を使ふやうな聲が、手に取るやうに聞えて來る）

藤十郎（自嘲するが如く、淋しく笑つて）これは、いかい粗相を申しました。が、此の藤十郎の切ない戀を、情なくなさるとは、さても氣強いお人ぢやのう。舞臺の上の色事では、日本無双の藤十郎も、そなたにかゝつては、たわいもなう振られ申したわ、はゝゝゝゝゝ。

お梶（ふと顏を上げる。必死な顏色になる。低い消え入るやうな聲で）それでは藤樣、今仰しやつたことは皆

本心かいな。

藤十郎　（眞に必死な蒼白な面をしながら）　何の、てんがうを云うてなるものか。人妻に云ひ寄るからは、命を投げ出しての戀ぢや。（浮腰になつて居る彼の膝が、微に顫へる）

（必死の覺悟を定めたらしいお梶は、火のやうな瞳で、男の顏を一目見ると、いきなり傍の絹行燈の灯を、フツト吹き消してしまふ。闇の裡に恐ろしい躊躇と沈默とが、二人の間にある。お梶は身體をわな／＼顫はせながら、男の近づくのを待つて居る。藤十郎の額も眼が上づつてしまつて、足がかすかに顫へる。漸く立ち上る。お梶の方へ歩みよる。お梶は必死になる。が、藤十郎は、その傍をスルリと通りぬけて、手探りに廊下へ出る）

お梶　（男の去らんとするに、氣が附いて）　藤様！　藤様！　（と低く呼びながら、追ひ縋らうとする）

（藤十郎、お梶の追ふのに氣附いて、背後の障子を閉める。お梶障子に縋り附いたまゝ、身を悶えつゝ泣き崩れる。藤十郎やゝ狼狽しながら、獸の如く足早に逃れ去る。お梶の泣く聲に交じるやうに、千鳥の聲が聞える）

第三場

第二場より七日ばかり過ぎたる一日。都萬太夫座の樂屋。上手に役者達の部屋々々の入口が見える。その中で、一番目立つのは、梅鉢の紋の附いた暖簾のかゝつた藤十郎の部屋である。眞中に、樂屋番の部屋がある。下手に萬太夫座の舞臺に通ずる出入口がある。淺黄の暖簾が垂れて居る。彼方の舞臺にては幕が開く前と見え、鼓と太鼓と笛の音とが斷續して聞える。幕が開くと、狂言方や下廻りの役者達が、五六人左右に忙しく行き交ふ。樂屋番が、衣裳腰の物などを、役者の部屋へ運んで行く。

萬太夫座の若太夫が、藤十郎の部屋から出て來る。出會頭に頭取と挨拶する。

頭取　おめでたう厶んす。今日も明六つの鐘が鳴るか鳴らぬに、木戸へは一杯の客衆で厶りまする。

若太夫　めでたいのう。ほんに藤十郎どのぢや。密夫の身のこなしが、とんとたまらぬと京女郎たちの噂話ぢや。

頭取　これでは、半左衞門座の人々も、あいた口が、閉がらぬことで厶りませう。この評判なら百日はおろか二百日でも、打ち續けるのは定で厶りますのう。

若太夫　何にしてもめでたい事ぢやのう。樂屋中よく氣を附けてのう。粗相のないやうにのう。こんな大入りの時

に限つて、火事盜難なぞの過ちがありがちでのう。

頭取　へい〱合點で厶りまする。

(二人左右に別れる。下手の出入口から、丁稚を連れた手代風の男が入つて來る)

手代風の男　(頭取を呼びかけて)　あゝもし〱。藤十郎樣のお部屋は、何處で厶りまするか。

頭取　どちらからぢや。お部屋は直ぐ彼處ぢやが。

手代風の男　四條室町の備前屋の手代で厶りまする。

頭取　おゝ室町の大盡のお使ひで厶りまするか。さあ!お通りなさりませ。左から二つ目の部屋ぢや。

手代風の男　なるほどな、梅鉢の紋が附いて居りますのう。

(手代風の男、藤十郎の部屋へはひつて行く。藤十郎の部屋の直ぐ隣りから、大經師以春に扮した中村四郎五郎と召使お玉に扮した神崎源次とが出て來る)

四郎五郎　(源次の袖を捕へながら、一寸所作をして)　何うも、お前にじやれかゝる所が、うまく行かぬのでのう。今日は三日目ぢやが、まだ形が附かぬのでのう。昨日、藤十郎どのに、敎へを乞うて見ると、自分で工夫が肝心ぢやと、云はしやれた。さあ、幕の開く前に、もう一度稽古に附き合うてたもらぬか。

源次　おゝ安い事ぢや。何度でも附き合はう。藤十郎どのに、工夫を訊ねると何時も、强い小言ぢや。みんな自分で工夫せいとは、あの方の極まり文句ぢや。

四郎五郎　おゝ一昨年の事ぢや。山下京右衞門が、江戸へ下る暇乞ひに藤十郎どのゝ所へ來て、わがみも其許を萬事手本にしたゆゑに、藝道もずんと上達しましたと云はれると、藤十郎どのは何時ものやうに、一寸顏を顰められたかと思ふと、「人の眞似をする者は、その眞似られるものよりは必定劣るものぢや。そなたも、自分の工夫を專一にいたされよ」と、にこりともせずに眞向からぢや。あの折の京右衞門どのゝてれまき方を、思ひ出すと今でも可笑しくなるのぢや。

源次　藤十郎どのから、お小言を喰はぬ前に、もう一工夫して見よう。

四郎五郎　(急に芝居の身振をなし)　これさ、どつこいやらぬ。本妻の悋氣と饂飩に胡椒はおさだまり、何とも存ぜぬ。紫色はおろか、身中がかば茶になるとても、君ゆゑならば厭はぬ。

源次　(應じて芝居の身振りをしながら)　どうなりとさしやんせ。こちやおさん樣に云ふほどに。あれ、おさん樣〱。

四郎五郎　(やはり身振りを續けながら)　やれ、やかましい、其外おさんわにの口、くちの序に口々。(急に役者

に立ち返りながら） 何うも茲の所が、うまく行かぬのぢや。

（芝居茶屋の花車女に案内され、若き町娘下手の入口より入つて來る）

花車女 おゝ源次さま。丁度よいところぢや。それ〳〵、此間一寸お耳に入れた東洞院の近江屋のお嬢様でムりまする。

源次 （四郎五郎に、氣兼ねをしながら） もう、幕が開きますほどに、又にして下さりませ。

花車女 ほんに情ない事を、云はれますのう。折角樂屋まで、來られましたのに、一寸言葉なりと交はして下さりませ。

源次 （もぢ〳〵しながら、娘に對して） ほんに、ようお出でなさりました。

町娘 （同じく恥ぢらひながら、默つて頭を下げる） ……
……

花車女 さあ、一寸私の茶屋まで、入らせられませい。ほんの一寸ぢや、手間はとらせませぬほどに。

源次 さうはして居られませぬわい、もう直ぐ開きまする。

花車女 何のまだ開きまするものかいのう。さあ御座りませ。（無理に源次の手を取りて、下手の入口より娘を伴うて去る）

（助右衞門に扮した仙臺彌五七、手代丁稚に扮した三四人の俳優と揃うて、右手より出て來る）

甲 この頃の娘は、油斷がならぬ事ぢや。役者を慕うて樂屋まで、のめ〳〵とは入つて來る。

乙 それにしても、袖崎どのは果報ぢや。男知らずの町娘から、あのやうに慕はれては、滿更憎うはあるまい。はゝゝゝ。

丙 それにしても、見物人のどよみやう。小屋が、割れるやうな大入と見える。

四郎五郎 （相手の源次を失うてぼんやり立つて居たが）江戸の少長に、此の大入りの樣子が見せたいのう。

彌五七 ほんにさうぢや。此の狂言に比べると、淺間ケ嶽の狂言などは、子供だましぢや。

四郎五郎 淺間ケ嶽に立つ煙もだん〳〵薄うなつて行くのぢや。はゝゝゝ。

（霧浪千壽、美しいおさんに扮して、靜かに部屋から出て來る。金剛が附いて居る）

彌五七 昨日一寸ある所で、聞いた噂ぢやが、藤十郎どのは、今度の狂言の工夫に惱んだ揚句、ある茶屋の女房に戀をしかけ、密夫の心持や、動作の形を附けたと云ふ事ぢやが、眞實かのう。

四郎五郎　わしは、しかとは知らぬが、千壽どのは、聞いたであらう。その噂は實正かのう。

千壽　そんな噂は、わしも人傳には聞いたがのう。藤樣は、口をつぐんで何も云はれぬのでのう。が、あの宗清で顔つなぎの酒盛があつた晩の事ぢやが、藤樣は狂言の工夫に屈託して、酒宴の席を中座され、そなた達は、追々醉ひつぶれて、別間へ退かれた後の事ぢやのう。藤樣が、蒼い顔して、息を切らせながら、酒宴の席へ歸つて來られると、立てつゞけに、大杯で三四杯呷つてから云はれるのに、「千壽どの安堵めされい。狂言の工夫が附き申した。」と、云はれたが、平生の藤樣とは思はれぬほどの恐い顔附ぢやつたが、あの晩に………。（と千壽が首を傾けて居るとき、下手の入口から、宗清のお梶がひそかに入つて來るのに氣がついて、口をつぐむ）

彌五七　（役者の道化振りを發揮して）　これは、これはお梶どの。ようお出でなされました。一寸お尋ねしまする。藤十郎どのが、狂言の稽古の相手は貴女樣では御座りませぬか。

お梶　（緊張しながら、而もつゝましやかに）　何で御座りまする。藪から棒のお尋ねで御座りまするのう。

彌五七　（矢張り道化た身振りで）　藤十郎どのが、今度の狂言の稽古に、人の女房に僞りの戀をしかけ、靡くと見て、逃げたとの事で御座りまする。もしや、お心當りが御座りませぬか。

お梶　（つゝましやかに、態度をみださず）　僞りにもせよ、藤十郎樣の戀の相手に、一度でもなれば、女子に生まれた本望で御座りますわい。

彌五七　よくぞ仰せられた。はゝゝ。

千壽　（やゝ取りなすやうに）　ほんに、日頃から貞女の噂高いそなたでなければ、さしづめ疑がかゝる所で御座りますのう、樂屋へ御用で御座りまするか。さあお通りなさりませ。

お梶　あのう。嵐三五郎さまに、お客樣からの言傳を。

千壽　さやうで御座りまするか。さあ、お通りなさりませ。

（お梶會釋して通り過ぎる。役者の部屋の方へ行かんとして、部屋を立ち出でたる藤十郎と顔を見合はす。二人とも、瞬間的に立ち竦む。お梶一寸目禮して行き過ぎる。藤十郎、暫く後姿を見詰むる。）

四郎五郎　（藤十郎の立ち出でたるを見て）　今も、そなた樣の噂をしてぢや。今度の狂言について、樂屋の內外に擴がつた噂を、御存じか。

藤十郎　（座元らしい威嚴を失はないで）　一向聞きませぬな。

彌五七　噂の本尊のそなた樣が知らぬとは、面妖な。
千壽　藤樣には、云はぬがよいわいな。
彌五七　云はいでも、何時かは知れる事ぢや。藤十郎さま、藤十郎さま。お聞きなさりませ。今度の狂言の工夫に、そなた樣がある人妻に戀をしかけたとの噂ぢや。
藤十郎　（快活に笑つて）埒もない穿鑿ぢや。いつぞやも、わしが嵐三五郎の手負武者を介抱すると、あまり手際がよいと云うて、やう藤十郎は外科の心得があるなどとやかましい沙汰ぢや。心得がなうても、心得のあるやうに眞實に見せるのが、役者の藝ぢや。油賣りになれば、油賣つた心得がなうても、油賣りになつて見せるのは藝ぢや。密夫の心得がなうて、密夫の狂言が出來ねば、盜人の心得がなうては盜人の狂言は出來ぬ譯合ぢや。公卿衆になつた心得がなうては、舞臺の上で公卿衆にはなれぬ譯合ぢや。埒もない沙汰ぢや。口性ない京童の埒もない沙汰ぢや。そのやうな沙汰が傳つては、藤十郎の身近に居る人のお内儀に、どのやうな迷惑をかけようも計られぬわ。かまへて、打ち消して下さりませ。
千壽　ほんに、藤樣が云はれる通りぢや。
彌五七　道は藤十郎樣ぢや。なるほどなあ。心得がなうては狂言が出來ぬとなれば、役者は上は攝政關白から、下は下司下郎のはしまで一度はなつて見なければ、役者にはなれぬ筈ぢや。なるほどなあ。
手代風の男　（藤十郎の部屋から出て來て）それでは、失禮いたしますで御座ります。
藤十郎　御苦勞で御座りました。大盡樣に、よう禮を云うて下さりませ。
（手代風の男丁稚と共に去る。幕の開くこと愈々近くなりしと見え、道具方樂屋方等の往來繁くなる）
藤十郎　（千壽を顧みて）千壽どの。あの闇の中で、そなたと初めて手を取り合ふとき、今少し逆上した風を見せてたもらぬか、女はあのやうなときは、男よりも身も世もあらぬやうに逆上するものぢやほどにのう。
千壽　（素直に）あいのう。合點ぢや。今日は作者の門左衞門樣も、御見物ぢやほどに、一段心を籠めて見ますわいのう。
藤十郎　さあ、もう幕が開くに程もあるまい。
（千壽の手を取りて行かんとす。急に、樂屋内が騷ぎ出す。「自害ぢや、自害ぢや。女の自害ぢや。」と、道具方や下廻りの役者達、役者の部屋の方へ驅け込む）
頭取　（周章てゝ驅け込みながら）あゝ、聲を立てゝはならん。見物が騷ぎ出すと、舞臺の方がめちやくちやぢや。靜かに、靜かに。（皆の後から奥の方へ這入る）
彌五七　（やつぱり道化方らしいやゝ上ついた態度で）は

て面妖な。自害、しかも女の自害とは。樂屋には、牝猫一疋居らぬ筈ぢやがのう。

千壽　（同じく不思議さうに）　女の自害！　はて、女の自害！

藤十郎　（思ひ當ることある如く、やゝ蒼白になりながら默つて居る）……

（道具方樂屋番など、お梶の死體を擔いで來る。口々に「宗淸のお內儀ぢや」と云ふ）

千壽　（駭いて駈け寄りながら）　なに！　宗淸のお內儀！

（ふと氣が附いたやうに、藤十郎の方を振り返る）

藤十郎　（千壽の振り返つた眼を避くるやうに、目をそらして居る）……

彌五七　いかにも宗淸のお內儀ぢや。短刀で胸の下をたつた一突ぢや。

四郎五郎　今玆で話して行かれたのに。ほんの、瞬く間の最期ぢや。藤十郎さま、御覽なされませ。いかな仔細かは分りませぬが、女子には稀な見事な最期ぢや。

藤十郎　（引き附けられたやうに、歩み寄りながら、ぢつと死顏に見入る。言葉なし）……

若太夫　（息せきながら駈け込んで來る）　何事ぢや。何事ぢや。なに女の自害！　やあ、宗淸の御內儀ぢや。いかな仔細か知らぬが、なにも萬太夫座の樂屋で、自害せいでもよいのを。

千壽　ほんに、樂屋に死にゝ來ないでも。（ふと、藤十郎の顏を見て默る）……

彌五七　こんな不吉な事が、世間に知れると、折角湧き立つた狂言の人氣に、傷が附かぬものでもない。

若太夫　ほんにそれが心配ぢや。皆樣、他言は無用にして下されませ。

藤十郎　（默つて死骸を見詰めて居たが、急に氣を更へて）何の心配な事があるものか。藤十郎の藝の人氣が、女子一人の命などで傷つけられてよいものか。（千壽の手をとりながら）　さあ、千壽どの舞臺ぢやっ

千壽　（眞實の女の如くやさしく）　あいのう。

藤十郎　（つか〳〵と舞臺の上へと急いだが、また引返して死體を一目見、遂に想ひ決したる如く、退場す。同時に幕の開く拍子木の音が聞えて靜かに幕が下る。）

――幕――

暴徒の子

人　物

壽　春　　十七歳の少年
彼の妻　　十八九歳の少女
彼の母　　六十に餘る凋びたる老女
ある男

時及び所

ある國の新領土に本國人の燒打虐殺が行はれてから間のない頃、慘事のあつた村の內の一つ

場　面

汚い土人の家の內部、左右の壁には赤青二色の木版刷の繪が貼られ、左の戶外に通ずる扉、正面に窓。夜の十時頃、右の隅には魚油が燃え盛つて居るけれども室は陰慘の感を呈す。老若二人の女あり。老女は魚油の下に椅子に坐して乾いた葦にて編物をなし、若きは窓によりて闇を凝視して居る。闇の彼方の遙かなる都會の空映を見詰めて居るのらしい。戶外は雨を交へた風。

老女　（身につもる寂寥を拂はんとして）まだ雨は降つて居るのかい。

少女　（若い額を少し振り向けながら）降つて居ますとも、あんなに芭蕉の葉を打つ音が聞えて居りますわ。

老女　さうかい。わしにはちつとも聞えないんだよ。今年の春から耳がよほど惡くなつたやうだ。（窓の方を見ながら）また風が出たやうだね。先度のやうに強く吹いたら男手がないんだから、折角集めた葦が皆吹き飛ばされてしまふかも知れないよ。

少女　ほんたうに、何時が來たら、お父さんやあの人は歸つて來るのでせうね。

老女　お前先刻村へ行つたのぢやないかい。何か新しい噂はなかつたかい。

少女　いゝえ何も。

老女　（指を折つて）あゝ今日で十三日目になるね。もしかすると、もう歸つて來ないのぢやないかしら。あの人の兄さん達のやうに、やつぱり絞り殺されてしまふのぢやないかしら。

少女　（恐怖の色を表しながら）でも里の父が申しましたよ。この村の人達のは何も證據がないんだから皆が心を揃へて白狀しなければ、向うでも手の附け方がないんだらうつて。

老女　さうとも限らないよ。死んだ兄さんがさういつた

よ。あの國の人達は罪があらうがあるまいがハツキリ分らなくつても、罰さへハツキリ與へればいゝのだつて、土人があの人達を殺したときには懲しめの爲に誰かを殺しさへすればいゝのだつて。

少女　でもお父さんは七十に近いのだし、壽春さんは二十にもならないんだし。年寄と子供とは助けて與れると思ふわ。

老女　たとへ殺されないでも、あの高い塀の牢屋へ入れられて御覽！　山を馳け廻るちいほあんにだつて越えられやしないよ。それに高麗鶯のやうにかよわい壽春と手傷を負うて居るお父さんだもの、一年とは生きて居やしないよ。もしあの人達が生きて居るとしても、わし達が生きて居られまいよ。かうして毎晩二人で向ひ合つて、外の事は何も考へずにあの人達の事ばかり思ひ詰めて居るんだもの。半年だつて難しいと思ふよ。お前、鏡を見て御覽！　頬がどんなに殺げてしまつたか。

少女　（左の手で自分の頬を撫でながら）　お父様が騷動の時に、群衆の後から隨いてお出にならなければよかつたんですわ。壽春はお父さんの身體を心配して、後から隨いて行つた丈ですもの。

老女　（目をしばたゝきながら）　ほんたうに、あの子はひどい災難だつたよ。あんなに氣の弱い鐵砲の音にだつて吃驚りする子が、砂利一粒だつて投げるものかい。わしは牢屋の門の閉まる音を聞いても、あの子は氣を失くするかも知れぬと思うて居るよ。あの子が牢屋の中で泣いてゐる聲が、耳に附いて眠むられない晩があるよ。

少女　壽春はお父さんが火を放けて行く後から、ブル／＼慄へながら隨いて行つたのですつて。お父樣の身體を案じたからですわ。

老女　わたしの夫は、あの氣性だから仕方があるまいよ。豹のやうに氣が荒くつてあの國の人達を見ると蛇のやうな目附をするんだもの、それに兄弟二人とも絞り殺されて居るんだから無理もないよ。わしもあの人に斯んな事があつてもちつとも驚かないけれど、壽春は可哀いさうだよ。あの子は何も知らないし、あの國の人を少しも憎んで居ないし、郵便局の人達にも可愛がられて居たのだもの。

少女　お父さんを巡査が捕へた時に、壽春が氣狂ひのやうになつて飛び附いて行つたのが、惡かつたのですね。

老女　あの兒は弱いくせに大の親思ひだからね。

少女　村の人だつて壽春は可哀さうだと云つて居ますよ。村から捕まつた內で、何も罪のないのはあの人丈だつた。

老女　水牛の背の小鳥がどれも同じに見えるやうに、あの

國の人達はあの子と、外の人達との區別なんか見分けて呉れまいよ。土人と云へば皆同じものだと思つて居るんだよ。

少女　それぢや壽春も同じやうに殺されるのですかしら。

老女　そんな不吉な事は考へない事にしようぢやないか。でもね、わしはあの子丈は歸つて來るやうな氣がするんだよ。お前あの子のやうな可愛い子が、たつた十七で殺されるとは考へられないぢやないか。

少女　私も何だか歸つて來るやうな氣がしますわ。先刻も牧場の方で口笛の音が聞えましたよ。それが壽春が水牛を連れて歸つて來る時のによく似て居ましたわ。

老女　それはあの子が歸つて來る兆かも知れないよ。

（この時扉が内へ押されて一陣の風が吹き込む。そして外から少女を呼ぶ聲がする。少女も、老女も恐怖と希望と不安との混じた表情をなす）

少女　（身を半分起しながら）誰！　誰！　誰ですか。

外の聲　わたしだよ。

少女　（扉の方へ歩み寄りながら）あら御母さんなの。こんなに遲いのに。

外の聲　外へお出な、話があるのだから。

少女　どうして這入つたらいけないの。

外の聲　何でもいゝから出てお出な。

老女　（不快の表情をしながら）あなたお這入りなさいな。

外の聲　（それには返事をしないで）出て來なと云つたら出てお出。

少女　（いや／＼ながら）一體何んの用なの。

（少女戸外に歩み出る。暫くの間密語の聲が聞える。此の間老女は不安と猜疑との眸を輝しながら扉の方を貫くやうに見て居る）

少女　（扉の所に半身を出しながら）嫌です。私は玆の家の人ですから。

外の聲　ぢや居るといゝ。卷添を喰つてひどい目に逢つても知らないよ。

少女　どんな事があつても、夫の家は離れませんよ。

外の聲　（だん／＼戸口を離れながら）お前は壽春の事と來た日には、お母さんの云ふ事はちつとも聞かないのだからいゝや。今にどんな事があつてもお母さんは知らないからな。あんな奴を‥‥（聞えなくなる）

少女　（扉を閉めて元の場所へ歸る、前よりも蒼白な顏をして居る）‥‥。

老女　お前里のお母さんは何と云つたんだい。壽春も殺されさうだから、歸れと行つたのかい。

少女　そんな事ならいゝんですけれど。

老女　ぢやお前、あの子がもう死刑になつてしまつたのかい。
少女　(床を見詰めたまゝ)……。
老女　(せき込んで)　お前、さあ早く、何の話であつたのか聞かしてお呉れな。
少女　(何の歡喜の表情をも伴はないで)　壽春さんが牢屋から出たのですつて。
老女　(飛上る迄に欣んで)　えい！　さうかい、ほんたうかい！　わしはこんな嬉しいことはないよ。まさか、お前僞ではあるまいな。お母さんが云つたのかい！(少女肯く)　私はやつぱりあの子丈は助かると思つたよ。あの國の人達は村の人達よりも十倍もかしこいよ。さうぢやないかい。壽春が何もしないことをちやんと神樣のやうに見通して居るのだよ。だからわしは村の人のやうにあの國の人を憎いとは思はないんだよ。あんな悧巧な人達にわし達が治められるのは、之は當り前と云ふものだよ。(ふと氣がついて)　それで壽春はいつ牢屋から出たと云ふのだい。
少女　(不愉快な表情で老女の話をきいて居たが)　今朝早くと云ふことですよ。
老女　(少し不安になつて)　それではもう歸つて居る筈だね。四里位の道だもの。あの子丈歸つて呉れゝばわしはもう澤山だよ。ぢいさんはとても歸つて來る筈はないんだからね。朝出たと云へば晝間歸つて來られる筈だがな。お前まさか僞ぢやないだらうね。
少女　壽春さんは晝の裡は歸れますまいよ。
老女　そんな事があるものかね。近い道だもの。
少女　(悲痛な泣き聲になつて)　でも晝間村へは歸れますまいよ。あの人の故で村の人が皆殺されるのですつて。
考女　えゝつ！　何をお前、馬鹿な事を云ふのだい。あの子は郵便局のガラス一枚壞しては居ないよ。あの子の故なんてそんな事があるものかい。皆自身の故だよ。
少女　でも壽春さんが村の人のした事を皆喋べつてしまつたのですつて。
老女　(悲痛な顏になつて)　えゝ！
少女　この村の人は證據がないものだから、向でも尋ねあぐんで居たのに、壽春さんが白狀したら許して呉れると云ふ約束で、皆云つてしまつたんですつて。
老女　(半信半疑に)　あの子がお前そんな大それた事が出來るかね……。
少女　そのために外の人は、皆罪が定まつて、壽春さん丈が助かつたのですつて。
老女　村の人は皆それを知つて居るのかい。
少女　先刻村中へそれが知れてから、皆この家を燒打に來

ようとしたのを、里の父が止めたんですとさ。その代りに村の人達は壽春を見附け次第、河の中へ沈めにかけると云つて居るさうです。

老女　（デスペレートになつて）　村の人が百人死んでも、壽春が助かつた方がいゝよ。村の奴等に何であの子を渡してよいものか。村の奴の故でぢいさんが殺されるのだもの、壽春まで殺させてたまるものか。（やゝ不安におそはれるものゝ如く）　あの子は一體何處に居るのだらう、歸つて來なけりやいゝがな。あの國の人達の家にでも奉公して呉れゝばいゝがな。あの子を沈めにかけるのだつて。この村の奴等の方があの國の人達より百倍も恐ろしいよ。

（此の時窓の所に壽春の姿亡靈の如くに現はる。美しい華奢な顔が十餘日の苦悶に痩せ衰へたと見え、たゞ大きいウツトリとした眸が彼の生命の持續をやつと示現してゐる）

老女　（ふと氣がつくと電氣をかけられたやうに立ち止まつて）　えゝツ！　お前壽春ぢやないか。（いきなり窓ごしに抱きついて）　こんなに痩せてしまつて。でもまあよく歸つて來たさ。

少女　（駈けよつて壽春の肩にすがりながら）　あなた！（と云つたまゝさめざめ泣く）

壽春　（夢の如くボンヤリ立つて居る）……。

老女　さあお前内へお這入り。（壽春窓をこえて中に入り、そこに置かれたる椅子に崩れるやうに坐る）　お父さんは彼地に居るんだね。お前一人でもお母さんはどんなに嬉しいか知れないよ。お父さんの傷は癒つたのかい。お父さんと一緒には居なかつたのかい。

壽春　（泣きながらだまつて居る）……。

老女　さあお前、一寸向うの様子を云つてから御飯をおたべ。さあお前、どうして歸つたのか、お父さんや村の人はどうしたのか、話してお聞かせな。

壽春　……。

老女　お母さんはお前がどんな事をしようと、惡いとは思はないんだよ。村の人が皆殺されてもお前が助かる方がいゝんだよ。お前が裏切をしたと云ふことはお母さんは知つて居るのだよ。でもお前どうしてお父さんの事まで云つたのだい。さあ、捕まつてからの事を早く話してお聞かせな。そして今宵の裡に逃げてお呉れ。村の人がお前を殺すと云つて居るさうだから。

壽春　（何の恐怖をも伴はないで）　村の人が私を殺すと云ふのですか……。

老女　心配おしでない、わしがお前を手渡しはしないよ。さあそれよりか、お父さんの様子やお前の許された譯を

話してお聞かせな。

壽春　(やゝ苦しい息で)　捕まへられてからね、馬車に詰め込まれて町の牢屋へ行つたんですがね、馬車の搖く毎にお父さんの傷から血が流れてだん／＼顏の色が蒼ざめて行つたけれども、お父さんは何時ものやうに恐い顏をして巡査を見詰めて居たよ。牢屋へ着くと別々になつてしまつたから、私は何れほどお父さんに逢ひたかつたか知れやしない。

少女　(泣きながら)　あなたの事ですから……。

壽春　所が向うの人は何うしても逢はして吳れないの。それでね、村の人のやつた事をお前が白狀したら父にも逢はせてやるし、お前が無罪なのは分つて居るのだから、放免してやると云ふんです。

老女　それではお前が何もかも云つてしまつたのかい。

壽春　それほど壽春は卑怯ではありませんよ。でもね昨日の晩役人が來てね、お前の父は傷の爲に死にかゝつて居るが、逢ひたくはないかと云ふんです。私は今殺されてもいゝから逢はしてお吳れと云つたら、不思議に快く承諾してお父さんの傍へ連れて行くのです。

老女　とう／＼逢はして吳れたのだね。やつぱりあの國の人達は物が分つて居るね。それでお父さんはどんな樣子をして。

壽春　(泣き始めながら)　骨と皮ばかりになつて藁の上にのたくりながら水！　水！　水を吳れと小さくうめいて居るのです。私がお父さん！　と云ふとやつぱり知つて居てね、もう見えないらしい目に泪をためながら壽春か水を吳れ！　と云ふのです。お父さんは熱のために喉が乾き切つて居たのです。私は室の隅の水壺を取り上げて持つて行かうとすると役人が私の手を捕へて、水を飮ませたければ村の人のやつた事を云へと云ふのです。

老女　えゝッ！

壽春　(目をけばしくしながら)　しまつた！　穽にかゝつたと思つたけれども、お父さんの地獄の鬼にさいなまれるやうな聲をきくと、私は世界中の人を裏切つても、水が上げたくなつてしまつたのです。私は半分夢中で皆喋べつてしまひました。

老女　(あきらめたやうに)　それでお父さんに水を飮ませたのかい。

壽春　お父さんは餓鬼のやうに、その壺にとりついて三合ばかりの水を飮んでしまつた後で、ガツクリとなりました。

老女　えゝッ！

壽春　お父さんが死ぬやうなら云ふんぢやなかつたと思つたけれども、もう追附かなかつたのです。

老女　（すゝり泣ながら）　お前さへよければ村の奴なんかどうなつたつていゝよ。お父さんの爲に云つたんだもの神樣はゆるして下さるよ。さあ早くお逃げ。そして町へ行つて何處かへ奉公をするといゝ（少女に）　お前着物をつゝんでおやり、わしは豚を燒いて御飯の支度をするから。

（壽春は默つて椅子に腰かけて居る。老女は室の隅で豚をやき始めんとして居る。少女はなほ壽春の傍にうづくまつて居る。急に大勢の足音が此の家を襲ふやうに聞える。老女は壽春を押しやるやうに押し入れにかくす。扉を叩く音）

ある男　一寸開けて吳んな。

老女　こんなに遲いのに、明朝にして吳れないか。

ある男　一寸開けろと云つたら。

老女　女ばかりの所へこんなに遲く來て、あしたお出でと云つたら。

ある男　開けなきや、やぶり壞すぞ。

老女　（不承不承に扉をあけながら）　一體何の用だい。

ある男　（扉の前に立つ。鐵のやうに頑固な肉體を持つた男）　お前の所の若造を一寸出して吳んな。

老女　（決死的に）　何をとぼけた事を云ふのだい。それや町の牢屋の門へ行つてお云ひな。

ある男　白ばくれるない。町の役所の小使をして居る男の密告でスツカリ分つて居るのだ。手前の亭主に免じて燒打丈は堪忍してやるが、小忰は勘辨出來ないから。さあどこへかくしたのだ。出さなけりや大勢よつて探す丈だぞ。

老女　何を云つて居るのだい。十三日前に捕まへられたぎり、あの子の草履一足だつて歸つて來ないよ。

ある男　婆さん、お前がいくら頑張つても仕方がねえ事だ。壽春が牧場の堤から後の竹林を拔けてこの窓から這入つたこと迄皆分つて居るんだぞ……。

（この時壽春押入を自ら開き、幽靈の如くよろめきながら出て來る。この男も壽春を見て二三歩たじろぎながら）

ある男　や、壽春ぢやねえか。用があるから一寸來るんだ。

老女　（絕望して）　壽春！　お前どうして出て來るんだい。（壽春を捕へて）　お前行くんぢやないよ。

ある男　（壽春を扉の方へ押しながら）　何に、たゞ一寸借りて行く丈だよ。

老女　（兇暴の相を示しながら）　ウソを云へ、河の中に沈めにかけるのだらう。死んだつてやりはしないよ。わしは夫を殺されて居るのに、まだこの子までを殺すと云ふ

のかい。

ある男　（老女が飛びかゝるのを突き飛ばしながら）　何をグヅ／＼云ふのだい。

老女　（必死になつて）　壽春を殺すなら殺して見ろ。町の役人に頼んで、此の村の奴を鏖殺しにしてやるから。

ある男　彼奴等は土人が彼奴等を殺したら大騒ぎをしやがるが、土人同志の事はどうなつたつてお介意なしだよ。（扉をあけながら、壽春を押し出さんとす。老女と少女と左右よりすがりつくのを拂ひのけて、遂に壽春を戸外へ突き出す）　さあ、代物だぞ！

（戸外はやゝ烈しき物音、壽春のひくき悲鳴きこえる。老女狂亂の如くその男に飛び附くのを再び突き退けて戸外に出で扉をしめる）

老女　（必死に扉をあけんとすれど開かず。室内を駈け廻りながら）　畜生！　一番おとなしい者を一番ひどい目に合はせやがつて！　村の奴も町の奴もくたばつてしまひやがれ！

（急に窓に氣がつき、窓より飛び出す。後には床の上に悶絶して居る少女の姿が魚油の光の裡に死骸のやうに見える。）

――幕――

奇蹟

人物

秀寛　僧形の少年
お辨　少女
若僧　甲、乙、丙、丁

時

定めず

所

ある大都會の山の手

情景

ある大寺の境内なる閻魔堂の内部。夜。蒼明な月光が大なる閻魔の姿をおぼろげに浮き出させて居る。遠き彼方より大都の雜音に交りて笛の音など聞えて來る。秀寛小姓上りと見え美しき雛僧、忍び足にて右の戶口より入り來て周圍を見廻す。

秀寛　何だつまらない。お辨坊はまだ來て居ないんだなあ。ぢやあお經をもつと丁寧に讀むんだつた。仕方がねえや、お閻魔樣の相手でもして居ようかな。

（閻魔と同じく上段に並んで腰をかけて一足で羽目板を輕く叩いて居る。暫くすると閻魔堂に近づく人聲がするので驚いて延び上つて見る。それは若僧の乙、丙、丁の三人であつたので、秀寛はあわてゝ隱れ場所を探し、到頭閻魔の背後に隱れる。三人の若僧左の入口より這入つて來る）

乙　うまく行くだらうか。
丁　了觀の事だから大丈夫だ。
丙　若し彼奴が失敗するとしたら、今夜はおとなしく寢なければならない。
乙　たまには夫もいゝさ。
丙　併し俺は今夜行くと約束したのだ。
丁　俺だつて同じ事だ。
丙　染彌が俺を待つて居るんだ。
丁　俺だつて待つて居る奴がある。
乙　俺だつて待つて居る奴がある。
丙　ぢや皆行かなければならないのだ。
乙　了觀の奴うまくやるか知らん。
丙　大丈夫だ。彼奴はとつくに良心を捨てゝしまつて居る。良心を邪魔がつて居る奴だ。泥棒することを何とも思つて居ないんだ。泥棒を迫害する世間が惡いと云つて

居る奴だ。

丁　もう歸つて來る頃だ。

乙　長老も所化も小姓も、まだ起きて居るんだから、可成り骨が折れるだらう。

甲　（他の一人の若僧法衣の袖に、何物かを隱して、右の扉より這入つて來る）　隨分骨を折らせた。（法衣の下から金色の佛體を取出して三人に見せる）

乙　うまく行つたな。

丙　長老樣は氣が附かなかつたかい。

丁　小姓も役僧も氣がつかなかつたかい。

甲　潰しても二、三度は遊べるぜ。

乙　潰してたまるものか。此のまゝで三十兩は確かだ。

甲　今夜もやつぱり島庄だらうな。彼處なら大手を振つて行けるからな。

丙　併し今夜は早目に引き上げるとしよう。先度のやうに長老樣に疑ぐらるゝといけないから。あの人はまだ他人の行爲丈には良心を働かせることを知つてるから。

丁　なに！　彼奴に俺達を何うする事も出來るものか。彼奴は女のために、大師樣御直筆の波羅密多經を、質に入れて居る。あの事をあばくと彼奴の方が寺に居られなくなる。

乙　俺はそんな事までは知らなかつた。

丁　夫どころか、よく俗緣の姪だと云つて尋ねて來る女だつて、考へて見りや怪しいものさ。

丙　それぢや、長老樣からして腐つて居るのだな。

丁　人ばかりぢやない。佛樣が腐つて居るんだ。長老は長老で女犯を犯して居る。所化や役僧は賽錢をくすねる事ばかり考へて居る。俺だちは俺達で宮垣町花島町へ通つて居る。小姓上りの秀寛はお辨坊と逢曳をして居る。併し御本尊はどうする事も出來ない。佛罰一つ當てることも出來ない。秀寛などは接吻をした口でお燈明を吹き消して居る。

丙　俺達はお經の煙管讀をやつて居る。

丁　人間の腐るのは佛樣が先きに腐るからだ。

甲　いやさうぢやない。人間が腐るから從つて佛樣が腐るんだ。人間が正しかつた昔は、佛樣だつて皆生きて居たのだ。

丁　とにかく、このお閻魔樣を見ろ。俺達が佛體を盜んで賣り飛ばさうとして居るのに、どうともする事が出來ないのだ。

丙　併し隨分恐しい顏をして居るな。

丁　いや恐しい顏丈で、人間の恐れた時代もあつたのだ。金色の光丈で、人間の信じた時代もあつたのだ。併し此頃の人間はさうでない、恐ろしい顏に段々馴れて來たの

だ。見かけ丈ではどうとも思はなくなつたのだ。

乙　ほんたうだ。お閻魔様を恐れるのは婆やにおんぶして居る子供丈だ。あの大きい髑髏も、人間を脅す案山子であつた事が分つてからと云ふものは、からきし駄目になつてしまつたのだ。

丙　もう彼是七つだらう。出かけるとしようか。彼奴が待ち疲れて居るだらう。

乙　（お閻魔様の前に進んで嘲弄的に）偸盗も女犯も妄語もみんな犯して居る者共で御座ります。お閻魔様、地獄へ參りましたらお馴染み甲斐にお手柔かに願ひます。ハハヽハヽヽ。（他の三人も一緒に笑ふ、立ち上りてやゝ芝居がかりに）かう、御願申して置けば、どんなわるい事でも出來ると云ふものだ。さあ、出かけよう。道で何處かの居酒屋で一杯やらうぢやないか。

甲　よからう。

丁　ぢやそろ／＼出かけよう。

丙　（最後に歩み出さんとして、ふと閻魔の顏を振り返りて）おや、今お閻魔樣の目玉がギロリとしたやうだぜ。

甲　乙丙　（一寸驚いたが直ぐ氣を取り直し）何を馬鹿な事を云ふのだ。

丙　（黙つて閻魔を見詰めて居る）……

乙　居酒屋と云ふよりも、裏門前の梅源でコツソリ一杯やらうぢやないか。彼處なら勘定は後でいゝのだから。

甲　其奴は思附きだ。

丙　ぢや、梅源にしよう。

丁　それでもいゝ。

乙　行かう。

丙　行かう。

甲　（ふと手に持つて居る佛體に氣がつき）梅屋へ行くとすれば、此奴が邪魔だな。

乙　それぢや一度引返す事にすればいゝ。其處等あたりへ隱して置くさ。

甲　見附かりはしまいかな。

丁　俺がいゝ處へ隱してやる。皆見て居ろ！（佛體を甲から受け取り閻魔の口の中へ押し入れる）こいつは名高い空洞彫で腹の中には何もないのさ。玆に入れて置けばお釋迦樣でも御存じあるめい。

丙　芳澤小源次と云ふ役者が、そんな臺辭（せりふ）を云つた事がある。

甲　さあ、行かう。

丁　行かう。

丙　行かう。（二三歩、歩き出しながら）一寸かう振返つて見ると、やつぱり恐い顏だね。

丁　いくら恐い顏だつて、俺だちにかう甘く見られちや、

やり切れまいな。ハ、、、、。

（打ち連れて去る。少年秀寛閻魔の肩口より顔を出す）

秀寛　ひどい奴等だな。併し此の俺だつて、ひどくない方でもないなあ。お辨坊が來る迄茲に隱れて居よう。

（暫くの間靜かである。少女お辨。夜目にも白く愛くるしき少女、忍び足にて左の扉より入り來る。この少女さへ少しも閻魔を怖れざる如く、平氣にて周圍を見廻す。最後に右の扉を細目にあけ、本堂の方向を見て居る）

秀寛　お辨ちやん。（少女驚いて逃げんとす）俺だよ、秀寛だよ。（床へ飛び下りる）

お辨　（やゝ蓮葉に）あら吃驚しましたよ。まあ人の惡い。わしやお閻魔様に呼ばれたのかと思つた。

秀寛　お閻魔様と間違はれりや世話はねえ。併し俺だつてお閻魔様よりはいゝ男のつもりだが。

お辨　顏丈はきれいでも、戀の亡者を取つて喰ふ心根は、お閻魔様より上手ぢやないかねえ。

秀寛　今宵は久方振りで、逢つたのだからお互に惡口はよして、つもる話をしようぢやないか。……馬鹿に遲かつたね。

お辨　阿母さんが君若町のお芝居へ行つて、歸りがひどく遲かつたからさ。

秀寛　でもまあ、よく來て吳れたね。

お辨　來ないでどうするものかねえ。昨日、お布施と一緒に包んで置いた手紙は見てお吳れだらうね。

秀寛　之からあんな危かしい藝當はよしにしねえ。

お辨　いゝぢやないかねえ。お前は長老様のお氣に入りで、お布施の包はみんなお前が始末するのだもの。よしんば見つかつて寺を追はれるやうな事があつても、妾の家へ連れ込んで可愛がつて上げる迄の事ぢやないかねえ。

秀寛　併し俺は此寺を出るのは不承知だよ。この大きい智德院が俺の物になる日があるのだからな。

お辨　まあお前も人がいゝ。お稚兒で居た頃に、長老様が嬉しがらせを云つたのを、眞にうける人があるものかねえ。

秀寛　おいお辨坊。この秀寛を甘く見て貰ふまいぜ。得度して、頭こそ丸めて居るが、長老様は俺にかゝつちや傀儡同然だ。見て居ろ、今に智德院の緣の下の塵まで、俺が搔き廻して見せるから。

お辨　まあ、お前のやうな人が住職にならうなら智德院は闇だわねえ。

秀寛　なに！　今より惡くはならないよ。此間やつた錦縮

を見たゞらう、長老様はあんなものを見て樂んで居るのだ。

お辨　まあ！

秀寛　お辨坊にも氣に入つたらうな。

お辨　氣に入つたともさ。肌身離さず持つて居るわねえ。（懐より錦繪を取り出す）この若衆はお前にどこか似て居るやうだわ。小鼻のところや口元がお前に何處か似て居るやうだわ。

秀寛　こりや、お前南都山村座の峰島玉之助と云つて三國一の色若衆さ。

お辨　でも妾はお前の方が、いつそ好きさ。

秀寛　そりや無理もない事さ。俺だつて十一の年には寺方と、菱屋の金剛とで奪ひ合ひをしたものさ。寺方の方が十兩ばかり身の代が高かつたので結局こんな坊主頭になつた。俺だつて野良帽子を着せたら此の都の三十一人の太夫子にだつて負けはしないさ。

お辨　豪氣な事をお云ひだね。

秀寛　まだ前髮で居た頃は智德院の秀之丞と云へば小唄に迄も歌はれたものさ。今だつて抹香なぶりをさせて置くのは全く以て惜しいものさ。

お辨　それぢや。お前は佛様の事などは眞身に考へた事はないんだね。

秀寛　そりや當り前さ。偶にしか佛様を拜まない人には、有難く見えるかも知れねえが、俺のやうに朝夕世話をやいて居ると終ひには、うるさくなつていつそ叩き壞してしまひたくなる。毎日傍に居るものだから、木で拵へてあることがようく分つてしまつて、何う考へ直しても有難くは思へない。人間の中で一番坊主が佛様を馬鹿にして居る。長老様は酒の肴にからすみを喰つた口を洗はずに直ぐ讀經する、若僧なども、毎晩花島町通ひをする。何もしないのはこの俺位だな。

お辨　そのお前がかうして私と逢曳して居るのだねえ。

秀寛　何に！　俺なんか罪が輕いのだ。長老様は妾の外に、姪と云ふ女が幾人も居る。本尊様の掃除をする時などはまるで木の切れ同様に扱ふ。いつも、葬式が來ないと云つてこぼして居る。口癖のやうに奈良屋の隱居が死ねばいゝと云つて居る。あの隱居は永代回向料として千兩寄進することになつて居るからだ。若僧どもと云つたらまた一倍ひどい。今日も寶物の勢至菩薩の尊像を盜み出して、花島町通ひの軍用金にしようとして居る。そしてあることかあるまいことか、お閻魔様の腹中へ隱して置くぢやないか。かうなつちや世も末季だな。地獄の大王様がちつともにらみが利かないのだからな。（閻魔の傍へ寄つてその頰を撫でながら）もつとしつかりなさら

なくちや、ほんたうに駄目ですよ。えゝお閻魔樣。
お辨　お前そんなに寄つちやいやよ。お閻魔樣は若衆好きだと云ふから。
秀寛　何とか云ふ讀本にそんな話があつたつけ。でも此顏ぢや色事が出來るものかね。さんざ一人で見せて上げるのさ。ねえ！　お閻魔樣。（またその頰を嘲弄的に撫でる）
お辨　でもお前は、お閻魔樣がちつとも恐くはないかえ。
秀寛　なぜさ。
お辨　私は何時もは、恐くはないけれど、お前と夢中になつて居る時など、ひよつくりお顏を見ると、ゾツとする事があるわ。
秀寛　俺はそんな事は決してない。十一、二から深い馴染みさ。ねえ！　お閻魔樣。（また頰をちよと撫でる）　お供へのお菓子をくすねて、何時も玆へ持つて來て喰つたものさ。
お辨　お閻魔樣や佛樣は、ほんたうに何をする甲斐性もないのか知らん。佛體を盜み出す者などを、どうかなされぱよいに。
秀寛　序でにお目の前で女犯を犯す曲者を、どうかなされぱよいに。（また頰をちよいと撫でる）
お辨　（やゝ眞面目に）　お前、さうお閻魔樣を馬鹿にしなくてもいゝわ。あんまりぢやないか。
秀寛　何があんまりだ。俺も小さい時には、佛樣やお閻魔樣をエライものだと思つて居たが、始終樣子を見て居ると、何の甲斐性もない事が分つた。長老樣や若僧がどんな惡いことをしても、どうする事も出來ないのだ。俺もこりや喰はせ者だと思つたから、いつかお閻魔樣の顏に唾を吐きかけて見たのだが、罰などは少しも當らない。夫からは木の切れ同樣に思つて居る。さうだらう閻魔、木の切れに違ひなからう。どうだ、夫が口惜しけりや、何とかして見ねえ。おい閻魔！　閻公！　閻吉！（閻魔の頭をポカンと毆る）
お辨　まあ、お前！　そんな勿體ない事をおしでない。
秀寛　なあに、こんな物なんか。（足を揚げて閻魔の腹を蹴る）
お辨　（やゝ恐怖の聲にて）　今お閻魔樣の目玉が、ギロリとしたやうだよ。
秀寛　馬鹿な、そんな氣の利いた藝當が出來るものか。（またポンと蹴る）
お辨　お前大概にして置きよ。わしや何だか氣味がわるくなつて來た。もしお前地獄があつて御覽。
秀寛　坊主稼業をして居る者は、地獄があるなどとは夢にも思つたことがない。智德院で閻魔堂をこさへたのも、

隣りの大順寺の閻魔が藪入の時に、素晴らしく流行るのを見て、長老様が羨しくなつたからだ。つまり小僧の臍繰りをしぼる道具さ。さうだらう閻公！（またポンと蹴る）

お辨　お前もう大抵におしよ。私は何だか寒氣がして、身體がゾク／＼するから。おや御覽！　お閻魔様の目があんなに光つて居るぢやないか。

秀寛（お辨の恐がるのを結局面白がつて）なあに、氣の故だよ。こんな物を恐がるより、横町のむく犬でも恐がるがいゝ。あれならお前、物のはずみで喰ひつくかも知れない。

お辨　でもお前、何時になくお顔が物凄いよ。

秀寛　ぢや、俺にあんまり打たれたので、頭痛がして居るのかも知れない。いや夫よりも、勢至菩薩を喰はされたので腹が病めるのだらう。とり出してやらうかな。（閻魔と同じ段に上り口中に深く手をさし入れ佛體を探す）お前も之からしつかりして、盗品の隱し場所だけにはならぬがいゝ。こんな閻體をしながら、カラ意氣地がねえぢやないか。小僧の臍繰りをしぼるだけが能ぢやないぞ。おや！　喉にひつかゝつて仲々出ねえや。やあい閻公！　口をもつと開けねえか！

お辨　お前、お閻魔様の目玉がギロリと動いたやうだよ。お前もう大概におしよ！　あれ、あんなに目玉が光つて居るぢやないか。

秀寛（剛情に閻魔に向つて）手前もまだ女だけは、恐がらす事が出來ると見えるな。

お辨（著しく恐怖の情を伴つて）おや、また目が動いたよ。

秀寛（尙剛情に）馬鹿な！　おや！　なか／＼出ねえぞ。閻公！　もつと口を開けろつたら。（到頭勢至菩薩の像を取り出す）ひどい事をしやがるなあ。こりやお前、智徳院になくてはならぬ金無垢の勢至菩薩の尊像ぢや。

お辨　妾は、お前があんまりお閻魔様を馬鹿におしだから、何か祟りでもなければいゝがと思つてゐる。

秀寛　そんな氣の利いた閻魔様であつて堪るものか。が、待てよ。此の勢至菩薩を、あの若僧共の花島町通ひの軍用金にするのは、何う考へてもいまいましいな。彼奴等に二束三文に賣飛ばさせるよりか此の秀寛が、そつと隱して置く方が、いくら勝だか知れやしない。（と云ひながら、秀寛佛像を懷の中に入れる。その時、若僧共が微醉を帶び小唄を歌ひながら、歸つて來るのが聞える。秀寛周章しながら）いや、歸つて來やがつた！　さあ、お辨坊！　隱れるのだ。

（閻魔の後に、二人急いで隠れ了る。若僧甲、乙、丙丁歸つて來る）

甲　あゝ、いゝ心持だ。

乙　之から行けば、時刻もいゝ。

丙　細手通を、小唄で行くとはしやれて居る。

甲　おまけに軍用金は、たつぷりとある。（丁に）さあ、手前代物を出して吳れねえか。

丁　おつと、合點だ。（閻魔に近づき口中に手を入れる）おや！

甲　何うしたのだ。

丁　不思議だ。仲々手に觸らねえぞ。

甲　退いて見ろ。そんな馬鹿な事があるものか。（甲、丁に代りて深く探ぐる）不思議だ。全くねえや。

乙　人が來る筈はないなあ。

丙　（稍恐怖を感じたるものゝ如く）不思議だ。半刻とは經つて居ない中に、無くなる譯はないがなあ。

甲　（尙閻魔の腹中を探ぐりながら）狭い腹の中で、無くなる譯はないのだが。（丁に）手前確かに入れたらうな。

丁　確かだとも、皆見て居たぢやないか。

丙　（愈々恐怖を感じ始めたる如く）智德院の附紐閻魔と云つて、昔赤ん坊を喰つたと云ふお閻魔樣だ。

甲　何を馬鹿な事を。（と云ひながら、氣味惡るさうに、閻魔から離れる）

丙　だから、云はない事ぢやない。俺は、初からさう云つたのぢや、幾何何でも勢至菩薩だけは勿體ないと。ありや、お前良然大僧正樣の守本尊で、あらたかな御尊體だからな。いくら末世となつても、あの尊體に手を附けるのは、愼しんだがいゝと俺は初めから思つたのだ。

丁　おい！　お閻魔樣のお顏を見ろ！　凄い顏をして居なさるぜ。俺は何だか氣味が惡くなつた。

甲　何を馬鹿な事を云つて居るのだ。

丙　俺は、何だか身體が顫へて來た。あゝ一刻もこんな處には居たくない。（後退りながら扉の所へ來ると、一散に駈け出す）

丁　俺も、身體がゾク／＼すらあ。お先へ御免だ。

乙　弱蟲だな。が、俺もかうして居られない事があつた。（躊躇して居たが、急に駈け出す）

甲　皆弱い奴等だな。が、俺一人茲に居ても始まらない。（三人の後から續いて逃げ出す）

（お辨、閻魔の後より這ひ出て、逃げ出さんとす。秀寛、後より追縋りて）

秀寛　何を恐いことがあるものか。彼奴等はまんまと俺に一杯擔がれたのだ。

お辨　放してお呉れよ。妾は身體が顫へて仕様がないんだよ。お前の傍に居るのも、何だか恐くなつたのだよ。
（と云ひながら秀寛の手を振り切つて去る）

秀寛　（たゞ一人になつて）　馬鹿な奴が揃つて居る。ハ、ハ、、（と打ち笑ふ。その中に自分の笑ひ聲の空しき反響に、ふと恐怖の念を生じたるものゝ如く）　何だか俺も寒氣がして來たな。（ふと閻魔の顔を見て）　やつぱり恐い顔だ。一人で居ると、身體がゾク／＼して來らあ。何だか薄氣味が悪くなつて來た。どら俺も逃げ出さうかな。（急ぎ足に逃げ出さうとして、ふと懐の勢至菩薩に氣が附き）　あゝこんな物を持つて居ちや、餘計氣味が悪いや。（と云ひながら、佛像を取出し、閻魔の膝の上に安置し終りて、一目散に逃げ出す。その後に甲乙、丙、丁四人歸つて來る）

甲　だから、俺が云はねえ事ぢやない。俺達の後から、お辨坊が逃げ出した所を見ると、確かに閻魔堂で、秀寛の野郎と又逢曳して居たのだ。秀寛の奴をとつちめれば勢至菩薩の行方だつて分らない事はないのだ。

乙　尤もだ。何もお閻魔様を恐がる事はないのだ。
（四人閻魔に近づいて、その膝の上に安置せられたる勢至菩薩の金色燦然たる端嚴の姿を見る）

甲　（驚いて）　あゝ……あつた。

乙　お！

丙　あつた！

丁　ある。

丙　（ある靈感に打たれたる如く）　不思議だ。ちやんと安置してある。何と云ふ尊いお姿だ。

甲乙丁　（茫然と立つたるまゝ言葉なし）

丙　我々の破戒をいましめるために、かゝる不思議を現はし給ふのぢや。俺は、之迄の所業をふつつりと改めるぞ。（蹲まつて、禮拜す）

丁　不思議だ。不思議だ。俺もふつつりと惡いことはしない積りぢや。（跪く）

甲乙　（半信半疑ながら、二人に習つて跪く）……………

――幕――

溫泉場小景

人物

木村健吉　三十四

秋山富枝　二十八

（彼等は曾て戀人なりき）

瑠美子　健吉の女子、七つ

所

東京附近のある溫泉場

時

今日

舞臺

溫泉宿の一室。左は溪流に面して廊下あり。室は八疊の小綺麗なる部屋。木村健吉長身白晳な男。やゝ神經質な顏。出立前と見え、部屋の中を片付けて居る。衣架にかゝつて居る赤い少女の衣類を取つて、無器用な手附で疊んで、トランクの中へ入れる。散らかつて居る繪本を蒐めて、同じくトランクの中へ入れる。一通り片付けた後、自分の浴衣を脫いで、籠の中より紺の上布を出して着る。帶を締めながら、廊下へ出る。

健吉　瑠美子！　瑠美子！

（返事なし。四五步外へ出る）

健吉　瑠美子！　瑠美子！

瑠美子　（聲丈）　はい。

健吉　早く歸つて、おべゞを着換へて支度をしないと、お父ちやん、捨てゝ行くよ。

瑠美子　（同じく聲丈）　待つて頂戴よ。今直ぐ行きますから。

（健吉、滿足らしい微笑を含みながら、部屋へ歸つて來て、籠の中より羽織を出して着る。そして呼鈴を鳴らす。散らかつて居る反古などを拾ひ蒐めて居る。廊下に足音がして女中が來る）

女中　あの、お呼びで御座いますか。

健吉　あのね、これから歸りますからね、勘定をしてね。それから、六時十分の汽車に間に合ふやうに自動車を呼んで下さい。

女中　はい、畏りました。それでは、晩の御飯は召上りませんですね。

健吉　あゝ、御飯はいゝ。汽車の中で喰べるから。

女中　それなら、御ゆつくりなさりませ。自動車は三十分で驛まで參ります。

健吉　（時計を出して）まだ四時半だな。

女中　五時にお立ちになれば、丁度よろしう御座います。まあ、お早いお立ちで御座いますね。もつと御滯在かと思つて居ました。

（女中去る。女中と入れ違ひに、瑠美子バタ〳〵と走つて歸つて來る）

瑠美子　お父ちやん。もう東京へ歸るの。

健吉　あゝ、歸るのだよ。もう、三日で學校が始まるのだらう。それに、お前のあせもすつかり癒つたぢやないか。どら、此方へ來て御覽。（膝の上に抱き寄せて、背中のあせもの樣子を見る）

健吉　やつぱり涼しいと、直ぐ無くなるもんだな。

瑠美子　あのね、おむかうの伯母ちやんに、繪本を見せて上げる約束をしたの。ちよつと、見せて來てもいゝ。

健吉　伯母ちやんなんて、昨日來たばかりの人だのに、はや、そんなに仲よくなつたのかい。

瑠美子　坊や、伯母ちやん大好き。

健吉　どんな伯母ちやんだい。

瑠美子　どんなだか知らないわ。

健吉　どんなだか知らないと云ふ奴があるもんかい。幾つ位になる。

瑠美子　幾つだか知らないわ。でも、お母ちやんと同じ位よ。（子供のくせにすこしセンチメンタルになる）

健吉　うむ。お母ちやんの顏覺えて居るか。

瑠美子　いゝ？　繪本見せて來てもいゝ？

健吉　いゝ。だが、早く歸つて來るんだよ。伯母ちやんに、もう、東京へ歸りますからと云つて、さよならと云つて來るんだよ。

（健吉、子供を膝から下して、トランクから繪本を取り出して渡す。瑠美子受取るとバタ〳〵と駈け出してしまふ。健吉、後姿を見送つた後立ち上り、左に出て溪流を眺めて居る。女中來る）

女中　どうも、有難う御座います。

（健吉、默つて勘定書を受取りて拂ふ）

女中　只今直ぐ、お釣を持つて參ります。（立たうとする）

健吉　なに、僅かだから君に上げよう。

女中　それは、どうも相すみません。

健吉　もう、だん〳〵歸る人が多くなるんだね。

女中　はい、避暑の方は、九月の聲を聞くと、そろ〳〵お歸りになります。

健吉　うむ。十月の末になると、また紅葉見の見物が來るんだね。

女中　孰ちらかと申しますと、紅葉の頃は一等賑ひます。

健吉　さうだらうね。

女中　その頃、又いらしやつていたゞきます。
健吉　うむ。（氣のないやうに）
女中　それでは、どうぞ御ゆつくり。五時近くになりますと、自動車をお呼びしますから。
（女中去る。廊下に瑠美子の笑ひ聲が聞える。秋山富枝、美貌のため二十四五にしか見えない。瑠美子の手を引いて居る）
富枝　お歸りになつたら、伯母ちやんに御手紙を下さいね。
（富枝、健吉の部屋の前まで、瑠美子を送つて來る）
瑠美子　お父さん。今伯母さんから、これをいたゞいたのよ。
（美しい籠を右の手に持つて居る。健吉一寸駭いて、瑠美子を迎へる。富枝に挨拶する）
健吉　おゝ、大變結構なものをいたゞいたのだね。どうも子供がいろ〳〵。どうも、少しも遠慮を知らないお轉婆ですから。
富枝　どういたしまして。ほんたうに、お可愛らしいお子さんですわねえ。お父ちやんお一人丈、東京へ歸して、瑠美子さんは、伯母さんと一緒にお殘りにならないこと。
瑠美子　だつて、お父さんが淋しがるんですもの。
富枝　おほゝゝゝ。まあ、あんな可愛いことを仰つしやる。
健吉　（ふと富枝の顏を見認る。明かな驚駭）　あなた、富枝さんぢやありませんか。
富枝　（駭いて健吉を見直す。そして健吉を見認る）　まあ！
健吉　貴女に、こんなところで、逢はうとは思はなかつた。
富枝　まあ！　おめづらしい。妾、先刻からお聲丈は、なんだか聞き覺えがあるやうに思つて居ましたの。
健吉　實に不思議ですね。世間は廣いやうでも狹いですね。御一緒ですか。
富枝　誰とです。
健吉　むろん、野口と。
富枝　いゝえ。
健吉　まあ、お入りなさい。どうぞ、おしき下さい。
富枝　失禮させていたゞきますわ。
（瑠美子、事件の急激な發展に駭いて、父の傍に寄り添ひながら、呆れて富枝の顏を見て居る）
健吉　瑠美子、駭いたか。伯母ちやんは、お父ちやんの昔のお友達なのだよ。
富枝　ほんたうに、瑠美子さんのほんたうの伯母さんだつたのよ。
（瑠美子、まだ呆れて返事をしない）
富枝　しばらく。本當にしばらく。妾お見忘れしたわ。髯なんかお生しになつて居るのですもの。

健吉　だつて、彼是八九年になるぢやありませんか。その間には髯位は生やしますよ。さう〱、あれが僕が學校を出る一年前だつたから、（指を折つて）足掛九年になりますね。
富枝　（一寸懷舊的な容子で）そんなになりますかしら。尤も、妾こんなお婆さんになつてしまつたのですもの。
健吉　何うして。相不變美しい！
富枝　まあ！　そんなことを仰つちやいやですわ！
健吉　野口君は、御丈夫ですか。
富枝　知りません。
健吉　知らないつて法はないでせう。現在連れ添ふ夫のことを。
富枝　別れましたよ。
健吉　別れた！　野口君と。うーむ、何時です。
富枝　もう、四五年にもなりますかしら。
健吉　うーむ。貴女もあんなに愛して居たのに。野口君の責任ですか、それとも貴女の責任ですか。
富枝　孰ちらの責任で御座いませうかしら。
健吉　別れる……うむ。やつぱり別れるものかな。
富枝　お互に本當の愛を持つて居なかつたのですね。
健吉　（默つて應ぜず）
富枝　それよりも、貴君奧さんは？

健吉　死なれちやつたのです。
富枝　まあ！
健吉　僕の結婚なんか、貴女のやうな戀愛結婚でなく、平凡々な結婚でしたが、でも……
富枝　美しい可愛い奧さんでしたらう。お孃さまが、あんなにお可愛いところを見ると。（瑠美子が、父の膝に腰かけて居るのを見て）此方へいらつしやい！　伯母さんのお膝へいらつしやい。
（瑠美子頭を横に振る）
健吉　然し、野口と別れた貴女に、こんなところで逢はうとは思はなかつた。
富枝　妾もよ。でも何時か何處かで逢へるやうな氣がして居たのよ。
健吉　逢はない方がよかつたかも知れないなあ。過去をして過去たらしめよと云ふことがあるからな。
富枝　まあ！　あんなことを。妾、一度丈は是非ともお目にかゝりたかつたのよ。
健吉　何うして。
富枝　だつて、私あの頃の……貴君にお怨みが云ひたかつたのよ。
健吉　怨まれる覺えはないなあ！　僕こそ云ひたいことがないでもないが。

富枝　みんな貴君の臆病からぢやない？
健吉　何がです。
富枝　妾、そんな氣がするの。私今から考へると、そんな氣がするの。
健吉　僕の臆病から、可笑しいな。僕の臆病が貴女に怨まれる譯があるのですか。
富枝　今になつて、そんな白ばくれるのはお止しなさい。貴君は、野口以上に私を愛して居て下さつたぢやない？
健吉　（一寸狼狽しながら、瑠美子に）瑠美子！　お前ね、お廊下へ出て、お手玉でももつて遊んで居ないかい。（トランクの中からお手玉を取り出す）
（瑠美子、子供心に父と所謂伯母ちやんの妙な境遇に氣が付いて居る如く、父から渡されたお手玉を持つて廊下へ出るが、遊ばないで、その邊に淋しさうに立つて居る）
健吉　貴女は、僕が貴女を愛して居たのが分つて居たのですか。それで居て、どうして野口に走つたのです。
富枝　だつて、その時ははつきりと分らなかつたのですもの。妾半信半疑で、貴君が何か云つて下さるのを待つて居たの……。それに貴君は、臆病で何とも云つて下さらないのでせう。それで居て、妾が結婚するとあんなことをなさるのですもの。妾本當に口惜しかつたわ。貴君の臆病が口惜しかつたのよ。妾、本當に貴君の方を、どれ丈深く愛して居たか分らなかつたわ。
健吉　（一寸感動しながらも皮肉に）釣り落した魚は、大きいと云ひますからね。お互に遂げなかつた愛は、深かつたやうに思ふのです。だつて、野口と結婚した當時は、可なり滿足して居たぢやありませんか。
富枝　さうでせうかしら。そんなに見えたでせうかしら。そんなに滿足して居たものが、わづか三年か四年かの裡に、お互に嫌になるものでせうか。
健吉　僕と結婚して居たら、一年位で嫌になつたかも知れない。
富枝　まあ！　お口がわるくなりましたねえ。でも、お會ひして嬉しいわ。いつか杉山さんに、お目にかゝつたとき、貴君が淀橋に住んでいらつしやることは、承りましたのよ。
健吉　今は淀橋ぢやありません。淀橋に居た頃は、まだ家内が生きて居た頃です。
富枝　何時、お亡くなりになつたのです。
健吉　去年の十月ですから、もう直ぐ一年になるのです。難產で母子ともに、奪られちやつたのです。
（黯然とする）
富枝　まあ！　お可愛相に。

健吉　死んだものは兎に角、生きて居る子供が可哀相です。
富枝　ほんたうに、御同情いたしますわ。
健吉　もう、手は放れて居ますがね、心の生長と云ふ點から云ふと、母親の愛が一番入用な年頃ですからね。
富枝　男手ぢや、さぞお骨が折れるでせうね。
健吉　いや、そんなことは問題ぢやありませんがねえ。いくら骨が折れてもいゝですが、いくら骨を折つても、與へ切れないものがあるのです。父の愛では何うしても與へ切れないものがあるのです。父にはどうしても與へられないもの、母の愛、女性の愛です。いくら僕が可愛がつてやつても、あの子の感じてるある淋しさは、癒すことが出來ないらしいのです。それで、よく婦人の方だと誰にでもなつくのです。
富枝　本當に可愛いゝ、人なつこいお子さんですわね。
（瑠美子、ひそかに部屋には入り、障子に靠れながら、しよんぼり立つて居る）
富枝　（瑠美子に氣付き）ねえ！　瑠美子さん。貴女は伯母さんの子にならない。おいや。おいやですか。
健吉　（冗談の如く）どうだい！　瑠美子、お伯母さんの所へ養子に行かないか。
（瑠美子頭を振る）
健吉　養子に行くのはいやか。

富枝　伯母さんが、お母さんになつてあげませうか。お母さんになるのなら、いゝでせう？
（瑠美子、はにかみながら肯く）
富枝　お母さんになるのなら、いゝのですか。おほゝゝゝ。
健吉　はゝゝ、お母さんになるのは、いゝのか。うむ、お前はお母さんが欲しいのか。
（瑠美子父の膝に靠れながら肯く）
富枝　こんな可愛いお子さんを、本當の愛情で、育てゝ行くことは、それ自身丈でも、どんなに樂しみなものか分らないと思ひますわ。
健吉　（默したまゝ答へず）
富枝　妾にも、こんな可愛い娘があれば、一生獨身で通してもいゝと思ひますわ。
（自動車の警笛の音きこゆ）
富枝　今では、知らない人と再婚するやうな心持は、ちつともありませんし。それかと云つて、職業か子供でもあれば、獨身で通すことも出來るのですが……。
（女中廊下を走りながらは入つて來る）
女中　あの、自動車が參りました。
健吉　（一寸狼狽して）少し待たして置いて下さい。あの、もしかしたら、一汽車延ばすかも知れませんから。とにかく待たして置いて下さい。

富枝　（初て、コケッチッシュな笑を洩して）まあ、妾と久し振にお會ひになりながら、直ぐお立ちになるなんて。一日ぐらゐおのばしになつてもいゝでせう。ねえ、瑠美子さん。伯母さんとゆつくり遊びませうね。

健吉　（意が動いて）さうですね。一日位は延してもいゝのですが……貴女は、お一人ですか。

富枝　えゝ、何が？

健吉　お一人でお出でになつて居るのですか。

富枝　いゝえ、あの……。

健吉　家族の方とですか。

富枝　いゝえ、あの……お友達とです。

健吉　やつぱり、東京にいらつしやるのですか。

富枝　えゝ。

健吉　東京はどちらです。

富枝　あのう、あのう、日本橋區。

健吉　それで、……現在は何をしていらつしやるのです。

富枝　あの、……何もいたして居りませんの。

健吉　野口君と別れたのは何時です。

富枝　大正六年です。

健吉　六、七、八、九、十、足掛五年になりましたね。その間、何をしていらつしやつたのです。

富枝　（一寸笑つて）まあ、そんなことを一々申上げられませんわ。

健吉　（ある感動を持つて）僕は、もし、あなたが昔の通の貴女なら、と云つて、むろん心持の上丈ですが、昔の通のあなたなら、貴女と結婚してもいゝと思ふのですがね。昔の通の貴女なら、瑠美子をお委せしてもいゝと思ふのですがね。

富枝　どうぞ、妾を信じて下さい。

健吉　信ずることの出來る丈の材料を僕に與へて下さい。

富枝　と仰つしやると。

健吉　野口君と別れた後の五年間のことを聞きたいのです。

富枝　（興奮して）その間に、妾が何かわるいことでもしたと仰つしやるのですか。

健吉　いゝえ。でも、獨身の貴女がその間を、何うして暮して來られたか。失禮ですが、貴女のお家には財産と云つたやうなものも……。

富枝　まあ、貴君のお心持の裡には、妾に對する昔の愛が少しも蘇つては居ないのですね。

健吉　蘇つて居ればこそ、こんなことを聞くのです。

富枝　（やゝ泣き聲になつて）妾を信じて下さい。

（女中、再び廊下からバタ／＼と駈け込んで來る）

女中　あの、自動車はお返しいたしませうか。今お立ちに

ならないと、六時十分の汽車にお間に合ひませんから。

健吉　（しばらくの間沈默。心が悶えて居るのが分る。決然として）發ちますから、此のトランクを運んで下さい。

（富枝無言。女中のトランクを運び去ると共に、わーと泣伏す。瑠美子それにつれてベソを掻く）

健吉　（瑠美子の頭を撫でながら）伯母さんに、お泣きになつてはいけないと云つておいで……ねえ、富枝さん。昔の戀人同志が温泉宿で偶然逢ひ、そのまゝ淨く別れたと云ふことにして置かうぢやありませんか。今結婚したところで、九年前の貴女でもなく、九年前の僕でもありませんからね。此の情景を、不快な家庭生活の序幕にするよりも、破れた初戀の大詰にして置かうぢやありませんか。瑠美子！　伯母さんに、左樣ならと仰つしやい。

瑠美子　（やうやくベソを掻いたのが恢復して）左樣なら。

富枝　（泣き止む。そして目をこすりながら、立ち上る。そして、ヒステリックに笑ふ）おほゝゝゝ。まあ！　妾いやにセンチメンタルになつてしまつたのですわね。さあ！　瑠美子さん。いらつしやい！　伯母ちやんにお玄關まで、手を引かして下さい。

（健吉、夏外套を着、先に廊下に出る。富枝、瑠美子の手を母の如く曳きながら、それに從ふ）

――幕――

順番

人物

吉原一郎　二十六歳、狂人
その弟二郎
その弟豐　中學を出たばかりの少年
武田　豐の友達
兄弟の伯父眞崎　五十五六の老人

所及時代

四國の北の海岸にある城下町。明治四十年頃のこと。

舞臺の情景

此城下町に殘つて居る小數な士族の家の一軒である吉原の家の表座敷。疊や襖などは古びて居るが、此家が昔は相當に裕福であつたことが、何からともなく觀取される。座敷の左手に廊下があつて、その廊下に接して作られて居る座敷牢の格子の一端が、見えて居る。此家の長男の一郎が、その中に入れられて居て、時々思ひ出したやうに、意味不明な叫び聲を揚げる。右手に二階に上る階段が見えて居る。長押に槍が二本掛けられて居る。幕が開くと、此家の三男の豐が、右手縁側に近い所に机を置いて、勉强をして居る。暫くすると、次男の二郎が、左手からそゝくさと這入つて來る。奥の庭か何處かに居たものらしい。豐、兄の顏を見て、

豐　兄さん！　大きい兄さんが、やかまし云うて勉强も、何も出來やせん。

二郎　(豐の言葉を、耳にも入れないやうに、默つたまゝ、行き過ぎようとする)……。

豐　もう、試驗に十日しかないのに、困るなあ。かう、勉强が出來んで……此の頃は、大きい兄さんの病氣が、募つとるけに、高坂さんにでも、見せたらえゝ云うて、お母さんが云ふとるのに、何うして見せんの。

二郎　(一寸階段に足をかけながら、立ち止つて)　あなゝ藪醫者に見せたつて、氣狂が、癒るもんか。やかましいのが嫌なら、氣狂の弟にやこし生れて來るな。(と云ひ捨てたまま二階に上つてしまふ)

豐　(激昂して何か云はうとしたが思ひ止つたらしく、いまいましさうに兄の後を見送りながら)　何ぢや！　小ひさい兄さん迄が、氣が變になつて居る。無茶な事を云ひよる。

（机に改めて向ふが、暫らくは何も出來ないやうに、ヤケに本の頁をめくつて居る。暫らくすると、戸外で「吉原君」と、呼ぶ聲がする。）

豐（耳を聳てながら）誰だい！　武田君かい！　這入らないかあ。

（「這入つてもえゝかい！」と云ふ聲がして、豐の友達武田は這入つて來る。豐と同じ位の少年、紺飛白の衣物を着て居る）

武田　失敬！

豐　失敬！

武田　何うや。もう調べは濟んだかい。

豐　いゝや。やつと幾何と代數を濟ましたばつかりぢや。昨日から三角にかゝつとるんぢやけど、仲々間に合ひさうもない。

武田　けど、君の調べはもう二度目なんぢやらう。僕は、初めてゞ、まだ諳記物にちつとも手を付けて居らんのぢや。

豐　諳記物なら僕だつて、同じぢや。それに、兄さんが此間中から、容體が惡うて、騷ぎ廻つて仕様がないんぢや。勉强どころぢやないんぢや。落着いて何も出來やせんのぢや。

武田　困るなあ。ちつとも、好うならんの。

豐　氣が違うたら、ちつとの事で、癒りやせんからなあ。この頃は、夜通し叫びよつて、ロク／＼寢られやせんのぢや。靜かにして居るかと思ふと、想ひ出したやうに狂ひ廻るんぢや。

武田　そりや困るなあ。

豐　實際、何を云うても、相手が氣狂ぢやけに、何うする事も出來んのぢや。僕も、入學試驗にうまくパスして、東京へ行つてしまひたいなあ。こなゝ家に居ると、堪らんからなあ。

武田（話頭を轉じようとするやうに）君は、もう行く準備が出來たの。

豐　試驗の五日前位に、向うへ着くやうに、此の三日に發たうと思つとるんぢや。

武田（懷から教科書を、取出して頁をめくりながら）今日、僕は君に幾何を一つ教へて貰はうと思つて、來たんぢや。問題が一つ解らんのぢや。

豐　あゝ、えゝとも。

武田　百二十二頁の問題五十九、面積の定理なんぢや。

豐（武田から、本を受取りながら）面積は、やつぱり一番難しいなあ。あゝこいつか。こいつなら解つとる。

（豐、說明しようとして居る時、玄關の開く音がして、伯父の眞崎、默つて這入つて來る。瘦せた男。豐

と顏を見合はすと、豊一寸お辭儀する)
豊　伯父さん、お母さんは居らんかい。
眞崎　豊、お母さんは居らんかい。
豊　居らん。用があつて、藤野へ行つた。
眞崎　二郞は居るかい。
豊　居る。二階に居る。
眞崎　また酒を飲んどりはせんか。
豊　何うか。わしや知らん。
(眞崎二階へ上つて行く。一郎の叫び聲、頻りに聞え始める。武田いぶかしげに眞崎を見送つて)
武田　誰れ、今の人。
豊　眞崎云うて、僕の伯父さんぢや。(幾何の本の圖を、指で辿りながら、前より元氣のない聲で)此の問題はかう考へたら、直ぐ解るんぢや。ほら、此の弦の上の正方形と、半徑OBと、半徑OCとで、包む矩形とが等しくなるぢやらう。從つて、此の三角形の面積と、此の正方形の面積とが同じになるんぢや。
武田　あゝさうか〳〵。解つた〳〵。僕はこの弦の上の正方形と云ふことを、ちつとも氣が付かなんだのぢや。こなに頭が惡いと、今年はとても駄目かも知れん。
(二階で、眞崎と二郞の云ひ爭ふ聲が、段々高くなつて來る。それに連れて、座敷牢の中の一郎の叫び聲も、劇しくなつて來る。豊、不安な顏付きになりながら、友達の手前を繕つて何氣ない顏をして、モヂ〳〵して居る)
武田　(當惑したやうな顏をして、居たが)あゝ、僕は失敬しよう。君の勉強の邪魔をしたら、惡いから。ぢや君が發つのは三日ぢやのう。僕は、岡山ぢやけに二時間もあつたら行けるけに、前の日位にゆつくり行かうと思ふとる。ぢや、さやうなら。
豊　もう、歸るんか。まだえゝぢやないか。もつと、話して行つてもえゝぢやらう……氣の違つて居る者も、氣の違つて居らん者も、掛合でやかまし云ふとる。
武田　(氣の毒さうな顏をしながら)また、ゆつくり來る。いづれ、君が發つ前に、ゆつくり會はう。君も晚方にでもやつて來んか。
豊　あゝ、行かう。きつと、行かう。
武田　ぢや、さやうなら。
豊　さやうなら。
(豊、武田を送つて、右手へ行く。直ぐ歸つて來る。二階の爭ふ聲は、極端にまで、激しくなつて居る。眞崎が、座を立つて、降りて來る氣勢がする)
眞崎　(階段に下半身を見せながら、極度に激昂した調子で、聲高く)阿呆め！　お前のやうな道樂者に、此の吉原の家を潰されて堪るもんか。伯父さんは、外の家を

繼いで居るが、生れた家の大事なことは、ちやんと知つとる。吉原の家は、今でこそ貧乏しとるけど、御家老の上席を勤めた立派な家柄ぢやぞ。お前見たいな阿呆に、やみ〳〵と潰されて堪るもんか。豐と云ふ、よう出來た立派な子供もあるんぢや。お前やこしに勝手にされて、堪るもんか。（怒鳴りながら、階段を降り切つてしまふと、今度は豐に）豐！　お前にも、一寸云うて置くが、今度兄さんを準禁治産にすることに定めたからな。今度はお前が、此家の心棒になつた積りで、しつかりせないかんぜ。

豐　（伯父の劍幕に、茫然して居たが、やゝ落着いて）何うしてそなゝ事をするの。兄さんが、どなゝ惡いことをしたの。

眞崎　お前は、子供ぢやけに、何も知るまいが、兄さんはひどい事を、やつとるんぢやぞ。ひどい散財を續けて居るんぢや。家の道具や掛物を、手當り次第に持出して、賣飛ばして居るんぢや。此家の寶物の雪村の山水迄、もう、とうに無しになつとるんぢや。あれは、吉原の家では、何よりも大切な御拜領の品なんぢや。それに、この頃では、國座にある田地迄、賣らうとしとるんぢや。あれを賣られて見い。お母さんやお前や、それに氣狂ひの一郎迄明日から何を喰べて行くんぢや。五千圓もあつた公債も、もう一枚も無しにしとるんぢや。此儘にして置いたら、少しばかりの吉原の財産は一たまりもないんぢや。一郎のやうな一生飼ひ殺しにせないかん病人を控へて居る上に、之から修業に出ようと云ふお前があるのに、兄さんに無茶をされて堪るもんか。

豐　（涙ぐみながら默つて聞いて居たが、漸く顏を上げて）けど、なんぼ使うても、兄さんのお金ぢやけに兄さんの勝手ぢやないかしら。大きい兄さんが、あゝなつとるんぢやけに、此の家の物はみんな、小さい兄さんの物ぢやないかしら。

眞崎　お前迄、そなゝ阿呆な事を云ふとる。二郎のやうな道樂者よりも、なんぼ吉原の家の方が、大事なか知れやせん。それに、二郎は、此の頃少し氣が變になりかけとる云ふ噂ぢやぞ。此間も片原町の料理屋で、藝者や女中の前で、一圓札を三枚燒いて見せたとか云ふことぢや。まるで阿呆か氣狂のする事ぢやないか。そなゝ阿呆らしいことを、させて置けるもんか。お前も、もう直きに東京へ行くのなら、しつかり勉强して二郎のやうな阿呆な眞似をするな。吉原の家は、もうお前ばかりが賴みぢやけに、しつかりせんといかんぞ。お前の學資を送るにしても、兄さんを今のまゝにはして置けんのぢや。

豐　（蒼白な顏をしながらも、ある落着は失はないで）そ

れて、兄さんは承知したの。

眞崎　承知するもせんも、あるもんか。今も放蕩を止めればよし、止めなければ、準禁治産にする云うても止めんと云ふんぢやもの。

豐　それで、お母さんは何と云ふの。

眞崎　お母さんは、無論承知しとる。お母さんが何うかして吳れ云うて、俺に泣き付いて來たんぢやもの。それに、二郎は此の頃、家に居ても、容子が變ぢや云ふぢやないか。

豐　僕は、さう思はんけど。

眞崎　お母さんの云ふのには、夜中に魘はれたやうに、時時跳ね起きたり、夜通し二階を歩き廻つたりする云ふぢやないか。まあ、何しろこの家は、お前が賴りぢやけに、しつかり勉强して吳れないかんぞ。氣狂の兄さんも、お母さんも、みんなお前が見て上げな、いかんのぢやからな。

豐　（暗然としながら默つて居る）……。

眞崎　（歸りかけようとしながら）お前が學校へ這入る前に、ちやんと片を付けて、學資の心配のないやうにしてやるけにな。入學試驗はしつかりやるんぢやぞ。伯父さんけ、これで歸るけに、お母さんが歸つて來たら、ようと云ふといて吳れ。

（眞崎歸る。豐見送つて直ぐ歸つて來る。机の上に顏を伏せたまゝ、しばらくぢつとして居る。一郎の叫び聲、相變らず暗澹な響を家中に漲らせる。やがて、階段に、足音がして二郎が二階から、降りて來る。眼が血走つて居て、先刻の興奮がまだ消えて居ないことを示して居る）

二郎　（稍怒聲を含んだ聲で）豐！

豐　何んや。

二郎　禿頭は、もう去んでしまうたんか。

豐　眞崎の伯父さんは、今去んだぜ。

二郎　お前に、なんぞ云ひはせなんだか。

豐　云ふとつた。兄さんを、準禁治產にするとか云ふとつた。

二郎　（全く自棄的に）何にやと、するがえゝわ。そなゝ事にする前に、此の家の財產はびた一文も殘らんやうに、使うてしまうてやるけに。

豐　（反抗的に）そなゝ事云うて、お金が一文も無しになつたら、大きい兄さんやお母さんは、何うするんぢやらう。

二郎　眞崎の禿頭が、何うにかするぢやらう。口癖のやうに自分の生れた家は、大事ぢや大事ぢやと云ふとるんぢやけに。

豐　（益々反抗的に、兄の方に向きながら）兄さんは、何うしてそなゝ無茶な事を云ふやうになつたんぢややらう。さうなつたら、俺の學資は、誰が出して呉れるんぢややらう。

二郎　（弟の反抗に對抗するやうに劇しく）そぢやけに、兄さんが何時も云ふとる。學問やこしやめてしまうたら、えゝんぢや。

豐　（奮然としながら）無茶な事を云ひよる。兄さんは、自分が高等學校の入學試驗に落第したもんやけに、俺にも這入らせたくないんぢややらう。俺は、もう二三日したら、東京へ行かうと思ふとるのに兄さんがそなゝ無茶なことを云ひ出すんぢやもの、困つてしまふのう。（涙ぐんで居る）

二郎　（冷淡に）學問やこしして何うする氣ぢや。吉原の家に生れた者は、學問なんかするのはやめとけ。

豐　兄さんは、學問にお金を使ふよりも、お茶屋で使ふ方がえゝと、思ふとるのかのう。兄さんが、家の少しの財産を使うてしまうたら、氣の違うた兄さんや、年の寄つたお母さんは何うして喰べて行くのぢややらう。お母さんや大きい兄さんが、路頭に迷ふやうになつてもかまはんと思ふとるのか知らん。それに、兄さんやて、準禁治産や云ふことになつて、自分で世間に風が惡いと思はんのか知らん。

二郎　（捨鉢な口調で）俺は何になつたつてかまやせん。

豐　俺は、もう直ぐ東京へ行かう思ふとるのに、兄さんがそなゝぢや、學問も何もする氣がせん。學資やつて、續かないのに、定まつて居るからのう。（興奮して泣いて居る）兄さんは、小學校の時から、ずつと品行方正で、中學の四年の時には、縣知事さんから、品行方正學力優等の褒狀を貰うたのを忘れたのか知らん。

二郎　……………。

豐　兄弟三人の中では、小さい時から、二郎が一番大人しい云うて、お母さんが、口癖のやうに、人に話して居たのを、兄さんは忘れたのか知らん。その兄さんが、こなな無茶な事をするんぢややけに俺や口惜うてならん。（頻りに泣いて居る）

二郎　（前よりはやゝ沈痛になつて、默つて弟の云ふことを聽いて居る）……

豐　大きい兄さんが、あなになつてしまうたし、お父さんはないし、俺は兄さん一人を頼りに思ふとるのに、その兄さんが、こなゝぢや、わしは此先何うしてえゝか判りやせん。

二郎　（稍眞面目な聲で）まあ、そなに泣くのはやめとけ。俺やつて、面白うて遊んどるんぢやないぞ。

豐　面白うなうて、何うして遊ぶんやらう。そなゝ理窟に合はんことがありやせん。

二郎　俺は、その譯を云ひたうは無いんぢや。人に云うたつて解らん事ぢやからな。

豐　兄さんは、家を潰すやうな事をしながら、その譯が云へんのか知らん。云へん筈ぢや、お茶屋で散財をするのに、譯があつて堪るもんな。あなに眞面目な、敬虔なクリスチヤンであつた兄さんが、田島のやうな不良少年と一緒になつて、新地へやこし遊びに行くんぢやもの。俺や、見て居る丈でも辛い。友達にやつて、合はせる顏がない。それとも、なんぞ深い譯でもあるんなら、云うて下さい。弟に云へん云ふことはないでせう。

(豐は、しやくり上げながら、熱狂して兄に詰め寄せて居る。二郎は、やゝ蒼白な顏になつて、默然と聽いて居る。折々、座敷牢の中に居る一郎の鋭い叫び聲が、合の手か何かのやうに、聞えて來る。しばらく沈默が續く)

二郎　(眞面目な沈痛な顏になつて)俺は、その譯をお前に云はん積りぢや。が、俺は眞面目でお前に云ふんぢや。學問やこしやめて、小學校の先生になつたら何うぢや。

豐　(前よりも一層興奮して)阿呆な！　兄さんが、學資を出したくないなら、俺も出して貰はんでもえゝ。俺は中學校へ這入つてから、三番と席順が下つたことはないんぢや。小學校の先生をせならんほど、自分の頭を惡いとは、思ふとりはせん。兄さんが學資を出して呉れんのなら、出して貰はんでもかまやせん。苦學でも何でもするんぢや。俺は身體だつて、他人に負けるとは思つとらん。

二郎　(弟の熱誠に動かされたやうに)お前は、何うしても學問がしたいのか。

豐　そなゝ事は訊かんでも判つとる。兄さんは自分が、上の學校へは、這入れなかつたもんぢやけに、俺が這入るのを邪魔するんぢや。お茶屋で二三千圓も、費ふとりながら、弟の學資が出せん云ふ理窟がありやせんもの。

二郎　(豐と同じ位に、興奮して)おい、豐！　俺がお前の學校へ、這入るのを邪魔するなんて、俺はそれほどさもしい兄ぢやないんぢやぞ。俺がお前に學問をするなと云ふのも、自分が滅茶苦茶に、遊んどるのも、皆譯があるんぢや……(暫らく沈默した後)お前には、聽かせたくない思ふとつたけれど、肉身の弟から、あなゝさもじい兄ぢやと思はれては、俺も堪らんし、それにお前は、もう東京へ行くんぢやけに、今話して置かんと、一生話せんかも知れんけに、今話して置かう。豐！　お前

は、俺達のお父さんが、何で死んだか知つとるか。

豐　知らん！　お母さんに訊いても、敎へて吳れんもの。

二郞　お父さんが死んだ時は、お前はまだ二つぢやつたから、知らんのも無理はない。が、兄さんはもう五つだつたから、薄々知つとるんぢや。お父さんは、彼處の格子の中で死んだんぢやぞ。

豐　（蒼白になりながら無言で合點く）……。

二郞　兄さんの座敷牢は、二番目なんぢや。いや二番目どころか、此の家ぢや、此の吉原の家ぢや、三番目か四番目か、判りやせん。お父さんの座敷牢も、兄さんが今居る座敷に、作へてあつたんぢや。お前は、大工が兄さんの座敷牢を作へる時に、此部屋には一度格子を入れた痕があると云うたのを忘れたのか。お父さんや、兄さんばつかりぢやないんだ。お父さんのお父さんは、女中の顏が鬼に見えた云うて、手打にしてから、氣が狂つたんぢや。お父さんの姉さんも、嫁入先で、氣が狂つて離緣になつて歸つてから、長い間彼處に居たらしいんぢや。而も俺達のお父さんは、尋常の死方をしたんぢやないんだ。あの格子の中で、首を縊つて死んだんぢやぜ。而も、その首を縊つた帶は、此の兄さんの帶なんぢや。俺が、自分の帶を、あの格子の前に落してあつたのを、お父さんが格子の中から拾ひ上げたんぢや。俺は、その時から、子供心に自分の身に付き纏つて居る呪ひを、薄々感づいたんぢや。

豐　……。

二郞　俺達のお父さんも兄さんも、獸のやうにあなゝ檻の中に、追込まれたんぢやぜ。そなゝお父さんや兄さんを持つた者が、安閑として居れると思ふのか。此の次の順番は、誰だと思ふんぢや。

豐　（默つたまゝ俯むいて居る）……。

一郞　自分の意識が、何時狂ひ出すか判らないのに、落着いた仕事が、何が手に付くと思ふかい。死刑を宣告せられた人間が、毎日々々殺されやしないか、殺されやしないかと、恐ろしい恐怖と焦慮の裡に、一日々々と過して行くのと同じやうに、俺も何時狂ひ出すか、何時狂ひ出すかと思ふと、片時もぢつとして居られないんぢや。死ぬのなら、まだえゝ。死ぬのは、外聞が惡いこともないからなあ。死ぬことも出來ないで、而も死んだと同じ身體になつて、獸か何かのやうに、あの座敷牢の中で、一生狂ひ廻ることを考へて見るがえゝ。杞憂でも、何でもありやせん。目前の事實なんぢや。現在血を別けた俺達の兄さんが、俺達の目の前で、毎日々々手本を見せとるんぢや。俺は、兄さんを見て居ると、一年先の俺、いや一年どころではない半年先、いや一日先の俺の姿をマザ

マザと見せられて居るやうで、立つても坐つても居られんのぢや。お前は、兄さんが高等學校の三年の時に氣が狂うて、眞崎の伯父さんに連れられて、東京から歸つて來た時の事を、覺えて居るぢやらう。俺は、あの時兄さんの姿を一目見ると、その時迄忘れて居たお父様の記憶が、アリ〳〵と蘇みがへつて來たんぢや。その間に、俺は此次の番は自分ぢやなあと思ひ出してからは、もう何も手に付かんのぢや。お前も知つとるぢやらう。大きい兄さんの氣が違うたのと、俺が墮落し始めたのは、丁度同じ時ぢやつたらう。眞崎の伯父さんやこしは、大きい兄さんが氣が狂うたので、俺が吉原の後繼になつたけに、遊び出したんぢや云ふけども、そなゝ阿呆らしい事ぢやないんぢや。その後の兄さんの煩悶は、お前も少しは思ひ當ることがあるぢやらう。大きい兄さんのあの聲を、毎日々々聽いて居ると、命が一寸々々縮んで行くやうな氣がするんぢや。あの聲を聽きたくないばつかりに、外へ飛び出すやうになつたんぢや。

（一郎の叫び聲、斷續して聞える）

豐　（默然として、眼に一杯涙を湛へながら、聽いて居る）……。

二郎　俺はこの事はお前に話したくはなかつたんぢや。折角、何も知らんで幸福なお前の心を、腐らすにも當らんと思ふとつたけにぢや。が、小ひさい時から、仲のよかつたお前から、卑しい兄だと疑はれるのも情けないし、それにお前はもう直ぐ東京へ行くと云ふし、わしは續け樣の放蕩の報いで、身體も段々衰弱したし、ぢつと何か考へ詰めて居ると、頭に靄がかゝつたやうに、ぼんやりとしてしまふので、お前と正氣で話すことも、之が最後かも知れんけに、何もかも云うてしまうたんぢや。氣の弱い、心の小さい兄さんは、此の恐怖を紛らすために、無茶もした。亂暴もした。之からもする積りぢや。酒でも飲まなけりや、ぢつとして居られんのぢやからのう。もう、此の頃では、自分で自分の頭が、頼りにならんやうに思はれて、いつ氣が狂ふか、判らんやうな氣がするんぢや。一層のこと、早く氣が狂うてしまへばえゝと、思ふとる位ぢや。無茶や亂暴を續けて、早う氣狂になつて、しまひたい位ぢや。

（二郎、興奮して半狂亂のやうになつて居る。二郎のさうした心持ないよ〳〵脅かすやうに、一郎の聲が段段激しくなつて來る）

二郎　兄さんのあゝ云ふ聲を、聞いて居ても、お前は何ともないんか。たゞやかましう云ふので、勉強が出來んと云ふ丈か。

豐　……………。

二郎　俺は、お前の學資が惜しいで、お前に學問をするなと、云ふとるんぢやないんぢやぜ。學問をした兄さんは、たつた二十一で氣が狂うたんぢやぜ。俺は、兄さんと違うて頭が惡うて、學校へ這入れなんだお蔭で、まだかうして、何うかかうか正氣で居られるんぢやぞ。俺の考へぢや、お前は俺と違うて元氣がえゝし、小學校教員でもして、呑氣に暮して居れば、一生恐ろしい運命に出會はんでも、濟むかも知れんと思ふとるんぢや。眞崎の伯父さんは、お父さんの弟ぢやけど、小ひさい時から學校が嫌ひで、あなゝ商賣をして居るけに、今迄も平氣で居れるんぢや。が、お前が飽くまで、勉强する云ふんなら、するがよからう。お前の學資にやる積で、公債で千五百圓だけは、ちやんと別けてあるんぢや。兄さんが持つてるよりも、お前にやつとくから、自分で保管しとるがえゝ。

豐　（兄が怖れて居たほどの激動も受けず、兄が思つたほどに、失望も落膽もして居ない）　兄さんは、餘りくよ〱思ひ過ぎるんぢや。お父さんや大きい兄さんが、氣が狂うたとしても、俺達までが、氣が狂ふとは定まつとりやせんからのう。そなに、病氣になりやせんかと心配するのは、ヒポコンデリイ云うて、一種の病氣ぢやないかしらん。

二郎　（自分の述懷が、弟にあまり深い感銘を與へないのを、少し失望したやうに、同時に欣んで居るやうに）　お前が、さう思ふとれるのなら、それで幸福ぢや。わしはもう長いことはない思ふとる。

豐　（兄を勵ますやうに元氣よく）　兄さんのやうに、心配しとつたら、一日ぢやつて、生きとられやせん。どなゝ人ぢやつて、何時死ぬか判りやせんのぢやものなあ。第一、兄さんのやうにそなゝ無茶をして、家の財産は一文も無くなるし、兄さん迄氣が狂うてしまうたら、大きい兄さんやお母さんは何をするんぢやろ。

二郎　俺が、氣狂ひになつた後の事は、心配して呉れんでもえゝ。氣が狂つてしまへば、死骸も同然ぢやからなあ。大きい兄さんと一緒に、兄弟揃つて狂ひ死に死んでもえゝ。お母さん丈は、眞崎で世話はするぢやらう。

豐　（極めて元氣よく）　俺は、自分の頭が狂うたりしようとは思はれん。俺は、中學へ這入つてから、數學が得意で、幾何でも代數でも、一問題でも、しくじつたことはないんぢや。俺の此の頭が、狂うたりしようとは、夢にも思はれん。

（一郎の叫び聲愈々劇しくなる）

二郎　あゝひどい！　あの聲を、聞いて居ると、ぢつとしては居られないやうな氣がする。あの聲を聽いて居る

と、大きい兄さんが、俺に早く狂へ〳〵と催促をして居るやうにしか思はれんのぢや。お前には俺の苦しみは解らんのぢや。何時、狂ひ出すかも知れんと云ふ俺の不安は、お前には本當に解らんのぢや。が、お前には解らんのは却つて仕合せぢや。お前はしつかりやつて呉れ。兄さんは金のある丈正氣の中に、使うてしまふ積りぢや。俺が氣が狂うてしまうたら、お母さんは伯父さんの家へ預けとけ。大きい兄さんと、俺とは捨て置いてもえゝ。決して、かまうて呉れるな。どなに、扱はれても同じことぢやからな。

豐　俺は、自分の頭を、飽くまでも信じとる。けど、兄さんの心持も解らんことはない。

（一郎の叫び聲、益々烈しくなる）

二郎　それならえゝ……お母さんを賴んだぜ。

豐　うむ。

（兄弟相對して暗然として考へ込んで居る。一郎の聲、續け樣に聞える）

二郎　（今迄の暗澹たる話から、話頭を轉じようとするやうに）お母さんは、何處へ行つたんぢや。

豐　わしが、發つ前に、一度赤い御飯をたいて、親類の子供達を、呼ぶ云ふとつたけに、その案内に行つたんぢやらう。

（一郎の叫び聲、急に激しくなつて、鋭い大聲が、家の中に響いたかと思ふと、急におとなしくなつて、低いうめき聲が聞えて來る）

豐　（立ち上りながら）大きい兄さんの今の聲は、少しをかしいなあ。何うしたんぢやらう。

（立つて、座敷牢の方へ行く）

豐　（姿は見えないで）あつ！　兄さん、來て下さい。大きい兄さんが大變ぢや。あつ！　血が！　血！

二郎　（急に蒼白になりながら、而も行かうとはしないで）何うしたんぢや。何うしたんぢや。

豐　（周章てながら）早く鍵を。鍵を。兄さんが咽喉を突いて居る、鋏で、花鋏で。

（狂亂のやうになつて、歸つて來る）

二郎　（戰きながら、而も冷靜に）え……俺が玆は引き受けた。お前は、早くお母さんを呼んで來い。

豐　（息をはずませながら）兄さん、お醫者さんを呼んで來なけりや。

二郎　（それには相手にならないで、顫へながら興奮して獨言のやうに）醫者を呼んで來て何うするんぢや。癒したつて……癒したつて……。早く行つて、お母さんを呼んで來い。

豐　（取亂した調子で、兄の云ふことを、うつゝに聞きな

がら）あなに刄物に氣を付けとるのに、何うしたんぢやらう。花鋏やこしを、誰が持たしたんぢやらう。（疑惑と叱責の眼付とで兄を見る）

二郎　（叱り付けるやうに）早うお母さんを、呼んで來いつたら。

豐　（いら／＼しながら）それよりも早う戸をあけて、鋏を取上げて下さい、兄さん。

二郎　（尙座敷牢の方へは行かうとはしないで）えゝわ、俺がすると云うたら。お前は早うお母さんを呼んで來いつたら。

豐　（兄の態度に明かに反抗しながら）お母さんを呼んでから、高坂さんに來て貰ひませう。

（豐、玄關の障子を音高く開けながら、馳け出す。一郎のうめき聲、全く絕えてしまふ）

二郎　（少し狂亂じみて）高坂を呼んだつて、あなゝへボ醫者を呼んだつて。（座敷牢の方へは行かないで、部屋中を不安らしく早足に歩き廻りながら）兄さんは、それでも片づいたんぢや。今度は俺の順番ぢや。場所は空いたからな。

――幕――

敵討以上（三幕六場）

「恩讐の彼方に」脚色

人物

中川三郎兵衞　淺草田原町に屋敷を持てる旗本の士。五十歳位。

中川實之助　その子。嫡子。第一幕にて四五歳。第三幕にて、廿六歳。

市九郎　最初の幕にて、中川家の仲間。第二幕にて强盜になつて居る。第三幕には坊主になつて居る。

お弓　最初の幕にては、三郎兵衞の愛妾。第二幕にては市九郎の妻。

旅行せる若き夫婦

馬士權作

石工、百姓、百姓の娘など

時代

江戸時代。安永から延享へかけての出來事

場所

第一幕…江戸。第二幕…木曾山中。第三幕…耶馬溪。（假に後代の稱呼に從ふ）

衣裝と道具に就て

衣裳は吳服店の廣告人形に著せるが如き、仕立て下しの華美なるを避けたし。溫雅にして、目立たざるほどよろし。第一幕の大道具も、小成金の住宅の如く安手に新しきを避けたし。

第一幕

江戸田原町中川三郎兵衞の邸。安永三年の秋の初、月夜の晚。

最初、幕の中にて「おのれ！　不埒者奴！」と云ふ烈しい怒號と、太刀が鞘走しる音と、バタバタと云ふ足音がした後幕が上る。幕上れば、中川三郎兵衞の家の離座敷。左手に竹垣あり。其の上にやゝ遠く母屋が見える。前栽には秋草が生えて居る。左と正面とが廻緣にて圍まれたる座敷。左寄りに床の間あり。床の間には鎧櫃が飾られて居る。床の間の橫には、茶箪笥が置いてあり、茶箪笥の右には、二枚折の屛風が立てゝある。幕の開いた時、半白の頭をした三郎兵衞は、太刀

を振翳して、市九郎を一刀兩斷にしようとあせつて居る。市九郎は緣の柱を楯にして、逃がれようともがいて居る。妾のお弓は、そつと屛風の後の襖を開いて、其處から逃げ延びようとする積りらしい。

市九郎　（必死な懸命な顫へを帶びた聲で）御容赦なさりませ。不義ではムりませぬ。毛頭不義ではムりませぬ。

（さう云ひながら、逃げ路を物色して居るのであるが、庭には垣根が周らされて居る上、若し庭へ下りると、相手に太刀を振ふ自由を與へさうなので、必死に柱を楯に取つて居る）

三郎兵衛　（沈痛な而も必死な聲で）申すな。申すな。此期に及んで、命を助からうなどと未練者奴！

市九郎　無實でムりまする。無實でムりまする。大それた……。お部屋樣と、そのやうな……。大それた事を……

三郎兵衛　くどい！

（飛び込み樣、柱を避けて打ち下す。市九郎身を躱して右に避く。三郎兵衛、太刀を引いて、右より斬り下ろす。市九郎左に避く。）

三郎兵衛　（いらつて）面倒なつ！

（柱を廻る。市九郎も、それに從つて、グルグル三四回周りし後、市九郎遂に柱より追ひ退けられ、庭に下りて一周り逃げ廻る。が、垣根の柴折戶は、鎖されて居る。若し開けようとすれば、後から浴びせられるのは必定なので、また引き返して、三郎兵衛をやり過して、座敷へ飛び上り襖より逃れようとするとき、ふと置いてある燭臺に手がかゝる。其處を三郎兵衛が、追ひ縋つて肩口に薄手を負はせる）

市九郎　あゝつ！（悲鳴を擧げると、思はず燭臺を手にして立向ふ。燭臺の灯消えて、周圍は月光に照らされた薄暗になる）

三郎兵衛　おのれ！　主に手向ひ致すか。不埒者奴が！

（前よりも、もつと烈しく斬りかゝる。數合の凄じき打合あり。市九郎追ひ詰められて、危くなる。三郎兵衛の太刀先遂に市九郎の小鬢を傷つける）

市九郎　おゝつ！（悲鳴を擧げて、決死の形相となり、猛然として戰ひ始める。まづ燭臺を相手に抛げ附ける。その尖端が、三郎兵衛の面部を打つたため、三郎兵衛タジタジとなつてひるむ。その暇に、市九郎は帶びて居る脇差を拔き放つ。無言の必死な決鬪が始まる。三郎兵衛の太刀は、時々天井を掠めるので不利である。切合ひながら、二人とも緣側に近づく。先づ緣側に出た市九郎は、不覺にも足を滑らして片膝を付く。三郎兵衛得たりと、斬り下ろさうとしたが、あせつた爲め誤つて、緣側と座敷の中間に垂れて居る鴨居に深く切り込む。市九郎天の助け

とばかり片膝をつきながら、横に敵の脇を拂ふ。三郎兵衞悲鳴を擧げながらよろめき倒れる）

（市九郎魂の拔けたるごとく、緣側にへたばつてしまつて低い呻き聲を出して居るばかりである……二三分の間、死にかゝつて居る三郎兵衞と市九郎のうめき聲が聞える外、舞臺に何の動作もない。市九郎は、漸く顏を上げて、まだピク／＼動いて居る主人の死體を見て居る。それが、ピタリと動かなくなると、急に悔恨の情に驅られたるものゝ如く、脇差を取り直して、腹を寛ろげようとする。その時、座敷の隅の屛風が搖れる。お弓の顏が現はれる。蒼白で、身體は、ガタガタと微かに顫へて居るが、さうした內心の恐怖を、努めて隱さうとして居る）

お弓　（市九郎の自殺しようとするのを、尻目にかけながら）ほんたうにまあ、何うなる事かと思つて心配したよ。お前が眞二つにやられた後は、追つゝけわたしの番ぢやあるまいかと、屛風の陰で、息を凝らして見て居たのさ。餘程逃げ出さうか、逃げ出さうかと思つたのだが、斬られさうになつて居るお前への義理もあつてね。が、ほんたうに命拾ひだつたね。お互樣に、惡運が盡きないんだよ。かうなつちや、一刻も猶豫しては居られないから、在金をスッカリさらつて、高飛びをする事だね。まだ母家の方では、氣が附かないやうだから、支度をするのは今の裡だよ。さあお前、在金を探して見ようぢやないか。

市九郎　（女が喋舌つて居る間に、何時の間にか、自殺を思ひ止つて居る。が、まだ茫然として途方に呉れて居る）あゝ飛んでもねえ事をしてしまつた。大それたお主殺しだ。

お弓　（男の云ふことを相手にしないで）お前、述懷なんかの暮ぢやないよ。男らしくもない。さあしやんとおしよ。わたしは身支度をして來るから、お前はお金を探しておくれよ。

市九郎　あゝ飛んでもねえ。お主殺しだ。お主殺しだ。磔のお主殺しだ。

お弓　（市九郎を引き起すやうにしながら）一刻を爭ふ九死の場合ぢやないか。さあ、早く支度するのだよ。

（市九郎女に操らるゝ如く、立ち上り、三郎兵衞の死骸を遠く避けながら、茶簞笥に近づきて探し始める。血の手形が、桐の白い木目にところ／＼ベタ／＼と附く。お弓次の間へ行つて暫くして風呂敷包みを持つて、直きに歸つて來る）

お弓　幾何あつたの。

市九郎　（聲を落しながら）二朱銀の五兩包みが、たつた

一つさ。

お弓　（自分で茶簞笥に近よりながら、中を引つ掻き廻す）こんな端金が、何うなるものかね。鎧櫃を探して御覧！　軍用金とやらを、入れてあるかも知れないよ。

市九郎　（前よりは、やゝ元氣になつて、鎧櫃を開けて、鎧を持ち上げて振つて見ながら）　玆もからつぽだ！

お弓　（いまいましさうに）　名うての始末屋だから、瓶にでも入れて土の中へでも、入れてあるのだらうよ。急場の間には合やしない。さあ、大抵のところで、切り上げて、人目にかゝらない前に、行くとしよう。

（市九郎、血に汚れた手を、手水鉢にて洗ひながら帶をしめ直す）

お弓　（ふと三郎兵衛の死骸に、目をやりながら）　之でも、二年近くも、お世話になつた旦那だ！　どら、一寸拜んで行かう。（立ちながら片手を上げて拜む）

市九郎　（默つたまゝ跪いて、死骸に向つて兩手を合せる）

……

（二人行きかゝる）

お弓　裏門の鍵は持つて居るだらう。

市九郎　お役目だ。腰から離した事はねえ。

お弓　お誂向きだわねえ。（艶然と笑ふ）

（月光は益々冴えて居る。二人が柴折戸をあけて出かゝると、母屋の方で乳母が歌ふ聲がする。「お月樣いくつ。十三七つまだ年や若い。油買ひに茶買ひに！」いたいけな男の子の聲が、それを繰り返して歌ふ）

市九郎　（柴折戸を出ようとして、男の子の歌ふ聲にぢつと聞きとれる）　あゝ、坊つちやんだ！

お弓　（柴折戸を出ながら）　お前さん！　何をぼんやりして居るんだよ。（と強く男の手を引く）

（二人去つてしまふ。月の光の裡に、母屋の方で何歌ひつゞけて居る裡に、靜かに幕）

第二幕

第一場

木曾街道鳥居峠にて、市九郎とお弓とが營める茶店の店先。第一幕より三年の後。藁葺の大なる家、右手半分は土間になつて居る。左手半分は壁になつて居る。壁にも入口が附いて居る。土間には、草餅、羊羹、乾柿など並べてある。二つの細長き腰掛あり、障子には、そば、かん酒と書いてある。背景は、一面の杉林。家を覆うて、一株の老櫻あり。蕾がふくらみ始めて居る。幕開くと、馬士の權作、家の横手の杉に馬を繋ぎ、腰掛に腰をかけながら、店の奥に向つて次の如く話して居る。

權作　かう姐御！　さう因業なことを、云はんと置け。勘定は勘定、商賣は商賣ぢやねえか。この春先の景氣で、一儲けすりや、滯りの勘定位はキレイさつぱり拂つてやらう。さあ、文句は云はねえで、淸く一本つけて吳れねえか。

（答なし）

權作　かう姐御！　さう意地わるくするもんぢやねえ。勘定と云つたつて、高が一兩か、一兩二分かだらう。もう少し旅の衆が出盛つて見ねえ、それつぱかしの目腐れ金は、二日か三日の働き高ぢやねえか。

お弓　（姿は見えないで）お前さんが、稼いだ金を神妙に妾の家へ持ち込むやうな御仁だつたら、五兩でも十兩でも文句を云はずに、貸して上げるわさ。二分はおろか二朱の金でも手にすると、藪原へ行つて安女郞を買ふか、チヨボ一ですつてしまふ外、能のねえお前さんぢやないか。

權作　（怒つて、腰掛を離れながら）利いた風な事を、ぬかしやがるない。手前達のやうな惡黨夫婦が、お天道様の眞下で、恐れ氣もなく暮して行けるのは、何方樣のお目こぼしだと思つて居るのだい。へん忘れもしねえ、一作年の秋の彼岸の翌くる日さ。藪原の宿の手前で、人殺しがあると云ふから行つて見ると、殺されて居るのは六十ばかりの旅の年寄さ。可哀さうに、衣類から道中差まで、スツカリ浚はれて居る後に、落ちて居るのが煙草入れさ。年寄持の品ぢやねえと、心を止めて見ると駭いた。何處かに見覺えのある品物さ。よく／＼見ると、見覺えのあるのも道理、木曾山中ぢや滅多に、見られない江戸細工の煙草入さ。

お弓　（まだ姿を現はさないで）その話でお前さんは、何度酒にしたか分らないぢやないか。さう云ふなら妾の方でも云ひ分があるんだ。月日は、お前さんのやうにハツキリとは覺えて居ないが、何でも去年の夏の事さ。拔け參りが流行つて、此の街道筋を、唐笠に道中杖一つの道者達が、ひつきりなしに續いた時さ。日暮方に、まだ十六七の小娘が、シク／＼と泣きながら駈け込むから、家へ入れて容子を聞くと、駭くぢやないか。鳥居峠の登り口で、行き合はせた馬士に手籠めに遭ひ、路用の金をそつくり持つて行かれたのだとさ。その馬士の人相を聞いて見ると、眉毛が芋蟲のやうに太くつて……。

權作　（苦笑ひをしながら）へゝん！　その話なら、此方から附け足したい事があるんだ。泣きながら、駈け込んで來た小娘を、深切ごかしに騙かして、福島の茶屋女に叩き賣つたのは誰だつたのだ。

お弓　お前ばかりに、うまい汁を吸はれて堪るもんか。お前さんが、上手に出りや此方だつて上手に出るのだ。だ

がなあ、權作さん。「狐獲られて狸安からず」と云ふ諺を、お前聞いたことがあるかい。妾、常々さう思つて居るんだよ。萬一暗い處には入るやうなことがあつたら、可成連れの多い方がいゝからね。お前さんや、あの奈良井の辰藏なんて云ふ人は、さうしたお交際もしてお吳れだらうね。

權作　（去らうとして）　脅かしやがるない。俺なんか何んなにヒドイ目にあつても、高々永牢だ。お前さん夫婦のやうな獄門首と、並べられて堪るもんか。（憤然として馬を解いて去らんとす）

お弓　（初めて土間の方へ現れて、權作の飲みたる茶碗を片づけながら、）　權作さん！　お茶代を置く金もないのかい。

權作　（いま／＼しさうに）　口のへらない女郎だな。

（鈴の音をさせながら去る。やゝ月並なれども、權作の歌ふ木曾節を聞かせてもよし。お弓、茶道具を神妙に片づけて居る。この時、左の入口より、市九郎生欠伸をしながら出て來る。第一幕よりも、やゝ險兇の相を帶び、古びたる黄八丈の着物に三尺帶を締めて居る。お弓、夫を見ると荒々しく）

お弓　もうお前、八つを廻つて居る時分だぜ、なんぼ用がない身體だつて、あんまりぢやないか。少し性根を入れ更へて、おつゝけ一仕事してお吳れでないと、お鳥目だつて、いくらも、殘つて居やしないんだよ。

市九郎　（やゝ不機嫌に、お弓を見返しながら）　あたゝかいお天道樣だな。もう、スツカリ春だな。

お弓　（腰掛に腰をかけて休みながら、煙草を喫ひ始める）　何を吞氣な事を云つておいでだ。長い／＼冬籠りで、去年の秋に稼いだ五十兩も、幾何も殘つて居やしないんだよ。お前と妾とで、日に二升近くも御酒をいたゞくんだから、無理もないんだが。

市九郎　（頭を垂れながら）　その故でもあるめいが、此の頃は何うも頭が重くつて、氣がめいつていけねえ。春先の生あたゝかいのが、却つて身體に惡いのかも知れねえなあ。

お弓　（もどかしさうに）　そんな事よりも、お前さん。いい鳥のかゝり次第しつかりして吳れなきや、いけないよ。

市九郎　おい煙草を一服吸はして吳んねえ。

（お弓、自分が喫つて居た煙草と煙管を、市九郎に渡す。市九郎入口の横の壁を背にしながら蹲まつて、煙草を喫つて居る。若い旅の夫婦が近づいて來る）

若き夫　あゝもう、藪原の宿が、見えてもよささうだな。

若き妻　麓では一里も登れば、目の下に見えると云うて居りましたが。

若き夫　疲れはしないかい。
若き妻　いゝえ。
若き夫　茶店がある。一服して行かう。
（お弓二人を見ると、滿面の笑みを以つて迎へる）
お弓　さあ、何うぞ、おかけなさいまし。さぞお疲れでムいませう。此街道は山坂ばかりでムいますのに、お足弱がお連れでは、さぞ不自由でムいませう。
若き夫（妻と共に、腰をかけながら）此峠は、街道一の切所ぢやと聞いたが、もう之からは下りでムいませうな。
お弓　はあ〳〵、もう下りでムいますとも。御覽あそばせ。あの谷が開けて、麥畑が擴つて居る所がムりませう。
若き夫（延び上りながら）なるほど。
お弓　あの眞中にある松並木が、藪原には入る街道でムります。ほれ〳〵、あの夕日に光る大屋根が見えませう。あれが宿の入口にある妙本寺と云ふ寺でムります。
若き夫　なるほどな。もう二里とあるまいな。
お弓　二里は愚か、一里と少しでムりますな。ゆつくりお休み遊ばしても、暮六つ前には、樂にお着きになれまする。
若き夫　藪原の名物はお六櫛、たしかさうでありましたな。
お弓　さうでムりまする。お歸りの道中では、たんとお買ひ遊ばしませ。

（此間、お弓は茶を饗し、菓子を出す。若き妻は、折折市九郎を氣味惡く振り返る）
お弓　時に、何方迄の旅でムりまするか。
若き夫　左樣、伊勢參宮から、京へ上つて、名所めぐりをする積りぢやが、時宜に依つては、大和へも廻らうかと思つて居ります。
お弓　日數から云うても、お費用から云うても、結構な思召立でムりますな。それにしても、お供の衆が見えませぬが。
若き夫　何處へ行つても、さう云うて、不審を打たるゝのぢやが、有樣は心利いた下男を伴うて出たのぢやが、松本のお城下迄參ると、急に病み附いたので、代りの者を呼ぶのも費なので、その儘宿屋へ殘したまゝ、立つて來ましたのぢや。
お弓　水入らずの方が、結局氣樂でムりませうな。
若き夫（妻を見返りて、意味もなく笑ふ）一休みしたほどに、さあ行きませう。もうほんの一息ぢや。
お弓　まあ、ごゆつくりなさりませ。日は高うムります。
若き夫　早う宿屋に着いた方が、何かに附けて、便宜ぢや。これはいかい雜作になつた。お茶代は玆へ置きまするぞ。
（去らうとする）
お弓　有難うムりまする。お返りに、是非お立寄りなさり

ませ。それでは、道中御無事に。
（お弓、しばらく二人を見送つて居る。市九郎は、漠然として煙草を喫みつゞけて居る。お弓急に氣が附いたやうに、奥へ馳け入つたかと思ふと、市九郎の脇差を持つて、馳け出して來る）
お弓　（刀を夫の肩の邊へ、差し付けながら）　さあ！　お前さん！
市九郎　（空とぼけたやうに不機嫌に）　な、な、何をするのだい。
お弓　（少し語氣を荒らげて）　おとぼけぢやないよ。仕事だよ。大切な仕事ぢやないか。
市九郎　（厭な顔をしながら）　何だ！　あの人達をかい！　思ひやりのねえ。（お弓を跳ね退けるやうに立ち上る）
お弓　何が思ひやりがねえのだい。お前さんこそ、思ひやりがねえぢやないか、妾が、先刻から、何うかして、少しでも長く引き止めようと、あせつて居るのに、アツケラカンと煙草なんか喫つてさ。さあ！　ぐづ／＼して居ないで、オイソレと行つておいで。
市九郎　（やゝ強く）　おらあ、厭だ！　相手にもよりけりだ。あゝした樂しさうな夫婦者を、とつちめるなんて、いくらかうした稼業でも、餘り罪作りだからねえ。
お弓　お前さんのやうに、年寄は厭だの、子供は嫌ひだの、夫婦者はいやだのと云つて居た分には、此方とらの商賣は上つたりだよ。佛心のついた盜賊位、厄介なものはありやしない。……お前さんも考へて見るがいゝ。妾だつて昔は滿更捨てた女でもなかつたのだよ。馬道小町とまで、淺草界隈で、人に騒がれた妾が、木曾の山奥まで流れて來て、山猿同様のしがねえ暮しをして居るのも、一體誰の爲だとお思ひなのだえ。みんなお前さんといふお主殺しの惡黨を、亭主にして居る爲ぢやないかえ。
市九郎　（首をうなだれたまゝ默つて、つゝ立つて居る）……
お弓　お前さんのお交際をして上げる代りにはさ、日に三度々々のおまんまと、好きなお御酒は文句なしに飲まして呉れる位の分別はして呉れても、滿更罰も當るまいぢやないか。
市九郎　（やゝ憤然として）　大きな口を利くぢやねえ。手前に云ひ分がありや、俺の方にだつて云ひ分はあるんだ。中川様のお邸で、年期を無事に勤め上げて、御家人の株でも、買つていたゞかうと、御主人大事に勤めて居た神妙な俺を、迷はして、おそろしや！　お主様を手にかけさせたのは、一體何處の何奴だと思つて居るのだ。
お弓　（あざ笑つて）　ふゝん！　面白くもない。妾に迷ふと迷ふまいと、妾の知つたことぢやないぢやないか。そんな過ぎさつた昔のことを、クヨ／＼思ひ暮すより、毒

を喰はば皿と云ふぢやないか。おいしい酒でも、浴びるやうに飲んで居たいわね。どうせお主樣を、手にかけた、此の脇差ぢやないかい。今更人、一人二人助けたつて、罪の輕くなるお前さんぢやないだらう。……（やゝ相手を宥めるやうに）それに、あの人達をやつてしまはなけなばいけないと云ふのぢやないよ。打ち見た所まだ世間を知らねえ豪家の若旦那らしいから、荒療治をしなくたつて、白刄で脅しさへすりや、身ぐるみ捲き上げるのは、雜作もない事ぢやないかえ。考へて御覽！　五十兩百兩と纒まつた金を懷にした旅馴れないお客樣は、さう續々と通るものぢやないよ。それに私のほしいのは！　あの女の方が著て居た小紋縮緬さ！　妾もあんな著物に偶には手が通して見たいわさ。

市九郎　（漸くお弓から、脇差を受け取りながら）　鬼の女房に鬼神と云ふが、手前の方が惡黨は二三枚上だ。仕方がねえ、行つて來よう。

お弓　（市九郎の背をポンと叩きながら笑つて）　いやな人だねえ。屈託顏なんかしてさ。

市九郎　酒を持つて來い。冷でいゝから。

お弓　行つて來てからにおしな。おかんをして置くから。

市九郎　持つて來いといつたら。

お弓　（奥へ入つて不承不承に酒を持つて出て來る）　可哀さうだなんて思つてゐると、兎角どぢをやるもんだよ。

市九郎　（無言にガツ／＼と樽の口からむさぼり飲む）　ああ、苦い酒だ。（樽を地に抛ちながら急いで去る）

お弓　（後を見送りながら）　お伊勢まゐりから、京上り。さういふ長い旅なら、五十兩は間違ひない。（急に身顫ひをさせながら）　日が入りかけると、まだ寒い。（山寺の鐘の音が聞えて來る）　おや、もう暮六つの鐘かしら。

（幕靜かに下る）

第三場

前場より、一刻ばかり過ぎたる後。前場と同じ場所。同じ家。前場の舞臺を右に轉じたるが如き舞臺。茶店の奥の部屋。左にも入口あり。戸外には月が出て居る。お弓はたゞ一人蓮葉に坐りながら、三味線を取出して爪彈きをして居る。が、幕が上ると、直ぐ絲が切れるので、亂暴に放り出してしまふ。煙草盆を引き寄せて自棄に煙草を喫ひつゞける。

市九郎登場する。小脇に衣類を束にして、かい込んで居る。時々後を振り返る。自分の家に近づくと、ホッとしたやうに、入口の敷居に腰を下す。

お弓　（耳聰く聞き附けて）　誰！　誰！　お前さんかい！　市九郎さんかい！

市九郎　（默つたまゝ返事をしない）……

お弓　（立ち上りながら）誰！　誰！　（障子を開ける）何だ！　やつぱりお前さんぢやないか。そんな所に、ぐづ〳〵して居ないで早くお上りよ。思ひの外に早かつたねえ。

市九郎　（上へ上る。が、やつぱり默つたまゝ居る）

お弓　首尾は？　上首尾？　（市九郎の持つて居る衣類を、取上げて見ながら）おゝ無傷だねえ。お前さんもよつぽど仕事がうまくなつたねえ。おゝ、いゝ紋縮緬だね。いくら品がよくつても、血がはねて居る著物なんか、いくら姿だつて、禁物だが。さあ、ゆつくり、お寛ぎよ。ちやんとおかんもつけてあるから、一杯飲みながら、話を聞かうぢやないか。

市九郎　（蒼白な顔をしながら、默つたまゝ座に着く）ああ、疲れた――。

お弓　あゝお前さん、またくよ〳〵して居るんだねえ。やつぱりやつてしまつたのかい。その方が、いつそ片がついてキレイさつぱりだよ。

市九郎　（頻に重く頭を振りながら）あゝ、いけねえ。追ひ脅し丈で、命は助けてやらうと思つたが、女の方が血迷つて、「あれ茶店の亭主だ」と口走るものだから、仕方なしにやつてしまつた。あゝ何だか腹の底が、底力がなくなつた。あゝ一杯ついでおくれ。

お弓　それでお前さん。お鳥目はいくらだつたのだい。

市九郎　（懐から、二つの胴卷と、男物と女物との財布を出しながら）道中を心配したと見え、夫婦で別けて持つて居たのだ。まだ勘定して見ねえが、手答へぢや四十兩だな。

お弓　どれ、お見せ。（其場へ浚ひ出しながら）小判が三十枚に二分銀が二十枚、二朱銀が三四十枚あるよ。ザツト五十兩。近頃にない豐年だね。（衣類を膝の上に乘せながら）それに衣裳が嬉しいわねえ。緋縮緬の長繻袢に、繻珍の晝夜帶だね。（ふと氣が附いたやうに）一寸お前さん。頭の物は何うおしだえ。

市九郎　頭の物？　頭の物とは何だい。

お弓　さうだよ。頭の物だよ。あの女の頭の物だよ。

市九郎　（默して答へず）……

お弓　紋縮緬の著物に、緋縮緬の長繻袢ぢや、頭の物だつて擬ひ物の櫛や笄ぢやあるまいぢやないか。妾は、先刻あの女が、菅笠を取つた時に、チラと睨んで置いたのさ、玳瑁の對に相違なかつたよ。

市九郎　（默したまゝ答へず）……

お弓　（のしかゝるやうになつて）お前さん！　まさか取るのを忘れたのぢやあるまいね。玳瑁だとすれば、七兩

や八兩が所は、たしかだよ。あんな金目のものを、取つて來ないなんて、馳け出しの泥棒ぢやあるまいし、何の爲に殺生をするんだよ。あれ丈の衣裳の女を殺して置きながら、頭の物に氣が附かないなんて、お前さんは何時から、かうした商賣を、お始めなのだえ。どぢをやるにも、程があるぢやないか。何うお思ひなんだえ。何とか云つて御覽よ。

市九郎 （苦々しげに）むごたらしい事を云ふぢやねえか。身ぐるみ剝がして來たのだから、髮かざり丈は、せめて女のたしなみに、冥土まで附けさせてやつたつて、滿更罰も當るめえぜ。

お弓 へゝん、利いた風なお說法はよしなさいよ。あのまま捨てゝ置きや、野伏せりの乞食位が濡手で粟の拾ひ物になるぢやないか。さあ、一走り氣輕に取つておいで。

市九郎 （女に對する烈しい憎惡を起しながら） 女は女同志、男は男同志と云ふことがあるが、手前も殺された女の身になつて見るがえゝ。少しは女同志で可哀相とは思はねえのかい。

お弓 （嘲笑的に） ほゝう。鬼の眼に淚とは、よく云つたものだ。そんなに可哀さうなら、その豆しぼりの手拭でグツとやらなければいゝのに。

市九郎 （ゾッとしたやうに、自分の腰に下げた手拭を取りはづしながら） あゝ、つく／＼かうした仕事が厭になつて來た。

お弓 それもどぢな仕事をやるからだよ。四の五の云はずに、さあお前さん！ 一走り行つておいでよ。夜に入つたら、犬の子一疋通らない街道筋だ。まだその儘になつて居るのに違ひないから、一走り行つて來るんだよ。折角、此方の手には入つたものを、遠慮するには當らないぢやないか。又遠慮する柄でもないぢやないか。

市九郎 （默々として應ぜず）……

お弓 おや！ お前さんの仕事のアラを拾つたので、お氣に觸つたと見えるねえ。くどいやうだが、本當に行く氣はないんだね。十兩に近い儲け物を、みす／＼ふいにしてしまふ積りだね。

市九郎 （默々として答へず）……

お弓 いくら云つても行かないのだね。それぢや、私が一走り行つて來ようよ。場所は何時もと同じ處だらうね。

市九郎 （吐き出すやうに） 知れたことよ。藪原の宿の手前の松並木さ。

お弓 （立ち上つて、裾をはし折りながら） ぢや、一走り行つて來よう。月夜で外はあかるいし……本當に世話のやけるお泥棒だ。（庭へ降り、草履をつゝかけて行かんとす）

市九郎　(振り向いてギョロリと女を睨みながら)　手前、本當に行くのかい。

お弓　行くのが何うかしたのかい。

市九郎　惡事にも程があるもんだぜ。

お弓　(戸外へ出ながら)　へん、大きな世話だ。あゝ、いい月夜だ。(小走りに去る)

市九郎　(立ち上つて)　あゝ、到頭行つてしまひやがつた。(戸外へ出る)　熊笹を分けて走つて居る恰好は、人間ぢやありやしねえなあ。死體につく狼のやうだな。(しばらく跡を見送つた後、蹌踉として家に入る。膳に附いてあつた德利を取つて、一氣に飲み干す)　あゝ魔だ。俺にくつ憑いて居る魔だ。(頭を抱へしばらく身をもだえる。ふと傍にあつた男物の衣類に目を附け、觸つて見た手を灯に透かして見る)　血だ。やつぱり血が附いて居る。(茫然として前方を見詰め)　グツとやつた時に、あの白い二つの手が蛇か何かのやうに、俺の手に捲きつきやがつた。あゝ堪らねえ。(不快な記憶を拂ひのけんとし、身もだえする。しばらくして、ふと氣が附いたやうに)　さうだ。彼女の歸らない中だ。(立ち上つて、押入より二三枚の衣類を取り出す。手早く風呂敷に包む。ふと女が膳の横に置いて行つた盜んだ金の財布に目が附く。懷に收める)　あゝ百年の戀も醒めてしまつたな。(急ぎ足で戸外に出る。ふと、懷の金に手をやる。立ち止まつて考へる。二三歩後戻りして考へる。到頭憤然としてとつて返し)　汚れた金だ！　(つよく家の中に投げ込む。財布より飛び出た小判は燦然たる光を放つて、家の中に散亂する。市九郎は一散に走り去る)

——幕——

第三幕

第一場

第二幕より、二十年餘を隔てし延享二年の春。所は、九州耶馬溪靑の洞門(便宜のため後代の稱呼を用ふ。)洞門の入口。右手に岩石が、削られて、山國川の流の一部が見えて居る。他は、舞臺一面稍灰色を帶びた岩壁、岩壁の中央に、高さ三間横四間位の洞穴が口を開けて居る。周圍には小さい石塊が、ごろ／＼落ち散つて居る。川に寄つて杉の若樹が數本生えて居る。岩壁の端れを、棧道が危く傳つて居る。鎖を力に渡る鎖渡しである。幕が開くと、やゝ身分のあるらしい老人、物賣の女、馬を連れた百姓が、危げに鎖渡しを順次に渡つて來る。渡つてしまふと、皆舞臺にて暫らく休息する。

老人　(ホツトしたやうに石に腰かけながら)　年に一度、

宇佐の八幡樣へお參りの心願を立てたのもえゝが、この鎖渡し丈は、いつも／＼命がけの難所ぢや。この頃は、風も吹かいで棧も掛けかへたばかりで新しいから、命の心配はないものゝ、年寄には、足元が危うて、危うて。

物賣の女　妾などは、樋田郷のもので、毎日一度は通ひ馴れて居りますけれど、雨の日で棧の滑る時とか、風で棧が搖れる時には、ほんまに命がけで御座んすのう。

百姓　（馬を引きながら、漸く棧道を、渡つて來て）あゝ、大骨を折らせたな。中途で、暴出すまいかと思つてビクビクものぢやつたわい。

物賣の女　（百姓に）作藏さん。ほんまに、氣を附けないかんぜ。馬を連れる時は、ほんまに危いけに、去年の柿坂の新右衞門さんのやうに、馬諸共に、ころげこむと命が無えからのう。

百姓　（冗談に）せめて、お前との相對死ぢや、浮名も立つけれど、馬と相對死ぢや、ほんまに犬死ぢやけにな。

（洞窟の入口から、石工が二人石塊を擔つて出て來る）

百姓　やあ、庄どん。えらう、精が出るのう。ちつとは捗が行つたかのう。

石工の一　（石塊を下し、その上に、腰かけながら）俺が來た時とちつとも變つて居らんわい。相手が大盤石の岩ぢやけに、半年や一年で物の十間と、彫れはせんわい。

百姓　さうぢやらう。さうぢやらう。俺などは初は針の穴からお天道樣をのぞくほどの、及びも附かぬ仕事ぢやと思つて居つたのぢや。それにしても感心なのは、了海樣の御辛抱ぢや。初めは、氣違坊主ぢやの騙りぢやなぞと、俺などは若い時には了海樣の後から、小石の一つ二つは、ぶつ喰はしたことがあるのぢや。が、あの御辛抱には、みんなが頭を下げてしまつたのぢや。郡奉行樣から御褒美が下つてからは、石工の數も倍になつたと云ふのう。

石工　今日日ぢや、八分通りはくり貫いたから、もう一息ぢや。了海樣は、此頃は夜もロク／＼枕には就かれぬのぢや。

老人　わしも、何うかして此の刳貫が出來る迄は、生き延びて居たいと思ふのぢや。此の向ぢや、わしの願ひも叶ひさうぢや。

百姓　山國七郷の百姓が、今では頸を長うして出來るのを待つて居るのぢや。わしも植附でも濟んだら、今年もお手傳ひしようと思つとるんぢや。了海樣丈に働かせては、冥加が恐ろしいからのう。

（此の時、下手より又數名の百姓登場す）

百姓の二　（洞穴の入口に行きて、耳を聳てながら）あゝ、深うなつとるのう。之でも、二三年前までは、鎚の音が口まで聞えて來たものぢやが。

百姓の三　深うなつとる。深うなつとる。俺はもう一年半と云ふ見込で、隣村の林八と賭をしたが、此の向ぢやわしの勝だな。
百姓の四　太い野郎ぢやのう。了海様が、土にまみれて、働いてムらつしやるのに、罰が當るぞえ。
百姓の三　なに、了海様は了海様で、俺は自分の罪亡しにして居ることぢや。お前たちが恩に被ることはないと、口癖のやうに仰しやるぢやらう。
百姓の四　何の罪滅しの爲だけに、こんなどえらい事が、出來るものか。みんな衆生濟度と云ふ御本願があるからぢや。俺も、暇になつたらお手傳ひぢや。
百姓の三　僞を云へ。お前は、毎年お手傳ひぢやと云ひながら、一度も鎚をとつたことはないぢやらう。
百姓の四　お前だつて、同じ事ぢやないか。
（百姓達が話して居る間に、實之助登場する。質素なる旅姿、木綿の旅合羽を着て居る。洞穴を見ると、やゝ興奮した體にて、周圍の地形を見、右手に行く鎖渡しを見て引き返し洞穴の中を見る。此の間百姓達の注意を引きつゝあり）
實之助　（漸く百姓の二に話しかく）卒爾ながら、少々物を訊ねる。此の洞窟の中に、了海と申す出家が居るさうぢやが、しかと左様か。
百姓達　（口々に）居らないで何うしようぞ。了海様なら、此洞窟の主同然の方ぢやわ。
實之助　左様か。それなら、尙訊ねるが、年の頃は、およそ何程ぢや。
石工の一　（いぶかしげに未知の武士を見ながら）了海様なら、もう五十を越した方ぢや。やがては六十に手の屆く方ぢや。
實之助　（落着いて）生國は、越後柏崎ぢやと聞き及んだが。
石工の一　へえ、何でも雪の澤山降る國ぢやと云ふことで。
實之助　若年の折、江戶で奉公いたしたとは聞かなかつたか。
石工の二　あゝ、聞いたことがある。俺に一度江戶の淺草觀世音の繁昌を語つて下さつたことがある。
實之助　（漸く緊張しながら）よくぞ敎へて吳れた。して、この洞窟の出入口は、玆一ケ所か。
石工の一　ほう、それは知れたことぢや。向うへ口を開けるために、了海様は塗炭の苦しみをして居られるのぢや。
實之助　奧行は凡そ幾町ぞ。
石工の二　そんなことを訊されて、何にせらるゝのぢや。
實之助　（少しく思案して）了海殿とやらに、御意得たいのぢや。（つか〳〵と奧へ入らうとする）

石工の一　お待ちなされ、初めてのお人では歩かれませぬわい。石が、彼方にも此方にも突き出て居る上に、穴なども折々ありまする。
實之助　それでは、其方に頼みがある。越後からはる〴〵尋ね參つた者ぢやと云うて、取次いでは呉れられぬか。
石工の二　それでは、俺が一走り行つて來よう。（馳け入る）
百姓の二　了海様の身寄の方でムりますか。了海様には此の山國七郷の者が、みんないかい御恩になつて居ります。忝う思つて居ります。（頭を下げる）
老人　（進み出ながら）越後と九國の端とでは、お聞き及びにもなりますまいが、了海様は、此谿七郷の者には、持地菩薩さまのやうに有難い方でムります。御恩になつて居ります。（頭を下げる。他を顧みて）御身寄の御武家様ぢや。みんなお禮を申上げい。（皆一齊に頭を下げる。實之助精神的にやゝ困惑しながら輕く應ずる）
老人　まさか。お子様ではムりますまい。甥御様でムりますえか。よう尋ねて御座らしやつた。一體何處でお聞きになりましたか。
實之助　武者修行の傍、諸國を尋ね廻つたが、當宇佐八幡にて、人傳に聞きました。
老人　それこそ、眞に神様のお引き合せぢや。
百姓の二　今年で、二十年でムります。長い間、一心不亂にお働きになりました。何でも、お若い時に罪業をお重ねになつた罪滅しだと仰せられて、此の頃では、夜まで鎚を振つて居られまする。
實之助　（半ば獨言のやうに）重ねた罪業の罪滅しと云ふのか。だが、主殺しの惡逆は消えまいて。（ハ、、、、と嘲る如く笑ふ）
老人　お主殺しまで、ほゝう。が、それも、あの御精進では消えて居りませう。
實之助　消えて居るか消えて居ぬか、今に分明いたすであらうぞ、（ハ、、、、、と冷笑する）
（人々やゝ實之助を疑ひ始める。各々の間に私語を始める。その時、了海が石工二人に兩手を取られながら、出て來る。實之助ひそかに目釘をしめす。肉悉く落ちて骨露はれ、脚の關節以下は、殊に削つたやうである。破れたる法衣に依つて僧形とは知れるものゝ、頭髮は長く延びて、皺だらけの顔を掩うて居る。眼は灰色の如く濁つて居る。洞窟の外へ出ると目が眩むと見え、よろめく。百姓達、了海を見ると膝をついて禮をなす）
石工の二　（了海を介抱しながら）お危うムいます。
了海　（手で探るやうに）何處に居られるのぢや。何處に居られるのぢや。

石工の二　それそこでムります。直ぐそこでムります。

了海　（實之助の姿をおぼろに見出したやうに）何方樣でムりましたか、老眼衰へはてまして辨へ兼ねまする。

實之助　（敵の衰へはてた姿を見て駭き、最初の擬勢を、くじかれたやうに）その許が、了海どのと云はるゝか。

了海　仰せの通りでムります。して、貴方樣は。

實之助　（やゝ興奮しながら）了海とやら、如何に、僧形に身を窶すとも、よも僞は申すまい。汝市九郎と呼ばれし若年の頃、江戸表に於て主人中川三郎兵衞を討つて立退いた覺があらう。

了海　（罪を悔いしかもその罪から救はれて居ることを示すやうな落着いた、しかし謙虚な口調で）ムります。ムります。して、それを仰せらるゝ貴方樣は。

實之助　そちも忘れは致すまい。三郎兵衞の一子實之助ぢや。

了海　（潸然と涙をこぼす）實之助樣！　覺え居りまする。よく覺え居りまする。お父上を打つて立退きました者、此了海奴に相違ムりませぬ。

實之助　主を討つて立退いたる非道の汝を討つ爲に、十年に近い年月を、艱難辛苦の裡に過したわ。このところにて、會ふからは、もはや逃れぬところと、尋常に勝負いたせ。

了海　長い御辛苦でムりました。申譯がムりませぬ。身の罪滅しばかり考へて居りました。貴方樣に、これほどの御辛苦をかけようとは、思ひませんでした。いざ、お斬り遊ばせ。（やゝ目が見え始める）お顏がやつと見えました。お父上樣の御無念のお顏が眼に見えるやうでムります。いざ、お斬り遊ばせ。お聽き及びでもムりませうが、之なる刳貫は了海奴が、罪亡しに掘り穿たうと思ひました洞門でムりまするが、二十年の年月をかけて、九分迄は出來上りました。了海が身を果てましても、はや一年とはかゝりませぬ。いざ、お切りなされい。お身樣の手にかゝり、此の洞門の入口に血を洗して人柱となり申さば、思ひ殘すことはムりませぬ。

實之助　（感動しながら、素志を曲げまいと努めて）よい覺悟ぢや。いかに、善果を積まうとも惡逆の報は免れぬわ。最後の念佛申すがよからう。

（百姓や石工達は、事件の急激なる回轉に、最初は茫然として居る。中頃了海の身が、危險であると悟る。一人の石工が、奥へ知らせにはひる）

石工の二　おゝい。みんな出て來い。（洞門の中を見て大聲に叫ぶ）

（石工達、手に〳〵鐵鎚を下げ、わめきながら、そして實之助を遠卷きにし、了海を庇護してしまふ。了海、

石工の庇護を脱して實之助に近づかんとあせる。それを制しながら)

石工の頭 了海様を何とするのぢや。

實之助 (大勢を見て、刀を拔きはなつ。八方に目を配りながら) その老僧は、某が親の仇ぢや。端なく今日廻ぐり合うて、本懷を達するものぢや。主殺しの極重惡人を庇うて、神佛の罰を受くるな。

石工の頭 (傲然と) 敵呼ばりは、まだ浮世に在る裡の事ぢや。見らるゝ通り、了海殿は出家の御身でムるぞ。その上、山國谿七郷は愚か、豐後肥後山國川の流に沿ふ村村の者どもには、佛とも仰がれる方ぢや。其方様などにムザ〳〵と打たせてなるものか。

實之助 (全く激昂して) 申すな。申すな。假令出家致さうとも、主殺しの大罪は八逆の一つぢやわ。その方達が、邪魔いたさば片つ端から、死人の山を築いて吳れるのぢや。(實之助怒つて斬り込まうとする。石工達ワッと叫んで一齊に鐵鎚を振り上げる。百姓達は小石を拾つて、投げるべく身構へする)

了海 (必死になつてもがく) 皆の衆お控へなさい。此の御武家に石一つ指一本觸へたなら、了海はその人を恨みまするぞ。永々了海を助け吳れられたよしみには、たゞこの儘に討たせて下されよ。了海打たるべき覺え十分ムる。了海が此の刳貫を掘らうと云ふ心持も、今茲て打たれようと云ふ心持も同じぢや。刳貫の成就は目に見えて居る。その上、かゝる孝子のお手にかゝれば、了海の本懷此上はないのぢや。皆の衆お控へなされ。

石工の頭 それぢやと申しまして、貴方様の討たれるのを、傍でみす〳〵見過すことが出來ませうか。

了海 了海が討たれるのを見て下さるより、その暇に石一片でも、碎いて下さる方が、此の了海には最後の念佛よりも有難い。さあ! お引取り下されい!

石工の二 そりやいかぬ。貴方様が死なれては、此のどえらい思ひ立も、何うなるか知れたものでない。貴方様が、見て御座らつしやればこそ、ビクともせぬ大盤石と夜晝かけての戰が出來るのぢや。貴方様に死なれては、今迄掘り拔いた洞門が一夜の中に埋もるやうなものぢや。

石工達 (口々に) さうぢや。さうぢや。ことわりぢや。ことわりぢや。

百姓の二 さうぢや。さうぢや。長い間の俺達の樂しみが、ふいになつてしまふのぢや。今了海様に死なれてなるものか。

實之助 是非に及ばぬ。此上妨げいたす者は、誰彼の容赦はない。

(實之助、石工達の中に斬り込まうとする。石が霰の

やうに飛んで來る。タジ〳〵となる）

了海　（身もたえしながら）其方達は此の了海に、生きながら、地獄の責苦を見せるのか。了海の身の罪の爲に、孝心深き御武家を傷つけようとするのか。石一つ、御武家様に當てゝ見よ。了海は、舌を嚙み切つてでも、卽座に相果てゝ見せますぞ。

（石工百姓達、石を投ずることを止める。實之助了海を望んで斬り込まうとする。石工百姓達又烈しく抵抗す。老人列を離れて實之助の前へ進む）

老人　お待ちなされませい。貴方樣のお心も、御尤もで厶りまする。が、石工達百姓達の心も、やつぱり尤もで厶りまする。が、お心を靜めて、よくお聞き遊ばしませ。貴方樣がいくらあせつても、向うは四十人にも近い人數で厶ります。それに、かうして居る中に、近在近鄕の人人は、了海さまの大事ぢやと申して、段々馳け附けて參りまする。貴方樣がいかほど武藝の上手でおありなされても、人數には叶ひませぬ。さあ、玆は御思案で厶ります。なあ、御武家様！　此の刳貫は了海様一生の御大願で厶ります。二十年に近き御辛苦に、身心を碎かれたので御座りまするのぢや。いかに御自身の惡業とは申しながら、大願成就を目前に置きながら、お果てなさること如何ばかり無念で御座りませう。皆の衆が了海様を庇ふのも、矢張りその爲で御座ります。長くとは申しませぬ。此の刳貫の通じ申す間、了海様のお命を私共に預けて下さりませ。御覽の通りの御身體で御座りまする。逃げかくれなどなされる御身體では御座りませぬ。刳貫さへ通じました節は、御存分になさりませ。

石工達百姓達　尤もぢや。尤もぢや。

老人　皆もあのやうに申して居りまする。此場は一先づお引き取りなさりませ。若しお待ちになると云へば、御滯在のお宿もお世話いたしませう。皆の衆。しかと誓ひなされい。その期に及んで、屹度變易せぬやうに。

石工達百姓達　誓うた。誓うた。しかと誓うた。

老人　了海様。いかゞで御座りまするか。

了海　御武家様の御辛苦を思へば、わしは一日も生き延びたう思ひませぬ。

老人　それではなりませぬ。貴方様のお命は、此の刳貫を刺し貫く佛様の錐のやうなものぢや。刳貫の成就する迄は、輕々とお捨てになつてはなりませぬ。御武家様！お聞きになりましたか。御思案は如何で御座りますか。

實之助　（何事をか思案したる後）了海の脩形にめでて、その願を許して取らさう。束へた言葉を忘れまいぞ。

石工の頭　何の忘れてよいものか。一分の穴でも、一寸の穴でも、此の刳貫が向うへ通じた節は、その場を去らず、

了海樣を討たさせ申さう。さあ、了海樣。思はぬ事に手間を取りました。いざ、仕事にかゝりませう。

了海　いや、俺は、此場で……

（了海の留らんとするを石工達擔ぐやうに拉してしまふ。實之助、無念らしく見送る）

老人　さあ、お宿へ案內いたしませう。あゝ言葉を束へて置けば、了海樣には勿體ないが、網に這入つた魚で御座ります。たゞ時期をお待ちなさりませ。

實之助　（無念の形相にて、洞門を見ながら）了海は、夜は何處に宿るのぢや。

老人　夜も晝もありませぬ。お疲れになれば、坐つたまゝ岩に靠れてお休みになりまする。人間の爲さることとは思はれませぬ。

實之助　左樣か。（思案をして）今宵は七日か八日か。

老人　七日で御座ります。

實之助　（獨言のやうに）子の刻には月も入るのう。へ、、、、。（微かに笑ふ）

――幕――

第二場

時と場所。第一場と同じ日の夜、洞門の內部。

情景。舞臺一面刳貫かれたる岩石、舞臺右端が此の洞門の行き詰りで、その岩石に面して了海を初め數人の石工達が鎚を振つて居る。焚火がちろ〳〵燃えて居る。幕の開く前より鎚の音が聞える。幕があくと、みんな一齊に手を休める。

石工の一　皆が一緒に手を休めると、急に靜けさが身に浸みて來るのう。

石工の二　道理ぢや。地の中へ幾町ともなく來て居るのぢやからのう。

石工の三　今宵は、みんな了海樣のお傍に居ぬと、あの晝の武士が、合點せずに又狙ひに來るかも知れぬ。

石工の一　それや、念もない事ぢや。樋田鄕まで人をやつて、武士が宿つて居る宿の周圍には、ちやんと寢ずの番を附けてあるのぢや。

石工の二　あゝもう、亥の刻だらう。手がしびれるやうに痛むのう。

了海　（しわがれた低い聲で）尤もぢや。今日は岩の燒き方が、足りなかつたと見えて、滅相岩が堅かつたのう。あゝもう、皆の衆。小屋へ引き上げさつしやれ。了海ももう休まう。さあ、皆の衆。引き上げさつしやれ。

石工の三　それぢや、みんなお暇をするとしよう。了海樣も、もうお休みなされませ。さあ、わしが夜の具を取つて來て進ぜよう。

（石工の三、走り去りて、やがて蓆と汚き夜具とを持つて來る。程よき所に敷く）

了海　あゝ忝けない。忝けない。それぢや、皆の衆。わしが先へき御免蒙るぞ。（了海寢ようとする）

石工の一　それぢや、了海様又明朝、お目にかゝりますぞ。

石工の二　御免なさりませ。

石工の三　御免なさりませ。

（石工遠く去る。了海暫く眠る振りして、又むく〱と起きる）

了海　（合掌して低聲に觀音經を誦す。）眞觀清淨觀。廣大智慧觀。悲觀及慈觀。常願常瞻仰。無垢清淨光。慧日破諸闇。能伏災風火。普妙照世間。悲體戒雷震。慈意妙大雲。樹甘露法雨。滅除煩惱燄。過去の罪業報い來て、實之助様のおはせられたからは、命は風前の灯ぢや。生ある中に、一寸なりとも一尺なりとも、掘り進まいでは叶はぬ處ぢや。懈怠を貪る時ではない。

（岩面に膝行し、前より、烈しく打ち下す）

了海　（聲を勵まして）諍訟經官處。怖畏軍陣中。念彼觀音力。衆怨悉退散。妙音觀世音。梵音海潮音。勝彼世間音。是故須常念。念々勿生疑。觀世音淨聖。於苦惱死厄。能爲作依怙。

（狂へるが如く、打ち進む。暫くすると、實之助が、舞臺在端から忍び寄つて來る。右に太刀を拔きそばめ、左手を地につきながら、徐かに〱忍び寄つて來る。了海は夢にも知らざる如く、更に觀音經を誦しつゞける。實之助、走り寄らんとして、逡巡す。暫く太刀を振り翳して切らんとし、しかも相手の一心不亂なるを見て、討ちがたく遂に刀を鞘に收めて去らんとす）

了海　（急に振り顧りて）實之助様！　何故、お斬り遊ばされませぬか。

實之助　（了海に不意に言葉をかけられて、やゝ狼狽して言葉なし）……

了海　晝間の仕宜は、さぞ、御無念に御座りましたらう。いざ、お斬り遊ばしませ。今こそ妨げいたすものは、御座りませぬ。邪魔の入らぬ中、いざ、お斬りなさりませ。

實之助　了海とやら、此上はいさぎよく、此刳貫成就の折を相待たうぞ。敵を眼前に控へながら、武士たるものが、手を拱しうする無念さに、束へた約束をも反古にいたし、たゞ兩斷にいたさんと忍び寄つたれども、其方が一心精進のけ高さに、瞋恚の炎も、打ち消されて、高德の聖に對し忍び寄る夜盜の如く獸の如く窺ひ寄る身があさましうて、太刀を取る手が、心ならずも鈍つたわ。此上は、心長く其方が本願を達する日を相待たうぞ。

了海　（手を突きて平伏しながら）極重罪人の拙僧に、大

願成就の月日を、借して下さりまするか。忝う御座りまする。此上は、身を粉に砕いて、明日明後日にも刳開く心にて、鎚を振うて御座りませう。御孝心深き貴方様に長い御辛苦をかけまして、申譯はありませぬ。お許し下さりませ。お許し下さりませ。

（了海、實之助に近よりながら、頭を下げる）

實之助　敵同志となるも、宿世の業と申すことぢやが、いかに了海とやら、拙者もたゞ空しく、此の地に止まつて、其方達の働くを見るより、及ばずながら、鎚を取つて、一片二片の岩なりとも、削り取つて得させよう。其方が本懷の日が、近くなるのは、取もなほさず拙者が本懷の日が近づくのぢや。

了海　（感激しながら）よい所にお氣が附かれました。貴方様の御助力は、百萬の味方よりも賴もしう御座ります。貴方様のお顏を見て居れば、この了海奴も、片時も鎚が休められませぬわい。

實之助　たゞ徒然に瞋恚のほむらに心を燗らせて居るよりも、世のため人のために、鎚を振うて居るが、此の實之助にも心安いと云ふものぢや。さらば、了海どの、刳貫の開くまでは、味方なれど。

了海　おゝ一寸でも二寸でも、向うへ通りましたその節は、たゞ兩斷になさりませ。そなた様の本懷と、了海奴の本懷とが、成就する日が待ち遠しう御座りまするわ。

實之助　それ迄は、敵同志が肩を並べて、鎚を振ふも、又一興であらう。

（二人相見て淋しく笑ふ）

第三場

時と場所。前と同じく洞門の内部。前場より一年餘を經過したる延享三年九月十日の夜。

情景。前場とやゝ異り、了海と實之助とが、相並んで舞臺の中央に座を占め、互にたゆまず鎚を振つて居る。

實之助　えいつ！

了海　おゝつ！

實之助　えいつ！

了海　おゝつ！

實之助　（一寸手を休めて）石工達は、はや、去り申したな。

了海　（同じく手を休めて）石工達も、今日は終日身を粉にして働き申した。實之助様。そなたも、もう休ませられい！　もう、九つを廻りましたわ。もう御引き上げなさりませ。

實之助　なか〱。夜更くると共に、心神澄み渡つて、精力は、又一倍ぢや。

了海　昨夜も、あのやうにお働きなされたものを。今宵はちと早目にお引き上げなさりませ。
實之助　それは、其方に云ひたいことぢや。六十に近い御坊よりも先きに、われらが引き上げてよいものか。（鎚を振り上げて又「えいつ」と打ち下す）
了海　おゝつ（と應じて打つ）
（暫く二人とも打ち續ける）
了海　（又手を止めて）昨日石工の一人が、鎚音の合間にかすかな鳥銃の音を耳にしたと申して居つたが、御身様はお耳になされましたか。
實之助　身共は、鳥銃の音は、耳にせねども、一昨日の晩であつたか、かすかに瀨鳴の音を聞いたやうに覺ゆれども、それも鎚を持つ手を休めてふとまどろんだ折の、夢かも知れぬのぢや。
了海　御身様が來られてからも、もう一年に近い。あゝ、待ち遠しい事で御座る。まして、此の一月二月了海の身も心も、漸く衰へ果てまして、力も十が一も出ぬやうに成り申した。今日明日と賴まれぬ命のやうに覺えまする。萬が一、鎚を持ちながら、息が絶え果てるなどの事がありましたら、身の無念は兎も角、御身様に申譯のたゝぬことと、精神を勵ましては、居りますれど、あゝ今は、はや了海が辛抱の繩も切れ申した。あゝ岩よ、此の一念に微塵となれ。（烈しく打ち下す）
實之助　たゞ不退轉の勇氣ぢや。此期に及んで、退轉なさば、九仞の功も、一簣にかくるのぢや。心を確にお持ちなされい。今となつては、たゞ精進の外は御座らぬ。えいつ！（烈しく打ち下す）
了海　いかにも、御身様の仰せの通ぢや。一下の鎚にも、懈怠疑惑の心があつてはならぬわ。念彼觀音力！　おゝつ。（打ち下す）
（二人相並んで、烈しく打ち下す）
了海　あゝつ。（と鎚を捨てゝ、右手を左手にて握る）
實之助　（駈寄つて）如何なされた。如何なされた。
了海　思の外に脆い岩で、力餘つて、拳迄が貫き申した。（ふと、了海岩面に開かれた穴に氣が附く）御覽なされい！　不思議な穴が、開き申したぞ。
實之助　（穴の所に近づきながら）不思議ぢや、風が通ふわ。
了海　（狂氣の如く）何々、風が通ふとは。（鎚を振り上げて、烈しく打ち續く。岩はそれに從つて崩れて洞になる）崩れる。崩れる。快く崩れるぞ。
實之助　（了海と並んで、狂氣の如くに鎚を振ふ）貫けるわ。快く貫けるぞ。
了海　あゝ、風が通ふ。風が通ふ。さては、刳貫き了せた

のか。實之助樣。とくと御覽なされい。

實之助　（半身を穴から突き出しながら）　あゝ、正しく大願成就なるぞ。ほのかに光が見えますわ。闇の中に。かすかに光るは、山國川の流に相違ない。了海どの。正しく大願成就なるぞ。

了海　（うめく如く言葉を發し得ず。たゞ手を合掌して身をもだえる）……

實之助　見える！　見える！　聞える！　聞える！　川の流が、聞ゆるぞ。日の下に闇にもほのじろく見ゆる。まぎれもない街道ぢや。了海どの。お欣びなされい。

了海　（初めて聲を舉げて哄笑す）　あな嬉しや。天上界へ生き乍ら、昇る心持がする。眼も耳も衰へて、川も流も聞えねど、ほの明りは見えまするぞ。あな嬉しや。嬉しや。嬉しや嬉しや。心の中が、煮えくり返るやうに嬉しい。（了海身悶をする）

實之助　（了海の手をとりながら）　尤もぢや、尤もぢや。たつた一年手傳うても、此の嬉しさは分るのに、まして二十餘年の艱難辛苦、佛神も嘉納ましまして、今宵本懷を遂げらるゝのも、元よりその處ぢや。實之助も嬉しう御座るわ。

了海　（ふと考へ附いて）　身の嬉しさに取りまぎれて、申し遲れました。今宵こそ、お約束の日ぢや。いざお斬りなされませ。了海奴も、かゝる法悦の中に往生いたすなれば、未來は淨土に生るゝこと、必定疑なしぢや。いざ、お斬りなされい。

實之助　（了海の突いた手をとりながら）　了海どの。もはや何事も忘れ申した。二十年來肝を碎き身を粉にする御坊の大業に比べては、敵を討つ討たぬなどは、あさましい人間の世の業だ。實之助も御坊の傍に一年の修業を積んだ仕合せに、修羅の妄執を見事に解脫いたしたわ。見られい。月が雲を破つたと見え、月の光がさして來た。

了海　（穴より顏を出しながら）　おゝ、嬉しや。嬉しや。老眼にも山國川の流が、ほのかに見え申すわ。

實之助　此の月の光が、御坊には卽身成佛の御光のやうに輝き申すわ。此の實之助に取つても、妄執を晴らす眞如の光ぢや。あゝ快い月影ぢや。御坊を討つ代りに、此岩をかう打たうぞ。（傍なる長き柄の鎚を取り、力任せに打つ。岩石崩れ落ちて、山國川一帶の山河の夜の姿が見える）

了海　げに、快い月影ぢやなう。（又心付いて）　いざ、實之助樣、お斬りなされませ。明日ともなれば、石工がまた妨げを致さうも知れぬ。いざ、お斬りなされ。

實之助　（近よる了海の手を取つて）　何をたはけた事を申さるゝ。あれ見られい！　柿坂あたりの峰々まで、月の

光に浮んで見えるわ。あゝ、大願成就、思ひ殘す方もない月影ぢや。

（二人手を取つて、月の光に見とれる）

了海　（やがて念珠を取り出してもみながら）南無頓生菩提！　俗名中川三郎兵衞樣。了海奴が、惡逆を許させ給へ。（泣きながら頭を下げる）

實之助　恩讐は昔の夢ぢや。手を擧げられい。本懷の今宵をば、心の底より欣び申さう。あな、嬉しや。嬉しや。欣ばしや。

（二人相擁して泣くところにて）……

――幕――

義民甚兵衛（三幕）

人　物

農夫　甚兵衛　廿九才　甚しき跛者
その弟　甚吉　廿五才
同　甚三　廿二才
同　甚作　廿才
甚兵衛の繼母　おきん　五十才前後
隣人　老婆およし　六十才以上
庄屋　茂兵衛
村人　勘五郎
村人　藤作
一揆の首領　甲
同　乙
刑吏、村人、一揆、その他多勢。

時　代
文政十一年十二月

場　所
讃岐國香川郡弦打村

第一幕

甚兵衛の家、藁葺きの、大なれども汚き百姓家。左に土間。土間につゞいて臺所あり。臺所の右は八疊の居間、疊も柱も黑く光つてゐる。入口の柱には、金毘羅大神宮の大なる札を貼つてゐる。その札も黑くくすぶつてゐる。八疊の奥は障子で奥に部屋のあることを示してゐる。家財道具は殆どなし。

母屋の左に接近して、一棟の建物がある。劃ぎられて、牛小屋と納屋とになつてゐる。牛はゐない。

幕開く。甚作と甚三とが、家の前庭で「前掻き」と稱する網を繕つてゐる。（方形の形をして、柄が付いて居、小溝の鮒や泥鰌を、掬ふに用ゐるもの）暫くすると、母のおきんが、母屋と牛小屋の間から、大根を二本携げて出て來る。冬の黄昏近し。

おきん　畜生！　また大根を、二三本盗みやがつた！　作、今度見付けたら背骨の折れるほど、どやし付けてやれ！　何處の何奴やらう。

甚作　新田の權が、昨日夕方裏の畑のところを、ウロ〳〵してゐたけに、彼奴かも知れんぞ。飢饉で殖えたのは、畑泥棒ばつかりぢや。

おきん　大根やつて、今年は米の飯よりも大事ぢや。百本

ばかりある大根が、冬中のおもな食物ぢやけになあ。

甚三　おつ母、木津の藤兵衛の家ぢや、もう食物が盡きたけに、來年の籾種にまで、手を付けたと云ふぞ。

おきん　藤兵衛が家でけ、えゝ氣味ぢや。藤兵衛の嬶め、俺が何時か小豆一升借せ云うて、頼んだのに、借せんと云うて、はねつけやがつたものな。

（おきん、臺所へ入り水甕より水を汲んで大根を洗つてゐる。隣家の老婆、およしは入つて來る。ボロ〳〵の衣物を着て、瘠せはてゝゐる）

およし　甚作さん達、何してゐるんぢや。

甚作　これから魚掬ひに行くんぢや。

およし　お前の所ぢや、まだそなゝことが出來るから、ええな。わしの所ぢや、老人夫婦で、泥鰌一疋捕ることやて出來やせん。喰べるものは、もう何にも、なしになつてしまうた。

甚三　およし婆さん、羨むなよ。これでな、二人で一日中小溝を漁つてもな、細い泥鰌の二十疋も取ればえゝ方ぢやぞ。

およし　さうかな。

甚三　この近所ぢや、銘々で取り盡くして、川には、小鮒一つやて、居りやせんわ。山には、山の芋どころか、のびるだつて、餘計は殘つて居らんぜ。

およし　もう一月もしたら、何喰ふやらうぜ。

甚三　大方壁土でも喰つてゐるやらう。

甚作　灘の宮の方ぢや、もう松葉喰ふとるだ。

およし　民百姓が、こんなに苦しんどるのに、お上ぢや、まだ御年貢を取るつもりで居るんぢやてのう。

甚作　お年貢米の代りに、人間の乾干しを收めるとえゝぞ。

およし　明和の飢饉ぢやて、これほどではなかつたのう。

甚三　あの時には、お救ひの小屋が立つたと云ふぢやないか。

およし　さうぢや。さうぢや。わしもな、お救ひ小屋のお粥を貰うたがなあ。ひどい飢饉ぢやつたけれどもな、今度ほどは困らなかつたぞ。みんな、お上がよかつたからぢや。御家老様が、偉い御家老様だつたでな。お藏米を惜しげもなくお下げになつたのぢや。

甚三　今度は、お藏米どころか、こちとらを、逆さにして鼻血まで、搾り出さうとしてゐる。

およし　わしもなあ、長生したおかげで、喰ふや飲まずの辛い日に逢ふことぢや。（ふと、この家に來た用向に氣がついて、云ひ悄くさうに）おきんさん。わしはお頼みがあつて來たんぢやがな。

おきん　（直ぐ警戒するやうな顔をして）何ぢや！

およし　あのな、えらい云ひ憎くい賴みぢやがな。お前とこの大根を、一本借して貰へんかな。
おきん　(默つてゐる)
およし　村中で、みんな羨んどる。おきんさんとこぢや、よう大根作つた云うてな。饑饉で何も出來なかつたのに、大根丈はよう出來た。おきんさんは、よう氣が付いたと云うてな。
おきん　(大根を大切さうに庖丁で、切りながら)　おぬしには、この朔日にも一本借してやつたな。
およし　あゝ、さう〳〵。わしもよう覺えてゐるでな。御時世がようなつたら、十倍にも百倍にもして返さうと思つとるんぢや。ぢやけどな、おきんさん。わしは度々無心云ひたうはないぢやけどな。家の爺がな、二三日前から、病みついてな。――喰ふものを喰はんぢやけに、病みつくのも當り前ぢやがな。……それでな、靑物が喰ひたい〳〵云うて口くせのやうに云ふとるでな。何ぞ、喰べられるやうな草があるかと思うてな。野面を走し廻つたけども、冬の眞中ぢやで、何もないんぢや。わしの亭主、助けると思うてな。大根一本融通してくれんかな。御時世が直つたらな、十本にでも百本にでもして返すけにな……。
おきん　(默つて、大根を鍋に入れる)　……

およし　なあ、おきんさん。わし達、助けると思つてな。
おきん　(冷然として)　まあ、堪忍して貰はうけな。
およし　(駭いて)　えゝ、何やと。
おきん　御時世が直つて、大根を一車返して貰ふより、今の一本の方が大事ぢやけにな。
およし　(弱々しき反抗で)　えらうまあ、無慈悲なことを云ふのう。
おきん　云はいでかのう。この時節に、食物の事では、親子兄弟でもな、血眼になつとるんぢや。
およし　大根一本が、それほど惜しいかのう。
おきん　ふゝむ、何云つてゐるだ。おぬしの方が、それほど欲しがつてゐるぢやないか。この頃では、甚吉の家の大根云うてな、みんな評判してな、一本でも二本でも盜まうとしとるんぢや。家中、代り番こに、ねず番しとるんぢや。一朱銀の一つも持つて來るがえゝ。大根の一本や二本呉れてやるけにな。
およし　(憤然として)　人情を知らんのにも程があるのう。
おきん　何云つてゐるぞ。この時節に、人情だの義理だの云つとると、乾干しになつて死んでしまふわ。木津の儀太郎を見いな。米俵、山のやうに積んであつても、一合一勺だつて、此方等に惠んでくれたかのう。一石百五十

奴もしたら、賣らうと思つとるんぢやないか。此方等のやうな、水呑百姓が大根一本だつて、人に奥れられるけ。無駄口利かんと、早う歸つたらえゝわ。
甚作　（見かれて）お母。そなゝ無愛想なこと云はんで、一本位貸してやれな。まだ一みねはあつたんぢやないか。
おきん　何、入らんこと云ふのぢや。みんなお前達が、可愛いけに、大根の一本も惜むんぢやないか。ぐづ〳〵云はんと、早う出かけて泥鰌の一疋でもよけいに取つて來い。
甚三　甚作行かう。およし婆さ。家のお母一克者ぢやけに云ひ出したら、後へ引かんけにな。今日は諦めて、歸るとえゝわ。
およし　何が、一克者ぢや。生死塚（しやうろか）の婆はあのやうに、慾の深い奴ぢや。（歸りかけて）今にみろ。わし達が飢ゑて死ぬときには、うんとこさと呪つてやるからな。
おきん　えゝわ。なんぼなと呪へ。おぬしのやうなおいぼれに、呪はれたつて、何の恐いことがあるもんけ。
およし　業つくばりめ。
おきん　おいぼれめ。おぬし達、早う飢ゑて死ねよ。それ丈、穀がのびて、他の者が助かるわ。
およし　（口惜しがつて）女子（をなご）のくせに、よう無慈悲なことが云へるな。えゝわ、えゝわ。今に思ひ知らせてやるけに。（退場する）
おきん　この大根と粟とで、春まで命をつなぐんぢや。一本だつて、他人にやつて堪るけ。（大根を入れた鍋を、竈にかけ火を點ける）
甚三　ぢや、お母。行つて來るぞ。
おきん　あゝ、行つて來い！
（二人の兄弟「前掻き」と魚籠とを持つて出て行く。入れ違ひに村の勘五郎慌しく入つて來る。）
勘五郎　おきんさん。甚吉どんは居らんかのう。
おきん　居らん。今朝、早うからな、落松葉をな、お城下へ賣りに出たよ。
勘五郎　落松葉を。うむ、そなゝものでも金になるけ。
おきん　百にもならねえだ。それでもな、粟の二合や三合は買へるけにな。
勘五郎　甚三も甚作も居らんかのう。
おきん　二人とも居らん。何ぞ用け。
勘五郎　お母。恐しいことが起つたぞ。綾郡二十三ケ村に、御年貢御免を嘆願の一揆が起つたぞ。
おきん　なるほどのう、一揆でも起らうぞ。えゝ氣味ぢや。
勘五郎　それでな、段々お城下の方へ押し寄せて來る云ふ

のぢや。
おきん　なるほどのう。
勘五郎　それでな、もう端岡までは、來ると云ふ噂ぢやけに、この村でも、加擔するか加擔せんか、今の裡に定めとかうて云うてな。八幡さまで、村の若い衆の集りがあるんぢや。
おきん　恐ろしいことになつたのう。
勘五郎　一揆もえゝがのう。後が恐いからのう。あんまり、有頂天になつて、やつとると、後で磔ぢやからのう。
おきん　恐ろしい、恐ろしい。飢ゑて死ぬと磔と、孰ちらがえゝぢやろ。
勘五郎　ぢや、俺は、急ぐけに、みんな歸つて來たら、よこして呉れんかのう。村の集りに、はづれると後が惡いぞ。
おきん　え、わ、分つた。甚三と甚作とを探して、直ぐやるけにな。
勘五郎　ぢや、えゝか。暮六つまでには、集るんぢやぞ。
（勘五郎去る。おきん、不安らしく考へ込みたる後、兄弟をたづねるべくつゞいて退場する。——間——牛小屋に物音がする。やがて、この家の長男の甚兵衞が、其處から現はれる。つぎはぎした膝までしか來ない着物を着てゐる。憔悴してゐる。右脚甚しく短く、ちんばを引く。ひそかに周圍を見廻したる後、臺所に忍び寄り、鍋の蓋を開け、まだ半煮えの大根を、ガツガツ貪り喰ふ。暫くすると、脊負籠を肩にしたる次男甚吉、表から歸つて來る。兄が大根を喰つて居るのを見付ける）
甚吉　何するだ！　この泥棒猫め！
（兄の襟筋を摑み引きずり出す）
甚兵衞　（やゝ愚鈍らしく）われこそ、何するだ！　何するだ！
甚吉　おのれ、お母の目を掠めて盜み喰をしやがる。われに、大根を喰はせてたまるけ。
甚兵衞　わしやて、大根喰ひたいだ。この大根作つたの俺ぢや。
甚吉　何を世迷言云ふだ。作つたのは、われでもな。この家や、畑はおれの物ぢやぞ。この畑に出來るものは、みんな俺の物ぢやぞ。
甚兵衞　何云ふだ。新田の藤兵衞伯父が云うた。われは長男ぢやけにな。みんなわれの物ぢや云うて。
甚吉　（烈しくこづき廻はしながら）不具者の癖に何云ふだ。爺さんが、生きてゐたときに、庄屋さま願うて、家屋敷とも俺の物になつてゐるのだ。われは牛小屋て、く

すぶつてりや、いゝんだ。不具者のくせに、出しやばるなよ。（烈しくこづき廻す）
甚兵衞　（激怒し）お母と兄弟三人とで共謀しやがつて、長男のわしの物を、みんな取つてゐるのだぞ。この家の緣の下の塵まで、わしの物ぢや。
甚吉　何を、阿呆くさいことを云ひやがるんぢや。
（更に烈しく、こづき廻す。甚兵衞こづかれながら、手を振り上げて、甚吉の顏を毆つ）
甚吉　おのれ、毆ちやがつたな。
（二人烈しく挌鬪す。甚兵衞も、絕えず壓迫されながらも、抵抗をつゞける。其處へ母と一緖に兄弟二人歸つて來る）
甚三　吉兄い。何うしたんぢや。
甚吉　（甚兵衞を壓へながら）この不具者めがな、今鍋の大根を、盜んで喰うてゐやがるんぢや。それでな、俺が怒鳴り付けるとな、俺に喰つてかゝりやがつてな、俺の頭を毆ちやがつたんぢや。
おきん　本當けい、この阿呆のど不具め。大根やこしお前の口へは入るものぢやねえだぞ。お前なんかに、粟の飯一杯も惜しいけどな。同じ人間の皮被ぶつてるけにな、毎日一杯宛惠んでやつとるんぢや。それを、有難いとも思はんで、ようもようも盜み喰ひしやがつた。吉。根性骨にしみるほど、どやしつけてやれ。
甚三　おつ母。昨日畑の大根取つたのも、こいつかも知れんぞな。
おきん　さうぢや、さうぢや。それに違ひない。みんなして、牛小屋の中へ追ひ込んでな。
甚兵衞　（全く抵抗力を失ひながら）何ぼ不具ぢやとて、長男の俺を牛小屋へ住はせて、粟の飯たつた一杯づつあてがうて……。
おきん　何云ふぞ。この飢饉の時節に、粟の飯一杯ぢやとて、惜しいぞ。吉、その頰げた一つひねつてやれ。
（甚吉、云はれた通りにする）
甚兵衞　あゝ、痛い！　痛い！
おきん　さあ、皆して、投り込んでしまへ！　これからは、粟の飯も勿體ないや、水丈で澤山ぢや。
（三人、母に云はれた如く甚兵衞を手込にして、牛小屋へ入れる）
甚兵衞　何うするだ！　何するだ！　われ達！　この兄を何うするだ！
甚吉　何が、兄だい！　われのやうな不具の阿呆を、誰が兄に持つものけ。
甚兵衞　何するだ！　何するだ！
甚三　（次兄に加勢しながら）えゝ、默つて、この中にす

つこんで居れ！

甚作　（同じく手を借して、擔ぎ上げながら、二人の兄よりは、やゝ優しく）盜み喰ひやこしするけに、こなゝ目に會ふのぢや。大人しう、小屋の中へ、は入つて居るがえゝぞ。

（三人、跪いてゐる甚兵衞を、牛小屋へ擔ぎ込んでしまふ）

甚兵衞　何するだ、何するだ。（叫びながら、擔ぎ込まれる）

おきん　出られないやうに、戸を閉めて、しんばり棒かふとけ。明日から、粟の飯一杯もやらんぞ。（やゝ聲を低めて）今時飢ゑ死んだとて、誰も不思議がりやせんわい。

（甚吉、戸を閉め、棒を探してきて、しんばり棒をかふ、この前より、周圍が漸く薄暗くなり初める）

おきん　吉、聞いたか。綾部に一揆が起つたと云ふことを。

甚吉　聽いたとも、御城下でえらい騷ぎぢや。香東川の堤で、早馬に二度も行き會うたぞ。

おきん　それでのう。御城下に押し寄せる道筋ぢやけに、この村へも追付け來るでのう。加擔するか加擔せんか、評議するためにのう。八幡樣で暮六つから集りがあるから、來い云うてな、勘五郎どんが、ふれて來たぞ。

甚吉　一揆のかたう人か。こなゝ時、下手まごつくと首が飛ぶし、それかと云うて、後込みしとると、一揆からひどい目に會ふしのう。

おきん　兎に角、行つて來るがえゝぞ。それでのう、身をたしなんで、出しやばらんがえゝぞ。先ばしりして、わしに心配させるでねえぞ！

甚吉　ぢや、ボツ／＼行かうか。

おきん　飯喰うてからにせい。評定が、長びくかも知れんけに。

甚吉　あゝ、ど不具めと取組み合うて、えらいことお腹を空かせたぞ。

おきん　（臺所へは入り、鍋の蓋を開けて見て）あの阿呆め！　三切も、喰ひやがつた、われ達に、三切づゝやらうと思つてゐたら、當らんやうになつたぞ。

（兄弟三人、臺所に腰をかけ、粟飯を茶碗に盛りながら、大根を鍋よりはさみ出しながら喰ふ）

甚三　一揆も、やつてゐるときは、景氣がえゝがのう。後でまた、磔や打首が二三十人はあるべい。

おきん　觸らぬ神に、祟りなしぢや。なるべくなら、誰も出んで濟むとえゝがのう。

甚作　さうもなるべい。村で加擔するとなると、家では若

い者が揃つとるけにのう。一人や二人は出ねばなるまい。

（この前より、周圍が、ほの明るく騷しくなる。遠方が、火事でもあるやうに明るくなる。雜音が、だんだん高くなる。遠い寺の鐘が鳴り始める）

甚作　（馳け出しながら）何やらう、何やらう。火事かしら、向うが眞赤ぢや。

甚吉　えゝ、何ぢやと。（出て來る）ほゝう、赤いな。何うしたんぢやらう。何處ぞで火事を出したのか知らん。

おきん　えゝ、火事ぢやと。（出て來る）

（甚吉も出て來る。親子四人とも、遠方を見て、不安に襲はれる。寺の鐘が烈しく鳴る。牛小屋の戸が、かタガタ動く）

甚兵衞の聲　開けてくれ！　開けてくれ！

甚吉　阿呆め！　お前は、其處ですつこんで居れば、えゝんぢや。

（村中が、ますます明るくなる。人聲が嵐のやうに高まつて來る。犬がけたゝましく吠える。寺々の鐘が殷々と鳴る。甚作馳け出す。やがて、歸つて來る）

甚作　（着くなつて、歸つて來る）えらいこつちや！　えらいこつちや。街道筋は、一面の炬火ぢや。

甚吉　えゝ何ぢやと。

（このとき、「一揆ぢや！　一揆ぢや！　一揆が來たぞう！」と、云ふ叫びが遠く近く聞えてくる）

おきん　あゝ到頭、來たんぢやのう。恐ろしいことになつたのう。

甚三　御城下を、夜討ちにするんぢやのう。

おきん　まさか、此方等に、仇はしやすまいのう。

甚吉　何、そな心配があるもんか。一揆は此方等の味方ぢやないか。

おきん　われ達、みんな隱れとれ！　加擔人させられたら、後が難儀ぢやけに。

甚吉　まだ、えゝ。まだ、えゝ。此方へ來るのには間がある。

（このとき、村人の一人、あわたゞしく馳けて來る）

甚吉　おゝ、われや、藤作ぢやねえか。

藤作　おゝ、この村も、加擔ぢやぞ。えゝか、一軒で、一人宛、人數を出すんぢやぞ。えゝか、炬火と竹槍とを用意しとけ。えゝか。後から、一揆の、統領が廻つて來るけにな。

甚吉　（蒼白になりながら）合點ぢや。

藤作　加擔の村が、二百十二ケ村になつたぞ。夜更けにお城下へ押し寄せて、御家老達の家を叩き壞す云ふとるぞ。はやう、用意せい。えゝか、分つたか。

甚吉　分つた、分つた。

（藤作、馳け去る）

おきん（狼狽しながら）何うせう、何うせう。

甚吉　仕方が、ねえ。わし行くぞ。

おきん　阿呆云ふな。後嗣のお前に萬一のことがあつたら何うするんぢや。われは行くぢやねえ。

甚三　兄貴は、家に居るがえゝ。わしが行くだ。わしが。

おきん　われも行くでねえ。加擔して、後で打首にでもなつたら、何うするだ。

甚三　そないゝ心配がいるもんけ。何萬と云ふ人數ぢやもの。たゞ、附いて行つた丈で打首になんかなつて堪るけい。

（急に、炬火の火が近づいてくる。一揆達が近づいて來た。物音が聞える。寺の鐘、何段々と鳴りつゞける）

おきん　こちらへ來るだ、こちらへ來るだ。われ達、みんな隱れとれ。おつ母が、えゝやうにするだ。わしに委しとけ。わしが、えゝやうにするだ。わしが、われ達、誰も行かんで、えゝやうにするけに。

甚吉　阿呆云ふな！　お母のやうな、年寄に委しとけるけ。

おきん　えゝ、默つとれ。お前達、は入つとれ、云うたら、は入つとれ。は入つとれ！

（おきん、息子達三人を、押し込むやうに、奥の間へ入れる。そして、臺所へ行く、出刄庖丁を持つて、母屋と牛小屋の間から、奥庭へ行くと、炬火の薪と手頃の竹竿を持つて出て來る。尖端を、出刄でとがらせる。それから、牛小屋の戸のしんばり棒を、はづす。このとき、覆面をし手槍を持つた一揆の首領二人、炬火を持つて多くの一揆に圍まれながら、出て來る。村人勘五郎が案内してゐる）

勘五郎（首領に）へえ、この家にも男手が、ございまする。

首領の一人　わしは、綾郡さる村に住む豪士ぢや。今度諸人助けのために、御年貢米御免の嘆願の一揆を起した者ぢや。同心か不同心か、孰ちらぢや。同心するに於ては、道々、所々在々の大百姓の家を叩き壞して、金銀米穀を別けてやる。

他の一人　同心なら、同心の印に加擔人一人を出せ。不同心なら直ぐこの家を叩き壞す。其方達を打殺す。孰ちらぢや。

おきん（顫へながら）へえい、へえい、同心でござります。わし達小百姓には、救ひの神さまでございます。おありがたうございます。

加擔人を出しますとも。（牛小屋の前へ進み戸を開ける）
おゝ、甚兵衛。お前、そなゝ所へ隱れて居らいで、出て來いや。何もこはいことありやせん。わし達の難澁を救うて下さる神さまぢや。早う出て來い。

（甚兵衛の手を掴んで曳きずり出す）

おきん　さあ！　これを持つてな。このお方達の後から、ついて行け！（竹槍と炬火とを渡す）
甚兵衛　わしやこはい、わしやこはい。
おきん　何を云ふぞ。お前、ぐづ〳〵云うたら、竹槍で突き殺されるぞ。（竹槍を强ひて押し付けながら）はやう、しつかり持たんけいな。
甚兵衛　わしやこはい、こはい。
首領の一人　臆病者め！　恐がることはない。一揆の人數は綾郡宇多郡を合せて、五萬三千人ぢや。何の恐いことがあるものか。
おきん　うんと叱つて、貰ひたいでのう。これは生れつきの臆病者でな。（甚兵衛に）さあ、しやんとして行つて來い。この方々に、附いて行くと、白い飯が、何ぼでも喰べられるぞ。

（甚兵衛、その言葉に少しく元氣づき、三四歩步く）

首領の他の一人　その者は、不具者ぢやないか。
おきん　何の不具者でもな。山や野良の働きは、人一倍でな。他人の二倍もの仕事しまするでな。ちんば引いても、走しるのは、人一倍ぢやぞな。
勘五郎　おきんさん。甚吉は、何うしただ。
おきん　先刻も云うたぢやないか。御城下へ松葉賣りに行つてな、まだ歸つて來んでのう。
首領の一人　不具でもよい。詮議してゐては手間どる！　さあ、次の家へ案内されい。
勘五郎　さあ、こちらへおいでなされい。
首領の他の一人　（甚兵衛に）後からついて來い。はゝゝゝ山本勘介と云ふちんばの軍師が昔あつた。お前もうんと働いてくれ。はゝゝゝ。その代り、白い飯を何ぼでも喰はしてやるぞ。（步き出す）
甚兵衛　（やゝ遲れて、母に恨めしげに）わしを打首にするつもりかの。
おきん　何を云ふだ！　お前に、たんと、白い飯を喰はしてやりたいのぢや。はやうとつと附いて行け！

（甚兵衛、愚鈍な顏にも、母親を恨めしげに見返しながら、手槍を杖ついて、ヨタ〳〵と出てゆく。おきん、胸を撫で下ろしながら、後を見送つてゐる。兄弟三人、奧の間から出て母親の後へ、そつと忍んでくる）

甚吉　おつ母！

おきん　おゝ、びつくりした。
甚三　うまくやつたなあ、おつ母。
おきん　はゝゝゝ。
甚吉　ほんまにうまくやつたの。あの不具者が、竹槍をついて、ちんば引き／＼附いて行くのを考へると、吹き出したくなるのう。
おきん　はあゝゝゝ。あの不具者も、廿九になるまで養うてやつた甲斐があつたのう。思はん役に立つたわ。この一揆で御年貢は御免になるわ。米も安くなるわ。此方等親子は高見から一揆を見物して居るわ。あゝ、うまいことした。甚作。厄逃れのお祝ひに、神棚へお燈明でもあげいよ。
甚三　一揆の大將が云ふとつた。昔、山本勘介云うて、エライ軍師があつたと云うてのう。けど、おつ母の方が、もつと偉い軍師ぢやのう。
おきん　どうぢや。年が寄つても、こなゝものぢや。はゝゝゝ。
兄弟三人　あはゝゝゝ。
甚吉　あの不具者め。あはゝゝゝゝ。
親子四人　あはゝゝゝゝゝゝ。

第二幕

第一幕より、十日ばかりを經たるある日の夜。弦打村庄屋茂兵衞の家の廣間。村人達が椽側にも庭にも充ちてゐる。座敷には、所々に百目蠟燭が燃えてゐる。庭には、篝火が、三個所ばかりに焚かれてゐる。人數の割合に、靜肅である。みんなが、不安と恐怖とに囚はれてゐるのが分る。

村年寄甲　（椽側に立つて見廻しながら）もう、皆集つたかのう。木津の吾作は來たか。
村人一　來ただ。茲に來てゐるぞ。
村年寄甲　新田の新吉が見えんのう。
村人二　まだ來とらんが、先刻來るときに誘ふとな、山へ行つとるけに、歸つたら直ぐよこせる云うたぞ、嬶が。
村年寄乙　上笠居の甚兵衞が、見えんぞな。
村人三　うん。甚兵衞どんが、來とらん。
村人四　あなゝ氣の毒な人。來いでもえゝぢやないか。
村人五　また、あなゝ阿呆來たとて、しようがない。
村人六　阿呆々々云ふない。少し阿呆ぢやけに、尙可愛いさうぢやないか。
村人七　さうぢや。阿呆ぢやけど、えゝ人ぢや。繼母や兄弟達に苛められるので、いよいよ阿呆になるんぢや。
村人六　さうぢやとも。長い間苛めぬかれたでのう。家や田畑は、弟に取られるしな。喰物も、ロク／＼喰はさ

れんし、なんぞ口答へすると、弟三人がよつてたかつて、毆ち打擲するんだものな。
村人五　けど、阿呆ぢやもの、しやうがないわ。
村人六　阿呆でも、長男は長男ぢやものな。
村人八　死んだ甚七が、あんまりおきん婆に、甘かつたから、いかんのぢや。
村人六　さうぢや。死んだ爺もわるいんぢや。だがのう、今度の一揆にやつて、あのおきん婆の仕打はどうぢや。足腰のたつしやな息子が三人もあるのにな。自分の息子は出さんでな、常日頃、苛めぬいとる甚兵衞どんを、出すんぢやものな。
村人七八四　さうぢや、さうぢや。ひどい仕打ぢや。
村人六　わしや、何も知らん甚兵衞どんが、竹槍杖ついて、ちんば引き〱隨いて來るのを見ると、涙がこぼれたぞな。
村人七　俺も、可愛相で見て居られなんだぞ。勘五郎どん。お前どうしただ。お前が一揆の大將を、甚兵衞どんの家へ案內した云ふぢやないか。なんで、この家には足腰のたつしやな若い者が、三人も居ると、云うてやらんのぢや。
勘五郎　そら、後から氣の付くことぢや。わしも、竹槍を差しつけられて案內しとるんぢやらう。命がけぢやないか。早う、案內役を逃げたい思ふ一心で、何でも早う濟めばよいと、思ふとつたけにのう。
村人七　ほんたうに、あのおきん婆、一揆の大將に賴んで、突き殺して貰ひたかつたのう。
村人四六八　ほんまぢや、ほんまぢや。
村人七　考へても、腹が立つでのう。
勘五郎　だが、庄屋どんや名主どんは、遲いのう。
村年寄甲　なんぞ、難儀なことになつとるかも知れんぞう。
村年寄乙　松野八太夫樣が、馬から落ちくぜた所が、もう牟丁も向うだとよかつたんぢや。ホンの牟丁位の違で、この村に難儀がかゝるんぢや。
村人八　お上も、無理ぢやないか、郡奉行樣が、一揆に殺されたのが、弦打村の地境の內だからと云うて、弦打村から下手人を出せ云うて、あんまり聞えんぢやないか。
村年寄乙　おやけど、さうでもせな、下手人が出んのぢや。下手人が出んと、お上の御威光にかゝるけにな。
村人七　えらい、災難ぢやのう。
勘五郎　えゝことは、二つないわ。一揆のお蔭で御年貢御免になつたかと思ふと、直ぐこなゝ無理な御詮議ぢや。
勘五郎　一昨日、御防川で一揆の發頭人が五人も磔になつ

たと云ふから、下手人が出たら、磔は逃れんのう。

（一座、しんとしてしまふ。その時甚兵衞が、末弟の甚作と一緒に來る）

村人七　あゝ、甚兵衞どんが來た。甚兵衞どんが來た。

村人八　相變らず、ニコ〳〵しとるわい。あの人は、他人には、いつも愛想がえゝわ。

（甚兵衞、蒼白な顏に微笑を湛へ、皆にペコ〳〵頭を下げて、隅の方へ坐る）

村人八　甚兵衞どん。遲かつたのう。

甚兵衞　（默つてうなづく）……。

（甚作。甚兵衞に寄り添うて坐はらうとする）

村人七　甚作。わりや、何しに來ただ。

甚作　おツ母が、附いて行け云ふけにな。

村人七　何やつて、おツ母がそなゝこと云ふんぢや。今日の集りは、一揆に隨いて行つたもの丈の集りぢやぞ。

甚作　ぢやけどもな、おツ母が、兄やは少し足らんけにな、寄合の席へやこし、一人でやるのは、心元ない云ふけにな。

村人七　えらう、勝手なこと、云ひやがる奴ぢやのう。そなに心元ない、甚兵衞を、何うして又、一揆にやこし、獨りで出したんぢや。あんまり、得手勝手なことをしてゐると、天罰が恐ろしいぞと、おつ母に云つてやれ。

甚作　（言葉なく默してしまふ）……。

勘五郎　ほんまぢや、おつ母にな、少し云つてやれよ。あんまりひどい事をするとな。人間がゆるしても、神さまが許さん云うてな。

（甚作は、顏を赤めて、さしうつむいてしまふ。甚兵衞はニコ〳〵笑つてゐる）

村人九　あゝ、街道筋に提灯が見えるぞう。庄屋どん達が、歸つたんぢや。

村人十　おゝ、見える。迎ひに行かう。

（一座緊張して、待つてゐる。やがて、迎ひに行つた村人が、悄然として歸つて來る。それに續いて、庄屋と三名の名主とが銘々手錠を入れられ、郡奉行の役人に守られて、首をうなだれて歸つて來る。一座仰天する）

村人達　（口々に）どうしたんぢや。どなゝおとがめで、そなゝ目に合うたんぢや。

村年寄甲　茂兵衞さま。一體、これはどうしたんぢや。

茂兵衞　仔細はあとでお話する。先づ、おしづまり下されい。

村年寄甲　おゝ、靜まるとも。皆靜かにせ。村の一大事ぢやけに、みんな靜かにしてくれ。

（村年寄達、庄屋を庇うて、座敷へ上げ、郡奉行の役

人達を案内する。庄屋正面へ出る。村人達、水を打つたやうに靜かになる)

茂兵衞　(老眼をしばたゝき、一座を見廻しながら)　かやうな姿で、御一統にお目にかゝり、面目なうござる。

村人一　何のそなゝ斟酌が入るもんけ。村のために、そなな身にならつしやつたことは、分つてゐるでな!

村人達　ほんまぢや、ほんまぢや。そなゝ會釋は入らんぞつ!　それよりも早う、話しとくれ。

村年寄甲　しつ、靜に。

茂兵衞　さう、云はれては、なほ更面目ない。わし等の申し開き拙いによつて、かやうに、村中一統の難儀になつたのぢや。

村人一　庄屋どん。そなゝ事よりも、今日の首尾、その手錠の仔細を早う話してくれ!　氣にかゝつて仕樣がないわ。

茂兵衞　さう、おせきなさるな。話すなと云うても、話さずには居れんことぢや。實はな、今日新郡奉行筧左太夫樣のお役宅へ出たのぢや。ところが、御奉行樣の仰せらるゝには、お上が今度の一揆に對しての御沙汰は、恩威並びに行ふと云ふ御趣意ぢやと、かう仰せられるのぢや。それでな、年貢米は、歎願に依つて、免除する代りに、一揆の發頭人は、一昨日御坊川で磔にした。又、松野八太夫樣に、礫を打つた下手人は、草を分けても、詮議すると、かう仰せられるのぢや。

(一座から烈しい嘆息がきこえる)

茂兵衞　それでな、御奉行樣の仰せらるゝには、一揆が沓東川の堤にさしかゝつた時は、弦打村の百姓が、眞先だと、かうおつしやるのぢや。

村人達　(口々に)　それや、噓ぢや。……なんぼ、御奉行樣の仰せでも、それは間違ふとる。……大間違ひぢや、大間違ひぢや。

(村人達口々に打ち消す)

茂兵衞　まあ!　默つて聞いて下され。一揆の發頭人達が、さう白狀したと、お奉行樣が仰せられてるのぢや。

村人達　(銘々に嘆息する)　……。

茂兵衞　それにな、何よりも惡いことは、松野樣が、落馬遊ばした處が、地藏堂の手前で、まぎれもなう弦打村の境内ぢや。御奉行樣も云はれるのぢや。弦打村の者が先手にゐたと云ひ、松野殿の果てられたところが、村の境内と云ひ、嫌疑が其方達に懸るのを不祥と諦めいと、かう仰せられるのぢや。それでな、御奉行樣が内々の仰せでは、村中で評議して下手人を出すに於ては、褒美として、お救ひ米の高も他所よりは、心をつけてやると、かう仰せられるのぢや。が、若し三日の裡に下手人が相知

れぬに於ては、庄屋を始め名主、村年寄一統を、下手人の代りに磔に上げるかも、知れないぞとかう仰せられるのぢや。

（嘆息嗟嘆の聲高し）

茂兵衛　その上詮議中、其方達に手錠を申し付けると云ふ御沙汰で、この有樣ぢや。（眼を烈しくしばたゝく）それでな、わしが思ふに、あの騷動中に誰の打つた礫が、松野樣に當つたか、打つた當人にも分かるものぢやないと思ふ。が、御一統の內で礫を打つた心覺えのある人は、五人や十人はあろと思ふ。その中でな、村の難儀を救つてやらうと思ふお人は、名乘つて出て貰ひたんぢや。

（一同水を打つたやうに靜まりかへつてしまふ）

茂兵衛　御一統の內でな、礫を打つた覺えのある人は、村一統を救ふと思うてな、名乘り出て貰ひたいんぢや。

村年寄甲　難儀なことになつたものぢやのう。

村年寄乙　恐ろしい災難ぢやのう。

名主一　皆さん。今聞かれる通りぢや。お奉行樣は、まだかう仰せられた。下手人が、相知れぬときは、村一統の者を、くゝり上げてあく迄も、糺問する積りぢやとのう。

（一同顏見合はせ蒼白になつてしまふ）

村人五　わしは、左の手に炬火を持ち、右の手に竹槍を持つてゐただけに、礫を投げようたつて、投げられやせなんだ。

村人二三　わしやつてさうぢや。

村人四　わしやつてさうぢや。わしは、松野樣のおん馬が見えたとき、すこ飛びに逃げたわ。

村人七　わしは、又ずつと後れてゐただけに、松野樣のおん馬はおろか、御家中の姿やこし、まるで見かけなかつたわ。

勘五郎　おい〳〵、みんな。自分の身の明しを立てるよりも、今は村の難儀を考へるときぢや。

藤作　さうぢや。よう云つた、よう云つた。自分の身一つ逃れるよりも、村の難儀を逃れる工夫するのが肝心ぢや。

茂兵衛　（それに力を得たごとく）さうぢや。今勘五郎殿や、藤作どのの云はれる通りぢや。この村に、お奉行樣の姿を見かけて、石を擲つやうな、大それた暴れ者の居らん事は、わしが誰よりも、よう知つとる。が、時の災難で、不祥な嫌疑を受けたのを不運と諦めて、村一統を救ふつもりで誰ぞ、名乘つて出て貰ひたいのぢや。……（間）……さう云つた處で、おいそれと名乘つて出られるものでない、命を放り出すのぢやけにのう。が、昔佐倉

領の宗五郎様は、自分の命を投げ出して、百姓衆の命を救うたけに、今でも神様に祭られて居る。誰ぞ、自分の身一つ投げ出し、村一統の難儀を救うて呉れる人はないか。

（一座、寂として聲なし。たゞ、嗟嘆の聲が洩れるのみ）

茂兵衞　御一統、誰も石を投げた仁はないか。

名主　えゝないか。誰ぞ、石を投げたものは、居らんか。石を投げた覺のある人は、その石が松野様に中つたと諦めて、名乘つて出てくれ。

茂兵衞　えゝ、どなたもないか。

（一座、顏を見合はすのみ。一人も聲を發するものなし）

茂兵衞　それならば、仕様がない。是非に及ばぬ事ぢや。村一統知らぬ存ぜぬで、どなにひどい責苦にでもかゝるのぢや。その代り、みなもその覺悟してな、入牢の腹を定めて下されな。俺も、事に依つては、磔にでも何にでも、なる覺悟をするけにな。

（皆悽慘な氣に打たれる。そして動揺して、口々に呟き出す）

村人五　藤作。わりや石投げたぢやねえか。

藤作　（驚いて）滅相もないこと、ぬかすな。われこそ、眞先に行つたけに、石投げたぢやねえか。

村人五　何をぬかす、この阿呆め。

藤作　お前こそ何ぬかすだ！

（二人全く掴み合ひにならうとして、傍人から止められる）

村年寄甲　誰ぞ村の難儀を救ふ人ないか。あの騒動のとき、石投げた人ないか。

村年寄乙　村のために、誰ぞ出て呉れい、誰ぞ出てくれ。

（一座また靜まつて、聲を發するものなし）

茂兵衞　ぢや、皆覺えがないと云ふなら、わしや、さう云つて、お奉行様に、お返事申上げる外はないぞ。念のために、もう一度丈訊かう。あの騒動のときに、誰ぞ石を投げたものはないか。あの騒動のときに、誰ぞ石を投げたものはないか。石を投げた人は、村のためぢやと思つて名乘つて出てくれ。

（甚兵衞、最初より茫然として、人々の話を聞いてゐない。たゞ庄屋の最後の聲が大きいので、ふと耳をかたむける）

村年寄甲　さあ、今ぢやぞ。石を投げた覺のある人は出てくれ。

村年寄乙　村を救うてくれるのなら、今ぢやぞ。今出てくれんと、村はえらい難儀になるんぢや。

（村年寄の絶叫する聲を聞いて、甚兵衛ムク〳〵と立ち上る。甚作驚いて制止しようとする）

甚兵衛　何やと、騒動のときに、石を投げた者ないか云ふのけ。

村年寄甲乙　さうぢや、さうぢや。

甚兵衛　（子供の如く無邪氣に）わしや投げたぞ。

村年寄村人達　えゝ、甚兵衛どん、お前投げたか。

甚兵衛　投げたとも、わしや二つ投げたぞ。

村年寄村人達　ほんまか、ほんまか。（驚喜す）

甚作　（馳けよつて）兄や。何云ふんぢや。

（駭いて兄の口を制せんとしながら云ふ）

甚兵衛　（うるささうに、弟を排れのけながら）えゝ、彼方へのいとれ。わしや、投げたぞ。おまけに、一の方はこないでつかい奴ぢや。藤作どん。われも投げてゐたぢやないか。勘五郎どん。われも投げてゐたぢやねえか。

勘五郎　（愕然として）滅相な、わりや何に云ふだ。

藤作　（同じく）ほんまぢや。人違して何云ふだ。

甚兵衛　さうけ、人違だつたか。わしや皆投げてゐたけに、わしも眞似して投げたんぢや。

勘五郎　（猶顫へながら）滅多なことを云ふな。そりや、皆他村の衆ぢや。

甚兵衛　さうけ。

甚作　兄や。わりや、何も知らないで、そなゝ事云ふが、いふとたいへんな事になるぞ。よう、今の嘘ぢやと云へ。早う云へ！

甚兵衛　嘘ぢやねえ。われこそ、何云ふだ。早う家へ歸つとれ！

甚作　よし、歸つておつ母に云つてやる。

（甚作飛ぶやうに馳け去る）

茂兵衛　甚兵衛殿、此方へござらつしやれ。

甚兵衛　おう、何ぢや。庄屋どん。

茂兵衛　おぬし、石を投げたに相違ないか。

甚兵衛　おう、投げたとも、一つは、こなにでつかい奴ぢや。

茂兵衛　誰を目當に投げたんぢや。

甚兵衛　誰彼なしぢや。わしや、皆が投げてゐたけに、一緒に投げたんぢや。

茂兵衛　甚兵衛どの。おぬしは、この村の難儀を救うてくれるか。

甚兵衛　わしや、何が何だか知らねえだ。

茂兵衛　おぬしが、松野様に、石を投げたと云うて呉れると、この村の者が、みんな助かるのぢや。この村の者は、お前を神さまのやうに、一生あがめるのぢや。どうぢや、松野様に石を投げたと云うてくれるか。

甚兵衛　わしや、何だか知らねえが、えいだとも。
村人達（口々に）甚兵衛どん。拜みますぞ、拜みますぞ。お前さんの恩を、一生涯忘れんぞ。
甚兵衛　わしは、さう云うてくれると、嬉しいだ。嬉しいだ。こなゝに嬉しいことは、生れて初めてだ。
（快く微笑す）
茂兵衛（役人達の方へ向いて）お聞きの通りでござりまするが、この者が松野樣に、石を投げたに相違ござりませぬ。
役人　少し、愚鈍の者と見えるが、中立に誤りはあるまいな。
茂兵衛　愚鈍とは申せ、至つて正直者にござりまする。
役人　よし。役所に召しつれて、よく調べるであらう。甚兵衛とやらに繩打て！
（此の時、甚吉達三人の兄弟、あわたゞしく馳け付けて來る）
甚吉（甚兵衛に飛び付いて、引き据ゑる）この阿呆め！　何云ふだ。何をロクでもないことを喋べるんだ。親兄弟の首に、繩がかゝるのを知らんのけ。
甚兵衛　何するんだ、何するんだ。わしや、石を投げたんぢや。投げたんに違ひないんぢや。
甚吉　何にぬかす、この阿呆め！
（甚兵衛を叩かうとする。村人七、八止める）
村人七八　何するんぢや。假にも、兄たるものに、手を掛ける奴があるけ。
甚吉　お前さん達ぢや、お前さん達ぢや。こなゝ阿呆の云ふことを取り上げて、こなゝ阿呆を下手人にして、罪を逃れようとして。庄屋どんも、聞えんぞ。阿呆は、えゝけど、阿呆につながる親子兄弟の難儀を何うするんぢや。
村人七　何やと、こなゝ阿呆ぢやと。そなゝ阿呆を、何うして一揆に出したんぢや。おぬしのやうな悧巧な息子が、三人もあるのに、そなゝ阿呆を何故一揆に出したんぢや。甚兵衛が、石を投げたと云ふのも、みんなお前達が、投げさしたんぢやないか。
甚吉　えゝ！　何ぬかす、お前達が、皆よつてたかつて、この阿呆になすり付けたんぢやないか。
村人八　何ぬかす。そなゝ阿呆なら、なぜ一揆にやるんぢや。
村人達　さうぢや、さうぢや。
甚吉（甚兵衛に取りすがつて）早う、云うたことを取り消せ。松野樣に、石を投げたと云ふと、お前は磔ぢやぞ。
甚兵衛（さのみ驚かず）磔やとてえゝわ。村の衆が、み

んな欣んで呉れるんぢやもの。

甚吉　阿呆め！　俺の云ふことを聞いて、早ぅ取り消せ。早ぅ。取消せ。お前のために云うてやるんぢやぞ。

甚兵衞　あはゝゝわしのため！　あはゝゝ。わし二十九になるけれど、お前がわしのために、えゝことしてくれたこと、一つもありやせん。

甚吉　えゝ何ぬかす。この阿呆め。……お庄屋様。お役人様。兄の申すことは、みんな嘘でな。こりや、阿呆ぢや。足らんのぢや。こなゝものゝ云ふこと、お取り上げになつては困りまする。お願ひでござりまする。（坐つて狂氣のやうに頭を下げる）

甚兵衞　（弟にならつて頭を下げながら）お庄屋様。お役人様。ほんまぢや。わしや、こなゝでつかい石投げたんぢや。馬に乘つたお武家が來たけにのう、それを目がけて、こなゝでつかい石投げたんぢや。

甚吉　何云ふだ。この阿呆め。お前のやうな不具者に石が投げられるけ。

甚兵衞　何云ふだ、お前は一揆に隨ひて來んぢやもの。わしがした事が、お前に分るけ……。わしや、こなゝでつかい奴を……。

甚吉　（兄に摑みかゝる）　何ぬかす……。（村人達、甚吉を取押へる）

役人　その者は、何者ぢや。

茂兵衞　甚兵衞の弟ではござりまするが、甚兵衞が愚鈍な者でござりますゆゑに、此のものが家を取つて居りまする。

役人　甚兵衞は、重罪の嫌疑ぢやほどに、親子兄弟も、免れまい。（手下の捕吏に）あの者を召捕り置け！

甚吉　それは、聞えません。それは聞えません。こなゝ阿呆の云ふことを聞いて。こなゝ阿呆が、お奉行様に石を投げ打つやうな、そな、大それた……。

甚兵衞　（繩にかゝりながら）わしや、こなゝでつかい奴を……。

村人達　甚兵衞どの、拜みますぞ、拜みますぞ。

甚兵衞　おゝ、わしはな、こなゝでつかい奴を……。

役人　その弟どもを、召捕れ。

甚吉　（口惜し泣きに泣きながら）わし達迄、難儀をかけるのか。阿呆め！　ど不具め！

甚兵衞　わしは、こなゝでつかい奴——（手で石の大きさを示さうとするが、もう兩手が縛られて動かない）

村人達　甚兵衞どん、拜みますぞ、拜みますぞ。みんな、拜んで居りますぞ。

茂兵衞　甚兵衞どの。わしからも、禮を云ひますぞ。おぬしを、決して見殺しにしませぬぞ。御領分中の百姓衆の

名前を借りて、きつと嘆願に出ますするぞ。

甚兵衞　何を云ふぞ。わしは皆の衆にさう云はれると、ただうれしいだ、うれしいだ。

甚吉　（無念の形相で、睨みすゑながら）　この阿呆の、ど不具め！

甚兵衞　わしは、こなゝてつかい奴をな……。（くゝられた手を動かさうとする）

（村人達が感謝と賞嘆との聲の裡に）

――幕――

第三幕

第二幕より數日を經たる十二月の末。香東川原刑場。小石の多い川原に竹矢來が、作られてゐる。彼方に水の枯れた川原がつゞき、背景に冬枯れた山が見える。木枯が、川原を傳うて吹いて來る。

幕開けば、初めは矢來の外側を見せ、次いで舞臺を半廻して、矢來の内側を見せる。矢來の外には、多くの見物人が群衆してゐる。弦打村の庄屋、名主、年寄、村人も其の中に交じつてゐる。

村人一　庄屋どん。百餘ケ村の庄屋達が連署の嘆願もやつぱり冗やつたのかのう。

茂兵衞　わしや、さう聞かれると面目ないがのう。お奉行様に何ぼ泣きついても、冗やつた。

名主　お上ぢや、誰でもかまはん、下手人を磔にして、御威光を見せれば、えゝんぢや。

村人二　なんぼ考へても、甚兵衞どんは可愛いさうぢや。あの時は、みなめい〳〵に石を投げたんぢやけにのう。たゞ甚兵衞どん丈が、正直でズケ〳〵云うてしまうたんぢやけにのう。

村年寄　まあ、えゝわ。わしや芝山の觀音さんが、村中を助けて下さるために、甚兵衞どんに乘り移つたんぢやと、思ふとるんぢや。

茂兵衞　もう、何ぼ嘆いても、取り返しが付かんわ。甚兵衞どんに、死んで貰うて、その代り後をようするんぢや。

名主一　さうぢや、後で村の神樣に祭るんぢや。

茂兵衞　祭るとも、祭るとも、ほんまに讃岐領の宗五郎樣ぢや。義民の鑑ぢや。

村人三　それにな、外の人ぢやつたら、それにつながつて、首打たれる親兄弟が、可愛い相ぢやがのう。あのおきん婆や甚吉は、あんまり可愛い相ぢやないわ。長年甚兵衞どんを、苛めた罰ぢやと思ふと、却つて氣色がえゝわ。

村人四五　おゝ、さうぢや。それがあるわ。

村人六　わしはな、甚兵衞どんに喰べて貰はうと思うて、こなゝもの持つて來たんぢや。（竹の皮に包んだ握り飯を見せる）

名主一　おゝ、それや、えゝ思ひ付きぢや。甚兵衞どんも飢餓で、ロクなもの喰べとらんけに、欣ぶに違ひないわ。

村人六　わしや、さう思つたけにのう。大事な大事な來年の籾種の中から、三合ばかり飯にたいたのぢや。

茂兵衞　おゝ、それや、えゝことしてくれた。この茂兵衞が禮を云ひますぞ。

（この時、彼方より群集のざわめきが聞える）

村人一二　あゝ、來た！　來た！　甚兵衞どんが來た。

（群集、口々に甚兵衞の名を呼びながら、その方へ波を打つて動く。やがて、裸馬に乘せられた甚兵衞母子が着く。馬から降りる。群集の間を過ぎる）

茂兵衞　甚兵衞どん。わし達は、みんな來て居るぞ。

名主一　わし達は、みんな陰ながら、拜んどるぞ。

村年寄二　心強う思うて下されや。わし達は、みんな來て居るぞ。

村人達　わし達は、みんな拜んどるぞ……。お前さんのこと、一生涯忘れんぞ。あとでお前さんを、神さんに祭るぞ。

甚兵衞　（快き微笑を含んで、村人達に會釋する）……。

茂兵衞　甚兵衞どん。わしやな、百餘ケ村を馳けずり廻つて、お前さんの命乞ひの訴狀に連署して貰うて、お上へ差上げたんぢやがのう。到頭、お前さんを、こなにしてしまうたんぢや。堪忍して下されや、なあ甚兵衞どん。

甚兵衞　なに、えゝわ、えゝわ。わしや皆の衆にさう云はれると、うれしいだ。

村人達　（口々に）　甚兵衞どん。有りがたう！　有りがたう！　お禮申すだ、お禮申すだ。快く成佛して下されや。

（甚兵衞、絕えずニコ／＼しながら、矢來の中へ入る。おきん及び甚吉續いて現はれる）

村年寄一　おきんさん、お前さんも氣の毒ぢやのう。が、村一統を救ふと思うて、死んで下されや。

おきん　（憤然として）　何ぬかしやがるんぢや。皆よつてたかつて、阿呆をおだて、寃の罪に落して、親兄弟まで、こなゝ目に合して置きながら、何ぬかしやがるんぢや。

甚吉　おつ母の云ふ通ぢや。わし達を、こなゝひどい目に合して置きながら、ようも見に來られたのう。

おきん　覺えとれ！　わしはな、首は飛んでも、七生まで村中へ祟つてやるからなあ！

村人一　何云ふだ。みんなわれ達が、人のえゝ甚兵衞を、

苛めぬいた罰ではないか。
村人達　さうぢや！　さうぢや！
おきん　何！（くゝられて居ながら、村人達に飛びかゝらうとする）
縄取りの役人（縄を引きながら）神妙にいたせ！
おきん（恨めしさうに村人達に）覺えとれ、よう覺えとれ！　死んだつて、恨みを晴らしてやるからな。
（おきん母子、刑場の中へ歩み入る。舞臺半廻り、刑場の内部が見える。磔柱が、矢來に立てかけられてゐる。五人の囚人甚兵衛を先に一列に引き据ゑられる。刑吏達が後から入つて來る。刑吏の長、床几に腰を掛ける）
刑吏の長　用意は整うて居るか。
刑吏一　萬事整うて居りまする。
刑吏の長　それでは、罪状を讀み上げい！
刑吏二（聲高く讀み上げる）

弦打村百姓　甚　兵　衛

其方儀、去る十三日領内百姓共一揆騒動し候砌り、右一揆に加擔致し、香東川堤に於て上役人松野八太夫に投石殺害致し候始末、不レ恐ニ御領主を一仕方不屆至極につき、磔申付くる者也

同　人　母　き　ん
同　人　弟　甚　吉
同　じ　く　甚　三
同　じ　く　甚　作

其方儀甚兵衛身寄につき、獄門申付くる者也

刑吏の長　最期も近づいたほどに、何ぞ遺言があれば、聞き屆けて遣はすぞ。
おきん　わしや、こなゝことで、打首になるのは不承知ぢや。なんぼ、お上のなされ方でもあんまりぢや、あんまりぢや。
刑吏　この期に及んで、未練を申すな。本人が白状に及びたる上は、緣につながる不幸と諦めて居れ！
おきん　何仰つしやるんぢや。こなゝ阿呆の云ふこと、お取上げになつたりして、あんまりぢや。聞えんわ、聞えんわ。お上のなされ方が聞えんわ。（甚兵衛に）この阿呆。
甚兵衛（氣がないやうに笑ふ）あはゝゝゝ。
おきん　何が可笑しいんぢや、この阿呆め！　親兄弟を、こなゝひどい目に會はして、この阿呆め！
甚兵衛　あはゝゝゝ。
おきん　えゝ、この不孝者めが！
刑吏一　騒がしい。控へ！
おきん（恨めしさうに默る）

刑吏の長　甚兵衛！　その方は、何ぞ、遺言はないか。

甚兵衛　（微笑しながら）　わしや、何もないだ。村の衆が、皆んな欣んで下さるけに、わしや嬉しいだ、嬉しいだ。

（その時、村人の六、矢來の中へ馳け入る）

村人六　お願ひでございます、お願ひでございます。

刑吏一　何ぢや、何事ぢや。

村人六　お願ひでござります。これを一つ甚兵衛どんに、食べさせて下さりませ。

（竹の皮包の握り飯を出す）

刑吏一　如何致しませう。

刑吏の長　苦しうない。甚兵衛に與へつかはせ。

刑吏一　（甚兵衛に與へながら）　村の衆の志ぢや。快く喰べたがよい。

甚兵衛　（無邪氣に欣ぶ）　ほゝう、これわしに吳れるか。

刑吏の長　手をゆるめてやれ！

（刑吏一、甚兵衛の前腕丈けを自由にする）

甚兵衛　ほゝう、わしや、こなゝ白い飯生れて始めてぢや。これ喰べてもえゝか。ほんまに、喰べてもえゝか。

刑吏一　快く喰べるがよい。

甚兵衛　（うまさうに喰べながら）　おゝ、わしこなゝうまい物、喰べたことがないぞ。頰つぺたが、落ちさうだ……。ほんまに、こなゝうまい物、喰べたことがないだ……。（つゞけ様に五つ六つ、喰べる。ふと母達に氣が付く）おゝおつ母、甚吉！　お前達ほしうないか。

甚吉　何ぬかしやがるんぢや、阿呆め。首の飛ぶ間際に、そなゝ物が喉を通るけ。

おきん　ほんまに、この阿呆め！　どこまで、親を馬鹿にしやがるんぢや。

甚兵衛　はあ……。さつけ、嫌か。ぢや、わし、皆喰べてやらう。あゝうまい、うまい、頰が落ちさうぢや。村の衆、ありがたう！

村人達　（口々に）　何云ふとんぢや。よう喰べてくれた。此方等こそ拜んどるぞ。

刑吏の長　申置くことがなければ、母と弟共を最期の座へ直せ。

おきん　（慌てゝ）　一寸待つて下されませ。お願ひがござりまする。

刑吏の長　何ぢや。

おきん　死際のお願ひでござりまする。どうぞ、この親不孝者を、先きへ突いて殺して下されませ。せめてもの腹癒せに、この不孝者が、磔柱の上で、苦しむのを見させて下さりませ。

村人達　（口々におきんを罵しる）……何を云ふ、鬼婆

め。お前の方から先きに死んでしまへ……。

刑吏の長　折角の願ひぢやが、聞き屆けることはまかりならぬ。かやうな場合、重科の者を、後にするのが定法ぢや。それ、その者達を、あれへ引き据ゑい！

おきん　えゝ、口惜しい。此奴が、突かれるのが見られないか。

刑吏三　えゝ、やかましい！　神妙にあれへ直れ！

（刑吏達、母子四人を上手の方へ連れ去つてしまふ。首斬役、刀を拔いてその後から從ふ）

甚兵衞　（微笑を含んで、その後から見送る）おつ母も、甚吉も、先きへゆくのか。長い間、わし苛めて呉れてありがたう。ありがたう。あはゝゝ。

（首を切る掛聲、太刀音、つゞいて聞える。見物、どよめいて聲を上げる）

甚兵衞　（顏色、やゝ蒼白になつたが、笑ひを絶たない）あはゝゝ。わしや、胸が、すつとしたが、わしをな、二十何年も苛めぬいたおつ母も、甚吉も、もう、あなになつてしまうた。おゝ、おつ母。甚吉。甚三。甚作。どなゝ氣持ぢや、あはゝゝゝ。（甚兵衞哄笑しつゞける）……今度はわしの番ぢや。早う、磔柱に付けて下されや。

村人達　（急に動搖す）甚兵衞どん。ありがたう、拜みますぞ。御恩は忘れませんぞ。……南無阿彌陀佛！　南無阿彌陀佛！

（刑吏達磔柱を起し、それに甚兵衞をくゝりつけようとする）

甚兵衞　何が、南無阿彌陀佛ぢや。皆喜んで、下さつしやれ。わしや、こなゝえゝ氣持のしたことはないや。あはゝゝ。

（群衆達の讃嘆、悲嘆の裡に、甚兵衞の笑ひ、いよいよ高くなつて行く）

――幕――

貞　操

人　物

佐成兼一郎
その妻　しく子
渡部秀助

時

今　日

場　所

湘南の避暑地

情　景

別荘と云ふほどでもなき三間か四間かの平家建の家。廻り椽の付いた八疊の間。芝生に面し、海に近し。海は、八月の蒼く輝ける海。
室には小さき書棚、机など。椽側に、籐椅子が置かれてゐ、妻のしく子がそれに腰をかけて、雑誌を讀んでゐる。
幕開くと、直ぐ兼一郎が庭の柴折戸から歸つて來る。浴衣を着、濡れた水泳着を右の手に下げてゐる。

しく子　お歸りなさい。
（しく子、濡れた水泳着を受け取る）
兼一郎　まだ、三時半には、間に合ふだらう。
しく子　えゝ、大丈夫ですとも。今三時が、鳴つたばかしよ。
兼一郎　手紙か何か來なかつた？
しく子　いゝえ、何も。くづ湯こさへませうね。
兼一郎　あゝ、こさへて貰ひたいね。口が、からくつて。波があるもんだから。
（しく子、奥へ入り、軈てくづ湯をこさへて出てくる）
兼一郎　今日は、行かなくつてよかつたよ。とても波が荒くつて。
（兼一郎、くづゆをすゝる）
しく子　昨日の最中、まだあつてよ。召上りますか。
（茶簞笥から、菓子折を出す）
兼一郎　（最中を喰ひながら、ふと思ひ出したやうに）あゝ、さう〳〵、俺は今日珍らしい人にあつたぜ。
しく子　えゝ、誰？
兼一郎　とても、珍らしい人間だよ。
しく子　誰？　妾の知つてゐる人？
兼一郎　むろん、お前の知つてゐる人だがね。
しく子　おや、女の人？

粂一郎　うゝむ。（首を振る）
しく子　男？
粂一郎　さう。
しく子　男の方つて、誰でせう。
粂一郎　渡部だよ。渡部秀助の奴にあつたんだ。
しく子　（輕い狼狽が隱し切れない）まあ！
粂一郎　俺が、泳いでゐると、もぐつてきて、いきなり、俺の身體にとりつく奴がゐるんだらう。駭いて見ると、そいつが渡部なんだよ。
しく子　まあ、何時彼方から歸つて來たのでせう。
粂一郎　つい先月の初に歸つて來たのだとさ。あはゝゝゝ。彼奴は、あんまり道樂がすぎて、勘當同樣に親父から亞米利加へやられたんだが、何處へ行つたつて、やつぱり辛抱が出來ないんだね。
しく子　二年ばかししか、行つてゐませんでしたわね。
粂一郎　うむ。もう、それでも、そんなになるかしら。お前は、あの男とは隨分古くから知つてゐるんだね。
しく子　だつて、あの方の家の別莊も、茲にあるんでせう。
粂一郎　うん。每年、夏は顏を合せてゐたと云ふ譯だね。
しく子　はい。
粂一郎　さう〳〵。俺に、何處へ來て居ると聽くもんだから、木下の別莊へ來てゐると云つたら、駭いてゐたよ。
しく子　どうして。
粂一郎　お前が、結婚したと云ふことは知つてゐたが、その相手が俺だと云ふことは、初めて知つたらしいよ。
しく子　さう。
粂一郎　ゼヒ遊びに來ると云つて居たよ。今日にでもやつて來さうな容子だつた。（ふと、柱にかゝつてゐる時計を見る）あゝ、もう二十分しかないナ。大急ぎで行つて來なくつちや。澄子の奴、俺が迎へに行つてゐないと、初めてだからまごつくかも知れない。
しく子　妾、迎に行かなくつてもいゝでせうか。
粂一郎　いゝとも。
しく子　でも。
粂一郎　あんな子供に、そんな斟酌が入るものか。おや、一寸行つて來るよ。（粂一郎庭に降りる）暑いな。今一番たまらない時刻だ！　（出て行く）
しく子　行つていらつしやい。
（立つて見送る。粂一郎、最初入つて來たところから出てゆく。しく子、見送つた後、ぼんやり考へる。籐椅子に腰かける。無意識に雜誌を取り上げる。が、直ぐそれを投げ出す。そは〳〵として、また立ち上る。椽側の柱に倚つて立つ。女中が出て來る）
女中　奥さま。電報が參りました。

しく子　（一寸駭いて）まあ。なんだらう。（開けてよむ）スミコビヨウキケフユケヌ。まあ、澄子さんは、今日來られないんだつて。

女中　まあ、旦那さんは、今お迎へにいらつしつたのでせう。

しく子　お前。ちよつと、出て見て下さいな。まだ遠くへ行かれないかも知れないよ。

女中　はい、はい。

（急ぎ庭下駄を穿き、駈け出す。海岸の方へ降り立つ。しばらく、歸つて來ない。しく子緣側に立つて、ぼんやり待つてゐる。女中、やがて息を切らしながら歸つて來る）

女中　もう、お見えになりませんよ。宮さまの御別莊の角を曲つても、お見えになりませんよ。一人でお歩きになると、ほんたうにお早いのですもの。

しく子　こんなに暑いときに、二十丁もの所を無駄足をなさるのぢや、ほんたうにお氣の毒だわ。歸りには、車にでもお乘りになるといゝが。

女中　もう、少し電報が早ければ、間に合つたのですわねえ。

しく子　電報は、いつも遲れるんだよ。東京から四時間もかゝることがあるんだからね。

（このとき、奥の玄關へ訪ふ聲がする）

しく子　（一寸不安になつて）お客樣ぢやないの。

女中　さうのやうでございますわ。

（女中去り、間もなく出て來る）

女中　渡部さんと云ふ方でございます。

しく子　（一層不安になつて）困つたわねえ。旦那さまが、お留守だと申上げたの。

女中　はい、さう申し上げましたの。すると、奥さまも、御存じのものだと、かう仰しやるのでございます。

しく子　（全く當惑する）知つてゐることは、知つてゐるのだけれど……（默つてしまふ）……。

女中　伺う、申し上げませうかしら。

しく子　さうね……。

女中　お斷りしませうか。

しく子　でも、知つてゐる方だもの。仕方がないわ、お通してくれない。

女中　はい！

（しく子不安な、動搖した顔をしながら、室内を片づける。まもなく、渡部、女中に導かれて入つて來る）

渡部　やあ、久し振ですなあ。御機嫌よう。

しく子　（固く冷たく）しばらく。どうぞ、おしき下さい。

渡部　（しく子が、あまりに冷靜なので、少し勝手が違つ

て、示された座蒲團には腰を降ろさないで、緣の柱に背をもたせる）貴女が、佐成君と結婚してゐるなんて、夢にも思ひませんでしたよ。尤も、日本へ歸つて來たその日に、貴女が結婚したと云ふ噂丈は、聽きましたがね。佐成君と結婚してゐようとは、全く思ひがけませんでしたよ。はあゝゝゝゝゝ。全く、一年ばかり亞米利加へ行つてゐた間に、日本でもいろ〳〵變つたことがあつたわけですね。

しく子 （さしうつむいて語なし）……。

渡部 佐成君は、何處へ行かれたのです。海から直ぐ歸つて來られた筈ですが。

しく子 妹の澄子さんが、東京からいらつしやるので、驛まで迎ひにまゐりました。

渡部 佐成君の妹！ 佐成君には妹があつたかな。美しい姉さんがあるのは知つてゐるが。とにかく、佐成君は幸福だナ。この新宿の海岸で、毎年夏毎に女王とさわがれてゐたしく子さんと結婚して、お嫁さんの實家の別莊へ夫婦づれで來て、昔のワイワイ連中を羨しがらせるなんて。はゝゝゝ。全く勝利者だ。

（女中、茶を持つて來て、直ぐ去る。しく子、うつむいたまゝ言葉なし）

しく子 （何か決心したやうに） 直ぐ佐成が歸つて參るでございませうから、しばらくお待ち下さい。

（しく子、立つて去らうとする）

渡部 まあ！ お待ちなさい。僕は、佐成君ばかりに、話しに來たのではないのですよ。

しく子 （腰をおろす）……。

渡部 はゝゝゝ、この別莊も思ひ出の深い別莊ですな。この部屋で貴女の兄さんの敏雄君と貴女と僕と三人で、毎晩十二時頃までも、いろ〳〵な話をしたものですね。僕が、得意になつて、ハアモニカなんか吹いて。あの頃は、まだ僕も二十一二で、純粹だつたからナ。貴女は十七でしたかね。

しく子 （だまつてゐる）……。

渡部 遲くなると、よく宿つたものですね。覺えてゐますか、しく子さんは。

しく子 （かすかに） はい。

渡部 まさか、忘れる筈はありませんナ。はゝゝゝ。でも、すつかり變りましたナ。もう立派な奥さんだナ。

しく子 （憤然として） あの、妾失禮しますから。どうぞ、佐成が歸るまで、お待ち下さいませ。

渡部 貴女は、そんなに僕の前にゐるのが、嫌なのですか。そんなに、嫌な譯はない筈ですがね。よく、僕と二人ぎりで、夜遲く下の海岸を歩いたこともあるでせう。

しく子　そんな話、そんな昔の話、どうぞなさらないで下さい。
渡部　さうは、行きませんな。世の中には、昔を忘れて現在に樂しまうとする人もあれば、つまらない現在を償ふために、昔を今に返さうと思つてゐるものもゐますよ。貴女が、前者だとすれば、僕は後者なんだ。
しく子　そんなお話をなさるのなら、わたくし、彼方へ參りますから。
渡部　そんなに、僕の話が貴女には、嫌なのですか。嫌なら、尙更話をつけてしまへばいゝぢやありませんか。
しく子（決然と）貴君と、お話をつける必要なんか少しもありませんわ。
渡部　さうですかね。僕はあると思ふのだがな。その話のつくかつかないかで、貴女の現在の生活の……はゝゝゝゝゝ。そんな事を云ふ必要もないが。とにかく、しく子さん。僕と一度ゆつくり會つて下さいませんか。
しく子（蒼白になる）……。
渡部（聲を低くして）佐成君が、東京へ行く時があるでせう。その後で、ゆつくり一度、お話したいと思ひますねえ。
しく子（決然と）おことわりいたします。
渡部（一寸壓せられて）ふゝむ。ことわる。なかなか強いですな。貴女は、ぢや、僕と話をする必要はないと云ふのですね。
しく子　はい。（低いけれどもつよく）
渡部　ふむ、それは面白い。でも、僕は貴女を天國へやるか地獄へやるか、自由に出來る賽を持つてゐる氣がするのですがね。「皆さん御覽よ双六あそび。投げた賽から天國地獄」そんな童謠がありましたつけ。
しく子（だまつてゐる）……。
渡部　會つて下さいますか……。
しく子　いゝえ。
渡部　はゝゝゝゝ。ぢや、貴女と僕との交渉は斷絕だ。行動開始と云ふところですね。だが、僕は貴女方二人の幸福を破りたくはないがナ。とりわけ佐成君の幸福を。
しく子（こらへてゐたのがたまりかねてかすかに泣き出す）……。
渡部　貴女だつて、古傷が痛むでせう。貴女が、事を荒だてゝ凡てを破壞してしまふよりも、しづかに僕と會つたら何うです。僕と會つたつて、僕はムリな要求を持ち出すわけぢやありませんよ。
しく子　貴女と隱れて會ふ位なら、妾は凡てを佐成に白狀します。
渡部　なるほどね。そして、佐成君を、幸福の頂上から地

獄の底へ突き落すんですね。そりやいゝ考へだ。眞珠のやうに、淨いと思つてゐた妻が、さうでなかつたことを知る。僕も佐成君でなくつてよかつた。男として、そんなひどい目には、會ひたくないからなあ。

しく子 (泣き伏す) ……。

渡部 佐成君は、もう歸つて來さうですよ。早く返事をしたら、何うです。佐成君に恐ろしい幻滅の苦しみを味はせるよりも、僕とおとなしく話をつけた方が、いくら得策だか分りませんよ。僕はムリな要求をするとは云つてゐないのですよ。

しく子 (だまつてゐる) ……。

渡部 何うです。決心はつきましたか。

しく子 (必死になつて) つきましたとも。わたくしは、貴女のやうな方と、夫に隱れて會ふ位なら、死んだ方がましでございます。何も知らない小娘の私を、弄んで置きながら、なほそれに飽きたらないで、こんなに月日の經つた今日になつて、まだ私を苦しめようとする、そんな卑怯な男と死んだつて……。

渡部 さうですかね。僕が弄んだことになりますかね。だが、貴女だつて、昔はそんなに嫌がつてゐる、僕の腕に……よしませう。それでは、僕は僕の考へ通りにやりませう。馬鹿に仲のよささうな貴女方の間を、ぶちこはすだけでも、不愉快ではないなあ。いづれ、佐成君には改めて逢ひませう。

しく子 (泣き伏す) ……。

(渡部、去らんとする。今度は表の玄關から歸つて來た佐成と會ふ)

兼一郎 やあ!

渡部 やあ!

兼一郎 何うした! (座中を見る。しく子の泣いてゐるのに氣がつく) 何うしたのだ! しく子。

しく子 (たまりかねて、わつと泣き伏す)

兼一郎 しく子。何うしたのだ。渡部君、何うしたのだ!

(氣色ばむ)

渡部 いや、その……。

兼一郎 「いや、その」ぢやないよ。まあ、坐りたまへ!僕もハツキリと說明が、きゝたいね。(可なり强く)しく子。何うしたのだ。

しく子 (泣きつゞける) ……。

兼一郎 渡部君! 何うしたのだ。誤解を殘さないやうに、ハツキリさせて置きたいね。夫の留守に、妻が他の男と話して泣いてゐたと云ふことは、說明を要する事だよ。

渡部 しく子さん。貴女の望み通りの、結果になつた譯ですね。貴女は、佐成君の妻として、先づ說明する責任が

あるわけですね。はゝゝゝゝゝゝ。
しく子　（泣いて居る）………。
伜一郎　（蒼い暗い顏で）　しく子。泣いて居ちや困るよ。大事の場合だからナ。ハツキリと、本當のことを云つて吳れなきや困るんだ。
しく子　（烈しくすゝりなく）　何うぞ、ゆるして下さい。私はあの、あの………。
伜一郎　あのあの、では分らない。
しく子　あのあの、私を何うぞ…何うぞ、御存分に……………。
伜一郎　ハツキリと、事柄を云つて吳れなきや分らない。（少し烈しく）
しく子　あの………。
渡部　ふむ、なるほどね。それからあとを、しく子さんに云はせるのは、殘酷だな。僕が、代りに云つてやらう。佐成君、君には大變氣の毒だがナ、僕としく子さんとは、昔關係があつたのだ。
伜一郎　（鋭く切りこまれた太刀を、ぢつとこらへる如き表情をなす）　さうか。………ふむ、それは何時だ。
渡部　五年ばかり前だ。
伜一郎　しく子。それに違ひないか。
しく子　（うめく如く泣きながら、うなづく）………。

伜一郎　違ひないのだナ。そして、今日は何うしたのだ。今日は、ナゼ泣いてゐたのだ。
しく子　あの…あの…。
伜一郎　（やさしく）　ハツキリ云つてくれ。本當のことを云つてくれ。
しく子　（泣きながら）　あの渡部さんが、いらつしつて、話があるから、貴女が東京へ行かれた留守に、一度會へとかう仰しやるのです。
伜一郎　それで……。
しく子　いやだと申しました。
伜一郎　それで……。
しく子　昔のことを、貴君に云ふと、かう仰しやるのでございます。
伜一郎　それでお前は、何う云つたのだ。
しく子　貴君に隱れて、會ふ位なら、貴君に白狀してしまふと、かう申しました。
伜一郎　渡部君、君はそんなことを云つたのかい。
渡部　（棄鉢に）　あゝ、云つたね。昔、僕のものであつた女性に對して、その位なことを云ふ特權はあると思つたよ。
伜一郎　お前は、昔渡部を愛してゐたかい。
しく子　いゝえ。わたくし、あの子供だつたのですもの。

愛するなんて、そんな。何うぞ、御存分に……わたくし、すみません。どうぞ、どうぞ。すみません……（泣きつづける）

粂一郎　お前が、會はないと云つたら、渡部君は昔の秘密を、俺に知らせると云つて、脅迫したのだネ。

しく子　はい、さうです。

粂一郎　渡部君。さうかネ。

渡部　先づ、さうだ。

粂一郎　ぢや、僕が突然歸つて來たので、僕に知らせようと云ふ君の目的は、達した譯だネ。

渡部　先づ、達したことになるな。

粂一郎　ぢや、君は、もう用はない譯だね。歸つてくれたまへ！　どうか。結婚した人妻を脅迫して、夫に背かせようとする人間は、男性の中で、一番卑劣な男だ。泥棒以下、詐欺以下だよ。今更、絶交するほど、君とは友人ではないから、いゝが。これからは、何處で會つても、挨拶しないから。

渡部　あゝ、いゝとも、いくらでも、惡く云へよ。その代り僕は、君達の幸福を一しよにさらつてゆくわけだナ。あはゝゝゝ。恩怨のない佐成君。君には、大變すまないが、廻り合せだとあきらめてくれたまへ、君を不幸にして。

粂一郎　何を云つてゐるのだ、馬鹿ナ。それは、君のやうな卑しい人間の考へ方だよ。君のやうな人間の行動のために、俺達が不幸になるとしたら、世の中は闇だよ。（しく子に）しく子。泣かなくつてもいゝよ。なにも、そんなに泣くのには、當らないよ。お前が、十六七の子供時代に、この男に犯されたと云ふことは、お前の災難だが、お前の罪にはならないよ。そんなことのために、俺達の結婚生活が、不幸にされてたまるものか。それは、お前が執りつかれた病氣なんだ。こんな厄病神にとりつかれたのが、お前の不幸なんだ。はゝゝゝ。（全く快活に）渡部君。そんなことで、俺達の幸福を奪はうとしたつて駄目だよ。

渡部　負け惜しみは、よした方がいゝナ。

粂一郎　何が負け惜しみだ。負けてゐるのは君だよ。十六七の少女時代に、ほんたうの愛も、ほんたうの性慾もあるものか。そんな時代の愛が、何になるんだ。ほんたうの愛は、女になり切つてから、後のことだよ。君は、一人の自覺した女が、身も心も一しよにして、男の胸に投げかけて來る、本當の愛を味つたことがあるか。見ろ、君は、女に對する第一の武器で、しく子を脅迫して、物の見事にはねつけられたではないか。女としてのしく子は、君に物の見事に背いてゐるではないか。

渡部　妻の昔の貞操が、そんなに氣にならない君も、よつぽど變りものだナ。

粂一郎　われ〳〵の喰つてゐる野菜だつて、みんな汚い肥料をやるんだよ。だが、われ〳〵の食膳に上つてゐる味は變らないんだ。いや、そのために、却つてうまくなつてゐるのだ。君なんか、野菜の芽が土の中にあるときに、汚い肥料をかける百姓のやうなものだ。殊に、君なんか汚い肥料をやつたのは、俺だよと云つて、威張つてゐる百姓のやうなものだ。

渡部　(藥鉢に)　おや、おや。

粂一郎　世の中には、君などが考へつかないやうな心を持つてゐる人間が澤山居るからな。しく子も、自分の少女時代の過ちを償ふつもりで、一生懸命に俺を愛して居て呉れたことが分つたよ。一度誤つて惡いことをしたものは、一生二度とは、やらないものだ。一度、チブスにかかると、二度は決してかゝらないやうに。はゝゝゝゝ。そんな意味で、しく子位貞淑な女はない筈だよ。さう云ふ保證を付けて呉れた點で、俺は君に感謝するよ、渡部君。

渡部　物も考へやうだナ。だが、心が動搖してゐる者ほど、いろ〳〵な理窟を考へるものだ。とにかく俺は歸らう。だが、君が、幸福か何うか。人には何うとも云へるさ。だが、自分自身には、いつはれない筈だよ。(立ち上る)

粂一郎　本當だ。君にも君自身の氣持がハツキリ分つてゐるだらう。本當に、木下しく子の身體と心とを獲たものは、世界にタツタ一人しか居ないと云ふことを。はゝゝゝゝゝ。

渡部　何とでも云つてゐるさ。(憤然として去る)

(先刻から、曇つてゐた空から、急に夕立が沛然として降つて來る。粂一郎緣側へ出る)

粂一郎　あゝ、いゝ心持だ。

(泣き崩れてゐたしく子、立ち上つて、粂一郎にすがりつくと同時にくづれる)

しく子　貴君。堪忍して下さい。

粂一郎　何が堪忍だ。お前も俺が云つたことを、負け惜しみだと思つてゐるのかい。

しく子　(默つてゐる)　……。

粂一郎　俺は、お坊ちやんぢやないよ。お前と結婚する前から、昔お前と渡部とが關係があつた位は、ウス〳〵知つてゐたのだよ。だが、そんなことは俺には問題ぢやなかつたのだ。現在のお前が、彼奴をどう思つてゐるかゞ心配だつたのだ。それが、今日でスツカリ分つた。

しく子　本當にゆるして下さる?。

粂一郎　ゆるすとも、とつくに許してゐるのだよ。

しく子　ぢや、なぜ早くから、打ちあけて下さらないの。

わたしどんなに、心配したか分らないわ。
兼一郎　だつてさ。お前が、昔のあやまちを償ふつもりかなんかで、一心に俺を愛してくれるのが、いぢらしくてつい云へなかつたんだよ。
しく子　まあ……。
（しく子、兼一郎の胸に身を寄せる）
兼一郎　渡部の奴、俺達を少しでも、不幸にしたつもりでゐるのかしら。どうだい、いゝ夕立だナ。お前だつて、胸がすーつとしたゞらう。
しく子　わたし、こんな嬉しいことはないわ。今死んだつていゝわ。
兼一郎　……俺も胸がすーとした。あゝ、もつと降つてくれ。もつと降つてくれ。渡部の奴、ザブ／＼に濡れてゐるだらう。はゝゝゝゝ。

──幕──

岩見重太郎

—An Allegory—

人物

伊東　亘　江州新田村に道場を開ける劍客。六十に近し。

村松平左衛門　伊東の高弟。同村の豪農。五十を越えたる老人。

村松平太郎　その子。伊東の弟子。年齢二十五六の若者。

下男　重　助　村松家の召使。――實は天下の豪傑岩見重太郎――

赤星主膳
大日五郎左衛門
岡野新之丞
金谷三郎左衛門
長尾監物
吉長八左衛門　｝六人組と稱する道場荒しの劍客。

山崎七郎次　伊東の弟子。

その他重要ならざる人物多勢。

場所　江洲新田村。

時代　豐太閤在世當時。

第一場

伊東亘の道場。拭き浄められたる板の間、正面に床の間があり、八幡大菩薩の軸がかゝつてゐる。その前に神酒が供へてある。正面の羽目板に「兵法心得之事」「稽古日之事」など云ふ貼り紙がある。下手に木刀掛があり、木刀が幾本となくかゝつてゐる。幕開く。中央に道場の主、伊東亘が病氣の體にて衰弱した顏をして、坐つて居る。上手に、赤星大日以下、六人の武者。之れに對抗するやうに村松平太郎以下六人の弟子が坐つて居る。その背後に多くの門人が堅唾を呑んで控へてゐる。

伊東　（稍苦しげな呼吸）昨夜も申上げた通り、折角お立ち寄り下されたに、拙者折惡しく病中にて、殘念ながらお相手いたしかねる。未熟な門弟ども、とてもお相手にはなるまいが、一手宛教授下さらば恐悅ぢや。

赤星　尾州清洲からの道中、江州の新田村には、神影流の

達人、伊東一刀殿が、道場を開かれ居ると聞き、樂しみにして參つたに、御病中とは殘念至極ぢや。お見受け申した所、血色も惡くはないが、御病中とならば、是非に及ばぬ。それ各々方、支度いたさうでは御座らぬか。御門弟との試合も又一興で御座らうぞ。あはゝゝゝゝ。

大日　(羽織を脱ぎ捨てながら)　われ等が訪ね參る諸國の道場の主、大抵は病氣、差支へ、でなければ、他出だ。あはあはゝゝ。

(門弟達氣色ばむ)

村松平太郎　何と云はるゝ。今一度申されて見い。

大日　幾度にても申す。われ等が訪ね參る諸國道場の主、多くは病氣、差支へ、他出だと申すのぢや。あはゝゝ。

村松　なに！　聞き捨てならぬ一言。然らば、當道場の主、伊東先生が作病でもして、貴殿達との立合を避けられたとでも申すのか。

大日　左樣とは申さぬ。たゞ、今迄の例を申して居るのぢや。あはあはあはゝゝゝ。

村松　(口惜がる)　貴殿のお相手は、拙者所望ぢや。

大日　相手にとつて、不足ぢやが、望みとあらば、叶へて遣はす。

村松　何を！

(村松、憤然として立ち上らうとするのを、横に居る山崎三郎次が止める)

山崎　村松氏。先づお靜まりなされい。それでは立ち合ひでなくて、喧嘩ぢや。武術の試合に意趣があつてはならぬ。お靜まりなされい。

村松　とは申せ。

山崎　はて、穩やかに、順番をお待ちなされい。

(村松、漸く座に返る)

伊東　大日氏とやら、諸國道場の主、貴殿達がお尋ねになると、多くは、病氣になるとは、笑止千萬の話ぢや。この伊東一隆齋に於ては、年こそ寄つたれ、痩せ腕の鍍を伸して、お相手仕る筈なれど、今年、卯月の始めより、中風の氣味にて、肝腎の右の手が利かぬのぢや。作病とお蔑すみあらばあれ。八幡！　この一隆齋には、毛頭疚しい處が、御座らぬ。拙者お相手仕つらいでも、門弟達には、未熟なれども、拙者の太刀筋が流れて居る。御廣言は倍置いて、先づお立ち合ひ下されい。それ、柳田。その方第一にお相手致せ。

赤星　面白い伊東殿のお言葉ぢや。然らば、お弟子達のお手の内、神影流の太刀筋を拜見致さう。吉長氏、貴殿先づお立ち合ひ下されい。

吉長　承知致した。

(吉長、柳田の二人、各々列を離れて、さし向ひ、一

禮して立ち上り、氣合を激しく打ち合ふ。柳田、籠手をしたゝかに打たれる）

柳田　參つた。

吉長　これは失禮。あはゝ。

赤星　あはゝ。柳田氏とやら。仲々のお腕前ぢやが、まだ修行がちと足りぬとお見受け申した。折角、お勵みなされい。

伊東　（稍興奮して）それ、近藤氏！

（赤星、金谷三郎右衞門に目配せする）

金谷　拙者お相手を。

（位を取つて、容易に動かない。しばらく睨み合つた末、激しく數合の打ち合の後、近藤肩口を打たれる）

近藤　參つた。

大日　金谷氏。何時も乍らの早業ぢや。天晴れ、天晴れ。

伊東　次は、山崎氏。心を靜かに、落付いて立合ひなされい。

山崎　はゝゝ。（木刀を持つて前に出る）

赤星　長尾氏。貴殿お出て下されい。

（二人、立ち合つた後、山崎面を打たる）

山崎　參つた。

伊東　（激して）佐々木氏。お出なさい。

赤星　岡野氏。貴殿お引き受け下されい。

（二人、數十合立ち合ひたる末、佐々木破れる）

伊東　三田村氏。貴殿、お出なされい。

（三田村、木刀を提げ、無言に出て來る）

赤星　お相手は拙者が致さう。

（二人立合つた末、又々三田村が破れる）

赤星　神影流のお手の筋とは、これか。お見受け申せば、伊東殿御高弟のやうぢやが、まだ、腕前はお若い。修行が肝腎ぢや。だが、中氣の先生のお稽古では、修行の程も心細い。

伊東　（無念の形相凄まじく、急き込んで）村松氏。御身一人ぢやぞ！　十三の年から、當道場で鍛へ上げた腕前を見せて吳れ。殘つたのは御身一人ぢやぞ。この一隆齋の流風が、興るも癈るも御身一人ぢやぞ。

村松　仰せには及ばぬ。摩利支天の化身にてもあれ、見事打ちひしいで見せ申す。いざ、大日氏。お出でなされい。

大日　（嘲笑し）あはゝ。御身最前から見受くる處、百姓面ぢやな。鋤鍬持つ手で、木刀を持つて居る生兵法が、大怪我の元なのぢや。拙者の木劍で、頭の骨を打ち碎かれない前に、引き下つたがお手前の爲であらうぞ。

村松　なに！　云はして置けば、様々の雜言。多言は要らぬ。腕で來い、腕で。

大日　何を百姓の小悴め。

（二人、激しく立ち合ふ。平太郎、必死の勢ひにて打つてかゝる。長き激戰の後、平太郎、肩口を打たれる。平太郎、無言にて尙戰ふ）

大日　參つたか。

村松　まだ、まだ。

大日　剛情な奴め。

（激しく立ち合つたる末、平太郎再び肩口を打たれる）

村松　參つた。（漸く木刀を引く）

（大日、更に踏み込んで、面を强く打つ。平太郎の額から血が流れる）

村松　（額を抑へながら）無念ぢや。

大日　はて、よい氣味ぢや。その傷を記念に、之から生兵法は廢して、百姓に精を出すがよい。そんな生優しい刀の振り方で、武士の身體が打てると思ふのか。

（平太郎、傷を抑へながら呻吟して居る）

赤星　伊東氏。もう、門弟の方は御座らぬか。

伊東　（無念を堪へながら）殘念ながら、免許の者は、これ丈で御座る。

赤星　其では、御門弟達に、流れて居ると云ふ貴殿の太刀筋は、これで御座つたのか。あはゝゝ。鳥無き里とは申し乍ら、斯樣な稽古で、劍道師範抔とは、片腹痛い事で御座る。お氣の毒乍ら、劍道指南の看板は拙者達申し請けて歸る

村松　（傷の痛みを抑へ乍ら）餘りと云へば、理不盡な申し分

赤星　異存があるなら、腕で來い、腕で。

（門弟達殘念がる）

大日　腕づくの異存なら、聞いてやる。でもなければ、看板を脫して歸るは、武道の習ひぢや。

村松以下門弟達　何を！（皆刀に手をかける）

大日赤星等　（刀を引き寄せ）面白い。拔くなら、拔いて見ろ。

（山崎七郎次、同僚達を宥める）

山崎　早まつてはならぬ。刀を拔いてはならぬ。我々の腕前未熟の到す處、殘念乍ら仕方御座らぬ。刀を拔いて、身命を賭する場合でない。拙者にお任せなされい。

尙、逸る門弟達を押靜め乍ら、大日赤星の方へ來る）

山崎　各々方のお腕前、揃ひも揃つてお見事なものぢや。當道場抔は、百姓鄕士共の悴が、ほんの片手間に武術修行を致す處なれば、碌なお相手も致し兼るのは、始めから分つた事で御座る。さうお蔑みなされないで、當道場

へ暫く御滯在、我々に一手二手の御教授を下されたい。失禮乍ら、御出立の節には、お草鞋代抔は、御不自由のないやう、我々にて御合力致す。

赤星　（忽ち態度を改め）　さう仰しやるなれば、お話がよく分つた。我々なども、最初から喧嘩を買ひにまゐつたのでは御座らぬ。諸國修行の道々、琵琶湖見物の序に、二三日、お宿など願ひたくて罷り越したのぢや。其のお志で、至極滿足ぢや。大日氏。さつきから、いかい雜言を致したな。

大日　いかにも、ついした行き懸りから、喧嘩沙汰に相成り、大人氣なう存じ居つた。

山崎　早速の御承諾で、恐悦ぢや。其では何卒、奥の離れの方へ。

村松　山崎氏　我等不承知で御座るぞ。

山崎　何故。

村松　我々丈ならば兎も角、病中の伊東先生を雜言した人人と、同席は愚か、一手二手の教授抔とは、思ひも寄らぬ事ぢや。

赤星　なに……。

山崎　村松氏。拙者にお任せ下されい。貴殿の心中は察しる。が、こゝの處は、拙者にお任せ下されい。先生は、御病氣中ぢや。肝腎の腕の利かぬ御病中ぢや。先生の御病氣に免じて、何事も御辛抱下されい。先生の御病中萬一の事があつては、我々が相濟まぬ。

村松　いや、勘辨ならぬ。ものには、勘辨なる事と、ならぬ事がある。病中とは云へ、先生の御心中を察するがよい。當道場が受けた恥は、我々の血によつて、雪ぐ外は御座らぬ。

山崎　さうなくてはならぬ處ぢやが、貴殿には、平左衞門と云ふ親がある。母御もある。その上、貴殿は、一人息子ぢや。伊東先生にも、孃樣があり、奥樣がある。我々にも、妻子眷族がある。一旦、眞劍を拔くと、木刀の試合のやうには參らぬ。一旦の怒りは、强いとは申せ、親の敵でもなく、深い意趣遺恨があると云ふのでもない。少し堪忍して置くと、その額の傷痕が間もなく消えるやうに、間もなく消えるものぢや。こゝの處は、拙者にお任せなされい。御身の云ひ分は、後にて幾らでも聽く。

村松　いや、ならぬ。ならぬと申せばならぬ。たとひ斬り死にいたすとも、眞劍の立ち合ひをいたす。

山崎　はて、困つた。誰かある。誰か、村松殿の御親父を呼んで來い。

門弟の一人　さつき、小作の作藏が、走り歸りましたから、御子息の怪我を知り、直ぐと之へ參るで御座らう。

他の一人　（立ち上りて、戸外を見乍ら）　あゝ、參られ

た。下男を連れ、土橋を渡つて來られるのは、慥かに平左衛門殿ぢや。
赤星　腕づくなら腕づく、扱ひなら扱ひ、鬼の面なら鬼の面、菩薩の面なら菩薩の面、どちらでもお出しなされい。
大日　其小倅に、眞劍を抜かして見るのも一興ぢやらう。「参つた」では濟まぬからな。
村松　おのれ！（眞劍を抜きかゝる）
山崎　はて、お待ちなされ。御親父も見えると云ふに。
村松　とは云へ、口惜しう御座る。
（平左衛門、下男重助、實は岩見重太郎を連れて來る。平左衛門は、白髪を混へたる老人。重助は、六尺に近き偉丈夫。但し顔は稍痴鈍な風をして居る）
平左衛門　（道場へは入り乍ら、急き込んで）平太郎。いかゞ致した。
村松　父上。殘念で御座る。眉間を此の様に傷つけられた上、様々の雜言を受けて御座る。その上に、當道場の看板を脱さうと云ふ理不盡な申し分。
平左衛門　いかにも。其て其方は、如何に致すと云ふのぢや。
村松　看板を取られては、先生の耻辱故、刀にかけても、渡すまじい所存を堅め申した。
平左衛門　尤もぢやが。（相手を見返し、相手が惡いと云ふたやうな表情をする）早まる處ではない。
山崎　流石は平左衛門殿ぢや。拙者も夫を申し居つたのぢや。先生御病中に萬一の事あつては、一大事ぢや。何も刀にかける許りが能ではない。通り雷は……、いや、この場は兎に角、圓く收めるに限る。いざ、赤星氏、大日氏。奥の間へお通り下されい。
村松　父上迄が、そのやうな事を仰しやる！　平太郎は無念で御座る。
大日　口惜しければ、抜いて來い。
村松　抜かいでか。（抜かうとする）
平左衛門　平太郎控へたがよい。
大日　あはゝゝ。弱い犬は、兎角吠えたがるものぢや。
平太郎　おのれ！
（平太郎刀に手をかける。重助、末座より駈け出して、平太郎を止める）
重助　若旦那。お待ちなされい。この重助にお任せなされい。いや、なに、そこなお武家達。
（赤星、大日等屹となつて見返る。一座の者驚く）
平左衛門　重助。控へい。お前が出る所でない。
山崎　下郎。下れい。無禮ぢや。下れい。
重助　いや、下らない。俺は、その御武家達に用がある。聞けば、腕づくで、道場の看板を持つて行くと云ふ。面

白い。持つて行つて貰はう。
山崎　氣が狂つたか。控へい。
重助　いや、控へぬ。氣は狂つては居ない。
（重助を捕へようとしてかゝる山崎を、片手ではねのける。山崎、一間半ばかりよろめいて倒れる）
重助　お武家達。返事がないのは不承知か。
大日　下郎と存じ、相手にしなければ、付け上り、雑言を致す。夫へ直れ、木刀で打ち殺して呉れる。
重助　面白い。打ち殺して貰はう。
（重助前へ出る）
平左衛門　重助、控へい。無禮ぢや。控へい。
重助　いや、默つて見て居て下されい。此歴お武家は、兩刀を手挾んだ丸木も同然だ。さあ、打ち殺して見い。
大日　何を。
（眞つ向うから打ち下す。重助、體をかはすと等しく、利腕を捕へ、肩に擔いで板の間へ叩き付ける。大日、悶絶して了ふ。岡野、吉長、金谷、長尾の四人、木刀をとつてつぎ〱にかゝる。重助、飛鳥の如く、身をかはし、四人を左右に取つて投げる。みんな、打ち處が惡いと見え起き上れないので、苦しがつて居る）
赤星　下郎。推參な。
（立ち上りさま、打つてかゝるのを、直ぐ利き腕を捕へ、床に叩き付け、起き上るのを起さずに上から腰を掛ける。重助、赤星のたぶさを摑んで、頭を揺り動かし乍ら）
重助　貴樣がこの連中の統領だな。僅かの腕前を鼻に掛け、武術修行とは名のみ、諸國の道場を押し廻つて、金錢を强請り居る山賊にも等しい奴め。斯樣な未熟の腕前にて、道場を荒す抔とは片腹痛い。今日唯今、改心致さばよし、いやと申さば、此の儘に捻り殺すぞ。（咽喉を强く壓する）
赤星　（苦しがる）許されい、許されい。謝まつた、謝まつた。
重助　本心か。
赤星　本心ぢや。
重助　本心ならば、許してやる。仲間の者を引き連れ、速刻當地を立去れよ。
赤星　畏まつた。
重助　ぢや、許してやる。命冥加な奴ぢや。
（赤星這々の態にて起き上り、大日その他の者を起し、何か耳に口を付けて囁く）
赤星　伊東先生。今日は、いかい失禮致した。御無禮の段平に御許し下されい。當道場を荒す抔云ふ所存は毛頭な

かつたが、ついした言葉の間違から斯樣な事になつて、誠に相濟まぬ。御緣があつたら、又御目にかゝらう。

伊東　（さつきからの事件を、無言の裡に堪へ忍んで居たが、事件の急激な轉回に吻と安心したやうに）何事も拙者病中の故と、御勘辨下されい。

赤星　御挨拶痛み入る。門弟衆。さらばぢや。

（六人支度を整へて歸り去らうとする）

重助　お武家達は、何方へ行かれる。

赤星　京へ參るのだ。

重助　うん、宜しい。

（六人、遺恨を含むやうな態にて、歸り去る。今迄、重助の武勇に感激して默然たりし門弟共「わつ」と聲を立て乍ら、重助の傍に驅け寄る）

門弟甲　はて、無雙の勇力ぢや。

門弟乙　人間業とは思はれぬ。

門弟丙　力倆と云ひ、兵法と云ひ、拔群ぢや。

平左衞門　（重助の前に進み出で乍ら）唐崎で御身の水難を助けた折から、御武家ではないかと疑つて居たが、斯樣な豪傑とは夢にも存じ寄らなかつた段、平にお許し下されい。此上は、本名を名乘つて、拙宅に何時迄も御逗留下されい。

重助　いや、拙者は名は無い者ぢや。

伊東　いや、お隱しあるな。天下に聞えた豪傑に違ひない。御名をお名乘り下されい。

重助　あはゝゝ、今は、是非に及び申さぬ。拙者の本名は、筑前名島の城主小早川隆景の臣下にて、岩見重太郎兼相と申す者で御座る。

平左衞門　さては、御身が、信州風越山にて、狒々退治をなされた岩見重太郎殿で御座つたか。知らぬ事とは申し乍ら、いかい、失禮を致しました。

（門弟達、驚いて重太郎を凝視する）

伊東　御身の御蔭にて、當道場の看板も汚されず、恐悅に存ずる。何卒、當道場へ御滯在なされて、門弟達を御教授下されい。

平左衞門　私よりも、その儀、平にお願ひ致します。

重太郎　御懇篤なる御願ひにては御座れども、先日、唐崎にてお身の爲に命を助かりたるまゝ、行く手を急ぐ身にては御座りしかど、何がな御恩報じを致さんと、かくは滯在致した。が、今日の働きを貴殿への寸志として、明日にも當所を發足致したう御座る。其上、彼の六人の武者修行ども、中途より立ち歸り、再び禍を致すやも計られざるによつて、拙者これより後を追ひ、京迄追ひ拂はうと存ずる。

平左衞門　なるほど。深き御配慮の程忝けない。然らば、

私にて衣服大小杯一通りはお揃へ致しませう。
（門弟ども酒肴を携へて出て來る）
門弟甲　さあ、岩見先生。何はなくとも、一獻お過しなされい。勝祝ひで御座る。
重太郎　酒は拙者大好物で御座る。ずんと、お注ぎ下されい。
（重太郎、二三杯立て續けに飮む）
伊東　御見事、御見事。
重太郎　伊東氏へもお盃をさし上げる。お一つ、いかゞで御座る。
伊東　病中なれども、一つ過ごすで御座らう。（伊東受けて重太郎に返す）
重太郎　次は、村松御父子。
（重太郎と村松父子との間に、盃の應酬宜しくある）
伊東　門弟一同も、岩見先生の武勇に、肖るやう、お盃を頂戴致せ。
門弟一同　はつ。
（門弟、次ぎ／＼に重太郎から盃を貰ふ。漸く酒宴らしくなつて來る）
平左衞門　それでは、岩見先生。私親子は先生の明日御發足の用意も致し、平太郎が傷の手當ても致したう御座るによつて、一足お先へ失禮致す。
重太郎　お歸りなれば、身ども同道致す。（と云へど、久し振りの酒に未練あるもの丶如し）
平左衞門　先生は、ゆつくりとお過ごしなされい。まだ暮れ前で御座れば、八ツ時迄は、ゆつくりお過ごしなされい。
重太郎　ぢやと申して、御主人達が歸るのに、下男の重助が……。
平左衞門　いや、御冗談を仰せられますな。何卒、その儘にゆつくりと、お過ごしなされませい。
重太郎　然らば、今一二獻過ごしてから、後より參るで御座らう。
平左衞門　然らば、御免下されい。
（平左衞門、平太郎と一緒に歸り去る）
重太郎　久し振りの酒の味は格別ぢや。御門弟衆。この大盃に、なみ／＼とお注ぎ下されい。
（門弟、酒を注ぐ。重太郎、ぐつと飮む）
門弟の一人　岩見先生。酒の肴に武者修行のお話が承りたい。
重太郎　うん、よからう。奥州での大蛇退治の話を致すかな。それとも、狒々退治の方に致さうかな。あはゝゝ。

第二場

情　景（第一場と同じ。唯、時が經つて居る。重太郎も門弟も、十二分に醉つぱらつて居る。夜は八ツに近し）

重太郎（酩酊して、話に油が乘つて居る）おのれ怪物と、藤葛卷の一刀、拔き打ちに背中へ斬り付ける、とビーンと音がし跳ね返つた。失策つたりと、眞つ向から一刀浴せると、背骨に當つて折れて了つた。

門弟一同　うーむ（と堅唾を呑む）

重太郎　これはと思ふ途端、怪物は右の手に抱へて居た娘を捨て、振り返りざま、火焰の如き口を開いて飛びかゝつて參つた。刀が折れて得物を失ひ、流石の拙者も些か狼狽したと見え、右腕に嚙み付かれたのは不覺ぢやつた。が、嚙み付かれたのを幸ひに、怪物の兩手を引つ摑み乍ら、傍の岩角へ力まかせに投げ付けた。

門弟一同　うーむ。

重太郎　起き上らうとする所を、のしかゝつて、拳を堅め眉間のあたりを、續けざまに五つばかり毆りつけると、流石の怪物も異樣な聲を出し乍ら、息が絕えた。

門弟の一人　はあ、成程。さて、その怪物の正體は。

重太郎　劫を經た狒々だ。

門弟の一人　して、身の丈は。

重太郎　六尺もあつたらうか。

門弟一同（驚く）……

門弟の一人　して、その娘はいかゞ致しました。

重太郎　氣絕して居つたが、手當てを加へると、蘇生致した。

門弟他の一人　親達の喜びは、さぞかしでござりませう。

重太郎　あはゝ、思うても見るがよい。重太郎なかりせば娘の命はないものぢや。あはゝゝ。

門弟の一人　御尤もで御座る。

門弟他の一人　先生の武勇によつて助けられた者は、世に限りも御座るまいな。

重太郎　左樣に向うざまに褒められると恐縮ぢや。が、義の爲めには、重太郎の劍は、何時にても鞘走るのだ。

（その時一人の百姓が、蒼くなつて驅け込んで來る）

百姓　重助殿。いや違つた、岩見先生。大變ぢや、大變ぢや。

重太郎　うん、作藏か。何事ぢや、何事ぢや。

作藏　大變ぢや、大變ぢや。今、六人の武者修行者が、お宅へ斬り込み、大旦那樣も若旦那樣も敢なき御最期ぢや。

重太郎　なに！　平左衞門殿にも、平太郎殿にも、あの侍どもの手にかゝつたと云ふのか。

作藏　夫ばかりではない。下男が三人、女中が一人、深手を負ひました。
重太郎　おのれ、憎き六人の奴。重太郎が驅け付けて、一討ちに致して呉れる。
（重太郎、唯一人、疾風の如く驅け去る）
門弟の一人　我々も、かうしては居られぬ。岩見先生にお助太刀申さう。
他の二三人　我々も續かう。
（六七人の門弟、驅け去り、後に五六人殘る）
伊東　（さつきから、重太郎の氣焰を微笑を含み乍ら聽いて居たが）平左衞門殿親子が横死を遂げたとは、いかにも氣の毒ぢや。右の手が利かぬのが殘念ぢや。
山崎七郎次　（重太郎の出現以來、常に傍觀者の位置に立つて居たが）飛んだ事になつたなあ。圓く收めればよかつたのぢや。
伊東　當道場の事で、村松親子を殺させては、拙者が申し譯が立たぬ。あゝ、殘念ぢや。拙者に刀が取れぬのは。
（その時、下手から第一場の六人の侍銘々覆面して忍び寄り、伊東頁に斬り付ける。伊東斃れる。殘れる門弟達、銘々刀を拔いて驅け向ふ。油斷に乘ぜられたので手もなく斬り倒されて了ふ）
（山崎七郎次、奮戰最も努むれども及ばず、左の高股を斬られる）
山崎　殘念！
（六人達山崎を圍む）
六人　最前の重助とやらは、いづれに居る。あの男の在所を云へ。在所を云へば、汝の命は助けてやる。
山崎　汝達が、平左衞門を討つたと聞き、唯今驅け付けて參つた。
赤星　うむ。喰ひ醉つた處を、一討ちに致さうと思つたに、命冥加な奴ぢや。
大日　あの下郎を討ち漏したは殘念ぢやが、これから後を追つては、時刻が移る。村松親子、伊東亘、それに門人の五六人も斃して置けば、我々の遺恨は晴れた。いざ立ち退かう。
赤星　村松の家で、百兩ばかり有り金を浚つて來た。
大日　手廻しのいゝ事ぢや。いざ參らう。
（重太郎、息を切らして飛び込んで來る）
重太郎　待て！　待て！（正面へ來て、伊東その他の死骸を見付ける）俯は、伊東氏をも手にかけたか。卑怯未練の犬侍。最前命を助けしは、汝等の惡心を飜させんとの情けなるに、忽ち仇をなす人非人奴。片つ端から薙ぎ倒して呉れるから、さう思へ。
赤星　うむ、下郎よく來た。汝の一命を取りたさに、當道

場を襲つたのぢや。取り逃して殘念だと思ひしに、我から名乘つて來る命の要らぬ夏の蟲奴。下郎。それへ、直れ。

重太郎　下郎とは、云はさぬぞ。村松の僕重助とは世を忍ぶ假の名、實は、筑前名島の城主小早川隆景の家臣岩見重太郎兼相ぢや。

赤星以下六人　（驚く）うむ！　さては。

（みんな、逃げ足が付く）

重太郎　この期に及んで、命を助からんとする卑怯者奴。逃げようとて、逃がすものか。一人一人は面倒だ。一度にかゝれ。

六人　是非に及ばぬ。

（六人、一齊に重太郎にかゝる。重太郎、奮撃突戰し、六人を一刀づゝに斬つて捨てる）

（門弟村役人等、徐々に立歸つて驚いて見物して居る）

重太郎　（六人を鏖し終り）もろい奴ぢや。あはゝ。

門弟共　天晴れのお手柄、驚き入つて御座る。

重太郎　夫にしても、村松父子の横死、伊東先生の横死、御愁傷に存ずる。みんな、犬侍共のなす業ぢや。拙者が即座に敵を討つたのを、せめてもの心遣りとして下されい。

村役人の一人　佐和山の城主石田治部少輔の代官配下の者で御座る。惡人共を即座にお退治なされ、忝けなく存じますれど、御法により代官所迄、一應御同道下されい。

重太郎　（意氣揚々として）義によつて、六人の者を手にかけた者で御座る。何處なりとも、喜んで御同道致す。お役目御苦勞でござる。

村人門人共　古今無雙の豪傑ぢや。村松様、伊東先生の敵を即座に討つて下された。忝けない。忝けない。

（重太郎が、揚々として立ち去るのを、後から賞讃の聲を浴せかける）

山崎七郎次　（深手の爲倒れて居たが、上半身丈やつと立ち上り、怨めしさうに、重太郎の後姿を眺める）馬鹿な侍だ。彼奴が居なければ、此麼事にはならないのぢや。彼奴が居なければ、誰も死ななくて濟んだのぢや。馬鹿奴！　あんなに威張つて歩いてやがる。馬鹿！

——幕——

茅の屋根

人物

細木香之進　二十八、千三百石の旗下の嫡子

おふみ　二十二、その情人、元は新吉原桔梗屋の遊女九重

本多晉三郎　香之進の友人

おかく　桔梗屋の女房

獵師・下男女中その他二三の人物

時及び所

江戸の極く末期。八王子に近き秩父の山中

舞臺情景

江戸を駈落した細木香之進と、その情人おふみとの侘住居。小唄の文句の如く竹の柱にてはなけれども、屋根はまさしく茅にて葺きたり。壁、天井などの樣子をそれに準じて、みすぼらしい。おふみ、色やゝ淺黒けれども、脊高く眸美しき女。庭先にしやがみて、薪を小さく割つて居る　香之進、色白く瘠形なる男。獵師の如き服裝をしながら緣側に腰打ちかけ、丸藥を調合して居る。秋更けたる山家の景色、なんとなく物かなし。

おふみ　（凡てに倦きたるが如き容子）あ！　あ！　堅い薪だわねえ。乾し方が足りないのかしら。手の方が、粉粉になつてしまひさうだわね。

（香之進、無言。おふみも亦、默つて割りつゞける）

おふみ　あつ！（あやまつて、少しく手指を傷けたる如く）あゝ、いたい！　いたい！　すんでのことで、大切な人指し指を、斬つてしまふところだつた。おゝ、いたい！

（頻りに香之進の注意を惹かんとすれども、香之進は默つて居る）

おふみ　（香之進につゝかゝるやうに）おゝ、いたい！　貴郎。何とか云つて下さらないの。私が先刻から、いたい／＼と云つて居るのが、分らないの。

香之進　（冷やかに見やり）大仰だ。

おふみ　まあ！　邪慳な人。妾なんか、指の一本位無くしてもいゝと云ふの。

（香之進默つてゐる）

おふみ　えゝ、無くなつてもいゝと云ふの。

香之進　無くしてもいゝとは云ひやしない。だが、騷ぎ方が大仰だからさ。

おふみ　だつて、この位のことでも、騷がなけりや、こん

な山家では、外に騒ぐことなんかないぢやないかえ。(それでも、指が痛むと見え、度々嘗めて居る)

香之進　(一寸不快な表情)　うむ!　こんな山家か。お前は、到頭本音を吐いたね。こんな山家が、お前の鼻につきかけて居るのは分つて居る。

おふみ　(やゝ不貞くされて)　だつてさ。毎日起きても寢ても同じことばかりだもの。それでも、貴郎が傍に居て下さるときは、いゝわ。貴郎を送り出して、一人ぼんやりして居るときは、本當に情なくなるわ。

香之進　そんなことは、覺悟の前ぢやないかえ。

おふみ　でも、かうまでとは、思つて居なかつたわ。手鍋下げても、いとやせぬなど云うて、唄の文句では、粋だけれども、やつて見ると、つらいわねえ。

香之進　(やゝ沈鬱に)　山家丈が、鼻に付いて居るのならいゝのだが、この頃のお前には、この香之進までが、鼻に付いて居るだらう。

おふみ　(開き直つて)　えゝ、何んですつて。もう一度云つて下さい。

香之進　幾度でも云つてやる。この頃のお前には、この香之進までが、鼻に付いて居るだらう。

おふみ　まあ!　貴郎が鼻に付いて居る。香さん。何時貴郎が鼻に付いたと云ひました。何時、妾がそんなことを云ひました。鼻に付いて居る男のために、何うしてこんな苦勞が出來るのです。貴郎と一緒だと思へばこそ、どんな苦勞でも、辛抱して居るのぢやないかえ。

香之進　うむ!　こんな苦勞か。俺が鼻に付いて居ればこそ、この暮しが苦勞になるのだ。そんな筈ぢやなかつたのだが。

おふみ　まあ!　ひどい!　たつた、一年や二年で鼻に付くやうな男となら、花のお江戸を駈落して、こんな山奥へ來るものかねえ。思ふ男と晴れて添ふなら、どんな……

香之進　うるさい!　云はなくつても分つて居る。

おふみ　お前が分つて居ないから、云ふのぢやないか。

香之進　おれ達が、江戸を駈け落ちしたときの、お互の氣持はさうだつた。お前が青屋佐兵衞に、身請されると云ふのを聞くと、俺はカツとなつた。お前を、人手に渡すのが、俺には堪らなかつた。お前に、心中を相談すると、お前は直ぐ死ぬ氣になつて呉れた。あのときに、死んで居ればよかつたと、今俺はつく〴〵思ふのだ。

おふみ　だつて、いざと云ふ間際になつて、未練が出たのは、お前さんぢやないかえ。

香之進　うん俺だつた。おれは、お前が死ぬほど思つて居て呉れると云ふことが分ると、死ねなくなつたのだ。こんなにまで、俺を愛して呉れる女となら、どんな山奥で

も……。

おふみ　皆まで、云はなくつて、それで分つてるのぢやないの。妾の氣持も、貴郞の氣持も。お互にさうした氣持で、暮して行つて居るのだから、いゝぢやないの。

香之進　（悵然として）いゝ筈だつたのだ。お互の心さへ確かなら、たとひ山の奧の侘住居で、お前に手鍋を下げさせても、いつまでも樂しく、十年も二十年も、いや百年でも、千年でも、樂しく暮して行けると思つたのだ。

おふみ　思つたばかりぢやない。樂しく暮して居るのぢやないの。

香之進　嘘を云へ、胡麻化すな。お前が、樂しさうに暮して居たのは、茲へ落着いた當座、ホンの三月か四月の間だつた。俺が射つて來た山鳥を、お前が嬉しがつて、料理して小鍋で煮たり、俺が掘つて來た山の薯を、お前が馴れぬ手付で擂鉢で摺つて欣んだのは、ホンのその當座丈だつた。半年經つか經たない內に、お前は、もうこの暮しが鼻に付き出したのだ。今年の春、山櫻がチラホラ咲き出した頃だつた。お前は、緣側に腰をかけながら「もう、廓でも櫻が咲いて、道中がある時分だな」と、しみじみ云つたのを覺えて居るだらう。あの頃からだ。お前の心が、變りかけて居るのを知つたのは。お前は、それを口に出すまいとした、が、お前の身體中が、それを喋べつて居るのだ。この頃は、朝夕に二度か三度かは、廓の話をしないことはないぢやないか。茲へ來たときに、お互ひに、何と約束したのだ。一切昔の話はすまいと。お前の廓を慕ふ心が募る每に、お前の心が俺を離れて行くのを感ぜずには居られないのだ。

おふみ　（急所を衝かれて、やゝタジ／＼となりながら）まあ！　あんなことを。一年や二年で、お前から離れるやうなそんな淺墓な心だとお思ひかえ。お前と一緒にお江戶を駈落するときから、世間も義理も人情も、みんな捨てゝしまつた妾ぢやぞえ。今更、お前と離れて、何處に行く所があると、お思ひだえ。廓の話をするのが、惡いんだつて。でもこんなにする仕事も遊びもなければ、昔のことでも話しするより外、仕樣がないぢやないかえ。

香之進　（默することと多時）うむ、それだ。昔の事でも話しするより外に仕方がない。うむ、それだ。お前の云ふことにも無理はない。昔の話をするお前を、とがめるのは俺が無理だ。どんな強い戀でも、それ丈けでは人間は暮していけないのかな。どんな戀人同志でも、こんな山奧ぢや、お互ひに退屈せずには居れないのかな。退屈すると云つて、お前を叱る俺が無理なのだ。いくら、俺を思つて居て吳れても、俺が每日のやうに、同じ姿で、鐵砲を携げて猪鹿を追ひ廻すのを見て居れば、だん／＼俺が

鼻に付くのも尤もだな。
おふみ　何を、氣をお廻しだねえ。
香之進　いや、氣を廻すのぢやない。本當のことを云つて居るのだ。まして、お前は小さい時から、廓に育ち、仇し男の數も知り、目のまはるやうな華美な暮しをして居た丈、こんな山家の暮しには、人一倍參るのだな。
おふみ　（香之進の本當の心持には同情し得ざる如く）　お前は、私と一緒に暮すのがいやにおなりかえ。
香之進　何を云つて居るのだ。だが、人間の心はもろいものだな。一緒に死なうとまで、張りつめた心が、かうもろく一年も經たない裡に、參つてしまふのかな。思ひ合つた男と女とが、心中すると云ふのも、相手の心が變るのを恐れるからだ。いや自分の心が變るのを恐れるからだな。……だが、おふみ。お前も桔梗屋の九重と云つて、仲の町では誰知らぬ者もない傾城だつた女ぢやないか。二人殘した書置きに、なんと書いたのだ。たとひどんな、しがない暮しをしても、見事添ひとげて見せると書いたぢやないか。まだ一年になるかならないかに、へこたれて、江戸へのめ／＼歸る譯にも行かないぢやないか。
おふみ　何もへこたれないけれども、見て下さい、この兩手を。わづか一年になるかならない裡に、こんなに荒れてしまつたぢやないかえ。それに顏だつてこんな生毛が延びて、ざら／＼して居るのだもの。妾は、何も日髮日風呂の暮しが、したいと云ふのぢやないけれど、時にはお前に嫌はれない丈の身だしなみはして見たいわねえ。
香之進　何のそんな心配なら、いらぬことだ。俺の爲めに、顏や手が荒れるのだもの。何の、お前を嫌つてよいものか。だが、心まで荒して吳れるな。いゝか、もう少しの辛抱だ！　もう少し世間の噂が、靜まつたら、せめて上方へでも落ちて行つて、世間並の暮しはさせてやるからな。

（老人の獵師、柴折戸の外へ近づいて來る）

獵　師　旦那！　御用意は出來ましたかな。
香之進　茂重か。あゝ出來た！　先刻から待つて居た。尾白澤の模樣はどうだ。
獵　師　居りますよ。今道で、與兵衞に逢ひましたがな。與兵衞の伜が、昨日夕方松葉を蒐めて居ると、仔を三疋連れて、二十貫もある牝猪が、つひ目の先を通つて行つたと云ひますよ。
香之進　今朝は、鹿の鳴き聲もしきりに致して居つたな。
獵　師　鹿なら、あすこ丈でも、何百頭と數へ切れますまい。
香之進　（銃を取上げながら）　さうか、ぢや今日は、あぶ

れはないな。ぢや、おふみ行つて來るよ。
おふみ　行つていらつしやいませ。
獄　師　奥さま。御免下さい。
おふみ　（二人の後を見送りながら）立派なお旗本のたつた一人の跡取が、あんな苦勞をして居るのも、みんな妾のためだとは思つて見るものゝ、ほんたうに、飽き〱してしまふほど、退屈だな。また一昨日のやうに、富山の藥賣でも來て、江戸の噂でも聽かして吳れるといゝのだがな。
（甲の子供二人、急にあわたゞしく走り出して來る。そして柴折戸の前に止まる）
子　供　あゝ、茲の家だよ。茲の家だよ。
（旅姿をした本多晋三郞。（若き精悍なる武士）出て來る。桔梗屋の女房おかく、下男と女中とを連れて出て來る。下男は荷物を持つて居る）
晋三郞　おゝ、いゝ子だ。いゝ子だ。よく敎へて吳れた。内儀、この家らしいな。
おかく（家の容子を見ながら）本當に、惚れた同志の侘住居には、お誂向きの家だね。だが、こんな家にあの華美好きな九重さんが、納つて居ようとは何うしても思はれないわねえ。（女中と下男に）ぢや、お前達は、荷物を此方へ渡して先刻の家で待つておいで。

下男と下女　畏りました。
（二人退場する）
晋三郞　物もう。物もう。
おふみ　（にはかな來客を、いぶかしみながら）どなたで御座いますか。（戸をあけて晋三郞を見て駭く）まあ！晋さん！（しばらく語なし）……びつくりした。（おかくを見認めて）まあ、お内儀さん！　あゝ、妾恥しい。
（急いで奥へ駈け入る）
晋三郞（彼女を追ふやうに、家の中へは入つて來ながら）何の恥しいことがあるものか。好いた同志の侘住居ぢやないか。誰にだつて、大威張で見せられるぢやないか。さあ、内儀お前も失禮しては入つて來るといゝ。
おかく　ぢや、御免なさいねえ、ふみちやん。
おふみ（仕方なさゝうに）どうぞ。
晋三郞　九重さん！　久し振りだね。ハヽヽヽヽ。
おふみ（恥しがりながらおかくに）本當に、あの節は、何と申譯してよいやら、大それたことをいたしました。今茲で、お目にかゝるのは、死ぬやうにつらう御座います。本當に穴があれば、這入りたい位に思ひます。
おかく（慰めるやうに）過ぎたことは、お云ひでない。過ぎ去つたことは、過ぎ去つたことだから。

おふみ　はい。
おかく　それよりも、大層やつれたねえ。かう云つちや、わるいけれど、折角の器量を臺なしにしておいでだねえ
晉三郎　細木は留守かね。うむ、細木もお前さんも、變りはないかい。
おふみ　はい。
晉三郎　それは、何より結構だ。
おかく　ねえ、ふみちやん。今度わたしが來たのは、何もお前の追手として、連れ戻しに來たのではないのだよ。何もわたしもお前は五つの年から、手鹽にかけて育てたから、娘同樣に思つて居るだらう。お前が、廓を出てからも、風につけ雨につけ、お前のことは忘れたことはないのだよ。いつか一度はお前に會ひたいと思つて居たのだが、つい此間八王子から歸つて來た馬道の古道具屋さんが、店へ來て、八王子在の山中に、旗本のお武士が、元吉原で、おいらんをして居たと云ふ美しい女と、侘住居をして居ると云ふ噂を聽いたと、話して居るのを、妾がちらりと耳にしたので、妾一人の胸に收めて、そつと本多樣に話して見ると、てつきり二人に違ひない。俺は、ぜひ細木に會ひたいと思つて居る矢先だから、これから直ぐ訪ねて行くと、かう仰つしやるので、妾もお前に會つて話したいことがあると云つて、お伴を願つて來た譯なの。八王子なら、一日宿りの旅だから、無駄になつてもいゝと思つて、かうして訪ねて來たわけなの。
晉三郎　（ふと思ひ出したやうに）細木は何處に行つた
おふみ　あの裏山へ行つて居ります。
晉三郎　うむ！　裏山へ、何をしにだ。
おふみ　猪を、射ちに行きました。
晉三郎　猪を射ちに、千三百石の旗本の世繼が、獵師の眞似をして居るのか。ハヽヽヽ。ぢや、内儀！　俺が茲に居たのぢや話しにくいだらう。俺は、これから香之進に會つて、別々に話をするから。
（裏山にて、銃聲きこゆ）
晉三郎　うむ、あれだな。
おふみ　はい。
晉三郎　ぢや、直ぐ其處に居るのだな。それぢや、俺は直ぐ裏山へ行つて、香之進に會はう。何う行くのぢや。
おふみ　（柴の戸のところまで送つて出て）あのう、この森の中の道を、眞直に行くと小さい鎭守のお宮がありますから、そのお宮を左にとつて、右へ〳〵登つて行くと尾白澤と云ふところへ出ます。其處に猪が來て居ると云つて先刻參つたので御座んす。
晉三郎　分つた。それぢや、山で會へなかつたら、直ぐ引歸して來るからな。

（吾三郎出て行く）

おかく　ふみちやん、今日は相談があつて來たのだがねえ。お前、もう一度、江戸へ歸る氣はないかえ。

おふみ　（駭いて）　えゝ！

おかく　何もお前を、むりやり連れて行かうと云ふのぢやないから、安心しておくれ。たゞ、妾の云ふことを、合點したら、一緒に行つておくれでないかえ。かう、突然云つちや分るまいけれども、今茲で香さんと別れて、別別になる方が、お前の爲にも香さんのためにも、一等爲になると思ふのだがねえ。ふみちやん。よく話してきかせて上げるが、お前さんが駈落ちした晩の青屋の旦那の男らしさと云つたら、廓中で感心しない者はなかつたよ。私の家で追手を出さうとすると、青屋の旦那が止めて、女の心が離れてしまつて居るのに、身體丈引き戻して何うするのぢや。身請の話が、纏つた後だから、たとひ女が逃げても、身代金は俺が立派に拂つてやるとかうお云ひのだぞえ。あの時、表沙汰にして御覽！　お前は直ぐ捕つて、どんな目に逢つて居るか分らないし、香さんのお身の上だつて、何うなつて居るのか分らないのだぞえ。お前さん達が、こんな山の奥でも安穩に過して居れるのは、みんな青屋さんの俠氣からだと思ふのだがね。妾は、青屋の旦那の男らしさに感心したものだから、お前を一度でも青屋の旦那の傍へさしあげないと、妾の義理が立たないと、かう思つたのだよ。だが、考へて見ると、お前と香さんとは、四年越の深い仲で、お前が駈落ちして、どんな山の奥でゞも添ひとげようと云ふ意氣は、涙の出るほど嬉しかつたから、青屋さんには濟まないと思ひながら、お前のことはそのまゝにして置いたさ。ところが、本多さんのお話ぢや、香さんがお前と江戸を落ちたとき、香さんのお家ぢや、親類中が寄り合つて、香さんを病氣引籠と云ふことにして、お上へ屆けて置いたさうだが、香さんが江戸に居ないことが、段々目付衆に分つて來て早く香さんがお家へ歸らないと、千三百石のお家が、何うなるか知れないと云ふのだよ。本多さんのお考ぢや、今何うしても香さんを連れ戻して、今度公方樣が御上洛になる御伴の人數の中へでも、お這入りになると、親御の勘氣も直り、お家も潰れないで濟むから、香之進に會つて、何うしても說き伏せて、連れて歸るとかうお云ひだから、わたしもお伴をして、九重の方は妾が納得させますと云つて、かうして一緒に來た譯だが。どうだい、香さんを一生獵師で了らせるのが、お前の本望かい。お前は旗本のお家のお世繼が、一生猪鹿を追ひ廻して居るのを傍で見て居て、心苦しく思はないかい。

おふみ　（さしうつむきて言葉なし）

おかく　それにかうして、しがない暮しをして居る内に、暮しが不自由だから、何かに付けて夫婦喧嘩の種が多くなるし、お前だつて、五日も十日も風呂に這入らないぢや、だん／＼器量が落ちて行つて、お前の可愛い香さんから、おしまひには鼻に付かれるのが、落ちぢやないかえ。

おふみ　全くねえ。

おかく　どんなに好いた同志だつて、こんな狭苦しい小屋の中で、一年も二年も、五年も十年も、二人限りで顔を見合はして居りや、お互に飽きが來るのは當然ぢやないかえ。

おふみ　それは、妾も考へないではないけれど。

おかく（勝ちほこつた如く）それに、青屋の旦那は、お前を妾にしようと云ふのぢやないのだよ。なくなつた奥さまの後に直さうと云ふのぢやないかえ。もうこの頃では、廓にもお見えにならず、それかと云つて、後添ひをお取りになつたと云ふ噂もきこえず、何でもお前のことを、心の奥では忘れていらつしやらないと云ふ噂だよ。

おふみ（可なり動かされて）妾、そんなお話をきくと、どうしてよいのやら、分らなくなるわ。

おかく　分らないことはありやしない。自分のため、香さんのためを思へば、立派に分れておくれでないか。可愛い男を、一生埋れ木にしてしまふのが、女の本望かしら。それに、お前青屋様の藏前のお屋敷を知つておいでかい。屋根はみんな銅で、葺いてあると云ふぢやないかえ。茅の屋根と銅とぢや、よつぽど段が違ふぢやないか。それに自分で、十人も三十人もの男や女に、侍かれて「奥さま奥さま」で暮すのも、同じ一生なら、孰ちらがいゝかしら。それにお前は、青屋の旦那を滿更嫌つても居なかつたぢやないか。

おふみ（心全く動きて）でも、妾の口から、香さんに切れると云ふことは云へないわ。

おかく　香さんは、本多さんがよく云ふさうだから、お前さんはたゞ別れると云ふ肚さへ、定めて置けばいゝのだよ。えゝ、別れて呉れる。

おふみ（默つて居る）

おかく　こんな山の奥で、そんなみじめな風をして居ちや、女に生れた甲斐がないぢやないか。桔梗屋の九重と云へば、誰知らぬ人もない全盛を續けたお前が、そんな襤褸を着て居ちや、どんなに人目がないと云つても、自分で恥しいとは思はないかえ。

おふみ　もう、何も云つて下さいますな。あの方のため、妾のため、思ひ切つて別れますわ。

おかく（滿足して）おゝ、さう云つて呉れゝば、こんな

山の中へ來た甲斐があつたと云ふものぢや。着換へもなにもないだらうと思つて、ホンのつまらないものだけれども、用意して來たのだぞえ。

おふみ　（久し振りの着物に心を躍らせて）　まあ！　ほんたうに御親切に。

おかく　なに、ホンの間に合せの物だけれども、この小紋はお前に似合ふだらうと思つてわ。この帶は、今年流行の品で、お前には少し華美かも知れないけれど。櫛や笄も一通は持つて來ました。

おふみ　（スッカりうれしくなつてしまつて）　靑屋の旦那は、妾のことをまだ思つて居て下さるかしら。

おかく　何を云つておいでだね。妾が、何の醉興で、こんなに大金をかけて、お前を迎ひに來るものかねえ。

おふみ　（顏を赤くして）　まあ！

（おふみが、衣類に見とれて居るときに、香之進と晉三郎と連れ立つて歸つて來る。戶外にて）

晉三郎　おい、いゝか。未練を出しちや、駄目だぞ。さつぱりと話を付けなければ。

香之進　男が一旦決心した上からは、今更未練がましいことはしない。

（二人家の中へは入る。香之進が歸つたのを見て、おふみあわてゝ衣類を隱くす。香之進不快な表情をなす）

晉三郎　直ぐ見付かつた。

おかく　香さま。お久し振で御座います。

香之進　（可なり、不快な表情をして）　うむ、面目ないなあ。かうしたところを、お前に見られては。

おかく　何ういたしまして。

（四人、しばらくの間、一座白ける）

晉三郎　どうだい！　內儀。お前さんの話はすんだかい。

（おかく肯く）　さうかい。俺の方の話もすんだから、俺達は一旦引きとるとせうか。

おかく　さういたしませうか。

晉三郎　おい！　細木。それでは、俺達は一廻りして來るからな。よく相談して置いてくれ。いゝかい、貴樣の言葉を信じて居るぞ。

（香之進肯くのみ。おふみ、二人を送つて戶の所で無言で別れる。おかくと晉三郎、柴折戶の外にて話す）

おかく　ねえ、本多さん。大丈夫かしら。

晉三郎　怪しいな。細木には、未練がたつぷり有る。

おかく　おふみの方は、大丈夫だと思ひますがねえ。若しかすると、心中話か刄傷沙汰にならないとも限らないと思ひますがねえ。

晉三郎　うむ、やりかねないな。

おかく　そんなことさせちや、角を矯めようとして、牛を

殺すやうなものだからねえ。
晉三郎　少し、心配だな。よし俺は、引返して、そつと容子を見て居よう。
おかく　ぢや、妾もあまり遠くへ行かないで居ませう。
（晉三郎、取つて返して、ひそかに家の背後にかくれる）
（晉三郎とおかくの去りたる後、おふみと香之進はしばらく無言。おふみ、もじ〳〵して居る）
香之進　（激した聲で）おい！　おふみ。茲へ來い。
おふみ　（おど〳〵として）　えゝ。
香之進　その衣類はどうしたのだ。
おふみ　（默つて居る）
香之進　默つて居ては分らない。何うしたのだ。
おふみ　桔梗屋の內儀さんが、持つて來て呉れたのだぞえ。
香之進　詐りを申すな。墮落した抱女の迎に、衣類を新調して來る奴があるものか。靑屋だな。佐兵衞だな。此の糸を引いて居るのは。（嫉妬のため激昂してしまふ）お前は靑屋と知つて、此の香之進と別れるのを承知したのか。
おふみ　（默つてしまふ）
香之進　お前が、靑屋に引き取られると知りながら、此の香之進と別れると云つたのなら、そのまゝには差し置かないぞ。眞直に、白狀しろ。（香之進、刀架より一刀を取り下す）
おふみ　（うつむいたまゝ泣き出す）
香之進　靑屋と知つてか。靑屋と知つてか。
おふみ　（烈しく泣きながら）　妾を殺して下さい。心のかはりやすい妾を、どうぞ殺して下さい。貴君に殺されて何時までも貴君のものになつて居たい。
香之進　よし殺してやる。家のため、將軍家のため、戀を捨てようと思つたが、かうなれば意地だ。お前を殺して、香之進も死んでやる。（刀を拔きはなつ）
おふみ　（本能的に駭いて）　あれ！
香之進　うろたへるな。覺悟しろ。
（晉三郎、飛鳥の如く飛び込んで來る。そして香之進の背後より飛び付く）
晉三郎　馬鹿！　細木、何をするのだ。先刻あれほど云つたのが、分らないのか。
香之進　馬鹿は覺悟の前だ。放せ！　放せ！
晉三郎　細木！　その刀は、貴樣が家重代の貞宗だらう。その刀を持つて居る貴樣のこの腕はなんだ。千葉の道場で、小天狗と云はれた旗本第一の腕ぢやないか。この腕で、その刀で、女一人を殺すのは勿體ないと思はないのか。馬鹿な奴だな。おれが先刻も云つた通り、俺が先刻

も云つた通り、今徳川のお家は累卵の危きに在るのだ。貴様が十三の歳から武藝を磨いたのは何のためだ。今こそその腕で、その刀で、徳川の家を呪ふ薩長の姦賊を斬つて斬つて、斬り廻す時ぢやないか。馬鹿！　こんな山奥で、獵師の眞似などをした揚句に、女などを殺して何うするのぢや。女の方は、貴様を世に出すためにあきらめて居るぢやないか。男の癖に未練な。

香之進　おれの心は、貴様には分らない。

晋三郎　分つても分らなくつてもいゝ。よせ、こんな馬鹿馬鹿しいことは。

香之進　（漸く刀を持つた手を垂れる）　別れる丈けならいい。だが、青屋に………。

晋三郎　別れた女が、何うせうが、そんなことはいゝぢやないか。それを未練だと云ふのだ。

香之進　（佩刀を抜いたまゝ）　が、このまゝいつまでも、暮して行くのはいゝが、俺達の戀がいつまでも續いて行くかどうか分らなくなつて來た。女の心は江戸へ歸りたさで一杯だ。自分の心も、アテにならなくなつて來た。別れ話が出たとき、刀を抜いて振り上げる位、お互に熱がある時に別れた方が、花かも知れない。かうした生活を五年十年續けて行き、お互ひに戀をあせさせてしまひ、醜い二人になりながら、喧嘩しい／＼暮して行かねばならぬやうになるかと思ふと行末が怖しい。本多！　別れるのは今だな！

晋三郎　さうとも。貴様が、其處へ氣が付けば、細木香之進は救はれたのだ。愛する女をいだく欣びも、結構だが、その貞宗を思ひ切り振り廻すことを考へて見るがいゝ。

香之進　斬れさうだな、こいつは。

晋三郎　その切れ味のやうに、スツパリと切れてしまへ。今夜を過すと、どんな未練が出ないとも限らない。桔梗屋の内儀に、男らしく直ぐおふみを引渡してしまへ。男だ、辛抱しろ。

香之進　うむ。

（晋三郎、柴折戸よりおかくを招く）

晋三郎　お前さんは、おふみを連れて、直ぐ江戸へ歸つておくれ。俺は細木と一足遲れて江戸へ入らう。おふみさん。最後だ。名殘りを惜しみなさい。

おふみ　（香之進に縋りながら、わーと泣き伏す）

香之進　何も云はないが、俺の心は判つて居よう。

おふみ　（泣きながら頻りに肯く）

香之進　よし、たつしやで暮せ。

おふみ　はい。（烈しく泣き沈む）

晋三郎　さあ、泣いて居ないで、衣裳を更へるといゝ。

奥へ入つて着換へるといゝ。

（おふみ泣きながら、衣類を持つて奥にはひる）

香之進　抜いてしまつた貞宗のやり場に困るな。

晉三郎　何か斬つて見ろ。

香之進　うむ！　此の棲家も、今は不用だな。よし、えい！（勢よく柱に切りつける、柱見事に両断さる）

晉三郎　可愛い女の身體なんかよりは、よつぽど斬りばえがするだらう。

香之進（狂せるが如く、柱を斬りながら笑ふ）ハ、、、ハ、。

（奥にて、おふみの泣く聲がよく聞えて來る。香之進の笑聲と、おふみの泣き聲との奇異なる交錯の裡に——

——幕——

玄宗の心持

人物

玄宗皇帝　六十を出でたる老天子
楊貴妃　年三十七。美貌なり。されど、日本の俳優が扮して大なる幻滅を感ぜしむるほどの美貌にはあらず。豐艶なる顏。然れども衰頽の色、漸く著し
楊國忠　右丞相。楊貴妃の兄
秦國夫人
韓國夫人
虢國夫人　いづれも大國に封ぜられたる楊貴妃の姉妹
高力士
陳玄禮
その他、重要ならざる多くの人物

時及び所

天寶十五年六月
長安を去る百餘里。馬嵬と云へる寒驛

情景

長安を蒙塵した玄宗皇帝の鳳輦が、馬嵬ケ原に止まつてゐるところ。外に、三人の夫人が乘つてゐる車と、楊國忠の乘つてゐる車とがある。車を引いてゐた馬は水を飼ふ爲に、連れ去られてゐる。三つの車を圍む、混亂した侍臣宮女の群、殊に徒歩の宮女が目立つ。玄宗の車の扉が今開けられたところ。背景に一つの酒店がある。下手、樹立の間に、休息してゐるらしい三軍の旌旗がほの見える。

侍臣甲　（鳳輦に近づきながら）陛下。殿をしてゐます李孫勇からの使の者が參るやうでございます。あんなに、馬を飛ばせてゐます。
玄宗　（車から顏を出す）湯が一杯ないか。
侍臣甲　李孫勇からの使の者でございます。李孫勇からの……。
玄宗　そんなことを訊いては居ない。湯が欲しいと云ふのだ。貴妃が齒が痛むので、嗽をする湯が欲しいと云ふのだ。
侍臣甲　はつはつ。（かしこまつて退き、酒店の中へはひつて行く）
侍臣乙　（急ぎ足で出て來る）李孫勇からの使の者が、走つて參るやうでございます。

玄宗　うむ、さうか。李孫勇？　たしか、殿を引受けてゐたのだね。

侍臣乙　左様でございます。陛下を心安く落しまゐらせるために、奮闘してゐます忠義第一の大將でございます。

玄宗（それには答へないで、車の中を振り返りながら）そんなに痛むのか。

楊貴妃（姿がハッキリとは見えない。たゞ燦爛たる綾羅がうごく丈けで）はい。

玄宗　困つたね。齒が痛むと云ふのは、一番厄介なものだ。侍醫頭はどうして見えないのかい。

宮女（車についてゐた）はい。先刻から探してゐますが、見當らないやうでございます。初から、供奉の列には加らなかつたのだと、みんなが申して居ります。

（その時上手の方に、使者が着いたと見え、物騒がしい音が聞え、人々がその方へ驅けつける）

侍臣乙　あゝ、着きました。どんな知らせを持つて參りましたか。（驅け出す）

玄宗（使者の方へは、あまり注意を拂はないで）どんなに痛むのだ。齒ぐきが痛むのか。それとも、神經が痛むのか。

楊貴妃　あゝ痛い。痛い！齒が痛まなく濟むんだつたら、妾の持つてゐる夜光の珠を、みんな手離してもいゝのに、あゝ、いたい！

玄宗　困つたな。一層早く拔いて置けばよかつたのだ。

楊貴妃　さうなのです。私はぐら／＼するから、拔いてくれと云つたのです。あの侍醫頭が、もつと待て、もつと待てと云ふもんですから、こんな苦しみをするのです。侍醫頭が居たら鞭打たせてやりたい位です。

（侍臣甲、湯を盛つた茶碗を、恭々しく捧げて來る）

侍臣甲　お湯でございます。

玄宗　おゝ、湯が來た。これで嗽をして見るといゝ。（玄宗、楊貴妃に取りついでやる）

楊貴妃（それを飲む）おや、鹽を入れてないのだね。まあ、氣が利かない。

（侍臣乙、あわたゞしく登場する）

侍臣乙　陛下。御安心遊ばしませ。使者が申しますには、安祿山の兵士共は、長安の都へはひると、もうみんな腰を落付けて、掠奪を始めるやら酒浸りになるやらで、陛下のお跡を追ふ容子は、少しも見えないとの事でございます。先づ御車から降りて、暫らくの間、御休息なされてもよろしからうと存じます。

玄宗　さうか。俺もさうしたいのだ。道がわるいので、車が搖れ、腰が痛んで仕方がなかつた。貴妃！　お前の齒が痛むのも、そのためだらう。あんまり身體が搖れたか

ら、齒が痛むのだ。降りて休息するといゝ。

楊貴妃　はい！　妾もさうしたかつたのです。車の中は、暑くつて暑くつて、のぼせるから、齒が痛むのです。どれ。

（玄宗先づ、車より降り、貴妃もつゞいて降りる。侍臣宮女達、皇帝の周圍を避ける。楊國忠及び三人の夫人達も、車から降りる。皇帝に目禮したる後、下手の方へ行きて座を取る）

玄宗　高力士は何うした。

侍臣丙　何か、用事がありまして、陳玄禮殿の所へ行つて居られます。

玄宗　李孫勇からの使者を劬はつてやれ。（傍に頰を押へて苦しがつてゐる楊貴妃を振り返つて）どうだい、少しはよくなつたか。

楊貴妃　いゝへ。前よりも、もつと烈しい位です。

玄宗　困つたな。いつそ動いてゐるのなら、思ひ切つて拔いてしまつたらどうだ。

楊貴妃　出來れば、さうしたいのです。でも、觸ると飛び上るやうにいたいのです。

玄宗　どれ、お見せ。

楊貴妃　勿體なうございます。

玄宗　なにかまふ事はない。俺が拔いてやらう。

楊貴妃　でも、お手が汚れます。

玄宗　なに、そんなことを。お前と俺との間で。

楊貴妃　侍臣や宮女達が見てゐます。

玄宗　かまふことはない。かう云ふ場合だから。もつと傍へお寄り。さう、私の身體に身をもたせるやうにして、もつと口を開けなければ。

（玄宗、楊貴妃を身ぢかく引き寄せ、右の手を口中に入れて病める齒を求む。侍臣宮女達、顏を背けてゐる）

楊貴妃　おゝ、いたい！

玄宗　辛抱しておいで！　これは、ぐら／＼動いてゐる。もう、少しでぬける！

楊貴妃　おゝ、いたい！　いたい！　あゝ、もう堪忍して下さい。あつ！

（齒が拔ける）

玄宗　それ御覽！　拔けたではないか。

（侍臣甲、湯を持つて來る）

玄宗　嗽をなさい。そして、氣を鎭めておいで。いまに痛みが無くなるだらう。お前に苦しまれると、氣が氣でない。自分で苦しむよりも、よつぽど苦しい。

（楊貴妃、しばらくの間、手で口を押へ、うつむいてゐる。口から、しきりに唾を吐く。そして嗽をする）

玄宗　どうだい！　痛みは止みさうか。（楊貴妃うなづく）

さうか。それはいゝ。それは助つた。

楊貴妃　（しばらくの間、無言。やがて拔けた齒を懷より出した紙に包みながら）これが、妾の最初の齒ですわね。

玄宗　最初の齒つて、それは、一體どう云ふことなんだ。

楊貴妃　妾の身體から拔けた最初の齒だと云ふことです。妾はいつか詩人の李白から聽いたことがあります。桐の一葉が、落ちて秋が來たのが知れるやうに、最初の齒が拔けるのは、やがて肉體の秋が來るしるしだと、かう云ふのでございます。（暗然とする）おゝ、痛みはだん／＼取れて來る！　が、妾は何だか、物さびしい。何だか、物足りない。妾の心の中からも、何かゞ拔け落ちたやうにさびしい。おゝ、陛下。妾の胸に手を當てゝ下さい！　妾はたまらなくさびしいのです。

玄宗　（楊貴妃をかきよせて、胸に手を當てながら）　かうかい。かうすればいゝと云ふのかい。

楊貴妃　（頰をこすりながら）　おゝ、何だか、顏の相好までが變つて來たやうだ！　何だか頰の肉が、ゆるんで來たやうです。

玄宗　そんなことが、あるものか。お前の頰は十六七の小娘のやうに、ふつくりしてゐる。

楊貴妃　あゝ、陛下。妾にどうぞ、年のことを聞かせて下さいますな。十六七！　妾は十六七などと云ふ聲を聞くと、魂を裂かれるやうに悲しいのです。

玄宗　俺が、わるかつた！　ゆるしてくれ。

楊貴妃　いゝえ、陛下がわるいのではございません。それは堪へ忍ばなければならぬ眞實なのです。それはごまかすことの出來ない眞實なのです。妾が今年もう三十……
……。

玄宗　おゝ俺も、それは聽きたくない。お前の頰がいつまでも、ふくよかで、瞳がいつまでも黑ければ、それでいいのだ。

楊貴妃　そんな、そんなことは、人間の妾には望めないことなのです、それを思ふと……。

玄宗　おゝ、よして呉れ。さう一々、俺の言葉を氣にかけることは。あはゝゝ、もつと元氣でゐてくれ。俺はお前にさう悲まれると、苦しいのだ。ねえ、もつと元氣でゐてくれ。

楊貴妃　（急に思ひ付いたやうに）鏡が見たい！　（宮女に）金華。お前は、鏡を持つて來ただらうねえ。

宮女甲　えゝ。

楊貴妃　お前は、妾の化粧係りだから、妾のために、一面の鏡位は、持つて來てお呉れだらうね。それを茲へ持つて來ておくれ。

宮女甲　あゝ、貴妃樣！　忘れました、忘れました。あま

りに取りいそぎまして、持つて參ることを忘れました。

楊貴妃　おゝ、何と云ふうつけ者！　妾に、鏡がどんなに大切であるかを知つてゐるくせに。おゝ腹が立つ！　誰でもいゝ、この女をそちらへ連れて行つて、縊り殺しておくれ。

宮女甲　あつ！（駭いて泣き伏す）

玄宗　可愛相に。ゆるしておやり。こんな騷動のときにはお前の後に、附いて來た丈でも、一の手柄だ。ゆるしておやり。

楊貴妃　でも……。

（何か云はうとしてゐると、宮女乙が、三人の夫人の所から來る。一面の鏡を持つてくる）

宮女乙　貴妃樣。こんなものでもよろしければ、お使ひ遊ばせと、韓國夫人が仰せられました。

楊貴妃　仕方がない。それを借りよう。（鏡を手に取る）おゝ、鏡を見るのが、何だかこはいやうだ！（躊躇した後鏡を見る）おゝ、何と云ふ醜い顏。額の所には、こんなに青が浮いてゐる。白粉は剝げ落ちてゐる、おゝ、顏の皮膚に少しの力もなければ、光澤もない。眸がにごつてゐる。あゝ、いやだ！　いやだ！　何と云ふ醜い顏だらう。おゝ、陛下　妾の顏を、どうぞ見ないやうにして下さい　妾は恥づかしい、恥づかしい。

玄宗　おゝ、何を云ふのだ。お前の亂れてゐる髮にも、風情がある。お前の白粉剝のした頰にも、ある美しさは宿つてゐる。

楊貴妃　（玄宗の言葉は、耳に入れないで）おゝ、情ない。顏全體から、生氣がなくなつてゐるのだ。これが、妾の顏かしら。大唐の天子さまから、愛されてゐる妾の顏かしら。長安の都を落ちたことよりも、妾は自分が醜くゝなつたのが悲しい。さうなのだ！　妾は、もう今までも醜くゝなつてゐたのだ。それを日髮日化粧でごまかしてゐたのだ。今日、一日化粧しないものだから、かくされてゐる醜くさが、一時にマザ〳〵と現はれたのだ。おゝ情ない。こんなに醜くゝなるより、いつそ死んでしまひたい。

玄宗　おい、氣を靜めてくれ。何と云ふことを云ふのだ。誰がお前を醜いなどと云はう。唐の天下は、お前の美しさを讃へる聲で、充ち滿ちてゐるではないか。お前の美しさのために、國が亂れた、とさへ、云はれてゐるではないか。

楊貴妃　陛下のお言葉も、大唐の天子のお言葉も、この五寸の鏡にうつる眞實を、どうすることも出來ません。貴君の御車から、妾を突き落して下さい。妾は、こんな顏をして貴君のお傍に居り、行幸の先々で、あれが楊貴妃

だと指さゝれたくありません。

玄宗　氣を靜めておくれ。お前は、あまり昂奮しすぎていけない。美しいとか醜いとか、そんなことを云つてゐる時でもないのだ。今は、一旦緩急の秋なのだ。女は、だまつて俺の胸に、寄り添つて居ればいゝのだ。

楊貴妃　でも、妾は……。おゝ、これから一日々々醜くなると思ふと……。

（上手に物さわがしい聲がする）

侍臣宮女達　あゝ、また使者が來た。また使者が來た。

（五六人その方へ走つて行く。玄宗も楊貴妃も、だまつて、その方を見てゐる。侍臣甲　あわたゞしく歸つて來る）

侍臣甲　李孫勇からの、再度の使者でございます。

玄宗　うむ、どうしたと云ふのだ。

侍臣甲　安祿山の兵が、二千騎ばかり、後を追つて來たと云ふのでございます。一戰に、追ひ斥けましたが、いつ本軍が後を慕つて來るかも分らないと申すのでございます。御猶豫なく落ちさせられるやうにとのことでございます。

玄宗　さうか。よし、それでは出發の支度をするやうに、陳玄齢に傳へてくれ。

（侍臣甲下手へ行く）

玄宗　どうだい！　歯はまだ痛むかい。

楊貴妃　もう歯のことなどは、何うでもよくなりました。それよりも……。

玄宗　うむ、それよりも、氣を直して車に乘る用意をしてくれ。しばらくの間の辛抱だ。直ぐ都へ歸れるだらう。さうすれば、また、お前は自分で好きな丈、美しくなつて俺を駭かしてくれ。

（玄宗、楊貴妃を促しながら、席を立たんとす。突如下手の樹立の彼方、兵士が休息してゐる邊が騷がしくなる。兵士が柝を打ち鳴らす音が烈しく聞える。侍臣甲狼狽して驅けもどつて來る）

侍臣甲　陛下！

玄宗　何ぢや、何ぢや。

侍臣甲　謀叛でござりまする。

玄宗　（愕然としながら）えゝつ！　馬鹿なつ！　謀叛なぞと、そんなたはけた！

侍臣甲　でも、陳玄齢が、號令いたしましても、動かうとしないのでございます。

玄宗　（青くなりながらも）仔細があらう。高力士を呼べ！陳玄齢を呼べ！

（下手から高力士が出て來る。兵士達は益々さわがしくなる）

玄宗　高力士か。一體何うしたのだ。

高力士　陛下。一大事でございます。

玄宗　何ぢや。謀叛か？

高力士　いゝえ、謀叛ではございません。彼等は、みんな忠實な兵士でございます。たゞ今度の兵亂の責任者を罰せよとかう申すのでございます。責任者を罰しない裡は、一歩だつて動かないと、かう申すのでございます。もし責任者を罰しないならば、戟を逆まにして、祿山に降ると申してゐる者さへございます。

玄宗　陳玄齢までも、さう云ふのか。

高力士　陳玄齢は、一生懸命になつて、兵士を宥めてゐますが、かうなると、强いものは、實力です。陳玄齢も、平生の威嚴が少しもございません。

玄宗　だが、兵亂の責任者と云へば、この俺ぢやが。

高力士　いゝえ、兵士どもは、さう申しては居りません。一天萬乘の至尊に、責任がある譯はないと申して居ります。陛下の。聰明を掩うてゐる權臣がわるいと申してゐます、

玄宗　うむ。誰の事ぢや。

（問答を離れて聞いてゐる楊國忠、もぢ〳〵する）

高力士　お察しを願ひます。

玄宗　火急の場合、察してゐる暇はない。あからさまに申して見い。

高力士　恐れながら、楊國忠どのでございます。

玄宗　（憤然として）馬鹿なっ！　國忠は、貴妃の兄だと云ふことを忘れたか。

高力士　（割合冷靜に）忘れねばこそ申して居るやうに、私には思はれます。

玄宗　兵士達に、俺の言葉を傳へてくれ。楊貴妃の兄を失ふことは出來ぬと。いゝか、俺の親しい外戚を失ふことは出來ぬと、さう傳へてくれ。

（兵士の烈しく楯を鳴らす音が聞えて來る。玄宗たじろぐ。陳玄齢、登場する。玄宗と同年輩の老將軍。）

陳玄齢　陛下。一大事でございます。陛下の軍隊を失ふか、楊國忠殿を失ふか。二つに一つでございます。

玄宗　俺の言葉を傳へてくれ。

陳玄齢　恐れながら、無駄でございます。兵士達は、氣の狂つた獅子のやうに、荒れ狂つてゐます。恐らく陛下のお言葉も、耳には入るまいと思ひます。

（楯を鳴らす音が、すさまじく聞える）

陳玄齢　あれでございます。あの通りでございます。

玄宗　困つたな。唐の社稷も覺束なくなつて來たな。

高力士　そんなことは、ございません。兵士の願ひを叶へてさへやれば、兵士達は欣んで、陛下のために戰ふだら

う と思ひます。
楊國忠 （蒼白になつて顫へながら前へ出る） な、な、なにを云ふ高力士！ お前はこの俺を兵士に渡せと云ふのか。
高力士 いかにも！ 止むを得ません。
楊國忠 馬鹿な！ 右丞相たる俺を、兵士に渡すなんて、まさか、陛下は、そんな、そんな！
高力士 お默りなさい！ 貴君はまだ自分の責任に氣が付かないのですか。此の場合になつて、まだ陛下に累を及ぼさうとするのですか。恥をお知りなさい！ 恥を。
陳玄齡 お覺悟が肝心です。今では、貴君が潔く殺されるか、兵士がむりやりに貴君を殺すか。その一を選ぶことが殘つてゐる丈です。
玄宗 おゝ。（悲しく額を掩ふ）
楊國忠 （烈しい苦悶の後） 仕方がない。私を兵士達に與へなさい。凡てはおしまひだ！
楊貴妃 おゝ、兄樣。（すがり付く）
楊國忠 おゝ妹。機嫌よく暮してくれ。陳玄齡、私を兵士達の所へ案內してくれ。
陳玄齡 よいお覺悟です。どうぞ、貴君の立派な態度で、貴君の最期を飾つて下さい。
（楊國忠と陳玄齡と去る）

楊貴妃 （玄宗に取りすがつて） 陛下。可哀相な兄を、兄を。
玄宗 ゆるしてくれ。かうなつては、俺の力にも及ばない。
（玄宗と楊貴妃、相擁して泣いてゐる。忽ち下手の方で、兵士達の罵しり騷ぐ聲が聞える。楯を叩く音がそれにまじる。玄宗と楊貴妃、耳を掩ふやうにしてゐる。高力士駈けもどつて來る）
高力士 陛下！
玄宗 おゝ、國忠は殺されたのか。
高力士 はい。
（楊貴妃泣きくづれる。舞臺にゐる三人の夫人も泣き倒れる）
玄宗 おゝ、早く、出發の支度をしてくれ。俺は、こんな呪はれた場所には、一刻も止まつてゐたくない。
高力士 陛下！
玄宗 何ぢや。
高力士 兵士どもは、まだ滿足してゐません。
玄宗 えゝつ！ 何と云ふのぢや。
高力士 まだ、責任者は、あれで盡きないと申すのでございます。
玄宗 なにつ！ 無禮な。この俺を何と思つてゐるのぢや。俺が、自分で行く。俺が行つて、無禮な奴等を懲しめて

やる。
高力士　それは、徒勞でございます、兵士達は、本當に陛下の御身上と、唐の社稷とを思つてゐるのでございます。思つてゐればこそ、國の疾病を除かうと、一致團結してゐるのでございます。
玄宗　おゝ、俺には、何も分らなくなつた！　そして、その責任者は誰だと云ふのだ。まさか……。
高力士　恐れながら、楊貴妃の御姉妹に當る、三人の夫人達でございます。
玄宗　えゝつ！
楊貴妃　えゝつ！
玄宗　なぜ、なぜ、この夫人達に罪があるんだ、彼等は高が女だ。彼等が、惡い譯はない。彼等が惡いとすれば、俺が惡いのだ。兵士達は、俺の親しいものを罰して、間接に俺を罰しようとするのか。
高力士　何う致しまして、彼等は、かう申してゐます。婦人が大國に封ぜられてゐるのが、國の亂れの基だと、かう申すのでございます。それを誰が封じたか、それよりも、先づ形を……さうです。大國に封せられてゐる夫人の方々を、無くしたいとかう申してゐるのでございます。
（脅迫するやうな、激しい罵聲が聞える。つゞいて、何かを促がすやうな激しい栢を叩く音。陳玄齡出て來る）
陳玄齡　陛下、兵士達は楊國忠殿の血を見てから、血を嘗めた虎のやうに兇暴になつてゐます。もし、彼等の要求を拒んだなら、剣を拔き放つてゐます。大抵の者は、剣を拔き放つてゐます。陛下の御前へまでも、殺到してきさうな容子をしてゐます。あれを、お聞き下さい。あの叫びを。
（烈しい叫びがつゞいて起る。「三夫人を殺せ！」「三夫人を殺せ！」の聲が嵐のやうに起つて來る）
高力士　到頭あんな所まで、參りました。もし、要求をきかせんと、陛下の前で、どんな殺伐なことをしないとも限りません。
玄宗　あゝ、俺には、もう、何うしていゝか分らない。
（三夫人とも泣きしきつて正體なし）
三人　あゝ、妾達を助けて下さい！
楊貴妃　助けますとも。そんなことは、妾がさせません。
玄宗　（顏を掩うて聲なし）……。陛下、お止め下さい。陛下。陛下。
楊貴妃　（狂氣のやうに）決して殺させてはなりません。妾が命に換へても、決して、決してそのやうなことはさせません。
高力士　貴妃よ。かうなつては、力には勝てません。貴女がお拒みになると、兵士達は貴女の面前で、お姉妹を殺

すでせう。

楊貴妃　あゝ、そんな、そんな、殘酷な……。

高力士　貴妃。御姉妹にお覺悟をすゝめるのが一番いゝことです。どうぞ、なまじひお止めにならないやうに。大唐帝國の運命は、この刹那々々にかゝつてゐるのです。祿山の兵隊は、後を慕つて來たのです。今兵士の心を失つたならば、國の滅亡はもとより、陛下の御身の上も、貴女の御身の上も、どうなるか分らないのでございます。

楊貴妃　（だまつて泣き崩れる）

（三夫人、侍臣達にむりに引きずられるやうに歩み去る。陳玄齡も後につゞく）

玄宗　（顏を上げて）あゝ、死んでしまつた方がましだ。

（兵士の激しい怒號、どよめき、舞臺の人々は、唯一人聲を出すものはない。………ふと、上手が騷しくなる）

侍臣丁　使者だ！　使者だ！

（上手へ驅け込む、舞臺の人は、化石のやうになつて動かない。侍臣丁歸つて來る）

侍臣　陛下。李將軍から使者でございます。

玄宗　（顏を背けながら）あゝ、そんなものは、もう、どうでもよい。

侍臣　ところが、よいどころではございません。一旦斥けた祿山の軍が、三萬近い援兵と一緒になつて押し寄せて來たと申すのでございます。味方苦戰のため、いつ何時退却するか分らないから、一刻も早く鳳輦を進ませられるやうにと、かう申すのでございます。

高力士　御車の用意をするやうに。

（兵士の烈しく罵しる聲、耳を掩ふやうに聞えて來る。やがて、三夫人を送つた宮女達、泣きながら歸つて來る。やがて、白馬が、引き出される。貴妃も玄宗も、なか／＼それに乘らうとはしない………兵士の罵聲が益々烈しくなり、益々近づいて來る）

高力士　おゝ、彼奴等はまだ滿足しないと云ふのか。

（玄宗も楊貴妃も、不安に襲はれる。……突如「楊貴妃を斃せ」「楊貴妃を殺せ」と云ふ叫びが、嵐のやうに起つて來る）

高力士　おゝつ！

玄宗　えゝつ！

（「楊貴妃を斃せ」の聲益々近づく、戟が、樹の間に隱見する）

玄宗　あゝ、彼奴等は、最後のものを求めてゐる。

楊貴妃　（玄宗にすがりつく）おゝ、陛下。

玄宗　心配するな。日月が、逆さまに墜ちても、お前を渡さぬぞ。この俺の瞳の黑い間は。

兵士の聲　楊貴妃を鎖せ！
他の聲　本當の國賊を亡せ！
他の聲　獅子身中の蟲を殺せ！
（樹の間から、劍戟の光がほのめく。陳玄齡、色を失つて出て來る）
高力士　兵士達は、貴妃を要求してゐるのか。
陳玄齡　（それに答へないで玄宗に）お聞きの通りです。陛下。
玄宗　おゝ、俺を先きへ殺して呉れ。俺を先に殺してから、女を何うにでもしてくれ。陳玄齡、俺を兵士達の所へ案内してくれ。
陳玄齡　滅相な。彼等は、陛下に對しては、忠實な兵士です、たゞ國家の……。
楊貴妃　（決然として起ちながら）おゝ、何も云ふな。陳玄齡。妾を彼等の所へ案内しておくれ。
玄宗　（驚いて楊貴妃を抱きしめる）おゝ、何を云ふのだ。馬鹿な。お前を渡してよいものか。俺から、お前を奪ひ取らうとするものは、先づ俺の息の根を止めてからにしろ。
高力士　陛下。今日の場合は。
玄宗　何もきゝたくない。云ふな〳〵。
陳玄齡　陛下……。

玄宗　何も云ふな。亡ぶるなら亡んでもいゝ。この女を抱きしめながら亡びたい！
（「楊貴妃を殺せ！」の聲益々盛になる）
高力士　陛下！
陳玄齡　陛下！
玄宗　（答へず）
楊貴妃　（つと、身を玄宗の把握から脱しながら）陛下。どうぞ、妾を死なせて下さい。
玄宗　馬鹿な。
楊貴妃　いゝえ、妾は死にたいのです。十年來妾の願を、一としてお斥けにならなかつた陛下は、どうぞ妾の最後の願を許して下さい。妾は、心から死にたいのです。本當に死にたいのです。
玄宗　なぜ、なぜ、な――
楊貴妃　妾は、逃れる道がないから、死にたいと云ふのではないのです。先刻、自分の顏を鏡に映してから、世の中が嫌になつてゐたのです。これから、年が寄るに連れて一日々々一年々々、顏容が醜くなるのかと思ふと、妾は死ぬよりも悲しいのです。一年々々醜くなり、これが楊貴妃のなれの果かと、指されるやうな、皺だらけのお婆さんになるのかと思ふと、ゾツトするほど怖しかつたのです。陛下よ。妾を死なせて下さい。少しでも、妾が

美しい裡に、死なせて下さい。そして、陛下の御心の裡に、少しでも美しいまぼろしを止めておいて下さい！

玄宗　馬鹿を云ふな。それはお前の理窟だ。そんな理窟で俺の心が、慰められるものか。

楊貴妃　いゝえ、理窟ではありません。妾の心全體が、妾の身體全體が、それを要求してゐるのです。どうぞ、死なせて下さい。妾は、先刻鏡を見たときから、死にたいと思つてゐたのです。その機會が、こんなに早く來る！　しかもこんなに晴がましい死が、帝王の妃として三軍の前で殺される。大唐の天下を動かした傾國の美人として。おゝ、女としてこんな晴がましい死に方が外にあるものか。（「楊貴妃を殺せ！」の聲が聞える）おゝ、あれは妾の死を讃へる聲だ。おゝ、妾の死は、後世まで歌はれる。妾の美しさは、後世に傳はるのです。おゝ、陛下。お欣びなさい！　貴君の愛人は、中華第一等の美人になりますよ。おゝ、手間取つてはならない！　陳玄齢。妾を案内しておくれ！

玄宗　貴妃！　待て。

楊貴妃　いゝえ。どうぞ、やつて下さい。これが、妾の最後のお願ひです。おゝ、妾の愛する陛下。御機嫌よくお榮えあそばせ。

玄宗　（今は言葉なし）……。

楊貴妃　おゝ、陳玄齢よ。妾をなるべく、美しく殺しておくれ。醜い死樣はいやですよ。あゝ、柳英。妾はお前に羅の布を預けておいた筈だ。

柳英　（持つて來る）玆にございます。

楊貴妃　おゝ、これで身體を包むから、その上から縊り殺しておくれ。

（楊貴妃、それを髮の上から被ぶる）

玄宗　おゝ、楊貴妃！

楊貴妃　おゝ、陛下。妾のために、あまり心を痛めて下さいますな。妾はうれしく死ぬのです。それから、陛下。妾をいつまでも忘れないで下さい。おほゝゝゝ。それから、もう一事、云つて置きたいことがある。都へお歸り遊ばしても、あまり美しい方をお近づけ遊ばしますな。

玄宗　おゝ、何を云ふのだ！　俺の心は、いまそのまゝに地獄だのに。

楊貴妃　陛下。おさらばでございます。（宮女達に）みんな左樣なら。陳玄齢！　大唐國の妃が、どんな美しい勇ましい死樣をするか、兵士達に見せておくれ。

（楊貴妃、陳玄齢高力士に伴はれて退場する）

玄宗　（その跡を見送りながら）おゝ、誰か俺を支へてゐて呉れ。倒れさうだ。

（玄宗、侍臣達に支へられて、ぢつと面を伏せてゐる。）

烈しい苦悶に堪へてゐることが分る。兵士達の聲怒濤のやうに高くなり、しばらくあつて、急に「皇帝萬歳」の聲が起る）

侍臣甲　（走しつて出て來る）　楊貴妃には、立派な御最期でございました。お亡骸を、一目お目に入れようかと、高力士殿が仰せになりました。

玄宗　（苦悶が漸く消え去つてゐる）　見たいけれども、よさう。それが、彼女の志だらうから。どつかへ深く埋めてやつてくれ。

侍臣甲　はつはつ。（馳け去る）

（「皇帝萬歳」の聲が、潮のやうに盛になつて來る。玄宗ぢつとそれに耳を傾けてゐる。高力士と陳玄齡が出て來る）

高力士　（玄宗の前に蹲まりながら）　立派な御最期でございました。兵士達も、さすがに感じたと見え、みんな甲を脱いで、罪を謝して居ります。

玄宗　（ほのじろい顔をして）　さうか。

陳玄齡　おわびの言葉もございませぬ。お心の裡、お察しいたします。

高力士　御心中のほど、申し上げる言葉もございません。

玄宗　（默つてゐる）

高力士　御悲嘆のほど、お察しいたします。

玄宗　（默つてゐる）

陳玄齡　この悲しみを補ふために、兵士達は身を砕いても、唐の天下を、元通りにすると申して居ります。

高力士　お悲しみのほどお察しいたします。が、どうぞお氣をとり直して。

玄宗　（青白い顔が漸く澄んで見える。靜な深い聲で）　うむ。むろん悲しい。が、初めて思つてゐたのとは少し違ふ。

高力士　ははつ。

玄宗　彼女に死なれると、生きてゐる甲斐はないだらうと思つてゐたが、死なれて見ると、さうばかりでもないな。悲しいことは悲しいが、十年來心の上に、かぶさつてゐた重みが、ひよつくり除れたやうな氣もする。何だか手足を延ばしてみたいやうな、ノビ／＼とした氣もする。

（兵士達が、段々近づいて來て、その中の隊長らしいのが、十人ばかり入つて來る）

隊長達　皇帝陛下萬歳！

玄宗　（淋しい微笑で彼等にうなづいてから、高力士に）　萬歳と祝はれるほどの心持でないが、お前が心配するほどの氣持でもない。解脱、そんなあは／＼しい氣がしないでもない。大熱を病んだ後のやうな。おゝ、車に乘らう。時が移る。高力士。お前もこの車に乘らないか！

さうは云ふものゝ、急に一人だとやつぱり淋しい、

高力士　はつはつ。

（高力士車に乘る。車動き出す。「皇帝萬歲」の聲また一しきり聞える）

――幕――

時勢は移る

（未定稿）

序幕　慶應の末年
第二幕　明治十七年
第三幕　大正十一年

序　幕

人物

杉田源右衛門　　　　六十
源之丞　その子　二十九
おあさ　その妻　五十一
おゆき　その娘　十九
山崎東伍　おゆきの許婚者　二十七
その他重要ならざる二三の人物

所

四國の某藩。德川家の親藩

時

慶應の末年

第一場

事情と舞臺

官軍が、國境に迫つて居る。一藩は恭順か佐幕かの議論に、沸騰してゐる。今日も、城中で朝廷に恭順を表するか、それとも宗家のために、官軍を引き受けて一戰するかに就いて、評定が開かれてゐる。

藩の家老にして、軍奉行を勤める杉田源右衛門の家、七百石の高祿を取れども、頗る質素なる家作り。源右衛門の妻おあさと娘のおゆき、緣側近く相對して、縫物をしてゐる。

床の間には、鎧櫃が置かれてゐ、長押には長短二本の槍が、掛けられてゐる。

おゆき　（縫物の手を止め）もう、お母様。お手許が見えんぢやらう。

おあさ　あゝ、行燈を點けて貰はうかのう。

（おゆき立ち上り、納戸より行燈を取り出し、燈心をかき立てゝ點火する）

おあさ　眼の力が弱うなつて、絲をみゝそに通すのに骨が折れる。

おゆき　もう、お休みなさんせ。お母様は、今日本當によくお精が出ました。

おあさ　お前もよく出たのう。――が、かうあせつて、おこしらへを急いでも、今年中に婚禮が出來るかしらん。

おゆき　……。

おあさ　こんなに世の中が、騷がしうなつて、土佐の兵隊が何時、押し寄せてくるかも知れんと云ふと　此先どんなことがあるかも知れん。萬一戰にでもなると、東伍どのも直ぐ出なならぬと、昨日も云つて居られたからのう。

おゆき　(針を無意識に動かしてゐる)……。

おあさ　觀音寺までは、土佐の兵隊がは入つとると云ふ噂ぢやのう。

おゆき　本當にいくさが、始まるのかしら。

おあさ　お前のお父樣などは、どうあつても一いくさせないかんと云うて、昨日も鎗や刀の手入をしておいでになつた。

おゆき　何うしても、いくさになるのかしら。

おあさ　御家中にも、お父樣のやうな一徹者が多いからのう。

おゆき　どうして、戰(いくさ)せないかんのだらう。

おあさ　何うして言うて、將軍さまと禁裡さまとが、天下爭ひをしておいでになるのぢやもの。

おゆき　お上は、何ちらへお附きになるのかしら。

おあさ　侍從樣は、田安樣からの御養子ぢやけに、御本家の將軍家には、弓を引かれん言うて、おいでになるのぢやけど、それかて禁裡さまにお手向ひする氣は、毛頭無いのぢや。さうぢやけに御家中が、二つに意見が分れて、評定がもめるのぢや。

おゆき　こんなとき、兄さんが家に居ると、少しは氣強いのぢやけど。

おあさ　いや、こんなとき、源之丞が居ると、どんなことになるか知れん。またお父樣と、どんな怖しいいさかひをするかも知れん。

おゆき　あの時、何うして兄さんは、お父樣とあんな大喧嘩をしたのかしら。

おあさ　考へてゐることが、丸切り反對ぢやからのう。あのとき、怖しかつたのう。お父樣が、刀を拔いて、源之丞を追ひ廻すのだもの。刀が、鴨居に支へなかつたら、源之丞は何うなつてゐるか知れん。

おゆき　兄さんは、おたつしやかしら。

おあさ　たつしやで、居て吳れゝばいゝと思ふけれど、なにさま氣性の烈しい、向不見ぢやから、何うなつてゐるか分らん。お前のお父樣と兄さんとは、考へてゐることは、南と北のやうに、反對ぢやけれど、氣性は生き寫しぢやからのう。自分がかうと思つたことには、生命でも何でも惜しみはせんからのう。

おゆき　天誅組に、お入りになつたと云ふのは、噂丈かしら。

おあさ　天誅組には入つて居たとも云ひ、寺田屋騒動のときに居合はしたとも言ひ、京都で新撰組の者に斬られたとも言ふけれども、みんな確かな證據はないのぢや。

おゆき　生きてゐて下されば、どんなに嬉しいか知れはしない。

おあさ　お父様は、今でも口癖のやうに、あんな不埒者は、何うなつても介意(かま)はん云うておぢやるけれども、心の裡ではやつぱり忘れられんと見えて、時々源之丞のことを思ひ出して居られるやうな御容子ぢや。此頃、時々ぼんやり考へ込んでおいでになる時なぞ、屹度源之丞のことを思ひ出して居られるのぢや。お母様には、ちやんとそれが分る。（二人しばらく言葉なし）

おゆき　お歸りが遲いのう。

おあさ　御評定が、もめてゐるのぢやらう。今日で、戰をするかせぬかゞ定まるのぢやげに。

（母子再び言葉なし。夕闇が、だん／＼家の周圍を閉す。行燈の灯が、漸く明るくなる。ふと庭の植込に人の影がうごく。源之丞である）

源之丞　母上！　母上！

（最初は聞えない）

源之丞　母上！　母上！

（娘のおゆき、先に氣が付く。駭いて、母の袖を引いて、耳打する）

おあさ　（駭きながら氣丈に）誰ぢや。何者ぢや。

源之丞（周圍を見廻しながら、急に現はれて、縁側に手をつく）母上。源之丞で御座る。

おあさ　（驚駭して）　まあ！　源之丞。

おゆき　おゝ、兄さん！

おあさ　まあ、お前よく歸つて來たのう。よく無事で居れたのう。妾は、お前のことを、どんなに心配したか知れやせん。まあ、無事で何よりぢや。

源之丞　母上にも、おたつしやで何よりぢや。おゆきも、たつしやで結構ぢやのう。して、お父上は。

おあさ　（急に眉をひそめて）　まだ、お出先からお歸りにならぬ。

源之丞　それでは、しばらく茲に居てお話しいたしませう。お父上が、お歸りになる氣勢がしたら、直ぐ立ち去りませう。

おあさ　お前の身の上を、どれほど案じたか分りやせぬぞ。お父上には、内證でも、せめて手紙の一つもことづけて呉れゝばよいものを。家出してから、何の音沙汰もないぢやからのう。

源之丞　お申譯ムりませぬ。私も母上のこと、又妹のこと思ひ出さぬでもムいませぬが、何さま忙しうて。去年の秋は江戸に下り、夏から秋にかけては、長州から九州へ渡つて居りましたから。

おあさ　して、今度歸つたのは、お父さまにお詫びをして、此家を繼いで呉れるためかい。

源之丞　（苦笑して）源之丞には、家のことなどは念頭には御座りませぬ。大君の御國、みかどの御國のこと丈しか、念頭には御座りませぬ。

おあさ　（源之丞の云ふことが、分らぬ如く）それなら、お前は、何しに歸つて來たのぢや。家に落着いて、私達を欣ばして呉れるためではなかつたのか。

源之丞　いゝえ、さうでは御座りませぬ。家に落着く、それは此の日本國中が、落着いてから、歸つて參つても遅うは御座いませぬ。どうぞ、今しばらくの間、源之丞におひまを下さいませ。

おあさ　（あきらめて）して、お前は何處に在宿ぢや。

源之丞　向ひ地からの漁船に乗り、先刻西濱に着いたばかりで御座ります。

おあさ　家に落着くためではなうて、何の用に歸つて來たのぢや。

源之丞　精しくは、申し上げられませぬ。が、無益の戰を止め、家中一統に、間違つた道に踏み込まさないやうにと、歸つて參りました。父上は、今日いづれにおいでになりました？

おあさ　お城へ上つて居られるのぢや。

源之丞　さやう、それでは先刻西濱の漁師どもが、申してゐたことは、本當で御座りまするな。城中で大評定があると云ふ噂は。

おあさ　何でも、その樣な容子ぢや。

源之丞　して、一藩の氣勢はいかゞで御座りますか。禁裡さまへ、お味方しますか。それとも、御宗家たる將軍家へ。

おあさ　妾達には、そんなことは何にも分りませぬ。が、お前のお父樣は、御宗家たる公方樣へ弓を引く不忠者めがと、口癖のやうに云つて居られる。

源之丞　（失望して）左樣で御座りまするか。お父樣は、まだそんなことを云つて居られますか。

おあさ　源之丞！　お前、また！　お父樣と、云ひ爭ひをしに、歸つて來たのぢやなからうのう。

源之丞　……。

おあさ　お父さまは、お前のことを、口に出しては、何にも云はれんけど、心の裡では隨分案じて居られるのぢやぞ。あの意地張の強いお父樣ぢやけに、初の裡は私達が、

お前の噂をすると、噂をする云うて、一寸でも口に出すと、聲を立てゝ怒つて居られたが、今では私達がヒソヒソとお前の噂をすると何となく御機嫌が、いゝらしいのぢや。九月十一日は、お前の誕生ぢやらう、今年もその日の朝になつて、今日は源之丞の誕生日ぢや、何處に居てゞもいゝから、無事に居て呉れゝばいゝと、妾が心の裡に祈つてゐると、朝お目覺めになつたお父さまが、「赤飯を喰ひたくなつた」と、かう仰つしやるぢやないか。（おあさ、かすかに泣く。おゆきも、それに連れて、すすり泣きの聲を洩す）お父さまのお心の裡を察して、早くお父さまにお詫びをして、家へ歸つておくれ。お母さんには、勤王とか、佐幕とか、そんな難かしい議論よりも、親子が揃うて、樂しく暮すのが、一番幸福に思ふのぢや。それが、一番いゝことのやうに思ふのぢや。

源之丞　私もさう思ひます。そんな時代にしたいのです。親子が滿足して、幸福に暮せるやうな時代にしたいのです。が、世の中に間違があると云ふことが解ると、それを默つては見てゐられないのです。間違つた者が、天下の權を擅にして、正しい者が虐げられてゐると云ふことが分ると、私はそれを默つて見てゐることが出來ないのです。世の中に間違があると云ふことを知りながら、默つて見て居ると云ふことは卑怯な……………あゝ、こんなことは申上げるのではなかつた。あゝ、お母樣。私は五日の裡に、京へ引返さなきやいけないのです。が、只今はどうも、空腹で堪へられません。どうも空腹で：……………何か喰べるものをいたゞきたいのです。

おあさ　さうだらう。忍んで、來たのぢやからのう。おゆき。お前は臺所へ行つて、そつとおむすびをこさへて、持つておいで。召使どもには、悟られぬやうにのう。

おゆき　はい、畏りました。

おあさ　お父樣は、お前が出奔すると、大變お怒りになつて、直ぐお前の勘當屆をお出しになつたのを知つてゐるか。

源之丞　知つて居ます。が、そんなことは何でもありません。

中間の聲（遙かに）　お歸りで御座います。

おあさ　おゝ、お歸りぢや。お前は、その邊にかくれておいで。いや、あの離れの四疊半へ。あすこは〆切になつて、誰も行かないけに。直ぐ後から、食事を持たしてやるけに。

源之丞　承知しました。

（源之丞微笑を洩しながら、奥へかくれる）

（源右衞門、脊高き老人、身體はやゝ衰へたれども、元氣は一杯で、麻の上下を付け、右の手に刀を下げな

がら、は入つて來る）
おあさ（縫物をしまつて挨拶する）用事にまぎれて、お出迎ひが遲なはりました。お歸り遊ばしませ。
源右衛門（やゝいら〳〵しげに）早う、着換を持つて來い。
（いら〳〵しく、上下をかなぐり捨てる。烈しい音をさせながら、刀架に刀を置く）
（おゆき着換を持つて來る）
源右衛門（着物を換へながら）女中共を山崎へ遣はして、東伍を呼んで參れ。
おあさ　何ぞ、火急な用で御座りまするか。
源右衛門　うん、急用ぢや。お前達には、先に申して置くが、東伍とおゆきとの縁談は、破談にいたしたぞ。
おあさ（駭いて）えゝつ！
おゆき（聲は出さゞれども驚駭甚し）……。
おあさ　それは、また、どう云ふ譯で御座りますか。
源右衛門（妻には答へず）おい、誰か居らんか。誰か居らんのか。
女中（出て來る）はい。
源右衛門　山崎へ參つてな、ちと火急な用事があるほどに、東伍どのに直ぐ見えるやうに云へ。
女中　はい（去る）。

おあさ　東伍殿を呼び付けて、何うなさるので御座いますか。
源右衛門　破談を申し渡すのぢや。
おあさ　東伍殿が、何ぞお氣に觸るやうなことをいたしましたか。
源右衛門　不所存者だから、緣を切つてやるのぢや。今日城中の御評定で、御親藩たる御緣つゞきに依つて、此度はお家の御運をかけ、山内京極の兵を引受けて、一戰いたすやう、申上げたに。何事ぞ、東伍を初め、家中の若武士が百餘名連判の上で、官軍への恭順を申上げてゐる。何と云ふ卑怯者どもぢや。命の惜しい卑怯者どもぢや。祖先以來、お手厚い祿をいたゞいた者が、命を捨てるのは、かう云つた時の御奉公より、外にはないではないか。戰ときけば、第一に走せ向ふべき若武士どもが、何と云ふ不埒な、不忠な、卑怯な、えゝ、思ひ出す丈でも、苦々しい奴ぢや。
（源之丞、ひそかに植込の中にて、聽いてゐる）
おあさ　それで、御評定は何うなりました。
源右衛門　みんな、どいつも此奴も、臆病風に腸を吹かれて、首鼠兩端を持し、一身一家の安穩ばかりを思つて居る腰抜ばかりぢやから、俺と矢野主馬と二人で大義名分を說いて、到頭一戰に及ぶことに、藩論が定まつたのぢ

や。

（植込の中の源之丞、駭いて身を進める）

おあさ　それでは、いよ〳〵戰爭で御座りまするか。

源右衞門　お前達、ちやんと覺悟をして置かな、ならんぞ。何時なんどき、籠城になるかも知れん。

おゆき　戰爭になりましたら、味方が勝になりませうかしら。

源右衞門　心配するな。今御當家が、將軍家のために、旗を擧げると、紀州が動き、藝州が動き、姫路の酒井侯が動く。（ふと、其處に源之丞が、置忘れてあつた扇子に目を付ける）何ぢや。見なれぬ扇子ぢやのう。（開いて見る）うん、見事な筆蹟ぢやな。なに

聞說中原虎狼橫。　孰先慷慨唱勤王。
腰間頻動雙龍氣。　欲向東天吐彩光。

なに、南海の志士、杉山源之丞の囑に依つて、薩藩小松帶刀。（源右衞門、鋭く妻及娘を見る）おあさ、此の扇子の持主は誰ぢや、誰ぢや、申して見い。此の扇子の持主は誰ぢや。

おあさ　（色を失つて言葉なし）……。

源右衞門　持主は誰ぢや。申して見い！

おあさ　………。

源右衞門　なに申さぬ。そちは、勘當した源之丞を引き入れたな。俺に、ひそかに引き入れたな。

おあさ　申譯御座りませぬ。

源右衞門　して、源之丞は何處に居る。何處へかくした。

おあさ　お探しになつてどうなさります。

源右衞門　改心いたせば、勘當を許して、今度の戰の先手にしてやる。改心いたさぬとあらば、叩き斬つて、軍陣の血祭にしてやる。何處ぢや、何處に隱したのぢや。申せ、申せ。

おあさ　それは、申し上げられませぬ。

源右衞門　なに、云はぬ！（手を延して、妻の髮に手をかけんとす）

源之丞　（植込より氣輕に飛び出す）父上。母上をおいぢめになつてはいけません。

源右衞門　うん、源之丞だな。（怒の裡に、一味のなつかしさを藏してゐる）

源之丞　お久しう御座ります。

源右衞門　まだ殺されては居なかつたのか。果報な奴め！

源之丞　なか〳〵、さう手輕には、殺されませぬ。

源右衞門　馬鹿者め！　何しに立ち歸つた。

源之丞　京都で承りましたところ、當藩の君臣達、進退に迷つてゐると聽きましたから、一大事と思ひましたので、取るものも取敢ず、歸國いたしました。一藩の歸嚮を誤

らぬやう、家中に遊説いたし、當松平家の社稷を全うしたいと思うてゐます。
源右衞門　進退に迷つてゐるなどゝ、たはけたことを申すな。藩論は今日の御評定でしかと決定したぞ。
源之丞　それは、結構で御座りますな。して如何樣に。
源右衞門　如何樣に定まつたもないー　御親藩同樣の御當家が、將軍家に敵對する土佐、京極の手を引き受けて、干戈に及ぶのは、至當の事ぢや。
源之丞（嘆息して）　お父樣には、まだお目が覺めませぬな。
源右衞門（怒つて）　なに、目が覺めぬ。親に向つて、不埓なことを申す奴。（刀架の刀に手がかゝる）直れ、それへ。
源之丞　いゝえ、直りませぬ。源之丞の命は、まだ外に使ひ道が御座りますからな。
源右衞門　なにを！
源之丞　さう、お怒りなされず、氣を靜めてお聽きなされえ。お父上は、失禮ながら、かやうな田舍に御座るゆゑ、まだ日本國中の形勢は、お判りになつて居らぬのぢや。勤王討幕の聲は、潮のやうに、天下に充ち滿ちて居りまするぞ。此の潮に逆らふのは、昇る日の光を妨げるほどの、愚なことだと云ふことが、お判りになりませぬか。
源右衞門　なにを申す。勤王などと申すことは、薩長の奴輩が將軍家を倒して、我自ら天下の權を握らうとするための口實ぢや。術數ぢや。その口實に迷うて將軍家に弓を引くと云ふやうな、愚かなことがあるものか。彼等の口車に乘つて、將軍家を倒して見い。その後に現はれるものは、決して王政の復古ではないぞ。必ず毛利か島津かの天下ぢや。建武の中興を見ても直ぐ判ることぢや。かやうな口車に乘つて、將軍家に手向ふなどは、敵の甘言に乘つて、味方の大將の首を狙ふのと同然ぢや。これほど、明かな道理が、貴樣には分らないのか。
源之丞（冷かに）　さやうな事を申す人達に、幾人も逢ひました。勤王攘夷は、薩長が幕府を倒し天下を私するための口實ぢやと。薩長の中にも、左樣なことを考へて居ろ者がないとは申しませぬ。が、そんな人達は、自分達が策略のつもりで、點けた火が、自分達では、何うすることも出來ないほど、大きくなつて居るのを知らない愚かな人々で御座ります。勤王は、もはや時の勢で御座りまするぞ。勤王の勢に逆ふ者は、その下敷になつて、踏み碎かれてしまふ外はありますまい。三百年の太平を誇つた幕府が、此の言葉に依つて、グラ〳〵と搖ぎ出したのが、お父樣のお目に入りませぬか。再度の長州征伐

をどう御覧になりました。幕府の衰亡の姿と、禁裡のお勢のすさまじいことが、お父さまのお目には見えませぬか。幕府が倒れ、天子の御世になるしるしが、到る處にあり〳〵と見えてゐます。かやうなときに、まだ御宗家が大事ぢやの、勤王は口實などと仰せあつて、順逆の道をお誤りになることは、お父さま丈の御損では御座りませぬぞ。さうした議論こそ、當松平家を亡すばかりでなく、世の勢を逆に押して無用な血を流す、間違つた議論で御座りまするぞ。土佐の兵を引き受けて、一戰なさらうなどとは片腹痛い仰せぢや。今年の春、山内侯が上海へ人を遣し、舶來の元込銃を千二百挺ばかりお買ひ求めになつたことを、御存じありませぬか。精鋭な元込銃の前に、鎗と刀との武士どもを並べるのは、弓の上手の前に尺三の的を並べるやうなものぢや。ハヽヽヽヽヽ、これほどのことをお父上には……

源右衞門　おのれ！　父を輕んじ、御家を思はぬ不忠者め！不孝者め！

（刀架の刀を引寄せる、源之丞、少しも怖れず）

源之丞　かやうな時勢がお判りになりませぬかな。時勢の移つり行くさまが、お目には見えませぬかな。新しい時勢の潮に乘つて當松平家のお家を安泰にすると共に、一家の經綸を天下に行ふことが、我々志あるものゝ、取るべき道では御座りませぬか。

源右衞門（源之丞に捕へられたる利腕を放たんともがきながら）貴樣は、一身の出世のために、薩長の徒の尻馬に乘つて御宗家へ弓を引くのだな。

源之丞（絶望して）ハヽヽヽヽ。お父上樣には、これほど明かな名分が。ハヽヽヽヽ。

源右衞門　父を嘲笑いたすのか、おのれ！

（刀の柄に手をかける）

源之丞　左樣なことをなされても、もはや恐れる源之丞では御座りませぬぞ。三年前の源之丞とは源之丞が違ひますぞ。

源右衞門　お前は、折角講論を覆すために來たのだな。

源之丞　御家を亡し、人を殺す、順逆の誤つた戰は、源之丞一命賭しても止めますぞ。

源右衞門（激憤して刀を拔く）おのれ！　戰の血祭にしてやる。

（源之丞に斬りかゝらうとする。おあさとおゆき、源右衞門に縋り付く）

源右衞門　放せ！　放せ！（妻と娘とを蹴放さんとすれども離れず、意氣やゝ緩む）

おあさ（夫を漸く制して）源之丞！　武士の家に生れた其方が、父上のお言葉に背くと云ふことがあるものか。

源之丞　お母さま。それもみなこの御城下に無益な血を流したくないからぢや。負けると定まつた間違つた戰に：：：：：。

源右衞門　なにを！

おあさ　源之丞。言が過ぎますぞ。

（父子尙ほ烈しく對してゐるときに、中間があわたゞしく馳け込んで來る）

中間　矢野さまより急な書狀が參りました。（書狀を出す）

源右衞門　（妻を介して書面を受取つて讀む）何に、火急の用あり、即刻御來宅被下度……うむ。（中間に）使の者は歸つたか。

中間　いや、待つて居ります。

源右衞門　よし、即刻伺ふと云へ。おあさ。矢野殿へ行つて來るから、悴を一歩たりとも外へ出すな。

おあさ　（肯く）あのう、御夕食は。

源右衞門　お城で、御酒をいたゞいたから、まだ空腹ではない。その上に心がせく。

（源右衞門、袴を付け羽織を着る）

源右衞門　源之丞。一足でも當邸を出れば、横目に申付けてひつくゝるぞ。

源之丞　（苦笑して）なに、逃げもかくれも致しませぬ。

（おあさ、おゆき、源右衞門を送つて去り、直ぐ引返して來る）

おあさ　まあ、いゝ仲裁ちやつたのう。

源之丞　お母さま。お腹が空いてゐます。どうぞ、先刻お願したものを。

おあさ　あゝ、ついうつかり忘れてゐました。あゝ、おゆき。お前おむすびを持つておいで。

おゆき　はい。（立ち上つて去り、握り飯を持つて歸つて來る）

源之丞　（つゞけざまに三つ四つ喰ひながら）やつぱり、家の御飯はおいしいなあ。お母樣。家のおいしい味噌漬はありませぬか。

おあさ　まあ、蟲おさへに、少し喰べておいで。もう、お父樣に分つたのぢやから、後でちやんと膳をこさへて上げるから。

源之丞　（ふと憂慮を帶びて）矢野と云ふのは、あの矢野主馬どので御座るのう。（考へ込む）火急の用事！　公用なれば、私宅へ呼ぶ筈はない。今日の評定に就ての火急の用事なら、私宅へ呼ぶ筈はない。お母樣。今まで、こんなお使が見えたことが御座りまするか。

おあさ　いゝえ。

源之丞　今日は城中で大評定があつた日ぢやのう。お父さま達が、强硬に開戰を唱へたので、家中で不承不承諾

した。あやしいな、こいつは。
おあさ　えゝ何ぢや、何ぞ思ひ當ることがあるのかい。
源之丞　備前池田侯の家老、赤木總右衞門が殺られたのも、城中の評定からの歸りがけぢや。
おあさ　えゝ、何ぢや。
源之丞　お父上さへなければ、開戰說は一たまりもあるまい。お母樣。若武士どもは何と申して居りました。
おあさ　何でも、血氣の若武士が、百人も連署して朝廷への恭順を申上げたと云ふので、お父さまは、火のやうに怒つて居られた。東伍どのも、一味したと云つて、エライ御立腹で、おゆきとの緣を切らうと仰しやるのぢや。
女中　（は入つて來る）山崎さまへ行つて參りました。東伍さまは、お留守で御座ります。
おあさ　あゝ御苦勞。それで言傳は傳へて置いたのう。
女中　はい。
源之丞　あゝ、東伍にも久しく逢はぬな。彼奴には逢つて話して見たいな。彼奴には、俺の勤王論をよく吹き込んで置いたからな。……だが、矢野主馬からの使！
おあさ　お前、その矢野さまのお使が、何うしたと云ふのぢや。
源之丞　（默つてゐる）………。
おあさ　お前、お父さまのお身の上に、何ぞ不吉なことが、あるとでも思ふのかい。
源之丞　矢野殿の屋敷は、內町だな。お濠端を通つて、三番丁を右に。うむ、七本松へ出るな。……お母樣。矢野の使は怪しい、合點が行かぬ。まさしく勤王を唱へる者のいつはつての誘ひぢや。
おあさ　えゝつ、それはまことか！
源之丞　私の蟲が知らせる、私の蟲が知らせる。さうに違ひない。
おあさ　えゝつ！　そんなら早く、駈け付けて、駈け付けて。
源之丞　お母さま。私にお父さまを救へと、仰つしやるのですか。もし、私がお父さまの子でなかつたら、お父さまを殺すのは、私かも分らない。時勢に逆つて、時勢を妨げるものが、その力に碎かれるのは自然の數ぢや。それを救ふことはない。それを救ふのは、やつぱり時勢に逆ふのぢや。お父さまのやうな考へ方が、お家を亡し、多くの人々をなやませるのぢや。若武士が、お父さまを狙ふのは正しい。親子でなかつたら、此の源之丞が手にかける。
おあさ　（狂亂して）まあ、何と云ふのだい。父親が九死の場合に。
おゆき　お兄さま。どうぞ。お父樣を。

おあさ　さあ！　早く。お前は、槍を持たしては、藩中に稀な腕利きぢやけに。

（長押にかけたる手槍を取つて手渡さうとする）

源之丞　お母さま。私は無益な戰を止めて、松平家を救ひ、無用な血潮を流さないために、わざ〳〵走せ歸つたのです。その私が、戰爭を起す發頭人のお父樣を……。親子は親子、大義は大義ぢや。

おあさ　お前。何を云ふのぢや。現在の父、肉親の父親が……。あゝ、おゆき。お前は工藤さまへ行つておいで。佐竹さまへも。

おゆき　はい。（駈け出す）

中間　（色を變へて駈けて來る）　奧樣。大變で御座ります。

おあさ　何うしたのぢや。何うしたのぢや。

中間　矢野さまのお屋敷へ行く途中、七本松まで行きましたところ、覆面の者が五六人で、旦那を取り圍みました。

おあさ　あゝ、源之丞！

源之丞　（憤然として立ち上り）　なに、七本松！

（一散に駈け出す）

おあさ　あゝ、源之丞が間に合つて呉れゝばえゝが。

第二場

舞臺

城下七本松。遙に士族の屋敷が、闇の中に並んでゐる。淋しき廣場。源右衞門、手を負ひながら、四人を相手にして斬り結んでゐる。烈しき太刀合せ。

源右衞門　なに奴だ！　名を名乘れ！　名を。

（四人無言のまゝ、烈しく斬り込む）

源右衞門　さては、御高恩を忘れ、御宗家に弓を引かんとする姦賊どもだな！

（四人更に烈しく斬り込み、源右衞門、斬り斃さる。源之丞、まつしぐらに走つて來る。四人狼狽し、二人逃げ二人止る）

源之丞　父上！　父上！

（答なきに依つて父の死骸に取り付く）

源之丞　うむ、遲かつたな。

（立ち上りざま逃げんとする若者の一人に斬り付く。太刀先、肩をかすりたるまゝ、そのまゝ逃げ延びる。源之丞、憤然として、一人殘りし若者に立ち向ひ、一刀の下に斬り倒す）

源之丞　父の敵、思ひ知れ！

手負ひたる者　なに、源之丞どのか。

源之丞　なに、貴樣は東伍か。

（駭いて介抱する。深手と見え、力なく倒れんとする）

源之丞　なぜ、貴樣、父上を斬つた。勤王黨の人々が、父上を斬るのは無理はない。だが、貴樣が手を下さないでも、いゝではないか。

東伍　（苦しき呼吸にて）ゆるして呉れ。籤だ！　籤が當つたんだ！　云ひ譯をすると、卑怯に當るからなあ。

源之丞　さうか。胸中は察しるぞ。だが、手は深いぞ。

東伍　うむ、介錯してくれ。

源之丞　何か遺言はないか。

東伍　ない。

源之丞　おゆきに何か云つてやれ。

東伍　たゞよろしく云つてくれ。新しい世に會はないで死ぬのが、殘念ぢや。

源之丞　貴樣とは、話したかつたのぢや。大君の世になるのは、もう半年とはかゝらぬぞ。有栖川の宮の錦旗は、この二十日に京都を出るのぢや。俺は、參謀附の一人ぢや……（弱る手負をかき起しながら）父上が死ぬ。が、父上の時代も死ぬのぢや。俺達の時代が來るな。東伍お前を殺したのは、殘念だ。が、死ね！　欣んで死ね。お前は新しい御世の礎ぢや。俺は、生きてお前と二人分の働きをしてやるぞ。

――幕――

（この戯曲は、序幕第二幕第三幕の連絡對照に依り、時勢の推移を示さんこと作者が意圖なり。されば、序幕のみを離して發表すること、作者の忍びざる所なれど、叢書の枚數足らざるゆゑ、便宜上これを發表せり。序幕なれども一幕物としても完成せるつもりなり）

袈裟の良人（五　齣）

人物

渡邊左衛門尉渡
その妻　袈裟
遠藤武者盛遠

時代

平家物語の時代

情景

朧月夜の春の宵。月は、まだ圓ではないが、花は既に爛漫と咲きみだれてゐる。東山を、月光の裡にのぞむ。五條鴨の河原に近き渡邊渡の邸の寢殿。花を見るためか、月を見るためか、簾は揭げられてゐる。赤き短檠の光に、主人と渡と妻の袈裟とがしめやかに向ひ合つて居る。袈裟は、年十六。輝くが如き美貌。

第一齣

――渡と袈裟――

渡　今宵は、そなたの心づくしの肴で、酒も一入身にしみるわ。もう早蕨が、萌え始めたと見えるな。
袈裟　はい、今日女の童どもが、東山で折つて參つたのでございます。
渡　やがて、春の盛りぢや。去年は、思はざる雨つゞきで、嵯峨も交野の櫻も見ずに過したが、今年は屹度折を見て、そなたを伴つて得させよう。
袈裟　はい。
渡　公達や姫が出來ると、もう、心のまゝの遊山も出來ぬものぢや。今の裡、そなたもわれも若い裡、今日も明日もと、櫻かざして暮して置かうよ。あはゝ
袈裟　（寂しく微笑す）……
渡　（袈裟が沈んでゐるのに、ふと氣がつく）……
渡　そなたは、何ぞ氣にかゝることがあるのではないか。
袈裟　いゝえ。ございませぬ。
渡　なければよいが、何となく沈んで見えるなう。身に障りでもあるのか。
袈裟　いゝえ。
渡　そなたは、今日午後、衣川の母御前を訪ねたやうぢやが、母御前に、何ぞ病氣の沙汰でもあつたのか。
袈裟　いゝえ。いつものやうに、健かでございました。
渡　それでは、何ぞ母御前から、心にかゝることを云はれたのではないか。

袈裟（默つてゐる）……。
渡　此度、さうであらう。でなければ、いつもは雲雀のやうに、快活なそなたが、このやうに沈む筈がない。母御前からの話の仔細は、何うぢや。話してみい。
袈裟（默つてゐる）……。
渡　何も隱すには及ぶまい。身内の少いこの渡には、衣川殿はたつた一人の母御ぢや。常日頃疎略には思うてゐぬ。母御前から話の仔細と云ふのは、何ぢや。話して見い、袈裟！
袈裟（しばらく默つてゐた後）別の仔細はございませぬ。たゞ、三月ばかり打ち絶えてゐましたので、ひたすら顔が見たくて招んだと、かやうに申して居りました。
渡（かすかに笑を洩らして）はあ、それでは、渡の取越苦勞ぢやつたな。そなたの顔が、少しでも曇ると、俺の心も直ぐ曇るのぢや。十三のいたいけなそなたと契り合うてから、この年月、そなたが、妻のやうになつかしければ、妹のやうに子のやうに、可愛く覺ゆるぞ。かまへて、氣を使うて、面やつれすな。一人で氣を使うて、思ひわづらふな。なにごとにまれ！　俺に計うてくれ！
袈裟　お言葉のほど、うれしう存じます。（袈裟、涙をすゝる）
渡　何ぢや／＼。其方は、何が悲しうて涙をうかめてゐるのぢや。云へ！　仔細を。はて！　さて、氣がゝりな。
袈裟　何の仔細がございませう。お言葉が、うれしいので、つい涙ぐんだのでございます。
渡　それならば、もつと華やいで、この美しい夜を過さうではないか！　そなたも若い、俺も若い！　春は幾度も廻つて來るのぢや。たゞのびやかに晴やかに暮さうよ。心にかゝる曇とては、さら／＼ない筈ではないか。さあ！　袈裟！　一獻注いでくれ。
袈裟　はい。
渡　一曲所望ぢや。聽かせては呉れぬか。
袈裟　はい。
（袈裟立ち上り、床の間より琴を取り降して彈く。曲は、長恨歌なり。琴の音は、彈ずる者の心を傳へるやうに、切々とひゞく、渡はぢつと首をかしげて聽いてゐる）
袈裟（唱ふ）今は昔もろこしに、いろをおもんじたまひけるみかどおはしまししとき、やうかの娘かしこくも、君にめされてあけくれのおんいつくしみあさからず、常にかたはらにはんべりぬ。宮のうちのたをやめ三千のちようあいも、わが身ひとつの春の花、ちりていろかもなきたまの。
渡　なせに、そのやうな悲しい曲を彈くのぢや。大唐の天子から、引き離され、荒武者どもの手にかゝつて果敢な

くなる、悲しい楊貴妃の古事が、なぜそなたの氣に叶ふのぢや。それは、こん秋の夜にきかう。今朧夜の花の下では、たのしいうかれ心地の曲を彈くがよいに！

袈裟　(默つてゐる)……。

渡　はあゝ、疲れたのか。疲れたのならば、休息せい。氣晴しに、ちと、酒などたしなんで見ては何うぢや。

袈裟　それでは、お一つ下さりませ。

渡　なに！　酒をくれと云ふか。これは、面白い！　そなたが酒を過すのは初めてぢや。さあ、俺が注いでやらう。なみ／＼と飲んでみい。

袈裟　(恥しげに杯を口に運ぶ)……。

渡　おゝ、そなたのその初々しい手振で、新婚の夜をはしなくも思ひ起したよ。あの時も、そなたはそのやうに、耻しさうな手付で、杯を取つたわ。あの時は、今よりはもつと小さかつた。掌上に舞ふ美人とはそなたのことかと思ふ程ぢやつた。あの時から、四年經つ！　が樂しい月日は、ホンの夢のやうに過ぐるものぢや。まだ一月か二月のやうにしか思はれぬ。そなたと十年も廿年も百年も千年も、かうして暮しても飽きるときは、あらじと思はれる！

袈裟　(默つてゐる。そしてかすかにすゝり泣いてゐる)……。

渡　おゝ何ぢや、何をすゝりないてゐるのぢや。男の中の果報者と欣んでゐる渡の女房なる汝が、何が悲しうて泣くのぢや。

袈裟　お情が身に浸みてうれしいのでござります。

渡　いや、うれしいのは俺ぞ。洛中一の美しい女房と呼ばれるそなたを、妻に持つ俺は、うれしいのぢや。あはゝ、月は朧にかすんでゐるが、俺の心は欣びで、晴れ渡つてゐる。たゞ、御身がそのやうに、沈んでゐるのが、ちと氣懸りな丈ぢや。仔細はない！　そなたの心のこだはりを吐いて見てはどうぢや。

袈裟　(默つてさしうつむいてゐる)……。

渡　それ御覽！　何かあるに極つたではないか。さあ云うて見やれ云つて見やれ！

袈裟　それでは、申し上げませうか。

渡　(華やかに笑ふ)　はあゝゝ。それ御覽！　俺の云ふのが當つたではないか。とても事に、話の仔細を當てゝ見ようか。

袈裟　(少し駭きながらも)　はい！　當てゝ御覽じませ。

渡　はて、衣川殿からの餘儀ない無心ではないか。黄金の無心か。それとも小袖の無心か。

袈裟　(やゝ悲しげに)　いゝえ。さうではござりませぬ。

渡　はて、それでは、熊野か高野か、遠い旅路に伴をせい

と云はれて、俺がゆるすまいと思うて、ふさいでゐるのではないか。

袈裟　（いよ〳〵悲しげに）いゝえ、さうでもござりませぬ。

渡　はて、それでは思案に盡きたぞ。云うてくれ。まさか、母御前が、俺からそなたを取り返して、仇し男に、やらうと云ふのではあるまいな。

袈裟　（悲しげに首を振る）……。

渡　云うてくれ。袈裟！

袈裟　（悲しげに暫らく默してゐた後）まことは、今日母の家で、陰陽師に逢ひました。

渡　陰陽師にとな。

袈裟　はい！

渡　（やゝ氣づかはしげに）それが、如何いたしたのぢや。

袈裟　陰陽師が、妾の顏を、ぢいと見てゐましたが、やがて申しますのには、お身には、危難が迫つてゐると、斯樣に申すのでございます。

渡　はて、それは名もない似非陰陽師であらう。あられもない事云うて、人の心をまどはさうとするのであらう。かまへて心に留めらるゝな。

袈裟　似非陰陽師とも申せませぬ。母がかね〴〵歸依しまする安部の淸季どのでござりまする。

渡　はて、それは、氣にかゝる事ぢや。して、その危難を逃れるには、加持祈禱をせよと云ふのか、それとも、物忌して御經をでも讀めと云ふのか。

袈裟　淸季どのゝ仰せらるゝには、夫婦の臥床が惡いと申すのでござります。

渡　はて、それはたわいもない。童騙しのやうな事を云はるゝな。惡いとは、どうわるいのぢや。

袈裟　妾に、三七日の間、家の南に當つて寢よとかう申すのでござります。

渡　はて、それはたやすい事ぢや。家の南に當ると云へば、この俺の室ぢやなう。

袈裟　はい。

渡　はあゝゝ。それならば、今日からでも寢るとよい。何よりも、たやすい戒行ぢや。あはゝゝゝ。そなたの心がかりと云ふのは、これほどの事であつたのか。おゝ可愛い女ぢや。そなたは、いつもそのやうな、たわいもない事で心を苦しめてゐるのう。

袈裟　（寂しく微笑す）……。

渡　おゝ、そなたは、やつと笑顏を見せたな。もつと華やいでくれ。そなたの心がゝりも、今は晴れたであらうほどに。おう、一杯過して見い。

袈裟　はい、いたゞきます。

渡　臥床を變へる丈で防ぎ得る危難なら、淸水詣の途中に、石につまづくほどの災難であらうなう。でも、そなたの身には、それほどの災難もあらせたうはない！　眼には、塵一つは入るな。頰には羽蟲一つ觸れるな。そのやうにまで、思うてゐるぞ。

（渡、情愛に燃ゆる眼で、ぢつと袈裟を見てゐる）

袈裟　（思はずわーつと泣き伏す）……。

渡　（ゐざり寄つて掻き抱く）　袈裟！　まだ、何が悲しいのぢや。

袈裟　いゝえ何も悲しいのではありませぬ。たゞお情が身にしみて嬉しいのでござります。

渡　そなたは、今宵氣が疲れてゐると見え、取りわけて淚脆い！　あまり、心を使はずに、もう下つて休むといゝ。（ふと氣が付いて）おゝ、これは違つた。安倍淸季の考文に依つて、今宵からそなたと俺とは、臥床を換へるのであつたな。下らなければならぬのは、俺だつた。（渡、快活に立ち上らうとする）

袈裟　はて、お待ち遊ばせ。今しばらくのお名殘りを。

渡　一家の裡に、別れ伏すにさへ名殘りを惜しみたいと云ふのか。はて、可愛い女ぢやのう。

（渡、後より立ち上つた袈裟を、後より手を差し伸べて、かき抱くやうにしながら、簀の子の上に出て來る）

渡　雁が鳴き渡つてゐるなう。

袈裟　これから、いよ／＼花が盛らうとしますのに、花に背いて、雁は何處に行かうとするのでござりませう。

渡　はて、それは俺には分らぬ、雁の心に訊いて見る外はない。

袈裟　雁も自分の思ひ通りに飛ぶのでござりませうか。

渡　知れたことぢや生があるものには、銘々の心がある！（空を仰ぐ）　しきりに鳴き渡るなう。「朧夜に影こそ見えね鳴く雁の……」無風流の俺には、下の句がつゞかぬ。うむ、もう寢よう。春とは云へ、夜が更けると、袖袂が冷えて來る。それでは袈裟！　女の童を呼んで、臥床を取らせるがよい。

袈裟　今しばらく、お待ち遊ばしませ。

渡　はて、今宵に限つて、何故そのやうに止め立てするのぢや。明日の日がないと云ふではなし、そなたと俺の間には、いつまでもいつまでも樂しい日がつゞくのぢや。今日ばかり、名殘りを惜しんで何にするのぢや。明日、天氣さへよければ、御室あたりの花のたよりでも、訊かせ見よう。おやすみ！　袈裟。

（袈裟、今は止める術もないやうに、簀の子の上に消然と立つてゐる。渡、廊下を退場する。渡の姿が見えなくなると同時に、袈裟わつと泣き伏してしまふ）

第二齣

――袈裟――

第一齣から少し時間が經つてゐる。袈裟、鏡に向つて濡れた黑髮をしきりに梳つてゐる。傍に臥床が取つてある。

袈裟　妾をあんなに、愛して下さる渡どのを、あざむいて臥床を換へた丈でも、空恐しい氣がする。でも、妾の悲しい志を知つて下すつたら、きつと妾の罪を許して下さるに違ない。妾はかうするより外に、手段がないのだもの。夫に、事情を話す。妾を、昨のやうに愛してゐて下さる夫は、火のやうに怒られるのに違ない。そして、あの恐しい盛遠と夫とは、戰はれるに違ない。おやさしい渡どのが、何うして、あの鬼のやうに恐しい盛遠に、刄向ふことが出來よう。夫を殺した盛遠は、母御前も安穩にして置く筈はない。母御前を殺した後に、きつと妾を……。妾は始から呪はれてゐたのぢや……。渡邊橋の橋供養で、あの横道者に見染められたときから、妾の運は定まつてゐたのぢや……。

（しばし沈默した後）

袈裟　「袈裟を得させよ。否とあらば、おん身を刺して、俺も死なうよ」と、盛遠は、昨日のやうに、母御前を責めさいなんでゐると云ふ。弱い母御前は、狂ふやうになつて居られる。でも、妾が何うして操を二つにすることが出來よう。渡どのゝ眼を忍んで、どうして怖しい褄重ねが出來よう。今日、あの非道者は、妾の胸にも白刄を差し付けて、われに靡け、否と云はゞ御身はもとより、母御前も渡どのも一つ刄に刺し貫いて呉るゝぞと云つた。あの非道者は、言葉の通りに行ふ者ぢやと、皆に怖れられてゐる。妾が否と云ふならば、どんな怖しいことが起るかも知れない。

袈裟　（髮を梳つた後、男風に結んでゐる）妾は、その時に、死んで操を守らうと心を決めたのぢや。今宵、忍んで渡どのを殺してくれ。渡どのさへ世にないならば、快くおん身に靡かうと、妾は怖しい言葉を、口に上せたのぢや……。

袈裟　それにしても、おなつかしいのは渡どのぢや。妾のそら言を、まことのやうに聞きなされて、何事もなく臥床を換へて、休すんで下された。何物に代へても、妾を愛して下さるお心が、日の光のやうに、身にしみ〲と感ぜられる。あれほど、おやさしい渡どのに、分れまゐらせることを考へると、腸が斷々になるやうに悲しい。でも、夫の身に代つて、死ぬることを考へると、それは悲しみの裡の欣びぢや。最愛の夫の命に換る。女の死に

方の中で、こんな放ばしい死に方が、またとあるかしら……。

袈裟　おゝ、月に雲がかゝつたと見え、庭の表が急に暗うなつた。九つと云つたから、もう、ほどなく忍んで來るだらう。夫のために、身を捨てるのだと思ふと、心が水のやうに澄んで來る。澄んだ心の裡に、ほの〴〵とした明りが射して來るやうな氣さへする。南無阿彌陀佛！南無阿彌陀佛！

（袈裟、髪を結び了り、しづかに立つて、揭げられた簾を降す）

袈裟　南無阿彌陀佛！　南無阿彌陀佛！

（袈裟。短檠を消す。簾の裡、急に暗くなる。庭上も、月に雲がかゝつたと見え、段々暗くなり、やがて薄明が凡てを掩うてしまふ）

第　三　齣

――盛　遠――

年十七なれども六尺近き壯士、直垂に腹巻をつけてゐる。闇にも、それとしるき拔身の太刀を右手に提げてゐる。ぬき足して、寢殿に迫つて來る。徐々に、簾をかゝげて、内に入る。暫くの間恐ろしき沈默。雁がしきりに、中空に鳴く。

「えい！」と云ふ、低いしかしながら、鋭い叫び聲。かそけき物音。

盛遠、やゝ荒々しき足音で出て來る。左の手に、袈裟が着てゐた小袖の袖で、包んだ袈裟の首級を持つてゐる。月が再び、中空に冴える。盛遠、包まれた首級を見ながら、ニッと會心の微笑を洩す。やがて、右の手で布をほどく。それを確めるやうに、月の光にかざす。低く鋭き絶叫！

盛遠　えゝつ！

（よろ〳〵と、寢殿に倒れかゝつて、簀の子の上に尻餅をつく）

盛遠　やゝこれは、袈裟！

（彼は、渡を探すやうに、再び寢殿の簾をかゝげて見る。内は空し）

盛遠　うゝむ。さては、袈裟御前に計られたか。渡を打たすと、われを詐り、眞は夫の身代りに、身を捨てたな。

（烈しい苦悶の表情）

盛遠　口惜しや、盛遠が一期の不覺。

（庭上に身を投げて悶える）

盛遠　戀慕の闇に迷ひ、不覺にも、可愛いと思ふ女子を、打つて捨つるとは、われながらあさましや。云はうやうなき狼狽者（うろたへもの）ぢや。

盛遠（盛遠、身もだえして口惜しがる）

盛遠（苦悶から悔悟にうつり、やゝ理性の光が歸つて來る）さるにても、この女！　いみじくも死に居つたな。夫を助け、操を守る一念より、いみじくも思ひ切つたな……。

盛遠（つく〴〵と首を眺める！　おゝ、何と云ふ神々しい死顔ぢや。言葉の通り。髮を洗うたばかりでなく、香までも炷きこめたな。み佛のやうな、この美しい面で、盛遠のあさずしさを、笑ふと見えるな。主ある女に、横戀慕するみにくさを笑ふと見えるな。

盛遠（切りたる袈裟の首を、緣側の簀の子の上に置きながら、地に手を突きて禮拜する）許して奥れい！　袈裟どの。おん身戀しさの心から、あたら盛りの花を散らしてしまうた。やがて、冥府へ追ひ付いて詫をする！しばらく待つて居て下されい！

（盛遠、筧の水で、血に染みたる刀を洗ひ、やがて、これを鞘に收めてから、大音聲に名乘る）

盛遠　やあ〳〵、此の家の主、左衞門尉渡どのに、物申す。おん身が、最愛の夫人袈裟御前を打ち取つたる曲者玆に在り。はや〳〵。出合ひて、首刎られい！

（盛遠、威丈高に名乘つてから、ぢつと聞耳をすます。しばらくの間、物音がしない）

盛遠（一段と聲を張り上げる）やあ〳〵、渡どの。曲者が忍び入り、おん身が夫人、袈裟御前を手にかけしぞ。はや出で合うて、曲者が首刎られい！

（盛遠獅子のやうに怒號をつゞける）

第四齣

――盛遠と渡――

廊下を傳うて來る烈しい音がする。白い素絹の寢衣を着た渡が、太刀を握りしめながら、馳け付けて來る。

渡　袈裟どの。袈裟どの。何事ぢや！　何事ぢや！

（先づ盛遠の姿を見る）

渡　曲者！　何奴ぢや。

盛遠　おゝ、待ち受けた渡どの。袈渡どのを手にかけた遠藤武者盛遠ぢや。立ち寄つて首刎ねい！

渡　なに、なに、汝は盛遠！　汝が袈裟を手にかけたとは！

（ふと簀の子の上の首級を見て、仰天する）えゝつ！　これは正しく袈裟の首！（憤然とする）云へ！　云へ！　何の意趣あつて、袈裟を手にかけた！（刀を引き寄せて柄に手をかける）

盛遠　うむ！　その意趣も語らう。一部始終を語つてから、潔よくおん身の手にかゝらう。仔細はかうぢや。

渡　云へ！　云へ！　仔細を。その素首の飛ばぬ間に、語

れ。

盛遠　（地上にうづくまりながら）元より、おん身の手にかかるは覺悟ぢや。さるにても、袈裟どのは、日本一の貞女よな。

渡　なに、貞女とは！

盛遠　渡どの。仔細はかうぢや。去る彌生五日の事よ。攝津渡邊の莊渡邊橋の橋供養に、我は奉行を務めて、群衆警衛の任に當りしが、供養も果てゝ人々家路に急ぐとき、橋の袂の棧敷より降り立ちて、輿に乘りたる女房の、年は二八と見えて、玉の如くにあでやかなる面影に、忽ち戀慕の心湧いて、あれは何人ぞと、傍の雜人に訊きたるに、あれこそは衣川殿の愛子にて、左衞門尉渡どのゝ北の方、袈裟御前にて候との答なりし。

渡　うゝむ。

盛遠　袈裟ならばわれの從姉妹にて、我は丹波に養はれて、相見ることのなかりしが、かゝる女子を、族に持ちながら、人に奪らるゝことやある！　いで、取り返して、わが妻にせむ！　一圖に思ひ切つては、鐵壁も避けぬ盛遠、忽ち、伯母御前なる、衣川殿を訪ねて、あさましや、白刃を伯母の胸に差し付け、袈裟を呉るゝか命を呉るゝか、二つに一つと脅した。

渡　うゝむ。

盛遠　心弱き伯母御前は、心持死ぬべうや思はれけむ。ひたぶるに、袈裟御前の助けを乞うたのぢや。

渡　うゝむ。

盛遠　衣川殿の館にて、今日初めて、袈裟御前に逢うたのぢや。人非人の盛遠は、忽ち刄を拔いて、袈裟御前の胸にさしつけた！

渡　えゝつ！　おのれ！　（憤然として盛遠をにらむ）

盛遠　その怒りは尤もぢや。やがて、存分に晴すがよい！

渡　刄を差しつけながら、汝は何と云うたのぢや。

盛遠　我になびかばよし、否と云はゞ、おん身は元より、夫の渡、母の衣川、三人とも盛遠が嫉刄の錆にしてくれると！

渡　えゝつ、非道の盛遠め。して、して、袈裟は何と答へたのぢや！　（半身を乘り出す）

盛遠　われに、靡くと答へられた！

渡　（愕然として、刀の柄を握りしめる！）なに、なに、汝になびくとな！

盛遠　駭かれな、渡どの。なびくと云ふは、貞女の誠から出た僞りぢや。袈裟どのゝ云はるゝに、夫渡の在らんほどは、心にまかせじ、今宵忍んで、渡を打て！　夫なき後は、御身の心次第と。

渡　な、な、なに。

盛遠　夫の臥床は、南の寢殿。夫に勸めて髮を洗はせて置くほどに、濡れたる黑髮をたよりに、首を斬れと！

渡　えゝつ！

盛遠　戀慕の闇に迷うたる盛遠には、貞女の巧が分らなかつたのぢや。さては、袈裟御前！　我に心を通ずと、欣び勇んで忍び入り、濡れたる髮をたよりに、擧げたる首級。仕合せよしと、ほくそ笑み、月の光に晒して見れば、思ひがけない袈裟どのの、神々しい、み佛のやうな死に顏ぢや。

渡　うゝむ。

盛遠　人非人の盛遠に、見染められたを運とあきらめ、夫に代り母に代り、操を守つてはてられた袈裟どのは、日本一の貞女よな。その袈裟どのを、害したるこの盛遠は、日本一の人非人ぢや。うつけ者ぢや。うろたへ者ぢや。さあ、渡どの！　おん身が、最愛の夫人袈裟どのゝ敵は、茲に居る！　いざ、首を打たれよ！　首刎ねる丈では、氣が濟むまい！　踏みにじるとも、斬りきざむとも、存分にせられい！

（盛遠、自分の刀を後へ投げ捨て、渡の前にいざり寄る）

渡　（默然として言葉なし）

盛遠　いざ、渡どの。存分にせられい！　このあさましい盛遠を、こなごなに碎いてくれい！

渡　（默然として居る。腸を刻まれるやうな苦悶の裡に居ることが、顏の表情で分る）……。

盛遠　いざ、いざ。（進んで首を差し延べる）

渡　（なほ默つてゐる！）……

盛遠　いざ、いざ、いざ。渡どの。おん身は妻を打たれて、口惜しいとは思はぬか。この盛遠を憎いとは思はぬか。

渡　（詰めよつて來る盛遠を、やゝうるささうに避けながら）おん身を打つても、詮ないことぢや。

盛遠　（やゝ拍子拔けがしたやうに）なに、詮ないとは。

渡　死んだ袈裟が歸りはすまい。

盛遠　とは云へ！　現在妻の敵を、目の前に置きながら、見逃すと云ふ法があらうか。さては、渡どの。おん身は、この盛遠が武勇に聞き怖ぢしたか！

渡　（寂しげにせゝら笑ふ）妻の敵とあらば鬼神なりとも、逃すまじきが、袈裟の死は、所詮自害ぢや。自ら求めての死ぢや。敵はない！　敵はない！

盛遠　さては、いろ／＼言葉を構へて、この盛遠を助くるつもりよな。

渡　何とでも、思うたがよい！

盛遠　さては、おのれ！　この盛遠を打つにも足らぬ人非人とさげすむと見えるな！　よし、さらば、かうせう。

（盛遠、髻をふつつりと切る）

盛遠　盛遠が、一念發起のほどを見てゐるがよい！　おのれが、罪を悔いる盛遠の心が、どんなに烈しいかを見てゐるがよい。さらば、左衞門、僧形に改めて、袈裟どのの菩提のため、諸國修業に出る前に、もう一度訪ねて來よう。異樣の姿が人に見とがめられぬやうに、夜が明けぬ裡に行かう。さらばぢや。

（盛遠、袈裟の首級を殘り惜しげに見返りながら出で去る）

第五齣

――渡――

盛遠の姿が、見えなくなると、渡は堪らないやうに、袈裟の首級に近づいて、それを取り上げる。

渡　袈裟！　袈裟！　變り果てたる姿になつたよな。

（よゝと泣く）

渡　お前のこの美しい眸は、もう開かぬのぢやな。お前の可愛い唇は、もう再び動かぬのぢやな。袈裟！　袈裟！……。

渡　袈裟！　袈裟！　お前はなぜ、死んだのぢや。袈裟！袈裟！　お前は、俺がお前をどんなに愛してゐるかを知つて居よう。知つてゐながら、なぜ、お前は俺を捨てたのぢや。

（身悶えして嘆く）

渡　盛遠めは、お前の敵ぢやから斬れと云つた！　が、俺は盛遠よりも、お前が恨めしいのぢや。盛遠のやうな人非人は、相手にする丈でも汚はしい！　お前は、俺の心をもつと知つてゐて呉れる筈ではなかつたのか。お前は、自分の身を捨てゝ、俺の命をすくつて呉れたと云ふのか、あの盛遠めは、それを貞女だと云つた。世の人も恐らくさう云はう。が、袈裟よ。お前を命よりも愛してゐるこの渡には、自分の命よりも、お前の方がどれほど、大事かと云ふことを知らないのか。お前が死んだ後の俺の生活が、太陽が無くなつたやうに、暗澹となると云ふことを、氣が付かなかつたのか……。

渡　（涙に咽びながら）　それに、袈裟よ。お前は、なぜ俺に打ちあけては呉れなかつたのか。俺に打ち明ければ、俺が盛遠と戰ひ、俺が殺されるとでも思つたのか。俺はそれが情ないのぢや。俺が、盛遠を怖れるとでも思つてゐるのか。渡は、盛遠のやうに、骨は堅くない！　打物業は下手ぢや、が、愛するお前のためには、盛遠はおろか鬼人にでも立ち向うて呉れるぞや。愛するそなたのためには、水火を辭さない心丈は、何人にも劣らないつもりぢや。……。

渡　袈裟よ、男が、自分の最愛の妻を、犠牲にして生き延びることが、どんな心持がするかと云ふことを、お前は知らないのか。それは身を切らるゝよりも、苦しい恥辱ぢや。お前を犠牲にして、生きるよりも、俺は焦熱地獄の釜の中で、千萬年煮られてゐる方が、まだよい！　まだましだ……。

渡　お前は、なぜ俺に打ち明けては、呉れなかつたのか。俺はお前のために、盛遠と戰ふ。それが、男として、どんなに欣ばしい、晴がましい務であるかと云ふことをお前は知らなかつたのか。お前は、なぜ悲鳴を擧げながら、俺に救ひを求めて呉れなかつたのか。俺が、驅け付けて來て、お前を小脇にかき抱きながら、盛遠と戰ふ。それが、どんなに喜ばしい男らしい事だつたらうか。俺は、屹度勇氣が百倍したに違ない。きつと、盛遠を倒したに違ない。若し萬一、俺が負けたら、その時こそお前は、俺の傍で死んで呉れゝばよいのではないか……。

渡　袈裟よ！夫が、妻から望み得る一番うれしいことは、犠牲ではない。男が、女を犠牲にして、何がうれしからう。強い男に取つて、それは一の恥辱ぢや。最愛の妻から受けて、一番うれしいものは、信頼ぢや。夫に凡てを委せてくれる信頼ぢや。お前はなぜ、俺に打ち明けては呉れなかつたのぢや。盛遠には、所詮及ばぬとでも思つたのか。俺は、お前の眼からも、盛遠よりは、頼しくないと思はれたのか。俺はそれが、情ないのぢや……。

渡　盛遠は、戀した女を、自分の手にかけて、それを機緣に出家すれば、發菩提心には、これほどよい、よすがはない。お前はお前で、夫のために身を捨てたと思うて成佛するだらう。が、殘された俺は、何うするのぢや。最愛の妻は、奪はれ、人生は荒野のやうに寂しくなるのぢや。俺は、何處で救はれるのぢや……。

渡　生き延びるために、最愛の妻を犠牲にした不甲斐ない男として、俺にいつまでも生き延びよと云ふのか。袈裟よ！　俺は、お前が恨めしいぞ。

（渡、しばらくしてから、思ひ切つたやうに、髻をふつつりと切る）

渡　盛遠は、迷がさめて出家するのぢや。俺は、最愛の妻を失うて、いな最愛の妻に不覺者と見離されて、墨のやうな心を以て、出家するのぢや。この蕭條たる心を、なぐさめるために、出家するのぢや……。

渡　（妻の首級をかき抱くやうにしながら）お前の菩提を弔うてやりたい！　が、俺が荒んだ心は、お前の菩提を弔ふのには、適はぬぞや。まだ懺悔に充ちた盛遠こそ、念佛を唱ふのに、かなつて居よう！　あゝ、さびしい。

（夜があけたと見え、周圍がほのぼのと明るくなり、

やがて鷄鳴と共に、朝の太陽の光がさして來る！）

渡　夜が明けて來るな。が俺の心には、長い闇が來たのぢや。袈裟よ！　袈裟よ！　なぜ、お前はこの渡を、賴んで吳れなかつたのか！

（よゝと泣きくづれる）

――幕――

震災餘譚（一幕）

人物

河村吉太郎　年三十三　洋服屋
妻　おとよ　二十六
おしん　吉太郎の母
吉三
およし　彼等の子
岡野茂助　おとよの父親、鳶頭
吉次郎　吉太郎の弟、二十九
弟子

時
十二年九月五日

所
小石川區初音町

情景

電車通より、狹き路次を三間ばかり入りたる家。入口が土間になつてゐ、直ぐ六疊がある。ミシン臺大小の型を交へ、五つ六つ一隅へ取り片づけてある。土間にも、腰かけてやる踏みミシン臺を置いてゐる。おとよ、小柄な善良さうな女。蠟燭に火をともし、ミシン臺の上に立てる。灯影で老母のおしんが片隅に坐つてゐるのが分る。午後七時頃。弟子甲斐々々しく身づくろひをし、手に棒を持つて歸つて來る

弟子　お神さん。朝鮮人が湯島天神の井戸へ毒を入れたので、六十人ばかり死んださうですよ。

おとよ　（眉をひそめる）まあ、おそろしい事をするんだね。

弟子　松坂屋が燒けたのも、やつぱり朝鮮人ださうですよ。松坂屋へは、どうしても火が點かないので、前の岡埜へ爆彈を投げ込んださうですよ。

おしん　おゝ恐い！　恐い！　此方へも、來やしないかね。

弟子　本鄕と小石川丈は、何うも出來ないのが、殘念だと云つてるさうですよ。

おとよ　あんなに下町を燒いときながら、まだ足りないかしら。

弟子　でも、もう此方だつて、警戒してゐるから大丈夫ですよ。先刻も、こんにやく閻魔のところで、朝鮮人が一人捕まつたさうですよ。

（その時、家かすかにゆれる）

弟子　おや、ゆれてゐますね。

おしん　本當にいやになつてしまふね。妾も今年で六十一だけども、こんな恐しい目に逢つたことは初めてだよ。
おとよ　本當に、いつが來たら安心が出來るのだらう。まだ電燈は來ないし……水道は出ないし…豆腐屋さんの井戸は大丈夫かしら……。
弟子　大丈夫ですとも。あの井戸は、寢ず番をしてゐるんですもの……お神さん。何か喰物はありませんかね。どうも、お腹がすいちやつて……。
おとよ　あゝ、さうさう。いつか、本所のお母さんに貰つたほしいかがあつたよ。
（おとよ、立つて、箪笥の開き戸棚から罐を出してやる）
弟子　こいつは、ありがたい！　少し貰つて置きますぜ。ぢや、行つて來よう。
おとよ　お前、今晩は、十二時から先きぢやないのかい。宵の裡寢てゐたらどうだ。
弟子　氣が立つてゐて、ちつとも寢られませんや。今日は夜になつたら、通行する人を、一々調べるんですよ。
おとよ　今日も、ぞろぞろ隨分通つたわねえ。一體何處から何處へ行くんだらう。
弟子　春日町へ行つて御覽なさい。この前の通の三倍位、通つてゐますよ。一旦逃げた人達が、自分の家の燒跡を見に行くんですよ。中には、乞食のやうな恰好をしてゐるのが澤山ゐますよ。
おしん　燒けた人達に比べたら、妾達は仕合せだね。
弟子　仕合せどころか、お殿さまですよ。親方は遲いな。……今日あたり何とか、手がかりがあればいゝですね。……さあ、出かけよう。
おとよ　お前、親方が歸るまでは、あんまり遠方に行かないでおくれ。
弟子　大丈夫ですよ。角の藥屋の前に居ますよ。
（弟子出てゆく）
おとよ　やつぱり、お母さんと兄さんは、被服廠へは入つたんでせうか。
おしん　さうだね。何とも分らないけれど、お前のお母さんにしろ兄さんにしろ、落着いて居る方だから、案外たすかつてゐるかも知れないよ。
おとよ　ほんたうに、お母さんは何うしてお父さんと手を離したんでせう。……あゝ、孰らかにきまつてくれないとぢつとして居られませんよ。
おしん　ほんたうに祭しますよ。でも、今日は何とか手がかりがありますよ。
（子供の吉三とおよしと歸つて來る。吉三は七つ位、およしは五つ）

おとよ　お前達、何してゐたの！　日が暮れるまで、何處へ行つてゐたの。先刻もあんなに云つたぢやないか　家の前に居なければいけないつて。
吉三　だつて、おつ母さん。お閻魔さまへ、炊出しを貰ひに行つてゐたのだもの。
おとよ（直ぐおだやかになつて）まあ、おむすびを呉れたのかい。
（兄妹、右の手を差し出す。二人とも大きい玄米のむすびを持つてゐる）
おとよ（前よりはずつとやさしく）でも、日が暮れる前に歸らないといけませんよ。
吉三（うなづく）……。
おとよ　そんなに、大きいおむすびなら、一つをお前達二人で半分わけにして、一つの方はお婆さんにお上げなさい。
吉三　うん。よし子。お前のをお婆さんにお上げ。兄さんがお前に半分やらう。
（よし子、おしんに渡さうとする。おしん、それをさへぎる）
おしん　妾は、けつこうだよ。折角お前達が、貰つて來たものだから、お前達でおあがり。
おとよ　お母さん。いゝぢやありませんか。こんなに、大きいのですもの。
おしん　ぢや、半分丈貰はうかね。お前に、半分上げませう。
おとよ　妾は結構ですよ。
おしん　そんなに云はないで、お前も半分おあがり。
おとよ　さう。ぢや半分いたゞきませう。
（おとよ、おしんの分けたむすびを受取る）
おしん　でもかうして、みんなが揃つて、おむすびをいただけるなんて、ほんたうにありがたいよ。
おとよ　さうですわねえ。
吉三（戸外を見てゐたが）お父さんだよ。
おとよ（そゝくさと立ち上りながら出迎へる）お歸りなさい！　あなた、何うして。
吉太郎（頭を振りながら）駄目々々。いくら探しても駄目だ。まだお父さんは歸つて來ないか。
おとよ　えゝまだ。一緒ぢやなかつたの。
吉太郎　今日は兩國を渡ると、二手に別れて探さうと云ふもんだから、別れたんだよ。
おとよ　まあ、さう。
吉太郎　いくら、探しても、とても駄目だ。
（上りがまちへ、へたばるやうに腰を下す）
おとよ（涙ぐんでゐる）まあ！　さう。

吉太郎　今日はお前、兵隊さんに頼んで、被服廠へ入れて貰つて、探したがあれぢや分りつこはないなあ。
およよ　まあ。
吉太郎　十の死骸が、八つまでは黒こげで、男だか女だか年寄だか若い者だか、かいくれ分らないんだもの。
おしん　南無阿彌陀佛〳〵。
吉太郎　被服廠を出てからも、大川の岸をずつと探してみたが、あれぢや、とても分りつこはないや。
およよ　明日は、妾が行かうかしら。
吉太郎　俺も、もう二三日は行くつもりだから、お前もあきらめのために、一緒に行かう。
およよ　えゝ、連れて行つて下さい。
吉太郎　俺達のやうな居職の者は、一日あるくと、とても堪らない。足が、木のやうになつてしまふ。でも、ひきがへるのやうな恰好をして、大川を流れてゐる佛に比べると、俺達は仕合せだよ。
およよ　お母さんや兄さんなんかも、そんな恰好をしてゐるのかしら。
吉太郎　そら、分らないよ。
およよ　あゝ、いやだ、いやだ。考へた丈でも、ぞつとするわねえ。
吉三　お父さん。僕死人が見たいな。
吉太郎　何を云つてやがるんだい。この小僧め!
吉三　水道橋のとこにも居たつてねえ。
吉太郎　うん、彼處にも四五人ゐたよ。
よし子　お父さん。馬の死人も居るんだつてねえ。
吉太郎　馬の死人つて奴があるかい。馬の死骸だよ。馬の死骸ならあるよ。吾妻橋の手前に、馬の死骸に石灰をかけてあるので、何うしたかつて、訊いたら、罹災者が肉をすつかり喰つてしまつたので、見つともないから、石灰をかけたんだつて。
およよ　まあ。お腹がすくと、獸のやうになるんだね。……さあ、御飯を喰べませうか。
吉太郎　喰べてもいゝが、鼻の先にまだ死骸の臭が喰ついてゐるやうで、飯がのどを通らないや。
およよ　ぢや、少し待ちませうか。私達は、九時に喰べることにしたのよ。
吉太郎　うむ、俺も道で一杯十錢の牛乳と、梨をかじつたので、胸が變につかへてゐる……それよりも、横にならう。お父さんは、遲いね。
およよ　何うしてゐるんでせう。一人で大丈夫かしら。
（吉太郎、奥へゆく。電車道から、さわがしい聲や聲笛の音がきこえる）
吉三　おつ母さん。一寸電車通へ行つてもいゝ。

おとよ　いけないつたら。

（吉三、叱られて、つまらなさうに横になる）

よし（突然歌ふ）小さい子！　小さい子！　お前は何をしてゐます。

おとよ　いけません。こんなときに、歌なんか歌つちや。（よし子、だまつてしまふ。おしん、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と、ほのかに唱へる。急に戸外が、さわがしくなる。「此方だ」「此方だ」「此方へつれて來りや分るんだ。」などと四五人の聲がする。弟子を先頭に、自警團の人々、銘々に提灯を下げて、一人の罹災民らしい男を連れて來る）

弟子　お神さん。この人知つてゐますか。

おとよ（駭きながら、近づいて提灯の光で見る）いいえ、知りません。

自警團の人々　それ見ろ！　怪しい。……曲者だ！　やつつけてしまへ！　警察へ渡せ！

その男　怪しい者ぢやない。本所の罹災民だ。

自警團の人々　ウソを付け！　ぢやなぜ、お神さんが知らないのだ。

その男　玆は、たしかに河村吉太郎さんの家ですか。

弟子　さうだよ。俺の家なんだ。ねえ、お神さん。この人が、本所から燒出されて此方を訪ねて來たと云ふんですが。お神さん。御存じありませんか。

おとよ　知りませんね。もしや、貴女は岡野茂助の家の人か。人から、何かことづてを聞いて來たのぢやありませんか。

その男　いゝえ、違ひます……私はあのう……あのう……。

おしん（片隅で、ぼんやり聞いてゐたが、このときふと何かを認めたやうに上りがまちへ近づく）一體、どうしたの……。

おとよ　おつ母さん。貴女、この方知りませんか……。

おしん　えゝ……どの人ですつて……。

（おしん、眼鏡を取り出さうとする）

その男（急に）おつ母さんぢやありませんか。

おしん　えゝつ。（見つめて）誰！

その男　吉次郎です！　おつ母さん。

おしん　吉次郎だつて……えゝ……（よく見る。駭く）ほんたうに、吉次郎ぢや、吉次郎ぢや。まあ、何うおしだの、まあ、何うおしだのえ。吉太郎や。吉次郎が歸つて來ましたよ。

吉次郎　兄さんは、御無事ですか。

おしん　あゝ、奧に居ますよ。吉太郎や。

自警團の人々　ぢや、やつぱり此方の身寄の方ですな。それで安心しました。さあ、行かう。

（皆去る。弟子、ジロジロ吉次郎を見てゐたが同じく去る）

おしん　まあ、お前。何うしたんだい。お前東京に居たのかい。

吉次郎　本所に居たのです。（オドオドしながら）おつ母さん。兄さんは。

おしん　吉太郎おいで。吉次郎が歸つて來ましたよ。

吉太郎（無言のまゝ出て來る。激しい憎惡の色）……。

吉次郎　兄さん。お久しう。御無事でけつこうです。何のおかはりもなく。

吉太郎　手前は、なぜ、歸つて來たのだい。

吉次郎　兄さん。すみません。私が惡うございました。

吉太郎　何がすみませんだい。手前は、お天道さまが、ひつくり返つたつて、歸つて來られた義理ぢやないぞ。こんな地震位で、歸つて來られる義理ぢやないぞ。

吉次郎　よく分つて居ます。兄さんの仰しやることは、一一御尤もです。どんな事があつたつて、この家の敷居を跨げられる義理ぢやありません。でも、兄さん。本所の被服廠で命からがらの目にあつて、女房子は眼の前で燒け死ぬし……。

おとよ　まあ……。

吉次郎　外にたよる所がないものですから、それに、お母さんや兄さんのお身の上も心配になつて、久し振りで……。

吉太郎（やゝ意とけて）お前。東京に居たのかい。北海道に居ると云ふことは、聞いてゐたが……。

吉次郎　去年の暮に、東京へ出たのです。死んだ父ちやんや兄さんに迷惑をかけて、家を飛び出したものゝいゝことがありませんや。でも、北海道で、住み込んでゐた料理屋の主人がね、たいへん私に目をかけてくれましてね。去年の四月に女房を持たしてくれたのです。そして、私が口ぐせのやうに、東京へ歸りたいと云ふものですから、到頭去年の暮に暇をくれて、商賣の元手として七百兩ばかり吳れたのです。

おしん　それで、お前東京へ歸つて來たのかい。

吉次郎　さうです。去年の暮に歸つて、本所へ小料理屋を出しまして、この頃ではやつと得意も出來、どうかかうか店らしくなつて來ましたので、一人前になつたら、兄さんの所へお詫びに來ようと思つて、そればつかりを樂しみにしてゐると、今度のさわぎでせう。女房と今年の春生れたばかりの男の子を、むざむざと眼の前で殺してしまつたのです。（……とすゝり泣をする）

おとよ　まあ、お氣の毒ですね。貴君も被服廠ですか。私の里の母も兄もやつぱり被服廠ですよ。父だけ母や兄と

別れて、被服廠へ行かないで、兩國橋を渡つて、逃げたものですから助かつたのです。
吉次郎　なるほど……あゝ、貴女は、嫂さんですか。初めまして、私は吉次郎です。もう八年ばかり前に、兄貴にも父さんにも不義理をして、家を飛び出したものです。……どうぞ、嫂さん！　何分ともによろしく。
およよ　なあに、そんな御挨拶に及びませんよ。こんなときは、他人だつて助け合ふんですもの。まして、親兄弟ですもの、いくら不通だからと云つたつて……ほんたうによく來て下さいましたね。さあ、どうぞお上りなさい。
（吉太郎、猶默然としてゐる）
吉次郎　ねえ、兄さん。貴君はまだ氣持が惡いかも知れませんが、どうぞ堪忍してやつておくんなさい。もう、私も來年は三十でさあ。女房子も持つて、地道に世の中を渡らうと思つてゐた出鼻を、この地震でせう……少しばかり出來かゝつてゐた家財道具もめちやくちやで、スツカラカンになつてしまつたのです。その上、二十二になつたばかりの女房と誕生日も來ない伜とが、私の目の前……あゝいけない！　いけない！　（眼の前の怖しい幻影を拂ふやうにする）
吉太郎　手前、改心してゐたと云ふのは、本當かい。
吉次郎　本當ですとも、兄さん。私が、どんなに地道に働いてゐたかを、兄さんに見せたかつた位ですよ。
吉太郎　本所は、何處だつた。
吉次郎　えゝ、龜澤町……。
およよ　おや、龜澤町……ぢや、妾の里の近くですわねえ。
吉次郎　（少しく狼狽して）えゝ、さうですか。貴女のお家も龜澤町ですか。何丁目です。
およよ　貴君のお宅は……。
吉次郎　私の家ですか……えゝと、交叉點がありますね。
およよ　えゝ、ありますよ。
吉次郎　あれから、錦糸堀の方へ向つて行くと……。
およよ　右側ですか、左側ですか。私の家は右側ですよ。
吉次郎　私の家は、左側の横町ですよ。
およよ　ぢや、横田と云ふ寫眞屋さんの横町ですか。
吉次郎　さうです、さうです。あの寫眞屋の横町です。
およよ　ぢや。私の里の向横町ですよ。彼處に小料理屋が出來てゐたとは氣がつきませんでしたわねえ。尤も妾は今年になつて、一二度しか行かないんだから。
吉太郎　ほんたうに、嫂さんのお里があの近くにあると知つたら、直ぐに御挨拶に出るのでしたのに、失禮しました。

おとよ　それは、お互ひ樣ですよ。……さあ、どうぞお上りなさい。
吉太郎　吉次郎！
吉次郎　はい。
吉太郎　手前よく聞いておけ。お父さんが死ぬときにな、あんな不孝ものは、たとひ俺が死んだ後でも、一足でも家の敷居を跨がすことぢやねえと、繰り返して云つたんだ。手前。さう云はれたつて文句はないだらう。
吉次郎　御尤もです。
吉太郎　が、手前も、地道に世の中を渡つて行かうと云ふ出鼻を、この地震でめちやくちやに叩きつぶされて、親は泣きよりと泣き込んで來たからには、今度丈は勘辨してやらう。
吉次郎　兄さん。ありがたう。ありがたう。
吉太郎　手前が身の振方が着くまでは、置いてやらう。その代り、以前のやうなことが一寸でもあると、叩き出すよ。
吉次郎　はい。解りました、よく解りました。
おしん　(欣んで)　それでもよく無事で歸って來ましたねえ。妾も北海道に居ることゝばかり思つてゐたんだよ。
吉太郎　井戸端へ行つて、足を洗つて來い。少し遠いぜ。あゝ、吉三。お前案内してお上げ。手前一人で、井戸端なんかをウロ〳〵してゐると、また自警團にとつゝかまつちまふ。
吉次郎　本當に、先刻はびつくりしました。白刄を突きつけるのですから。
吉三　叔父さん。此方だよ。水道が出ないから、井戸までは半町もあるんだよ。
（吉次郎と吉三と出てゆく）
おとよ　あれが、いつか云つてゐた弟さんですか。
吉太郎　極道で仕樣のない奴だつたんだが……。
おとよ　でも、不思議ですわねえ。里の直ぐ近所に店を出してゐたなんて。
吉太郎　(默つてゐる)……。
おしん　吉次郎が歸つて來たので、急に氣がつよくなつたやうな氣がしますよ。
おとよ　ほんたうに賴もしいですわね。
（おとよの父茂助歸つて來る。袢纏を着た五十五六の元氣な老人）
おとよ　お父さん。お歸りなさい。
吉太郎　お歸りなさい。
茂助　(だまつてうなづく)……。
おとよ　どうして、何か手がゝりがあつて……。
茂助　駄目だ、駄目だ。

吉太郎　お父さんの方も駄目でしたか……。
茂助　念のために、枕橋の方も探してみたが駄目だつた。やつぱり被服廠かな……あの中で、黒こげになつたんぢや、分りつこはないや。
おとよ　そんなこともありませんよ。今もね、宅の長い間不和になつてゐた弟さんが、やつぱり被服廠に駈け込んだのが、お神さんや子供さんは燒け死んだけれども、御自分丈は、助かつたと云つて、たよつて來たのですよ。
茂助　そいつは、……そんな運のいゝ人もあるんだな。
（吉太郎の方へ向いて）そいつは、おめでたう。
おとよ　それがね、ちよいとお父さん。家の向う横町ね、寫眞屋さんの横町で、小料理屋を出してゐたんですつて。
茂助　あすこに小料理屋だつ……て……。
吉太郎　そんな家がありましたかね……。
茂助　えゝと、……そいつは……いつからです。
吉太郎　去年の暮からですつて。
茂助　そんな筈はないな。あの横町は、袋になつて、十軒ばかりしか家がありやしない。それに、地震の直ぐ後に、俺は商賣柄、一軒々々見舞を云つて歩いたんですからね……。
おとよ　横町が違つてゐるのぢやないかしら。

吉太郎　たしかに寫眞屋の横町と云つたぢやないか。
おとよ　たしかにさう云つたわね。
茂助　あの横町は、踊りの師匠が一軒あるばかりで、後はしもたやばかりだが。そいつは不思議だね。
吉太郎（考へ込んでゐたが、憤然とする）おのれ！　まだ根性骨が直つてゐないな！（立ち上らうとする）
おとよ（すがりついて止める）どうしたのです、あなた。
吉太郎　あの野郎。このドサクサまぎれに出鱈目を云ひやがつて、俺の家へ歸つて來ようとしてやがるんだな！まだ根性が曲つてゐやがるんだ！　畜生！　叩き出してやる。
（夜警に用ゐるらしい木劍を取り上げる）
おとよ　だつて、それやお前さん。横町が違つてゐるかも知れませんよ。
茂助　本當だ、こんなときだ。みんな氣が轉動してゐるんだ。考へ違ひ思ひ違ひだ。
吉太郎　先刻、なんだか言葉をごまかしてゐると思つたが、あいつの昔からの出鱈目なんだ。自分の住んでゐる所を思ひ違へるなんて、そんなべらぼうなことがあるものか。野郎、北海道あたりで喰ひつめやがつて、揚句の果に出鱈目を並べて、ドサクサにつけ込んで歸つて來よ

うとしやがるんだ。何が被服廠だ！　何が、女房子だ！　馬鹿にしてやがら。歸つて來てみろ、叩き出してやる。

茂助　俺が云つたことから、そんな事になつちや、俺の立場がなくなるぢやありませんか。まあ、もつとよく落着いて。他人だつて仲をよくするこの際だから。

吉太郎　だつて出鱈目もほどがあるぢやありませんか。着物は汚いが、ちつともやつれてゐないと思つたら、被服廠どころか何處に居たんだか分りやしない。

おしん　（オロ／＼してゐたが）でも、吉太郎。小料理屋をやつてゐたのが、嘘にしてもやつぱりお前、妾達の身を案じて何處からか來てくれたんだよ。いくら義絶になつてゐても、東京は大地震だと云ふことを聞いて、私達の身を案じて歸つて來たのですよ。

およ　さうですわ。ほんたうに、おつ母さんの仰しやる通ですよ。

茂助　さうだとも。そんなに惡氣があつて、こんな所に飛び込んで來る譯はないや。

おしん　それが、お前。普通には足踏が出來ないもんだから、あんな嘘を吐いたのですよ。あの子は、嘘つきでなまけものだけれども、さう惡氣のある子ぢやありませんよ。

吉太郎　だつて、おつ母さん……。

茂助　まあ、いゝぢやありませんか、吉太郎さん。この地震で、俺等初め、世間の人達は、掛換のない親兄弟を失くしてゐるんです。お前さん丈ぢやないか、この地震で兄弟が出來たのは。

吉太郎　……。

茂助　今度の地震で、親兄弟の情愛のありがたいのが、皆分つたのぢやないか。弟さんだつて、東京全滅と聞いて、お前さん達の安否が氣になつて、飛んで歸つたのだよ。

吉太郎　……。

（この時、吉次郎と吉三と一緒に歸つて來る。初對面の叔父甥は、もう可なり親しくなつてゐる）

吉三　叔父さん。それから、その馬を何うしたの。

吉次郎　さうさ、群衆の中を荒れるもんだから　子供などはおどろいて、きやつ／＼泣き出すんだらう。

吉三　それで……。

吉次郎　だから、叔父さんが荷物を放り出して、その馬に飛びついて、やつと四足を繋いで倒したんだ……。

吉三　ほう……伯父さん、偉いなあ。恐くなかつたの。

吉次郎　叔父さんは、北海道の牧場で、何百疋と云ふ裸馬を手がけたことがあるんだもの……。馬なんか、犬ころのやうにしか思はないや……只今。

（吉次郎皆に挨拶する）

おとよ　お歸りなさい。

（一座白けて、おとよの外誰も挨拶しない。吉次郎は、茂助に一寸目禮した後、上りがまちに腰をかける）

吉三　（叔父にまつはりながら）それから、被服廠へは入つたの。

吉次郎　さうだよ。被服廠の中が、また大變だつたよ。

吉三　どんなだつたの。

吉次郎　とても、お話にならないよ。黑い煙で、一間先が見えないんだよ。旋風が吹いて來る度に、眞赤に燒けたトタン板が、何枚も〳〵ピユー〳〵飛んで來るんだよ。それが、人の首に當ると人間の首がスツ飛んでしまふんだよ。

吉三　ほんたう？

吉次郎　ほんたうだとも、叔父さんは、嘘なんか云はないよ。

吉三　旋風つてこはいの？

吉次郎　恐いとも。人間がピユー〳〵木の葉のやうに吹飛ばされるんだよ。

吉三　自働電話が、空へ捲き上つたつて本當？

吉次郎　自働電話どころか、自動車が捲き上つたんだよ。

吉三　運轉手が乘つてゐたの……。

吉次郎　（ドギマギとして）乘つてゐたとも。

吉三　お客は？

吉次郎　お客なんか乘つてやしない！

吉三　先刻、一間先は黑煙で見えないなんて、そんなもの丈は見えるの。

吉次郎　（ドギマギして）そら、お前……そらお前……旋風で黑煙が吹き拂はれてしまつたんだ……。

（みんな苦い顏をして聞いてゐる）

おとよ　吉三。早く行つてお寢。よし子は、寢てしまつたんだもの。

吉三　だつて、被服廠のこと、もつと叔父さんに話して貰ひたいんだもの。

茂助　貴君が弟さんですか。俺（わし）は、このおとよの父です。初めまして。

吉次郎　初めまして。

茂助　大變御近所に住んで居られたやうなお話ですが、ちつとも知らなかつたものですから。

吉次郎　いゝえ、手前こそ。

茂助　今さう云つてゐるのですよ。この地震で、親や兄弟を失くしたものが多いのに、疎遠になつてゐた兄弟が廻り合ふなんて、どんな目出度いことだか分りやしないつて。

吉次郎　ほんたうですとも。私ね、東京へ歸つて商賣をやつてゐたものゝ、親兄弟に會へないのが、どんなに心細く思つてゐたか分らないのですよ。それが、この地震で詫びが叶つて、こんなうれしいことはありませんや。（涙ぐむ）地震前から心を入れ替へてゐたのですが、この地震ですつかりやり直すつもりですから、父さん。貴君もどうぞ、兄貴同樣にお心やすく。

茂助　ようがすとも。

吉三　叔父さん。それからどんな事があつたの……。

吉太郎　吉三。寢ろつたら。

（吉三、ベソをかきながら、奥へゆく）

吉次郎　兄さん。私は、どんなことでもやりますよ、どんなことでも……。

（弟子あわただしく歸つて來る）

弟子　親方。とても手が足りないんですよ。もう一人出てくれろつて。

吉太郎　よし、疲れてゐるけれども……。

（立ち上らうとする）

吉次郎　兄さん。私が行きますよ。私にやらせて下さい。

吉太郎　（默つてゐる）……。

吉次郎　兄さん。私にやらせて下さい。それを貸して下さい。

吉太郎　（先刻の木刀をまだ持つてゐる。暫く考へてから）これかい。（貸してやる）

吉次郎　（弟子に）さあ行きませう。

（二人出て行く）

おとよ　でも吉次郎さんは疲れてやしないかしら。被服廠で……。

吉太郎　馬鹿！　お前まで、そんなことを信じてゐるのか。

おとよ　おほゝゝゝ（かすかに笑ふ）でも直ぐ役に立つてくれろわねえ。

茂助　さうだとも。地道に働く男手なら、これからの東京で、いくらでも入用だよ。一寸面倒を見てやりや、直ぐ一本立になれるよ。

吉太郎　あいつは、單衣一枚だつたな。おとよ。俺のシャツでも持つて行つてやれ。

おとよ　はい。

（奥へゆく）

おしん　私は、これで何だか心丈夫になりましたよ。……おや、また搖れてゐるのでないかね。

（三人、天井を仰ぐ）

——幕——

浦の苫屋

人　物

杢兵衞　漁　師
おまち　その妻
久　六　漁師、おまちの前夫
辰右衞門　年老いたる漁師
新　太
藤　六　漁　師
茂兵衞
佐　助　久六の友人
おさき　近所の女房

場　所

南海道の漁村

時

寛文年中、秋の初

第　一　場

浦の船着場に添へる街道。

數隻の漁船が着いてゐる。沖の二三の島が見える。島の彼方は、渺々たる大海。暮方近く、漁舟が歸つて來て釣つた魚を揚げてゐる。漁師新太、藤六、茂兵衞など、みんな銘々の船の支度をしてゐる。漁夫の妻子供など、手助けしてゐる。老漁夫辰右衞門手を後で組みながら出て來る。

辰右衞門　（あちらこちらを見廻り乍ら）午下りから、たつみが吹くかと思ふとつたら、えゝ按配に吹かなんだの。

新太　（玉網に入れた魚を數へ乍ら籠に移してゐる）えゝ按配ぢや。だが二百十日に吹かなんだから、この四五日はまだ恐いや。

辰右衞門　うん、鯛子もそなに大きうなつたか。

新太　おゝ、もう十で十文で賣つてもえゝわ。

辰右衞門　鯖はまだ喰はんかのう。

新太　鯖はまだぢやあ。だが、もうおつつけ喰ふだらう。

（漁夫藤六、魚商人の手代と連立ちながら來る。）

藤六　おゝ、新太。魚忠さんが燒物にする鯛の型を揃へたいといふのぢや。お前のところに、三枚ばかりないか。

新太　（手を振つて）無い無い。わしは今日小物ばかりぢや。あゝ、さう〳〵、杢兵衞が與島の沖で鯛をやつてをつたぞ。もう、おつつけ歸らうぞ。

藤六　（手代に）ぢやあ、もう少しお待ちなされ。今に杢

が歸つて來ますだ。

手代　新太どん。その鯛子を貰はうかな。

新太　鯛子なら一束ばかりあるぞ。

（手代連れの男達を呼ぶ。新太鯛子を數へながら籠に移す。）

辰右衞門　（沖を眺め乍ら）あゝ、日暮になるとやつぱり少し吹きだした。夜になると暴れるかな。

新太　さうぢや。乾が少し暗いわ。

（漁夫の妻おさき出てくる、藤六の船に近よる。）

おさき　おらがとこの作造は、まだかの。

藤六　おゝ作か、作はな、わしが道具をしまふとき誘つたら、まだ午時は釣るといふとつたぞ。

おさき　あの人は、いつでもぐづ〳〵するのぢや。風が荒れかけとるに。

（茂兵衞すつかり自分の船を片付けて、手に大いなる魚籠を下げながら出て來る）

茂兵衞　あゝおさきどんか、いつも亭主の歸りを案じてゐるお前は、この村で一番の亭主孝行ぢや。

おさき　何をからかふのぢや。

茂兵衞　御城下で此頃こんな歌が流行つとるぞ……暮れて歸らぬ出て見りや沖は、風に土用の波が立つ、となあ。そら、お前そつくりぢやろ……まだある。よしになされよ、亭主持つなら船乘りだけは、風に苦勞の板びさし。ほら思ひ當つただろ。ぬしも作造と別れたら、この次ぎは漁師はよしにするとえゝわ。

おさき　何をいふぞ、おらは作造どんと一生別れる氣はないわ。

茂兵衞　何をこいつめ、のろけを云ふとる。お前がいくらくつゝいてゐようとしても、ほら、おまちの前の亭主の久六のやうに、時化をくつて外海へ流されゝばそれまでぢや。なあ、藤六。さうぢやないか。

藤六　さうぢやとも、さうぢやとも。

おさき　えゝ、そんなまんの惡いこと云はんといて……おらあ一度家へ歸つて來。

（漁夫達笑ふ。おさき去らんとして、おまちと會ふ。）

おまち　おまんとこも、まだかの。

おさき　うむ、まだぢや。まだ、沖にも見えんわ。

（おさき去り、おまち漁夫達の所へ來る。）

茂兵衞　いよう、おまちどん。主もやつぱり亭主が案じられるか。

おまち　いやあの、そこの倉松さんのとこへよつたついでぢや。

藤六　おゝ、さうてれかくしを云はいでもえゝ。お前も三年の長い月日、後家を通したあとぢやもの、新らしい亭

主が戀しかろ。おゝ無理もない。さうからかはんとおいてたもれ。だが、
おまち　恥かしい。さうからかはんとおいてたもれ。だが、
家の……あの、杢兵衞どんは、見えんかの。
新太　おゝ、まだぢや。戀女房のお前に、少しでもよい思をさせたいためぢやろ。人よりは鯛の二三枚も多く釣らうと、わしがすゝめてぬ道具をしまはんのぢや。
おまち　そんなら、おらは、また出なほして來ようか。
茂兵衞　まあ、こゝにゐて、話して行けよ。濱一番のきりやうよしのお前がゐると、濱が賑かぢや。
おまち　ほゝ、てんごう云はつしやるな。
辰右衞門　なあおまちどん。久六の命日は、もうすんだかな。なんでもあの時の時化も、二百十日の後ぢやと思うてゐたが。
おまち　あいのう、丁度一昨日でござんした。
辰右衞門　なるほど、今度の亭主の手前もあり、さう目に立てゝ墓參りも出來ぬぢやろ。
おまち　（愁然として默つてゐる）……………。
藤六　久六もえゝ男ぢやつたが、杢兵衞だとて久六に負けんわ。それに若い時、二人でおぬしを奪ひ合うて、久六に取られてからは、杢兵衞の奴、意地を立てゝ、女房を貰はなんだのぢや。
茂兵衞　杢兵衞もお前にとつては、心中男ぢやわ。
辰右衞門　そなゝえゝ亭主をつゞけてもつ、お主は果報者ぢや。
おまち　何を云はつしやります。一生に二人亭主を持つなどは、女子としてこんな不仕合はござんせぬ。
辰右衞門　何んの不仕合なものか、それに浮いた心で二度持つたのではなし、お主の氣心は皆知つとる。
おまち　（その場をはづさんとして）おゝ、さう〳〵、お釜の下を焚きつけた儘にして來た。どりや一足去んで來ませう。
藤六　それがえゝ、杢兵衞が歸つて來たら、一散走りで家に行くやうに云つておかう。
（おまち小走りに去る。）
茂兵衞　さあ、わしも家へ行かう、古女房が待つてゐる。
（茂兵衞去る。）
藤六　二度の亭主を持つてから、一倍ましにえゝ女になつたのう。
新太　さうぢや、みづ〳〵してゐるわ。
辰右衞門　わしももつと年が若けりやあ、杢兵衞の替りに入婿になるものを。
（皆笑ふ。）
辰右衞門　久六が死んでから、もうまる三年か。
新太　たつて見ると早い月日ぢや。

辰右衛門　久六の舟は五人乘つてゐて、たつた一人欏七の死骸が見つかつただけぢやのう。
藤六　さうぢや。
新太　誰か歸つて來てゐるな。（沖を見る）
（この時、一人の道中姿をした旅人が出て來る。漁夫達その男を見る。旅人も、ジロジロと漁夫を見てゐる。）
旅人　（突然駈け寄りながら）おゝ、お前は新太ぢやないか。
新太　えゝ、新太ぢやつて、お前は誰ぢや。
旅人　わしぢや、久六ぢや、久六ぢや。
（みんな濱邊にゐた人々驚いて集る。）
みんな　おゝ、久六ぢや。久六に違ひない。
辰右衛門　（怖れながら）わりや、迷うたな。
久六　おゝ、辰右衛門か。何を云ふぞ、この通り二つの足があるわ。（笑ひ乍ら、大地を踏んで見せる）おゝお前は藤六。
藤六　なるほど、久六に違ひない。
みんな　（口々に）わりや、生きて居たのか。たつしやだつたのか。死んだとばかり思つてたに。
久六　おゝ、生きてゐたとも。
（皆近よつて見る。）
新太　生きてゐたのは、めでたい。

辰右衛門　おゝ、めでたい。何よりぢや。
皆　めでたい。めでたい。よう歸つて來た。
藤六　だが、この三年といふ年月、どこに何うして居たといふのぢや。
久六　おゝ、それを云はねば不思議がるのも道理ぢや。皆きいてくれ。わすれもしない戍の年の二百十日の後ぢや。紀州寄りの沖で時化を喰ひ、大きいと云つてもたかゞ漁船ぢや。帆は取られる、梶は折られる、欏七は直ぐ吹き掠はれる。
辰右衛門　道理で、欏七の死骸丈は揚つたわ。
久六　西南の方へ、七日七晩流されたのぢや。そのうち、長七が死ぬ。辰二は、もうこれまでぢや云うて、半狂亂で海へ飛び込む。殘つたのは、俺と虎吉丈ぢや。その虎吉も六十一と云ふ老人、十日目には喰ふ物がないので往生する。丁度十二日目に、俺一人半死半生でついたのは、竹島と云ふ、薩摩潟の離れ島ぢや。島についたけれども、死人も同然のところを島人達の介抱で、やつと正氣がついたが、そのまゝ三月ばかり床に就いて頭も上らぬ。
辰右衛門　なるほどのう。
久六　サア、便りをしようにも、西海の離れ島。鹿兒島の御城下までも、年に二三度しか渡海がないと云ふところぢや。

新太　なるほど。

久六　そのうち、身體は元になつたけれども、島人達に受けた厚い恩、返さいで歸るも本意でないが、さて返すには裸一貫の漂流人、働いて返す外はないと、島人達のために習ひ覺えた漁師をして働いた。半年一年は夢の間ぢや。今日は故鄕へ、明日は薩摩路へと思ってゐる裡、島人とも深いなじみが出來、ウカ〲と二年ばかり。その間、故鄕へ無事なたよりをと思へども飛脚があるでなし、長崎博多へ出ると云ふ人も年に二三人よりない。ついそのまゝ無音にすぎたわ。皆の衆惡う思うてくれるな。

皆　何の、道理ぢや、もつともぢや。

久六　やつと今年の五月に、鹿兒島の御城下へ出て、其處でも二月ばかり、餘儀ない事情で逗留して、廻船問屋浪花屋と云ふお店の旦那の情で、五百石積の渡海船に便船して、大阪へ來たのが、今月の二日ぢや。

辰右衞門　なるほど。

久六　女房どもへも便り一つせず、村の衆にもいかう心配かけた。許して下され。(女房の一語に、みんな當惑のため顏を見合せる)それであの、村に何の變りもないか。

辰右衞門　おゝ、何の變りもない。たゞお主は、海へ出てから一年目の一周忌に葬式出して、もう死んだことになつとるぞ。

久六　おゝ。そんなことはどちらでもえゝ。なるほど、皆の衆が驚くのも無理ない。して、わしの親達にも變りはないか。

新太　それは少しある。お前の實の父御はたつしやだが、お前の養家のおふくろは、六月の月初に中氣が嵩じて死なれたぞ。

久六　なに母者人が。それは殘念、一足違ひでお目にかゝれなんだか。それは本意ない。して、女房のおまちは：：：。

(皆、顏を見合せる。)

久六　達者でござりますか。

皆　達者？　おゝ、達者ぢや。

久六　おゝ、それでは、皆の衆またかさねて會ひまするぞ。島で働いて、多少の貯へも殘して來ましたぞ。それに島では珊瑚樹がとれましてな、わしも思ひの外の俄分限ぢや。村の衆へ、歸り新參のお土産も、大阪で、それこの通り買ひ求めてあるわ。命拾うてめでたい歸國の祝ひもして、大盤に振舞ひするぞ。ぢや、明日にもまた重ねて。御免なさりませ。

藤六　おゝ、こりや大變ぢや。

新太　だから、わしが云はんことぢやない。後家を通すと云ふものは、通させたらえゝと云ふのに、主がいゝやう

に汗煎りして、杢兵衞を後口の入婿にしたのではないか。

藤六　こりや、大變ぢや。村の一大事ぢや。

辰右衞門　一周忌に立派に葬式を出したあの久六めが、歸らうとは誰が思ふものか。こりや大變ぢや。

（皆が當惑してゐる所へ、いつの間に舟から上つたか杢兵衞、ノツソリとして出て來る。）

杢兵衞　な、な、なにが大變ぢやつて…。

藤六　わりや、今向うへ行つた旅の男を見なかつたか。

杢兵衞　おゝ見た。このあたりの浦には見なれない人體ぢや。

新太　お前、あれが誰か、知つてるか。

杢兵衞　何で知るものか。

藤六　ありや、久六ぢやぞ。

杢兵衞　（おどろく）なに、久六。

藤六　おゝ、お前の女房の前の亭主の久六ぢや。

杢兵衞　えゝつ！　ぢや、彼奴生きてゐたか。

藤六　薩摩潟のはなれ島へついて、命を助かつたと云ふのぢや。

杢兵衞　えゝ、惡い者が歸つて來やがつた。

藤六　久六とお前とは、若い時おまちを取り合うてからの敵同志ぢや。わりや、これ、どうする氣ぢや。

杢兵衞　何うするもかうするもありやしない。歷とした仲人を立てゝ入婿になつた上は、わしの女房ぢや。腕づくでも、渡してなるものか。

（杢兵衞、舟へ取つて歸し、出齒庖丁を取り出して來る）

辰右衞門　杢兵衞、それで何うするのぢや。

杢兵衞　何うするも、かうするもありやしない。あの家はおまちの家ぢや。歷とした現在亭主のわしがゐる以上、久六を叩き出すのは、理の當然ぢや。四の五の云やあ、どてつぱらへ、こいつを一つお見舞ひ申すのぢや。

（杢兵衞、血眼になつて駈け出す。）

新太　困つたことが出來た。こりや名主どんの所へ云ひに行かう。

藤六　名主どんぢやとて、えゝ思案があるぢやなし。

辰右衞門　だが、捨てゝ置いては大變ぢや。とにかくおまちの家まで、容子を見に行かう。

新太　おゝ、さうぢや。行かう。

藤六　行かう、行かう。

見物してゐた五六人の男女も、ついて駈け出す。

第二場

（おまちの家。漁師の家らしく見すぼらし。板びさしで、苫で葺いてある。おまち、軒下にあるかまどの火を加減してる。）

（井戸がある。井戸へ近所の女房が、水を汲みに來てゐる。）
近所の女房　二百十日も、えゝ按配に、吹かぬやうぢや。
おまち　おゝ、吹かぬやうぢや。
近所の女房　どうぢや、前の亭主久六どんのことを、この頃になると思ひ出すだらうがな。
おまち　おゝ、思ひ出すでもなし、思ひ出さんでもなし。思ひ出しても、せんもないことぢや。
近所の女房　だが、おまちどの。あんたは果報者ぢやぜ。久六どのも女房思ひのえゝ亭主、李兵衞どのも酒こそのめ、そなたにはぞつこん惚れぬいたえゝ亭主ぢや。
おまち　今も濱で、そんなことを云はれたが、からかふのは、よしてくだされ。此方の氣も知らいで。
近所の女房　お前のやうに、えゝ亭主ばかり持つ女子は、からかはれても仕樣がないわ。それも、おぬしがえゝ器量に生れてゐるからぢや。おら達は、うらやましい。
（女房、洗ひたる野菜を下げて去る。おまち、一寸家には入り、直ぐ出で來たり、おかまの蓋をあけてみる。久六出て來る。おまちの姿を見て近寄る。）
久六　おゝ、女房ども。おゝ、おまち。
おまち　（振向き、久六の顏を見て驚倒す）あれ――
家の中へ逃げ込む。

久六　驚くのは、尤もぢや。だが、おまち。この通り、足もある。幽靈ぢやない。まがひもない、そちの亭主ぢや、久六ぢや、久六ぢや。氣を落着けて、久し振りの歸りを迎へてくれ。
（おまち、おづおづ出て來る。驚駭はきえて、その代り烈しい當惑のため、眞蒼になつてゐる。）
久六　おぬしが驚くのも、尤もぢや。今も村の衆に話したが、時化を喰つて十二三日も西南へ吹き流され、日本を一廻りしてついたのが、鬼界ケ島の一つ手前の島ぢや。だが、その話は、ゆつくりする。とにかく、久し振りのわが家の敷居、はやくまたがしてくれ。（上りがまちに腰をかける）さあ、御飯の出來る前に、茶なと一杯のましてくれ。（おまち、ふるへてゐる）何を思案してゐる。早う茶を一杯のましてくれ。
おまち　あい。（茶を汲んで出す）
久六　おゝ、何を浮かぬ顏をしてゐる。まだ、驚きがさめぬかのう。それも道理ぢや。便りをするには便はなし、堪忍してくれ、長い間音沙汰もしないで。かうと知つたら、大阪から前觸れをしとくのだつた。
おまち　…………。
久六　それで、母者人は、つい此間死んだと云ふことを聞いたが。

おまち　あいのう、六月の初に、中氣が昂じて。
久六　おゝ中氣。それでは看病に骨が折れたであらう。察しる、察しる。
おまち　（だまつてゐる）………。
久六　だが、おぬしは、たつしやで、けつこうぢや。何よりぢや、〳〵。
（久六、ふとおまちの髮の恰好に氣がつく。家中を見廻す、壁にかけたる男物の袷に目をやる。驚いて、おまちの顏を見る。おまち狼狽甚し。不吉なる沈默。）
久六　（苦悶を押へながら）この家に、何で變つたことがあるやうぢやな。
おまち　（いよ〳〵蒼くなる）………。
久六　わりや、何かかくしてゐるな。
おまち　（泣きくづれる）………。
（久六、あたりを見廻し、男物の煙草入れを取り上げる。）
久六　えゝ、これは男物の煙草入れ。おのれ、わしの留守に仇し男を引き入れたな。（威丈高になる）
おまち　（默つて居る）………。
久六　おのれ引き入れたな。サア、まつすぐに云うて見い！（おまちに掴みかゝらうとする）
おまち　（泣きながら）堪忍して、堪忍して。それには仔細がある、仔細がある、仔細がある………。
久六　仔細があるなら、云へ、云へ。
おまち　（泣きながら）お前が、今三月早う歸つてくれたら、わしや貞女で濟んだものを。（泣きくづれる）
久六　えゝ、何ぢやと。ぢや、おのれは仇し男に肌身をゆるしたな。
おまち　おゝ、それも餘儀ないわけぢや。あの大時化から一年經つても、お前が歸らぬので、村の人達も、お前が死んだものに定めてしまうて、明けの年あの時化の日に、形ばかりの葬式をすましたぞえ。あれ、佛壇に位牌も置いてある。
久六　むゝ。
おまち　葬式をすませると、母者人も近所の衆も後口の婿を探せと云はれるのぢや。それを、おらは、何やらかやらと逃れて、お前の三週忌までは立派にすませたぞえ。
久六　むゝ、なるほど。
おまち　それが、今年になつて、かゝさまの大病、老先も見えた。かゝさまが死ねば、後は天にも地にもおら一人殘るのぢや。かゝさまが、心配して、はやう婿をきめて、母さまに安心させるが、何よりの孝行と、よつてたかつてすゝめられ、村の衆に何かと厄介になる女一人の、さう〳〵もこ

とわりかねて、今年の五月到頭……。
久六　むゝ、二度の亭主を持つたと云ふのか。
おまち　（泣きくづれる）
久六　なるほど、聞いて見れば無理もない。かうと知つたら、一日も早く故郷へ歸つたものを。俺の不覺ぢや、不覺ぢや。
おまち　何の、わたしの不心中、存分に打擲して下され。
久六　と云つて、もう、お前は他人の女房。指一本も滅多にはさゝれぬ。かうと知つたら、歸るのではなかつた。俺も、島のメノコと云つてもわかるまい、メノコと云ふのは若い娘ぢや。島のメノコに思ひつかれ、婿にと望まれた口も二三あつたが、故郷忘じがたくやうやく歸つて來たものゝ、今から思へば、あの島の人になつた方が、おまへも俺も仕合せぢやつた。
おまち　ほんに、因果なおらが身の上、かんべんして下さんせ。
久六　したが、おまち。その二度目の亭主と云ふのは誰ぢや。
おまち　（默つて居る）
久六　うゝむ、この村でお前の婿、俺の後家に添はするとすれば、わしとは仲よしの、あの佐助か。えゝ佐助か。
おまち　（頭を振る）……。
久六　違ふ。ぢや、誰ぢや。ぢや、俺の從弟の助七か。
おまち　（頭を振る）……。
久六　ぢや、誰ぢや。問ふのも嫌、問はれるのもいやぢやらうが、云うてくれ。
おまち　（當惑して）李兵衞どのでござります。
久六　（殺氣立つ）なに！　李兵衞！　あの李兵衞。人もあらうに、李兵衞がそちの亭主。そら、聞えぬぞ、おまち。
おまち　（おづ〳〵して）あい。
久六　李兵衞と俺とは、若いときから犬と猿、それにおぬしを取り合うて、お互に恨みをむすんで口一つきかぬ仲、人もあらうに李兵衞とは。
おまち　あい、すみません、〳〵。それも、思はぬでもなけれども、李兵衞どののきつい執心。名主さままで、頼んでねづよい談判。女の身の斷りきれいで。あゝじゆつない、やるせない。久六どの。一層わたしを殺して。
（すがらうとする。）
久六　えゝ、寄るな。そちは人の女房。人の女房に未練はないが、男も多いに李兵衞とは。
（李兵衞は先刻から忍んできいてゐる。飛び込んで來る。）
李兵衞　その李兵衞が此家に入婿になるに、われに何の不

服がある。他人の女房と、なれ〳〵しう話する奴、そこ
動くな。(久六に斬りつける)
久六　何を理不盡な。
(烈しい立廻り。久六、杢兵衛の利腕取つて、組みし
く。)
杢兵衛　おまち。早う行つて、五人組を呼んで來い。近所
の人達を呼んできて、この風來人を叩き出せ！
久六　何をわめく。叩き出されなくつても、他人の家、他
人の女房、出て行つてやる。だが、杢兵衛。刄物を振り
廻してわしを切つて、お互の苦しみがとけると思ふか。
淺墓な。
(杢兵衛を突き飛ばす。)
久六　云ひたいことは山ほどあるが、何事も、因果ぢや。
三年ごし音沙汰出來なかつたのも、俺には餘儀ないこと。
おまちが二度目の亭主をもつたことも、事情をきけば咎
められぬ。杢兵衛。われも因果ぢや。死んだと思つた女
房の前の亭主が生きてゐたとは。
杢兵衛　何が因果ぢや。若いとき、惚れぬいたおまちを女
房にして、村一番の果報者と人から羨まれる。因果なの
は久六、お前丈ぢや。
おまち　(烈しく泣きながら)　久六どの。堪忍して下され。
堪忍して下され。

杢兵衛　何のあやまることがある。三年ごしたより一つし
なかつたこの男に、何の義理がある。葬式まで、濟まし
た男ぢや。何をうろ〳〵この邊を血迷うてゐるのぢや。
それに久六。そなたも入婿。おまちとの緣が切れゝば、
一刻もこの家に長居は無用ぢや。はやう出て行け。
久六　うん、出て行つてやらう。……なあ、おまち。お前
のために、浪花で買つて來た櫛笄もあり、衣類もあるが。
人の女房に入らぬ進物……。
おまち　(泣く)……。
杢兵衛　こんな男から、安物の櫛笄貰はいでも、杢兵衛も
男一疋、來年の春はウンと鯛網を當てゝ、な、たいまい
の櫛でも笄でも大阪へ行つて買つてやる。
久六　なるほど、はゝゝ。おまち、お前もえゝ亭主をも
つて仕合せぢや。さらばぢや、いつまでも長生せい。
おまち　(わつと泣く)……。
杢兵衛　他人の女房に、いらぬ挨拶ぢや。
(久六、無念をこらへて外へ出る。杢兵衛荒々しげに
戸を閉ぢる。久六外へ出る。見ると、戸外には村人達
が、澤山集まつてゐる。久六赤面して四邊を見廻す。
佐助出て來る。)
佐助　おゝ、久六。よう歸つた。
久六　お、佐助。なつかしい。

佐助　お前、何うした。家の始末は。
久六　堪忍ならないが、不通にしたわしの不覺。
佐助　何を云ふ。去り状をやつたと云ふではなし、お前が生きて居たからには、まぎれもないお前の女房。すごすごと追ひ出されて、久し振りに歸つた故郷の人々に、後指さゝれて嗤はれるのか。
久六　む………。
佐助　男らしうもない考へ直せ。
久六　………。
佐助　名主どのを呼んで、さばきをつけろ！
久六　（沈默）名主どのを呼ぶまでもない。さばきのつけ方、久六も知らぬのではない。俺一人が、身を引いて他郷へ行けばと思つてゐたが！　生れ故郷の人々に、意氣地なしと笑はれるのも無念至極。佐助、さばきはかうつける。

（久六、家へ駈け戻る。道中差を抜き、いきなり杢兵衞を刺す。）

杢兵衞　何をさらす。うゝむ。
久六　世間もある、男の意地もある。ゆるせ杢兵衞！

（息が絶える。）

久六　おまち。此處へ來い。
おまち　あい。

（胸へ刀を擬す。）

久六　ゆるしてくれ。
おまち　何の、わたしこそ。
久六　俺も直ぐ後から行く！
おまち　うれしうござんす。ゆるして下され。

（久六、大きくうなづきながら刺し殺す。村人、動轉して呆氣にとられて見てゐる。）

佐助　（駈け込んで來る）久六。やつたな。
久六　おゝ、俺のさばきは、これぢや。
佐助　潔よい！　見事ぢや。あとは、わしが引き受けた。
久六　（咽喉へ刀を擬しながら）茲に土産物がある。久し振りで歸る故郷への土産物が、この世への置土産になつた。まだ小判で茲に五十兩。さあ、みなの衆。わけてくれ！　あはゝゝゝ（咽喉をつきさす）遠慮なしに取つてくれ。

（村人、二三人小判を拾はうとする、他の者制する裡に。）

――幕――

時の氏神

人　物

相良英作　年三十位　貧しき小說家
同妻ぬい子　二十四、五
杉本芳子　ぬい子の從妹　ぬい子と同年位

時
今　日

所
東京の郊外

情　景

相良英作の家。若葉の茂れる森を背景とした三間ばかりの家。玄關が二疊、その次ぎが四疊半、その次ぎが六疊。二疊の玄關は見えない。六疊の奧の壁には、大きい書棚があり、洋書と和書とが、半分づゝ位並べられてゐる。緣側近く机を出してある。机は、商賣柄紫檀である。主人の相良英作は、机の橫に、座蒲團を四つに折つて枕とし、ねそべつてゐる。

四疊半は、妻君の居間である。奧の壁に三つ重ねの簞笥が一つ立てかけてある。簞笥の右に衣架があり、二三枚の着物と、色のあせた夏外套などがかけてある。簞笥の左横に障子があり、臺所へ通ずる。

ぬい子、自分の着物らしい冬物をほどいてゐる。時々、障子越しに六疊間の方を氣にしてゐる。英作は、いつまで經つても寢てゐる。

ぬい子　(獨言のやうに、その實は夫に聞かせるやうに)今日が、二十八日、あすが二十九日、もう四日しかないわねえ。

(ぬい子、夫の方から何か云ひやしないかと耳を傾けてゐる。)

ぬい子　あゝいつが來たら、月末の心配をしなくつてもよくなるのかしら。家賃が、四月もたまつてゐるところへ、また一月溜めてしまふんだもの、いやになつてしまふわねえ。

(夫は、何とも云はない。)

ぬい子　米屋だつて、月末には十圓や十五圓は、何うしても入れてやらなきや、もう持つて來なくなるわ。全く親切ないゝお米屋さんだのに。此方が、わるいんだわ、ほんたうに。

(だん／＼聲が高くなる。英作寢がへりを打つ。)

ぬい子　ちよいと、ねえ貴君。

（英作、だまつて返事しない。）
ぬい子　ねえ、もし、起きていらつしやるの。
（まだ返事をしない。）
ぬい子　もし、起きていらつしやるの。もし、起きていらつしやるのつたら。
（ぬい子、いら〳〵して來て、障子をはげしく開ける。）
英作　馬鹿！（突拍子もない聲で叫ぶ）
ぬい子　びつくらするわねえ。そんな大きな聲を出して。
英作　だつて、原稿を書いてしまふまでは、此の障子を絶對に開けてはいけないと云つたぢやないか。
（仰向けに寢ながら怒鳴る。）
ぬい子　でも、原稿を書く〳〵と仰しやつて、朝から寢てばかりいらつしやるぢやないの。
英作　だつて、仕方がないよ。考へがまとまらない時は、どんなにあせつたつて、一行だつて書けやしないよ。
ぬい子　考へをまとめるなんて仰しやつて、先刻なんか、いびきをかいて、ぐう〳〵寢ていらつしやるのですもの。
妾、いやになつてしまふわ。
英作　いやになつたら、勝手にしやがれ。
ぬい子　えゝ、するわ。昨夕なんか、何處へ行つていらつしやつたの。
英作　大きなお世話だ。
ぬい子　えゝ、大きなお世話でもねえ、貴君のするまゝに委して置いたら、どんな目に會ふか、分らないんですものねえ。昨夕なんか、きつとさうよ。××新聞社へ行つて此間の原稿料を取つて、プランタンへいらつしつたのだわ。
英作　下品な邪推をするのはおよしよ。
ぬい子　いつも、貴君の缺點をつかまへると、乾度下品な邪推だとおつしやるのねえ。
英作　さうぢやないか。さうに違ひないよ。
ぬい子　へえ、下品な邪推でせうか。ぢや、貴君の袂に在つた五圓札は、何處でお貰ひになつたの。
英作　（半ば身體を起し）なんだ。お前は俺の袂まで探すのかい。
ぬい子　探したら惡い。
英作　惡いとも。いくら夫婦だつて、人の袂まで探す奴があるかい。
ぬい子　だつて、少しでもお金がは入ると、直ぐ外へいらつしやるんだもの。それぢや、たまらないわ　貴君のは、樂に外で苦が內ですもの。それぢや、妾がやり切れないわ。貴君のは、お金があるときは、外を步き廻つて、お金がなくなると、家へ休息に歸つて來るんですもの。それぢや、妾が何處に立つ瀨があるの。

英作　お前と、顔を見合はせてゐたつて、面白くないからね。

ぬい子　え、どうせさうですよ。プランタンへ行つて、貴君の好きな女給とでも話していらしつた方が、よつぽどいゝでせうね。

英作　ふゝむ。

ぬい子　ふゝむぢやないわよ。此間の晩なんか、何處へいらしつたの。川瀬さんの處でかるたをして遲くなつたなんて、ウソでせう。

英作　馬鹿！

ぬい子　何が馬鹿です。妾だつて、貴君が外の女へ心を移しかけてゐるか居ないか位は、分つてよ。

英作　外の女。そんなものがあれば、俺はもつと幸福な筈だよ。

ぬい子　えゝないの。なくつてよく毎晩遲くまで、お歸りになりませんわねえ。

英作　俺の自由だよ。

ぬい子　まあ、大變な自由ですね。

英作　あゝ、いやだ〳〵。いつだつて、かうなんだからな。俺が書けないで、むしやくしやして居ると、きつとお前がぐづ〳〵云つて、俺の心を二倍にも三倍にも、荒ませてしまふんだからな。あゝ、いやだ〳〵。何處かへ行きたい。

ぬい子　えゝ、それよりか、妾が何處かへ出て行つて上げますよ。貴君は、どうせお互に戀愛がなくて、結婚したんですものねえ。どうせ妾が鼻についてゐるのですよ。貴君に、新しい戀愛が出來れば、妾が捨てられるのに定まつてゐるのですものねえ。今の裡に、妾出て行くわ。出て行つて、職業婦人にでもなつた方が、どれ丈氣樂だか分らないわ。

英作　あゝ、うるさい〳〵。頭ががん〳〵してくらあ。

ぬい子　えゝどうせさうでせうよ。いやになつた妾に、話しかけられるんですものねえ。だつてさ、昨夕だつて夜二時に歸つて來るんですもの。それで書けないと、妾の故にするんですもの。あゝ、口惜しい。

英作　えゝ、うるさい。お前とは口を利かない！　玆を閉けたら、承知しないぞ。

（障子を、ぴつしやり閉める。）

ぬい子　えゝ、開けるわよ。

（ぬい子、がらりと開ける。英作やゝ蒼くなる。）

英作　よし。もう一度開けて見ろ。ぶん毆る。

（また障子をぴつしやりと閉める。）

ぬい子　何度でもあけるわよ。

（ぬい子障子を手荒く開ける。英作、火のやうに怒る。）

四疊半の方へ飛び込んで行つて、ぬい子の頰をぴしやり〳〵叩く。）

ぬい子　口惜しい。（泣く）

英作　もう一度開けて見ろ。

（英作また障子を閉める。）

英作　さあ、開けて見ろ。

ぬい子　開けるわよ。死んだつて開けるわよ。

（ぬい子障子に飛びつく、障子はづれる。英作、ぬい子に飛びつき、三つ四つ頰を叩く。ぬい子わつと泣き伏す。）

英作　ざまを見ろ。

（障子を閉め切り、また机の横に寢そべる。ぬい子、可なり泣きつゞける。それから起き上る。箪笥の引き出しを開け、着物を三四枚取り出し、風呂敷につゝむ。箪笥の小さい引出しから、財布を出す。鏡臺の前に行つて、一寸顏をなほす。そして夫に知られないやうに、外へ出ようとする。）

英作　（障子越しに）おい、お前。何處かへ出るのかい。

ぬい子　出たら惡い？

英作　惡くはないさ。

ぬい子　ぢや、大きにお世話ですね。

英作　うむ、先づさうかも知れない。だが、何處へ行くんだい。

ぬい子　外に行くところはないわ。姉さんの處へ。

英作　さうか。

ぬい子　えゝ、さうよ。

英作　姉さんは、俺達の關係を何う思つてゐるか知つてゐるか。

ぬい子　えゝ、知つてゐるわ。姉さんは、妾に貴君と別れろ〳〵と口癖に云つてゐますわ。

英作　さうだらう。その姉さんの處へお前が賴つて行けば、お前と俺の關係は、これきりになるかも知れないよ。

ぬい子　えゝさうよ。その位なこと知つてゐるわ。

英作　知つてゐれば、それでいゝんだ。俺は、お前が無意識に動いてゐやしないかと思つて一寸警告したんだ。

ぬい子　そんなこと、御心配御無用よ。

英作　さうか。ぢや、お行きよ。

ぬい子　えゝ、行きますとも。

（出かゝつてから、ふと氣が付いたやうに。）

ぬい子　さう〳〵、瓦斯を點けたまゝにしておいた。

（ぬい子、臺所の方へは入る。その時、玄關に女の聲がする。）

××　御免下さい。御免下さい。

（英作、ぬい子が出て來るかと待つてゐるが出て來な

い。）

×× 御免下さい！ 御免下さい！

（ぬい子、まだ出て來ない。英作、一寸臺所をのぞいたが、ぬい子の姿が見えないらしいので、玄關へ出る。）

英作 あゝ、何方ですか。

×× あの、此方は相良英作さんのお宅ですか、小說家の？

英作 えゝ、さうです。

×× あの、ぬい子さんいらつしやいますか。妾、杉本芳子です。

英作 あゝ、さうですか。あの、横濱にいらつしやる？

芳子 えゝ、さうです。

英作 あゝ、さうですか、一寸、お待ち下さい。

（英作、四疊半へ歸つて來、臺所をのぞき込みながら、叫ぶ。）

英作 おい／＼、お客さまだぞ。

ぬい子 どなた？

（ぬい子あわてゝ出て來る。）

英作 横濱の芳子さん。

ぬい子 （當惑と駭きとの表情で） まあ、芳子さん！

（あわてゝ風呂敷包みを押入れにかくし、玄關へ出る。）

ぬい子 まあ。

芳子 まあ。

ぬい子 よくいらつしやいました。妾、駭いてしまつたわ。

芳子 隨分、しばらくでしたわねえ。もう、三年位になりますわ。

ぬい子 さあ、どうぞ。

芳子 失禮させていたゞくわ。

（芳子上つて來る。見ると、ぬい子が作つたのと同じ位の風呂敷包みを持つてゐる。）

ぬい子 ほんたうにしばらくでしたわねえ。御機嫌よろしう。いつも御無沙汰ばかりで。

芳子 いゝえ、妾こそ。お變りなくて結構ですわ。

（英作モヂ／＼してゐたが、挨拶する。）

英作 僕が相良です。初めまして。

芳子 初めまして。お名前は、兼々承つてゐました。

ぬい子 ほんたうに、一度尋ねて來て下さればいゝと思つてゐましたの。

芳子 今年の正月にも、一度東京へ參りましたのですよ。宅と一緒に。でも、銀座から此方へ參るのは大變でございますからね。

ぬい子 ほんたうですわ。銀座から此方へいらつしやる方が、横濱から銀座へいらつしやるより時間がかゝるでせ

う。
芳子　ほんたうですわ。
ぬい子　地震のときは、お手紙をありがたう。もう、横濱の方は、バラツク立ちまして？
芳子　東京ほど、はか〴〵しくございませんわ。
英作　貴女の方は、火事は大丈夫だつたさうですが、壁なんか落ちたでせう。
芳子　壁なんか隨分落ちましたわ。
ぬい子　御主人は、やつぱり商會へ出ていらつしやるんですか。
芳子　（一寸憂鬱になる）えゝ。
ぬい子　今日は、御一緒ぢやなかつたのですか。
芳子　えゝ。
ぬい子　お一人で。
芳子　えゝ。
ぬい子　何か東京に御用でも。
芳子　あの妾、家を出て來ましたの。
ぬい子　家を出ていらつしやつたつて？
芳子　もう家へ歸るまいと思つてゐますの。
ぬい子　まあ、どうなすつたのです。
英作　御主人と喧嘩なすつたんですか。
芳子　えゝ、まあ。

ぬい子　ほんたうですか。
芳子　えゝ、ほんたうですの。
ぬい子　御主人は、たいへん親切な方だと云ふ事を承つてゐましたがね。
芳子　それは、さうなんですけれども。
ぬい子　それに、なぜ、喧嘩なすつたの。
芳子　でも、あまり理解がなさ過ぎるのですもの。
ぬい子　さうですかね。
英作　直接には、どんな理由で喧嘩なすつたんです。
芳子　（恥しさうにうつむき）お恥しくて申上げられません。
英作　そりやさうでせう。あはゝゝゝ。
ぬい子　でも、お歸りにならないなんて、本當ですか。
芳子　えゝ、歸りませんつもりです。
ぬい子　ぢや、これから何うなさるおつもりです。
芳子　東京に何か職業はございませんでせうか。
（ぬい子默つてゐる。）
英作　（ぬい子に）お前何か心當りがありさうだね。よく、職業婦人になると云つてゐるぢやないか。
ぬい子　（苦笑しながら）心當りなんかないわ。
芳子　妾、何でもして行きたいと思ひますの。女中でも、何でもいゝのです。

ぬい子　よく新聞の案内欄などに、いろ／＼廣告が出てゐるやうですけれど、いざとなると仲々いゝのがございませんやうですわねえ。
芳子　雜誌の編輯の手傳と云ふやうなものはございませんでせうか。妾、此方へ伺へばそんな口があるかと思ひましたの。
英作（苦笑しながら）　そんな口は、なか／＼希望者が多いんですからねえ。
ぬい子　職業婦人、職業婦人などとよく云ひますが、いざとなるといゝ口はございませんわ。
芳子　でも、妾根よく探せば、ないことはないと思ひますの。そして、どんな口でも見つかつたら、それにかじり付いて、一生懸命に自身の生活を切り拓いて行かうと思ひますの。
ぬい子　そりやねえ、何でも一心におやりになると……
（氣のないやうに、中途で云ひ止む）
英作　だが、御主人は、そんなにいけない方ですか。
芳子　いけないつて。
英作　つまり問題は、貴女を愛してゐるかゐないかの問題ですね。貴女を愛してゐないんですか。
芳子（誇を傷けられた如くに昂然として）　いゝえ、そんなことはございませんわ。
英作　貴女を愛していらつしやるなら、問題ないぢやありませんか。
芳子　でも、今日なんか、隨分ひどいことを云ふんですもの。出て行くんなら出て行けゆけ、勝手にしろなど云ふんですもの。妾口惜しくつて。
（英作とぬい子顏見合して苦笑す。）
英作　でも、それは、貴女が何か云つたからぢやありませんか。
芳子　えゝ、それはさうですわ。
英作　それ御覽なさい。男と云ふものは、やつぱり、男としての意地がありますからね、女房から何か云はれると、男の意地として、つい心にもなく過激なことを云つてしまふのです。僕なども、さうですよ。原稿が書けなくつてむしやくしやしてゐる時、此奴が傍から何か云ふと、癪に觸つて毆つたりなんかするんですよ。出て行け、勝手にしやがれなんてよく云ふんですよ。そんな時は云はずに居られないんですよ。だが、それで女房の方が、飛び出すとするでせう。普通ならば、二三日も經てば歸つて來るですね。だが、人生と云ふものは偶然と云ふものが、惡戲をやりますからね。貴女の場合を例に取りますがね、一時の感情からいがみ合つて、お家を出るでせう。心の底では別れる氣は少しもない……。

芳子　あら少しもないことありませんわ。
英作　まあ、ある程度あるとしてもいゝですよ。亭主が血眼になつて探してゐるのが分つたら、歸つて來よう。そんな氣で、家を出るとしますよ。だが、貴女の場合は、茲まで無事に來られたからいゝやうなものゝ、若し途中の電車の中位で、親切さうな男からでも話しかけられるでせう。家を出て、むしやくしやしてゐるし、寂しいし、つい甘い言葉をかけられると、その男に頼る氣が起るでせう。
芳子　あら、そんな事ないわ。そんな浮ついてゐるのとは違ふわ。
英作　そんなに違ふんなら、家を飛び出さなけりやいゝぢやありませんか。
芳子　まあ。おほゝゝゝ。
ぬい子　おほゝゝゝ。
英作　とにかく、結婚した以上、容易に別れるものぢやありませんよ。夫婦と云ふものが、人生の中で一番大きい宿命ですからねえ。しかも、同棲して五六年も經てば、感覺的には身についてゐても、どこか心の底に離れられない愛があるのです。一寸した感情の衝突で飛び出して、それから間違が起つて、心の底では別れたくない夫婦が、別れる場合がいくらもありますよ。たとへば、貴女方の場合です。貴女は、電車の中で、親切な男に會はなかつたからいゝやうなものゝ、貴女の御主人の方です。いつもカフヱへなんかいらつしやいませんか。
芳子　そんな所へは、ちつとも參りません。
英作　ところが、貴女に家出されたむしやくしやで、きつとカフヱへ行かれるでせう。それとも、待合へでも行かれるかしら。
芳子　まあ穢らはしい。妾の主人に限つて待合なんかへは、足踏みもした事ございませんわ。
英作　ぢやカフヱへ行かれるとするでせう。貴女の御主人は失禮ですが、まだお若いのでせう。
芳子　二十八でございます。
英作　お若いですね。商會へ出ていらつしやるとすれば、ハイカラな好男子でせう。
芳子　あら、冗談おつしやつちやいやだわ。でも……。あら、恥しい！
英作　でも、いゝ男でせう。
芳子　恥しいわ。そんなことおつしやつちやいやだわ。
英作　それ、御覽なさい！　カフヱへなんか行くと女給の方で、わい／＼騒ぐでせう。貴女の御主人だつて、家へ歸つたつてつまらないから、自然腰を落着ける。女給の中では、一番背の高い感じのいゝ、眼の下に小さいほく

ろがあるので、却つて色がくつきり白く見える娘が、貴女の御主人の傍へ來て坐るでせう。
ぬい子　まあ、貴君、女給の描寫、いやに精しいのね。
英作　なあに、空想して話してゐるんだよ。
ぬい子　何うですかね。そんな女給が何處かにゐるんでせう。
英作　（ぬい子に）まあ、お前は默つておいで。とにかく、その女給と二言三言話をすると、この女給は、案外話が分る。貴女の御主人は、文學がお好きですか。
芳子　えゝ、大好きなのです。
英作　文學の話をしてみると、案外話が出來る。女給に似合はず、敎養がある。感じが明るくて、ハキハキしてゐる。新時代の女と云ふ氣がする。あくる日になつても貴方が歸つて來ないから、同じカフエへ行く。だん〳〵この女給が好きになる。初めは、貴女の行方を探すつもりでゐたのが、この女給に氣を取られてゐるので、探す氣がなくなる。貴女は貴女で、茲の家にでもゐて、御主人が迎ひに來たら、歸つてやらうと思つてゐたのが、こんな譯で迎ひが來ないものだから、えゝそんな亭主ならと云ふ氣になつて、いよ〳〵別れる氣になる。御主人の方も、この女給と結婚する氣か何かになつて、貴女のことを思ひ切る。それ御覽なさい！　最初は、別れる氣で飛び出したのではなくて、おしまひには別れなければならなくなるでせう。
ぬい子　（感動したる如く）さうね。
英作　（ぬい子に）お前にも分つたかい。
ぬい子　（反撥的に）分らないわよ。
英作　何うです。芳子さん、何うしてゞも、お歸りになれないのですか。
芳子　（ふさぎ込んでゐる）でも、妾決して歸つて來ないと云つて來たのですもの。
英作　でもそれは、喧嘩の意地張りでせう。意地は女の方から捨てなけりや。
芳子　でも、妾東京で新しい生活を……。
英作　貴女の結婚生活が不滿で、新しい生活を望んでいらつしやるのでしたら、大間違ですよ。誰だつて現在の生活が不滿で、もつとどこかにいゝ生活があるやうな氣がするんですよ。田舍に居れば、東京の生活は、何だかいいやうな氣がするのですよ。だが、それは夜目遠目の遠目ですよ。僕は、一昨日近所の戸山ケ原へ行きました。そして、腰を下さうと思つて、足下の芝生を見ますと、芝生が薄くて汚いのです。二三間向うを見ると其處の芝生が、いかにもよく茂つてキレイなのです。で、其處まで歩いて行つて腰をおろさうとすると、其處も眞上から見る

と、前と同じやうに薄くて汚いのです。所が、其處から前にゐた所を見ると、今度は前にゐた處の方が、よく茂つてゐて、キレイに見えるのです。人生もさうです。遠方から見ると、美しくキレイに見えるのです。だか、その生活の中に立つと薄くて汚いのです。薄くて汚くつても、其處へ滿足して、腰を下すのが人生です。

（芳子、ぬい子、默つてゐる。）

英作　どうです。お歸りになる氣はありませんかね。

芳子　でも、妾ほんたうに決心して參つたのですもの。

英作　さうですかね。僕の云つてゐることに、間違はないつもりですがね。

芳子　それは、よく分つてゐます。

英作　さうですか。ぢや、まあよくお考へなさい。

芳子　あの、職業が見つかるまで、四五日お邪魔になつてもよろしいでせうか。

英作　（あまり元氣なく）それは、どうぞ。

ぬい子　御ゆつくり。

芳子　ぬい子さん。この近所に、郵便局ありませんか。

ぬい子　えゝ、ありますよ、でも、妾使に行つてあげませうか。

芳子　いゝえ、結構なの。自分で行きますわ。

ぬい子　あのね、家を出て左へずつと行つて、突き當つて、少し右へ行つて、直ぐ左へ折れて二丁ばかり行くとありますわ。

芳子　左へ行つて、右へ行つて、左へですね。

ぬい子　さう。

芳子　ぢや、妾一寸行つて來ますわ。

ぬい子　ぢや、妾その間に御飯の支度にかゝりますわ。

芳子　すみませんが、これ一寸何處かへおしまひ下さいませな。

（風呂敷包みをぬい子受取つて、押入の中へ入れる。）

芳子　ぢや、行つて來ますわ。

ぬい子　行つていらつしやい。

（芳子出てゆく。ぬい子と英作と顏見合はせる。）

ぬい子　困つたわねえ。

英作　うむ、困つた。あんな人に居られちや、何も書けやしない。

ぬい子　それよりも、寢る蒲團がないわ。

英作　こんな狹い家に、他人が居られちや、氣になつて何も出來やしない。

ぬい子　ほんたうに、歸らないつもりなのかしら。

英作　どうだかね。先刻亭主ののろけを云つてゐたぢやないか。俺が、好男子だらうと云つてやつたら嬉しがつてゐたぢやないか。

ぬい子　あれぢや、未練があるんでせうね。
英作　あるだらうどころか、大有りだよ。別れる氣なんかちつともないんだよ。つまり、痴話喧嘩の延長だよ。
ぬい子　延長もいゝけれど、こんな所へ來て宿られちや迷惑ですわ。
英作　迷惑だとも。俺の家なんか、お客樣どころか、家族の者を容れる設備だつてないんだからな。
ぬい子　どうしませう。
英作　だが、明日は歸るだらう。亭主に知らせてから、つまり自分の有難味を亭主に知らせてから、ゆつくり歸るつもりだらう。
ぬい子　だつて、ゆつくりなんか歸られちや、此方が困るわ。
英作　今晩徹夜してでも書かうと思つてゐたが、これぢや、駄目だ。
ぬい子　貴君、もつと云はない。先刻の貴君の話、筋道がよく立つてゐるわ。貴君。あんな話させると上手ね。
英作　おだてろない。お前にも半分聞かせるのだ。
ぬい子　妾さう思つて、聞いてゐたの。
英作　お前。やつぱり、姉さんの處へ行くか。
ぬい子　それよりか、芳子さんの問題が、大問題だわ。
英作　兄弟牆にせめげども、外侮を禦ぐか……　……あはゝはゝ、
ぬい子　貴君。何うかして下さいよ。
英作　だつて、追ひ出す譯にも行かないだらう。
ぬい子　ねえ、かうしない。先刻の貴君の話で、芳子さん、隨分里心がついてゐるでせう。
英作　ついて居るとも。俺は家へ電報を打ちに行つたのだらうと、睨んでゐるんだよ。
ぬい子　さうだわ。きつとさうだわ。妾もさう思つたのよ。ねえ、貴君。妾、もつと芳子さんに里心を付けようと思ふわ。
英作　何うするんだい。
ぬい子　あのね。
英作　なんだい。
ぬい子　一寸恥しいこと。
英作　何うするんだい。
ぬい子　貴君と妾とがね、芳子さんの前で、うんと仲よくするの。
英作　そんな事出來ないよ。だつて、お前。先刻俺と喧嘩したぢやないか。
ぬい子　だから、表部丈(うはべ)でいゝのよ。なるべく仲よくして、芳子さんを當てゝあげるのよ。さうすれば、芳子さん、きつと堪らなくなつて歸るわ。

英作　名案だね。やつて見るかね。
ぬい子　えゝ、やりませうよ。妾、御飯をこさへるからね。芳子さんが歸つて來たら、東京中で一番仲のいゝ夫婦のやうに行動するのよ。
英作　少し面倒くさいが、やらう。
ぬい子　やつてくれる、嬉しいわ。
　ぬい子、臺所へ行く。英作机の横でまた寢そべる所にて、舞臺を一時くらくする。そして、時間が四時間ばかり經つたことにする。
　舞臺再び明るくなると、四疊半の方に蒲團が敷かれてゐる、それに芳子が寢てゐる。六疊との間の障子は閉められ、英作は、机に向つてゐる。ぬい子横で着物をほどいてゐる。英作とぬい子と、顔を見合して苦笑する。
英作　ぬい子。（非常に優しく）
ぬい子　はい。（非常に甘えたやうに）
英作　お前。この原稿を淸書してくれないか。
ぬい子　えゝ、するわ。妾、少しでも貴君のお仕事の手傳ひが出來るのが、一番嬉しいの。
　ぬい子、原稿紙を受取り、それが白紙であるのを、危く吹き出さうとする。
英作　お前、そのペンぢや書き惡いことない。これをお使ひ。
　英作、硯箱の中から、錐を出してぬい子に渡さうとする。ぬい子、ぷつと笑はうとするのを堪へて、
ぬい子　ありがたう。ぢや、この萬年筆借りるわ。妾が、使つちや癖がつかないこと。
英作　大丈夫だよ。
　芳子は寢られないと見えて、寢がへりを打つ。
ぬい子　ねえ、貴君。
英作　何だい。
ぬい子　今度暇になつたら、玉川へ連れて行つてくれない。
英作　あゝ、行かう。
ぬい子　（芝居をしてゐるのを忘れて）ほんたう？
英作　何がさ。
ぬい子　ウソぢやない？
英作　ほんたうだとも。
　ぬい子、眼で實際にほんたうかどうかを確めようとする。
英作　馬鹿！
　二人笑ふ。芳子寢られないと見えて、又寢がへりを打つ。
ぬい子　ねえ、貴君。
英作　何だい。
ぬい子　妾、銘仙が一つほしいの。

英作　銘仙位いつだつて、買つてやるよ。
ぬい子　この頃、銘仙が隨分變つてゐるわねえ。銘仙でお召のやうな飛白や、錦紗と同じ小紋なんかあるのよ。
英作　ぢや、今度松坂屋へでも行つ買はう。だが、買ふならいつそ、お召の方がいゝぢやないか。
ぬい子　（ウソだと云ふことを忘れて、本當にうれしがる）そらさうよ。そらお召の方が、いくらいゝか分らないわ。お召買つてくれる？
英作　よし、よし。
ぬい子　本當？　うれしいわ。
英作　（あまり本當らしいことを話しては、アトで困ると思つたらしく）お前。いつか翡翠の帶留がほしいと云つてゐたね。
ぬい子　いや、そんな事云つてゐやしないわ。
英作　（苦笑して）さうだつたかな。何だか云つてゐたやうな氣がするがね。
ぬい子　さう、ぢや買つてくれる？
英作　今度陽文社から本が出るから、その印税で買つてやらうかと思つたのだ。
ぬい子　うれしいわ。買つて頂戴な。
（芳子、先刻から輾轉してゐたが、堪らなくなつたやうに、うつむけに起き直り、顏を蒲團から出す。）

ぬい子　妾、これで子供があれば、もう足りないところはないんだけれどもねえ。
英作　何がさ。
ぬい子　だつて、貴君が愛して下さるでせう。（英作、あまりに露骨なので、笑ひ出さんとしてやつと堪へる）妾、常常さう思つてゐるの。貴君が愛して下さるし、これで子供でもあれば、東京中で一番幸福な妻だと思ふ位だわ。
（英作、少しくてれて、合槌が打てない。芳子堪らなくなつて、咳ばらひをする。）
芳子　えへん〳〵。
ぬい子　（夫に云ふともなく、芳子に云ふともなく）惡かつたわねえ。まだ起きていらつしつたの。
芳子　えゝ。もう何時でせうかしら。
（芳子上半身を起す。）
ぬい子　まだ、九時四十分ですわ。
芳子　新宿から、品川までは何時間かゝるでせう。
（ぬい子夫の腰のところをつゝきながら、笑ひをこらへて。）
ぬい子　四十分もかゝらないでせう。
芳子　玆から新宿までは、俥がありませうね。
芳い子　えゝ、ありますとも。
芳子　妾、やつぱり歸ることにしますわ。

英作とぬい子、一生懸命に笑ひをこらへる。
英作　さうですか、それは結構ですな。僕は大賛成です。
ぬい子　おほゝゝ、結構ですわ。
芳子　えゝ、歸りますわ。だつて、宅だつて、妾を隨分愛してゐてくれるんですもの。
（英作とぬい子、また笑ひの衝動をこらへる。）
英作　そりや、僕も信じてゐますよ。かうしてゐれば、御主人が迎ひに來られるのに定まつてゐますけれども、早くお歸りになつた方が、どれ丈いゝか分りませんよ。
ぬい子　（隔ての障子をあけて）ぢや妾、俥を呼んで來ますわ。
芳子　えゝ、どうぞ。
（ぬい子、戸外へ行く。芳子、急いで着物をきかへる。）
英作　どうか、御主人によろしくお傳へ下さい。夫と云ふものは、妻がある程度以上善良である場合、愛してゐないわけはありませんよ。同じ家に毎日一緒に居るのですもの、人間同志としてだつて、何うにもならない親しみが出來てゐるものですよ。一時、お互に感情を荒ませたつて、心底の愛はお互に消えるものですか。どうぞ、もう二度とこんなことのないやうにお暮し下さい。
芳子　どうもありがたう。半日でもかうしてゐますと、主人のいゝ所が分りますわ。

英作　さうでせうとも。さうでせうとも。
（ぬい子歸つて來る。）
英作　俥あつた？
ぬい子　一緒に來ましたわ。
英作　ぢや、早くお乘りなさい。一晩でも家をあけると言ふことは、いけない事ですね。
芳子　ぢや、妾直ぐ失禮しますわ。
ぬい子　ぢや、どうぞ。
英作　今度は、御主人と御一緒に。
芳子　ぜひ、今度のお禮に伺ひますわ。主人もぜひ一度上ると申してゐましたの。
（芳子玄關へ出ようとして。）
芳子　先刻、おあづけした風呂敷包み。
ぬい子　さう〳〵。忘れてゐましたわ。
（ぬい子取り出して渡す。芳子去る。引き出す俥の音。「左樣なら」「御機嫌よう」の挨拶。ぬい子と英作と玄關から歸つて來る。ぬい子腹をかゝへて笑ふ。）
英作　何が可笑しいんだ。
ぬい子　だつて、あんまりうまく行つたのだもの。
英作　馬鹿！　芳子さんが來なかつたら、お前が出て行つてゐるところぢやないか。
ぬい子　そら、さうだわ。

英作　仲裁は時の氏神つて、芳子さんは氏神さまだよ。
ぬい子　だつて、此方だつて仲裁をしてあげたのぢやないの。芳子さんから云へば、此方が氏神さまだわ。
英作　そら、さうだね。だが、見ろ。芳子さんだつて、夫の家を出ると、從妹の家へ來たつて直ぐ邪魔にされるぢやないか。
ぬい子　さうだわね。
英作　だが、芳子と云ふ人もいゝ人だよ。此方の狂言に乘つて、直ぐ歸るなんて。女は、素直でなけりやいけないねえ。
ぬい子　御主人と云ふ方も、きつと可愛がつてゐるんですよ。喧嘩して出たくせに、御主人ののろけを云つてゐるぢやないの。
英作　とにかく、可笑しかつたね。
ぬい子　可笑しかつたわねえ。
（突然、ガラリと云ふ音がして、二人びつくりする。）
××　俥屋です。あの、風呂敷包みが變つてゐるさうです。
（ぬい子、駭いて玄關へ行く。）
ぬい子　大變だ。妾がこさへたのと間違つたのよ。
（慌てゝ押入をあけて、風呂敷包みを換へ俥屋に渡す。英作笑つてゐる。ぬい子英作の傍に來る。）
ぬい子　まあ、驚いた。橫濱まで持つて行かれちやとんだ恥をかくところだつた。
英作　それ御覽！　家を飛び出すなんて騷いでゐるから、そんな間違が起るんだ。風呂敷包みの間違ひだからいゝやうなものゝ、もつと大きい取り返しのつかない間違だつたら、何うするんだい。
ぬい子　さうね、これからしないわ。
英作　どんなに喧嘩したつて、くつ付いてゐなきやウソだよ。
ぬい子　でも、貴君が、ちつとも愛してくれないんだもの。
英作　愛してやるよ。
ぬい子　さう、これから先刻のやうに、仲よくしてくれる。
英作　まあ、ある程度まではねえ。
ぬい子　貴君、先刻お召買つてくれると云つたの本當？
英作　馬鹿、あれは芝居ぢやないか。
ぬい子　いやよ。妾そんなつもりぢやないのよ。
英作　ぢや、銘仙を買つてやらう。
ぬい子　だつてお召の方が、やつぱりいゝと云つたぢやない？
英作　だつて、お前は銘仙にだつて、お召と同じやうな柄があると云つたぢやないか。
ぬい子　いやな人。つまらないことを覺えてゐるのねえ。ぢや、銘仙でもいゝわ。

英作　何だか、氣がせい〳〵した。原稿が書けさうだ。

ぬい子　かいて頂戴な。

英作　うむ。

（英作六疊の方へ行き、机の前で坐る。ぬい子自分のこさへた風呂敷包みをときかける所にて幕。）

眞似

人物

聖フランチェスコ
兄弟(フラテ)ジョバンニ
その他の人々

所及び時

アツシジの郊外。千二百七八年頃。

第一場

ある春の朝。十呎に足らぬ會堂の前。背景に二三の小さき茅葺の屋根。フランチェスコ、汚れたる褐色の衣を着、ヒーザーの莖を束にしたる箒で、會堂の前を掃いてゐる。兄弟(フラテ)レオ出て來る。

レオ　お師匠様。一寸托鉢に行つて參ります。

フランチェスコ　おゝ、フラテ・レオか。今朝は孰(どつ)ちの方角へ。

レオ　ペルジアの方へ、行かうかと思つてゐます。

フランチェスコ　あゝ、さう。行つておいでなさい！　神よ。フラテ・レオの上に、一日の平安と幸福とを賜はらんことを。アメン。

レオ　ありがたうございます。では、行つて參ります。

（レオ去る。フランチェスコ、また箒を動かしてゐる。弟子パチフイコ鍬を擔いで來る）

フランチェスコ　おゝ、フラテ・パチフイコか。お前は鍬をかついで、何處へ行くのです。

パチフイコ　昨日、スバジオの山の麓を通りかゝると、女がたゞ一人畑を打つてゐるのです。容子を訊くと夫が二三日前から病氣で、畑を耕すものがないのだと云ふのです。

フランチェスコ　なるほど。それで今日お前は、其處へ行つて、働いて上げようと云ふんだな。

パチフイコ　左様でございます。

フランチェスコ　それは結構です。早く行つて、働いてお上げなさい。

パチフイコ　父(パテル)フランチェスコ。私を祝福して下さい。

フランチェスコ　おゝ、神よ。フラテ・パチフイコが、一日の勞働に、從順と勤勉の德を與へ給はむことを。アメン。

パチフイコ　ありがたうございます。行つてまゐります。

（フランチェスコ、また箒を動かしてゐる。突然百姓姿をしたジョバンニが、飛び込んで來る）

ジョバンニ　一寸、物を訊きますだ。フランチェスコ　さまの御堂は、此處ですかい。

フランチェスコ　さうです。

ジョバンニ　フランチェスコ　さまは、何處に御座らつしやるだ。

フランチェスコ　私が、フランチェスコです。

ジョバンニ　こらはあ、お前さまが、フランチェスコさまですか。こらはあ、お見それ申しました。どうぞ、その箒を貸して下さい。

フランチェスコ　（少し駭く）いゝえ、私が今掃いてゐるところです。

ジョバンニ　どうぞ、俺に貸して下さりませ。

フランチェスコ　貸せません。私は働きたいのです。働くのが私の勤めです。

ジョバンニ　いゝや、俺に貸して下され。俺こそ働きたいだ。

フランチェスコ　一體貴君は、何處からお出でになつたのです。

ジョバンニ　そんな事より、先づ、その箒を貸して下されゝ。

（ジョバンニ、無理にフランチェスコから、箒を引つたくり、會堂の前を掃き廻す）

フランチェスコ　（あきれて見てゐたが）一體貴君は、何處からお出でになりました。

ジョバンニ　俺は、スポレトの近くの村の百姓でがす。お前さまのことを皆が賞めるので、俺もお前さまのやうになりたくて、やつて來たでがす。今日は、キヤベツを積んで、アツシジの町へ來たところ、お前さまの御堂が、近くだと聞いて、車も牛もおつぽり出して飛んで來ただ。

フランチェスコ　それは〳〵。それで、私の處へ來て、何うしようと云ふのです。

ジョバンニ　お弟子になりたいだ。

フランチェスコ　貴君などは、私の處へ來られなくても、私達の兄弟です。貧しくて勤勉で善良で、そして働いてゐる貴君は。

ジョバンニ　いゝや、俺は貴君のやうに偉い聖人さまになりたいだ。

フランチェスコ　それは困りました。私は、偉い人間ではありません。私はたゞキリストのせられた事の眞似を、及ばずながらしてゐるのです。

ジョバンニ　俺も及ばずながら、これから貴君の眞似をす

るだ。

フランチェスコ　私は、貴君に眞似をせられるほど、完全な人間ではないのです。

ジョバンニ　いゝや、俺の村の衆は、皆貴君をほめてゐるだ。キリスト様の眞似さへして居れば、天國へでも行かれるやうに云うてゐるだ。フランチェスコ様の眞似さへして居れば、天國へでも行かれるやうに云うてゐるだ。

フランチェスコ　（當惑して）そんなことを云はれると、恥しくて穴へでもは入りたくなります。でも、わざ／＼さう決心して、私の處へ來て下すつた貴君を、追ひ返すことは出來ません。よろしい！　それでは私の眞似をして下さい。私も、貴君にどんな行ひを眞似られても、恥しくないやうに心をつけませう。そして、前よりももつと心をこめて、キリストの眞似をすることにしませう。そして、私の眞似をなさる貴君が、間接にキリストの眞似をしてゐることになるやうに致しませう。（ひざまづく）おゝ神さま、あはれなる小さき者らに、おん身のいとし子なるキリストのなされしよき行ひの凡てを、模倣する勇氣と力とを與へたまへ。アメン。

ジョバンニ　（フランチェスコの方をジロ／＼見ながらひざまづき、云ふ通りを眞似る）おゝ神さま。あはれなる小さき者らに、御身のいとし子なるキリストのなされしよき行ひの凡てを、模倣する勇氣と力とを與へたまへ。アメン。

フランチェスコ　（ジョバンニの眞似に氣づき）あはゝゝゝ。

ジョバンニ　あはゝゝゝ。

フランチェスコ　これからは、お互に兄弟です。どうぞよろしく。さあ、あちらへ行きませう。

ジョバンニ　これからは、お互に兄弟です。どうぞよろしく。さあ、あちらへ行きませう。

（フランチェスコ、微笑を含みながら退場。ジョバンニ、その姿勢を眞似ながら退場す）

第　二　場

（フランチェスコの住んでゐる茅葺の小屋、やゝ廣し。片隅に醜い病人が、床の上に寢てゐる。フランチェスコひざまづいて無言にお祈りをしてゐる。ジョバンニも、傍に居てその眞似をしてゐる）

フランチェスコ　（立ち上つて咳をする）えつへん！

ジョバンニ　（同じく立ち上つて眞似る）えつへん！

（フランチェスコ。腕組みしながら、室内を歩く。ジョバンニその後から、同じやうな姿でついて行く）

フランチェスコ　さて、今日は……かうつと。

ジョバンニ　さて、今日は……かうつと。
フランチェスコ　（小さき窓の所へ行つて、外を見る）いいお天氣だな。
ジョバンニ　（同じやうにする）いゝお天氣だな。
フランチェスコ　あゝ、さう〳〵。私はベルナルドに用事があつた。
ジョバンニ　私はベルナルドに用事があつた。
フランチェスコ　私は一寸行つて來ようかな。
ジョバンニ　私は一寸行つて來ようかな。
フランチェスコ　おや〳〵。貴君はベルナルドを御存じですか。
ジョバンニ　（おどろいて）いや〳〵、知りませねえだ。
フランチェスコ　知らなければ用事のある筈は、ないではありませんか。
ジョバンニ　なるほど。でも、貴君が御用があるのに、俺がないと惡いと思ひましただ。
フランチェスコ　（微笑し）なるほど。でも、そんなに、一々私の眞似をしなくつてもよろしい。たゞ私の行ひ丈の眞似をすればよろしい。私の咳だとか言葉だとか歩きつきだとか、そんなことを一々眞似ることは入りません。私のよい行ひ丈を眞似して下さい。私のお勸めとか、私の祈禱とか、私の兄弟に對する態度とか、病人に對する介抱とか、そんなもの丈を眞似して下さい。分りましたか。
ジョバンニ　分りましただ。よく分りましただ。
（フランチェスコ、臺所に行き、牛乳を盛りたるコップを持ち來り、病人の枕元にて無言に祈りたる後、牛乳のコップを與へる）
フランチェスコ　牛乳を一杯お上りなさい。如何ですか。氣分は、少しでもよくなりましたか。
病人　はい。おかげさまで、だん〳〵良くなるやうです。いたゞきます。（牛乳を飲み干す）
フランチェスコ　何處か痛むところがあつたら、遠慮なく抑しやつて下さい。
病人　いゝえ。結構です。何處も痛むところはありません。
フランチェスコ　さうですか。それでは、私はフラテ・ベルナルドの所まで行つて來ます。ジョバンニさん。貴君は、私の留守の間、よくこの病人に氣をつけて上げて下さい。
ジョバンニ　はい〳〵。かしこまりましただ。
フランチェスコ　直ぐ歸つて來ます。
病人　どうぞ、お早く。
（フランチェスコ出て行く。ジョバンニ、しばらくも

ぢ〳〵してゐたが、やがて臺所に行き、牛乳を盛りたるコップを持ち來り、病人の枕元にて無言に祈りたる後、牛乳のコップを與へる。）

ジョバンニ　牛乳を一杯お上りなさい。

病人　うん、飲んでやらう。（ひつたくるやうにしてガブガブ飲む）

ジョバンニ　如何です。氣分は少しでもよくなりましたか。

病人　べらぼうめ。こんな業病を病んでゐて、氣分のよくなることなんかあるもんかい。

ジョバンニ　何處か痛むところはありませんか。遠慮なく仰しやつて下さい。

病人　痛いところどころか、身體中痛くない處なんか、一個所だつてありやしない。第一に、この足をさすつてくれ。

ジョバンニ　この足は、たゞれてゐるだ。こんな汚い足、さすれやしねえ。

病人　（半身を起す）何だ、さすらない！　この土百姓め。それでフランチェスコの弟子か。さすれつたら、さすれ。

ジョバンニ　嫌だ〳〵。こんな汚い足！

病人　さすらないな。此奴め！

（病人、足でジョバンニを蹴る）

ジョバンニ　おのれ蹴つたな。

病人　蹴つたが、何うしたい。

ジョバンニ　（病人に飛びかゝる）この野郎。病人らしく大人しくしろ。

病人　この野郎。看病人らしく大人しくしろ。

ジョバンニ　なにくそ、この野郎。

病人　なに、此奴め！

（二人格鬪してゐる處に、フランチェスコ歸つて來る。二人恥しげに、格鬪を止める）

フランチェスコ　ジョバンニ。貴君はなにをしてゐたのです。

ジョバンニ　お師匠樣。俺はお師匠さまのした通り、この男にしただ。すると、この男が、お師匠さまにした通りに、俺にしねえで汚らしい足をさすれ云ふだ。

フランチェスコ　さうですか。それは、早速さすつて上げねばなりませぬ。私達は、病人をどんなに愛しても愛し切れません。病人の云ふことは何でも聽いて上げねばなりません。（病人の傍に近寄り）どの足です。さすつてあげませう。どの足です。

病人　いゝえ、結構です。それには及びません。先刻ホンの一寸痛んでゐた丈です。

フランチェスコ　さうですか。それでは、ジョバンニ。よ

く氣を付けて、介抱して上げて下さい。私はベルナルドと一緒に、ポンチウンクラへ臨終の祈禱に行つて來ます。

（フランチェスコ出て行く。ジョバンニ、やゝ手持無沙汰に、病人よりなるべく遠い處へ行つてゐる）

病人　おい、百姓！　早く足をさすれ！

ジョバンニ　お前さんは、今癒つたと云うたではねえか。

病人　何を云つてやがるんだ。こんな業病の痛みが、さうやす／＼と癒つて堪るものか。

ジョバンニ　………。

病人　早くさすれ。さすらないと、フランチェスコが歸つて來ると云ひ付けるぞ。

ジョバンニ　（いや／＼傍へ近寄る）　どれ、足を出しなさい。どの足だ……。

病人　兩方ともだ……。

（ジョバンニ、いや／＼ながら足をさすつてゐる）

病人　フランチェスコの厄介になるのもいゝが、食物がまづいのが一番閉口だ。乞食をしてゐた頃の方が、もつとうまい物にありつけた。

ジョバンニ　ぢや、何うして乞食をしてゐないだ？

病人　でも、かうしてねころがつてゐる方が、結局樂だからな。

ジョバンニ　なるほど。

病人　みんな銘々に樂なことをするといゝんだ。フランチェスコは、またフランチェスコで、俺達の世話をしていい氣持になつてゐるのだ。

ジョバンニ　なるほど。

病人　馬鹿！　貴樣までがなるほどと云ふ奴があるかい。まぬけた百姓面をしてゐるなあ。

ジョバンニ　何！

病人　貴樣でも、自分の面の惡口を云はれると、腹を立てるな。あはゝゝゝゝ。あゝ、お腹が空くな。何か肉類が喰ひたいな。豚の脂身のところを、わんぐりと喰ひたいな。おい百姓。手前何處かへ行つて、豚肉を取つて來い！

ジョバンニ　だつて……。

病人　だつてと云ふ奴があるかい。フランチェスコ樣が、何と仰しやつたのだ。病人の云ふことは何でも聞かねばならないと云つたぢやないか。

ジョバンニ　なるほど。

病人　なるほどぢやない、はいと云つて、直ぐ行つて來い。

ジョバンニ　でも、何處から取つて來よう。

病人　其處ら當りに、ウヰ／＼鳴いてゐるぢやないか。そ

いつを手當り次第に、引きずり倒して、股のところを刳いで來い。

ジョバンニ　なるほど。

病人　早く行つて來い。

ジョバンニ　よし、行つて來る。

（ジョバンニ、臺所へ行き、庖丁を持つてかけ出す。）

病人　あはゝゝゝゝ。馬鹿な百姓だな。到頭行きやがつた。あゝ云ふ奴がゐるので、俺達が樂が出來るのだ。

第　三　場

（第二場と同じ部屋。一時間ばかり經つてゐる。病人寢てゐる。ジョバンニ豚の足を持つて、駈け込んで來る）

ジョバンニ　ほら、取つて來たぞ。見ろ。こんなうまさうな奴だ。

病人　うむ、偉い。話せる。お前は、フランチェスコよりも、俺にはありがたいや。早く行つてあぶつて來てくれ。お前にも半分やらあ。

ジョバンニ　よし。待つてゐるだ！

（百姓達四人、ドヤドヤと駈け込んで來る）

百姓一　おい！　今此處へ豚の足を持つて、逃げ込んで來た奴はゐないか。

病人　俺は知らないよ。俺はちつとも知らないよ。

百姓二　なに、此處に寢てゐて知らないと云ふ奴があるもんか。知らないと云や、家探しだ。

百姓三　よし。こんな小さい小屋、譯はねえ。

（皆奥へゆく。直ぐ臺所から、豚の片足を握つてゐるジョバンニを引きずり出して來る。百姓達、ジョバンニを打つ）

百姓一　太い野郎め。

百姓二　こん畜生！

百姓三　泥棒め。大泥棒め！

百姓四　何うして、俺の家の豚の足を盗んだだ。えゝ、こら、何うして盗んだだ。

ジョバンニ　だつて、病人が豚を喰ひたいと云ふだもの。

百姓一　病人が喰ひたいと云うたら、他人の物を盗んでも、えゝと云ふのかい。

ジョバンニ　フランチェスコ様が、病人の云ふことは何でも聽けと仰しやつただ。

百姓二　馬鹿！　病人の云ふことだつて、盗んでまで喰はせろとは云はないだらう。

百姓三　この大泥棒め！

（皆に、小づき廻はされるところへ、フランチェスコとベルナルドと歸つて來る）

フランチェスコ　何うしたのです、何うしたのです。まあ、待つて下さい。一體何うしたのです。
百姓　おゝ、フランチェスコさんだ。貴君だつて、責任がある。この男が、私達の豚の足を盗んだのだ。
ジョバンニ　お師匠様。病人が豚の足を喰ひたいと云ふだ。俺や困ると思つたけれど、お師匠さまが病人の云ふことは、何でも聽いてやれと仰しやつたで、俺は一生懸命に豚を見つけて、手あたり次第に、足を一本切つて來ただ。
百姓一　そら、ちやんと白狀したでねえか。
フランチェスコ　それはまあ、大變なことをしてくれましたね。
百姓一　大變どころぢやねえ。晝日中他人の家の豚を盗むなんて、お役人さまに渡して牢屋へ打ちこんで貰ひたいだ。
フランチェスコ　本當に申譯ありません。どうぞ、堪忍して下さい。私はどんな償ひでもいたします。どうぞ、勘辨して下さい。(ジョバンニに)お前は、どうしてそんな恐ろしいことをしたのです。私達の兄弟で、モーゼの第一戒を犯したのは、お前が初めてです。早く、皆さんにお詫びを云ひなさい!
ジョバンニ　でも、お師匠さま。病人の云ふことは何でも……。
フランチェスコ　まあ、それはそれとし、早くおわびを云ひなさい!
ジョバンニ　(不承不承に)どうも、俺が惡うがした。
ベルナルド　私達の兄弟をゆるして下さい。この男は、おろかしさのために、こんなことをしたのです。
フランチェスコ　(ひざまづいて)どうぞ、この男をゆるしてやつて下さい。私が、病人の云ふことは、何でも聽けと云ひつけましたので、こんな間違ひが出來たのです。神さまのために、この男のおろかさと單純さとから犯した罪をゆるしてやつて下さい。豚の償は、どんなにでも致しますから。
ベルナルド　ほんたうに、堪忍して下さい。
百姓一　豚を償ふと云ふならゆるしてやらう。こんど、こんな事をしたら勘辨しないから。ぢや、間違なく豚を返して下さい。
フランチェスコ　畏りました。
(百姓達去る。ジョバンニもぢ〳〵してゐる。フランチェスコ、ジョバンニの方へ向く)
フランチェスコ　何うして、貴君は、こんな恐ろしいことをしたのです。貴君は、私のよい行ひとか、お勤とか、お祈りとか、そんなことだけを眞似するのではなかつた

のですか。他人のものを盗むなんて、恐ろしいことです。たとひ、病人の望みにしても、貴君がそんな恐しいことをしてもいゝと云ふことはありません。でも、私は貴君を憎みません。貴君は淨いおろかしさのために、このことをしたのです。私は神さまが、あなたの罪をおゆるし下さるやうに祈りませう（ひざまづいて恭しく高らかに、情熱的に祈る）神さま、あなたのあはれなる小さき僕の一人が、犯したる罪をおゆるし下さい。あれは、本當に何も知らなかつたのです。彼は淨らかなおろかさと單純さのために、それをよい事として犯したのです。貴君の大なる愛に依つて、彼の罪をゆるし、彼が再びかうした恐ろしい誤ちを犯さないやうに、みちびきたまへ。アメン。

ジョバンニ（中途から同じやうに、ひざまづいて高らかに祈る）…あれは、本當に何も知らなかつたのです。彼は淨らかなおろかさと單純さとのために、それをよいこととして犯したのです。貴君の大なる愛に依つて、彼の罪をゆるし、彼が再びかうした恐ろしい誤ちを、犯さないやうに、みちびきたまへ。アメン。

フランチェスコ（おどろいて立ち上る）一體、誰のために祈つてゐるのです。彼とは、誰のことです。

ジョバンニ　俺は、貴君の祈りの眞似をしてゐるのです。

フランチェスコ（呆氣にとられてゐたが、やがてほのぼのと微笑す）おゝ、私は、貴君に神さまのおゆるしを祈る必要はなかつた。貴君はその淨らかなおろかさに依つて、神と共にある。おゝフラテ・ジョバンニ！

（ジョバンニの肩に右の手をかける）

ジョバンニ　おゝ貴君は、その淨らかなおろかさに依つて、神と共にある。おゝフラテ・フランチェスコ！

（フランチェスコの肩に右の手をかける）

――幕――

丸橋忠彌（全三幕）

（新釋慶安太平記）

人物

丸橋忠彌
その妻お貞
由比正雪
河原十郎兵衛
同　甚左衛門　年若し
芝原又左衛門
加藤一郎右衛門
櫻井三太夫
弓師藤四郎
おでんやの主人
中間二人
永山六郎右衛門
菊池源右衛門　町奉行所與力
その他

時　慶安四年七月二十日の夕暮より翌日の宵まで
所　江戸

第一幕

牛込榎町由比正雪の家。大身の旗本の家位宏壯である。奥の書院。正雪を初とし、一味の河原十郎兵衛、同甚左衛門、芝原又左衛門、加藤一郎右衛門、櫻井三太夫など、正雪を取り捲いて、密議してゐる。正雪は頭を總髪にし、色白く、唇あつく、眼丸くひらきて、眼中光あり。

時。慶安四年七月二十日の夕。

正雪　（河原十郎兵衛に）さやうか。やつぱり、首尾が惡かつたのか。貴殿のは、可なり當にしてゐたのだが。

河原　いや、色々事をわけて頼み申した。正雪殿。今度愈愈紀州侯へお抱へとなつたにつき、支度金思ひの外入用にて、手許不如意につき、一時拜借申したしと、餘儀なく頼みましたが、何分七百兩といふ大金では……。

正雪　七百兩は叶はぬとして、その中何程かは用立てようと云はなかつたか。

河原　その事は考へましたが、何分武士の金談、金額には

かけひきは付けられませず、相手が切り出せば格別、當方より、それでは參百兩、貳百兩とは申し兼ねました。

正雪　……なるほど。

（正雪腕をくむ）

櫻井　拙者知音の上州屋太郎兵衞にも、金談のことを申し入れて見ましたが、百兩と云ふ聲がかゝると、もう、捗々しい返事は致しませせなんだ。

正雪　我々が一期の企をいたし、一世一代の本懷を遂げる間際になりて、金子のために、心を苦しめ、各々方にまで、かやうな配慮にあづかること、いかにも心外でござる。正雪かやうに手許不如意になるについては、お疑ひもござらうが、御存じの通り拙者いさゝか貯へし金子、數年來數限りなき浪人衆に合力いたし、そのためいざ鎌倉と申す今日になりて、思はぬ不自由を致す次第、お察し下されい。

加藤　いや、先生ばかりの罪ではござらぬ。拙者どもが腑甲斐ないのでござる。御身さま一人を當にしすぎたのでござる。だが、金井半兵衞殿は、浪々の御人に似ず內證よしと承つて居りましたが。

正雪　あはゝゝ。いや、その金井氏などがあればこそ、今までは、やうやく切りぬけて參つたと云ふものぢや。金井氏と知音致してより、千四五百兩、いや、二千兩近くも融通を受けたであらうか。此月初、金井氏大阪表の大將として、先發せらるゝときも、參百兩ほども殘して行かれた。金井氏なくば、今ほどの手筈さへ、整ひがたき次第でござつた。

芝原　備前からは、何とかなりませぬかな。

正雪　いやとても、熊澤に妨ぎられてからは、以前ほどの信用はござらぬ。この際、下手な無心など申さうなら、却つて大事露顯の基でござる。

加藤　金のために、我々の企てが、十二分に參らぬとは、何んとも無念でござるナ。

正雪　甲斐の武田、越後の上杉、尾張の織田、昔とても金があるものは、强かつたのぢや。關ケ原以後、豐臣右大臣家の勢ひが、ちゞこまつたときでも、大阪城に金のふんどうがある間は、さすがの狸おやぢのも、手を出し申さなんだ。まして、太平の御代に、人を動かすのには、利を以つて啗はするより、外に道はない。千兩あらば百人の人が動き、一萬兩あらば、一千の人が動くのぢやが。

櫻井　丸橋殿には、知音の分限者も多いことゆゑ、何とか才覺の道がありさうに思はれるが。

正雪　（苦笑して）なに、あるものか、丸橋は武勇一點張、金の苦勞などする人でない。大方正雪などは、金の

なる木でも持つてゐると、安心して居らるゝだらう。あはゝゝゝゝ。

加藤　でもござるまいが、かの仁になるほど金の苦勞はなさゝうに見える。

櫻井　十文字槍さへ、振り廻して居れば、天下の事は、立ちどころに成ると思つてゐるのだらう。あはゝゝゝ。

(皆、さびしく笑ふ)

加藤　でも、さし當つての用に事缺く程ではござるまい。

正雪　いや、駿府に立ちこえ、久能山の金藏を、安々と乘取れば、金子は思ひのまゝでござらうが、江戸よりの報せを待ち、駿府城に取りかゝるまでの物入りは、……走せ蒐つた浪人に、五兩十兩と分たねばなるまいし、糧食の買入れ、人足どもへの手當、二千兩も用意したい所だが。

櫻井　なるほど、尤もでござる……。

(皆、考へ込む)

加藤　いや、御心配あるな。萬一の場合には、駿府城下の町人の家へ押し入つても……。

正雪　いや、假にも楠流軍學の家をついだ正雪として、天下に弓を引くのは、本懷ぢやが、押込强盗にはなりたくござらぬ。あはゝゝ。其處まで身を落したうござらぬな。それも小事に、こだはると申さば申すやうなものだが。

櫻井　御尤も。

(彼方に人聲がきこえる)

芝原　おゝ、何人か、來客があつた樣子ぢやな。

(若き武士出て來る)

若武士　丸橋殿でござります。

正雪　なに、丸橋殿。これへ、お通し申せ。

若武士　はゝつ。

(若き武士去る。丸橋出て來る。長身にして逞しき武士。一座、やゝ白ける)

丸橋　いやあ、各々方。お揃ひでござるな。

加藤　あゝ、先程から。

丸橋　何か評議でもして居られたのか。

櫻井　いや、別に……。

丸橋　さやうか。でも、何となく物々しく見えるな。

正雪　いや、自然各々方が蒐られたのぢや。

丸橋　駿府へお立ちの用意は整つたか。

正雪　整つたといふほどでもないが、先づ、あらましは……。

丸橋　それは祝着。……うゝむ、用談を先きへ濟まさう。拙者今夕參つた用事と云ふのは、ちと申し憎い儀たが、今二百兩だけ、融通していたゞきたいのぢやが。

正雪　（當惑して）なに、二百兩とな……。

丸橋　左樣。先頃江戸表手當として、千二百兩いたゞいたが、拙者配下の者へ、十兩づゝ支度金を遣はし、もはや幾程も殘つて居らぬ……。

正雪　……だが、最初からその千二百兩で、萬事おまかなひあるやう、くれ／＼もお願した筈ぢやが。

丸橋　でも、足らぬものは、仕方がござらぬ。

正雪　とは云へ、もはや本懷の日まで、アト幾日もござらぬ。その間は、何とか御身樣の才覺で。

丸橋　いや、この忠彌は、金の才覺は、一向不得手ぢや。

正雪　……二百兩と申せば大金、さし當つて、さほどまとまつた金が……。

丸橋　事情を申上げねば、お疑ひは尤も。實はその、弓師藤四郎に、まだ弓矢の代金を拂つて居らぬのぢや。

正雪　え！（輕くおどろく）

丸橋　面目次第もござらぬ。

正雪　それは、丸橋殿。話が違ふてはござらぬか。弓師藤四郎には、利を以て喰はし、ひそかに弓矢を作らせた上は、代金などは第一にお拂ひ下されいと、千二百兩をお渡しするとき、くれ／＼申したではござらぬか。

丸橋　左樣仰せられると、一言もござらぬが、拙者の不念から、つい後廻しにいたしたところ、いろ／＼入用の金嵩んで、千二百兩皆無になり申した。

河原　それは、丸橋殿として、ちと不覺。

丸橋　傍から嘴をお出しなさるな。アトにしても先きにしても、足らぬものはやつぱり足らぬのぢや。藤四郎へ、先に二百兩呉れておけば、何かで二百兩足りなくなつてゐるのぢや。

正雪　もはや、明日にも明後日にも、江府を立ち退く今となつて、左樣な大金は、正雪にも、ちと融通がいたしにくうござる。

丸橋　然らば、如何すればよいと仰せらるゝのぢや。

正雪　さらばぢや、いまゝで十日なり二十日なり、猶豫した貸金、今五日や十日の猶豫がならぬわけはござるまい。貴殿からよくお頼みなされば。

丸橋　今日まで、猶豫して貰ふにさへ、下げたうもない頭を、町人風情に幾度下げたかも知れませぬ。もうこの上、頭を下げることは、嫌でござる。

（正雪、だまつてしまふ）

丸橋　一體、江戸表の手當、千二百兩と云ふ金が、これほどの大事を企てる支度金としては、雀の涙ほどの少額ではござらぬか。

正雪　さやう、それは此の方も、よく承知いたして居る。だが、貴殿も御存じの通り、去る七月五日、一黨の在り

金、三千七百兩を、江戸、駿府、大阪、京都と、人數に割つて分けたのぢや。正雪、百兩はおろか、一文半錢と雖も私してゐるわけではない。今に及んで、餘分の金は十兩も用意ござらぬ。お身樣で、何とか才覺して、この急場を切りぬけていたゞきたい。

丸橋　是非もござらぬ。たゞ、かやうに本懷の日が近づいて、城せめ燒拂ひの手段を、考へてゐる代りに、金で苦勞をいたさうとは、心外でござる。

正雪　それは、御同樣に心外でござる。

（若い武士、登場する）

若き武士　松平阿波守樣より、お使ひでござります。

正雪　お屋敷への御招待の打ち合せであらう。打ち合せしても、もはや詮もないことだが、お目にだけはかゝらう。然らば各々方。失禮ながら、暫時中座。

加藤　どうぞ、お心置きなく。

正雪　然らば、丸橋殿にも。

丸橋　いづれ後刻お目にかゝる。

（正雪去る。丸橋快々として樂しまず。一座白ける）

加藤　丸橋殿。御心中は察しる。ぢやが、一黨に不足してゐるものは金ぢや。お身さまだけに不自由をさせるのではない。駿附へ立ちこえる我々とて、一文たりとも餘裕はない。

丸橋　餘裕はなくとも、借金の云ひわけはしなくてもいゝだらう。

加藤　さう云へばさうぢや。

丸橋　此の弓師藤四郎と申すもの、聞ゆる因業ものにて、朝夕の督促、きかされるだけでも、いら／＼いたす。

芝原　もはや六日か七日の御辛抱ではござらぬか。我々が計畧の一端でも成就いたさば、金銀も思ひのまゝぢや。

丸橋　さう問屋でおろさうか（忠彌はかすかに笑ふ）

加藤　何にいたせ、茲が辛抱ぢや。その弓師藤四郎とやらを、穩便に云ひくるめ、今五六日猶豫させるが肝心でござる。

丸橋　そのやうな事は、この氣短かな忠彌には、一向不得手なのぢや。

（一座、また白ける）

櫻井　（丸橋の氣持を轉ぜんとする如く）いかに丸橋どの、拙者と貴殿とは、數年來の碁敵ぢやが、拙者明日か明後日、駿府へ立ちこさば、これが一生の別れになるかも知れぬ。どうぢや、一生の思出に、一石圍まうか。

丸橋　いや、よさう。

櫻井　なぜ。

丸橋　氣がむしやくしやしてゐる。碁など打ちたうない。

櫻井　それでは、貴殿一番負け越しのまゝにして置くか。

丸橋　なに、負け越し。左樣な筈はない。

櫻井　いや、お忘れあるな。先夜貴殿のお宅でお手合したとき、拙者三番勝ちこしましたぞ。

丸橋　でも、その前、本因坊の碁會にて、拙者勝ちこした筈。

櫻井　いや、あの時は、貴殿から二番借り申した。だが、先夜の勝にて、その借を拂うて一番丈拙者勝ち越してゐる。

丸橋　そんな筈が。

櫻井　いや、お忘れあるな。

丸橋　よし。それなら一番手合して、拂うて置かう。藤四郎からの借金を殘して置く上に、碁の借を殘して置いては、忠彌愈々顏が立たぬ。一番おいでなされ。

（櫻井、碁盤を持つて來る）

櫻井　一世一代の碁ぢや。おろそかに打たれぬ。

丸橋　御同樣。拙者たしか白番。

櫻井　黑を持つても勝てばよい。

丸橋　何を。

芝原　これは、思ひかけぬ面白い勝負ぢや。

加藤　いかにも。この勝負に賭でもいたしたいところぢや。

丸橋　賭けるならば、丸橋に。丸橋の勝利にきまつてゐるものを。

櫻井　さうとも限るまい。

丸橋　何を申す。

（二人打ち始める。しばらく丸橋、强く石を下す。石はじけて飛ぶ）

櫻井　石飛んで、その碁に勝たずか。もう少し、ゆつくりお打ちなされ。

丸橋　何を入らぬ忠告！　それより、この石が、はや危くなつたぞ。

櫻井　何の、何の。かう桂馬に飛べば、天下太平ぢや。

丸橋　何、このあたりから遠く圍んで、大きくしてから殺す。

櫻井　あはゝゝゝ。おろかな、はや一目、目が出來たわ。

丸橋　かう打ちこめば、何うする。

櫻井　そんな打込み、かうする。

丸橋　うん、仕方がないか。

櫻井　それ御覽なされ。

（二人默々として打ちつゞける）

丸橋　あはゝゝ。此の石は、取つてしまつた。

櫻井　仕方がない。それは捨石ぢや。

丸橋　何だと。

櫻井　そんな石は、最初から捨てるつもりで打つたのだ。

云はゞ、犠牲の石だ。中原に、足場を打ち立てるまで、敵を牽制する犠牲の石ぢや。たとへば、我々の企てゞ申せば……。

丸橋　何だと。

櫻井　あはゝゝ。かうして四方一度にかゝるのだ。

(他に轉じて打つ)

丸橋　何をそんな所で、ジタバタしても。

(二人打ちつゞける。櫻井、だん／＼悲境に陷ちる)

櫻井　困つたな。かうでもして見るか。

芝原　駄目々々、それは、悪い考だ。

丸橋　芝原。助言は無用だ。

櫻井　困つたな。これは、何うするか。茲へ……。

加藤　もつと考へたらいゝな。大事な所だ。

丸橋　傍の者は、だまつて居れ。

櫻井　困つたな。下へさがつて置くか。それとも、かうのびるか。

芝原　(ふと謠曲の一句を思ひ出した如く、膝を叩いてうたふ)　わたらば錦、中やたえなむ。……わたらば錦、中やたえなむか。

櫻井　さうだ。かう渡つて置けば安全だ。

丸橋　ちえつ、到頭逃したか。此石さへ殺して置けば、拙者の勝利疑ひなかつたに、殘念ぢや。

(二人打ちつゞける)

櫻井　それ、御覽なされい。今度は此の石が危いではござらぬか。

丸橋　何を申す。かゝる大石が死んでたまるか。

櫻井　たとひ、大石たりとも、我黨の軍略にかゝつては、德川の天下と同然ぢや。

丸橋　馬鹿を申せ。かう、開いて置けば。

櫻井　あゝ、いよ／＼寂滅爲樂だな。大きいまゝで殺すか、二つに切るか。

加藤　なるほど、中央の白は、危險でござるな。

丸橋　何を傍から。

芝原　鞍の前輪に押しつけて……鞍の前輪に押しつけて。

(と謠ふ)

櫻井　なるほど、切つてやれ。

丸橋　(憤然として)　待て、待て。この石切ること無用。

櫻井　なに、無用とは。

丸橋　武士たるものが、助言を聽く奴があるか。芝原。貴殿、今何と云つた！

芝原　何も云はぬ。たゞ、實盛の一句が、口に浮ぶがまゝに。

丸橋　えゝ、人をうつけものになし居るか。先刻も、渡らば錦中やたえなんと謠つて、渡れと云ふ謎をかけ居つた

が、拙者優勢の局面なれば辛抱いたしたに、鞍の前輪に押しつけてとは、明かに切れとの謎ではないか。重ね重ねの助言堪忍ならぬ。

（丸橋、刀を引き寄せる）

芝原　な、な、何を云ふ、たとひ明らさまに助言いたさばとて、助言は我々の碁には、付き物ではないか。さう云ふ貴殿が、先年奥村八郎右衛門と、正雪どのとの對局を、傍から助言して、奥村を怒らせたではないか。

丸橋　それとこれとは、話が違ふ。奥村と正雪殿との碁に、正雪殿を勝たせたいは、人情の當然。拙者と櫻井との勝負に、何の意趣あつて助言するのだ。拙者に意趣でもあると云ふのか。

芝原　意趣と云へばないでもない。一黨の皆々、本懐の一事のために、身を愼しみ物を節し、一文半錢と云へども儉約いたし居るに、貴殿ばかりは大酒をあび、割當の大金をつかひ果し……。

丸橋　な、何と申す。此の丸橋が、大切の軍用金を私にでも使つたと云ふのか。堪忍ならぬ、庭へ降りろ！

芝原　望みなら、降りよう。

（正雪出て來る。正雪おどろいて止める）

正雪　御兩所とも、何事でござる。聲が高い、おしづまりなされい。

丸橋　でも、この芝原が、あまりと云へば過言な。

正雪　何を仰せらるゝ。一黨の長者として、江戸表の大將たる貴殿が、大事を前に控へて、圍碁の勝負などに。

（丸橋、しばらく默つてゐたが）

丸橋　江戸表の大將と仰せられたな。

正雪　左様！

丸橋　江戸表の大將たる拙者が、わづか二百兩の才覺が出來ぬのか。あはゝゝ、わはゝゝ。

芝原　おだまりなされ！　丸橋氏。

丸橋　だまれとは過言な。問答無益。芝原、庭へ出ろ。

正雪　丸橋どの。何の醉興。貴殿、亂心めさつたか。

丸橋　いや、亂心などとは以ての外だ。亂心せねばこそ、各々方の心持がよく分るのだ。

正雪　拙者らの心持とは何ぢや。

丸橋　いや、この丸橋を疎外してゐる各々方の心持だ。

正雪　疎外とは、きゝ捨てならぬ。何が疎外だ。

丸橋　忠彌は、槍一筋の業の外は、何も分らぬ武骨者ぢやが、各々方の心持は分る。ハツキリ分るのだ。

正雪　分れば、云つて御覽なされ。

丸橋　第一、今日の會合ぢや。一黨の領袖どもが、あつまりながら、なぜ、丸橋を呼ばれぬぞ。それからして心外だ。

正雪　それは思ひの外なる邪推。先刻も申した通り、偶然蒐まられたのぢや。

丸橋　嘘を仰せられな。各々方は此の忠彌を持てあましてゐるのだ。疎外してゐるのだ。いつも大事な評議には加へず、たゞ眞先に水火の中に飛び込ませようとする各々方の心底、よく分る。江戸表の大將などと、拙者をおだて上げ、天下の鋭鋒を拙者にさしむけ、各々方は、拙者が江戸で肉を刻まれ、骨を碎かれてゐる内に、ゆつくり駿府で支度をしようと云ふのだ。棊で云へば、拙者は捨石だ。敵の石が金城湯地と並んだ中へ、打ちこまれ、左をつき右をつき、やつきとなつてあばれた後、おしまひに取られてしまふのだ。大局が勝つても負けても、拙者丈は必ず取られるのだ。あはゝゝゝ、云つて見れば人柱だ、人柱だ、あはゝゝゝ。いや、よく出來てゐる。江戸表の大將、さうおだてられゝば、丸橋忠彌欣んで、貴殿らが天下を取る踏臺になり申す。

正雪　さて〳〵、念の入つた邪推。

丸橋　何が邪推。丸橋などは結局は、一黨の調和を破る。今の中働かして、出來るだけ使つた上で、殺させてしまはう。それが貴殿の肚だ。

加藤　丸橋どの、過言であらう。

丸橋　過言ではない。江戸表の人數わづかに二百騎。その中に正雪どの腹心のものは、一人もゐない。皆この丸橋のやうな亂暴者ばかりだ。人の手先に使はれる馬鹿ばかりだ。あはゝゝゝ。

正雪　丸橋どの。それは本氣で仰せられるか。

丸橋　本氣でなくて何で云ふ！

正雪　名家の末たる貴殿のお考へとは思はれぬ。

丸橋　なに！

正雪　江戸で事を擧ぐる貴殿が、捨石ならば、駿府で事を起す拙者も捨石。江戸が敵の重圍の中なら、駿府も正しく重圍の中。この企て、何人が一身の安全を期し申さうや。德川の政道邪にして、酒井讃岐、松平伊豆等の奸臣權を專らにし、萬民塗炭の苦しみを受け、殊に浪人の取締過酷にして、天下十萬の浪人は、その日の糧に苦しむ。正雪が事を擧ぐるは、一身を犧牲にして、一個所を堅め、能ふかぎり幕府に手向ひ、天下の人心を驚かし、奸臣の夢をさまし、幕府の秕政を質し、十萬の浪人を救はんためでござる。何ぞ一身の榮達を期し申さうや。まして多年血盟の御邊を、いけにへに致してまで、拙者安全の地を選び申さうや。

丸橋　あはゝゝゝ。いつもの正雪どのゝ、口說き上手。忠彌もその辯舌に、一時は迷はされた。

加藤　この期に及んで、貴殿は血盟を捨てらるゝか。

丸橋　左様。この忠彌は、意氣のためには一命も何のそのと存ずるが、利用はされたくない。お先きには使はれたくない。氣のそむいた人々と、生死を共にする氣はござらぬ。
加藤芝原櫻井　何と。
（皆刀のつかに手をかける）
丸橋　あはゝゝゝ。何うするのだ。やせても枯れても長曾我部秦の盛澄、貴殿らの腕で刄がたつと思ふのか。あはゝゝ。かゝる所に長居は無用。うか／＼長座して、大事でも發覺せば正しく連累、磔ぢや。御免。
（丸橋、悠々と去る。芝原、追ひかけようとする）
正雪　無用になされ。
芝原　でも、返忠でもされゝば一大事。
正雪　まさか、それほど卑怯な丸橋でもござるまい。
加藤　とは申せ。
正雪　それよりも、何とて貴殿らは、忠彌を怒らせたのだ。
櫻井　初めは座興に碁を始めたのだが、芝原殿が……。
芝原　つい丸橋に對する反感から、ウカ／＼と助言いたした。拙者、重々のあやまり。
正雪　それは貴殿らが悪い。（正雪深く考へ込む）いかに致しても、事は去り申した。最初から、いろ／＼つまづきはござつたが、これにて愈々大事は去り申した。
芝原　とは申せ、忠彌一人位、追ひかけて打ち果し。
正雪　打ち果すれば、江戸表の味方は悉く意氣沮喪する。
櫻井　とは申せ、生けて置いては。
正雪　忠彌の生死は、もはや問題ではござるまい。只さへ手薄い一黨の和が破れた上は、凡てはこれまで。
加藤　拙者、これより忠彌めが後を追ひかけて、人知れず打つて捨て、江戸表の大將は、新に河原十郎兵衞どのを立て……。
正雪　（冷靜に）それもよからう。せめてもの腹いせに、貴殿存分になさるがよい。
加藤　然らば、御免。
櫻井　拙者も直ぐ後より、心利きたるもの二三名をつれて後詰いたす。
加藤　御厚志忝けない。忠彌め、山吹町より江戸川端へ出るに相違ござらぬ。……拙者は一足先きへ。
（加藤、かけ込む）
正雪　忠彌を切つたとて、覆つた水は歸らぬ。あはゝゝ。正雪は、ともかくも明朝江戸を立ち、志せる駿府へ落ち、事の成行をうかゞひ、ともかくもなるでござらう。
櫻井　何をお心弱い。忠彌さへ打つて捨てれば……。
正雪　心の弱いのではない、先きが見えるのだ。あはゝ

はゝ。
櫻井　とにかく、我々の吉左右をお待ちなされい。
（櫻井、去る）
正雪　事が未然に破れるのも、一身の不徳のためか、それとも金が足らぬためか。はゝゝ。はて、正雪の武略も、……埒もない、あはゝゝゝゝ。
（寂しく笑ふ）

第二幕

情景

江戸川端大曲り附近。向うに江戸川の土堤が見える。葉櫻になつた櫻が、數本立つてゐる。堤をこえて遠く夜の邸町。
おでんやが、屋臺をおろしてゐる。仲間三人。二人床几に腰をかけ、一人立つてゐる。

仲間一　かう、おでん屋さん。この頃神樂坂の行元寺の門前に、白首が出ると云ふのをきいてきたのだが、いくら待つても出やしねえ。馬鹿々々しくつて、狐につまゝれたやうな氣がした。一體出るのかね。
おでん屋　それよりか、音羽六丁目のびく尼をお買ひになる方が、間違がなくて、ようござりませう。
仲間一　到には入つたびく尼買ふより、何か掘出し物があるまいかと、方々探してゐるのだが。
仲間二　俺、これから市ケ谷八幡前へでも行つて、野郎でも買ふとしようか。
仲間三　だが、重役の旦那方が、柳橋や今戸へ行つて、藝者を上げて飲まつしやるのも、こちとらが、白首買ひの元氣をつけるために、かうして飲むのもうまい味は同じだ。
仲間二　そりや川長や有明樓と一つにやならねえが、酔つてしまへば、旦那だつてこちとらだつて、變りはねえ。
仲間一　喰ひつけねえ物を喰ふより、かうした屋臺で、ぐい〱飲む方が、氣がこらなくつてよつぽどうめえ。
仲間三　おい、もう半分ついでくんねえ。
おでん屋　はい〱、又お替りでございますか。
仲間二　かう、手前。半分づゝ幾度飲むのだ。
仲間一　これで丁度、三度目だ。
仲間三　はて、半替りがよつぽど得だ。
仲間一二　いや、勘定高い奴だな。
（その時、忠彌登場。既に酩酊して蹌踉としてゐる）
忠彌　あゝ、少し酔つたかな。いくら酔つても、喧嘩のむしやくしやが、少しもとれぬ。（舞臺へ來り三人の酒を飲んでゐるのを見て）いや、やつてゐやがるな。これを見ては見のがされぬ。どれ、もう少しやつて行かう

か。何もかも忘れるまで醉つてやらう。
仲間一 (忠彌を見て床几より立つ) 御武家様。これにおかけなさりませ。
忠彌 うん、これは忝い。
おでん屋 これは、入らつしやりませ。芋であげますか、蒟蒻で上げますか。
忠彌 何でもいゝから、熱かんで飲ましてくれ。
おでん屋 へい〳〵、畏りました。
(徳利と朝顔茶碗を忠彌に出す)
忠彌 茶碗とは、ありがたい。(忠彌のんで) あゝ、これはすてきに好い酒だ。
おでん屋 わたしが、好きでござりますから、かつぎ屋臺ではござりますが、酒はよいのをさし上けます。
忠彌 なに、亭主。貴さまも好きか。
おでん屋 へい、大好きでござります。
忠彌 酒が好きとは頼もしい。好きなら相手をしろ。
おでん屋 有がたうございますが、商賣ものを飲めません。
忠彌 代はおれが拂ふから、遠慮せずに相手をしろ。
おでん屋 左様なら、酒の代は貴君が拂つて下さいますか。
忠彌 おゝさ。酒の代なら、いくらでも拂つてやるから、うんとのめ。
おでん屋 それは、有がたうございます。左様なら、お相手いたします。これは、はゞかりさま。
(忠彌ついでやる。三人の仲間に思ひ入れあつて)
仲間一 もし、旦那。御機嫌でござりますな。
忠彌 (三人を見て) 何が御機嫌なものか。これでも、先刻友達とけんかをなし、むしやくしやまぎれに、石切橋の鮨屋で、一升五合ばかりつゞけざまに、ひつかけても、まだきげんがなほらないのだ。
仲間二 何しろ、いゝ御機嫌のやうに見えまする。
忠彌 貴さま達も、酒がすきか。
仲間 私共は、酒とさくと目がござりませぬ。
忠彌 好きなら、おれがおごつてやるから、遠慮なく飲むがいゝ。
仲間二 それぢや、飲まして下さりますか。
三人 それは、ありがたうござります。
忠彌 亭主、ついでやれ。
おでん屋 へえ、畏りました。また半替りでござりますか。
仲間三 人のおごりなら、滿々くりやれ。
仲間二 いや、現金な奴だ。
おでん屋 お前さん方にも上げませうか。

仲間一　御馳走なら、いやとは云はねえ。
仲間二　おれにも滿々（いつぱい）ついでくんねえ。
忠彌　いや、かう酒好きな者ばかり集つたとは面白い。これ亭主。肴は何がある。
おでん屋　へい、芋とこんにやくの煮込みでござります。
忠彌　煮込みとはありがたい。何でもいゝから出してくれ。
おでん屋　へい／＼、畏りました。
忠彌　いや、これだ。煮込のおでんでやつちよるねとは、こゝらのことを云ふのだな。さあ／＼、もつとついでくりやれ。

（おでんやにつがせ、酒をのむ。仲間一、可なり醉が廻りたる容子にて）

仲間一　かう手前達は、何と思ふか知らねえが、かうして見ず知らずのおら達に、この高い酒を腹いつぱいたゞで飲ましてくれるとは、何と勿體ねえ話しぢやあねえか。こんな慈悲深い酒ずきな旦那に、おら、天下を取らしたい。
忠彌　なに、おれに天下を取らしたい。（不快となる）
仲間　あなたに天下を取らしたら、思ひ切り飲まして下さりませう。
仲間三　どうぞ、旦那に天下を取らして、思ひ切酒を飲みてえものだ。
忠彌　（突然、飲んでゐた盃を仲間達に投げつける）よしやがれ。手前達までが、この俺を馬鹿にしておだてやがるんだな。いくら、友達に馬鹿にされたからと云つて、手前達にまで馬鹿にされてたまるか。やい、かたつぱしから、ぶつたぎつてやる。それへ直れ。
仲間達　えゝめつさうな……とんでもない……その馬鹿にするなんて……滅相な……。

（後じさりして逃げてしまふ）

忠彌　畜生め。あんな下司下郎まで、この俺を馬鹿にして、おだてゝ酒をのまうとしやがる。――それも道理か命までも誓つた人々に、心の中ではうとんぜられ、口先ではおだてられた丸橋忠彌だ――（自分で頭をたゝく）手前はよつぽど、お調子ものだぞ……あはゝゝゝ。
おでん屋　（やつと近づいて）旦那こまります。旦那が、おどしなさるもんだから、仲間達は手前達ののみくひした分まで、勘定を拂はないでゆきました。
忠彌　いま／＼しい野郎どもだ。仕方がない、拙者拂つてつかはす。（金を拂ふ）その代り、こいつは皆飲んでゆくぞ。

（そこに在つた德利の分、みなついでのむ）

忠彌　いま／＼しい野郎どもだな。到頭、俺に勘定をはら

はせやがつた！　あゝ、醉つた。十分に酩酊した。

（おでん屋の荷をはなれる。下手より犬出て來る）

犬　わん／＼。

忠彌　何がわん／＼だ。時代なことを云ふ奴だ。わんと啼くのは當り前だ。赤犬は、牛に味が似てゐると云ふから、もうと啼け。

犬　わん／＼。

忠彌　やつぱりわんと啼くか。うぬ、もうと泣かぬと打つた切るぞ。（これにて犬逃げては入る）……と云つて脅したものだ。彼奴、おれに小間物見世の催促に來たらうが、まだ／＼めつたに見世は出さねえ。

（忠彌上下へよろけながら）

と云ふものゝ、したゝか酩酊！（忠彌よろけて堤の櫻の樹にぶつかる）これは、とんだそゝう。とんだ失禮。どなたかは存ぜねども、拙者は丸橋……（櫻の樹に、氣がつき）何だ、ぼんやり立つてゐると思つたら、やい！　何とか挨拶しねえからいけねえのだ。この唐變木め。あはゝ唐變木とは、この櫻よりぞ始まりけるか……あゝねむくなつた。たまらなくねむい。行きくれて、この下かげを宿とせば……（忠彌、樹の下の青草の堤に倒れる）あゝ、いゝ布團だ、氣持のいゝ布團だ……。

（おでんや、荷を動かす準備をし）

おでん屋　もう、人足も絶えたやうだ　家へ歸らうか。

（屋臺に床几もとりつけ、一緒にかついで行かんとし、忠彌に氣づき）

おでん屋　若し、お武家さま、そんな所に横になると、お召物がよごれます。お風を召します。もし／＼。

（忠彌ぐう／＼いびきをかいてゐる）

あゝ、よくねておいでになる。人品骨格と云ひ、何一つ不足のないお武家だが、もつた病の酒のために、一生出世が出來ねえと云ふ、氣の毒な方らしいな。

（おでんや去る。加藤などの刺客、先刻より隱見してゐる。皆覆面。遠くより、互ひにさゝやき、忠彌がねてゐる方に近よる。皆刀を拔き、忠彌に一齊に切りつける。忠彌、身を轉じて刀をさけ、堤下の河の中へ自ら落ちる。皆堤上にかけ上つて下を見る）

刺客一　見えぬ。

刺客二　逃したか。

刺客一　手答は。

刺客二　ない。

刺客三　取りにがしたか。

刺客四　さすがは、忠彌。あの大醉で、よく身をかはし居つた。

刺客三　まことに、稀代の早業。

刺客四　(頭巾を取る。加藤である)　それがしが、一刀流の太刀先をよもや、逃れまいと思つたに。

刺客二　かゝる屈強の武士が、大事の前に、變心するとは、われらの運のつきと云ふもの

刺客四　仕方がない、引き上げよう。

刺客三　この上は、一日も早く駿府へ立ちこえ、最後をいさぎよくするまでだ。

(みんな悄然として去る。時が經つ。忠彌、堤の下から這ひ出して來る)

忠彌　げーぷ。あゝ、ひどい目に會はしやがつた。あの鋭い太刀先は、たしかに加藤だ。あはゝゝゝ。手前達に切られる身體があるものか。だが、いかにいさかひすればとて、直ちに刺客を向くるとは、あまりと云へば非道な仕方。人われにつらければ、われまた人につらしとか。覺えてゐろ。……とんだ奴が來て、目をさましやがつた。だが、まだねむい。

(忠彌立ち上り、よろ／＼してゐる。弓師藤四郎向うから來る。忠彌よろめきながら、行き過ぎようとする)

藤四郎　其處へ行かれるのは、丸橋どのではござりませぬか。

(忠彌、默つて行きすぎようとする)

藤四郎　もし／＼。丸橋忠彌殿ではござりませぬか。

忠彌　と云ふ貴殿は。

藤四郎　御醉顏でお見分けがつきませぬか。

(顏を傍へ持つてゆく)

忠彌　なるほどよく分り申した。これは弓師藤四郎どの。御きげんよう。しばらく。

藤四郎　何がしばらくぢや。今朝お宅へ參りました時、今夕七つまでに必ず、二百兩お渡し下さると仰せられたに依て、先刻お宅へまかり出でましたに、思ひの外の御不在。お金を渡されない丈でなく、武士に似合はぬ嘘までおつきなされるのか。

(忠彌、よろ／＼としながら、きいてゐる)

藤四郎　お宅で半刻ばかりお待ちしましても、とんとお歸りがなきゆゑ、お出先は榎町の由比さまのお邸と承り、老の夜道もいとはず、やつと玆まで來たところぢや。玆で會うたは、何よりの仕合せ。さあ／＼、早う、弓三百挺、矢五千本の代金、拂うて下されい。

忠彌　そのやうに云はれては、面目次第もござらぬ。なれど、今宵七つどきまでに、必ず出來ると思つた金策、それが向うから、はづれたのぢや。

藤四郎　いゝえ、そんな云ひ譯はきゝませぬ。品物と引かへに下さる筈の金。三日とのび、五日とのび、今日で幾

日になると思召す。

忠彌　二月にもなるかな。

藤四郎　二月どころか、今月でもう三月と十日。もし、何うあつても代金がいたゞけぬなら、これからおやしきへ上つて、品物をいたゞいて歸ります。

忠彌　さあ、それは……。

藤四郎　それとも、初から代金をお拂ひにならぬつもりなら、それはかたりと申すもの、あすにも御奉行さまへ。

忠彌　え、うるさいな。

藤四郎　何がうるさいのでございます。貴君さまさへ、噓をつかねば、何もうるさいことはございませぬ。

忠彌　まて。今しばらく、待つてくれ　來月になれば拙者紀州侯へ……。げーつぷ……。

藤四郎　もう、貴方の紀州侯はきゝあきました。紀州侯紀州侯と、さう〳〵は、借金の云ひわけにはなりませぬ。

忠彌　え、うるさい奴。今しばらく待てと申すに。

藤四郎　いゝえ、もう一刻も待てませぬ。今日中に、お拂ひ下さらねば、最初からのかたりとして、明朝きつと御奉行さまに。

忠彌　かたり〳〵と無禮であらう。げーつぷ。

藤四郎　いゝえ、かたりぢや。たしかにかたりぢや、たしかに、かたりぢや。金を拂ふアテがなうて、品物を取るのはたしかにかたりぢや。

忠彌　（怒のために、ガタ〳〵顫へて來る）武士に向つて、かたりと云ふのか。よし、その代金拂うてやる。

藤四郎　えゝ、お拂ひ下さりますか。

忠彌　いや、今のは失言。

藤四郎　何のことでございます。いくら、醉つて居らるゝとは云ひながら、人を馬鹿にした……えゝ、この上は、少しの猶豫もありませぬ、直ぐにお上へ……。

忠彌　待て、待て。しばらく待て。

藤四郎　えゝ、待てませぬ。今宵と云ふ今宵は待てませぬ。歸つて直ぐ五人組と相談し……。

忠彌　えゝ、うるさい奴。

藤四郎　何を仰しやいます。御身さまこそ、正銘のかたりのくせ。

忠彌　かたり〳〵と武士に向つて……（ふと何か氣づきたる如く）えゝ、拂うてやる。近う來い。

藤四郎　えゝ噓でござりませぬか。いつお拂ひ下さいますか

（忠彌、藤四郎の耳に口よせ、何かさゝやく）

藤四郎　（駭いて逃げ出しながら）えゝつ。

忠彌　何と肝がつぶれたか。

藤四郎　えゝ、それは、本當でござりまするか。

忠彌　冗談に云へると思ふか。
藤四郎　それで、私への借金は何うなります。
忠彌　町奉行なり、老中なり勝手のところへ訴へ出ろ。
藤四郎　えゝつ。
忠彌　天下の謀反の訴人をすれば、恩賞は少くとも五百石。
藤四郎　えゝ。
忠彌　二百兩拂つて釣が出るわ。
藤四郎　えゝつ。
（藤四郎、段々後じさりして逸走す）
忠彌　藤四郎奴　おどろいて肝をつぶしやがつた。今に、正雪も櫻井も芝原も加藤も、藤四郎同樣肝つ玉をつぶしやがるだらう。ざまあ、みやがれ……あはゝゝゝ。まだ、ねむい……もう一度ねてやらう。あゝ、ねむい。（又堤の芝生の上に倒れ伏す）

第三幕

第一場

本郷お茶の水丸橋忠彌の家。奥の一室、忠彌亂醉して寢てゐる。敷蒲團を敷かず、掛蒲團だけを掛けてゐる。忠彌の妻、枕元を少し離れ、針仕事をしてゐる。二十一日の宵。門弟、出て來る。

門弟　奥樣。永山六郎右衛門樣がお見えになりました。
お貞　おゝ、永山樣がお見えになつたか、それで何と申し上げた。主人は大醉して寢てゐると申し上げたか。
門弟　申し上げましたが、火急の用事あるによつて、是非お目にかゝりたいとのことでございます。
お貞　それでは、起さずばなるまい。（忠彌の傍へゐざり寄りながら）もし〳〵、忠彌どの、忠彌どの。（搖り動かす）もし、お客樣でござります。
忠彌　うーん、うーん。
（容易に起きようとしない）
お貞　もし、御來客でござりまするぞ。お目をおさましなさいませ。
（忠彌、容易に起きない）
お貞　おゝ〳〵、永山樣がお待ち兼であらう。あの、ちよつと行つて、おことわりしてお吳れ。今朝、夜が明けてから、何方よりか亂醉の態で歸つて參り、そのまゝ前後不覺に寢てゐると、申し上げてお吳れ。
門弟　はあ。（去る）
お貞　もし忠彌どの。ちよつとお起きなさいませ。永山樣がお見えになりましたぞ、永山樣が。
忠彌　（寢返りを打ちながら）後生だ。もつと寢さして吳れ。うーん、うーん。

（門弟出て來る）

門弟　左樣申し上げました處、たつてお目にかゝりたいとのことで、仕儀によつては、永山樣自身起してもよいとのことでござります。

お貞　おゝ、それでは、永山樣に失禮でも、これへ通つていたゞかう。案内してお呉れ。

（お貞、起すことに絶望して、ぼんやりと夫を見てゐる。永山、門弟に案内され、入つて來る）

お貞　これは〳〵、永山樣。ようお出でなさりました。こんな失禮の態をお目にかけ、お羞かしうござります。

永山　いや、何の〳〵、少しも苦しうはござらぬ。いつもの通りの大醉でござりまするな。（寢てゐる忠彌の方へ近づき）丸橋氏、起きなされ、起きなされ。火急の大事が出來いたしした。

忠彌　うーん、うーん。

（忠彌なか〳〵起きない。永山腰のものを引きよせ、つばを高らかに鳴らせる。忠彌ガバと起き、床の上に坐る）

忠彌　（醉眼朦朧として）どなたのお出でぢや。

永山　丸橋どの。拙者でござる。

忠彌　これは、永山氏か。何御用ぢや。

永山　一大事が出來いたしした。

忠彌　なに、一大事とは。

永山　正雪どの。今日早朝江戸を立たれたのを、貴殿御存じか。

忠彌　いや、知らぬ。

永山　今夜榎町の邸にて、ひそかに別離の宴を催す筈なるに、我々に何の云ひ置きもなく立たれるとは、まさしく逐電。さては一大事發覺と、宙を飛んで貴殿のところへ駈けつけて參つたのだ。

忠彌　それは、可笑しい。さては、大事發覺いたししたかな。

永山　留守居には、何事も存ぜぬ下人ばかりを留め置いたことゝ云ひ、大事發覺に相違ござらぬ。

忠彌　さては、何人か訴人いたしたな。

永山　左樣　一味徒黨の中に、返忠したものが、あるに相違ない。

忠彌　（昨夜の泥醉中の出來事を、俄然思ひ出したる如く）あゝつ、しまつた。

永山　貴殿、思ひ當ることがござるかな。

忠彌　（苦悶する）思ひ當ることはござらぬが、一旦の感情に委せ、訴人なすとは愚な奴。

永山　誰だ、そい　は。

忠彌　誰かは知らぬ　ても憎い奴。

永山　如何にも、その返忠の男、誰々と分明せば、肝を喰つても足らぬところだ。
忠彌　あゝ、お貞。酒を持つて來い。
お貞　でも、その態で、また御酒とは。
忠彌　酒でものまねば、この、この、思ひ、イヤいや、此の無念が晴れぬわ。
お貞　とは申せ。
永山　いや御內室。萬事休すぢや。生涯の思ひ出に、如何程の大酒を過させるもよからう。
お貞　では、御酒の支度を。
忠彌　いや、支度に及ばぬ。冷酒のまゝ持つて參れ。
お貞　でも、それはお客樣に失禮。
永山　いや、拙者はいけぬ口。忠彌どのゝ存分に。
お貞　では、失禮ながら。
（お貞、酒を取りに立つ）
永山　かうなつては、もはや最後の用意ぢや。身共は急ぎ宿元へ立ち歸つて、ともかくもなる身支度をいたす。
忠彌　拙者の覺悟も、御同樣。
（お貞、酒を德利に入れて持つて來る）
忠彌　永山氏。失禮。（德利の口より飲む）苦い、苦い。こんな苦い酒は、初めてだ。
永山　然しながら丸橋氏。まだ萬一の望みはないでもない。愈々最後と相分るまでは、こなたより騷ぐには及ぶまい。お互に愼重第一。
忠彌　なるほど、愼重第一。それが忠彌には、末期の訓言。永山氏、有り難い。
永山　丸橋氏。さらば。御內室にもおさらば。
忠彌　さらば。
お貞　おさらばでございます。
忠彌　そち。お送り申せ。
（永山去る。お貞送つて出る）
忠彌　（苦悶しながら）先方も先方だ。刺客に跡を追はすなどは、……さりながら、一旦の怒りによつて、多年の同志を裏切りしは、……亂醉に心亂れしとは云へ、……あゝ、苦しい。
（お貞、歸つて來る）
お貞　愈々身の上の大事になりましたな。でも、なげいても詮なきこと。
忠彌　うん、許せ。おろか者の忠彌を夫に持つ、そちの不幸をあきらめてくれ。
お貞　何の、その會釋には及ばぬわいな。それよりも何時何時御用の聲を聞くかも知れぬ。家の中を取片づけませう。
忠彌　うん、よくぞ申した。そちに萬事たのむ。預けた連

判帳は焼いて吳れ。

お貞　はい、かしこまりました。

お貞、甲斐々々しく奥へ入る。入れ違ひに門弟出て來る）

門弟　先生。只今弓師藤四郎どの、南町奉行與力、菊池源右衞門どの同道にてお見えになり、たつてお目にかゝりたいとのことでござります。

忠彌　（苦悶する）藤四郎め、さては愈々。ちえつ、何とせう……えゝ、通せ、通せ。

（忠彌、帶をしめ直し、身支度を整へ、帶刀を引寄せて待つ。藤四郎、蒼白な顏をしながら、與力と同道してはひつて來る）

藤四郎　これは〳〵、丸橋樣。とんだお邪魔をいたします。お上のお計ひで、與力菊池源右衞門樣、同道して參りました。

菊池　拙者は、南町奉行與力、菊池源右衞門。

忠彌　拙者、丸橋忠彌。して御用向は何でござる。

藤四郎　お身樣のお言葉により由比正雪どの謀反の趣き、訴人いたしました所、その丸橋忠彌とやらも、間接ながら返忠の功によつて、此の上一味徒黨の仔細申し上ぐるによつては

忠彌　な、な、何を申す。此の忠彌が訴人などとは、夢にも覺えぬ。さてはその方、正雪どのゝ思ひ立ちを、それと悟つて訴人いたしたな。ひ、非道な奴め。

藤四郎　そ、そ、それは忠彌どの、話が違ふ。

忠彌　いや、違はぬ。

藤四郎　いや、昨夜江戸川大曲の附近にて、現在貴君さまのお口から。

忠彌　何を申す。そのやうな覺えはない。

藤四郎　これはしたり。たしかに仰せられたものを。

忠彌　えゝ、くどい。かれこれ申すと、手は見せぬぞ。

藤四郎　えゝつ。

（藤四郎逃げんとす）

菊池　たとひ御邊が訴人せずとも、今は大事の嫌疑人、召捕つて連れて行くが、承知か。

忠彌　承知だとも。

（藤四郎、駈け去る。菊池つゞいて去る。間もなく邸外に喚聲起る。お貞駈けだして來る）

お貞　さては、愈々。

忠彌　連判は焼いたか。

お貞　はい、とつくに。

忠彌　そちと言葉を交すのも、これが最後だ。今生の思ひ出に戰ふだけは戰うて見る。そちは靜かに生害いたせ。

お貞　はい。（泣く）

（邸外の人聲更に起る。太鼓とゞろく。忠彌たすきをかけ、長押より十文字の槍を取り下ろし、庭に降りてりう／＼としごく。捕手數人侵入して來る。忠彌の勢ひに怖れて、敢てかゝらず）

第二場

情景

忠彌の家の裏手。お茶の水の涯に面せる庭上。最初捕手頭配下の與力多數驅け違ひたる後、忠彌捕手に圍まれながら出て來る。亂鬪四半時。力盡きて捕はる）

捕手多數　捕つた、捕つた。わアーツ。

（與力菊池源右衞門、忠彌に近づく）

菊池　どうだ。お上に手數をかけ、あまたの怪我人を出し、其の方自身、今の思ひは何うだ。口惜しいか、何うだ。

忠彌　あはゝゝゝ。何が口惜しいものか。生涯の思ひ出に、思ふ存分働いた。これで胸の苦しみが、幾らか取れた。もう、横腹へ槍が通るまでは、暫しの辛抱だ。あははゝゝ。

菊池　何うだ、立てるか。

忠彌　何を申す。これ、この通りぢや。あはゝゝゝ。（忠彌疲勞を見せながらも、しつかりと立つ）

――幕――

（本稿は、澤田正二郎一座上演用として執筆せしものにして、上演を本意とせり。作者）

入れ札

自作小説「入れ札」を尾上菊五郎氏の囑に依つて戯曲化したるもの也

人物

國定忠次
稻荷の九郎助
板割の淺太郎
島村の嘉助
松井田の喜藏
玉村の彌助
並河の才助
河童の吉藏
闇雲の牛松
釋迦の十藏
その他三名

時所

上州より信州へかゝる山中。天保初年の秋。

情景

ある秋の日の早曉、小松のはえた山腹。地には小笹がしげつてゐる、日の出前、雲のない西の空に赤城山が仄かに見える。幕が開くと、才助と淺太郎とが出て來る。二人ともうす汚れた袷の裾をからげ、脚絆をはきわらぢをつけてゐる。めい〳〵腰に一本の長脇差をさしてゐる。淺太郎の方は、割れかゝつた鞘を繩で括つてゐる。二人が舞臺の中央にかゝつた時、後ろから呼ぶ聲が聞える。

呼ぶ聲　おうい、淺兄い、待てえツ。
淺太郎　おうい、何ぢやい。
呼ぶ聲　おうい〳〵。淺兄い。
淺太郎　おうい、何ぢやい。
呼ぶ聲　少し足を止めてくれ。あんまり離れるな。
淺太郎　ようし、分つたぞ、待つてゐるぞ。（傍を振り向いて、才助に）おい才助、一休みしようぢやねえか。
才助　大丈夫かなあ、こゝいらで足を止めてゐて。
淺太郎　大丈夫だとも。大戸の關を破つたのが、昨夜の五つ頃だ。あれから歩き通しだもの。もうかれこれ十里近くも突つ走しつてらあ。
才助　みんなよく足がつゞいたものだ。
淺太郎　俺たちは、これ位の事ではビクともしねえが、九

郎助や牛松などの年寄は、あれでいゝ加減へこたれてゐらな。

才助　だがよく辛抱してついて來たなあ。

淺太郎　常日頃口幅つたいことを云つてゐる連中だ。ついて來ずにはゐられめえぢやねえか。

（二人が話してゐる間、九郎助と彌助並んで出て來る。九郎助は五十に近き老人、彌助は四十前後）

才助　（九郎助に）やあ、稻荷の兄い、足は大丈夫かい。

九郎助　何を世迷言を云ひやがる。かう見えたつて若い時は、賭場が立つと聞いた時は、十里二十里の夜道は平氣で歩いたものだ。いくら年が寄つても足腰だけはお前達にひけは取らせねえや。

淺太郎　兄い、あんまりさうでもなさゝうぢやねえか。榛名の山越えぢや、少々參つてゐたやうだぜ。

九郎助　何を云つてやがらあ。それあお前達のことだらう。この頃の若い奴等はまだ修業が足りねえや。俺ら若い時にや、忠次の兄いと一緒に、信州から甲州へ旅人で、賭場から賭場をかせぎ廻つたもんだ。その頃にあ、日に十里や二十里は朝飯前だつたよ。

彌助　さうだつたなあ、稻荷の兄いの若い時は豪勢なもんだつた。今の忠次の親分だつて、ばくち打の式作法はまあお前に敎はつたやうなものだな。

淺太郎　ふうん。さうかなあ。式作法は稻荷の兄いに敎はつたかも知れねえが、あの度胸骨と腕つ節は、まさか敎はりやしねえだらうねえ。

九郎助　（一寸色をかへて）何たと、おつなことを云ふなよ。

淺太郎　何にもおつなことは云ひやしねえ。よくお前さんは昔は〳〵と云ふが、幾ら云つたつて昔は昔さ。昔は親分より一枚上のばくち打だつたか知らねえが、今ぢや盃を貰つて子分になつてりや、俺達とは朋輩だ。あんまり昔のことを振廻しなさんなよ。

（九郎助、默る）

彌助　だが淺太郎、お前はな、幾ら親分の氣受がいゝからと云つて、あんまり年寄のことをつんけん云ひなさんなよ。もう少し俺達をいたはつてくれたつて、罰は當るめえ。

淺太郎　ふゝん、いたはつてくれか。笑はせやがらあ。

九郎助　野郎、何だと、何がどうしたと。

才助　おい〳〵、阿兄達どうしたんだ。こんな時、仲間喧嘩をする時ぢやねえぢやねえか。

淺太郎　だが、あんまり相手が年寄風を吹かすからだ。

九郎助　なあに、どちらがどちらだか。手前の方がよつぽど若い者風を吹かしてやがるぢやねえか。

彌助　まあ、いゝぢやねえか。今に若い者が役に立つか年寄が役に立つか分る時が來らあ。

才助　（ふと近づいて來る忠次を見つけ）　やあ親方がお見えになつたぜ。

（四人とも立上る。忠次、嘉助、喜藏、牛松などの乾分を伴つて登場。小鬢の所に傷痕のある淺黒い顏、少し窶れが見えるため一層凄味を見せてゐる。關東縞の袷に脚絆草鞋で、鮫鞘の長脇差を佩し菅の吹き下しの笠を冠つてゐる）

才助　親分お疲れでございませう。

忠次　うゝむ、心配するな。まだ五里十里は大丈夫歩けるぜ。

淺太郎　親分、此方の方へおかけなせいませ。此方の方が草がキレいですぜ。

忠次　足は疲れねえが、ねむいよ。

嘉助　ほんとうだ。それやみんな同じことですぜ。

喜藏　だが、安心はならねえ。足腰の立つ中は、早く信州境をこしてしめいていものだ。

忠次　おい、赤城山が見えるぢやねえか。

（みんな氣がつく）

淺太郎　雲がちつともねえものだから、あんなにハツキリ見えてゐらあ。

忠次　なつかしい山だ。もう彼處が死場所だと思つたが、神佛の冥護とでも云ふか、よく千人近い八州の捕方を斬りひらくことが出來たものだ。

喜藏　親分、神佛が俺達をかまつて下さるものかねえ、みんな俺達の腕つぷしだよ。

忠次　あはゝゝ、それもさうか。とにかく、みんなよく働いてくれたな。改めて、禮を云ふぜ。

一同　何を云はつしやる。とんでもねえことだ。

忠次　（小笹の上に腰を下しながら）　赤城の山も、これが見收めだな。おい、此處いらで一服しようか。

（みんな忠次を圍つて腰をおろす。乾分河童の吉藏後を追つて登場する）

吉藏　親分、朝飯は手に入りましたぜ。下の百姓家で、折よく御飯を焚いてゐましたので、すつかりにぎりめしにして貰ふことにしました。

忠次　そいつは有がたい。鳥目を充分に置いてやれよ。

吉藏　かしこまりました。

（吉藏かけさる）

喜藏　飯が出來るまで、ゆつくり休めると云ふものだ。

（みんな暫く無言）

九郎助　何が來るまで、一ね入りしようかな。

彌助　そいつはいゝ考へだ。

嘉助　おいらも一ね入りしようかな。

忠次　おい！　一寸待つてくれ！

嘉助　何だ親分、改まつて？

忠次　おい！　みんな。

（忠次が緊張してゐるので、みんな居ずまゐを正す）

忠次　おい！　みんな。一寸耳を貸して貰ひてえのだが、俺これから信州へ一人で落ちて行かうと思ふのだ。お前達を連れて行きてえのは山々だが、お役人を叩き斬つて天下のお關所を破つた俺達が、お天道さまの下を十人二十人つながつて歩くことは、許されねえことだ。もつとも、二三人は一所に行つて貰ひてえとも思ふのだが、今日が日まで、同じ辛苦をしたお前達みんなの中から、汝は行け、われは來るなと云ふ區別はつけたくねえのだ。連れて行くからにや一人殘らず、みんな連れて行きてえのだ、別れるからなら恨みつこのないやうに、みんな一樣に別れてしまひてえのだ。さあ、玆に使ひ殘りの金が百五十兩ばかりあらあ、みんな十二兩づゝ與れてやつて殘つたのは、俺が貰つて行くんだ。めい／＼に當を考へて落ちてくれ！　いゝか隨分身體に氣をつけて、たつしやでゐてくれ！　忠次が何處かで捕まつて江戸送りにでもなつたと聞いたら、線香の一本でも上げてくれ……あはゝゝゝ……（喜藏に）　おいその金をみんなに別けてやれ！

喜藏　そりや親分！　惡い了簡だらうせ。一體、俺達が妻子眷族を捨てゝ此處までお前さんについて來たのは何の爲だと思ふんだ。みんな、お前さんの身の上を氣づかつて、お前さんの落着く所を見屆けたい一心からぢやねえか。

淺太郎　さうだとも。いくら大戸の御番所をこして、もうこれから信州までは、大丈夫と云つたところで、お前さんばかりを手放すことは、出來るものぢやねえよ。

嘉助　ほんとうだ。尤も、かう物騷な野郎ばかりが、つながつて歩けねえのは道理なのだから、お前さんが此奴と思ふ野郎を名指しておくんなせえ。何も親分、乾兒の間で、遠慮することなんかありやしねえ。お前さんの大事な場合だ。恨らみつらみを云ふやうなケチな野郎は一人だつてありやしねえ。なあ！　兄弟。

多勢　さうだとも。さうだとも。

忠次　（だまつてゐる）……

淺太郎　なあ！　あつさりと名指をしてくんねえか。

忠次　（だまつてゐたが）　名指しをする位なら、手前達に相談はかけねえや。みんな命を捨てゝ働いてくれた手前たちだ。俺の口から差別はつけたくねえのだ。

九郎助　こりや、尤もだ。親分の云ふのが尤もだ。こんな

まさかの場合に、捨てゝ置かれちや誰だつていゝ氣持はしねえからな。

淺太郎（九郎助に）手前のやうな人がゐるから物事が面倒になるのだ。年寄は足手まとひですから、親分わしや茲でお暇をいたゞきますと、あつさり出ちやどうだい。

九郎助　何だと野郎、手前こそまだ年若でお役に立ちませんから、此度の御用は外さまへねがひますと云つて引き下れ。

淺太郎　何だと。

忠次　おい！　淺！　手前出すぎるぞ。だまつてゐろ！

淺太郎　はい。はい。

（釋迦の十藏、ふとひざをすゝめて）

十藏　なあ、親分いゝことがあらあ。

二三人　何だ。何だ。云つて見ろ。

十藏　籤引がいゝや。みんなで、籤を引いて當つたものが親分のお伴をするんだ。

忠次　なるほどな。こいつは恨みつこがなくていゝや。

嘉助　親分何を云ふんだい。こんな青二才の云ふことを聞いちや、ダメぢやねえか。籤引だつて、馬鹿な。もし籤が十藏のやうな青二才に當つて見ろ、親分のお伴どころか、親分の足手まとひぢやねえか。籤引なんか俺眞平だ。こんなとき、一番物を云ふのは腕つ節だ！　なあ、親分！くだらねえ遠慮なんかしねえで、たつた一言嘉助ついて來いつ！　と云つておくんなせい！

喜藏　嘉助の野郎、大きいことを云ふない。腕つ節ばかりで、世間さまは渡れねえぞ。まして、これから知らねえ土地を遍めぐつて、上州の國定忠次でございと云つて歩くには、駈引萬端の軍師がついてゐねえことには、動きはとれねえのだ。幾ら手前が、大めし喰ひの大力だからと云つて、ドヂばかりを踏んでゐちや旅先で飯にはならねえぞ。

九郎助（今までだまつてゐたが）腕つ節だとか駈引だとか、そんなことを云つてゐちや限りがねえ。こんなときは盃を貰つた年代順だ。それが、まつとうな順番だ。盃を貰つたのは、俺が一番古いんだ。その次ぎは彌助だつた。なあおい！（彌助の方を見る）

淺太郎　九郎助ぢいさん、何を云ふんだい。葬禮のお伴ぢやねえんだぞ。年寄ばかりが、ついてゐていざとなつたときはどうするんだ。

九郎助　手前達にそんな心配をさせるものか。から見えたつて稻荷の九郎助だ。

淺太郎　その睨みが、あんまり利かなくなつてゐるのだ。まあ、父さん、さう力味なさんなよ。

九郎助　此野郎！

喜藏　けんかをしちやいけねえつたら！
牛松　親分、俺あお供は出來ねえかね。俺あ腕節は強くはねえ。又、喜藏のやうに軍師ぢやねえ。が、お前さんの爲には、一命を捨てゝもいゝと心の內で、とつくに覺悟をきめてゐるんだ。……
三四人　何を云ひやがるんだ。親分のために命を投げ出してゐるのは手前一人ぢやねえぞ。ふざけたことをぬかすねえ。
（牛松しよげて頭をかきながらだまつてしまふ）
忠次　お前達のやうに、さうザワ〳〵騷いでゐちや、何時が來たつて果てしがありやしねえ。俺一人を手放すのが不安心だと云ふのなら、お前達の間で入れ札をしてみたらどうだい。札數の多い者から、三人丈つれて行かうぢやねえか。こりや一番恨みつこがなくつていゝだらうぜ。
喜藏　こいつあ思ひ付だ。
淺太郎　そいつあ趣向だ。
三四人　なるほど、名案だな。
忠次　ぢや一つ入れ札できめて貰はうかな。
四五人　ようがす。合點だ。
（吉藏、にぎりめしを入れた、大きいざるを持つて出て來る）
吉藏　親分、めしが來ましたぜ。
忠次　こいつはいゝ所へ來た。みんなめしを喰ひながら誰を入れるか思案をして貰ふのだ。
（吉藏　めしをみんなに配る）
吉藏　さあ、みんな二つ宛だぞ。澤庵は、三切れづつだ。
みんな　ありがてえ、ありがてえ。
喜藏　久し振りに、あたゝかい飯が喰へらあ。
忠次　（にぎりめしを手にしながら）俺、水が飮みてえや。
吉藏　水なら、牛町ばかり向うに流れがありますぜ。
忠次　さうか、ぢや行つてのんで來よう。
吉藏　とつてもねえ、いゝ水だよ。
三四人　ぢや俺達も行つて來よう。
淺太郎　俺も、顏を一つ洗ひたいや。
（みんな、どや〳〵と流の方へ行く。後には九郎助と彌助と丈がのこる）
九郎助　（にぎりめしを、まづさうに喰つてしまつた後）あゝいやだ、いやだ。どう考へてもおらあ入れ札はいやだな！
彌助　なぜだい、阿兄！
九郎助　入れ札ぢや、俺三人の中へはへ入れねえや。
彌助　そんなにお前、自分を見限るにも當らねえぢやねえか。忠次の一の乾兒と云へばお前さんに定まつてゐるぢ

やねえか。
九郎助　上部(うはべ)はさうなつてゐる。だが、俺去年大前田との出入りのとき、喧嘩場からひツかつがれてから、ひどく人望をなくしてしまつたんだ。それが俺にはよく分るんだ。上部(うはべ)は、阿兄々々と立てゝ居てくれても、心の底ぢや俺を輕んじてゐるんだ。入れ札なんかになつて見ろ！　それが、アリ／＼と札數に出るんだからな。
彌助　……
九郎助　何ぞと云へば、俺を年寄扱ひにしやがるあの淺太郎への意地にだつて、俺捨てゝ行かれたくねえや。
彌助　尤もだ。だが、心配することは入らねえや。お前が落つこちる心配はねえ。
九郎助　さうぢやねえ。怪しいものだ。どうも俺に札を入れてくれさうな心當りはねえや。
彌助　並河の才助が居るぢやねえか。あの男はお前によつぽど世話になつてゐるだらう。
九郎助　いやあ、此頃の若い奴は、恩を忘れるのは早いや。あいつは此頃ぢや、「淺阿兄々々」と、淺にばつかりくつついてゐやがる。
彌助　……
九郎助　俺、かう思ふんだ。淺には四枚へ入らあ。喜藏には三枚だ。すると後に四枚殘るだらう、その四枚の中で俺二枚取りていのだ。お前は俺に入れてくれるとして、
（九郎助ぢつと彌助の顏を見る）
彌助　（だまつてうなづく）……
九郎助　お前が俺に入れてくれるとして、アトの一枚だ。俺、此の一枚をとるためには、片腕でも捨てたいのだが。
彌助　冗談云つちやいけねえ！　さう思ひつめなくても大丈夫だよ。喜藏だつて、お前に入れねえものぢやねえよ。
九郎助　あいつは、俺と此頃仲がいゝからなあ！　アト一枚だ。あ、アト一枚だ！　（ぢつと腕をくむ）
（水を飲みに行つた人々、どや／＼と歸つて來る）
喜助　あんなにぎりめしを、もう十五六喰ひていや。
淺太郎　あれでも、一時の蟲抑へにはありがたい。さあ飯はすんだ。入れ札を早くやつて貰はうか。
喜藏　心得た。
（彼は、懷中より懷紙を出し、脇差をぬいて幾片かに切斷する。みんなに一枚宛渡す）
喜藏　矢立の筆は、一本しかねえぞ。なるべく早くかいて廻してくれ。かいたやつは、小さく折つて、此割籠の中に入れてくれ。
忠次　札の多い者から三人だぜ。
十藏　えゝ承知しました。
喜藏　十藏、お前からかけ！

（十藏に筆を渡す。めい〳〵次ぎ〳〵筆を借りてかく。彌助書き終へ九郎助に近よりて）

彌助　そら阿兄、筆をやるぜ。

（彌助、約束を果したる如くニツコリ笑ふ）

九郎助　ありがてえ。

（九郎助筆を取る。煩悩の情、あり〳〵と顔に浮びしばらく考へ込む）

淺太郎　おい、爺さん。早く筆を廻してくんねえか。

九郎助　何だと！

淺太郎　考へるなら、筆を外へ廻してくれ！

九郎助　だまつてゐろ、入らねえ口をたゝくなよ！

（九郎助、憤然として筆を下す）

才助　爺さん〳〵、俺にかしてくれ。

九郎助　ほら。（筆を投げる）

（才助、それを受取り、彌助の傍へ行く）

才助　なあ、彌助兄！　字を教へてくれ。

彌助　教へてやる！　何と云ふ字だ。

才助　（彌助の耳の傍で何かさゝやく）――

彌助　よし、かうかくのだ。（指先で、才助の持つてゐる紙面の上にかいてやる）

才助　分つた。ありがてえ。

（みんな、つぎ〳〵にかき了へる）

喜藏　さあ、みんな書いたか。まだ書かねえ人はねえか。（周圍を見廻す）よし、みんな書いたのだな。親分、みんなかきました。

忠次　われ、讀み上げて見ねえ。

喜藏　よし、合點だ。

（皆は、緊張して眼をかゞやかし、壺皿を見つめるやうな目付で、喜藏の手許を睨んでゐる）

喜藏　（折つた紙片をひらきながら）いゝか。みんな聞いてゐてくれ。あさ。假名であさとしか書いてねえや。だが淺太郎に違ひねえ！　淺太郎が一枚（みんなに紙片を見せる。）おや、今度も淺太郎だ。淺太郎が二枚！

忠次　（わが意を得たりと云ふやうに、ニツコリ笑ふ）

喜藏　今度は、喜藏だ（紙片を見せながら）何うだい。ウソぢやねえだらう。喜藏が一枚！　おや、その次がまた喜藏だ！　ありがたい！　みんなは、やつぱり目が高いや。どうだい！　喜藏が二枚だ！

（喜藏は、得意げに紙片を高く示す。九郎助は、やうやく焦燥の色を現す）

喜藏　おや何だ。丸で、金くぎだ。何だ。く―ろ―す―けか。九郎助だ。九郎助が、一枚だ。

（九郎助、狼狽し、はげしく動搖す）

喜藏　その次はまた淺だ。これで淺太郎三枚だ。おやあり

がていゝその次はまた喜藏だぞ。喜藏は三枚だ。その次は淺太郎だ。淺太郎四枚。おやその次はまた此の俺さまだ。喜藏四枚だ。これで俺と淺太郎はたしかだぞ。おやその次ぎが嘉助だ。

嘉助　しめた！

喜藏　これで淺と俺とが、四枚づつ、九郎助と嘉助とが一枚づつだ。二人の勝負だ。

嘉助　アト一枚だな。一寸待つてくれ、俺と出るか九郎助と出るか。

九郎助　俺だとも。なあ、きまつてらな彌助！

彌助　（默つて答へず）………

喜藏　さあ！　あけるぞ。どつちだ丁か半か。九郎助か嘉助か。あゝ、…嘉助だ。

九郎助　なに、嘉助だつて。

（九郎助身をもがいてくやしがる）

淺太郎　やつぱり、みんなは正直だ。ありがてい。やつぱり親分のためを思つてらあ。みんなありがたう。お禮を云ふぞ。親分のことは俺達が引受けた。

才助　ぢや、淺兄たのんだぜ。

忠次　ぢや、みんな腑に落ちたんだな。それぢや、淺と喜藏と嘉助とを連れて行くぜ。九郎助は一枚入つてゐるから連れて行きていが、最初云つた言を變改することは出來ねえから、勘辨しな。さあ、先刻からえらう、手間を取つた。ぢや、みんな金を分けて、めい〳〵に志すところへ行つてくれ。

喜藏　（五十兩包みをこはしながら）さあ、みんな遠慮なく取つてくれ。

（喜藏。遠慮する乾分達に、分けてやる）九郎助阿兄、何を考へてゐるのだ、われも手を出しなせえ。

（九郎助、不承不承に手をさし出す）

忠次　ぢや、俺達は、一足先に立つぜ。みんな氣をつけて、行つてくれ。

一同　親分、御きげんよう。お氣をおつけなせえませ。

才助　淺兄頼んだぜ。

淺太郎　安心してゐろよ。

十藏　喜藏兄たのんだぜ。

喜藏　合點だ。親分の身體は、俺達の、目の黒い中は、大丈夫だ。

（口々に、呼びかはしながら、三人山上の方へとかくれる）

牛松　淺達がついてゐりや、ていした間違はありやしない。

才助　親分の胸の中だつて、あの三人をめざしてゐたに違えねえや。

十藏　遁えねえや。あいつらをつけて置けば大丈夫だ。
牛松　さあ、俺これから草津の方へ落ちてやらあ。
才助　おいらも、草津だ。
十藏　おいらも草津へ出よう。
牛松　おや、草津組は一しよに出かけようや。九郎助阿兄！　お前は、何處へ行くんだ。
九郎助　おいら、もう半刻考へよう。
牛松　思案は、早い方が勝だぜ。
（入れ札の紙、風にふかれて飛び立たんとす）
九郎助　あゝいけねえ。こんなものが殘つてゐると、とんだ手がゝりにならねえとも限らねえ。（九郎助拾ひ集めて掌中に丸める）
牛松　おや、稻荷の阿兄、ごきげんよう。
九郎助　もう行くのか、あばよ。
十藏　彌助阿兄、ごきげんよう。
彌助　ごきげんよう。
（みんな口々に、別れの言葉を交はし、四人は最初みんなが來た方へ引つ返す。後に、九郎助と彌助と丈がのこる。九郎助の顏は、凄いほど、蒼い。默然として考へてゐる）
彌助　おい阿兄！　お前は、どの方角へ行くんだ。
九郎助　うるせえや、今考へてゐると云ふに。

彌助　おらあ、よつぽど、草津から越後へ出ようと思つたが、よく考へて見ると、熊谷在に伯父がゐるのだ。少しは、熊谷はあぶねえかと思ふが、故鄕へ歸る足溜りには持つて來いだ。それで俺武州の方へ出るつもりだが、お前はどうする氣だ。
九郎助　（默して答へず）……
彌助　お前、よつぽど入れ札が、氣に入らなかつたのだな。もつともだ、俺も今日の入は札は、最初からいやだつた。親分も親分だ！　餓鬼の時から、一緖に育つたお前を捨て、行くと云ふ法はねえや。淺や嘉助は、いくら腕つぷしが強くつてもお前に比ぶれば、ホンの小僧つ子だ。また、たとひ入れ札をするにしたところで、野郎達がお前を入れねえと云ふ法はありやしねえ。十一人の中で、お前の名をかいたのは、この彌助一人だと思ふと、おらあ彼奴等の心根が全く分らねえや。
九郎助　（憤然として）　此の野郎、手前ほんたうにかいたのか。
彌助　かいたとも、俺より外にお前の名をかく奴なんかありやしねえぢやねえか。
九郎助　ほんたうに書いたか。
彌助　かいたとも、俺より外に誰がかくと思ふ。
九郎助　手前、ウソをつくと叩つ切るぞ。

彌助　論より證據、お前の名が一枚出たぢやねえか。

九郎助　（先刻、丸めた中より忙しく一の紙片をよりだしながら）これを手前がかいたと云ふのか。仲間の中で能筆の手前が、こんな金くぎの字をかくか。

彌助　うゝむ。（狼狽する）

九郎助　これでもかいたといふのか。

彌助　阿兄、かんにんしてくれ。阿兄わるかつた！　ウソをついた俺を叩つ切つてくれ！

九郎助　（脇差に手をかける、が、すぐ思ひ返す）よさう。たつた一人の味方と思ふ手前にだつて、心の中では意氣地なしと見限られてゐるおれだ。手前を叩つきつたつて何にもなりやしねえ。

彌助　だが不思議だな。俺が、かゝないとしたら、それを誰がかいたんだらう、

（彌助紙片をみつめる。九郎助あわてゝ丸める）

彌助　誰がかいたんだらう。（ふと、氣がつく）阿兄、まさかお前が自分でかくやうなケチな眞似はしねえだらうな。

九郎助　なゝ何を云ふ。（ふと氣が變つて急に泣く）彌助かんにんしてくれ。意氣地なしの卑怯者を、手前親分の代りに成敗してくれ！

（九郎助わつとすゝりなく）　　――幕――

仇討出世譚

人物

立石伊織　その娘楓
葉田與七郎　その弟新之助
小伴新四郎　その子新之丞
大石半九郎　その弟半三郎
久志小左衞門　その子澤之助

時

萬治の頃。

第一幕

第一場

但馬

出石の郊外。

情景

神社の玉垣を延見する森の中。老杉が多い。十間ばかり彼方に、一際秀れた大樹が見える。地上から一間位上に注連繩がはり渡してある。神木であることが分る。地上には尾花や女郎花が咲いてゐる。百舌鳥の聲が、けたゝましく聞える。小伴新四郎と葉田與七郎とが、連れ立つて梢の鳥を探してゐる。葉田與七郎は、半弓を手にしてゐる。

小伴　おゝ居たぞ、居たぞ、
葉田　何處だ〳〵。
小伴　ほら！　あすこだ。見えんか。もつと此方へよつて見ろ。
葉田　見えん。何處だ〳〵。
小伴　あれが見えんか。ほら、あの大きい枝と幹との分れ目を見ろ。
葉田　なるほど、ゐた〳〵。何だ、白鷺ぢやないか。
小伴　白鷺たつていゝぢやないか。
葉田　よし、俺がやらう。
（矢をつがへる）
小伴　茲からは、少し遠いぞ。
葉田　もつと近よつて見ようか。
（葉田、二間ばかり近寄る。すぐ引返す）
葉田　いやいかん。矢頃を近くすると見えなくなる。茲からやる。
小伴　茲からでは遠いぞ。當らないぞ。
葉田　えゝかまふものか。（きりゝと引しぼる）

（立石伊織、四十位の年配、武士らしき品位と物ごし、いつの間にか二人の後に立つて居る）

立石　よしなされ、葉田氏。（ニコ〳〵笑つてゐる）

葉田（おどろいて振り返る）何だ！　伊織殿か、なぜお止めなさる。

立石　御覽なされ。あの杉には注連繩を張つてあるではないか。神木に矢を引く咎め、恐しいぞ。

葉田　神木！　馬鹿なことを云はれるな！　それよりも身共が手練を御覽なされい！

（與七郎切つて放つ。矢は杉の梢に飛ぶ。が、鳥には當らない。白鷺はゆつくり飛び立つ！）

葉田　ちえつ！　しくじつた！　殘念！

立石　それ御覽なされ！　神木に止まつてゐるものに、矢が立つ筈はない。

葉田　馬鹿な！　貴殿が、ケチをつけるからぢや。

立石　あはゝゝ、御身の下手な腕前の尻を此方へ持つて來るなよ。あはゝゝゝ。

葉田　あゝいま〳〵しい。

小伴　貴殿なぜ、此邊を一人でウロ〳〵してゐる。

立石　散策だよ。

葉田　噓を云ふな。大方、此の邊の若衆とでも落ち合ふ約束があるのだらう。

立石　あはゝゝゝ阿呆なことを申すな。此立石には、そんな色めいた筋はないわ。

小伴　逸れた矢を探しに行かうか。

葉田　おけ！　見つかるまい。

小伴　玆は駄目だ。朝子山の方へでも行かうか。どうだ、立石氏同行せぬか。

立石　又にせう。

（立石、二人と別れて去らうとする。そのとき、矢のそれて行つた杉林の奧から久志小左衞門が、逸散に走つて來る。血相が變つてゐる。見ると、右の手に、今與七郎が放つた矢を握つてゐる。しかも、その矢じりは黑く血に染んでゐる）

久志（與七郎につか〳〵と進み寄りながら）今此の矢を射たのは貴殿か。

葉田（駭きながらも、決然と）いかにも拙者。

久志　しかと貴殿か。

葉田　念には及び申さぬ。只今樹上の白鷺に放つた矢に相違ござらぬ。

久志　然らば、改まつて申す。此の矢先にかゝつて、同伴の大石半九郎、相果て申したぞ。

葉田　えゝつ！

立石小伴　えゝつ！

葉田　それは實證か。
久志　何を僞り申さう。
葉田　念のため、半九郎の御容子見分いたす。
久志　それは、御存分に。その上での御覺悟はござらう。
葉田　御念には及ばぬ。
小伴　拙者とても逃れぬかゝり合、覺悟がござる。
久志　然らば、御案内いたす。
（久志先に立つ）
葉田　立石氏、御覽の通りの次第ぢや、半九郎殿の最期見屆けた上からは、われ等は久志殿を自然打ち果し申さう。貴殿、御迷惑ながら、御立合下さらぬか。
立石　よろしい。一緒に參らう。
（四人打ち連れて森の奧に這入る）

第　二　場

森の奧。薄が亂れ咲いてゐる中に、大石半九郎が倒れてゐる。
前場の四人急ぎ足に登場。皆、半九郎の死骸に走り寄る。
葉田與七郎、手傷をしらべ口に手をあてゝ見る。
久志　葉田氏、とくと御覽なされたか。
葉田　いかにも。
立石　急所の深手、何ともはや、申樣ない出來事。
久志　葉田氏、此始末何となさるゝ。
葉田　（死骸を離れて立ち上りながら）　拙者心に覺えなき事とは云ひながら、貴殿の御了簡に從ひ申す。
久志　さすがに聞えた申分ぢや。貴殿に意趣なき事明なれども、拙者半九郎が死骸を闇々と持ち歸りては、彼の兄弟緣者に一分立ちがたし。互に、不祥な事ながら打ち果す外ござるまい。
葉田　道理ぢや。
久志　御用意なされい！
葉田　心得た！
（二人とも闘戰の用意をする。刀を拔く、立石小伴茫然と見てゐる）
久志　（二三度、刀を打ち振りながら）　小伴氏、立石氏、お助太刀は御隨意に。
葉田　いや、立石氏は、ほんの通りがゝり、我等矢を放ちしよりの仔細、御覽なされたれば、立合にお願ひしたのぢや。小伴氏とても、拙者、息ある中は、助太刀堅く無用。
立石　拙者、最初よりのいきさつ、御二人が武士を立てなされた始終、目付衆へ申し出すゆゑ、安心してお立ち合ひなされい！

葉田　心得た、然らば久志氏！
久志　おう！
（二人激しく切り合ふ。與七郎の打ち込む太刀を拂つた小左衛門の刀は、そのまゝ斬り返されて、與七郎の小びんをかすかに拂ふ。傷つきながら、打降した與七郎の刀が、小左衛門の肩をかすめる。血を見ると、二人の爭ひは必死になる。だが、ともすれば、與七郎の太刀筋が亂れる。小伴が、助太刀の用意をする。やがて、與七郎は敵の刀を受け損じて肩先を三寸ばかり斬り下げられ倒れる。小伴新四郎。刀を拔き久志に斬りかかる）
小伴　助太刀御免！
久志　心得た！
（十數合。小左衛門も新四郎も、薄手深手數ヶ所負ふ。葉田與七郎は、いつの間にかこときれてゐる。新四郎が、蔦草に足をとられて倒れる。もう起き上がる力がない。小左衛門も、それに近寄らうとするのだが、身體が動かない。これも、瀕死の傷を負うてゐる。立石、久志に近づく）
立石　久志氏、始終のなされ方、天晴ぢや。仔細、目付へはもとより、大石氏御家族、貴殿御家族にお傳へ申すであらう。
（久志は、うなづいてこと切れる。立石は、今度は小伴新四郎に近づく。新四郎を抱き起す）
立石　小伴氏、氣をたしかに。
（新四郎も、ほとんど息が絶えかゝつてゐる）
立石　小伴氏！　見事ぢや、ようなされた！　仔細、御家族に傳へようぞ。
（小伴かすかにうなづき、息が絶える。そのとき、大石半九郎の仲間六助水を汲みに行つてゐたのが竹筒に水を汲みながら、歸つて來る。此場の容子に駭いたが、刀を拔くと、いきなり立石の背後より斬りかける。立石危く身をかはす）
六助　旦那さまの敵。
立石　理不盡な、人違ひぢや。
六助　えゝ、逃さぬ。
（立石危く二の太刀を避ける）
立石　えゝ、人違ひだと申すに。
六助　えゝ、卑怯者め！
（六助、はげしく斬りかける。立石、左手をかすかに斬らる）
立石　なに卑怯者とな、堪忍ならぬぞ。
（彼は、六助の太刀を奪ひ取ると、一氣に斬り倒す）
立石　（自分の短慮に、氣がつく）しまつた！　これでは

立派な助太刀だ。荷擔人になつてしまつた。もう立合人ではなくなつた。（ぢつと考へる）含み狀をして腹を切るか。だが、それは犬死だ。こんな小者を手にかけて。仔細をかき置いて國を出よう。逃げても心にやましいことは、少しもない俺だ。

（立石、思ひ返すと、四邊を見廻して歩み去る。入れ違ひに、大石の弟半三郎が、かけつける。兄の死骸を見て仰天し、ついで久志の死骸を改め、最後に六助を抱き起す。六助は、まだ息が通つてゐる）

半三郎　これ、六助氣をたしかに。仔細をかたれ！　仔細を。

六助　（口をうごかさんとして言葉が出でず）…

半三郎　兄上を討つたは誰ぢや。相討か、外に敵はないか。どうぢや、どうぢや。

六助　（何か話さんとして口をうごかす）……

半四郎　氣をたしかに、兄上の敵は誰ぢや。

六助　たて……

半三郎　何！　たて……たて……

六助　たていし……

半三郎　立石！　立石誰ぢや。立石伊織か。

六助　（うなづく）…

半三郎　それに間違はないか、兄上を討つたのは、立石に相違ないか。

六助　（うなづく）……

半三郎　その立石は、どうした。逃げたか。

六助　（うなづく）…

半三郎　ちえつ、殘念！　一足違ひだつた。

（くやしがる）

——幕——

第二幕

第一場

河内國龍田越の茶店。萬治三年の暮。藤棚の藤は一杯に咲いてゐる。茶店の床几に、薬田與七郎の弟時之助と小伴新四郎の一子新之丞とが、一緒に腰かけてゐる。新之丞は、角を入れた前髪、二十に近い。時之助は二つ三つ年若。

新之丞　半三郎や澤之助は、まだ見えぬなう。

時之助　一緒に旅をして居ても、敵同志であることが、此頃はハツキリと分つて來るやうぢや。

新之丞　うむ。いつも云ふ事ぢやが、御邊の父者や拙者の兄が、立石殿に討たれる筈はない。

時之助　さうとも。立石殿が國許を立退かれるとき書殘された通、われらの父者や兄は大石殿や久志氏と打ち果さ

れたに違ひない。

新之丞　大石殿の仲間六助が、末期の言葉丈で、立石殿を敵と思ふのは笑止ぢや。

時之助　立石殿に廻り合へば、事はハツキリ解るのぢや。

新之丞　久志や大石と敵同志であることが分つたら、どうする。

時之助　その場を去らず、斬り結ぶまでぢや。

新之丞　久志や大石も、その事が此頃は漸く分つたらしい。卑怯者の彼等ぢや、吾等の素首を狙つてゐるかも知れぬぞ。

時之助　あはゝゝゝ立石伊織、われらは敵を狙うてゐるのではなうて、伯父貴でも尋ねてゐるやうな氣がする。

新之丞　御身と、伊織殿息女とは、約婚との噂を聞いたが。

時之助　それは、一向存ぜぬ……なれど楓殿も。今年は十六か……

新之丞　あはゝゝ、時々思ひ出すと云ふのか。

時之助　埒もないことを云はれるなよ。

（二人は笑ふ。そのとき、峠の下から大石半九郎の弟半三郎と久志小左衛門の一子澤之助とが、旅姿で出て來る。編笠を手にしてゐる。床几に腰かけてゐる前の二人に近づく）

半三郎　何だ！　また休んでゐるのか。

時之助　休んだが悪いか。

半三郎　藤井寺で、晝食を使つたときあんなに休息をしたではないか。遊山半分の旅ではないぞ。

時之助　と云つて、先を急ぐ旅ではない。

新之丞　今夜は、麓の宿で宿ればよいのぢや。

澤之助　優長なこと云はれるな。まだあんなに日が高い。壺坂まで行かねばならぬ。

新之丞　そんなに先を急いで、何になる。何時何日に、何處まで行かねばならぬと云ふのではない。敵討の旅に先をいそぐは無用ぢや。敵は、案外この邊に居ようも知れぬ。

半三郎　そのやうな心掛なればこそ、まだ敵が討てぬのぢや。國を出て二年になるに、まだ日本半國廻れぬのぢや。

新之丞　日本全國六十餘州を廻り切つたら、敵が打てる保證があるか。

半三郎　茶店の床几にのんべんだらりと腰かけてゐるよりも、保證がある。

新之丞　何を！

澤之助　まあ、いゝ。まあいゝ。だが、新之丞どの。彼是と口實を作つて、身の足弱をかくされるな。

新之丞　なに、足弱！　貴殿こそ、米子から津山へ出る四十曲の山坂へかゝつたとき、足を痛め、身共の肩にかゝ

つたのを忘れたか。
澤之助　何を！
新之丞　敵の在所さへ判れば、三十里四十里は、一飛びにでも飛んで行く。わかりもしない敵に、先を急いで何になる。
澤之助　御身達が、急がなければ拙者丈でも急ぐ。故郷を出てから、二年と三ケ月ぢや。我等は敵を打つに心が急かれるのぢや。優長な、其方達と同伴は所詮無用ぢや。今日からは、別々にならう。なう、大石氏。
半三郎　道理ぢや、毎日愚圖々々いがみ合ふよりも別れた方が、せい〳〵する。
時之助　別れる？　別れるのは此方が、不承知ぢや。
半三郎　何ぢやと。
時之助　立石伊織に逢つて、委細が分れば、拙者等の敵は、立石殿でなくて御身達かも知れぬのぢや。
半三郎　それは、此方も覺悟をしてゐる。
新之丞　それ見ろ。お互に敵同志かも知れんではないか。立石殿に逢ふまでは、お互に取り逃がしてはならんのぢや。
半三郎　立石に逢ふまでもない。望みとあらば、今でも立ち合うてやる。刀を拔け！　用意せい！
時之助　何を。
新之丞　まて〳〵。今斬合うて死ねば犬死ぢや。立石殿に逢うて、義理を質してから、潔く斬合ふ。
半三郎　えゝ面倒な、待遠しい。
時之助　待遠しい？　拙者の太刀先にかゝるのが、それほど待遠しいか。
半三郎　何を！
澤之助　お待ちなされ半三郎どの。問答無益ぢや。立石に逢ふまで、堪忍なされ！　立石に逢へば、何事も片がつくのぢや。
新之丞　（冷笑しながら）其處へ氣がつけば重疊ぢや。敵打の旅は、たゞ辛抱に在りと、昔から定まつてゐるのぢや。
半三郎　あゝ、じり〳〵する。
澤之助　まあ、いゝ。
時之助　此方こそ、じり〳〵するわ。
（半三郎と澤之助、前の二人とは別な床几に腰かける。茶屋の女房茶を汲んで二人にも出す。そのとき、峠から一挺の女乘物が、上つて來る。四十位の町人風の男がつき添つてゐる）
茶屋の女房　どうぞ、休んでおいでなさいませ。
駕籠の者　旦那、休ませて下さい。

附添の男　よからう。少し休んで行かうか。でも、壺坂までは、いく程もなからうな。
駕籠の者　大丈夫でございます。まだ日の在る中に、向うへつきます。
附添の男　やつと、これで重荷が下りた。
（茶屋の女房茶を汲んで、皆に出す。乗物に近づく）
茶屋の女房　どうぞ、お茶を一つお上りなさいませ。
附添の男　お孃さま。一寸、降りて御休息なさりませぬか。よい景色でござりますぞ。
駕籠の中の聲　いゝえ。
附添の男　お疲れではございませぬか。
駕籠の中の聲　いゝえ。かまうて下さるな。
茶屋の女房　お茶など一つ召上りませ。
（駕籠の中の女、簾を半かゝげ、白き手を出してそれを受ける。以前の若衆達、若き女性のけはひを感じ、一齊に駕籠の中を注視する。ふと、駕籠の中で鈴の音がする。一疋の狆が走り出る）
駕籠の中の聲　玉よ。出るのではないよ。玉よ〳〵。
（狆、振り向かずに駕籠をはなれる）
茶屋の女房　可愛い狆でございますな。
駕籠の者　狆も、駕籠の中ぢや窮屈だらう。小便をしたいのぢやございませぬか。

駕籠の中の聲　はやく捕へてたも。
（狆、いつの間にかちよこ〳〵走り、新之丞の坐つてゐる床几の所へゆく。新之丞、手であやす）
新之丞　おゝ可愛い狆ぢや。（抱き上げる）
茶屋の女房　どうぞ、此方へ下さいませ。
（新之丞、女房に手渡す。時之助鋭くその狆を見入る。女房駕籠の中に狆を入れる）
附添の男　どうだ、少し早いやうだが、もう一息やつて貰はうか。
駕籠の者　合點ぢや、さあ相棒もう一息やらう。
他の駕籠の者　合點ぢや。
（附添ひの男茶代の鳥目を拂ふ。駕籠をかき上げて去る。時之助、ぢつと、その後を見てゐる）
新之丞　時之助どの。どうしたのぢや。
時之助　あの狆、たしかに見覺えがある。
新之丞　何ぢやと。
時之助　伊織どの息女楓どのが、祕藏した狆に相違ない。
新之丞　然らば、駕籠の中は楓どのか。
時之助　さう思はずにゐられない。
半三郎　（飛んで來て）何に、あの駕籠の中が、伊織の娘か。つゞけ、小伴氏。
澤之助　合點ぢや。（走り出す）

新之丞　おい！　待て。つけるのなら、一緒ぢや。殊に大事な手がゝりを見つけた時之助こそ、先達ぢや。義理を知れ！
半三郎　と申して……
新之丞　あわてるな。つけるなら、一しよにつけよう。さあ時之助どのお立ちなされ！
時之助　（やゝ憂鬱になりながら）うむ。つけようか。
（四人爭ひながら、駕籠の後をつける）

第二場

壺坂の山の奥、立石伊織の侘住居の垣外。花の殆んど散りつくしてゐる山櫻が二三本ある。竹垣の中には藁屋の棟が見える。門は見えない。駕籠かつぎが、空駕籠を吊して歩ると、四人の若武者達が一人々々忍び寄る。銘々、垣からのぞく。

新之丞　どうぢや、伊織に相違ないか。
時之助　たしかに伊織どのぢや。
半三郎　わしは、見覺はないのぢやが、しかと相違ないか。
時之助　相違ない。
半三郎　澤之助どの。それ御用意！　（半三郎と澤之助、一しよに飛び込まうとする）
時之助　何をする、お待ちなされ！
半三郎　敵を見ては、一刻も猶豫がならうか。
時之助　今更此期に及んで、何をあわてるのぢや。
半三郎　あわてはせぬ。だが、優長に構へる必要はない。
新之丞　えゝ、待てと云へば待て。あれ見られい、久し振りに父と娘の對面ぢや。半刻の猶豫を與へるのは、武士の情ぢや。
澤之助　何と申す。三年越し尋ぬる敵を見つけ、入らぬ仁義立てから猶豫をいたし、萬一取り逃がせば末代までの不覺ではないか。
時之助　えゝ人の情を知らぬ奴、あのやうに欣んでゐる親娘を今半刻欣ばせたとて敵討の邪魔にはならぬ。
半三郎　えゝ、優長な、そこのけ！
時之助　ならぬ。
（四人激しく爭ふ中、半三郎柴垣を押し破つて這入る。澤之助もつゞく）
時之助　え、聞きわけのない。仕方がない。新之丞どの遲れるな。
新之丞　心得た。
（二人ともすばやく垣の中に飛び入る）

第三場

伊織の侘住居の座敷。伊織椽側に對面したばかりの娘

るかばつて立つてゐる。四人の武士伊織に迫つてゐる。半三郎と澤之助は拔きつれてゐる。
伊織　何奴ぢや。案内も乞はずに理不盡な！
半三郎　云ふな立石伊織、御邊に見覺えはあるまいが、拙者は大石半九郎の弟半三郎。
澤之助　拙者は、久志小左衞門の一子澤之助。
半三郎　兄の仇、よも忘れはいたすまい。
澤之助　父の仇、尋常に勝負いたせ！
伊織　（苦笑しながら默つてゐる）……
時之助　おゝ立石の伯父上、拙者は葉田時之助。
伊織　（なつかしさうに）おゝ御身は、時之助か。大きくなつたなう。
時之助　伯父上も、御健勝で。
伊織　そちは、何用あつてこゝへ訪ねて來た。
時之助　伯父上、仔細はかうぢや。伯父上が目付へ遣した御書狀は、あれは本當でございますか。
伊織　武士の書き遺したるものに僞りがあるものか。
時之助　なれど、その場に手を負うてゐた大石殿の御家來の口からは、大石半九郎の敵は立石殿とはつきり申されました。
伊織　うむ、なるほど。
時之助　大石殿の敵が立石殿ならば、一緒に居られた久志殿の敵も、やはり立石殿、かやうに決定いたしました。
伊織　うむ、それで。
時之助　こゝに居られる大石半三郎殿、久志澤之助どの、伯父上を敵と狙うて、仇討に出られまする。拙者も、小伴新之丞殿も、父兄を殺されてやつぱり安閑としては居られませぬ。
伊織　うむ。うむ。
時之助　私や新之丞どのは、伯父さまが敵とは思へませぬ。だが、大石殿御家來の云ふことが本當でございませうか。
伊織　（ちつと考へる）其方が、久志小左衞門の御子息か。
澤之助　（刀を擬しながら）いかにも左樣。はやう御支度なされい。
伊織　其方が、大石半三郎どのか。
半三郎　（刀を振りながら）いかにも左樣。早く尋常に立合はれい。
伊織　見渡したところ、いづれも頼しき若者ぢや。お身達の父や兄も、あつぱれ武士だつた。お身達も、父や兄に恥ぢぬわ。だが、拙者の書き殘したことが、本當ならば何とする。
時之助　本當なれば、敵は伯父上でなうて大石殿久志殿ぢや。

伊織　半三郎殿は、何うする。
半三郎　われらは、われらの仲間の申せしことを信ぜぬ譯には參らぬ。御身を打ち果した上、薬田氏小伴氏を打ち果す所存ぢや。
時之助　伯父上、はつきり云うて下されい。伯父上の云ふことが本當ならば、伯父上の助太刀して大石氏、久志氏と潔く勝負いたします。
伊織　御身達の父や兄は、武士の意地から惜しき命を捨てた頼もしい武士ぢや。それにまた御身達が、その惜しい最期を習はうとするのか。まだ二十にも足らぬ若い身空で。
半三郎　立石殿、未練であらう。お支度なされ！
伊織　よし、今仔細を聞かしてやらう。あの書置きは悉く僞はりぢや。まことは、はしなき爭論から、其方達父や兄を悉く手にかけたは、かく申す立石伊織ぢや。
半三郎　うむ、さては正しく。
澤之助　ぬかるな、半三郎どの。
伊織　（娘に）そちはあちらへ參つて居れ。高が知れた小忰ども、立ちどころに打ちとつてくれる。そちは、彼方へ行つて居れ。（泣き崩れてゐる娘を奥へ入れる）
時之助　伯父上、それは本當でございますか。
伊織　此の期に及んで僞りを申さうか。その方達の父兄を手にかけた伊織ぢや。見事、父兄の仇を報じて國許へ錦をかざれよ。
半三郎　參るぞ。
伊織　（刀の鞘を拂ふ）よし。何處からでも來い。
（半三郎と澤之助、兩方より斬り込む。見事に拂はれる。時之助新之丞はまだ刀を拔かない）
伊織　時之助、臆したか、早く刀をぬけ、新之丞どのもおかゝりなされ。
（半三郎と、澤之助激しく斬り込む。また散々に斬り拂はれる）
時之助　伯父上、貴君がわれらの父を手にかけたとは思へませぬ。
伊織　えゝ不覺人め、敵討に出たものが、敵を討たないで歸參が叶ふと思ふか。はやう、刀を拔いて斬つて來い。父の敵を討つて、家督相續をなし、天晴武士となれよ。
澤之助　えい。（斬込んで來る）
伊織　うむ、見事な腕の冴えぢや。父小左衞門の太刀先にも劣らぬぞ。
澤之助　何を！
伊織　えい。（横に拂ふ）
（半三郎と澤之助、奮闘すれども及ばず）
伊織　えゝ時之助、刀を拔かぬか。うろたへ者め、え、ぬ

け！　ぬけ！
時之助　伯父上、御免！（刀を拔く）
伊織　新之丞どのも、それ！　おかゝりなされ。
新之丞　御免！
（二人とも漸く刀を拔く。半三郎と澤之助、二人に先をこされまいとして、盛んに斬り込む。伊織二人を避け、時之助の刀を待つ。時之助後退みして斬込まず）
伊織　それ、時之助、斬つて來い！
時之助　御免。（斬込めども激しくはかゝらず）
伊織　太刀先が、にぶいぞ。それ時之助其方初太刀を。
（半三郎、澤之助激しく斬り込む、伊織激しく斬り拂ふ）
伊織　時之助、かゝれ！
（時之助かゝらず。亂鬪つゞく。伊織時之助に斬られんとすれども、時之助斬らず）
伊織　お前達の鈍刀では、この伊織には刃が立たぬ。いつそかうしてやらう。
（伊織退いて緣に腰かけ、刀を返して自ら腹を突く）
時之助（駈け寄りながら）伯父上。
伊織　娘を出石の拙者弟の家まで賴む。
時之助　畏りました。
伊織　おゝみんな一太刀づゝ恨め！　これで、めでたく本懷を達したゞらう。四人仲よく歸國して、天晴武士の譽れを上げい。それ、一太刀宛斬れ！　斬らぬか！
（半三郎、澤之助達も茫然として振り上げた刀をおろし得ざる中に）

――幕――

戀愛病患者

人物

佐々木貞一　ある專門學校教授。年五十五六。古い文學士
さだ子　その妻。四十五六。年よりは若く見える
哲夫　彼等の長男。文科大學生。廿一二
敏子　彼等の長女。すでに他家へ嫁いでゐる。廿三四
松村謙一　敏子の夫。醫科大學の助手をしてゐる若い學士
久美子　彼等の次女。十八。美しい少女
その他重要でない人々

時、及び場所
東京の山手。今日

情景

佐々木貞一の家、二階建、七間か八間かある。階下には、八疊と、六疊がつゞいてゐる。舞臺は八疊の間。客座敷に使ふとみえてよく片附いてゐる。床の間には、相當立派なものであるらしい南畫の山水が懸けてある、青磁の花瓶には白百合が投げ入れてあるので、初夏であることがわかる。床の間のわきは違ひ棚になつてゐる。その下に、書棚がおいてあり、その上に、和綴の本が體裁よく置かれてゐる。主人が、國文學か、歴史かの教授であることがこれでわかる。緣側近くさだ子と、長男の哲夫と、長女の敏子とが、首を鳩めて、坐つてゐる。哲夫は、手に電報を、持つてゐる。

さだ子　まあ、警察にゐるんだつて。何といふことだらう。
哲夫　いやになつちまふなあ。たしかに警察ですよ。ケウサツとなつてゐますがこのウはきつとイの間違ひですよ。
さだ子　さうだね。どれ、一寸、貸して御らん。(電報を哲夫の手から受取る。)　さうだね、たしかに警察だね。他に心あたりはないもの。
敏子　まあ。久美ちやんも、とんだことをしたものだね。
さだ子　ほんたうだよ。まさか、あんなおとなしい子が、こんなことをするとは思はなかつたよ。いやだ〳〵。
敏子　ほんたうに、いやになつてしまひますわね。新聞に

でも書かれたら、どうなるのでせう。

哲夫　まさかこんな、小事件を書きはしないと思ふけれど、田舍の通信員なんて、どんな事件でも通信してくるんだからなあ。

さだ子　お父さんの名前でも出たら、とんだことになりますね。

哲夫　出たつて、仕方ありませんよ。久美子の、家出はお父さんに責任があるんだから。

さだ子　さうは言はれませんよ。

哲夫　いゝえ。さうですよ。たしかにさうですよ。お父さんが、つまらなく、子供を壓迫するからですよ。

敏子　さう。何かお父さんが、久美子に仰有つたの。

哲夫　さうですよ。お父さんが、つまらない壓迫を加へるからですよ。

敏子　どうしたの。一體。

哲夫　久美子か、今度一緒に家出をした、山崎といふ學生と、絶對に、交際をしたらいけないといふんですよ。

敏子　ぢやあ、久美子と山崎といふ人は、よつぽど前から、知り合ひなの。

哲夫　もう、半年にもなるでせう。とにかく家出する前に、戀愛はあつたけれども、それやあ、綺麗なつきあひだつたんですよ。純な交際だつたんですよ。それは、僕はあくまでも、信じてやりたいのです。それをさ、お父さんが、二人がつき合つてゐることを、許すべからざる、罪惡のやうに考へたんですよ。二人が何か、卑しい恥しいことでも、やつてゐるやうに、考へてゐるんですよ。頭が舊くつて、お話にも、なりやあしない。

敏子　それで、お父さんが、何か言つたの。

哲夫　久美子と、山崎君とが、氷川さまの境内を一緒に歩いてゐるところを、お父さんに見付かつたのですよ。さうすると、お父さんは、かつとして仕舞つて、その場から、久美子の肩をつかんで、家へ引張つて歸つたんですよ。まるで、やり方が、野蠻人なんですよ。

敏子　そりやあ、まあ、お父さんも隨分ひどいわね。

哲夫　ひどいの、ひどくないのつて、てんで人間に對して、扱ひ方をしらないんですよ。たとひ、自分の子だからといつて、人間としての尊敬を忘れちやあ、駄目ですよ。

敏子　それは、さうだわね。

哲夫　久美子だつて、十八ですよ。文學や、思想の本は、可なり讀んでゐるでせう。そして、自分のやつてゐることを、さう、不當な、不正なことだとは、思つてゐないでせう。それだのに、お父さんに、引ずつて歸られて、以後山崎には、絶對に會つては、いけないと、言はれたんだもの。久美子が、かつとしたのも、もつともですよ。

敏子　ほんたうにね。いけないわね。お父さんも、頑固すぎるわね。

哲夫　頑固だけではないのですね。無茶ですよ。亂暴ですよ。いくら久美子の身體を、束縛したつて、久美子の思想までは、どうすることも、出來ませんよ。久美子が反動的に家を、飛出したのも、もつともですよ。吾々若い時代の者の心持に、少しの理解もない、また、戀愛といふものに對して、ちつとも同情のない、お父さんのやうた人が世の中に、却つて害惡を、流すのですよ。

敏子　まあ。さうでもないんだけど、お父様が頑固すぎるのが惡いんだわね。

哲夫　そんな態度だけの問題では、ないんですよ。根本問題ですよ。てんで、戀愛に理解がないのだからなあ。戀愛といふことを、一つの醜行だと思つてゐるんだからかなはないや。

敏子　お父様は、何といつても、頭が舊いんだわね。

哲夫　お父さんさへ、あんな、亂暴なことをやらなければ、二人は、いつまでも、淸く、つきあつて、ゐたのですよ。それを、お父さんが、あんな、亂暴をやるから、二人とも、反動的に、家出なんか、やつてしまつたんですよ。

敏子　でも、久美ちやんも、あんまり、考へなしだわね。

哲夫　考へなしぢやあ、ありませんよ。考へがありすぎるから、反動的に、出るんですよ。

敏子　それも、さうだわね。

哲夫　久美子が、もし、死にでもしたら、僕は、お父さんと、徹底的に、喧嘩をするつもりでゐたんだ。

さだ子　でも、まあ、どうして、警察へなんか行つて、ゐたのだらうね。

哲夫　きつと、宿屋かなんかに、一緒に、泊つてゐたんでせう。

さだ子　まあ。一緒に、泊つてゐたんですつて。

哲夫　(苦笑して)　一緒に泊らないで、どうするんです。

さだ子　だつて、まあ、若い男と一緒に……そんな、大それたことを。

哲夫　だつて仕方がありませんよ。命がけでやつてゐることですもの。

敏子　でも、まあ、いゝわ、この上、心中でもしてくれた日には、目もあてられないんだけど、無事に、目附かつて來たのだから、歸つてきても、あまり、ガミ／＼言はない方がいゝわ。何なら、私の家へ久美ちやんを、當分の間預けておかない？

さだ子　さうね。お父さんが、何と仰しやるか。

敏子　山崎さんて、何處の學生。

哲夫　お父様の學校の生徒ですよ。しかもお父様の擔任だ。

敏子　まあ、さう。田舍の人。東京の人？
哲夫　尼ケ崎か、どこか、關西の人ですよ。
敏子　どんな人。いゝ人？
哲夫　どんなか知りませんよ。でも、見たところ普通の人ですよ。
敏子　お金持の息子？
哲夫　そんなことは、しらないなあ。
敏子　お父樣は、何て仰しやつてゐるの。
哲夫　何をです。
敏子　久美子の、家出のことをさ。
哲夫　何とも言やあしない。久美子が、ゐなくなつてからは、二階へあがつたきりで、御飯の時やつとおりてくるだけさ。
敏子　久美子を、家へ入れないと、言やあしない？
哲夫　どうだか。
さだ子　歸つてくれれば、歸つて來たで、また一苦勞だよ。簡單にをさまるまいからね。
敏子　さうですわね。
哲夫　お父さんが、ぐづ〳〵言へば、今度は僕が、承知しないんだ。
さだ子　お前が、さう喧嘩腰になつたら、困りますよ。
哲夫　でも、お父さんが、惡いんだもの。僕は今まで、だまつてゐたが、今度だけは默つてゐないつもりだ。
（三人。暫く、無言、母また電報を、取上げてみる）
さだ子　あの子は、無邪氣な、ねんねえのやうな子供だつたのに、とんでもない、ことをしてくれたね。
哲夫　みんな、お父さんが、惡いんですよ。
さだ子　お前、そんな大きな聲で言ふと、お父さんに、聞えますよ。
哲夫　聞えたつて、いゝですよ。
敏子　山崎さんの方も、親類の方が、來てゐるんですつて？
さだ子　えゝ。さう。兄さんか誰かゞ來てゐるんですつて。
敏子　ぢやあ、家の人と、鎌倉で、落合つてゐますね。
さだ子　さうかも、しれないよ。
敏子　かうなつた以上、山崎さんの方と、話して、お嫁に、貰つてもらふんですね。
さだ子　妾も、さうするより外、ないと思ふんだよ。妾も、さう思つてゐるんだけれど、お父樣が、大した、お腹立ちなので、さう安々と許して下さるか、どうか。
敏子　その位のこと、お父樣にも、わからないことはないと思ふわ。
哲夫　どうだかなあ、分らずやの頑固親父だから。
敏子　その電報、何時に打つたの。
哲夫　（電報を、母の手から取つて）發信、午後二時四十

分か。
敏子　ぢやあ、二時間かゝつてゐるんだね。
哲夫　汽車で、來ると同じだ。
敏子　ぢやあ。電報を打つてから立つたとしても、もう、こちらへ着く時分ですね。
哲夫　さうだなあ。もう、つく時分だなあ。
敏子　久美ちやんを、すぐ家へ連れてくるかしら。
哲夫　連れて、くるでせう。
敏子　私の家へ、一度連れて、行きやあしないかしら。
哲夫　だつて、姉さんが、こちらへ來てゐるといふことを、義兄さんは知つてゐるでせう。
敏子　それやあ。知つてる筈よ。
哲夫　ぢやあ。こちらへ、連れてきますよ、きつと。
さだ子　ほんとに、謙さんには、すまないわね。こんな、迷惑なこと許りたのんで。
敏子　いゝんですよ。いつも、大學から、歸ると、ゴロゴロしてゐるんですもの。それに、家の人が、仲へ入れば、お父さんだつて少しは、ちがふでせう。
哲夫　ちがやあしないよ。とても、頑固だからなあ。
敏子　家の人も、結婚させるといふ、意見なのよ。相手の身分を、調べて、相手の家がしつかりした家なら。
哲夫　山崎といふ男は、少し、おつちよこちよいらしいけれども、家は、相當らしい。
（自動車の音が、遙かに聞える）
敏子　（聞耳をたてゝ）家の人かも、しれないわ。
哲夫　どうして。
敏子　家の人、よくタクシーにのるのよ。
（自動車の音、だん〳〵近くなる。戸外に止つたやうな、氣勢がする。敏子そは〳〵と、立上る）
敏子　きつと、家の人だわ。（玄關へ行く）
さだ子　（不安さうに）どうなることだか。
哲夫　どうもなる筈は、ないですよ。僕は、あくまでも、久美子の立場を、擁護してやるのです。
さだ子　成るべく、お父様の、お氣にさはらない様に、圓く、をさめたいものだね。
哲夫　そんなことは、今時出來ませんよ。
（敏子、慌たゞしく入つて來る）
敏子　やつぱり、家の人よ。久美ちやんが、家へ入らないと入らないといつて、拗ねてゐるの。
哲夫　なにも、そんなに、氣兼ねすることはない。僕が行つて、引張りこんでやらあ。
（哲夫、座を立つて、玄關の方へ行く。自動車のエンヂンの音、格子の開く音、やがて、哲夫の聲がきこえる）

哲夫 （姿は見えないで）何も、ビク／＼することはない、お入りよ。お入りよ。自分の家ぢやないか。お入りよ。何も、お父さんなんか、恐がる必要はないよ。お入りよ……何だ、恥しい、ぢやあとにかく、話のつくまで、お前の部屋へ行つておいでよ。いゝか。安心して、待つておいでよ。

（……間……哲夫と敏子と、敏子の夫の松村謙一と一緒に、出て來る。松村は背廣を着てゐる）

謙一 （坐つて、挨拶しながら）お母さん。御安心なさい。久美ちやんを、無事に、連れて歸りましたよ。

さだ子 （さすがに、嬉しさうな、表情を湛へながら）どうも、とんだ、御厄介をかけて相すみません。ほんたうに、ねんねえの癖に、とんでもないことをいたしまして。

謙一 いや。なあに、もう大丈夫です、御心配に、ならなくとも大丈夫です。先方の兄といふのも、大變よくことの分つた人ですから。

さだ子 一體、どうして、警察の厄介なんかに、なつたのでございませう。

謙一 長谷の宿屋に、泊つたのですが、何となく、擧動不審だつたので、宿屋の方で警察へ、しらしたらしいのです。

さだ子 （暗い顔になつて） まあ。一緒に、泊つたのですかね。

謙一 （返答に窮しながら）さうらしいのです。

さだ子 （黯然として） 取かへしのつかないことを、致しましたものです。

哲夫 仕方がありませんや。お母さん。

謙一 さうですとも、もう出來たことは、出來たことです。それで、先方の兄さんといふ人とも、よく話したのですが、ね。向うでは、久美子さんを、嫁にもらつても、いゝといふのです。

敏子 さう。それなら、いゝわ。

哲夫 責任を解するものとしては、さうならなければ、ならない筈だ。

さだ子 さうね。さう願へれば、結構だけど。

謙一 それで、向うの兄さんの言ふのには、良家の、お孃さんを、連れ出したのは、全然私の弟の責任ですから、お詫びのしるしとして、結婚の、お約束だけは、今すぐ、取きめて、歸りたいと、いふのです。

敏子 さう。ぢやあ、よく、話が分つてゐるわね。

哲夫 向うが、さう言つて、くれるのなら、こちらも滿足だ。

謙一 さうですとも。相手がよかつたのが、こちらの、仕合せですよ。かうして責任を負つて、くれゝば、問題は、

ありませんよ。

さだ子　さうですね、妾も、やつと、これで安心しましたよ。でも父が、どう申しますか。

謙一　僕が、お父さんに、お目にかゝつて、お話したいと思ひますから、御都合を、伺つてみて下さいませんか。

さだ子　はい、畏まりました。ぢやあ、一寸、都合を、きいて參りませう。（さだ子、やゝ不安らしく、座敷を、出て行く）

謙一　お父さんも、これには、御贊成なさるだらう。

哲夫　さうですとも、父が、どんなに頑固だつて、これ以外には、解決は、ないんだから。

敏子　ほんとに、相手が、よかつたのですね。

謙一　やつぱり、久美子さんが、それだけは、心得てゐたんだよ。つまらない者に、引かゝらなかつただけ久美子さんが、利口なんだよ。

敏子　久美ちやんを、一人でおいてゝも、大丈夫かしら。

謙一　大丈夫だよ。

（さだ子入つて來る）

さだ子　（謙一に）すぐ、降りて、まゐるさうでございます。

謙一　あゝ、さうですか。

哲夫　お父さんは、どんな顔してた。

さだ子　どんな、顔だか、妾、分りませんよ。

（四人、暫く、不安な、沈默に、閉される。敏子、この沈默からのがれようとして）

敏子　妾は久美ちやんの處へ、行つてゐよう。

（暫く、不安な沈默、やがて二階の階段を降りる音が、かすかに聞える。開けられてゐる襖の間から、彼等の父が出て來る。哲夫が罵倒してゐる程頑固親父には見えない。むしろ柔和に見える。半白の口髯を生やし、色の白いやゝ感情的な、娘達の美貌が成程と、うなづける程、整つた額の老人。娘の家出等に就いて何も考へてゐないやうな、悠々たる態度を見せてゐる）

貞一　（謙一に）よう、暫く。

謙一　や、暫く。いつも御無沙汰許り致しまして。

貞一　いや。そりやお互様だ、いつもお達者かな。

謙一　はい、お蔭で。

貞一　學校の方は毎日行つてる?

謙一　はい、毎日行つてゐます。

貞一　博士論文の方の仕事は、少しは進行しましたか。

謙一　はい、もう半年もやればどうにか、目鼻がつきさうです。

貞一　今度貴方の方の部長は、變つたやうですね。

謙一　はい、藤田博士になりました。

貞一　藤田さんといふ人はやはり青山さんのお弟子ですか。
謙一　（相手が肝心な問題に觸れないので、少しいら〳〵しながら）弟子といつて、單に敎室で講義を聽いただけの關係ですが。
貞一　あゝさうですか、さうですか、大學の移轉問題はどうなりました。
謙一　（益々いら〳〵して）えゝ、そんな問題には餘り興味がないもんですから。
貞一　成程。純粹な學者にとつてはどうでもいゝ問題ですからね。
謙一　お父樣、實は久美子さんのことについて一寸お話したいのですが。
貞一　うん。そんなことを言つてゐたね。
（哲夫とさだ子の方をジロリと見ながら）
貞一　さう、その話なら（哲夫とさだ子の方をみて）お前達は一寸あつちへ行つておいで。
さだ子　はい。（立つて去る）
（哲夫、動かうとしない）
貞一　哲夫、お前もあちらへ行つてゐたらどうだ。
哲夫　久美子の話なら僕もこゝにゐたいんです。あいつの運命を決める話なんですから。

貞一　（少しむつとする）お前はまだ學生だぜ。
哲夫　學生だつて、一人前の人間です。久美子のたつた一人しかない兄ですよ。
謙一　哲夫さん。貴方がさういふ態度に出ると困りますよ。お父さんがあゝ仰有るんだからあつちへ行つてゐられる方が久美子さんの爲ですよ。
哲夫　貴方がさう仰有るんなら行つてゐませう。
（哲夫、去る）
謙一　外でもないんですが、今日鎌倉へ久美子さんを迎へに行つたんです。
貞一　それは御苦勞、どうもとんだ奴で。
謙一　それでとにかく家へお連れして歸つたのですが。
貞一　さうですか。どうもたゞでは閾を跨がせる奴ではないんですが。
謙一　さぞ御立腹でございませうが、何分年も若いしあまり考へもなく、やられたことですから、これは一つ、寛大にお考へになつて頂きたいのです。
貞一　（苦笑して）さう寛大に考へられることではないんですが。
謙一　そこでどうか一つ、すぎ去つたことは過ぎ去つたことゝして、許して頂きたいのです。それに就いて先方の兄といふ男にも會つたのですが、お孃さんをお連れ出し

て甚々申譯がないと、謝つてゐるのです。

貞一　うん。

謙一　それで先方の兄の申すには、他にお詫びの申し様もないからかうなつたのを御縁に、お孃樣を弟の嫁として頂きたいといふのですが。

貞一　うん。

謙一　何でもその山崎といふ人の家は、尼ケ崎で相當な財産家ださうです。それでお孃さんにさき／＼不自由をさせるやうなことはないから、是非頂きたいといふのですが。

貞一　うん。

謙一　いかゞでせう。若い二人の罪をお許しになつてお孃樣をおやりになつたらどうです。この問題の解決としてはこれ程いゝことはないと思ふのです。

貞一　うん。

謙一　いかゞでせう。許して下さるでせうか。

貞一　何をですか、二人の罪をですか？

謙一　さうです、二人の罪を許して頂きたいのですが、それと同時に結婚のお許しも頂きたいのです。

貞一　二人の罪を許すことは、許さないといつたところでどうにもなることではないんだから、それは許してもいいと思ひます。

謙一　それと同時に、結婚のお許しも願ひたいものですなあ。

貞一　（敢然と）それは、問題です。

謙一　（意外な顏をして）それはどうしてゞす。

貞一　いや、それはたやすくは決められません。

謙一　それは困りましたなあ。實は先方の兄が約束だけでも決めて歸りたいと言つてゐるのです。それでお父樣の大體の意向だけでもお伺ひしたいのです。

貞一　いや、それは一寸申上げられません。

謙一　これは重大な問題ですが、お考へになる必要のある問題だとは思ひません。大體にお許しになるかならないかは、すぐ頭に浮んで來るものだと思ひますが。

貞一　いや、それは浮んで來ないこともありません。

謙一　ぢやあ、お許しになりますか。

貞一　いゝえ、お斷りしたいと思ひます。

謙一　（一寸驚いて）えゝ、お斷りになるんですつて。

貞一　さうです。

謙一　お斷りになるといふことは、僕には考へられませんね。

貞一　何故です。

謙一　（少し興奮して）久美子さんの將來のことも少し考へてあげたらどうです。

貞一　それは貴方に言はれなくても、俺も考へてゐる。
謙一　お考へになつたらこの結婚を、お許しになるのが當然ぢやありませんか。
貞一　それは貴方の考へ方だ。
謙一　（少しむつとして）さうでせうか、私だけの考へ方でせうか。（二人暫く無言）
謙一　お父さんも御存じだらうと思ひますが……こんなことは言ひたくないんですが久美子さんは鎌倉で、山崎といふ學生と同じ部屋に寢てゐたのです。
（謙一、貞一の顔を見る、貞一の表情は動かない）……一緒の部屋に寢泊りしてゐた以上久美子さんは、當然處女でなくなつたと考へねばなりませんが。
貞一　（暫く默つてゐたが、）そんなことは俺も察してゐる。
謙一　處女でないとすると將來結婚せられるに就いても、非常な不利な立場に陷るほかはないと思ふのですが、夫れよりも先方の申出を容れて、結婚をお許しになつた方が、久美子さんに疵がつかず、兩方にとつてこんな結構なことはないと思ふんです。
貞一　それは貴方の考へ方かもしれん。しかし私は不贊成だ。
謙一　それぢやみす〳〵久美子さんを不幸に陷れるやうなものですね。

貞一　（暫く考へて）いや、俺はさうは思はない。
謙一　さうですかなあ。僕にはお父樣の考へ方が分りませんなあ。僕は出來るだけお宅のお名前に疵がつかないやう、當人達に疵がつかないやう圓滿にをさめようと思つて、先方の兄ともよく話してみたのですが、お父さんのお考がさうだとすると僕は、手を引くより外ありませんなあ。それぢあ、あんまり久美子さんが可哀さうですなあ。
貞一　（だまつてゐる）……
謙一　ぢや仕方がありません。これから行つて先方の兄に返事をしておきませう。だがお父さん、お母さんや哲夫さんに御相談なさらなくてもいゝのですか。
貞一　いや娘のことは、俺の一存でたくさんだ。
謙一　（憤然として立上る）ぢやあ、お父さん失禮、今から行つて來ます。
（謙一、去らうとする。哲夫、奧より慌しく飛込んで來る、義兄を引止める）
哲夫　義兄さん、待つて下さい〳〵。こんな重大な問題が、お父さんだけで決められちやあたまらない。待つて下さい、義兄さん。
（謙一、哲夫に引止められて坐る）
哲夫　（父に向つて昂然とゐざりよりながら）お父さん、

僕は今のお話は外できいてゐたのです。山崎との緣談をお斷りになるなんてそんな、無茶なお話はないぢやありませんか。
貞一　何を云ふ。お前はだまつておいで。
哲夫　いゝえ、だまつてはゐません。こんなことは大問題ですよ。妹の將來を決める大問題です。
貞一　（やゝ興奮しながら）大問題だから俺も斷つたんだ。
哲夫　大問題だから斷る？　そんな大問題をお父さんお獨りで斷つていゝんですか。
貞一　いゝとも、俺は父だよ。
哲夫　父にはそんな權利があるんですか。
貞一　あるとも。
哲夫　あるとないとは別問題にしても、どういふ理由でお斷りになるんです。
貞一　理由？　山崎が氣に入らないから。
哲夫　山崎がお氣に入らないといふんですか。でも、當人の久美子が氣に入つてればそれでいゝぢやありませんか。
貞一　當人が氣に入つてる？　そんなことは問題でない、當人が氣に入つてたつて山崎はオッチョコチョイだよ。輕薄才子だよ。あんな者に、久美子を添はせたくない。
（父子の言ひ爭がだん〳〵盛んになるので、さだ子、敏子座敷の閾ぎはにしのびやかに寄つて聞いてゐる）
哲夫　山崎君がオッチョコチョイですつて、そんなことがお父さんにお分りになつてゐるんですか。
貞一　分つてゐる。俺は教室であいつを教へてゐる。
哲夫　ぢやあお父さんの御意見にしたがつてオッチョコチョイの輕薄才子だと假定してもいゝです。しかし久美子が將來の夫として思つてゐる以上、お父さんがはたから口を出すことがあるもんですか。
貞一　馬鹿、何をいふ、そんな馬鹿なことがあるもんか。久美子が小さい時に靑い未熟な果物を食つてれば、親がはたから取上げるのは親の權利だ、いや權利計りぢやあない義務だ、義務だけぢやあない慈悲だ。
哲夫　でも、久美子は七つ八つの子供ではありませんよ。
貞一　なに、俺の目からみれば同じことだ。七つや八つで果物が熟れてゐるか熟れてゐないか、分らないやうに、十九や二十で男性の熟、未熟は分らないんだ。山崎は俺の目からみれば靑い柿のやうなもんだ。
哲夫　當人が好きなら、靑い柿だつて何だつて！　いゝぢやありませんか。
貞一　當人が靑い柿だと分らないで、食べてゐるんだ。それがはたで默つてみてゐるわけにはゆかない。
謙一　でもお父さん。もう久美子さんはその山崎といふ男

と、肉體的に夫婦になつてゐるんですよ。もう取返しのつかないことをしてをられるのです。それをお考へになれば、たとへお父樣に多少の御不滿があつてもお忍びになるのが、あたりまへだと思ひますね。

貞一　俺はさうは思はないな。久美子が一度誤つたことをしたからといつて、親が許してそれを生涯續けさせるといふ法はない。あ奴が毒になる果物を一口食つたからといつて、それをすつかり食べさせなければならないといふ法はない。

哲夫　（激昂して）お父さんの言つてゐられることは理窟です。つまらないへこ理窟だ。お父さんは戀愛といふことをどう考へられてゐるのです。

貞一　ふん。戀愛か、戀愛がどうしたといふんだ。

哲夫　戀愛が神聖なものだといふことがお分りにならないんですか。くだらない理窟など仰有る前に、久美子の戀愛を認めてやることは出來ないんですか。たとひ山崎がオッチョコチョイにしろ、輕薄者にしろ久美子との間に純な戀愛があれば、二人の關係は立派だと思ふんです。

貞一　俺は戀愛などを立派だと思はないなあ。

哲夫　（激昂して）さうでせう、お父さんには戀愛は一つの醜行としか見えないんでせう。

貞一　醜行？

哲夫　醜は醜惡の醜です。

貞一　ふん。俺は醜行とも思はないなあ。戀愛は一つの病氣だよ。

哲夫　なに。病氣ですつて。

貞一　青年男女のかゝり易い病氣だよ。はゝゝゝ。

哲夫　病氣だつたらどうしたといふんです。

貞一　この病氣にかゝると、若い青年男女は夢我夢中になつてしまふんだ。何も分らなくなつてしまふんだ。この病氣にかゝると男は自分がしてはならないことをするんだ。女は男の本當によいところが目につかないで、つまらないところに感心してしまふのだ。世の中の戀愛をしてゐる男女をみるがいゝ。本當に人格的な美しさを愛し合つてゐるものが幾人ゐると思ふ。殊に戀愛で理性を無くしてしまふのは女だ。男が一寸様子がいゝとか、一寸男振りがいゝとか、一寸ハーモニカを吹くとか、一寸獨唱をやるとかそんな、本質的な人格とは全く別な輕薄なところで戀愛するのだ。一生を伴にしなければならない相手を、一時の迷ひの爲に、一時の熱に浮かされて選擇するなんて、以ての外のことだ。久美子は今熱病にかゝつてゐるのだ、そんな熱病患者の好みによつて生涯の夫を決めるなんて、俺は不贊成だ。そんな夫を持たせて俺はあいつの一生を臺無しにしたくはない。そんなことを

させるには俺は久美子を愛しすぎてゐる。

（哲夫もやゝ、父の說に壓迫されて默つてゐる。父の言葉の最中に、久美子は母と姉との間に來て泣きながら、父の言ふことをきいてゐる）

謙一　お父樣のお說の當否は私には分りませんが。

哲夫　いや僕は反對だ。戀愛といふものはお父さんの言ふやうなそんな、卑しいものではない、人生の原動力です、熱病だとか何とかみんなお父さんのへこ理窟だ。

貞一　さういふ議論もあるだらう。だが久美子でもお前でも俺に養はれてゐる中は、俺の言ふ通りになるより外ないんだ。經濟的獨立がない處には戀愛の自由もないんだよ。

（哲夫、激昂して何か言はうとして言へない）

さだ子（部屋へ入つて來て夫の方へゐざり寄る）でも、貴君、久美子は疵物ですよ。他にお嫁には行けない……

貞一　そんな痕跡なんか病氣の故なんだ。今に病氣が治れば何でもなくなるよ。何も一生の傷でも何でもありやしない。一時の過ちから受けた傷だ。本當に久美子を愛してくれる男だつたら、わけなく許してくれるだらう。……謙一さん、貴方には御苦勞だが行つて斷つて下さい。

哲夫　お父さん、そんな馬鹿な。

さだ子　貴君、そんな。

貞一　いや。斷つて下さい。

（闇の向うにゐた久美子、わつと泣き出す）

貞一（初めて久美子の存在に氣がつき）久美子か。泣きたければ、泣くがいゝ。泣いてゐる中にお前の病氣も醒めるんだ。この熱病に限つて、熱の引かないことはないんだ。今お前はお父さんを恨むだらう。だがお父さんのお前の病氣に對する處置は誤つてゐないつもりだ。お前がこの先ほんたうにいゝ結婚をした時には、お父さんの處置を感謝してくれるのに違ひないのだ。

久美子　いゝえ、妾結婚なんて決してしませんわ。（わつと泣く。）

貞一　お前の熱はまだ可なり重いなあ、もつと泣くといゝ、もつと泣くといゝ、だがお前はその位の熱で身體まで臺無しにするやうな女ではないだらう。お父さんはそれを信じてゐるよ。

（貞一、この白を言ひながら、二階へ上つてしまふ……久美子の泣き聲更に高くなつて後、幕）

兄の場合（一幕）

「戀愛病患者後日譚」

人物

佐々木貞一　ある專門學校敎授。六十三四。

さだ子　その妻。五十三四。

哲夫　彼の長男。文學士。二十八九。

敏子　彼等の長女。他家へ嫁いでゐる。三十一二。

松村謙一　敏子の夫。醫科大學助敎授。

久美子　彼等の次女、嫁がずにゐる二十四。

（凡て、自作「戀愛病患者」の人と同じ。たゞ當時より、六七年時が經つてゐる）

場所

東京の山の手。

時

現代。

佐々木貞一の家。二階建、七間か八間かある。階下には六疊と八疊がつゞいてゐる。舞臺は八疊の間。客座敷に使ふと見え、よく片づいてゐる。床の間には相當立派なものであるらしい南畫の山水がかけてある。靑磁の花瓶に何も花がない。床の間のわきの違ひ棚の下に書棚がおいてあり、その上に和綴の本が體裁よく置かれてゐる。家全體はやゝ古びた感じがする。緣側近くさだ子と敏子と久美子とが首を鳩めてゐる。久美子は手に電報を持つてゐる。

久美子　テツヲドウハン十ジウエノチヤクですつて。

さだ子　どれ！（電報を取つて見る）あゝよかつた。うまく會へたのね。

敏子　家の人が、行つたから、きつと連れて歸つて來ると思つてゐたの。

久美子　でも、兄さんは剛情だからどうかと思つてゐたわ。剛情のところ丈が、お父さまによく似てゐるよ。

敏子　こんなになる迄家では分らなかつたの。

久美子　時々、遲く歸つて來てゐたわ。

敏子　哲夫さんは、學校のときからだつて、隨分眞面目だつたぢやないの。

久美子　今だつて、眞面目は眞面目よ。

敏子　だつて相手は、四谷かどつかの藝者だと云ふぢやないの。

久美子　でも仕方がないわ。愛し合つてゐれば。

敏子　（久美子の寂しさうな容子に打たれ）　さうね。
さだ子　あゝいやだ！　いやだ！　また、お父さまと一さわぎ始まるんだわ。
敏子　さうね。久美ちやんのときなんか、相手がちやんとしたいゝ家の息子さんだつて、あんなに剛情を張り通すんだもの。――山崎さんは、どうしてゐるの。
久美子　（顔をそむけ）　知らないわ。
敏子　學校は出たの。
久美子　出たでせう。
敏子　あれから、半年位して、また向うから話があつたと云ふぢやないの。
久美子　（だまつてゐる）………。
敏子　向うには、十分誠意があつたのにね。
久美子　（うつむいてしまふ）………。
敏子　お父様は何ておつしやつてゐるの。
久美子　何を？
敏子　哲夫さんの家出のことを。
久美子　何ともおつしやらないの。兄さんがいらつしやらなくなつてから、二階へあがつたきりで、御飯のときやつとおりてくるだけよ。
敏子　哲夫さんを家へ入れないと云ひやしないかしら。
久美子　さあ。
さだ子　久美子のときなんか、久美子が泣き寢入りになつたから、圓く治まつたものゝ、今度はどんなになることだらうか。お母さんには分らないね。
敏子　でも、今度は私は哲夫さんに贊成できないわ。へんな藝者を藝者家からつれ出すなんて。
さだ子　でも、よくお前のところへ、手紙をよこしたものだね。
敏子　心中か何かするつもりで行つても、さう安々と死ねなかつたのでせう。
さだ子　おゝ恐い〳〵。
敏子　お父さんの頑固なのが、分つてゐるので絶望的になるのよ。
さだ子　お父さまも、お年のせゐで、前よりはよつぽどよくなつたけれども、こんなことになると相變らずだらうね。
敏子　でも、今度なんか仕方がないわ。四谷の藝者なんてきつとみずてん藝者よ。そんなものどうしたつて、家へ入れられないぢやないの。哲夫さんによく話して思ひ切らせるのね。
さだ子　だから、私は二三年前から、はやくお嫁を〳〵と云つてゐるのですよ。でも、あれが久美子にたいへん同情して、久美子が結婚するまでは結婚しないと云つて居

るものだから、到頭こんなことになつてしまつたの。
敏子　此間の地方裁判所の判事とか云ふ口なんか、隨分いい口ぢやなかつたの。
さだ子　でも、久美子がすゝまなくつてね。
敏子　久美ちやんも、いゝ加減に考へ直していゝ所があつたら行つたらどう？
久美子　……。
敏子　哲夫さんが、よく云つてゐたぢやないの。お父さんに對する面當に、媒妁結婚なんかするな、なんて。あなたも、まさかそんな氣ぢやあるまいだらうね。
久美子　（うなづく）……。
敏子　二十四なんて、大切な年だわねえ。もつとよく考へたらどう？
さだ子　わたしは、子供が三人しかないんだが、どうしてその少い子供で、こんなに苦勞するのだらう？
久美子　すみません。
（三人だまつてしまふ。しばらく時が經つ）
さだ子　ほんたうに、謙さんにはすまないわねえ。久美子のときと云ひ、今度と云ひ、迷惑なことばかり頼んで。
敏子　お母さん、久美ちやんのときのことは、なるべく云はない方がいゝわ。家の人なんかあれでおツちよこちよいだから、こんな世話をやくのは一番欣んでゐるかも知れないわ。
さだ子　まあ！
（自動車の音がはるかに聞える）
敏子　（聞耳を立てゝ）家の人かも知れないわ。
久美子　どうして。
敏子　家の人、よくタクシイにのるのよ。
（自動車の音、だん〳〵近くなる。戸外に止まつたやうな氣勢がする。敏子そは〳〵と立ち上る）
敏子　きつと家の人だわ。（玄關へ行く）
さだ子　（不安さうに）どうなることだか。
久美子　兄さんは、きつと反抗なさるわねえ。
さだ子　なるべくお父さまの、お氣にさはらないやうに、圓くをさめたいものだね。
久美子　でも、兄さんのことだから、さつとさうは行かないわ。
（敏子あわたゞしく、這入つて來る）
敏子　やつぱり家の人よ。
久美子　兄さんは。
敏子　歸つて來てよ。お父さんと、あくまで戰ふなんて、氣違ひのやうに激昂してゐることよ。
さだ子　まあ。
哲夫　（姿は見えないで）いや、お父さまにすぐお目にか

かりますよ。僕は、何もあなたを介して了解をして貰はねばならないほど、わるいことはしてゐないのです。

謙一　(同じく姿は見えないで)まあ、さう云つたものぢやない。氣をしづめたまへ。今、君がいきなり會つたら、どんなことになるか分らないよ。先づ、僕がお父さんに會つてよく話をするから。

(二人云ひ爭ひながら、這入つて來る)

哲夫　いや、いゝです。僕は……(ふと母や妹の姿を見てだまる)

さだ子　まあ!

久美子　兄さん、お歸りなさい。

哲夫　(母に)心配をかけてすみませんでした!　かんにんして下さい。(妹に)久美ちやん、かんにんしておくれ、兄さんがあやまる。

久美子　まあ。

哲夫　(敏子に)姉さん、いろ〳〵兄さんにめいわくをかけたのです。あなたからも、よく感謝して置いて下さい。

敏子　でも、よかつたわ。今も三人で、どんなに心配してゐたか分らなかつた。

謙一　ね、哲夫君、みんながあんなに心配してゐるのだから、此上お父さまと衝突をするなんて、お母さんや久美ちやんにわるいぢやないか。

哲夫　だつて、親父が親父なんだからな。

謙一　まあいゝよ、とにかく、君は彼方へ行つてゐたまへ。お母さまともよく相談して、お父さまにお話するから。

哲夫　いや、僕は凡てを自分で解決しますよ。たゞ、あなたに來ていたゞいたのは、警察の方で僕達が、心中でもすると思つて、引取人が來ないと解放しなかつたからですよ。

謙一　まあ、僕に委したまへ。ねえ、久美ちやん、兄さんを彼方へ連れて行つてくれないか。

久美子　兄さん、後生だから、お部屋へいらつしやいませ。

哲夫　あゝ、久美ちやん、俺はつく〴〵さう思つたよ。久美ちやんの問題のとき、どうしてもつと、親父と戰はなかつたかと。あのとき、もつと強く戰つて置けばこんなに、久美ちやんを不幸にしなくつても、すんだんだ、あやまるよ、俺は……(哲夫手をつかうとする)

謙一　まあ、いゝよ。ねえ、彼方へ行つてゐたまへ。

久美子　いらつしやいませ、兄さん。

哲夫　あゝ行くよ。久美ちやんが、云ふなら行くよ。だが、親父とはちつとも、妥協はしませんよ。久美子のときの敵討もしてやるのだ。ぐづ〳〵云へば、いつだつて出て行くのだ。

久美子　いらつしやいませ。

哲夫　うむ。
（兄妹出て行く）
敏子　どう、どんな女？
謙一　とても、たいへんな女だ！
敏子　いゝ器量？
謙一　どうして！
敏子　藝者でも、きれいぢやないの？
謙一　あれでよく、藝者が出來るね。
敏子　まあ！　いくつ位。
謙一　とてもすさんでゐて、ふけて見えるが、あれで二十四五かも知れないよ。
敏子　まあ。
謙一　たいへんな女だよ。とても。
敏子　さう。困つたわねえ。
謙一　サーさんと別れる位なら、死んでしまふと云つて、俺の前でカミソリを振り廻すのだよ。初對面の俺の前で。
さだ子　まあ。それを哲夫は何と云つてゐるの。
謙一　それをまた哲夫君が、ひどく感激してゐるのだから、お話しにならないよ。さう思ふと、久美ちやんのときなんか、引取りに行つたつて、どれほど氣持がいゝかしれなかつたよ。あのときは、戀人同志の純情に、此方だつてホロリとなつた位だからね。今度はこり〳〵した。

さだ子　まあ。いろ〳〵御苦勞でございました。それで、哲夫は何と申してゐますの。
謙一　お母さんに、御挨拶も忘れてゐました。
さだ子　いゝえ。どういたしまして、此方こそいろ〳〵。
謙一　哲夫さんは、女が可哀相だから、どんな犧牲を拂つても、一しよになつてやると云ふのですよ。つまり、女は一しよに死んでくれと云つたらしいんです。それで日光まで行つたのだけれど、いよ〳〵となると死ねもしないし、死ぬ位なら一しよにならうと、哲夫君が云ひ出したらしいのです。
敏子　死ぬなんて云ふの、手ぢやない？
謙一　いや、手でもないらしいんだ。それほど、頭がある女でもないんだよ。たゞ分らず屋で、ヒステリーで、熱情のかたまりのやうな女だ。
敏子　ぢや、女の方もほれてゐるのね。
謙一　それは、むろんだよ。たゞ、あんな女、とても、話にも何にもならないよ。
敏子　哲夫は、どうかしてゐるのね。
謙一　全く一時の迷ひさ。お父さんの所謂、病氣だよ。熱にうかされてゐるんだよ。哲夫さんは、美學をやつたんぢやないのですか。
敏子　さうよ。

謙一　それで、あんな女が美しく見えるのかしら。
敏子　あなたが、さう云ふのなら、よつぽどねえ。
さだ子　まあ、そんな女ですか。
謙一　あんな女は、どんな手段に依つてゞも、あきらめさせるのですね。
敏子　ぢや、哲夫さんは味方なしですね。
謙一　相手を一目見て御覽、とてもあんな女と一しよにさせるなんて。（さだ子に）一つお父さんとも、よく御相談したいですね。御都合はいかゞでせうか。
さだ子　はい畏りました。ぢや、一寸、都合をきいて參りませう。（さだ子、やゝ不安らしく座敷を出てゆく）
謙一　お父さんと、御相談していゝ方法を取るんだな。
敏子　さうですね。でも、そんなに思ひつめてゐるのでしたら。
謙一　哲夫君は、初めての女だから、あんなにのぼりつめてゐるんだよ。
（二人は、しばらくだまつてゐる。さだ子這入つて來る）
さだ子　すぐに、降りて參るさうでございます。
謙一　あゝ、さうですか。
敏子　お父さまの御機嫌は。
さだ子　お父さまの御機嫌ばかりは、昔から妾にわからないんだよ。
（暫く不安な沈默、やがて二階の階段を降りる音がする。開けられた襖の間から彼等の父が出て來る。眞白な頭、色の白いやゝ感情的な、娘達の美貌が、なるほどとうなづけるほど、整つた顔の老人。息子の家出について何も考へてゐないやうな悠々たる態度を示す）
貞一　（謙一に）よう、暫く。
謙一　暫く、いつも御無沙汰ばかり致しまして。
貞一　いや、それはお互さまだ、いつも達者かな。
謙一　はい、お蔭で。
貞一　學校の方は、毎日行つてゐる？
謙一　はい、毎日行つてゐます。
貞一　此間は、おめでたう。いよ〳〵論文が通つたさうで。
謙一　いや、恐れ入ります。
貞一　一度お祝ひに行かうと思ひながら、つい。
謙一　いや、それには及びません。
貞一　この間、恩賜賞を授けられたのはあれは、あなたの方の……
謙一　山路博士ですか、えゝさうです。
貞一　癌の研究も、いくらか目鼻がついたやうですね。
謙一　（肝心の問題にふれる機會がないので、イラ〳〵しながら）ついたやうです。でも、私なんかまるつきり。

貞一　なるほど全然科が別ですね。
謙一　お父さま、實は哲夫さんのことで、一寸お話がしたいのですが。
貞一　うむ、そんなことをさだ子が云つてゐました。
敏子　妾は彼方へ居つて居ませう。
謙一　うむ、それがいゝ。
（敏子去る）
謙一　外でもありませんが、哲夫さんをおつれして歸つたのですが。
貞一　それは御苦勞。どうもとんだ奴で。
謙一　それで、御承諾もなしにとにかく家へお連れして歸つたのですが。
貞一　仕方がありません。長男ですから。
謙一　どんな婦人と一しよだつたか、御存じですか。
貞一　（暗い顏になり）知つてゐます。向うの藝者屋の方から、私にかけ合ひがありました。
謙一　さうですか。それは、おどろきました。
貞一　………。
謙一　さぞ、御立腹でございませうが、哲夫君としては生れて初めての失策ですからね、これは一つ御寛大に考へていたゞきたいのですが。
貞一　………。

謙一　哲夫君は、今たいへん激昂して居られるのです。お父さんが、何かおつしやると、すぐ又家を飛び出すかも分らないと思ふのです。それで、何もおつしやらないで、ゆるしていたゞきたいのです。
貞一　何も云はないと云ひますと。
謙一　哲夫君は、かう云つてゐるのです。その女と、一しよになることを、父が承諾すれば家に止まるが、でなければすぐに家を出るとかう云つてゐるのです。ですから、貴方が頭から、反對なさると、どんなことになるかも分らないのです。
貞一　（腕をくんで考へる）………。
謙一　とにかく、當分はだまつていたゞきたいのです。そのうち、私がどうにかして、相手を思ひ切らしてしまひたいと思ふのです。
貞一　（腕をくんで考へる）………。
謙一　今度は久美子さんの場合と違つて、私はお父さんと全く同意見です。たゞ、哲夫さんの身體に傷のつかないやうに、相手と別れさせるには、どうしたらよいか。それを考へたいと思ひます。哲夫さんの場合こそ、お父さまのおつしやる通り、全くの病氣です。未熟の果物どころか、腐つてゐる果物をたべてゐるのですから、とても見てゐられません。あんな女は、どんなことがあつても

思ひきらせなければなりません。

貞一　だが、思ひ切らすことが出來ますかな。

謙一　えゝ、これは意外なお言葉ですな。お父さまは、どんな戀愛でもすぐ熱がさめると云ふ、お説ぢやなかつたのですか。

貞一　いや、俺はさう思つてゐました。そして、久美子に相手を思ひ切らせるために、あんな亂暴な處置をしました。だが、俺の處置はあやまつてゐた。あれから、もう足かけ八年たつてゐる。だが、久美子はまだ思ひ切つてゐませんよ！

謙一　……。

貞一　尤も、當人は思ひ切つたやうな顏をして、おとなしく働いてゐる。だが、本當は決して思ひ切つてゐないのです。恐らく一生思ひ切らないのでせう。思ひ切つてゐない證據に、何だかさびしさうなかげを持つて、俺の目の前をいつもうろ〳〵してゐるやうに見えるのです。

謙一　……。

貞一　わしが思つてゐたやうに、人間の心は單純ぢやないんですね。戀愛は、たしかに病氣だ。今だつて、さう思つてゐる。だが、どうとも出來ない魂の病氣だな。下手にそれを處置すると、內訌して一生涯の病氣にしてしまふらしい。

謙一　久美子さんの場合は、御同感です。だが、今度の場合はとても、たいへんな女ですからな。

貞一　いや、そんなことは、たいへんな男だと思つたのだ。俺も、山崎をあのときは、第三者の考へることだ。だが今から考へると、山崎と一しよにしてやつた方が、どれ丈あれにとつて、幸福だつたか分らないと思ふんですよ。

謙一　いや、それは久美子さんの場合です。哲夫さんの相手は、みずてんで、ヒステリイで、しかももう二十四五の婆々で……。

貞一　いや、第三者からみれば、どんな戀愛だつて、馬鹿に見えるものです。

謙一　お父さん、何をおつしやるのです。哲夫さんが、無我夢中になつて、あんな無人格な淫賣藝者に……。

貞一　いや、謙一さん。私は、こはくなつたのだ。戀愛といふ病氣は俺が思つたより、もつと怖しい病氣なんだ。とても、人間の手で療治の出來るものぢやないんだ。そしてこの病氣にかゝつてゐるときは、人間は一番幸福らしい。

謙一　お父さん、あなたがそんなことを、おつしやつちや困りますね。

貞一　俺は、久美子ですつかり、こりてしまつたのだ。どうも、戀愛は病氣かもしれない、が人間はこんな病氣で

もなければ、無我夢中の幸福は味へないのだ。それを無理に癒してしまふと、却つていつまでもその幸福が思ひ切れないらしい。

謙一　ぢやお父さんは、哲夫さんを許さうと云ふのですか。

貞一　許すのぢやない、仕方がないと思ふのだ。仕方のない病氣だ。たゞ、そのまゝにして置くより仕方のない病氣らしい。

謙一　お父さん、そんな馬鹿な。

貞一　いや、わしは此六七年考へたよ。

（閾の向うにゐた久美子、わーと泣き出す）

貞一　（初めて、久美子の存在に氣がつき）久美子か、ゆるしてくれ。そんなに、泣かないでくれ。泣いてお父さんをいぢめないでくれ。お父さんが、わるかつたことはよく知つてゐるんだよ。それより、行つて哲夫をよんで來てくれ。よく、あいつの話をきいてやらう。出來ることならあいつの希望を容れてやらう。同じ問題であいつまで、臺なしにするわけには行かないからなあ……。

（貞一、腕をくむ）

――幕――

舞臺に立つ妻（一幕）

人物

富井雄一郎　會社員。
富井雪枝　新劇協會女優。
召使の女

時及び所

現代・東京の郊外。

情景

女優富井雪枝夫妻の寢室。障子の間から秩父の連山が蒼白な空に浮彫のやうに劃られて居るのが見える。山の手線の電車が遙かの隔たりを通るにさへ搖れるので、此家が郊外によくある住む目的ではなく、家賃の爲に建てられた家の一つであることが分る。壁に華麗なボンネットが懸けてある。之は雪枝が舞臺に用うる爲、ある西洋婦人から借りたので、今の所周圍の質素に對する唯一の反抗である。

雪枝は蒲團から上半身を露出させて新聞を見て居る。彼女が何だか分らない原因でニッコリ笑ふと同時に柱に懸つて居る時計が鳴り出す、もしも好奇な觀客が夫を數へたら十一鳴り續けたことが分つたゞらう。召使がヒョッコリ次の間から顏を出す。

召使　奧樣、あのお晝の總菜は？

雪枝　（新聞から目を放さないで）お前に委せるわ、夫よりか旦那さんは何處へ行らつしやつたの？

召使　大久保の植木屋さん迄行らつしやいました。

雪枝　また植木屋かい、始終植木ばかりいぢつて居るんだね、植木なんか何處が面白いんだらう。會社で皆にヘイヘイ頭を下げて居るもんだから、植木丈でも自由にしたいと云ふんだらうねきつと。

召使　まあ、奧樣はひどい事を仰つしやいますのね。

雪枝　だつて全くさうなんだから仕樣がないぢやないか、植木より外にあの人の自由になるものがあるかね。植木いぢりが全くあの人の柄にあふんだよ。

召使　あの萬年青を大切に遊ばしますことね、昨日なんかも萬年青が大きくなり過ぎたと云つてこぼして居らつしやいましたわ。

雪枝　さうかい。萬年青だつて、あの人の思ひ通りにはならないのかい、それは面白い事ね。

召使　奧樣が芝居のお稽古に行らしつた後なんかも、植木ばかりいぢつて居らつしやいましたわ。

雪枝　さうかい。（と云つたまゝ新聞を見詰めて居る）
召使　今日も何か奥様の事が出て居るのでムいますか。
雪枝　さう／＼何時迄も私の事ばかり書くものかね、もう
　お前千秋樂の日から四日目だよ。
召使　左樣でムいましたね。
雪枝　新聞なんて云ふものは流行兒の外は見向きもしないんだよ、內の人なんか一生かゝつたつて六號活字にだつて出やしないから。
召使　左樣でムいましやうかね。
雪枝　人間も新聞に出るやうにならなければ駄目よ。
召使　でも惡い事をしたのぢや駄目ですわね。
雪枝　そんな事は云はなくつても分つてるぢやないか、新聞に出る人はエライ人か、いけない人か孰ちらかに極つて居るんだから。
　（雄一郎蘭を植ゑた小さい鉢を左手に持ちながら庭の方から近づいて來る）
召使　あらお歸り遊ばせ。
雄一郎　（雪枝がまだ床を離れないのを見て）　お前何時迄寢てるつもりなんだい。
雪枝　今起きようと思つて居た所なの。
雄一郎　何時だと思つて居るんだ、十一時過ぎぢやないか、お客でも來て見ろ。

雪枝　お客なんか今迄來た例がないぢやありませんか。ちつと訪問でもして呉れる人があるやうになりたいわ、之ぢやまるで世間から忘れられて居るんですもの。やつぱり有樂座の樂屋が戀しいわ。
雄一郎　朝つぱらから何を下らない事を云つて居るんだ。女は世間から忘れられて居るのがいゝんだ、世間からワアワア云はれて居る女に碌な奴がありやしないぢやないか、不見轉の藝者だとか、見え坊の貴婦人だとか、新しがつて居る女だとか……。
雪枝　何うしてのつけから女優だとかと仰つしやらないの。貴君は廻りくどい事ばかり云つて居るのね、どうせワアワア云はれてる女はいけないでしやうよ。でも其處に居るかとも云はれない男よりは增だわ。男が社會から何とも云はれないのは隨分心細いものね。
雄一郎　（蒼白になつて）　世間から何とも云はれなくつたつて、確な道を步んで居るものは澤山あるんだ。それに誰にも知られない平凡な生活を暮すのは、我々の多數の運命なのだからね。私は平凡な道徳を守つて平凡に生きて平凡に死にたいのだ。何も人から知られる必要はない。自分さへ幸福であればいゝんだ。私はお前が此の頃妙な野心を起して居るのは實に苦痛だ。舞臺に立つて公衆の視線にさらされるなんて體のよい肉體提供ぢやないか、

女優と云つたら藝者の毛の生えた位のものにしか、世間の人達は思つて居ないんだ。

雪枝　藝術と云ふ事の分らない貴君が、女優論をやるなんて看板畫工が印象派を論ずるやうなものですわ。女優は皆不品行だなんて思つて居るのは、三面記者主義と云ふのよ。色氣拔きでは人生を解釋し得ない人達のやることですわ。

雄一郎　(急に大眞面目になつて、懷から折りたゝんだ新聞を出しながら)それはそれとして兎も角お前は私の妻なんだから、こんな噂は立てられて貰ひたくないね。

雪枝　えゝつ！　何か出て居るの、(新聞を夫の手からもぎ取るやうにして讀み始む)おや！　霜村と雪枝だなんて嫌な題だこと……(默つて讀んで居る)まあひどい！まるで中傷だわ、私と渡邊先生と怪しいなんて！、渡邊先生の人格を全然知らないで、まあひどい！

雄一郎　私はひどいとは思はないがね。

雪枝　何ですつて！

雄一郎　當然ぢやないか。

雪枝　ぢや貴君私を疑ぐつて居るんですか。

雄一郎　そら夫としてお前の貞操は信じたい。然し世間がそんな疑を挾むのも全く當然だと思つて居るんだ。世間は他人の善い事は仲々信じないが、惡い事ならどんな無根なことでも信じたがるのだ。女優などゝ云ふ商賣は社會の凡ての疑惑と誤解とに洒されて居るのだからね。こんな醜聞を避ける爲には、舞臺から退くのが一番いゝんだ。どうだ思ひ切つて廢して呉れないか、私としてもこんな噂が新聞に出るのは全く堪らないからね。

雪枝　△△新報なんて、こんな惡德新聞がどんな事を書かうと書くまいと、私の故ぢやありませんよ。

雄一郎　譬へ惡德新聞だらうが、堂々と發表した以上、お前は永久に注意人物だ、お前の貞操は社會に疑はれて居るのだぜ。

雪枝　世間が何う思はうと、私はちつとも疚しい所はないんですからね……。

雄一郎　私のやうな凡人はそんな絶對的の事實よりも、評判の方が大事だ。こんな評判さへ立てゝ呉れなきやいゝんだ。またこんな評判が立つた以上、私はお前をこのまま舞臺へ出すことは出來ないからね。手取り早く云へば私は廢して貰ひたいのだが。

雪枝　初、私が女優になる時、あんなに御約束してあるぢやありませんか。私は子供がないから藝術を愛しよう、そして小供から力を得る代りに、藝術から力を得ようとあれ程云つたぢやありませんか。夫だのに、こんなケチ臭い惡德新聞の記事なんかを信じて、私の望多い未來を

壞さうとなさるのですか。貴君は自分の妻に世間が與へたあれ程の讚嘆を嬉しいとは思はないのですか、妻の藝術的成功がお氣に召さないのですか。

雄一郎　……。

雪枝　私は芝居の爲に、貴君を疎略にしたと云ふやうな事は、少しもないぢやありませんか。私の收入を當にして、家も移つたり下女も置いたのぢやありませんか。今になつて女優を止せなんて……。

雄一郎　お前に云つて置くが、藝術家としてのお前は私に何の關係もないんだ。女優としてのお前は赤の他人樣なんだ。私はお前を全人格的に妻としたいんだ。私は妻としてのお前と結婚したのだ。

雪枝　所が、私には妻としての私の外に、人間としての私があつたんですね。まあ「人形の家」を素で行つて居るやうですが、人間としての私が女優になつたつて許して下さつてもいゝぢやありませんか。

雄一郎　妻としてより以外のお前は全く私に用がないんだ。また私は妻としてより以外にお前を見ることは何うしても出來ないんだ。私はお前が妻としての德義を守つて吳れることを望むのだ。新聞に出されるなんて……。

雪枝　まだ新聞の事を云つて居らつしやるの。あんなヘツポコ新聞が、どんなに書き立てゝも知れたものだわ。有樂座の樂屋で、逢つてやらなかつたもんだから腹癒なんでしやうよキット。

雄一郎　兎も角私はお前が廢業することを要求するね。

雪枝　そりや駄目だわ、だつてもう私、芝居に眞劍になつて居るんですもの。公衆が私に與へて吳れた讚辭に醉つてしまつたんですもの、私は芝居の爲になら何でも捨てるわ。

雄一郎　ぢや俺をもかい。

雪枝　貴君が邪魔をなさるのなら……。

雄一郎　夫が妻としての言葉かい。

雪枝　だから、先刻から人間としての私もあると云つてるぢやありませんか。

雄一郎　お前は私を無視するのかい。

雪枝　貴君が私を無視なさるのと同じ丈はね。

（下女這入つて來て小さい名刺を出す）

雪枝　竹村華風！　××新聞の演藝記者だわ、家へなんか訪ねて來て困つてしまつたわ。汚くつて狹くつて逢ふ所も通す部屋もないんですもの、恥しいわ。

雄一郎　新聞記者なんか斷つておしまひなさい。逢ふ必要が何處にあるんだ、居ないと云つたらいゝぢやないか。

雪枝　でも有樂座の樂屋で、二三度お目にかゝつた方だからお氣の毒だわ、でも通す所はないし、（下女に）あの

ね病氣で臥て居ますと云つて斷つて吳れないか。

召使　はい。（と云つて玄關の方へ行く）

雄一郞　新聞記者なんか何の用があつて來るのだらう。

雪枝　知れてるぢやありませんか、日本一の女優富井雪枝を訪問に來たのですわ。

（召使の女歸つて來る、右の手に一封の手紙を持つて居る）

召使　あの今朝△△新報などに出ました奧樣の中傷の記事に就ていらしつたのですつて、あれと同じ事を書いた投書が、××新聞へも來ましたからお目にかけますつて、之を置いていらつしやいました。

雪枝　えゝ、之がその手紙！　ぢや××新聞は私を信じて居るから出さなかつたのだね。それならお目にかゝるのであつたのに、もうお歸りになつたかい。

召使　はい。

雪枝　一體何處の誰なんだらう、恨を受ける覺は毛頭ないのに……（ぢつと讀んで行く内にふと何かの疑惑に囚はれたやうに夫の顏を見る、雄一郞の顏は蒼白に轉じかけて居る）……誰だらうこんなひどい中傷をするのは（書體を見詰めて居る内に何か思ひ出したやうに）　貴君この△△新報は何處から持つていらしつたの？

雄一郞　買つて來たのだ。

雪枝　大久保へ行く迄に新聞屋がありますか。

雄一郞　新宿迄行つたのだ。

雪枝　△△をワザ／＼買ふ爲にですか。あんな新聞を何の必要があつて買ひに行くのですか。

雄一郞　そりやお前の事が出て居ると云ふ事を聞いたからだ。

雪枝　誰に何處で？

雄一郞　そんな事は云ふ限ぢやないぢやないか。

雪枝　その位の事が云へないんですか。

雄一郞　そんな事を聞いて何にするのだ。

雪枝　何にしてもいゝから云つて下さい。

雄一郞　云ふ限に非ずだ。

雪枝　（キツトなつて）さうでしやうよ。云へないのが當然ですわ。私の中傷記事が△△に出て居ることは誰よりも貴君が一番よく知つて居た筈ですもの。貴君!!!　此の手紙はね、富井雪枝の夫たる富井雄一郞が書いたんです。

雄一郞　何だと！　馬鹿な事を云ふな。

雪枝　いゝえ！馬鹿な事ぢやありませんよ。貴君でなくつて誰が書いたのです。手蹟こそ違へてあるが七年連れ添うて來た私は詐かれませんよ。今から考へれば、貴君が△△を買つて來たのが怪しいと思ふのです。貴君は自分の投書が、××に出て居なかつたものだから、新宿迄わ

ざわざ△△を買ひに行つたのです、でなければ何だつて緣もゆかりもない新聞をあんな所へ迄買に行くのです。

雄一郎　お前は何を血迷つて居るのだ、夢にも知らないことだ。

雪枝　貴君こそ血迷つてるぢやありませんか、現在の妻を中傷するなんて、そんな人が日本中にまたとありますか、自分の妻が他人と怪しいなんて、自分で廣告する馬鹿が世の中にありますか。

雄一郎　何と云つても俺は知らない。

雪枝　貴君が知らなくつても、私は確信して居るんです、……あゝいゝ事があるわ。（と立ち上つて次の間の夫の書齋の机の引出しから封筒を取り出して來る）さあ御覽なさい、スツカリ同じ封筒ぢやありませんか、まあ貴君は氣でも違つて居るのですか、現在の妻を中傷して耻をかゝせるなんて……。

雄一郎　……。

雪枝　自分で中傷して居ながら、それを種に私を責めるなんて隨分蟲のいゝ話ね。蟲のいゝどころぢやない、惡人です。昔のお家騷動に出て來るやうな惡人です。現在の妻を陷れるなんて夫程憎いんですか。私は貴君と結婚してからもう七年になりますが、一度だつて貞操にかゝはるやうな事は、しなかつたつもりです。そら私はお轉婆で、皮肉屋ですけれど貴君に裏切つた事は、まだ一度だつてないぢやありませんか。女優になつてあんなにワアワア云はれたつて、私は貴君を捨てようなんて夢にも思つて居なかつたんです。此先どんなに偉くなつても、昔の夫を捨てるなんて、そんな大それた事はしないつもりで居たのです。それに貴君は私の醜聞を流布させるなんて、そんな人が世の中にありますか。

雄一郎　そりやないかも知れん。

雪枝　「そりやないかも知れん」なんて、ぢやそんな事を何うしてするのです。

雄一郎　俺のやうに流行兒の女優を妻にする者が外にないやうに、あんな事をするものは外にないかも知れんよ。

雪枝　ぢや貴君は女優で評判のいゝのが嫌なのですか、自分の現在の妻が……。

雄一郎　お前にもまた他の何人にも、流行兒の女優を妻にして居る苦しみは分らないだらう。私のやつた事は、他の人達の理解の外にあるかも知れない。然し俺は行爲を是認して居るんだ。俺は苦しくつて堪らないからやつたんだ。

雪枝　自分が苦しいからつて最愛の妻を呪詛するのですか、それでも、貴君は私に愛があるのですか。

雄一郎　あるとも！　俺はお前を愛して居ればこそこんな

事をやるんだ、お前を愛して居ればこそお前が舞臺に出るやうになつてから、苦しみ續けて居るのだ、お前が舞臺に立つやうになつてから、お前は俺一人の物でなく、世間が皆お前に對して所有權を有つて居るんだ。愛は專賣局のやうに專有を要求するものだ。俺はお前を自分一人のものにして置きたい。お前が女優になる迄はお前の尊さが分らなかつた。私に對して何れ程、價値があるものか分らなかつた。世間がお前に對して拂つた注意や尊敬は、俺の心に潛んで居たお前に對する愛を、スツカリ目覺ましてしまつた。競爭者が出て戀する者の熱度が高調されるやうに、世間がお前に拂つた賞讃はお前を專有したいと云ふ私の欲求に油を注いだ。私は私の掌中にあるお前を、世間が奪ひに來て居るやうに思つたのだ。

雪枝　まあ變な燒餅ですね。

雄一郎　私はお前が女優になつたゝめに、私に提供して吳れる物質上の代償などのため、少しでもお前が私を離れることを辛抱し得る程墮落しては居ないよ。お前が世間からチヤホヤ云はれるのは私にとつて苦痛になつた。私は每夜々々有樂座の三等へ行つてお前を蔭ながら監視して居たのだ。そしてお前に對する喝采が起る度に、名狀しがたい淋しさと苦痛とを感じた。お前が世間から賞讃せられる丈私は苦痛だ。

雪枝　まあ弱蟲ね。

雄一郎　そら弱いかも知れん、俺がお前を中傷したのはなるべく世間をしてお前を捨てさせるためなのだ。私はお前が女優としてどんな名譽をあげようと、私にとつては嬉しくもなければ幸福でもない。私は藝者や女將の亭主のやうに、妻の放埒を許す代りに物質上の愉悅を得ようと云つたやうな、賤もしい心には決してなれない。私はお前を妻として愛したいのだ。お前の妻以外の部分を、破壞にかゝるのも當然なのだ。私は自分の行爲を是認して居る、恥とは決して思はん。

雪枝　まあ何と云ふ利己主義でしやう。私はもう、妻などと云ふ狹い柵から脫け出て居るんですから、貴君がそんな事をするのは、逃した小鳥を追ふやうなものですわ。妻より以外のものにはなれない女が澤山あるでしやう、貴君はそんな女が向いて居るのです。私は人間としての私の天分を傷けて迄も、貴君の妻になつて居ることは出來ませんから。まだ二回しか舞臺を踏まないのにこんな事をなさるのなら、之から先どんな事をなさるかも知れたものぢやありませんわ。私もう決心しましたわ。

雄一郎　ぢやお前は俺を捨てるつもりかい。

雪枝　（冷靜に）　さうです。

雄一郎　お前は夫よりも芝居が大事なのか。

雪枝　妻としてよりも、人間としての天分が大事ですわ。
雄一郎　お前は七年も連れ添うた夫を捨てるのか。
雪枝　二十五年生きて來た人間が大事だからです。
雄一郎　お前はお前に捨てられた俺が生きて行かれると思ふのか。
雪枝　そんな感傷的な事を云ふのはおよしなさい。あなたのお好きな妻としての女なら、其所にも此所にも蠢々して居りますわ、然しその代りに私も古風に再婚丈はしませんよ、妻としての私は今日死んだ事にして置きましやう。之が小さい時から許婚であつた貴君に對する最後の好意ですわ、之からは私は人間として生きて行きます、最も貴い藝術家として生きて行くのです。
雄一郎　（狼狽して哀願的に）雪枝、俺が惡かつたから思ひ返して呉れ。
雪枝　貴君も惡くもなければ思ひ返すこともありませんわ。貴君の好きな盆栽がグングン伸びてしまつたら貴君は廣い地上へ移すでしやう、妻なんてやつぱり盆栽のやうに不自然な位置なんですから、私も廣い地上へ移るのです。
雄一郎　俺はお前を失ふに堪へない、お前の云ふ通りにするから思ひ返して呉れ。
雪枝　もう駄目ですわ、云ひ切つてしまつたんですもの。
雄一郎　いくら懇願しても聞かんのか。
雪枝　もう貴君の自由になる盆栽ぢやありませんよ。
雄一郎　お前は女優生活の華やかさに醉うて俺を捨てるのか。
雪枝　さうお考になるのがお望みならそれでもいゝのですわ。
雄一郎　どうしても私はお前を離さないから。
雪枝　人間になつた私は自由ですよ。七段目のお輕ぢやないが誰のまゝにもなりませんよ、どれ支度して姉の家へ一旦引きとりましやう。
雄一郎　こんなに云つても聞かないのか。
雪枝　そんな聲で威したつて駄目ですよ。
雄一郎　（逆上したやうに）何！　いよ〳〵出ると云ふのなら、お前を殺して俺も死ぬから。
雪枝　オホホ、あなたも流石は女優を妻にして居た丈、お芝居が上手ね、貴君に人が殺せたらお汁粉が辛くなりますよ。
雄一郎　（全く逆上して）何だと！　（馳けて行つて自分の机から西洋剃刀を持つて來る）
雪枝　（やゝ蒼白になりながら）何をなさるの？　お髯でも剃るのですか。
雄一郎　おのれ！　（と云つて飛びかゝる）

雪枝　（初て恐怖に囚はれたやうに）　あれ！　貴君何をするんですか

（雄一郎は雪枝のたぶさを掴んで剃刀を咽喉に擬したがすぐと勇氣を失つてためらつて居る。ふと思ひついたやうに雪枝の髪を切り落す、そして髪を持つたまゝグッタリと坐つてしまふ、雪枝はその間割合に平靜に弱い抵抗を續けて居たが、身體が自由になると、次の間へ行つて舞臺で使つた洋服を着て來る。眞蒼な顏をして坐つて居る雄一郎の顏を後目に見ながら、婦人帽を被る。そして庭へ下りて靴をはいてしまふと振り返つて）

雪枝　その髪は妻としての私の記念として貴君に差し上げますわ。序に云つて置きますが、舞臺にはかづらと云ふものが厶いますから、そんな髪なんか女優としての私には何の價値もないものですからね、さよなら。

（雄一郎は取殘されてポンヤリとして居る）

——幕——

世評（一幕二場）

A morality

——よしと云ひあしと云はれつ難波がた
うきふししげき世を渡るかな——

人物　所　時
凡て知れず。

情景一

路のほとりに綠の草の生えた廣場があり、その廣場に一群の隊商が休息してゐる。遠景にアラビア風の都會。隊商の中に、隊長と覺しく骨格逞しき老年の男がゐる。妻を伴つてゐる。妻は楚々として美しき女。隊商を圍んで多くの見物人が居る。見物の男女幾人とも知れがたし。

見物の男一　何處から何處へ行く隊商だ。

男二　知らない。つひぞ見知らない人種だ。

男三　いや、俺は知つてゐる。この人達は、西の方から來たのだ。

男一　西の方からつて。

男三　西方の國からだ。紅海に近いツクセン人だ。

男一　なるほど。道理でみんな色が黑い。

男二　だが、あの隊長の妻丈は美しいな。バグダッドにだつて、あんな美しい女はゐない。

男五　少しお出額だが、聰明そのものと云つた顏だ。あの眸、理智に輝いてゐる美しさつたらない。俺は、あんな女を妻にほしい。

男三　あはゝゝ。あの女丈は、ツクセン人ぢやないんだ。あの女はバグダッドの貴族だ。

男一　なに貴族だつて。噓を云つちや困る。貴族の娘が、どうしてあんな隊長の妻になつたのだ。

男三　それは、お前バグダッドでも、評判になつた話だ。あの娘の兄が、あの娘を賣つたのだ。

男一　なるほど可愛いさうに。

男三　五つのダイヤモンドと六つの黑眞珠とが、あの娘の價だと云つてゐる。

女一　可愛さうに。貴族の娘に生れながら、賣られるなんて、ほんとに不幸せな方ね。

女二　おや！　御覽。あの女が足を動かしたよ。おや、足に何か光る物が付いてゐる。おや！　鎖だ！　鎖だ！

女三　銀の鎖だよ。

女四　裝飾品のやうに、手奇麗に美しく出來てゐる。でもやつぱり鎖は鎖だわね……。
女五　でも、胸にはあんな美しい胸飾りをつけてゐる。
女六　でも、鎖が足に付いてゐては、可愛さうだわねえ。
女一　悲しさうにしてゐるわねえ。涙が絶えず溢れてゐるやうな眸をしてゐるわねえ。
女四　可愛いさうに。あれでは妻だか女奴隷だか分らないわねえ。
男三　もう〳〵金で買つた丈に、安心が出來ないんですよ。それに年が、親子ほどにも違ひますからね。
女二　いくら違つてゐませう。三十は違つてゐるでせう。
女三　そんなでもないわ。女だつて、もう二十四五にはなるわ。
男一　もう、五十を越してゐるくせに、あんな若い女房をつれ廻していやらしい老爺だな。
女一　金で買はれて、あんな老人の妻になるなんて、考へた丈でも身ぶるひがするわ。
女二　でも御覽なさい！　耳輪にも、ダイヤモンドが光つてゐますよ。それにあの老人だつて、それほど邪慳でもなささうよ。
女三　まあ、あんなに足に鎖が付いてゐては、本當に愛なんかありつこはないわ。

女四　氣の毒ね、一生をあんな境遇に過すなんて。
男三　貴女方が同情する以上に、あの女は自分の境遇を嘆いてゐるのですよ。
男二　いゝ女なんだな。あんないゝ女が、あんな老人の妻になつてゐると云ふ丈でも、義憤を感ずるよ。
男三　おい、あまり大きい聲を出したら困るよ。自分のことが、噂になつてゐることを感づいて眞赤になつてゐるよ。
男一　我々が同情してゐるのを知つて嬉しいだらうか。
男三　勝氣な女だと云ふから哀れまれると云ふことに、いい感じはしまい。でも嬉しくなくもないだらう。
女一　おや亭主の老人は、立ち上りましたね。
女二　ノソ〳〵とどこかへ歩いて行きますね。
女三　なに用足しに行つたのでせう。
女四　でも、ホンの少しの間でも、あの美しい女の傍に醜い老人の亭主が居ないと云ふことは、うれしいことだわねえ。
女一　氣のせゐか、あの女の顏色がはれ〴〵としましたね。
女二　おや。あの女の人も立ち上りましたね。
女三　おや。身づくろひをしますね。
男二　おや歌をうたふのだよ。

男三　あの女は、バグダッドの貴族社會でも有名な歌ひ手だよ。
　（皆きゝ惚れる）
女四　おゝ、何と云ふいゝ聲だ。
女五　うつとりするやうないゝ聲だ。
女一　一つ一つの言葉が、あの人の悲しみで、裏づけられてゐる。
女三　何だが文句が、はつきり分らなかつたね。
男三　身體は、賣つたがわが魂は、ソロモンの富を以てしても賣らないとかう云つてゐるのです。
女達　尤もだわねえ。同情するわねえ。ほんとに可愛さうですわねえ。
男一　おや、また何か歌つてゐるな。
男五　いゝ聲だ。ふるひ付きたいやうないゝ聲だ。
男三　金錢の戀、僞りの愛を捨てゝ、本當に眞心で自分を愛してくれる青年の胸に抱かれたいと云ふのだ！
男一　尤もだ。
男二　俺が救つてやる。
男五　いや俺が救つてやる。
男四　いや俺が救ふ。
男一　その鎖を斷つてしまへ！
男五　あの老人を踏みつぶしてしまへ。
男二　今宵の中に逃げるといゝ。俺は、天幕の蔭で貴女が逃げて來るのを待つてゐる。
男三　いや、靜に。老人が歸つて來る。老人が、そんなことを聽くと、どんな警戒をするかしれない。しづかに。
女一　亭主が、歸つて來ると美しい顏が、直ぐ曇つてしまふ。
女二　おや、あんなにしをれてしやがんでしまつたよ。
女三　可愛いさうに。いつまであんなに囚はれてゐるのかしら。
女四　思ひ切つて、鎖を切つてしまへばいゝのに。
女五　本當に、あの人の歌つてゐる通りにすればいゝに。
女三　ほんたうに、誰か本當に愛して吳れる青年の胸に飛び込んで行けばいゝに。
女二　本當に。何だつて、はやくあの鎖を切つてしまはないのかしら。

情景　二

情景一と同じ。たゞ前よりも一年ばかり後。やつぱり一群の隊商が休んでゐる。群衆が遠くから、取り卷いてゐる。群衆は第一場の人々と全く同一なり。

女一　去年評判になつた隊商の妻が、逼つたと云ふから逌

ひかけて來たのですよ。
女二　わたしも。
女三。四　わたしも。
男一　うむ。去年評判になつた女が居ると云ふんだね。
男二　うむ。おゝ、あれだ。あれだ。ほら、あのつくばつてゐる駱駝にもたれながら、赤ん坊をあやしてゐる女が、たしかにあれだ。ホラ今顔を上げた。
男四　なるほど、違ひない。見覺えのある美しい顔だ。
女一　可愛さうに、あの嫌な亭主の赤ん坊を生んだのかしら。
女二　でもあの亭主が見えないわねえ。
女三　ほんとに。
女四　私先刻から、亭主を探してゐるのよ。
女五　見えないわねえ。何うしたのだらう。
男一　おいあの女の傍に若い男が居るぢやないか。
男二　うむ、同じ駱駝にもたれてゐるね。
男四　それに見ろ！　あの女の足には銀の鎖が付いてないぜ。
男女達　おう。おう。なるほど。なるほど。
女二　到頭あの鎖を斷つてしまつたんだわねえ。
女三　あの嫌な年寄の亭主から逃げたんだわねえ。
男三　(何處からか現はれる)　お前さん達は、まだあの女の話を知らないんだねえ。あの女が、若い男をこさへて、あの年寄の隊商を捨てた話を。
女達　まあ。まあ。
男三　隨分、思ひ切つて逃げてしまつたんだよ。
女達　まあ。
男二　あの横に坐つてゐる男が、それなんだねえ。畜生！うまくやつてやがらあ。
男四　あんな生若い小僧のくせに。
男五　女よりも年下ぢやないか。生意氣に。
女一　まあ、到頭亭主を打つちやつたんですつて。
男三　しかも、女の方から手きびしい絶緣狀を送つたんだよ。
女二　まあ、あんまりやり方がひどいわねえ。
男一　ほんたうだ。男と云ふものを馬鹿にしてゐる。女から絶緣狀を送るなんて。
男二　ほんたうだ。しかも、人もあらうに、あんな年下の小僧とくつゝくなんて。
男四　それに、あの赤ん坊だつて、あの小僧の子だらう。
男一　さうだらうとも。いけづう〳〵しい女だ。
女一　ほんたうに。それぢや。あの亭主が可愛さうだ。
女二　ほんたうに。年寄で、いやな男だつたけれども、何だか實意のありさうな男だつたわ。

女三　さう、わたしもさう思つてゐたの。何だか頼もしい親切な男らしかつたわ。

女四　さうですとも。だから、あんなに立派な胸飾りや、ダイヤモンドの耳輪なんかをさせて置いたんだわ。

女一　ほんたうにね。いくら愛がない結婚だからと云つて、亭主は亭主ぢやないの。

女二　さうですとも。亭主の顔を蹂みにじつてあんな若い男と、一緒になるなんて、ひどい女だわねえ。

女三　さう云へば、初めからそんな薄情者のやうな氣がしたわねえ。

女四　よく恥しくもなく、子供までをつれてこんな所を通れるわねえ。

女五　そつと、隠れてゐるのなら、まだしも。男と同じに、一緒に駱駝にもたれてゐるなんて。

女一　薄情者！　人でなし！

女二　あの捨てられた年寄の亭主が可愛相だわ。

女三　ほんたうだわね。

男一　ほんたうに、づう〳〵しい女だ。バグダッドの役人達に渡してしまふといゝんだ。まぎれもない姦通ぢやないか。この女の兄貴の貴族と云ふのは、どんな面をしてゐるのだ。

男二　こんな女が出れば、こんな女を許して置けば、世の中が滅茶々々になつてしまふ。

男四　ほんたうだ。うんと、とつちめてやるといゝんだ。

男三　可愛いさうに、みんなの罵が聞えると見えて、モヂモヂしてゐるよ。

女一　いゝ氣味だわ。もつと、のゝしつてやりませうよ。薄情者！

女二　浮氣者！

女三　人でなし！

男三　到頭、ぢつとして居られなくなつたと見えて立ち上つたよ。

男一　そんな泣顔を見せたつて駄目だよ。

女一　もうその手には乘らないわ。

女二　いくら悲しさうな顔を見せたつて駄目よ。

男三　でも何か歌ひ出したよ。

女三　きかない〳〵。

女四　ほんたうに誰が、きいてやるものか。亭主を蹂みにじつた女なんかの云ふことを。

男三　金銭の戀、僞りの愛を捨てゝ本當に自分を愛して呉れる青年の胸に走つたと歌つてゐるんだ。

男一　圖々しい！　そんなことを云つてゐるのか。

女一　あきれたわねえ。

女二　ひどい女！

男二　ふてい女だ。
男四　べらぼうめ！　人を馬鹿にしてゐる！（石を一つ投げる）
男一　ひどい奴だ！　こいつを喰へ！
女達　ほんたうに。あきれた人だ！
男達　やつてしまへ！
（男達、女達、銘々に石を投げる。女悲しげに歌ひながら、石に打たれてゐたが、それが一つ眉間に當るとくづれるやうに倒れてしまふ）
男達　ざまを見ろ、いゝ氣味だ。
（石、子供に當る。子供悲鳴をあげて倒れる。男達また石を投げつゞける。女達、さすがに手を止める）
女一　到頭、やられてしまつたわねえ。
女二　でもこんなにひどくやられると、また何だか可愛いさうだわねえ。
女三。四　ほんたうにねえ。

――をはり――

ある兄弟（一幕）

人物

松村貞一郎　貴族院議員。
文雄　その長男、二十四　大學生。
武雄　その次男、二十一　不良青年。
忠三　その三男、十七。
孝造　その四男、十二。
よし子　その長女、八つ。
さく　その家の小間使。
みち　その家の仲働き。

時代及場所

現在、東京。

情景

松村家の客室。洋式の廣い部屋。右には、之れに通ずる廊下がある。左には、扉が二つある。中央には卓子が置かれ、椅子五六脚之れを圍繞して居る。正面の壁に、日本海の海戰に偉勳を奏した大將の肖像、その直ぐ下に一臺の古いオルガンが置かれて居る。青いカーペットの上の闇が急激に薄れて行くのは小間使のさくが、順次に窓を明けつゝあるからである。彼女が窓を半分位、開けて行つた頃に、左手の扉が一つ開く。そして長男の文雄が顏を出す。色の白い神經質な青年である。

文雄　さくだつたのかい。
さく　（振り返つて微かに笑ひながら）はい、お早う御座います。
文雄　（女の方へ近よりながら）昨日、お母樣から何か云はれたさうだね。
さく　（顏を赤くしながら低聲で）はい。
文雄　母が何と云つたのだい。
さく　奧樣が、さくや、變な噂を聞いたが、まさか本當ではあるまいなと、仰つしやいました。
文雄　さうかい。ぢや、家の者は噂をして居るのだな。わしとお前とが、怪しいと云つて居るのかい。
さく　いゝえ、さうではありません。武雄樣とさくが怪しいと申して居ります。
文雄　（駭きながら苦笑して）ぢや、私とお前との本當の關係は、知らないんだね。皆は、私の代りに武雄とお前とが怪しいと云つて居るのかい。

さく　はい。

文雄　それで、お前が（少しく躊躇して）妊娠して居る事も氣付いて居る者があるのかい。

さく　薄々氣付いて居る者もあるやうで御座います。

文雄　お母様は、その事に就いては、何も云はなかつたのかい。

さく　はい何も仰つしやいませんでした。（次第にかうして會話の緊張に堪へられないやうに俯むいてしまふ）

文雄　あゝいゝとも。何も心配しないで居るがいゝ。何時か云ふ通、お前が妊娠して居る事が隱し切れなくなつた時には、お父様にもお母様にも打ち開けてしまふ積なのだから、何も心配しなくてもいゝ。私は、初めから川村からの緣談などは、問題にして居ないのだ。私はお前と堂堂と結婚する事に依つて、今迄の臆病な、單調な生活から絶緣してしまひたいと思つて居るのだ。何時迄も、温和しいお坊つちやんだと思はれて居ては堪らないからね。

さく　そんな事がありましたら、私が旦那様や奥様から、何んなにお恨みを受けるかも分りませんわ。

文雄　そんな事は、何もお前が心配しなくつてもいゝ事だ。俺がすつかり引受けてやるから。俺が思ひ切り惡者になつてやるから。俺は、人からお父様の二代目のやうに、聖人か君子かのやうに扱はれるのが、堪らなく嫌になつて來たのだ……。

さく　（廊下の彼方に足音がするので）あれ誰か參りましたわ。

文雄　ぢや、また今晩、俺の部屋へ一寸お出でよ。

（仲働きのみちが廊下傳ひに來る、文雄擦れ違ひにさる）

みち　お早う御座います。

文雄　あゝ（退場）

（さくは頻りに窓を明けて居る）

みち　おさくさん。茲が濟んだら、よし子様のお部屋へ行つて下さいな。

さく　はい。

みち　あなた、武雄様が、昨夜遲く歸つていらつしつてよ。あなたも、やつと安心したでせう。

さく　（このひやかしが少しも利かないで）あらさう。

みち　あらさうだなんて、隨分冷淡なのね。

さく　あら嫌なおみちさんだこと。ぢや。茲をお頼みしてよ。

（さく廊下より退場。みちが一人掃除して居る。——幕一度下りて、又直ぐに上る。——以前より三時間ばかり後。客室は前と少しも變りはないが、あかるい朝の光が一杯に漲つて居る。三男の忠造が、オルガンを

滅茶苦茶に鳴らして居る。十七ばかりのにやけた中學生である。四男の孝造が、オルガンに靠れて、唱歌を唱つて居る。十二ばかりの少年。そこへ廊下から、みちがは入つて來る）

みち　坊ちやま、およし遊ばせ。奥様がお叱りで御座います。

忠三　（素直にオルガンを離れながら）　おい、みち。昨日さくが、お母様に叱られたつてね。

みち　何うだか、存じません。

忠三　隠さなくたつていゝぢやないか。政吉から、スツカリ聞いて居るんだよ。さくはお腹が大きいんだつてね。

みち　まあ、そんな事を。奥様に申し上げますよ。

忠三　いやに、白ばくれて居やがる。（話題を換へて）武兄さんは、まだ起きないのかい。何だか今日は、一大活劇がありさうだね。お父様と武兄さんとぢや。いゝ取組だからね。早く武兄さんが、起きるといゝんだね。

みち　まあ！　あんな事を云つて居らつしやる。

孝造　忠兄さん、武兄さんは、昨日と一昨日と、一體何處へ行つて居らつしつたの。

忠三　（ある得意さを以て）　子供の知つた事ぢやないよ。

孝造　えゝ云つて下さいよ。一體何處？

みち　お友達の所で御座いますよ。

孝造　嘘云つてらあ。

忠三　本郷の伯父さんのとこだ。

（その時、八つになる一番下のよし子が、廊下を傳うて來て、此の話を聞いて居る）

よし子　わたし知つてゝよ。麻布の伯母さんのお宅よ。

孝造　よし子なんか知るものかい。

よし子　あら、お母様が、さう仰つてよ。ねえみちや。お母様は、嘘を仰つしやらないわね。

みち　お嬢様の仰つしやる通で御座いますわ。

忠三　（兄らしい得意さを以て）　孝造やよし子なんかの知らない所だよ。

孝造　（稍不平で）　大きい兄さんに聞いて來るからいゝや。

忠三　お前なんかに云つて下さるものかい。

（孝造、文雄の書齋の扉を明けては入るが、直ぐベソをかきさうな顔をして出て來る）

忠三　そら御覧！　云つて下さらないだらう。

孝造　そんな事を聞いちやいけないつて。

（此の時、彼等の父の松村貞一郎廊下から來る。五十五六の品格のいゝ老人、忠三、孝造、よし子皆父の傍にかけ寄る）

忠三　お早う御座います。

孝三　お早う御座います。
よし子　お父樣、お早う御座います。
貞一郞　お早う。（稍不機嫌らしく）三人とも佐久間と一緒に散步に行つて來るといゝ。こんなお天氣のいゝ日曜は、又とありやしないから。
よし子　お父樣、武兄さんは麻布の伯母樣の所へ行つて居らつしつたのですわね。
貞一郞　（一寸嫌な顏をして）さう〱。さあ、佐久間にさう云つて、早く連れて行つてお貰ひなさい。
忠三　（彼の所謂大活劇を見損ふのが不平らしく）お父樣、僕は豫習をやらなければいけませんから。
貞一郞　いゝぢやないか。午前中、行つて來ていゝだらう。
忠三　（仕方なく承諾して）ぢや孝造行かう。
孝造　遊就館を見ようね。
よし子　いゝおべゞを着て來るから、待つてゝよ。
（三人廊下へかゝらうとする時、左側の扉の他の一つを排ね開けて武雄が出て來る、文雄に似て、やゝ華やかな顏を持つて居る。眸は、ある銳さを以つて、輝いて居る。忠三も、孝造も、よし子も立止まつて）
孝造　あら武兄さん。
忠三　お歸りなさい。お早う。
よし子　武兄さん、お早う。

武雄　（やゝ自棄的に）お早うもないもんだ。もう十時過だらう。
孝造　（武雄の方へ進み寄りながら）兄さんは、麻布の伯母さんの所へ行つてたの。
よし子　（孝造に負けずに進み寄りながら）さうだわね、兄さん。
武雄　（弟妹よりも、父の方を氣にしながら）麻布の家なんか行くものかい。
よし子　でもお母樣が、さう仰つたわ。
孝造　一體何處へ行らつしてたの。兄さん。
貞一郞　（恐ろしい眼付をして武雄を睨みながら）さあ、皆早く、散步に行くんだ。武兄さんなんかにかまつちやいけない。
よし子　（なほ懲りないで）兄さん、何處へ行つて居らつしつたの。
貞一郞　（荒々しく）早く、お行きなさいよ。
武雄　（反抗的に）兄さんが、行つて居た所を敎へようか。
貞一郞　（武雄を睨み据ゑながら）武雄！……
武雄　（反抗的に自棄的に、興奮して）皆、よく聞いて置け兄さんの行つて居た所は、警察と云つてね、巡査と泥棒とばかりが居る所だよ。

貞一郎　（激怒して）お默りなさい！　何を云ふのだ。（三人の子供の方へ向いて）早く行けつたら。

（父の怒聲に吃驚して、皆飛んで行つてしまふ。後には、父と子との緊張した無言の睨み合ひが暫く續く。おしまひに父がその不快な沈默を破る）

貞一郎　恥知らず奴、よく歸つて來られたね。よく、此の家の敷居が跨げたね。

武雄　（その痩ぎすな身體に、反抗を漲らせながら）お父樣が、佐久間を迎へにおよこしになるからです。

貞一郎　（極度に激昂して）馬鹿！　恥を知れ！　恥を。

武雄　（愈々反抗的になつてしまふ）武雄は、聾ぢやありませんから、高い聲をお出しにならなくつても、充分聞えます。

貞一郎　（激昂に顫へながら）貴樣は、此の父の三十年來の汚れのない名譽に、泥を塗つてしまつたのだ。松村の息が警察の厄介になる。何と云ふ恥だ。俺は教育家として、一國文教の樞軸に立つて居るものだぞ。その子の貴樣が、不良少年の頭目になつて、警察の厄介になる。俺としては、忍び難い恥辱だ。俺の面目は、丸潰れになつてしまつた。俺は、教育家として、何の顏をさげて、世間へ出られるのだ。而も、貴樣は、警察の懲戒を受けながら、少しも改めようとは、思はないのか。今の貴樣のやり方は、何うだ。父や母が、何うかして、幼い子供達に、一家の恥を知らせまいとして居るのに、故意に打ち開けるなどは、怪しからぬ事だ。此の父は、一昨日から貴樣の事を心配して、一睡もして居ないのだぞ。

武雄　（怖しく蒼白になりながら）お父樣が御心配になつて居るのは、私の事ですか、それともお父樣の御名譽の事ですか。

貞一郎　（激憤して）默れ！　不埒者奴が、手を突いて詫びる事か、却つて父に對し反抗をするのか。

（教育家としての威嚴が、漸くその怒をもつと肉體的に現はすことを止めて居るらしい）

武雄　（思想的には、父に少しも壓迫されないやうに）お父樣が、何時も名譽〳〵と、子供よりも名譽の方が、大切のやうに仰つしやるからです。

貞一郎　勿論ぢやないか。お前のやうな恥知らずの子供よりも、名譽の方が、何れ丈大切だか分らん。

武雄　（苦笑して）さうですか。やつぱり、文兄さんのやうに、大學の優等生になつて、お父樣の名譽の爲に盡くさなければ、お氣に召さないのですね。

貞一郎　お前は、文雄に對してゞも、恥しいとは思はないのか。あれは、學問と云ひ、品行と云ひ、何一つとして缺點はない。今度だつて、舊藩主の川村家から、名譽の

縁談があるのぢや。それだのに、その弟のお前は、何うだ。不良少年に墮落して、父や兄の顔に泥を塗るのだ。何と云ふ怪しからない奴だ。

武雄　（愈々冷靜になつて）僕は何時も、さう思つて居るのです。お父樣や兄樣のやうに、善良の人々の子や弟として、僕が生れたのが惡いんです。實際、性格も趣味も、思想も丸切り違つて居る者が、肉緣と云ふ物質的な理由で、一所に繫がつて居るのが、悲劇なんですね。

貞一郎　何を怪しからん事を。自分の根性の惡いことは、棚に置いて、何と云ふ不埒な云ひ分だ。

武雄　その根性も、身體も、私の持つて居る物は、みんなお父樣から戴いたのです。私は、お父樣から戴いた身體と心と敎育と境遇とで、こんな人間になつてしまうたのです。私が、何も好きこのんで、不良少年になりたかつたのではありません。兄さんに不良少年になれと云つて夫れは出來ない相談でせう。夫と同じやうに、私に優等生になれと云つて、それは出來ない相談です。私だつて、優等生になつて、皆からチヤホヤされる方が、何んなに愉快だか知つて居ます。知つて居ながら、さうなれないのが悲劇なのです。

貞一郎　（稍怒が和いで）お前は、直ぐ詭辯を云ふ。何時もさうだが、お前が、こんなになつたのも皆お前の心掛が惡いのだ。誰を恨むべき筋もない事だ。

武雄　さうですか、お父樣にはさう見えますかな。

貞一郎　（稍妥協的に）兎に角、當分此家に置くことは出來ないから。

武雄　（決死的に）さうですか。いやいゝです。私は私丈の覺悟がありますから。お父樣のお世話にならなければ、愈々自由になれる譯だ。さうなれば、お父樣のお小言を聞く必要もない譯ですね。どれ、仕度をして、お暇をしようかな。

貞一郎　何處へ行くと云ふのだ。お前は、自分で生活する力があると思つて居るのか。

武雄　でも、お父樣に、追ひ出されるのですから、仕方がないぢやありませんか。やれる丈やる積です。その代り、どんな卑しい職業に就いても、お父樣には御異存はありますまいね。

貞一郎　（懷柔的に妥協的に）俺は、いくらお前を憎んでも、生活の心配丈はさせない積だ。之から京都へ行くのだ。京都の本間さんの家へ預ける事にしたから。あの人は基督敎徒で、有名な精神家だ。お前の性質もあの人の感化さへ受くれば、少しはよくなるだらう。

武雄　精神家とか敎育家などと云ふ人達は、人間の心を、壁か何かのやうに、直ぐ塗り易への出來るものとでも思

つて居るのでせうか。兎も角、京都へ參りませう。お父樣のお目觸りにならない丈でも、親孝行でせうから。

貞一郎　（益々妥協的に）さう僻んで吳れては困る。お前を京都へやるのも、少しでもお前に反省の機會を與へたいからだ。今迄の周圍や友人などから離れて、新しい生活を送らせたいからだ。

武雄　（冷笑的に）それに、兄さんの大切な結婚間際に、不良少年の弟が二度と警察へなんか、引かれちや大變ですからね。兎に角京都へ參りませう。（全く父の上手に出てしまつて）早い方がいゝやうですから、直ぐにも出發しませう。

貞一郎　（厄介拂ひを爲し得た欣びを隱し切れず）ぢや、直ぐ紹介狀を書いてやるから、餘り誰にも逢はないで、直ぐ出立したら何うだ。

武雄　畏りました。（全く父を下手に見て、然し子としての親しみを見せながら）その代りお父樣、月々送つて下さるものは、充分にお願ひしますよ。さうして下されば、東京へなんか、なか〳〵歸りやしませんよ。

貞一郎　（父としての威嚴を取返さうとして）俺は何もお前を、京都へ流し者にはしたくはないのだ。

武雄　小遣さへ澤山下されば、彼方に居る方が結局僕も呑氣だし、お父樣もお安心でせう。

貞一郎　何を馬鹿な事を云つてゐるのだ。

（貞一郎退場する、武雄も續いて後から行かうとする、と文雄が彼の書齋から出て來る）

文雄　武雄！

武雄　（快活に）やあ、兄さんですか。お早う。

文雄　今、スツカリ聞いて居たのだが、お前は京都へ行く積りかい。

武雄　其方が皆の利益ですからね。兄さんだつて、僕のやうな弟が居ては、嘸御迷惑でせう。現に、お父樣などは、川村さんの緣談も、僕の拘引問題で破談になりやしないかと心配して居られるやうです。

文雄　馬鹿な事を云つちやいけない。今度の緣談などは、俺は初から問題にして居ないのだ。

武雄　でも、お父樣やお母樣は、鬼の首でも取つたやうに、喜んで居らつしやるぢやありませんか。舊藩主のお姬樣を足輕の家に戴くなんて、こんな名譽な事はないと云つて、お父樣は有頂天ぢやありませんか。

文雄　（苦り切つて）お父樣はお父樣さ。

武雄　（少し駭いて）ぢや兄さんは、お父樣の云ふ事を聽かないのですね。之りや少し面白くなつて來ましたね。

文雄　（眞面目になつて）俺は、近頃になつて、今迄の自分のやり方が馬鹿〳〵しかつたことを、つく〴〵悟つた

のだ。俺は、お父様お母様を初め、周圍の人達から煽てられて心にもない君子を氣取つて居たのだが。お前と俺と一體何處が違ふのだ。赤裸々の人格や性格は、少しも違つて居ないのだ。似たり寄つたりなのだ。所が俺は傍から優等生扱ひにされるので、仕方なしに品行を愼しんで來たのだが、積り積つて心にもない君子に祭り上げられてしまつたのだ。俺は、お父様やお母様に失望をさせない爲に、たゞそれ丈の爲に、一生懸命温しくして來た。その爲に、中學時代から今年になる迄、一度だつて自分の思ひ通に、振舞つたことがない。思ひ存分跳ね廻つたことがない。一度だつて、自分の欲求を充たした事がない。丸で體のよい千松なのだ。人に煽てられて、心にもなく空腹を堪へて居たのだ。少年時代の放縱な樂しみは、何一つやつたことがない。俺は、それが此の頃、つく／＼後悔されて居るのだ。お父様は、若い時は精一杯に苦しめ、そして年が寄つてから、樂をしろと仰つしやるが、血も褪せ肉も凋びてしまつては、心も肉も柔い少年時代に味はれるやうな快樂が得られる譯のものぢやないからな、俺は今迄は、お父様やお母様に操られて、懸命に踊つて居た人形だつた。そして、自分の腹の底から迸る欲求を悉く虐殺してしまつて居たのだ。武雄、俺は此の頃お前の生活が羨ましくなつて來たのだ。自由な奔放的な生活が。

武雄　（充分兄に同情しながら、而も稍や嘲弄的に）　所が兄さん、不良少年の生活も、あまり面白くはありませんよ。昨日なんかも、警視廳で、警部から散々訓戒を聞かされた時なんか、全く嫌になりましたよ。あの人達は、肉體的に人を捕へて居れば、思想上でもやつぱり優勝者だと思つて居るから、やり切れませんよ。兎に角、徒然草に云つてあるやうに、他人のやつて居る事が、羨しく思はれるものですよ。僕も、此頃のやうに、失敗ばかりして居ると、實際兄さんが、羨しくなりますよ。僕だつて、兄さんだつて、中學の二三年頃迄は、少しも違つて居なかつたんですものね。

文雄　あの頃は、お前も優等生で温しい子だつたね。

武雄　（稍得意氣に）　さうですとも、僕も兄さんも各自の級の二番と云つて三番とは、下らなかつたでせう。お父様がよく、お酒を飲むと云つたぢやありませんか。文雄は、文だから文官にする。武雄は武だから軍人にするなんて。お父様は昔から子供を、粘土細工か何かのやうに自分の思ひ通にしたがつて居るのですね。子供の心の奥底の芽には、少しも氣が付かないのだ。僕だつて、陸軍士官なんかを志願しないで、高等學校の文科へでも、は入つて居れば、今頃は不良少年などにはなつて居ないの

だ。

文雄　（同情して）　本當にさうだ。お父樣の壓迫が烈しいので、私は壓し潰されてしまつたのだ。お前は横へ跳ね出したのだ。が、俺が君子扱ひされるので、馬鹿に堅くるしくなつたやうに、お前は不良少年扱にされるので、急に惡くなつてしまつたやうだね。

武雄　さうですね。僕もさう思つて居るのです。僕が少し惡戲をし始めると、お父樣とお母樣とが口癖のやうに、文雄はおとなしいが、武雄はいたづらだと云つて居たでせう。あの頃から僕は段々惡くなつて行つたのです。傍から、いたづらだいたづらだと云はれるといたづらをしないと他人の期待に反くやうな氣になつて、段々惡戲が嵩じて行つたのです。人から惡い／＼と云はれると、惡い事をする特權があるやうに思ひ始めますからね。

文雄　人からおとなしい／＼と云はれると、必要以上におとなしくなるのと同じだがね。が、俺が猫を被るのも、もう少しの間なのだ。川村さんからの緣談を、拒絶するのを機會に、今迄の假面をすてゝ、自分自身の本當の生活をやつて見たいと思つて居るのだ。また實際、さうしなければならぬ必要に迫られて居るのだ。

武雄　はあ、解つて居ます。さくとの關係でせう。

文雄　（稍駭いて）　お前は、氣が付いて居たのか。

武雄　兄さんはやつぱりお坊つちやんなのだな。隱し切つて居ると、思つて居たのですか。僕は、とつくから知つて居るのです。

文雄　遉に、お前は道樂をした丈あるね。單なる關係ばかりではないのだ。實は、あれが姙娠して居るのだ。

武雄　あゝさうですか。多分さうだらうと思つて居ました。さくの素振りが此頃少し變でしたからね。

文雄　（決心したやうに）　だから、何うあつても、近い内に、お父樣と衝突しなければならないのだ。どんな犧牲を拂つても、あれと正當に結婚しようと思つて居るのだ。それが、自分自身の生活には入る第一步だと思つて居るのだ。

武雄　（やゝ變色を帶びて）　兄さんは、僕よりもお父樣に對して殘酷ですね。僕は何んなに惡い事をしても、中學時代からの準備があるから、お父樣も餘り驚かないでせうが、兄さんが突然そんな事をなすつたら……お父さんが絕對に信用を置いて居る兄さんが、そんな事をなすつたら……全くお父樣が可哀相ですよ。致命的な打擊ですからね。

文雄　（やゝ當惑して）　然し、今更仕方がない。外に取るべき手段がないんだから。

（この時、貞一郎廊下傳ひに來る。思ひ做しの故か、

少し元氣が付いたやうに見える）

貞一郎　（先づ文雄に）お前に相談もしないで、決めてしまつたが、今度武雄を暫くの間、京都へやる事にした。同志社の本間さんに預つて貰ふことにしたのだ。あの人なら確だと思ふから。

文雄　……（默つたまゝ肯く）

貞一郎　さあ武雄！　之が本間さんへの手紙だ。向うへ着いたら直ぐ知らすがいゝ。小遣は月々二十圓宛送つてやるから。

武雄　（ニコ／＼しながら）お父樣、食費は別でせうね。

貞一郎　無論だ。

武雄　さうですか、何うも有難う御座います。ぢや、お父樣、向うへ行つたら、おとなしく勉强でもしませう。

貞一郎　（全く父としての愛情に歸つて）身體を丈夫にしてな。來年は、何處かの入學試驗を受けるがいゝ、お前は、學問の性質は決して惡くないんだから。

武雄　（父の愛を感じたる如く）はあ、有難う御座います。……（ふと兄の方を見て沈默したが）……お父樣、もう一つ申上げたい事があるのです。

貞一郎　何だ。

武雄　京都へ行く前に、もう一つお父樣のお赦しを乞はなければならない事があるんです。

貞一郎　（稍不安になつて）何だ。一體何だ。

武雄　僕の部屋迄、一寸お出を願ひます。

（親子連立つて左手の扉の一つには入る。文雄は見送りながら、烈しい不安に囚はれる。烈しい罵聲が武雄の部屋の中で聞える。暫くすると、貞一郎罵り乍ら出て來る）

貞一郎　（眞赤に激昂して）實に怪しからん。何んと云ふ不埒者だ。

文雄　（おづ／＼と）何うしたと云ふのです、お父樣。

貞一郎　（武雄の部屋を睨みながら）何と云ふ耻知らずだ酷いことをして居る彼奴。

文雄　何うしたと云ふのです、お父樣。

貞一郎　口に出して云ふのさへ耻しい。松村家の耻辱だ彼奴は女中に、手を附けて、而も姙娠させたと云ふのだ。

文雄　（電光に打たれたる如く）えゝつ！　武雄が、さう申したのですか。その女中と云ふのは誰です。誰です。

貞一郎　人もあらうにあのさくだ。あれは、普通の女中ぢやないよ。行儀見習として、預つて居る大切な娘なんだ。俺は、もう彼奴には愛想が盡きた。彼奴の爲に俺の面目は、丸潰れだ。（聲を大きくして見えない武雄に）おい貴樣のやうな奴は、一刻も早く此家を出てしまへ。一刻も、此家に置くことはならないのだ。

（文雄、困惑と喫驚との裡に、椅子に寄つたまゝ、俯して居る。武雄、自分の部屋から手拭を持つて出て來る）

武雄　（一寸父に會釋するやうに）　一寸顔を洗つてから、直ぐ出かけます。

貞一郎　……（默つたまゝ睨んで居る）

（武雄、廊下より去る）

貞一郎　（嘆息して）　あゝ何と云ふ不肖な子を持つた事だらう。警察に引かれた事よりも、十倍も悪い事だ。何と先方の親に申譯云つてよいか。が、彼奴は何と云ふ恥知らずだ。どんな事をしても、丸で平氣だ。ちつとも後悔をして居ない。何と云ふ恐ろしい男だらう。

文雄　（蒼白な顔を上げ）　お父樣、武雄の云つたことは嘘です。さくのお腹の子は私の子です。

貞一郎　（飛び立つばかりに色を變へて）　何だと！

文雄　（全く必死に）　さくに關係したのは、私なのです。お腹の子は、私の子に違ひありません。武雄はお父樣が絶望せられるのを防いで、あんな小細工をやつたのです。武雄の云つたことは、嘘です。さくを呼んでお訊きになれば、直ぐ判ります。

貞一郎　（失望と忿怒とが混合して全身が、震へて居る。何か云はうとするが言葉が出ないらしい。たゞ文雄をヂツと見詰めて居る丈けである）……

文雄　私の方が、お父樣に對しては殘酷だつたかも知れません。武雄は、お父樣に絶望させまいとして、私の罪を引き受けようとした丈です。お父樣の事を、本當に思つて居るのです。

貞一郎　（やつと心の統一を得たらしく）　俺は、もう何も云ひたくない。何うか、此の事は武雄のした事にして置いて呉れ。俺の一生のお願ひだ。その外に俺の逃げ路はないのだ。お願ひだ。俺の一生のお願ひだ。

文雄　（決然と）　でも、お父樣！　そんな馬鹿〳〵しい嘘を。

貞一郎　（必死に）　お前が、私生兒を生ましたと世間から云はれる。そんな事を私が堪へ得ると思ふのか、俺の一生のお願ひだ、お前は知らぬ顔をして居て呉れ！　頼む！

文雄　（當惑して）　ですが、お父樣。

貞一郎　（必死に）　俺の名譽を思へ！　お前の名譽を思へ。松村家の名譽を思へ！　お前が、私生兒を産ましたとあつては、お前の破滅ぢやない。俺の破滅だ。

文雄　でも、罪のない武雄に責任を持たして。

貞一郎　あれはいゝ。あれは不良少年として、もう世間に知られて居る、女中に手を附けたと云つても、大した問題にもなるまいから。

文雄　（苦々しげに默つてしまふ）……………。

（その時、武雄手拭を下げたまゝ出て來る、父と兄との顔を等分に見ながら）

武雄　（呑氣に）お母樣にも、お暇乞ひをして來ましたよ。之から行けば、丁度櫻が咲いて、都踊の季節ですよ。彼方は。

文雄　（立上つて）武雄！

貞一郎　（文雄をさへぎるやうに）武雄！　さあ旅費をやるから（以前とは、打つて變つたやうな温情を以て）身體に氣を付けるんだよ。

武雄　（幾枚かの十圓紙幣を取りながら）へえ、こんなに澤山下さるのですか。ぢや、直ぐ參りますから。お父樣も兄樣も、お身體をお大切に。

（間）

文雄　（蒼白な顔をしながら低聲に）武雄、お前は自由でいゝな。

武雄　（やゝ皮肉に、快活に）はゝゝ。その代り、華族のお姫樣なんか、貰へないんです。

文雄　（苦り切つたまゝ默つてしまふ）……………。

武雄　それぢや、失禮をして支度を致しますから。

（武雄、扉をあけては入る。後で父と子は、お互に顔を見合はさないやうに、椅子に腰をかけたまゝ考へる。

その時、忠三、孝造、よし子散歩から歸つたと見えて廊下に現はれる）

忠三　お父樣只今。

孝造　只今。

よし子　只今。

（貞一郎、三人を見詰めたまゝ默つてしまふ。二人の子を教育し損じた此の老教育家は目の前に並んで居る他の三人の愛兒に對して、自分の無力的な淋びしさをつくづくと感じたであらう）

――幕――

相似 (A farce)

人物

蕎麥屋の主人
その妻
出前持の男
小女
電話を借りに來る老婆
電話を借りに來る女
その他數人

舞臺

郊外のやゝ繁華なる町にある蕎麥屋の内部。右手は床を上げて疊を敷いてある。左手は土間から板の間になり、直ぐ二階へ上る階段がある。階段の右側に、電話がある。電話の右側の壁には、幾段もの棚が取り付けてあり、棚には出前の箱、ビール瓶、正宗の小瓶、等がは入つてゐる。疊敷の方の壁には、「東京蕎麥饂飩商組合」の木札がかけてあり、その左右に、色々なポスター、「もりかけ八錢」の札などが貼りつけてある。奧の方は兩側に格子があり、眞ん中に暖簾がかけてある。奧で、主人や女房、小女達の働いてゐるのが見える。

幕開く。夕暮れ近き頃。客が三人、銘々の位置で蕎麥を喰つてゐる。電話が消魂しく鳴る。小女が電話に掛る。

小女　あ、もし／＼、いゝえ、いゝえ、違ひます。こちらは七十五番です。（受話器をかける）また大塚の見番と間違つて掛つて來た。

客一　（身づくろひをして襟卷をしながら）おい、勘定。

主人　どうも有り難う御座います。お銚子は二本でしたね。

客一　あ、さうだ。

主人　一圓十錢頂きます。

客一　おやあ、これで取つてくれないか。（五圓札を出す）

小女　どうも有り難う御座います。（小女五圓札を受取り奧へ行つて釣錢を持つて來る）へい、どうも有り難う御座います。

（客一、去る。……間……小僧がは入つて來る）

小僧　鈴木メリンス店です。親子を二つ大急ぎで。

主人　はい、有り難う御座います。

（小僧去る）

主人　（小女に出前の箱を示しながら）おい、出來たよ。

小女　お菓子屋さんですね。

主人　さうだ。

（小女、出前の箱を持つて出て行く。奧から女房が出て來る。二十四五の粋な水々した女。客一の去つた跡

を取片附ける）

客二　おかみさん、お幾らです。

女房　三十錢頂きます。

客二　ぢやあこれでお釣を下さいな。

女房　はい、有り難う御座います。五十錢で三十錢のいただき、

（主人二十錢を奥から持つて出る。女房それを客に渡す）

女房　どうも有り難う御座います。

（客二去る。小女歸つて來る。……間……電話けたゝましく鳴る。小女電話に掛る）

小女　あ、もし／＼、あ、さうです。はいはい、いらつしやいます。（奥へ向ひ）おかみさん、日本橋のお宅から電話です。

女房　あ、さうかい。（そゝくさと電話へ掛る）あゝ、さうですか。あ、さう、あ、さうですか。えゝ、えゝ、でも……えゝ、えゝさうですね……（奥の主人の方へ向ひ）ねえ、ちよいと。

主人　何だい。

女房。（やゝ云ひ難くさうに）あの、日本橋の家から電話ですがねえ、今大森の姉が來てるんですがねえ、久しぶりだから、ちよつとでもいゝから來いといふのですが、行つてはいけないでせうか。

主人　何、大森の姉さんが來てゐる。

女房　えゝ、私もちよいと會ひたいのです。去年の十月から會はないんですもの。

主人　ぢやあ、ちよつとだけなら行つて來てもいゝ。

女房　さう、うれしいわ、あたし。（生々として電話に向ひ）ぢやあ、あたし行くわ。さうだね、どうしても四十分位はかゝるわ。えゝ／＼、なるべく早く行きますから。ぢやあ後ほど。

（女房電話口を離れて奥へ行く）

客三　ぢやあこゝへ置いて行きますよ。十六錢ですね。

主人　左樣で御座います。どうも有り難う御座います。

（客三去る。電話が掛つて來る。小女電話に掛る）

小女　あ、もし／＼、はいさうです。はい、左樣で御座います。はい分つてゐます。鴨なんばんを五つと、かけを十一で御座いますね。えゝ／＼、分りました。鴨なんばんの中で二つがうどん臺ですね。はい／＼、畏まりました。どうも有り難う御座います。（電話口を離れながら）荒神裏の大森さんで鴨なんばんを五つ、二つがうどん臺、かけが十一。

主人　かけは蕎麥かけだね。

小女　えゝ

（女房奥から拵へなして出て來る。黑繻子の襟のかゝつた銘仙の着物に對の羽織）

女房　ぢや行つて參ります。

主人　早く歸つて來なきやいけないぜ。

女房　えゝ〳〵。

主人　八時頃までには歸つて來られるだらう。

女房　えゝ〳〵。

主人　日本橋の姉さんによろしく云つてくれ。

女房　えゝ〳〵、ぢや行つて參ります。（いそ〳〵と出かける）

（女房と入れ違ひに、出前持の男歸つて來る。すぐ後から六十位の老婆がは入つて來る）

老婆　横丁の吉澤ですが、電話をちよつと貸して下さいな。

主人　はい、どうぞお使ひ下さい。

（老婆電話へかゝる）

老婆　あ、もし〳〵、浪花の二千八百三十五番。あゝさうです、三十五番ですよ。……（間）……あ、もし〳〵、立花屋さんですか。あ、さうですか、こちらは向島の岡田ですがねえ、あゝさうですよ。おかみさんをちよつと電話口までお呼びになつて下さい。はい〳〵、……あ、奥さんですか、私です。吉澤ですよ。しばらくで御座いますお變り御座いませんか。ねえ奥さん、今ねえ、あちらがいらしつてゐるんですよ。ちよつとでもいゝからお目にかゝりたいと云つていらつしやるんですがねえ。何とか御都合していらつしやいませんか。ぜひ。お會ひになりたいと、おつしやつてゐるのですよ。はい〳〵……………（老婆、店内の容子をジロ〳〵見る）はい〳〵、さうですか。いらつしやいますか。ぢや、お待ち申して居ります、なるべくお早くね。（電話口をはなれる）……どうも、ありがたうございます。（去る）

主人　何ういたしまして。

出前持の男　お婆さん、また電話賃を置かないんだね。

主人　あひびきの打ち合せなんかしやがるくせに、電話賃を置きやがらねえ。

出前持の男　そのくせ、注文だつて、十日目に、かけを三つ位ですからね。

主人　全くひき合やしないっ……（ふとある不安に囚はれる）おい、およし。

小女　（奥から）はい。

主人　さつき、日本橋から電話がかゝつて來たときねえ。

小女　えゝ。

主人　どんな聲の人が出た？

小女　どんな聲つて？

主人　男だつたかい、女だつたかい。

小女　女でした。
主人　うん。日本橋の姉さんの聲、お前知つてゐるか。
小女　知りません。
主人　さうか。
（主人ある不安に囚はれる）
主人　おい、吉藏！　日本橋の家は電話の呼び出しは、利かなかつたかね。
出前持の男　何とか云ふ洋食屋へかければ呼び出してくれるんですがね。おかみさん丈御存じなんですよ。
主人　うん。（黯然とする）
（……（間）……）
出前持の男　旦那、さつきの電話は、よその奥さんか何んかをひつぱり出すのですね。
主人　（いよ〳〵不安になつて）ふていことをしてゐやがる。
（此間、一時間ばかりの時間の經過を示すため、舞臺を一寸暗くする。明るくなると、すつかり夜に入つてゐる。電話のベルけたゝましく鳴る。小女電話にかゝる）
小女　あゝもし〳〵。はい〳〵左樣でございます。はい、はい、畏りました。（電話を離れる）杉野さんのお邸で、かけを九つ大急ぎ。

主人　おい、もう何時だ。
小女　八時少し前です。
主人　遲いな、おけいの奴。
（二人連れの學生、は入つて來る）
小女　いらつしやいませ。
學生一　君は、そばか。
學生二　おれはうどんだ。
學生一　うどんかけを一つとそばかけを一つ。
小女　はい、かしこまりました。
學生一　三日頃に發表になつて、十五日までに終るかしら。
學生二　もつとかゝるだらう。
學生一　二十日頃になるかな。
（先刻の老婆は入つて來る）
老婆　すみませんが、もう一度電話を貸して下さいな。
主人　（不承無承に）はいどうぞ
老婆　（戶外へ向ひ）さあ、どうぞ、どうぞ、御遠慮なく、いつも貸して貰つてゐるのですよ。
（二十四五の女、奥さま風、丸髷に結ひ黑襟のかゝつたお召の着物を着た、いきな女がは入つて來る）
女　御免下さい。
主人　いらつしやいませ。
女　毎度、どうも電話を、こゝへ電話賃を置きます。（五

十錢銀貨を冷藏庫の上へ置く。電話へかゝる）もし〳〵浪花の二千八百三十五番。さうです、さうです……もし立花屋ですか。あゝお前は、辰吉かい。わたしですよ。あゝさうです。旦那さま。いらつしやる。一寸、電話口まで、およびしてくれない。はい〳〵……あゝもし、旦那ですか。わたしです、今里へ來てゐるのですよ。姉が久し振りだから、一緒に淺草へでも行つて御飯を喰べないかと云ふのですよ。えゝ、えゝ。あのう。少しおそくなりましてもいゝでせうか。えゝ九時までにはきつと、かへれますわ。ぢや左樣なら。

（主人、電話をきいてゐて、全く不快な表情になつてしまふ）

女　どうも、失禮しました。

主人　（冷藏庫の上の五十錢を取り上げながら）一寸お待ち下さい。これをどうぞ、お持ちかへりになつて下さい。

女　いゝえ、どうぞ。受取つて下さい。電話をお借りしたお禮ですが。

主人　いゝえ。私の方は、そばやが商賣ですが、電話をお貸して餘分なお金をいたゞくのは、商賣ぢやありませんから。

學生一　玆へ金を置いておくよ（學生去る）

女　（主人の見幕の荒いのに辟易しながら）ぢや五錢丈でも置いて置きますわ。

主人　ぢや二錢、おつりをさしあげませう。

（二錢つりを渡す）

老婆　いやに、堅くるしいことを云ふ人だね。奥さん、今度から向うの自動電話へ行くことにしませうか。

（老婆と女、匆々として去る）

主人　（二人の後を見送りながら）ふてくされ女め……

出前持の男　だが、旦那いゝ女ですね。

主人　いくら女がよくつたつて、あんな者を女房に持つちや、やり切れない。

出前持の男　だが、全くいゝ女だ。

（電話けたゝましくかゝる。小女、電話に出る）

小女　あゝもし〳〵、さうです。あゝ、おかみさんですか。一寸お待ち下さい（電話をはなれ）旦那、おかみさんから電話ですよ。

主人　なに！（血相が少し變る）おい〳〵おけいかい。なに、久し振りだから。一緒に御飯をたべるんだつて！なに九時には歸れるつて、いけない！　いけないつたら、今何處にゐる？　なに、なに、はつきり云へ！　いけない！　直ぐ歸つて來い。歸らなきや、俺が連れに行くから、さう思へ！　えゝ、ぐづ〳〵云はずと直ぐかへれ！歸るか！　よし（電話器を投げつけるやうに置く）

出前持の男　旦那、何うしてさうガミ／＼云ふのです。

主人　何うしたつていゝ、だまつてゐろ。

（先刻の老婆、のこ／＼は入つて來る）

老婆　上等の天どんを二つ

主人　なに二つ？

老婆　なるべく上等をね。

主人　お生憎さま、天どんは種切れだよ。

老婆　もう、種切れかい。だから、場末の食物屋は……。

主人　（すごく睨む）

老婆　ぢや、ほかへ行つて、頼みませう。ほんたうに此の家は商賣を知らない家だ。

主人　勝手にしやがれ！

老婆　えゝ勝手にしますよ。

出前持の男　旦那、海老はありますよ。

主人　うるさい、だまつてゐろ！

（出前持の男駭いて、だまつてしまふ。主人のやるせなき焦躁と不安の裡に幕）

山本有三篇

津村教授

人物

津村駿　理科大學教授、四十歳
同　智佐子　その妻、二十四歳
同　徹　津村の先妻の子、六歳
同　俊五　津村の弟、三十歳
同　瑠璃子　その姪、十八歳
辻令一　醫學士、二十七歳
黒川周亮　理學士
同はる　女中

第一幕

逗子に於ける津村教授の別邸、日本間が三室鍵の手なりに列んでゐる。上手の室は稍狹く他の二室は二間續きになつてゐて大きい。下手の室の背後の唐紙をあけると玄關の方に通ずるやうになつてゐる。またこの室を圍る縁側は中央の室と狹い室との間を中斷して奥へ通じてゐる。下手の縁に硝子戸。向うに海が少し見える。前栽に丈の低い小松が三四株植わつてゐる。午前十時頃。

姪の瑠璃子は上手の小座敷で化粧をしてゐる。教授の弟俊五は縁側に座布團を列べ、その上に寝そべつて日向ぼつこをしながら新聞を讀んでゐる。そして傍においてある菓子鉢から菓子を摘んでは食べる。

間もなく羸痩の少年徹が奥の廊下から出て來たが、座敷にはいらないで、立つたまゝ俊五の食べてゐる菓子を物欲しさうに眺めてゐる。瑠璃子はふと徹を見て。

瑠璃子　いらつしやい、こつちへ。さあお菓子を上げませう。

（徹は璃瑠子に聲をかけられると急に奥へ逃げ込んでしまふ。）

俊五　（寝そべりながら顔を上げ）誰だい。

瑠璃子　徹さんよ。ほんたうに偏屈な子ね。どうしてあゝなんでせう。男の子のくせに。

（俊五無言のまゝまた菓子を頰張る。）

（間。）

俊五　おいお化粧はまだか。いゝ加減にしないか。汽車が出てしまふぜ。

瑠璃子　大丈夫よ。上りは十一時ぢやありませんか。まだ一時間以上もあるわ。

俊五　（新聞を見ながら）「諸事進んで宜敷、緣談整ふ。」か、こりや旨いぞ。

瑠璃子　叔父さん。何を讀んでゐるの。

俊五　「今日の吉凶判斷。」つてところを讀んでゐるのさ。

瑠璃子　叔父さん。お嫁さんを貰ふんですか。

俊五　どうして。

瑠璃子　「緣談整ふ。こりや旨い。」つて、喜んでゐるぢやありませんか。

俊五　なあに、こりや他人の運勢だ。

瑠璃子　叔父さんは呑氣ね。他人の運勢を見て喜んでるなんて。それよか自分のを見たらいゝぢやありませんか。

俊五　ご念には及ばないよ。自分のは眞先に見ちまつた。「南暗劍、本日殺生禁物、喧嘩口論すべからず。」つてんだ。少し悲觀したな。

瑠璃子　まるで格言ね。

俊五　本日でなくつても、殺生喧嘩口論は惡いだらう。

瑠璃子　だつて叔父さんならやりかねないからよ。

俊五　馬鹿をいへ、ところでおまへだ。

瑠璃子　何がよ。

俊五　運勢さ。

瑠璃子　運勢なんか見なくつたつていゝわよ。

俊五　いやさう遠慮するな。見料は無料だ。おまへは二黒だつたかな。

瑠璃子　そんなこと何だつていゝぢやありませんか。

俊五　おい隱すと爲めにならんよ。

瑠璃子　威したつて駄目よ。

俊五　おまへ年位いつたつていゝだらう。別に器量は下りはしまい。かう見えても俺はなか／＼親切なんだよ。

瑠璃子　そんなに親切氣があつたら「緣談整ふ。」つて方のために精々骨を折つてあげたらいゝぢやありませんか。

俊五　だから骨を折らうと思つてゐるんだ。それにはおまへの運勢が必要なんだよ。

瑠璃子　どうしてあたしの運勢が必要なの。叔父さん一體その「緣談整ふ。」つて運勢の方はどなたなの。

俊五　辻君さ。

瑠璃子　あら辻さん！

俊五　そんなに息をはずませなくつたつていゝ。

瑠璃子　知らないわ、そんなこと。叔父さん、辻さん奥さんをお貰ひになるの。

俊五　貰つたらいゝだらうと思つてゐるんだ。

瑠璃子　まあ呑氣な話ね。それぢや叔父さんがさう思つたつて、辻さんはどう思つてゐるか分りはしないわ。

俊五　そりやさうだが、いゝのがあつたら貰ふだらう。

瑠璃子　そんならいゝお方を探してあげるといゝわ。

俊五　おまへ大層澄ました挨拶をするね。
瑠璃子　別に澄ましてなんかゐはしないわ。
俊五　おい〳〵、瑠璃子。
瑠璃子　なに。
俊五　あのな。
瑠璃子。え。
俊五　(瑠璃子の顏を眺めながら)かう見てゐると若い女は何のことはないマシマローだね。
瑠璃子　まあ、ひとを。
俊五　かう柔かいふわ〳〵したものが白い粉の中にくるまつてゐる工合は、全くさうぢやないか。
瑠璃子　叔父さん、大抵になさい。(つんとしてあらぬ方を向く)
俊五　そんなにつんとして明後日の方を向かなくつたつていゝぢやないか。おい〳〵。方向轉換をやつたつて駄目だよ。とんがつた口がみんな鏡に映つてゐるぢやないか。
瑠璃子　いゝわよ。
俊五　おい、餘談はさておきまして、一つ本題に立返らうぢやないか。
瑠璃子　知らないわ。そんなこと。
俊五　知らないわつて、おまへのことを話してゐるんぢやないか。

瑠璃子　ようござんすよ。
俊五　さう本人が氣抜けぢや困るね。
瑠璃子　え、あたし氣拔けよ。
俊五　ぢや一つ目が醒めるやうな活をいれてやらう。おい瑠璃子。おまへ辻君のところへお嫁に行かないか。
瑠璃子　そんなこと藪から棒にいはれたつてあたし分りはしないわ。
俊五　分らなければ萬事この親切な叔父に任せるかい。
瑠璃子　(無言)
俊五　默つてゐるのは承諾と認めて差支へないだらうね。
瑠璃子　あらそんなこと……。
俊五　困るかい。
瑠璃子　困りはしないけれど……。
俊五　そんならいゝぢやないか。
瑠璃子　だつて……あたし……叔父さん……
(と、唐紙の向うで「ご免。」といふ聲がする。瑠璃子はあわてゝ、座敷の隅に隱れる。間もなく醫學士辻令一が入つて來る。)
俊五　やあ、辻君か。今の下りで來たんですか。僕たちは今度の上りで立たうと思つてゐるんです。
辻　東京へお歸りですか。
俊五　お蔭で兄の病氣も大分よくなつたから、僕達は一先

づ引上げようと思ふんです。

辻　さうですか。

俊五　おい瑠璃子。辻君が來たよ。何だつて隱れつちまふんだ。

辻　瑠璃子さんがゐたんですか。

俊五　今盛にマシマローの製造をやつてゐたんだよ。君。

辻　お菓子をこしらへてゐたんですか。それはご馳走ですね。

俊五　うん。君に捧げる最上のお菓子をこしらへてゐたのさ。おい。瑠璃子、出て來ないか。あいつ恥かしいんだな。へゝゝゝ。

辻　（俊五の言葉に耳を貸さぬものゝ如く）先生は奧ですか。

俊五　いや、多分書齋でせう。

辻　えつ、もうお起きになつたんですか。

俊五　病氣が直つたのに寢てゐる位たまらないことはないつて、さつき書齋へはいつて行きましたよ。

辻　それはとんでもないことだ。

俊五　まださう動いちや早過ぎますか。

辻　早過ぎるどころぢやありません。絶對安靜にしてゐなくちやいけません。

俊五　だが五十日も寢つきりにしてゐた病人が起き出せるやうになつたにも係はらずなほ絶對安靜を強ひるのは少し殘酷ですね。

辻　起き出せるやうにはなりましたが、先生はまだ全快したとはいへないのです。

俊五　しかし少し位の運動はいゝでせう。

辻　餘病をひき起してゐなければかまひません。しかし先生は今現にその餘病に侵されてゐるのです。此病氣には運動は絶對にいけないのです。どうも先生のやうな高熱の惡疫にかゝると、その後で兎角餘病を續發しがちなので困るのです。

俊五　さういふが、君。兄は病後大分肥つたぢやないですか。

辻　いゝえ、あれは肥つたんぢやありません。むくんだのです。僕はそれで少なからず心配してゐるのです。

俊五　さうかね。それぢや起き出して爲事なんかやるのは非常に危險だな。

辻　え、危險ですとも。

俊五　だが兄の爲事といへば君もたしか一緒にやつてゐるんでしたね。

辻　問題が化學と醫學との兩方に跨がつてゐるものですから、僕もお手傳してゐます。

俊五　大分進捗したんですか。

辻　やうやく纒まりかけた時に、突然先生が今度の大患にお罹りになつたものですから、中止の形になつてゐますが、實は今一息といふところなのです。これが發表されると醫化學界に大革命を起す研究なのですが實に殘念です。

俊五　それぢや兄が爲事を急ぐのは無理はない。それでなくつてさへ兎角病後つてものは、空想が強くなつて、何事にもあせり勝ちのものなんだから。

辻　それはさうですけれど。(立上る)

俊五　兄のところへ行くんですか。

辻　え、さうです。

俊五　矢張り絶對安靜を強ひるんですか。

辻　無論醫者として僕はそれをいはない訣にはいきません

(辻奥へ這入る。)

俊五　(瑠璃子に)おい、マシマロー。何故出て來ないんだ。お客樣が來たらお菓子は眞先に出るのが當りまへぢやないか。

瑠璃子　叔父さんはそんなことをいつて調戯ふんですもの、わたし出られはしないわ。それに何だわ。辻さんはお客樣だなんて他人行儀にしては却つて惡いことよ。今ぢやうちの人も同じなんですもの。

俊五　それやさうだ。殊におまへにとつては別してその感が深いよ。

瑠璃子　あらいやだ。またそんなことを。だつて他人扱ひにしちやいけないつて先生がさう仰しやるんぢやありませんか。

俊五　そりや兄は前からさういつてゐる。そして今度はおまへがいよ〳〵それを實行することになるのだ。な、さうぢやないか。

瑠璃子　知らなくつてよ。

俊五　だが辻君がうちに出入りしてからまだ一年にもならないが、全く他人のやうな氣はしないな。

瑠璃子　え、そりやその訣よ。辻さんがご親切なんですもの。本當に親身も及びませんわ。今度の先生の看護だつてさうでせう。

俊五　實際今度は辻君がゐなかつたらそれこそ大變だつた外の醫者だつたらとてもあんなに盡してくれやしない。

瑠璃子　ですがね叔父さん。あの時先生が辻さんをお入れしなかつたらどうでしたらう。

俊五　あの時つて、何かい。辻君がやけ酒を飲んで狂ひ廻つてゐた時かい。

瑠璃子　え。

俊五　あの時の辻君はひどかつたな。今とはまるで別人だつた。

瑠璃子　でも無理はありませんわ。自分のおもつてゐた人が外へお嫁に行つてしまつたんですもの。辻さんのあの時の心持はかうもあつたらうかとおもふとあたし涙がこぼれますわ。
俊五　おまへ大分同情するね。
瑠璃子　だつてお氣の毒ぢやありませんか。
俊五　しかし誰が惡いつて訣でもないのだから爲方もないさ。幸に兄が辻君をうちに出入りさせるやうにしたので、あの事件も先づ目出度落着したといふものだ。
瑠璃子　けれども先生だから出來るやうなものゝ、外の人だつたらとてもあんなことは出來ませんわね。
俊五　うん、さうだな。いくら辻君が氣の毒な地位にゐるからといつて、自分の細君の戀人だつた人をうちに出入させるものは鳥渡あるまいね。
瑠璃子　ですが、その三人が何事もなく、美しい關係を續けてゐるといふのも類がありませんわ。
俊五　そりやさうだ。ところでおまへ、支度はもう出來たのか。
瑠璃子　これで着物さへ着てしまへばもういゝの。
俊五　冗談いふな、着物さへ着てしまへばつて、おまへが着物を着るには半日もかゝるぢやないか。早くしないか。汽車に乘り遲れてしまふぜ。

瑠璃子　叔父さんだつてまだ着換へてゐないぢやありませんか。
俊五　己は直ぐに着かへる。さあ〳〵、早くしないか。早く。（せき立てる）
瑠璃子　（はき〳〵と）はい〳〵。
（二人着物を着かへる爲め奧に行く。）
（辻は不快さうに奧から出て來る。そして玄關の方へ去らうとすると丁度室に入つて來た智佐子と出逢ふ。）
智佐子　まあ辻さん。いついらしつたんです。
辻　今しがた。
智佐子　あら何だつて鞄なんか持つていらつしやるの。下においてゆつくりなすつたらいゝぢやありませんか。
辻　僕は歸らうと思ふんです。
智佐子　あなた今來たと仰しやつたんぢやないの。それだのにもう歸るんですつて。
辻　でも歸るより外はないぢやありませんか。ご病人がゐなければ、
智佐子　先生は書齋にいらつしやらないんですか。
辻　をりません。
智佐子　では散歩にでも行つたのかもしれませんわ。今探しにやりませう。
辻　それには及びません。

智佐子　どうして。

辻　先生は僕の言葉を此頃は少しも用ゐてくれません。多分僕を信用しないからなんでせう。

智佐子　そんな筈はありませんわ。まあ、あなた何だつて立つてなんかいらつしやるの。お坐んなさいな。もう直きお晝ですからご一緒にお飯を戴きませう。さ、支度をさせますから、あなた何になさいます。

辻　僕は何もいりません。

智佐子　遠慮なんかなさることはないぢやありませんか。

辻　僕は何も欲しくないのです。

智佐子　あなた、どうして此頃はさうよそ〴〵しくなさるの。

辻　別にそんなことはありません。

智佐子　辻さん、あなたもつと近しくして下さいませんの。

辻　もつと近しくですつて。

智佐子　え。

辻　そんなことは出來ません。

智佐子　何故出來ないのです。出來ないことはないぢやありませんか。

辻　（改つて）奥さん、いまは兎に角として、私はもとあなたをおもつてゐた男なのですよ。

智佐子　いゝぢやありませんか。先生はそれをご存じなんですもの。先生があなたをこゝにお入れしたのは二人にさういふ關係があつたからこそですわ。若しさうでなかつたら先生はあなたをお入れしなかつたでせう。

辻　しかし。

智佐子　まあお聽きなさいまし。先生は二人が睦じいのを見るとそれはお喜びなさいますのよ。あなたをお入れ申した甲斐があるつて。それだのにあなたが今のやうだと先生はどんなに氣持を惡くなさるでせう。あなたが出入りをなすつたはじめの頃でした。私は何といつてもかう變でしたから取すましてゐると、先生は却つて顏をしかめて、おまへがそんな風ではいけない。もつと慣々しく、何でもなかつた昔のやうに隔てなくしなければいけない。さうでなければ、辻はどんなに居にくいかしれないぢやないかつて、私は何度さういはれたかしれませんわ。あなたもそれを聽いて感謝してゐたのではありませんか。

辻　それは前のことです。今の話ぢやありません。

智佐子　前だつて今だつて同じですわ。

辻　奥さん。二人は何も強ひて近しくすることはないでせう。事實いま二人は近しくないのだし、また近しくするといつても、餘りに近しくなつたら却つて困ることが起りますからね。これでいゝぢやありませんか。

智佐子　あなた何かひがんでいらつしやるのね。

辻　僕はひがんでなんかゐやしません。
智佐子　いゝえ、さうです、あなたはそれが惡いのよ。そんなひがむやうな事をなさらないで……
辻　何故ぶつゝかつた話をしないのかといふのですか。併しあなたはもう奧さんですからね。
智佐子　それはあなた皮肉のおつもり。そんなことを仰しやる位なら何故あなたは私がこゝへ來る前に何もかも仰しやらなかつたのです。あなたはいくらでも私にいへたのではありませんか。それだのに私がこゝへ來てしまつてから、やけ遊びをなすつたり、そんな皮肉を仰しやるなんて男らしくありませんわ。
辻　なる程あなたから見たらさう見えるでせう。けれどもあの當時は僕にはどうしてもいへなかつたのです。ところがあなたがこちらの人になつたと聞くと、今更のやうに……
智佐子　もうその話は止めにしませう。
辻　え、止めませう。しかしたゞ一つ申しておきたいことは先生はご病氣だといふことです。
智佐子　何だつて改まつてそんなことを仰しやいますの。
辻　奧さん、病中病人の考へることは何だと思ひます。
智佐子　まあ、あなたは何をいはうと思つていらつしやるのです。

辻　半日程前でした。診察してゐると、先生は突然僕の手をとつて「辻君、君は私が憎くありませんか。」とお訊ねになつたんです。僕はあの時ぐらゐびくつとしたことはありません。何故先生はそんな問ひを發したと思ひます。奧さん、その問ひの陰に含まつてゐる意味をようく吟味してご覽なさい。
智佐子　先生はあなたを憎んでゐるといふのですか。先生は二人を疑つてゐるといふんですか。
辻　それでなければ先生は僕を今のやうには扱はない筈です。
智佐子　あなた、それは本氣で仰しやつてゐるんですか。そんなこと仰しやつては、あなた先生に濟みませんわ。
辻　僕は先生に濟まないやうなことは何もしてゐません。
智佐子　辻さん、あなたをこゝの家にお入れしたのは、誰だと思ひです。
辻　それは先生です。
智佐子　それに反對したのは。
辻　そんな內輪の細かいことは知りません。
智佐子　それは私です。私は出來るだけ反對したのです。貴方がどうならうとも自分獨り淸くならうとして私はあなたを恐れたのです。それだのに先生は何といふ心の廣いお方でせう。科は違つても同じ大學にゐる助手と教師

との間にいまはしい關係があるのは忍びないことだといつて、何と申してもきかないのです。ですから怨むのなら私を怨むのが正當ですわ。私はいくら怨まれても爲方がありませんが、どうか先生を怨むことだけは止めて下さい。

辻　僕は別に怨んでなんかゐやしません。

智佐子　先生はあなたを入れなければならない理由はありません。先生はあなたを邪魔した筈もなく、あなたから私を奪つた訣でもありません。それだのにあなたが自暴自棄になつたと聽くと、自分のやつた事が假令知らないでしたことでも、他人の運命を狂はせることは恐しいと仰しやつて、私と近しくするやうにいつて下すつたのではありませんか。先生はかういふお方ですのに、先生を疑ぐるなんて……それではあなた恩人に弓をひくといふものです。先生を傷けるといふものです。（泣く）

辻　智佐子さん。〳〵。

智佐子　先生に限つて決してそんな事はありません。あなた、育む人に育まれないのはひがみと申すものですわ。あゝいふ寛大なお方には心おきなくお世話になるのが、せめてものご恩返しと思つてをります。それだのに、それだのに、あなたがそんなお心とは知りませんでした。知りませんでした。（烈しく泣く）

（瑠璃子は服裝を改めて何の氣なしに入つて來たが、辻と對座しながら智佐子が泣いてゐるのを見て急に奥へ駈け込む。）

辻　智佐子さん！

（二人はその後影をちらと見る。）

智佐子　ご免なさい。私こんなにとり亂して。（涙をふく）

辻　貴方の仰しやる事はよく分りました。併しこんな所を見られて誤解でも受けると……

智佐子　え、もう止めますわ。ですが歸るなんて仰しやいませんでせうね。

辻　いひません。

智佐子　ぢや私お晝の支度をいたしますわ。

辻　僕は濱にでも行つて見ませう。先生を探しに。

智佐子　え、どうぞ。

（二人はそれ〴〵去る。）

（瑠璃子は悲しさうな顔をして出て來たが、急に小座敷に入つて忍び音に泣く。俊五は洋服に着かへ、誰かを探すものゝ如く座敷を通つて玄關の方に行つたがやがてまた出て來る。そしてきよろ〳〵あたりを見廻す、漸く瑠璃子を小座敷に見つけて。）

俊五　何だこゝにゐたのか。さ、出かけよう。何だつてそ

んなに顔を隱してゐるんだ。

瑠璃子　（涙聲にて）叔父さん。

俊五　何だ。

瑠璃子　さつきの辻さんの話、あれは止めて下さいな。

俊五　止めろとは。

瑠璃子　あの話はもう辻さんにしないで下さい。

俊五　己ぢや談判委員に不足だといふのかい。おまへに迄見限られちや己もいよ／＼お仕舞ひだな。

瑠璃子　さういふ訣ぢやないのよ。

俊五　ぢやどうしたのだ。

瑠璃子　わけは聽かないで頂戴。

俊五　それぢや分らないぢやないか。一體どうしたのだい。おい瑠璃子、おまへ辻君を愛してゐるのだらう。

瑠璃子　いゝえ、ちつとも愛してなんかゐやしませんわ。

俊五　可怪しいね。何だかさつぱり分らなくなつてしまつた。おまへ今の間に辻君と喧嘩した訣ぢやあるまい。

瑠璃子　いゝえ。

俊五　ぢやそんなにすねることはないぢやないか。

（智佐子入り來る。）

智佐子　俊五さん、お俥が來てよ。お支度は出來たんですか。

俊五　いや有難う。今出掛けようとしてゐるところなんです。

智佐子　（瑠璃子を見て）あら、瑠璃子さんどうなすつたの。

俊五　少し許り日附の病氣にかゝりましてね。

瑠璃子　叔父さん、何を仰しやるの。

俊五　いや、病氣は惡るかつたな。ぢや「眞珠の涙。」と訂正するか、どうも少し活動寫眞の標題じみるな。

智佐子　あら何か特別な話がおありなの、瑠璃子さん。

俊五　え、實は少々ばかり。……

瑠璃子　叔父さん。（たしなめる）

俊五　あ、いゝよ／＼、話しちやいけないんだつけな。分つてる／＼。

智佐子　話しちやいけないつていふと尙聽きたいものね。

俊五　なにそれ程大したことでもないんですがね……

瑠璃子　叔父さん。

俊五　分つてるよ／＼、だがこのことは嫂さんの助けを借りるとより有效に運ぶんだがな。

智佐子　瑠璃さんの爲めなら私どんなことでも喜んでして上げてよ。

瑠璃子　いけなくつてよ／＼。伯母さんに話しちや。叔父さんはやく行きませうよ。汽車が出てしまふわ。

俊五　何そんなに急がなくつてもいゝ。もう俥が來てゐる

んだから。

瑠璃子　知らなくつてよ。叔父さん。いつ迄もそんなにぐづくづしてゐて。あたし。ひとりで先へ行つてしまふわ。

俊五　おい、さうぶん／＼するなよ。今己も行くから。待つておいでといつたら。

（瑠璃子はかまはず唐紙をあけて先へ去る。）

俊五　ねえ、嫂さん。

智佐子　え。

俊五　あなたにお話するには少し變なやうにも思ひますが。えゝと……

智佐子　分つてますわ。あなたの仰しやるのは辻さんと瑠璃子さんと一しよにしてやらうといふんでせう。

俊五　（感心して）ふむ。矢張嫂さん丈ありますね。

智佐子　その位分りますわ。實は私もこの事は考へないぢやありませんのよ。

俊五　至極良縁と思ふんですがどうでせう。

智佐子　さうですね。これが出來れば四方八方ようございますわ。

俊五　あなたも賛成ですか。

智佐子　是非こしらへたいと思ひますわ。いゝえ、こしらへなくつちやならないと思ひますわ。わたくし津村にも直ぐに相談して見ませう。

俊五　兄貴には僕も鳥渡會つて行きたいんだがな。

（瑠璃子唐紙を少しあけて顔を出す。）

瑠璃子　叔父さん、もう時間がない事よ。

俊五　さうか。（時計を見て）これは大變だ。俥を急がせなくつちや。

智佐子　津村には私からよく申しておきます。

俊五　ぢや何分頼みます。

（俊五と瑠璃子とは出掛る。智佐子は玄關迄それを送つて行く。）

（津村は庭口から徹を無理々々に引張つて這入つて來る。）

（徹の懷には青い梅の實が一杯つめ込められてゐる。）

津村　こつちへ來るんだ。來ないかといふのに。

徹　お父さん、ご免なさい、／＼。

津村　これはどうしたんだ。この懷の青い梅は。

徹　（泣きながら）貰つたの。

津村　貰つた。誰に。

徹　（無言）

津村　誰に貰つたといふのだ。

徹　（暫く默つてゐたが。やがて）ほんたうは。

津村　本當はどうしたのだ。

徹　ほんたうは拾つたの。

津村　何、拾つた。何處で拾つた。
（智佐子が這入つて來る。）
智佐子　あらお歸んなさい。徹さん、どうなすつたの。
津村　（徹に）何故おまへはこんなものを拾つて來るのだ。どうしてそんな貧しい心を起すのだ。
智佐子　徹さん、あなた梅が欲しいのですか。まだ梅は駄目よ。こんなに眞靑ぢやありませんか。こんなものよりお母さんがいゝものを上げませう。
（智佐子は徹に羊羹をやる。徹は受けない。）
智佐子　羊羹はおいやなんですか。
津村　いらなきや與るな（徹に）徹、その懷の梅をみんな出してしまへ。（徹は、梅を懷から出す）まだあるだらう。
徹　もうないよ。
津村　もう一つもないか。
徹　あ、一つもないよ。
津村　二度とこんなことをすると承知しないぞ。
智佐子　（徹の頭を撫でながら。）もうしませんわね。徹さん。（津村に）あの俊五さんと瑠璃子さん、たつた今お立ちになりましたわ。
津村　さうか。散歩に出たものだから會はなかつた。
智佐子　それから辻さんも先刻いらつしやいましたの。あなたがおゐでなさらないものですから濱の方へ探しに行きましたわ。
津村　（氣がなさゝうに）ふむ。
智佐子　お遇ひになりませんでして。
津村　遇はなかつた。
智佐子　辻さんはあなたが寢すんでいらつしやらないので。心配しておゐでゝしたわ。
津村　さう寢てばかりゐられるものか、病氣でもないのに。
智佐子　でも辻さんの仰しやることは。
津村　おまへは辻のいふことなら何でも承認するのだ。
智佐子　だつて辻さんはお醫者様ではございませんか。
津村　もうその話は止めにしてくれ。
（間。）
智佐子　（徹に）徹さん、あんがをなさい。そんなところにいらつしやらないで。
（徹は首を垂れ無言のまゝ、座敷に上る。）
智佐子　あの俊五さんがお立ちになる時あなたにお話があるつて申してをりましたわ。
津村　何の話だ。
智佐子　たしか瑠璃子さんのことですわ。
津村　瑠璃子がどうしたのだ。
智佐子　もう年頃ぢやありませんか。
津村　嫁にやつたらよからうといふのか。

智佐子　え。
津村　そりや私はあれの親代りのやうなものだから、何とか心配をしてやらねばならないのだが。
智佐子　ねえ、あなた。あなたから辻さんに言つて戴けないのでせうか。
津村　何を。
智佐子　瑠璃子さんをお嫁に貰はないかつて。
津村　辻にそんなことがいへるか。
智佐子　だつてあなたが一番いゝのよ。抑へがきいて。それなら辻さん屹度承知するわ。
津村　馬鹿なことをいへ。
智佐子　仰しやれないの。
津村　そんな押つけがましい事がいへるか。
智佐子　ぢや私から申しませう。それならいゝでせう。
津村　そりやおまへが云ふのを止める訣にはいかんが。
智佐子　こんないゝご緣はないんですもの。
津村　いや待て、それも矢張りいかん。
智佐子　私が話すんでもいけないんですか。
津村　いけない。誤解される恐れがある。
智佐子　そんな事はありませんわ。
津村　いや、辻をうちへ出入させたのは姪を押しつけるためだと思はれては心苦しい。

智佐子　誰がそんなことを思ふもんですか。
津村　いや、いかん。
智佐子　でもあなたはいつか仰しやつたぢやございませんか。瑠璃子を誰かいゝ人のところへやりたいつて。
津村　そりやさうはいつてゐたが、何も辻のところへやりたいとはいつてやしない。
智佐子　どうしてもいけないんですか。
津村　いかん。
智佐子　あなたはあちらを考へたり、こちらを思つたり、餘り考へ過ぎるからいけませんわ。そんなに考への厚着をなさると歩けなくなつてしまひますわ。
津村　お前こそ厚着をしてゐるぢやないか。もつと拔いで輕くなつてはどうだ。
智佐子　わたくし厚着なんかしてゐませんわ。あなた何をいつていらつしやるの。ほんたうに瑠璃子さんがお可哀さうですわ。あんなに眞劍に思つてゐるのに。
津村　瑠璃が可哀さう。私は瑠璃子よりもおまへの方が氣の毒だと思つてゐる。
智佐子　あら。どうして私が氣の毒なんです。
津村　智佐、おまへ誤魔化すな。
智佐子　わたくし誤魔化しなんかしませんわ。
津村　おまへ辻を恐れてるぢやないか。

智佐子　そんなことありませんわ。現に瑠璃子さんをお世話しようとしてゐる位ぢやありませんか。

津村　いや嘘だ。おまへは瑠璃子によつて辻を防がうとしてゐるのだ。おまへは心の眞實を隱さうとして色々なことをしてゐる。その位のことは私にだつて分つてゐる。何故おまへは瑠璃子や徹の蔭に隱れるのだ。

（徹は懷に隱してゐた青梅をそつと齧つてゐたが、ふと徹といふ語を聽いて驚いて食ひかけの果實を隱す。）

津村　（徹を見て）徹。何をしてゐたのだ。

徹　お父さん。ご免なさい。

津村　（つか／＼と徹のところに進み）貴樣まだ隱してゐるのだな。づう／＼しい奴だ。

（梅の實を奪つて庭に叩きつける。）

（智佐子はそれを見るとたまらなくなつて忍び音に泣き伏す。徹もそれに誘はれたやうに大聲に泣き出す。）

――幕――

第二幕

同じ別邸内の他の一室。かなり廣い日本間。上手に床、違棚がある。下手に押入。また室の向うは通り拔けの緣側。緣側の端には硝子戸が締つてゐる。硝子戸越に庭が見える。庭の先は海。第一幕より半月位あと。午後。

津村は籐の寢椅子に橫はつて讀書してゐる。何處ともなくヴァイオリンの音が響いて來る。床の違棚の置時計がゆるく四時を打つ。津村は書物を伏せて電鈴を鳴らす。答がない。再び鳴らす。猶答がない。

津村　（じれつたさうに）おい、誰もゐないのか。（また烈しく電鈴を鳴らす）

（遠くで「はあい。」といふ返事がして、やがて女中がやつて來る。）

女中　何かご用でございますか。

津村　何かご用ぢやない。今四時が打つたぢやないか。藥を持つて來ないか。

女中　はい。（去らうとする）

津村　毎日のことぢやないか。その位のことが氣がつかんぢや困る。

女中　はい。（恐る／＼去る）

（女中間もなく粉藥を持つて來る。）

津村　（それを見て）それぢやない。水藥の方だ。本當にしようがないな。妻はまだ歸つて來ないのか。

女中　はい。まだお歸りではございません。

（女中再び退場。水藥を持つて來る。）

津村　（藥を飮む）どうもいやな藥だ。（間）辻は昨日

も今日も來ないがどうしたのかな。
女中　左様でございます。どうなすつたのでございませう。
津村　（少し默考して）さうだ。大隅博士に來て貰はう。その方がいゝ。（女中に）おい、電報用紙を持つておいで。
（女中萬年筆と電報用紙を持つて來る。）
津村　（電報の文案をしながら）うるさいヴアイオリンだな。
女中　お隣りのお孃様が彈いていらつしやるのでございます。
津村　（無言のまゝ電報を認め終り女中に渡す）これを直ぐに出してくれ。
女中　はい。（去る）
（津村は再び讀書をしようとしたがヴアイオリンの音がいよ〳〵喧しいので不愉快さうに本を捨てる。暫くして女中がまた入つて來る。）
津村　何だ。妻が歸つて來たのか。
女中　いゝえ、あのお客様でございます。
津村　誰が來たのだ。
女中　黑川さんでいらつしやいます。
津村　黑川。それならこゝへ通してもいゝ。（籐椅子から下りて座につく）

女中　はい。（去る）
（間もなく女中に案內されて黑川が入つて來る。丁度ヴアイオリンの音も止む。次の會話の間に邪魔にならないやうに女中が茶菓を運ぶ。）
黑川　どうもご無沙汰をいたしてをります。何やかや取込んでをりましたのでついお見舞にも出ませんで。ご病氣の方は如何でございます。
津村　幸ひにチブスの方は直つたが、後がどうもはつきりしないで困る。
黑川　それはいけませんな。
津村　いや私としては全快したつもりでゐるのだが、辻は大事とりだものだから未だに六ケ敷い事をいつてゐるので弱つてゐる。散步すらしちやいかんといふのだからな。
黑川　さうでございますか。（見舞品を出しながら）先生、これは失禮なものでございますが。
津村　さういふ心配は無用にしてくれ給へ。ときに君のところではどうだ。もうそろ〳〵新婚の夢が醒めて子供でも出來る頃だね。
黑川　さうだと宜敷いんですが。（うつむく）
津村　どうしたのだ。夫婦喧嘩はまだ早過ぎるぢやないか。

黒川　（うつむいたまゝ）先生、私は離婚しようかと思つてゐます。

津村　一體どうしたのです。

黒川　私は自分の此苦しい胸をどう始末していゝか分らなくなつてしまつたので、先生に裁いて戴きたいと思つて上つたのでございます。

津村　裁くなんてことは素より私には出來ないが、兎に角聽きませう。で、離婚しようといふのには何か細君に缺點でもあるんですか。

黒川　いゝえ、妻には別に何も缺點はありません。

津村　すると氣が合はないとでもいふのかね。

黒川　一口に申せばさうです。私にはどうしても妻を愛することが出來ないのです。

津村　今の結婚は知らぬ者同志が急に一夜の間に一しよになるのだから、それが直ぐに離れるのは不思議はない。寧ろ一しよになつてゐる方が餘程不思議な位だが、しかし君のやうな教育のある者が氣が合はぬ位で離婚するのは私には贊成出來ませんね。

黒川　離婚の罪惡であることは私も十分承知してをります。しかし愛さない女を愛してゐるやうな振りをして暮して行くのはそれ以上の罪惡と思ひます。私にはどうしても嘘がついてゐられないのです。

津村　君にはずるい所がありますね。

黒川　（どきつとする）

津村　いや、勿論君に他に女があつて、そのために細君を捨てようとかゝつてゐるのだとは思ひません。

黒川　そんなことは絶對にありません。

津村　それは私も信ずるが、しかし君には細君といふものは離すことが出來るものだといふ考が、君の心の何處かに潛んでゐるのです。さうでせう。それでそんな氣になるのではないのですか。離婚が出來るものだから離緣しようといふのはそりや狡い考ですよ。

黒川　（默つて首をうなだれる）

津村　君、これが親子だつたらどうです。たとひ馬鹿な子でも、不具の子でも終生離緣は出來ませんよ。夫婦の關係は親子の關係だとかう思つたらどうです。

黒川　（うるみ聲にて）はい。

津村　君にはさう思ふことは出來ませんか。愛は努力ですよ。

黒川　はい。

津村　さう努めなさい。それは苦しいことに違ひない。しかしその苦しみに打勝つて行くところに無限の光輝があるのです。

黒川　（沈思の後）先生、私は今お話の親子といふことに

ついて非常に考へました。

津村　考へたとは。

黒川　人の世で親となり子となることは容易ならぬ關係です。それだのにこんな不和な夫婦の間に子供が出來たらその子供はどんな子供でせう。不具や低能兒はかういふ間柄に出來るのではないでせうか。假りにさうでないとしても自分の魂を自分が愛さないものに生ませるのは畜生道ではないでせうか。

津村　細君を貰つてからそんなことをいふのは無責任ぢやないですか。

黒川　さう仰しやられると一言もありません。併し私は責任を免かれようとして申してゐるのではありません。結婚の手續を忽せにした不明の罪は離婚者の極印と共に生涯身に引うけるつもりです。併し一旦その手續を誤つたものは、たとひ缺點を自覺しても、その誤りをどこ迄も續けて行かなければならないものでせうか。一度一しよになつた以上たとひ本質的に相合はなくともそれは離れてはならないものでせうか。愛しもせず愛されもしないものが一生無意味につながつて行くといふことは正しいことなのでせうか。

津村　しかし離婚は女を一人殺すことですよ。

黒川　さうです、ですから私には決斷がつかないのです。

自分の眞實に從はうとすれば人の妨げになり、人の妨げにならないやうにすれば一生嘘をついてゐなければなりません。

津村　（暫く默思を續く）君は今自分の眞實といひましたね。

黒川　はい。

津村　どれが自分の眞實か君にはそれが分りますか。

黒川　さ、さう申されますと：：

津村　自分の眞實が分る人は幸ひです。

（間。）

黒川　先生は今私を狡いところのある奴だと仰しやいましたが、私は全く救はれないエゴイストです。

津村　私は君を責めてゐるのではないのですよ。實は私を責めてゐるのです。私には狡いところが澤山にあるのです。それでつい君に迄あんなことをいつてしまつたのです。

黒川　先生に狡いところがあるなんてとんでもないことです。私は先生のことを思ふと恥しくつてたまりません。

津村　そんなことがあるもんですか。

黒川　（涙聲で）いゝえ、私にはとても出來ません。とても先生のやうな博大な心にはなれません。

津村　何がです。

黑川　（泣きながら）私には自分の妻さへ愛せないのに、先生は、先生は……

津村　いや、その話は止めてくれ給へ。そのことは今想ひ出したくない。

黑川　とんだ失禮を申しました。

（間。）

津村　黑川君、今私は君の離婚に反對したが實は私も離婚するかもしれんのですよ。

黑川　えつ、先生が。奧さんをですか。

津村　さうです。

黑川　どうしてゞす。先生も矢張り奧さんをお愛しになれないのですか。

津村　いや私は妻を愛してゐます。

黑川　では離婚なんかなさることはないぢやありませんか。

（徹が緣側を駈けて來る。）

徹　お父さま。

津村　何てす。お客樣にお辭儀をしませんか。

徹　（お辭儀をしないでもぢ／＼しながら）あの姉ちやんが來たよ。

津村　瑠璃子が來たのか。

徹　あ。

津村　お母さんも一しよだらうな。

徹　うゝん、姉ちやん一人つきりだよ。僕あつちへ行つて遊ばう。（また駈け出して行く）

（津村の顏に不快の色が動く。）

黑川　先生、私はお暇をいたします。

津村　さうか。まだいゝだらう。

黑川　身勝手のこと許りお話しいたしまして失禮いたしました。

津村　先刻のことは君もう一度考へ直して見てはどうかね。

黑川　はい。

津村　君の心持はよく分つてゐる。分り過ぎる位私には分つてゐる。しかし重大のことだからね。

黑川　はい。いろ／＼有難うございます。ではお體をお大事に。

（津村は女中を呼んで、黑川を玄關まで見送らせる。）

（瑠璃子が入つて來る。）

津村　おまへ一人で來たのか。

瑠璃子　いゝえ、俊五叔父さんと一しよに來たの。叔父さんは後から歩いて來るわ。あたしだけ停車場から俥で來たの。

津村　智佐とは一しよぢやなかつたのか。

瑠璃子　え。
津村　昨夜智佐を東京へ歸したのだがうちへは宿らなかつたのか。
瑠璃子　いゝえ、昨夜遲くいらしつたわ。
津村　それなら何故一しよに來ないのだ。
瑠璃子　でも伯母さんは、ご用がおありになるんだつて今朝早くおうちをお出になつたんですもの。あら伯母さんまだこつちへ歸つていらつしやらないの。可怪しいわねえ。どうしたんでせう。
津村　（不快げに）おい、瑠璃子、床をとつてくれ。
瑠璃子　はい。（押入から布團を出して敷く、敷きながら）この頃お體はよくないんですか。
津村　おまへはいつかこちらへ來たつきりその後一度も來ないね。何故見舞に來ないのだ。
瑠璃子　でも、あたし來にくいんですもの。
津村　何が來にくいんだ。來にくいことはないぢやないか。もう半月も來ないぞ。
瑠璃子　だつて。
津村　何がだつてだ。
瑠璃子　（布團をあらかた敷き終り、夜着の端をいぢり乍ら悲しさうに坐る）だつてあたし、辻さんに遇ふのが…。
津村　辻に遇ふのがどうしたのだ。おまへは平生辻は好きな筈ではないか。
（瑠璃子しく〳〵泣き出す。）
津村　瑠璃子。おまへどうしたのだ。急に泣き出したりなんかして。
瑠璃子　（泣きながら）だつてあたし。伯母さんのやうに綺麗ぢやないんですもの。
津村　何を下らぬことをいつてゐるんだ。
瑠璃子　伯父さん。あたし斷られたんです。
津村　斷られたとは。
瑠璃子　辻さんに斷られたんです。（わあつと泣き伏す）
津村　斷られた。何を斷られたんだ。
瑠璃子　（たゞ泣いてゐる）
津村　泣いてゐたのでは分らないぢやないか。（思ひ出したやうに）それはおまへの結婚の話か。
瑠璃子　（泣き乍ら）えゝ。
津村　では辻がおまへにはつきり斷りをいつたのか。
瑠璃子　いゝえ、あたし辻さんとそんな話一度だつてしたことはありませんわ。
津村　それではどうしてそれを知つたのだ。
瑠璃子　伯父さん、宥して下さい。私惡いことをしてしまつたのです。
津村　惡いこと。

瑠璃子　あたし盗み聽きをしたのです。辻さんと伯母さんとの話を盗み聽きしてしまつたのです。

津村　何故そんな不德義なことをするんだ。

瑠璃子　濟みません。私が惡いのです（泣き乍ら）お座敷にお茶を持つて行かうとすると、お二人が泣き乍ら何かお話をしていらつしやるのです。

津村　なに、泣き乍ら。

瑠璃子　その話といふのは私の事なんです。私は直ぐに立たうと思つたのですが、何だか自分の身の上の話だと思ふと恐いやうな氣がしながらもつい聞いて見たくづて、聞くともなしにみんな聽いてしまつたのです。

津村（獨言のやうに）あの時話すなといつたのに、たうとう話してしまつたのだな。（瑠璃子に）それで辻が斷つたのか。

瑠璃子　え。

津村　それはいつ頃の話だ。

瑠璃子　伯母さんがこの前東京へお歸りになつた時です。

津村　それならもう十日も前のことだ。智佐はたゞの一度もそんな話はしやしない。

瑠璃子　いゝえ、伯母さんが惡いんぢやありません。あたしが惡いんです。あたし器量が惡いんですもの。（泣く）

津村　そのときまだ何か外のことを話し合つてはゐなかつたか。

（瑠璃子泣いたまゝ俯伏して答へない。）

津村（稍烈しく）何か外のことを話してゐなかつたかといふのだ。

（突然庭口に俊五の聲が聞える。）

俊五　おい徹。そこの植木を引つこ拔いちやいかんよ。どうもいたづら坊主だな。（廊下に現はれる）兄さん、どうです、今日は。（ふと瑠璃子を見て）おいマシマローどうしたんだ。伯父さんの枕もとなんかで泣いてゐて。そんなに泣くとマシマローがとろけてしまふぜ。

瑠璃子（無言のまゝ泣いてゐる）

俊五　とろけた日にはおまへ食ひ手がなくなるからな。

瑠璃子（泣きながら）なくなつたつてよくつてよ。どうせ斷られた女なんですもの。

俊五　何をくだらんことをいつてゐるのだ。それよりも庭へ行つて徹を見てやれ。惡るさをして爲方がありやしない。（瑠璃子返事をせず）おい、行かないかつて いふのに。

（瑠璃子袂で眼をおさへながら澁々出て行く。）

俊五　辻君はもう來てゐますか。

津村　いゝや。

俊五　昨日來なかつたから今日は早く來るといつてゐたん

ですがな。可怪しいな。

津村　（皮肉に）　他に約束でもあるのだらう。

俊五　そんな筈もないと思ひますが。

津村　（暫くして）　辻も考へると氣の毒な男だね。

俊五　何だつて思出したやうにそんなことをいふのです。

津村　辻は智佐のことを本當に諦めてはゐやしないよ。

（ぢつと俊五を見る）

俊五　瑠璃子が何か下らんことを言つていつたんぢやないんですか。

津村　私は瑠璃子の言葉をとり上げる程さもしい人間ではない。

俊五　さうですとも。從つて辻君が嫂さんに對してどう思つてゐるかなぞとはお信じにならない筈です。

津村　不幸にしてそれはさう思ふことは出來ない。私はある確かなものを握つてゐるのだ。

俊五　何をですか。

津村　今こゝにそれをいふ必要はない。それよりも……

俊五　それよりも、以來辻君に出入りを斷然斷らうと仰しやるのでせう。

津村　いや、私にはそんなことは出來ない。

俊五　ぢや、どうするのです。

津村　私は離婚しようかと思つてゐる。

俊五　何ですつて。

津村　眞實に相愛してゐる二人が永久に一緒になれないのは不合理ぢやないか。

俊五　しかし。

津村　二人には何の罪もない。何處にも缺點がない。それだのに一生離れてゐなくつてはならないといふのは、一生苦しまなくつてはならないといふのは餘りに殘酷なことぢやないか。辻が瑠璃子を斷つたといふのは無理のないことだ。彼は嘘の結婚なぞは出來ないのだ。それ程一筋に智佐のことを思つてゐるのだ。それだのにその眞摯な心が一つの邪魔物の爲めに通じないといふのは不都合ではないか。

俊五　あなたの說はそつくりトルストイの「生ける屍」の思想ですね。

津村　さうだ。私は先頃あの戲曲を讀んで非常に動かされたのだ。動かされたといふよりは私は心から泣いたのだ。

俊五　病氣のせゐぢやないですか。

津村　何のせゐであつたつていゝ。私が感動したことは事實だ。で、あれは露西亞のことだから離婚は絕對に許されてゐない爲めに、主人公は生ける屍となつて身を隱し、自分の妻とその相愛の友人とを一緒にさせてゐるが、しかし日本では幸に離婚が許可されてゐるから私は

それを決行しようと思ふのだ。

俊五　けれど兄さん。

津村　この事は自分があの作を讀んだとき直ぐにも斷行すべきであつた。しかし一味の未練が自分を今日まで躊躇させておいたのだ。けれど一日送れば送る程二人を苦しめるばかりでなく、自分の不德を續けてゐると同じだからもう猶豫してはゐられないのだ。

俊五　しかし兄さん、「生ける屍」つてものはトルストイのお伽噺ですよ。

津村　お伽噺だとは。

俊五　あのなかの人間は飯を食つてゐないといふのです。

津村　人間は飯を食つて生きてゐるんぢやない。もつと大事なものによつて生きてゐるんだ。

俊五　何によつて生きてゐるにしても、それが行爲に高まらぬ以上シヤボン玉と同じことです。

津村　では口先だけだといふのか。さうでないために自分は今離婚しようといつてゐるのではないか。

俊五　けれど兄さんが離婚したからつて二人は一緒になるとは限りませんよ。

津村　いや、二人は私の好意を無にしてはくれぬ筈だ。そんな遠慮はいらぬ事だ。第一おまへにはあの氣の毒な人が見えないのか。

俊五　そりや私にも見えてゐます。

津村　それなら溺れてゐるものは救ふのが道ではないか。

俊五　あなたは溺れてゐるといはれますが、水につかつてゐるからといつて必ずしも溺れてゐるとはいはれません。泳いでゐるのかもしれませんよ。

津村　泳いでゐるのならあんなに苦しんではゐやしない。

俊五　では溺れてゐると假定して、一人が溺れてゐるからといつて、もう一人が溺れなければならん義理はないぢやありませんか。

津村　度すべからざるエゴイストだ。おまへは溺れてゐるのを見過して行かうといふのか。

俊五　兄さん、溺れてゐるのは寧ろあなたですよ。

（智佐子いそ〳〵と這入つて來る。）

智佐子　たゞ今。どうも遲くなりまして。

（津村は智佐子に返事をしないで、無言のまゝ布團を被つて寢てしまふ。）

俊五　嫂さん、あとの雁が先になつてしまひましたね。

智佐子　（津村の布團の裾を直しながら）え、これでも一生懸命に早く歸つて來たのよ。久しぶりで東京へ歸るといろんな用があるんですもの。あなた寒くはありませんか。もう一枚布團かけませうか。

津村　（返事をしない）

（女中食膳を持つて來る。）

女中　（先づ俊五に向ひ）　あのお使ひの方がお見えになりました。

俊五　うん、木村から來たんだらう。どうれ。（立上つて出て行く）

女中　奥樣、あの先生のお食事が。

智佐子　あゝさう。そこに置いていつて頂戴。

（女中食膳を置いて行く。）

智佐子　あなた召上りませんか。お食事が出來ましたわ。

津村　（寢たまゝ）　またスープと粥だらう。そんなものはいらん。

智佐子　召上りませんの。

津村　おい、ウイスキイを少し持つて來い。

智佐子　まあそんな刺戟の强いものを上つたら大變ぢやありませんか。

津村　もう大丈夫だ。

智佐子　いゝえ、いけません。あなたご病氣をどうなさいますの。

津村　病氣はもう直つた。

智佐子　そんなことはありませんわ。

津村　（急に起上り）　ではおまへはいつ迄も病氣にしておきたいのか。

智佐子　そんな分らないことを仰しやつちや困りますわ。

津村　おまへは私にものを食べさせせんのだな。

智佐子　どうしてあなたそんなことを仰しやるんです。だからスープとお粥を召上れつて申してゐるぢやありませんか。

津村　そんな滓みたいな物何になる。いゝからウイスキイを持つて來い。

智佐子　いけません。何と仰しやつても上げられませんわ。あなたは今が大事のところなんではありませんか。刺戟性のものを上げてはならないつてあたし辻さんから嚴しく申されてゐるんですもの。

津村　辻が何だ。助手ぢやないか。教師は助手の命令に從はなければならないのか。

智佐子　だつてご病氣の時は醫者のいふ通りにしなければ。

津村　いらん。それならもういゝ。鹽を持つて來い。

智佐子　食鹽ですか。

津村　何故そんな妙な顏をするのだ。食鹽でも掛けなかつたらこんな粥は食へんぢやないか。

智佐子　だつてあなた。

津村　食鹽も食つちやいかんといふのか。

智佐子　だつて止められてゐるんですもの。

津村　人間に一番大切な鹽さへ食つちやならないのか。こんな風にしてゐたら健康の者だつて大抵病氣になつてしまふ。
智佐子　そんな風に仰しやられては私困つてしまひますわ。あなた怒つてゐらつしやるのね。
（間。）
津村　智佐。辻は瑠璃子を斷つたさうだな。
智佐子　（力なく）えゝ。
津村　それを何故今日まで隱しておいたのだ。
智佐子　別に隱しておいた譯ではありませんわ。あなたは辻さんに瑠璃子さんのことを話してはならないと仰しやいましたから、申上げると却つて惡いと思ひまして。
津村　話すなとはいつた。しかし話した以上その返事を默つてゐろとはいはなかつた。何故今日まではいはなかつたのだ。
智佐子　ご心配掛けると惡いと思つたものですから。
津村　どうして私が心配するのだ。本當の事をきいて心配する筈がないぢやないか。
智佐子　それはさうですけれど。
津村　それともその間には話しにくい事情でもあるのか。
智佐子　そんなことはありませんわ。
津村　（突然智佐子の手をとり）おい。本當のことを云つてくれ。私はおまへの惡いやうにはしやしない。
（と、徹が泣きながら駈け込んで來る。續いて瑠璃子が來る。津村は急に智佐子の手を離しうしろ向きになつて寢てしまふ。）
徹　いらない〳〵。畜生。
（丁度そこへ徹とは反對の方から俊五が歸つて來る。）
俊五　どうしたんだ、またやんちやをいつてゐるな。
瑠璃子　あたしもう徹さん厭やだわ。分らないことばつかしいつてゐるんですもの。
智佐子　（徹に）そんなこと仰しやつちやいけませんよ、徹さん。さ、こちらへいらつしやい。お母樣がゐない間よくお留守居をしてゐましたからご褒美を上げませう。はるや、その包みを持つておいで。
（女中奥で返事をする。やがて包みを持つて來る。）
智佐子　徹さん、お母樣が何を買つて來たか當てゝご覽なさい。飛行機でせうか。軍艦でせうか。
（徹は普通の子供のやうに打解けないで默つてゐる。）
女中　さあお坊ちやま。當てゝご覽なさいまし、お母樣のお土産は何でせうね。獨樂でせうか。
智佐子　いゝえ、違ひますよ。
俊五　それぢや大きな太鼓かな。
智佐子　いゝえ、違ひますよ。

女中　それでは何でせうね。お坊ちやまなら屹度當りますよ。さ、仰しやつてご覽なさい。

（徹は智佐子の方へ顏を反けて答へない。）

俊五　それぢやサーベルかな。

智佐子　サーベルは坊やは大きいのを持つてゐますね。

女中　では武者人形。

俊五　ワン／＼。

女中　お馬。

智佐子　（包みから玩具を出し）お馬よりももつと早い電車よ。

瑠璃子　まあいゝ電車だこと。徹さん、早くお母樣のところへ行つて貰つていらつしやい。（と徹を智佐子の方へ押しやらうとする）

智佐子　さ、こつちへいらつしやい。

（しかし徹は臀込して智佐子の方へ行かうとしない。）

智佐子　電車ぢやおいやなんですか。

（徹は無言のまゝ頭をふる。）

智佐子　お厭でなかつたら、さ、これをもつてお遊びなさい。「チン／＼、出ますよ。」ほうら、こんなによく走るでせう。（と電車を動かして見せる）

（徹は電車の走るのを見て欲しさうな顏附をしてゐながら、智佐子のそばに行つて玩具を貰はうとしない。）

俊五　徹、おまへは何故さう偏屈なんだ。どうして「お母さま頂戴。」といふことがおまへにはいへないのだい。

智佐子　（電車を取上げ徹のところに進み）さ。上げますから、今度は徹さんが動かしてご覽なさい。

女中　せつかくお母樣が買つて來て下すつたのに、お坊ちやまお貰ひにならないのですか。

瑠璃子　駄目よ徹さんは。ひねくれやさんなんだから。

智佐子　いゝえ、さうぢやありませんわ。まだ私の愛が足らないんですわ。

瑠璃子　そんなことありませんわ。

智佐子　愛さう／＼と努めてはゐるんですけれど矢張りまだ駄目なんですわね。

俊五　嫂さん。それはよくないですね。

瑠璃子　どうして伯母さんが惡いんです。伯母さんはあんなに一生懸命に愛さうとしてゐるんではありませんか。それだのに徹さんは……

俊五　いや、その「愛さう」がよくないのだ。

瑠璃子　ぢや可哀がつちやいけないんですか。

俊五　まあさうだね。

智佐子　私どうしたらいゝのでせう。

俊五　つまり愛さうとしないやうになればいゝのです。勿論それは愛さないといふことぢやない。ありつたけの力

を以て愛することではあるが、愛さうとするとか、愛さねばならぬとかいふのとは全然違ふのです。

智佐子　そのお話をもつと私にして戴けないでせうか。

俊五　さういはれると話しにくゝなるが、私のいふ意味はかうなのです。今あなたは愛さうと努めてゐるといはれましたが、それではあなたは愛を借金のやうに考へてゐるのです。裸一貫で生れて來た人間が元來そんな借金を脊負ひ込まされてる覺えがないぢやありませんか。

智佐子　でも私には借があります。

俊五　あなたとしては義理の母として徹を愛さなければならないといふのですか。わたしからいはせるとそれがそもそも間違つてゐると思ひます。それだから徹はどうしてもなづんで行かないのです。嫂さん、實際の母子をご覽なさい。母親は愛さねばならなくて子を愛しやしませんよ。愛さうと思つて愛しやしませんよ。ねばならぬも、おもふも、つとめるも何にもないのです。愛は是非ともこゝまで行かなければ駄目だと思ひます。

智佐子　(無言)

俊五　愛さうと思ふのは他人の愛です。愛さうとも何とも思はぬ愛にお這入んなさい。さうなるとこの愛は打つことも出來ます。蹴ることも出來ます。ところがあなたには徹を打つことが出來ますか、出來ないでせう。蹴ることが出來ますか。出來ないでせう。それがもう他人の子だといふ考があるからです。嫂さん、本當の愛は打つことも出來るんですよ。

智佐子　有難うございました。今思ふと私の愛はせい〴〵乳母か子守の愛でした。

(此會話の間、徹は物欲しさうな眼つきをして電車を眺めてゐたが、智佐子の方を時々盗み見ながら、少しづつ電車を突ついて見たり動かして見たりやり始める。それが漸次大つぴらに弄ぶやうになる。)

瑠璃子　(ふとそれを見て)　徹さん、あんなに依怙地にしてゐたらたうとう電車を貰つてしまつたのね。

(徹は餘念なく電車を動かしてゐたが急に手を放してしまふ。)

俊五　徹、何故電車を止めてしまふんだ。欲しくないのか。そんなことはないだらう。欲しいのなら欲しいと言はないか。子供は正直にしなければいけない。そんな手を引込めてしまふ奴が何處にある。さ、叔父さんが貰つてあげるからこつちへおいで。(徹の聲色を使つて)「お母様、どうか此電車を僕に下さいな。」

智佐子　え、上げますとも。上げますとも。(と電車をとつて徹に渡す)

俊五　さ、お母様から頂戴したよ。今度はこれはおまへの

ものだ。だから此電車をもつて面白く遊ぶんだ。いゝかい。「え、須田町。本郷本所九段兩國青山新宿方面行は乘換。込み合ひますから懷中物ご用心。え、出ます。チンチン。」（と徹の手にある電車を徹と一緒に動かす）そうれ、あんなによく走つて行く。やあ。あすこで停電しちまつた。さ、徹、今度はおまへひとりでやつてご覽。

（徹は電車を持つて遊ぶ。）

智佐子　まあよかつたこと。かうやつて遊んでくれると私どんなに嬉しいかしれませんわ。

女中　あの奧樣、晩のお支度はどういたしませう。

智佐子　さうね。

俊五　一つ芋餡かなんか食はしてくれませんか。

智佐子　あなたのご註文はいつも餡ばかりね。

瑠璃子　え、さうよ。餡は叔父さんのご親類なんですもの。

俊五　どうして。

智佐子　叔父さんは頭ばつかり大きくて手がないぢやありませんか。

俊五　（兩手を前に出し）俺にはちやんと手はあるよ。

瑠璃子　その手はあつたつて、ちつともお爲事をなさらないぢやありませんか。いやに頭ばつかり發達してしまつて。

俊五　何だ。それで餡か。

瑠璃子　おゝいゝ氣持だこと。あゝ清々した。

俊五　これがマシマローの敵打かい。

瑠璃子　（殊更に空を眺めて）叔父さん。空模樣が何だか惡くなつて來たのね。

智佐子　本當に空が暗くなつて來たこと。雨が降らない内に早くご註文の品をこしらへませう。

瑠璃子　あたしもお手傳するわ。

（徹は廊下を電車を押乍ら奧へ這入る。智佐子も瑠璃子や女中と一緒に續いて這入る。）

（津村は一同に背中を向けてゐたが、此時急に向直つて俊五に話しかける。）

津村　俊五。

俊五　何です。

津村　今おまへは愛さうと努めるのは惡いといつたね。

俊五　え。

津村　あれは間違つてゐやしないか。

俊五　どうしてゞす。

津村　（起上る）

俊五　寢ながら話したらどうです。さうお起きにならん方がいゝでせう。

津村　いや大丈夫だ。成程おまへがいふ通り母が子を愛するには努力はいらない。それには本能の愛があるからだ。

けれども繼母が繼子を愛する場合にはさうはいかない。兩者の間には本能の愛がないのだから繼母は努めて繼子を愛するやうにしなければ二人の間は永久に調和のとれる時はないぢやないか。

俊五　それで。

津村　眞の親子の間では愛は本能から來るから誰にも出來る。併し繼母が繼子を愛するとか、他人が他人を愛する場合には、それが全く缺けてゐるのだから誰にも出來るといふ訣にはいかない。その誰にも出來ぬ事を努力によつてやつて行くところに無限の價値があるのではないか。

（咽喉を濕す爲めに殆んど無意識に手を延ばしてスープを飮む。）

俊五　それは如何にも兄さんの仰しやる通りです。併し己を空しくして他に努めるといふのではなしに、それは自己を充實完成することでなければならないと思ひます。

津村　おまへは直ぐ利己的な言動を發するね。

俊五　いゝえ、兄さんが餘りに利他的なのです。愛といふものは私はさういふものだとは思ひません。一體兄さんのやうに暮してゐたら苦しくはないですか。

津村　苦しい。

俊五　もつと樂に暮しちやどうです。

津村　ぢやどうすればいゝのだ。

俊五　どうすればつて、さうですね。愛は兄さんの考へてゐるやうに苦しいものぢやないだらうと思ふのです。恐らく苦しいものであつたら愛ではありますまい。

津村　もつと詳しく聽かう。

俊五　私のいふ愛といふのは自ら瘦て他に施するのではなくつて、自ら肥え、それがおのづから他を肥すものをいふのです。丁度後光のやうなもので、その人の力から迸り出たものを愛といふのです。

津村　ではおまへのやることは消極的だな。

俊五　いゝえ、非常に積極的です、愛が大きくなるためには自分が十分肥えなければなりません。自分が肥えるためには多量の營養をとらなければなりません。

津村　では矢張り努力をするのではないか。（スープを一口飮む）

俊五　え、それは無論しなければなりません。たゞ異なるところはあなたはそれを他に努めますが、私は自己に努めるのです。

津村　そんな言葉尻の爭ひなどはどうでもいゝのだ。

俊五　さうです。その通りです。要するに生きることが愛であり、愛であることが生きることであればいゝのです。つまり他人が苦にならないやうにならなければ駄目だといふのです。

津村　それぢやおまへは自分を捨てゝ他を救ふといふことをしないのか。

俊五　兄さん、あなたはひどく利他主義にかぶれてゐますが、それを押しつめて行くと今手に持つてゐるスープなどは飲めなくなりますよ。

津村　どうして。

俊五　スープつてものは何ぢやありませんか、生きてゐる雞を裂いてその肉や骨をぐつ〳〵煮出したものでせう。さうすると自分を捨てゝ他人のために盡すといふ主義の人にはちよつとそんな事は出來ない訣ですね。

津村　なに。（スープを持つ手が自ら顫へる）

俊五　兄さん、生きるつてことは一體殘酷なとなんですよ。

津村　貴樣は自分さへよければ他人はどうなつてもかまはないのか。世の中は自分だけで生きてゆけると思ふのか。馬鹿。（やにはにスープの入物を俊五に擲きつける）

俊五　何をなさるのです。

津村　俊五、かうして他が自己に關係して來た時おまへはぢつとしてゐられるか。

俊五　兄さん。

津村　他人との交渉が起つた場合おまへは一體どうするのだ。それに敵對するのか、愛するのか。

俊五　兄さん。

津村　何だ。

俊五　あなたは頭が亂れてゐます。

津村　（興奮して）うん、亂れてゐる。亂れざるを得ないぢやないか。

俊五　もつと落ちついたらいゝでせう。

津村　落ちつけ。うん、落ちつきたい。併し私には落ちつけないのだ。さつき黑川が來て自分の眞實に從はうとすれば人の妨げになり、人の妨げにならないやうにすれば一生噓をついてゐなければならないといつたが、あれは黑川一人の問題ぢやない。實は私の問題なのだ。黑川はそれを裁いてくれと迫つたが、黑川を裁くどころか私は自分を裁いて貰はねばならないのだ。

俊五　一體どうしたといふのです。

津村　賢聖は何をやつても人の妨げにならないのに、私のやることは何故人の妨げになるのだ。何故虛僞になるのだ。私は神を求めてゐる。私は神明に達しようとしてゐる。それだのに何故惡魔と握手しなければならないのか。何故天道が許されないのか。分らない。分らない。

（と床の上に悶え伏す）

俊五　（驚いて津村に近寄り）兄さん。

津村　（無言）

俊五　兄さん。しつかりなさい。

津村　私には何が何だか分らなくなつてしまつた。（急に身を起し弟の前にぴたりと手をついて）俊五、救つてくれ。この苦しい胸から救つてくれ。

俊五　兄さん。そんなことをなすつちや。

津村　さつきは亂暴なことをして濟まなかつた。あれは深く謝罪る。併しどうか敎へてくれ。私は今どうすればいいのだ。どうすれば救はれるのだ。

俊五　そんなに興奮しちや、兄さん。

津村　敎へてくれ。敎へてくれ。どうすればいゝのだ。どうすれば救はれるのだ。どうすれば救はれるのだ。

――幕――

第三幕

第一場

第一幕と同じ場面。廻り緣の一部には雨戸が閉つてゐる。

第二幕と同じ日の夜。外は雨が降つてゐる。俊五と辻と對座してゐる。

俊五　いや僕が惡かつたんだ。つまらん議論なんかしたもんだからすつかり激さしてしまつたのです。

辻　それで。

俊五　兄は今いふやうにいよ／＼興奮するし、君はゐないし困つてしまつてね。おど／＼してゐるところへ、突然大隅博士がやつて來てくれたのです。

辻　大隅博士が見えたのですか。

俊五　後で聽くと兄は博士のところに電報を打つておいたのださうだ。博士はこちらに用事もあつたとかで、電報をうけとるや否や直ぐに來てくれたのです。

辻　さうですか。それはようございました。さういふ際には是非僕が居なければなりませんのに申訣がありません。止むを得ない用事で昨日も來られず。今日もこんなに遲くなつてしまつて：：

（智佐子が這入つて來る。）

俊五　（智佐子を見て）どうしました。兄は寢ましたか。

智佐子　え、今やうやくうと／＼と眠りかけましたの。

俊五　さうか。それはよかつた。

智佐子　あなた夕ご飯が出來ましたわ。直ぐお上んなさいましな。ごた／＼したもんですから遲くなつてしまつて濟みません。

俊五　辻君、君もやりませんか。

辻　僕は途中でやつて來ました。

俊五　さうか。それぢやちよつと失敬。（去る）

智佐子　あなた今いらしつたの。大層遲うございましたね。

辻　よんどころない用事があつたものですから。――大隅博士が見えたさうですね。

智佐子　え、けれど誤解なすつちやいやですわ。先生はあなたを疑つてお呼びした訣ではありませんのよ。

辻　そんなことは何とも思つてやしません。それよりも博士の診斷はどうでした。

智佐子　あなたのご診察と同じですわ。

辻　腎臟炎だといふのですか。

智佐子　え。

辻　今まではご病氣でもないのに强ひて僕がご病氣にしておいたやうに疑はれてゐましたが、では、今度は先生も疑が解けたことゝ思ひます。腎臟炎といふ病氣は患者に病的症狀が分らないためにかういふ誤解を受けることが折々あるのです。殊に僕はさういふ誤解を受け易い位置にゐたのですから一層辛うございました。

智佐子　辻さん。先生のご病氣は直らないのでせうか。

辻　僕には何ともいへません。あまりご心配なさるといけないと思つて深くは申しませんでしたが、實はあなたが想像してゐるよりは先生はずつとお惡いのです。

智佐子　惡いと仰しやると？

辻　ひよつとしたらお生命にもかゝはるといふ意味です。

智佐子　えつ、そんなに重いのですか。でも何とか治療の道はないものでせうか。ねえ、辻さん。

辻　（默して答へない）

智佐子　（哀願するやうに）辻さん、何とかならないのでせうか。あなた一人が力なんですもの。

辻　併し僕には信賴を受けるだけの腕はありません。

智佐子　そんなことを仰しやられては……

辻　いゝえ、僕は投げてゐるのではありません。それはあなたが心配していらつしやるよりももつと心配してゐるのです。先生を全快させるのも不幸に導くのもみんな僕の責任なんですからね。それも普通の主治醫なら兎も角、僕は特殊の事情がある丈に人一倍苦しい立場にゐるのです。

智佐子　何かよい療法はないものでせうか。

辻　先生は僕のいふことを一つもきいてくれないから駄目です。

智佐子　今度はそんなことはありませんわ。大隅博士からも懇々注意をうけましたから。

辻　いや、假りに先生がそれを守つて下さるとしても僕には自信がありません。あの病氣には決定的の療法はまだ見つかつてはゐないのです。

智佐子　あゝ、どうしませう。

辻　僕はどんなことをしても先生を全快させなければなり

まん。それでなければ僕は立つて行けません。しかしどうしたらそれが出來るのか僕には分らないのです。

（間。）

智佐子（しんみりと）辻さん。

辻　何です。

智佐子　あなた瑠璃子さんを貰つて下さいませんか。

辻　それはもう前にはつきりお答がしてある筈です。

智佐子　それは知つてゐますけれど。

辻　それならもう訊かないでください。

智佐子　辻さん、あなたは先生のお體を見ても心はご診察にならないのですか。

辻　何ですつて。

智佐子　先生のご病氣の本體はあなたがお見立てになつたよりもつとずつと深いところにあると思ひますわ。それが根本ではないでせうか。

辻　ぢやあなたが治療をなすつたらいゝでせう。

智佐子　え、だから瑠璃子さんと一しよになつて下さいつてお願ひしてゐるんではありませんか。

辻　あなたは僕にそんなことがいへるんですか。少なくとも一度愛を向けたことのある男に。

智佐子　だつて悪いことぢやないんですもの、いゝぢやありませんか。辻さん、瑠璃子さんはそりやあなたを愛していらつしやいますのよ。

辻　僕はあんな無垢な處女を貰ふ資格はありません。僕はそんな立派な男ぢやないんです。

智佐子　あなた何をいつていらつしやるの。

辻　僕は墮落した人間です。やけ酒を飲んで歩いた時分は穢れた家にも出入りしました。穢れた女にも接しました。瑠璃子さんをお世話なさるのなら、こんな男よりももつと純潔な人にお世話をなすつたらいゝでせう。

智佐子（涙聲で）あなたをさうさせたのは私です。それを思ふと私は苦しくつて／＼たまりません。ですからせめて……

辻　ご親切は有難うございますがお斷りします。奥さん。そんな戀のとりもちなんかなさるよりもあなたにはもつとご心配なことがあるんですよ。

智佐子　だからその心配を取りのけようとしてゐるんではありませんか。ねえあなた、どうかお願ひですわ。

辻　僕はどうしたら先生のご病氣を全治させることが出來るか、それを心配してゐるだけでも一通りではありません。僕の立場がどういふ立場だかといふことはあなたもよく知つておゐでぢやありませんか。それだのにあなたは猶この上に僕を苦しめようとなさるのですか。

智佐子　いゝえ、さういふ訣ぢやありませんけれど、先生

はあなたが苦しんでいらしつた時、あなたのためにあんなになすつたのですから、今度はどうか先生のためにして上げて下さいな。ねえ辻さん。
辻　先生のためにつて、僕が結婚することですか。
智佐子　え。
辻　智佐子さん。（と急に女の手をとる）僕にそんなことが出來ると思ふのですか。
智佐子　もう何もいはないで下さい。私一生のお願ひですわ。
辻　（無言）
（と奥から瑠璃子が「伯母さま／＼。」と智佐子を呼ぶ聲が聞える。）
智佐子　あら私を呼んでゐる。（急に辻から離れ）では承知して下さいますわね。
辻　兎に角考へて見ませう。
智佐子　考へるなんていけないわ。是非さうするといつて下さい。
瑠璃子の聲「伯母さま／＼。いらつしやいませんか。」
智佐子　あら、また呼んでゐる。屹度先生が目を醒したんですわ。（辻に）頼みましたよ。ようござんすね。
（去る）
（雨烈しく降り出す。辻、默思をつゞける。）

——幕——

第二場

第一幕と同じ場面。第一場より數時間後。
津村病臥してゐる。傍に智佐子が坐つてゐる。枕もとに臺つきの電燈がともつてゐる。外は風雨いよいよ強く、折々電が閃き遠雷がきこえる。
津村　（床の中から）智佐、／＼。
智佐子　お呼びになつたんですか。
津村　おまへそこに居たのか。
智佐子　え、こゝにをりますわ。何かご用ですか。
津村　いや、おまへが居ないと思つたものだから。
智佐子　私はさつきから此處にをりますわ。
津村　さうか。
（間。風雨の響。）
津村　徹はどうした。
智佐子　もうとうにやすみましたわ。
津村　さうか。あれは依怙地な子でおまへには隨分面倒をかけるな。
智佐子　そんなことはちつともありませんわ。
津村　ねぢけた心は大人にさへあることだ。あれは子供のことだからどうか宥してやつてくれ。

智佐子　まあ、あなた何を仰しやいますの。
津村　普通の子のやうに快活に生れつかなかつた可哀さうな子だと思つて、どうかおまへ可哀がつてやつてくれ。
智佐子　え、私いつだつて可哀がつてをりますわ。
津村　私のゐない後もどうかその通りであつて欲しい。
智佐子　どうして急にそんなことを仰しやるの。私いやですわ。そんなこと仰しやつちや。
津村　つまらぬことをいつて惡かつた。宥してくれ。
智佐子　あなた大層沈んでいらつしやいますのね。
津村　そんなことはない。
智佐子　あら涙が。あなたどうなさいましたの。
（智佐子ハンケチで津村の涙を拭いてやる。）
智佐子　何か考へごとをしていらつしやつたのですか。考へごとはよくありませんわ。
津村　（起上りうしろ向きに坐る）おい、顔がむくんでゐるか。
智佐子　え、少し。
（間。）
津村　（智佐子の方に向き直り）おい智佐。私はもうあと一年なんだよ、
智佐子　一年つて。何がです。
津村　私の一生はあと一年か二年だといふのさ。
智佐子　そんなことはありませんわ。そんなこと誰にだつて分るもんですか。
津村　いや分るのだ。
智佐子　だつてあなたはつい先刻迄病氣ぢやないと仰しやつてゐたぢやありませんか。
津村　それは辻が何にも私にいつてくれなかつたからだ。
智佐子　あなた辻さんを疑つていらつしやるの。
津村　疑つてはゐない。しかし信用はしない。
智佐子　辻さんは駄目だと仰しやるんですか。
津村　いや彼は實によく盡してくれた。併し本當のことをいはないからいけない。
智佐子　そんなことはありませんわ。
津村　いや、さうだ、本當のことをいつては私に氣の毒だと思つてゐるのだ。
智佐子　どうしてゞせう。
津村　本當のことをいへばあなたは死にますといふより外はないからさ。
智佐子　あなたは何故急にそんなことを仰しやいますの。
津村　辻は私を落膽させまいとして何もかも隱しておいたのだ。しかしそれは私に對して當を得た爲方ではない。これは一生の大事だから私はさつき大隅博士に迫つて明細に病狀を訊ねたのだ。爲合せとあの人は本當のことを

いつてくれた。
智佐子　大隅先生が何んと仰しやつたか知りませんが、それだからといつてあの方の仰しやつた通りになるとは限りませんわ。
津村　それはさうだ。しかし。
智佐子　あなたは病氣はなほつたなぞと仰しやつて不攝生をなさるから、ご用心をなさるやうに威かしたのかもしれはしませんわ。
津村　或はさうかもしれん。それであれば寧ろ結構だ。しかし覺悟だけはしておかなければならない。
智佐子　もうそんな話、私いやですわ。
津村　いや、私は弱いことをいつてゐるのではない。もう一年か二年しか生きられないのだから、今こそ本當に生きなければならないと思ふのだ。
（間。）
智佐子　あなた何を見ていらつしやるの。
（津村無言のまゝ何物かを凝視してゐる。）
津村　おい、明りを消せ。
智佐子　明りを。どうなさるのです。
津村　私は自分の黒い影法師を見てゐるに堪へないのだ。
智佐子　（急に電燈を消す）かうすればいゝんですか。
津村　さうだ。かうなるといくらか心が落ちつく。
（間。）
津村　おい、智佐子。
智佐子　何です。
津村　もつとこつちへおいで。
智佐子　（無言のまゝ近づく）
津村　いや、もつと近くへ。
智佐子　（更に進む）あなたのお膝の前までまゐりましたわ。
津村　さうか。（間）かうして二人闇のなかに相對してゐると、おまへ恐くはないか。
智佐子　いゝえ。
（電がきらつと閃く。つゞいて雷鳴が聞える。）
津村　しかし顫へてゐるやうぢやないか。
智佐子　いゝえ、そんなことありませんわ。
津村　さうか。ではおまへに訊くが、おまへは本當のことをいつてくれるだらうな。
智佐子　何のことでございます。
津村　私はもう一年だ。だから私に眞實をきかせてくれ、それと共に用意をしなくてはならない。おまへの返事がどちらであらうとも、私は決して惡いやうにははからぬつもりだ。
智佐子　分つてをります。

津村　（嚴かに）おまへは辻を愛してゐるだらう。
智佐子　改まつて何故そのやうなことをお訊ねになるのです。
津村　私の顏色を見て返事をすることはいらない。本當のことさへいつてくれゝばいゝのだ。
智佐子　闇ですものあなたの顏色なぞ讀むことは出來ませんわ。
津村　それなればこそ明りを消したのだ。だからおまへはわたしの顏色に氣がねをすることはいらない。同時に私はまたおまへの顏色を見てとることは出來ない。從つてわたしにはおまへの言葉のみが唯一の便りだ。どうかおまへの眞實をきかせてくれ。
智佐子　私には心は一つしかございません。
津村　それで。
智佐子　ですから一人の人の外は愛することが出來ません。
津村　その一人の人といふのは。
智佐子　あなたの外に誰がございませう。
津村　（思はず妻の手をとる）それは本當か。
（電がまた閃いて二人の姿を暗中に一瞬間はつきりと浮かし出す。）
津村　（暫くして）有難う。

智佐子　（無言のまゝ涙をふく）
（間。）
津村　外はひどい嵐だな。
智佐子　え。
津村　もう何時だらう。
智佐子　二時過ぎです。
津村　そんなに遲いのか。おまへ疲れたらう。おやすみ。私も寢るから。（横になる）
智佐子　え、おやすみなさいまし、大隅先生も安靜が一番だと仰しやつてをりましたわ。（といひながら布團をかけてやる）
（やがて津村眠りに入る。智佐子は點火もしないで闇の中に默坐してゐる。）
（雷鳴はをさまつたが風雨はなほ強い。）
（長い間。）
智佐子　あなた。
（間。）
智佐子　あなた。（間）もうおやすみになつたのですか。
（間。）
（暫くしてするすると障子の開く音がする。）
智佐子　どなたです。
辻　僕です。眞暗ですね。

智佐子　あ、辻さんですね。
辻　僕が代りませう。あなたはおやすみなさい。
智佐子　有難うございます。それには及びませんわ。
辻　あなたは毎晩のことで疲れてゐるでせう。今夜は僕が看護しますから、あなたはゆつくりおやすみなさい。
智佐子　ではさうお願ひしませう。
辻　え、どうか。
智佐子　電氣をつけませう。
辻　いゝえ、ようござんす。僕がつけますから。
智佐子　さうですか、ではお願ひいたしますわ。（立上る）あなた何處に立つていらつしやるの。
辻　こゝにゐます。
智佐子　そこ、障子のところね。
辻　え。
（智佐子は手探りで廊下に出ようとして辻の體に觸れる。辻は避けようとしたが智佐子はその手をしつかりと握る。）
智佐子　さつきお頼みしたこと、あなたきつときいて下さるでせうね。
（辻は無言のまゝ堅く智佐子の手を握り返し承諾の意を傳へる。智佐子去る。）
（辻は座について徐かにマッチを磨り煙草を吸ふ。同時にその光で電燈の在處を知り、近づいてスイッチをひねる。そして津村の寢顏に光線のさゝないやうに電燈に覆ひをし、懷から本を出して靜かに讀書する。外の風雨次第に靜かになる。）
（津村床の中でうなされる。）
津村　うむう、〳〵。
辻　先生、先生。
津村　うむう、〳〵。
辻　どうなすつたのです。先生。
津村　（目を醒ます）
辻　大層うなされておゐでしたが。何か惡い夢でもご覽になつたのですか。
津村　矢張り君だつたのか。
辻　僕がどうかしたのですか。
津村　君に助けて貰つてゐる夢をみてゐたのだ。
辻　それは妙ですね。
津村　口の中が何だかねば〳〵する。君、氣の毒だが、含嗽をしたいから水をくれ給へ。
辻　はい。（湯呑に水をついで渡す）
津村　（起上つて含嗽をする）實にたまらない夢だつた。
辻　どんな夢をご覽になつたのです。
津村　暗い森の中に、どうしたのか私は高手小手に縛りつ

けられてゐるのだ。するとそこへ一疋の青黒い蛇がやつて來たのです。
辻　氣味の惡い夢ですな。
津村　それから私の體を滑つて首筋のところへ迫つて來るのです。私はたまらないから追拂はうとしたが手足の自由がきかないのでどうすることも出來ない。爲方がないから思ふさま體をゆすぶつて振り落さうとしたが、蛇はてんで落ちさうにもしない。それどころか私の口中を目がけて突進して來るのです。
辻　それからどうしました。
津村　私は聲を限りに救ひを呼んだ。しかし誰も助けに來ない。その內に蛇はその冷い頭を私の口の中にぐつと差込んでしまつたのです。私は鉛を咽喉につぎ込まれたやうにもう聲さへ出なくなつてしまひました。その時突然君が來たのです。
辻　僕がですか。
津村　それとも俊五であつたか、或は智佐子であつたか、危急の際だから誰であつたかはつきり見分けはつかなかつたが、兎に角誰かゞ助けに來たのです。そしていきなり蛇の尻尾をつかまへてぐん／＼引張つてくれたのです。
辻　それで蛇を引ずり出したのですか。
津村　いや、力をこめて引張つてくれたけれど、蛇はちつとも外へ引出すことは出來ない。却つて彼の黑い頭は私の咽喉の奧にじり／＼と突入つて行く許りなのだ。私はもう駄目だと思つた。その時私は一思ひにやつたのです。
辻　どうなすつたのです。
津村　蛇の頭を力の限りぎゆつと噛んだのです。すると冷い血がどろ／＼と流れて……あゝ、思ひ出してもいやな氣持がする。（再び含嗽をする）
（間。）
津村　智佐はゐないのですか。
辻　お疲れのやうでしたから、さつき僕が交代しました。何かご用ですか。
津村　いや。
辻　私でよろしかつたら……
津村　それ程のことではありません。
（間。風雨の響。）
辻　先生。
津村　（無言のまゝ辻を見る）
辻　少しお願があるんですが。
津村　どんなことですか。
辻　（改まつて）　先生。瑠璃子さんを私に下さいませんでせうか。

津村　どうして君はそんなことをいひ出したんです。

辻　瑠璃子さんと一しよになれば私は非常に爲合せだからです。

津村　君は眞面目にそのことをいつてゐるのですか。

辻　かういふ話は僕は決して冗談には申しません。

津村（嚴かに）辻君、君この家を去つてくれ給へ。

辻　何ですつて。先生。

津村　直ぐにこの家から出て行つて貰ひたい。

辻　私が申したことがお氣に障つたのですか。

津村　いや、さうぢやない。

辻　若し瑠璃子さんをお貰ひ受けしたいと申したことが僭越であつたのなら、私は幾重にもお詫びを申します。しかしどうか此家を去れとだけは仰しやらないで下さい。

津村（感傷的に）僭越どころか、君があの哀れな瑠璃子を貰つてくれるといふ心には寧ろ感謝してゐます。しかしこの場合どうしても君に去つて貰つた方がいゝのです。

辻　どうしてゞす。

津村　理由はきかないでくれ。

辻　僕は理由なしに去ることは出來ません。

津村　私は泥船です。君を長くいれておくことが出來ないのです。

辻　先生、僕がお宅にをつてお邪魔になるのなら、去りもいたしませうが、せめてあの研究が完成するときまでおいて戴く訣にはいかないでせうか。

津村　研究！あゝ、二人で心血をそゝいでやつた爲事だから君がさういふのは無理はない。

辻　もう峠は見えてゐるのですから日ならず完成するにきまつてゐます。長いことは申しません。どうかその日までおいといて下さい。

津村（きつぱりと）辻君、あの研究は全部君に上げませう。

辻　えつ！

津村　あの研究はそつくり君に上げます。だから君の研究として發表なさい。その代りどうかこゝの家は立退いて貰ひたい。

辻　先生、濟みませんでした。（と急に兩手を疊について平伏する）

津村　どうしたのです。

辻　先生にさう仰しやられては嘘をついてゐることは出來ません。今は何もかも白狀いたします。先生私は奥さんのことが今でも思ひ切れないのです。

津村（無言のまゝぢつと見下ろす）

辻　僕は實に卑劣な人間です。研究に事寄せてお宅に置い

といて下さいなぞと申しましたが、あれはみんな噓です。本當は少しでも奥さんのところにゐたかつたからです。奥さんのゐるところから離れたくなかつたからです。僕のやうな卑怯な男はありません。先生宥して下さい。宥して下さい。

津村　いや、宥しを乞ふのは寧ろ私です。大患以來君には手厚い看護を受けてゐ乍ら、その人に門口を指すといふのは人非人ですら躊躇することです。

辻　さう仰しやられると僕はいよ〳〵恥しくなります。私は今申した通り先生を欺いてゐた極惡人です。どうか先生のお腹の癒えるやうどのやうになりと罰して下さい。

津村　いや、欺いたのは私だ。

辻　とんでもないことです。

津村　いや、私だ。君、君がいつか私の脈をとつてゐたときに、「私が憎くありませんか。」と君に訊ねたことを覺えてゐますか。

辻　覺えてをります。病室といひ、然も餘り突然の問ひなので僕は何と答へてい丶か返答に困つてをりました。

津村　すると私はぢつと君の顏を見ながらかういつた。
「机の上の赤銅の文鎭が眼にはひりますか。」

辻　「はひります。」と僕は急場を救はれたやうにほつとして答へました。

津村　「君は危機に瀕してゐる。」私はその時さういつた。

辻　先生は病氣を恐れず無謀のことをなさるから、威喝の意味で直に答へました「それは先生です。」

津村　何も知らないから君はさういつた。しかし私はあの時君を殺さうと思つてゐたのです。あの時妻(さい)が室にはひつて來なかつたら赤銅の文鎭は君の腦天に塡りこんでゐたに違ひない。

辻　それは冗談です。先生に限つてそんなことはありません。

津村　さう思はれるから私は君を欺いてゐるといふのです。私は決して君を愛してやしません。大患以來烈しく憎んでゐるのです。恐れてゐるのです。たゞ教授といふ地位が、職掌がそれを明確に外に表はさせなかつたまでです。私は嫉妬の針を外に向けずに內へ內へと向けました。それ故君を憎めば憎む程外部からは君に義理を立ててゐるやうに見えたのです。しかし君の爲めに最も盡さうとしてゐた時が、君を最も深く憎んでゐた時なのです。

辻　（沈痛に頭を下げたま丶でゐる）

津村　いつか妻が君に瑠璃子を世話したいといひ出した時私は表面その無思慮を怒りました。しかし內心ではどんなに喜んだか知れない。占めた。これでやうやく危險なも

のを檻に入れることが出來ると思つたのです。私が叱つたけれど妻は無論この話を君にするに違ひない。君はまた屹度これを承諾するに違ひないと內々思つてゐたからです。ところが君が斷つたと聽いて私は心の中の貧しさをはつきり君に見すかされたやうな氣がしてぎよつとしたのです。そしていよ〳〵君が憎くなり、いよ〳〵君に對して惡を企らまうと思ひ出したのです。このまゝ過ぎたら私は君にどのやうなことをするか知れません。

辻　先生。（と思はず津村に近づく）

津村　このやうな師が何處にあらう。辻君。（と熱して辻の手をとる）

辻　これが師弟の關係でせうか。

津村　事實なら爲方がない。

辻　お互ひに泥の投げ合ひをやつてゐたのですね。（二人手をとりあつて泣く）

津村　私があの惡疫にかゝつた折あのまゝ死んでしまつたら、寬容の人として稱へられたかもしれない。さう思ふと君の懇篤な看護に感謝していゝのか、怨んでいゝのか分らないやうな氣がする。しかし私はそれを悔いない。私は僞りの聖人として崇められるよりも、眞實の小人として生活したい。

辻　私もさういふ氣がします。

津村　私があなたを家に入れたのはかういふ結果を見ようとしてゞはありません。それがこんな結果になつたことは私の深く恥づるところです。しかしあなたをいれておくことは私としては決してあなたを愛する道でないと思ひます。自分に僞りのことがどうして他人に愛になりませう。從つて今あなたには去つて貰ひますが。これが二人の交渉の最後ではありません。これが最初のものにならなければならないと思ひます。

辻　ほんたうにさうありたいと思ひます。

津村　私が蛇に襲はれた夢を見たことはさつきお話しました。そして最後の力が私に蛇の首を嚙み切らせたと申しました。私はあの時位はつとした事はありません。私はしてはならないことを犯したやうなある恐怖を感じました。同時にしなくてはならぬものを本當にやつゝけたといふ氣がしました。私は今あの時と同じ心持がしてゐます。

辻　先生の仰しやることは僕によく分ります。たゞ私の存在が先生をそんなに苦しめたと思ふと申訣がありません。

津村　いや、君がゐなかつたら私は一生苦しまなかつたかもしれない。苦しむのはいゝのです。あるべきものに達する爲めには人は苦しまなくてはなりません。

辻　（突然）先生。
津村　何です。
辻　もう一度お願ひします。どうか瑠璃子さんを僕に下さいませんか。
津村　それはお斷りします。
辻　どうしてゞす。先生はそれを望んでいらつしやるのぢやありませんか。
津村　そんなことをいふからどうしても君に去つて貰はなければならないのです。私のところに君はいつまでも嘘の生活をつゞけることになります。
辻　そんなことはありません。
津村　いやさうです。あなたは今眞實に瑠璃子を愛してはゐないぢやありませんか。君が義理て貰つたのではまた屹度私の今のやうな辛い目を見なくてはなりません。私は安價な道義心から君を弄ぶやうなことをしてしまひましたが、これは重々お詫びします。同時にどうか君も私の轍を踏まないで下さい。君が眞に瑠璃子を愛する時が來たらその時はまた改めてお話をしよう。しかし今はお斷りします。
辻　分りました。
（突然電燈消える。同時に雨戸の隙間から弱い朝日がさし込んで來る。）

津村　おゝ。電氣が消えた。
辻　夜が明けたと見えます。
津村　雨も止んだやうだ。
辻　では先生、僕はこれでお暇します。
津村　さうか。
辻　誰にも會はないで立つ方が却つていゝと思ひます。（去らうとする）
（と、突然襖の蔭で「わあつ」といふ女の泣聲が聞える。）
津村　誰だ。
辻　（襖を開く）奥さんです。
津村　（智佐子に）智佐か。今の話を聽いたのか。
智佐子　（泣きながら）はい。
津村　ではおまへが聽いた通りのことになつたのだ。
辻　みんな私が惡いからです。
津村　いや。誰も惡いものはない筈だ。
辻　では先生失禮します。どうかくれぐ\もお體をお大切に。
津村　君も體を大事に。
辻　はい。有難うございます。ではこれで。（智佐子に）奥さん。左様なら。（去る）
（智佐子なほ泣きつゞける。）

津村　もう泣くのは止めないか。

智佐子　はい。（といふが猶忍び泣きに泣いてゐる）

（何處かではね釣瓶をざいつと上げる音がして、やがて水をあける音が聞える。夜が次第に明けて、戸の隙を漏れる旭光が段々明るくなつて來る。）

（瑠璃子寢卷のまゝ廊下に來る。）

瑠璃子　あら、もう起きていらつしやつたの。早いのね。

津村　俊五はどうした。

瑠璃子　まだぐう〳〵寢てるわ。

（瑠璃子戸をあける。日光燦然として室内に流れ込む。）

津村　戸をあけるな。（光にたへず床につき伏す）

瑠璃子　まだ閉めておくのですか。（心地よさゝうに外の空氣を吸ひながら）いゝお天氣だこと。昨夜あんなに降つたのに。（戸を閉す）

（室内再び暗くなる。しかし戸の隙から光が雨のやうにさし込む。）

――幕――

嬰兒殺し

人物

巡査　小山圭介（四十三四歳）

娘　つぎ（十八歳位）

屑屋

百姓

隣の女房

酒屋の小僧

女土方　杉原あさ（三十歳位）

時代

現代、春

場所

市に接した郡

住居を兼ねた巡査駐在所。駐在所に直ぐひつゝけて居間と臺所がある。臺所には腰障子が閉まつてゐて裏の出入り口になつてゐる。勝手の櫺子窓の向うに櫻の花がのぞいてゐる。

娘のつぎは座敷にぼんやり坐つてゐる。そこへ駐在所の硝子戸をあけて小山巡査が歸つて來る。

つぎ　お歸んなさい。

小山　たゞ今。どうもひどい埃だ。（靴をぬいで上にあがる）

つぎ　直ぐにお着かへになるとようございますわ。（つぎは立つて着換への着物を父に差出す。）

小山　ウム、さうしよう。（制服を脱いで和服に着かへ乍ら）外は花見で大變な人出だな。

つぎ　え、隨分賑やかのやうですわね。こゝも澤山お花見の人が通りますわ。

小山　どうだ。明日は非番だからわしが留守居をしてやる。おまへ花見にでも出かけちや。

つぎ　あたし？

小山　おまへは看護疲れで大分窶れてゐる。少し花でも見て心をうき／＼させるがいゝ。

つぎ　あたし花なんか見たくないわ。何だか力が拔けてしまつて、何をしても少しも面白くないんですもの。

（「屑い／＼。」と表を屑屋が通る。）

小山　それはさうだな。

つぎ　あたし、花なんか見て浮かれてゐる人を見ると憎らしくなりますわ。

（「屑い。屑のお溜はございませんか」とまた屑屋の

聲がする。）

小山　屑屋のやうだ。ちよつと呼んでくれないか。

つぎ　はい。（勝手の窓から小聲で屑屋を呼ぶ）屑屋さん〱。

屑屋（裏口を開けて）お呼びはこちらでござい？

小山　屑屋さん。這入つてくれないか。

屑屋　へえ、毎度有難う存じます。どうもよい時候になりましたな。（家に這入る）

（小山は押入をあけて、古葛籠から衣類を六七枚取出して屑屋に見せる。）

小山　屑屋さん、おまへさんはかういふものはやらないかね。

屑屋　へえ、お召物で。何より結構でございます。お高く頂戴いたします。

小山　みんな古い物許りだけれど。

屑屋　どういたしまして。これでね旦那、屑屋と申しましてもいろ〱あるんで、同じ古物のうちでも手前はその古着の方が得手なんでございまして、他の同業者よりは十分高値に頂戴いたします。（衣類を調べながら）みんな女物でございますな。

小山　妻に死なれたもんだから。

屑屋　それはどうも御愁傷なことで。何かとご不自由でございませう。（なほ衣類を調べながら）お子供衆のものも交つてをりますな。

小山　引つゞいて長男に死なれてね。それでみんな不用になつてしまつたのさ。

屑屋　ご總領に。それはお力落しでございますな。さういふご事情でしてはわけて奮發して頂戴いたします。

小山　どの位に買へるね。

屑屋　さうでございますな。（胸算用をして）引くるめまして七圓五十錢に頂戴いたしませう。全く飛切の値段でございます。へえ。

つぎ　お父さん、あれ勿體ないぢやないこと。

屑屋（紡績の羽織をとりあげ）これでございますか、お孃樣。併しこれはお孃樣にはおぢみでございますよ。

つぎ　いゝえ、あたしが着る訣ぢやないけれど。

屑屋　これが襟が半巾でないと宜敷いんですが、生憎半巾に裁つてあるものですからな。さうでないともう少し頂戴が出來るんですが。

小山　どうだらう。もう少し買へないかね。

屑屋　さうですな。ぢやもう三貫戴いときませう。丁度と申し上げたいんですが、それでは手前の方がとても引合ひませんので。

小山　ぢやそれできめておかう。

屑屋　さうでございますか。有難う存じます。（金を財布から出し）では七圓の、こちらが八十錢。どうかお調べ下さい。

小山（金をしまひ）　どうだね、儲かるかね。

屑屋　旦那の前でございますが、全く暮しにくい世の中になりましたな。毎日／＼のおまんまを食べて行くだけが容易ぢやないんですから。

小山　さうだね。

屑屋　實際世の中がせち辛くなりました。何だつてぢやありませんか、この間女が男の服裝（なり）をして働いてゐたつてぢやありませんか。

小山　そんなことが新聞に出てゐたね。女の賃銀ぢや食つて行けないんだらう。

屑屋　全く當前のことをしてゐたんぢや食つて行けませんからな。人間つてものは恐しいもんで、食つて行くためにはどんなとでもしなくつちやなりませんよ。これはとんだお喋りをいたしました。どうも毎度有難う存じます。

（去る。そして外へ出るや否や、「屑い、お拂ひはございませんか。」と呼び歩いて行く。）

つぎ　何だか賣つてしまふと惜いやうな氣がしますわね。

小山　それはさうだが、あると却つて思出していけないから、思ひ切つて賣つてしまつたのだ。それに藥代を拂はなくちやならんからな。

つぎ　あ、まだお拂ひがしてありませんのね。

小山　しかしわしは藥代や氷代がもつと拂へたらと本當に思ふよ。

つぎ　だつて、それでなくてさへ容易でないのに、此上もつと拂つたら大變ぢやありませんか。

小山　だが、さうしたらひよつと助かつたかもしれんからさ。

つぎ　本當にもつと思ふやうに手が屆くとよかつたんですけれど。

小山　さう思ふと二人ともわしがむざ／＼殺してしまつたやうな氣がしてたまらないのだ。

つぎ　あら、そんなことはありませんわ。お父さんに惡いことはないんですもの。

小山　いや、わしに力がなかつたから惡いのだ。

つぎ　だつてお金が足りないために、病人に十分のことが出來ない人は世間に澤山ありますわ。何もお父さん一人ぢやないんですもの、そんなにお責めになることはありませんわ。

小山　それだから猶ほいけないのさ。世間にさういふことが一つもなくなつたらどんなにいゝことかしれないぢやないか。

つぎ　それはさうですけれど。あゝ、本當にも少しお金があつたらね。

小山　愚痴だ。――おい飯にしよう。わしはすつかり腹が空つてしまつた。

つぎ　はい。ですけれど何にもおかずがありませんわ。お豆腐でも買つて來ませうか。

小山　何にもいらない。たしか豆があつた筈ぢやないか。

つぎ　え。

小山　それでいゝ、〳〵。

（つぎはチャブ臺を出して夕食の支度をする。その間小山は電燈をつけたり、佛壇に線香をあげたりなどする。）

（外は日が落ちて暗くなる。軈て二人は食卓に坐る。）

小山　膳に向つても何だかもの足りないな。

つぎ　せめて謙ちやんだけでもゐると……

小山　うム、あの子がゐたら賑かでいゝんだが――いや、もう思ふまい〳〵。

（二人默つて飯を食べ始める。と、突然表の硝子戸が開いて駐在所に百姓が飛込んで來る。）

百姓　旦那さんゐたかね。

つぎ　どなた。

百姓　えれいことが出來たんで、ちよつと旦那に來て戴きてえと思つて。

小山　何か事件でも起つたのか。

百姓　へえ。

小山　また轢死かい。

百姓　いゝえ、そんなことぢやねえ、もつとえれいことなんで。

小山　どうしたんだ。

百姓　竹藪ん中から赤ん坊が出て來たんで。

小山　何だつて。

百姓　明朝早く市場へ持つてかうと思つて、うちの裏の竹山へ這入つて竹の子を掘つてゐると、死んだ赤ん坊が鍬の先に引かゝつて出て來たんでさ。打つちやつておけねえことだから直ぐに旦那のところへ駈けて來ました。

小山　さうか。よし、直ぐに行かう。

百姓　どうもご苦勞さまでごぜえます。

つぎ　またお出掛け、お父さん。

小山　うん。服を出してくれ。

つぎ　はい。（正服を出す）

小山　（服を着ながら）役場にはもう知らせたのか。

百姓　さつき人を出しました。何しろ他の物と違ふから、旦那方に一刻も早く來て貰はなくつちやどうにも手がつけられねえんで。

小山　そりやさうだ。
つぎ　お父さん、ご飯は。
小山　歸つてから食べる。しかしおまへは先へお上り。
つぎ　はい。
小山　ぢや、ちよつと行つて來る。（百姓と共に去る）
（つぎは一人だけで食事をしてゐると、そこへ裏口から隣の女房が這入つて來る。）
隣の女房　今晩は。
つぎ　あら、お隣のおかみさん。（食事を止めようとする）
隣の女房　今ご飯なの。濟ましておしまひなさいよ。
つぎ　ぢやご免なさい。
隣の女房　おつぎさん、ご飯が濟んだらお湯に行かないこと。
つぎ　あたしご一緒に行きたいんですけれど。
隣の女房　お父さんお留守なの。
つぎ　え、急にご用が出來て、今歸つて來たんですけれど、また出てしまひましたの。
隣の女房　お忙しいんですことね。何か出來たんですか。
つぎ　何でも赤ん坊の死體が竹藪から出て來たんですつて。
隣の女房　まあ厭だこと。何ですよ。屹度いたづら者が子供のやり場に困つてそんなところへ捨てたんですよ。
つぎ　え、きつとさうですわ。
隣の女房　本當に世話をやかせる奴が憎らしいぢやありませんか。そのたんびにお出掛けにならなくちやならないのは、大抵ぢやありませんわね。
つぎ　でも職務ですから爲方がございませんわ。
隣の女房　いくら職務でも他人にはなか／＼勤まりませんよ。ですがお宅のやうな、こんな實直なおうちにどうして不幸が續くんでせう。奥さんや息子さんが、いちどきに亡くなるなんて。
つぎ　まはり合せですわ。さう諦めてをりますのよ。
隣の女房　まはり合せつていひますがね、おつぎさん、なか／＼諦められませんよ。
つぎ　だつてさう思ふより爲方がないんですもの。（食事を濟ます）
隣の女房　世の中つて本當に意地が惡いもんですね。あたし癪にさはつて堪りませんよ。
つぎ　（勝手に廻つて茶碗なぞを洗ひ乍ら）あら、とうして。
隣の女房　今日も工場でマツチの箱を貼りながらつく／＼考へたんですがね、今のやうぢや、あたし人間のやうな氣が少しもしませんわ。
つぎ　そんたことありませんわ。

隣の女房　いゝえ、本當ですよ。いくら廻り合せだからつて、こんな風ぢやあたしマツチになつた方が餘程いゝ位だと思ひますわ。

つぎ　ホ、、、。

隣の女房　笑ひごとぢやないんですよ全く。第一マツチは腹がへらないでせう。だから働かなくつてもようござんすし、監督に叱られる氣遣ひもなし、本當に氣樂な身分ぢやありませんか。

つぎ　だつて、あなた。

隣の女房　いゝえ、全くですよ。マツチだとどんなに大事にされるか、まああたしの工場へちよつと來てご覽なさいよ。それ下においてはいけないの、濡らしてはいけないの、乾かし過ぎてはならないのつて、それは／＼華族樣の獨り息子のやうに、その丁寧な扱ひ振りつたらありませんわ。ところがあたしたち女工はそりやみぢめなものよ。やれおまへは居眠りをするの、お喋りだの、能率が低いのと年中怒られたり、威されたり、全く厭やになつてしまひますわ。實際あすこへ這入つたら、人間はマツチの棒ほどにも思はれないんですからね。

つぎ　まあ、そんなゝんでせうか。

隣の女房　あたし食べられさへすればあんなところには行きませんわ。ところがあなた惡いことには人間はお腹が空るんでせう。これにはおまへさん、全く困つてしまひますわ。

つぎ　本當に食べる程つらいことはありませんわね。

（酒屋の小僧が裏口から這入つて來る。）

小僧　どうも遲くなりました。（品物を臺所におく）

つぎ　お味噌を持つて來てくれたの。

小僧　へえ、それからお鹽に焚きつけ。（といひ乍ら頻りに緣の下を見てゐる）

つぎ　小僧さん、何だつてそんなに緣の下を見てゐるの。何か落し物？

小僧　いゝえ、犬を見附けてゐるんです。

隣の女房　犬、犬なんてゐやしないよ。緣の下にゐるのはもぐらもちか先代萩の鼠ときまつてゐるぢやないか。

小僧　だつてひよつと來てるかもしれないから。

つぎ　小僧さん、犬になんかからかつてゐると旦那に言ひ附けて上げるよ。

小僧　言ひ附けたつてかまやしない。

隣の女房　口のへらない小僧さんだね。

小僧　だつて五百圓になるんですもの。

隣の女房　何が五百圓さ。

小僧　そらこの先に煉瓦塀の大きな家があるでせう、成金の。あすこで犬が逃げたんですつて、それで見付けたも

のには五百圓くれるつていふんです。

隣の女房　馬鹿々々しい。犬が一疋逃げ出したからつてそんな大金を懸けるなんて。ふん、こつちには食へなくなつてまご／＼してゐる人間が澤山あるんだ。犬に出す位なら本當に少し人間に出せばいゝんだ。

小僧　あすこぢや毎日犬に牛肉を食はせておくんですつて。

隣の女房　そして雇人には大かた外米を食はしておくんだらう。

つぎ　犬の捜索費に五百圓も出すなんて勿體なうございますね。

隣の女房　あるところには入らないお金が澤山あるもんですよ。

つぎ　それだのに入るところには少しもそれがありませんのね。あゝそんなお金があつたら、死ぬ人も死なずに濟んだでせうに。

隣の女房　さういひますがね、おつぎさん、金があるとまた早死をするものよ。

つぎ　どうしてゞせう。

小僧　多分食ひ過ぎるからだらう。はゝゝゝゝ。（と笑ひ乍ら勢よく柄なかついで出掛ける）左樣なら、毎度有難うござい。

（小僧歸つて行く。）

隣の女房　あら、とんだお喋りをしてしまつたわ。ぢやお先きへ行つてますから、お父さんが歸つて來たらいらつしやいな。

つぎ　え、後から參りますわ。

隣の女房　ぢや左樣なら。（外へ出て空を見る）まあ、いやなお天氣だこと。

つぎ　また降り出したんですか。

隣の女房　落ちては來ませんけれど、すつかり曇つてしまひましたの。本當に花時のお天氣は困りますこと。左樣なら。（去る）

つぎ　左樣なら。ごゆつくり。

（暫らくしてから表から小山巡査が歸つて來る。）

つぎ　お歸んなさい。

（つぎは柱に掛けてある着かへの着物をはづさうとする。）

小山　いや、このまゝでいゝ。腹が空つてゐるから先にご飯を濟ましてしまふ。

つぎ　さうですか。惡いところに人が來ましたからね。屹度さうだと思つてお膳はそのまゝにしてありますわ。（といひ乍らチャブ臺を小山の前に寄せ、ご飯をつける）

（小山は食事をする。）

つぎ　お父さん、子を捨てた奴はもう捕つたんですか。
小山　まだそこ迄はいかないさ。やつと死體が見附つたばかりなんだから。しかし犯人は直ぐ擧がるよ。そんな不人情な奴は天が必ず赦しはしない。
つぎ　本當にさうですわね。ですが子を殺すやうないらない生命があるなら、あたし謙ちやんに貰つてやりたい位ですわ。
小山　全くだな。瘦せちやゐたが可哀いゝ赤ん坊だつたよ。多分手拭か何かで絞め殺したんだらう。咽喉のところがすつかり紫色になつてゐるんだ。
つぎ　まあ何ていふことをするんでせう。ひどい人があつたもんですわね。
小山　死なれたことのない奴は生命の有難味が分らないのだ。本當に平氣で子を殺すなんて鬼みたやうな奴だ。だが、その太々しい犯人を引つ捕へてやらうと思ふと、わしにも元氣が出て來たよ。おい、お茶をくれ。
つぎ　もうおしまひですか。
小山　この澤庵は鹽が鹹いね。
つぎ　え、何ですか今度のは大變鹽がきいてゐるやうですわ。お父さん、お疲れになつたでせう。お湯にいらつしやいませんか。
小山　いやわしはいゝ。それよりおまへ行かなくちやいけない。もう四日も行かなかつたらう。
つぎ　えゝ。
小山　遲くなるとこの邊は物騷だから、早くいつた方がいい。
つぎ　ぢや、ちよつと行つてまゐりますわ。
小山　さうするがいゝ。（ポケットから手帳を出して何か頻りに書き込む）
つぎ　不用心ですから裏の方は閉めて行きませう。
小山　（なほ書込みをしながら）あ、さうしておいてくれるといゝね。
つぎ　（土間に下り、裏口の障子を開け、雨戸を閉めようとしたが）あれつ。（と恐しい聲を立てる）
小山　（驚いて）どうしたんだ。
つぎ　何かゐるのよ、そこに。黒いものが。
小山　黒いもの。（と急いで臺所に飛んで來る）
つぎ　あつちへ行つたり、こつちへ行つたりしてゐるの。あたし恐いわ。
小山　（外を見て）何もゐないぢやないか。
つぎ　いゝえ、ゐるわ。そら、そこに。
小山　うム。誰か立つてゐるやうだな。（外の人に）どなたです。（答へが聞きとれないので）え。何ですつて。道が分らないんですか。

外の人　いゝえ、少々お願ひがござえまして。
小山　わたしにですか。
外の人　え。
小山　それなら何だつてこんな裏口になんか突立つてゐるんです。
外の人　濟みません。つい這入りにくかつたもんですから。
小山　用があるんなら表へお廻んなさい。（娘に）裏はわしが閉めるから、おまへは早く湯に行つておいでなさい。
つぎ　はい。
小山　氣をつけて行つておいでよ。それに雨が降つて來さうだから傘を持つておいで。
つぎ　はい。
（つぎは表から出て行かうとして硝子戸を開けると、外には土工の杉原あさがおづ〱と立つてゐる。）
あさ　只今は濟みませんでした。
つぎ　いゝえ。こちらへおはいりなさいまし。
あさ　へえ。（恐る〱駐在所に這入る。爲事の歸りらしい服裝）
つぎ　（小山に）行つて參ります。（去る）
小山　おまへさんかね。用があるといふのは。
あさ　へえ。

小山　で、用事といふのは。
あさ　（菓子折を小山の前に差出し）つまらないものでござえますけれど。
小山　そんなことをしちや困るよ。
あさ　どうか坊ちやまにでも。
小山　いや、うちには子供はゐない。此間死なれたもんだから。
あさ　（出はなを突かれておど〱しながら）は、はい。では……
小山　そんなことは關係のないことだ。で、用件といふのは。
あさ　どうか旦那、お取んなすつて戴きます。折入つてお願ひがござえますんで。
小山　賴みがあるなら何でも聽かう。しかしさういふものは絕對に受取れない。
あさ　さうでもござえませうが。
小山　おまへは女だから何にも知らないと見えるが、官吏といふものは一切他人から物は貰へないことになつてゐるのだ。だからそんな心配はしない方がいゝ。わしはものを貰つたから、貰はぬからといつて差別をつけるやうなことは決してありはしない。それよりか用件を早く話した方がいゝ。

あさ　(おど〳〵しながら)　へえ。
小山　さ、その菓子折なんか仕舞つて。――それで用件といふのは。
あさ　(暫くうなだれてゐたが)　旦那樣、子供が生れたら屆けなくちやいけねえでせうか。
小山　そりや無論屆けなくちやいかんね。
あさ　ところがその赤ん坊が直ぐ死んぢまつたんですが、死んだものなら屆けなくてもよかねえでせうか。
小山　いや假令死んだにしても一應は屆けなくてはいかんね。
あさ　だが、生れたとはいつても、直ぐに死んぢまつたんだから、生れなかつたも同じことですが。
小山　いや、さうはいかん。
あさ　矢つ張り屆けなくちやいけねえでせうか。
小山　おまへ赤ん坊が出來たのか。
あさ　(暫く默つてゐたが)　へえ。
小山　それをどうして今迄屆けなかつたのだ。
あさ　入手がなかつたもんで。
小山　亭主に屆けて貰つたらいゝぢやないか。
あさ　それが居ねえもんですから。
小山　死んだのか。
あさ　へえ。
小山　それならわしが屆けてやらう。遲れたけれども爲方がない。
あさ　どうしても屆けなくつちやいけねえんでせうか。
小山　そりやいけないさ。屆出でをしないと罪になるからね。
あさ　(うなだれて)　困つたな。旦那。(おづ〳〵とまた先刻の菓子折を小山の前にすゝめ乍ら)　どうかお願ひでごぜえます。旦那お一人のご料簡にして戴く訣にはいかねえでせうか。お願ひでごぜえます。
小山　そんな訣にはいかんよ。
あさ　旦那、どうか罪にならねえやうにして下さい。どうかご内分にお願ひ申します。旦那、お慈悲です。
小山　(急に女の腕を捉へる)　これ。貴樣、兒を殺したな。
あさ　と、とんでもねえ。わし、決して、そ、そんな……
小山　嘘をつけ、そんなら何故屆けることをそんなに恐がるんだ。
あさ　いゝえ、全く殺したなんて、お、おぼえのねえ……
小山　ぢや赤ん坊はどうして死んだのだ。
あさ　死んだんです。たゞ死んぢまつたんです。
小山　たゞ死んぢまふ筈があるか。
あさ　病、病、病氣で……
小山　病氣で。いつ死んだのだ。

あさ　を、をとゝひ。
小山　一昨日（嚴かに）さうしてその死體はどうした。（女は無言のまゝ急に巡査の手を振拂つて逃出さうとする。）
小山　貴樣。太い奴だ。（巡査は直ぐに追ひかけて、女をねぢ伏せ。繩をかけようとする。）
あさ　旦那、なにするんです。（抵抗する）
小山・抵抗すると承知せんぞ。
あさ　今縛られちや、わしが今縛られちや。（と悲痛な聲を上げて抵抗する）
小山　八釜しい。ぢつとしてをらんか。
あさ　（ぐつたりとして）今縛られちや……。（泣き伏す）
小山　（あさを縛り上げ）圖太い奴だ。菓子折なんか持つて來て、わしを籠絡しようとかゝりをる。やい、顏をあげろ。
あさ　（突つ伏したまゝでゐる）
小山　顏をあげろといふんだ。（とあさの襟髮をつかんで顏を引上げる）
あさ　（無言のまゝ顏を上げる。その眼は痛烈な光を放つてゐる）
小山　これ、どうして貴樣は赤ん坊を殺したんだ。
あさ　（無言）
小山　どうしてそんな酷いことをしたんだ。それをいへ。
あさ　（無言）
小山　それを白狀しないかつていふのに。（と女をゆすぶつて突きのめす）
あさ　（力なく、芋蟲のやうにごろりと前へのめる。しかし矢張返事をしない）
小山　貴樣しぶとい奴だな。何故默つとるんだ。返事をしないか。
あさ　（やはり無言）
小山　何だ。貴樣はいたづらをしたんだらう。貴樣はさつき亭主がないといつたな。それで父無し子を生んだんだらう。
あさ　（無言のまゝ首を振る）
小山　嘘をつけ。始末に困つてそんな大それたことをしたに相違ない。相手は誰だ。相手の男をいへ。
あさ　（聽きとれぬ程小聲に何かいふ）
小山　なに。父無し子ぢやない。夫の子に相違ないつて。しかし貴樣、亭主は死んだといつたぢやないか。
あさ　（極めて小聲に）死んだといつてもつい三月前に死んだんです。
小山　三月前に死んだ。それぢや確かに亭主の子に相違な

いのだな。
あさ　（涙聲で）はい。
小山　やい、それなら貴様は鬼婆よりもひどい奴だぞ。現在の子を殺すといふのは何といふ人非人だ。貴様は子が可哀くはないのか。
あさ　（無言のまゝ泣いてゐる）
小山　わしはつい此間子供をとられた許りだ。病氣で亡くしたのぢやあるが、わしにはどうしても諦めきれない。それだのに貴樣にはよくもそんなむごいことが出來るな。
あさ　全く、子供は可哀うございます。旦那様お察し申します。
小山　人並なことをいふな。貴樣に子の可哀いゝことが分るか。そんな恐しい心で。
あさ　旦那、いくら貧乏してゐても子を思ふ親心に違ひはごぜえません。
小山　そんなら何故殺したんだ。憐れつぽいことをいつて同情を引かうつたつて、そんな手には乘りはしないぞ。何故殺したのだ。譯をいへ。譯を。
あさ　（泣きながら）子、子供が可哀さうだから殺しました。
小山　なに、子供が可哀さうだから殺した。これ、馬鹿なことをいへ。子が可哀いけりや大事に育てるのが當りまへぢやないか。それだのに子を殺しておいて、子が可哀いゝといふ理窟がどこにある。
あさ　そ、その通りでごぜえます。
小山　それなら何故そんなことをしたんだ。
あさ　はい。（涙をふき乍ら）子を大事にするのが親の勤めでごぜえます。全くさうするのが世間の親の習はしでごぜえます。ですがわし等のとこではとても世間様のやうにはまゐりません。
小山　どうしていかないのだ。
あさ　どうしてつたつて、旦那様。
小山　それをすつかり話せ。
あさ　話したつてとても駄目でごぜえます。話せるやうな話ぢやありません。
小山　宜しい。ぢやわしが問はう。おまへの亭主は三月前に死んだといつたが、何で死んだのだ。
あさ　病氣で死にました。
小山　何病で死んだのだ。
あさ　肺病つていふのか、血を一升も吐いて死んぢまひました。
小山　ふむ、で、おまへが土工になつたのはそれからか。
あさ　いゝえ、一年半ばかり前でごぜえます。
小山　では亭主はその頃から病氣だつたのか。

あさ　悪いのはもつと前からですが、働けなくなつたのはその時分からです。
小山　それでおまへが亭主の代りに働くやうになつたのだな。
あさ　はい。
小山　ぢや、隨分うちは苦しかつたらうな。
あさ　三日も四日もおまんまを食はなかつたことが何度もあります。其位ならまだようごぜえますが、その間に子供に二人も死なれまして。
小山　矢張り同じ病氣か。
あさ　はい。無暗に血を吐くんです。それが咽喉につかへちや苦しがるもんですから、何度も咽喉の中に手を入れてやつて、血のこゞりを引張り出してやりました。
小山　するとおまへはこの一年半の間に亭主と子供二人に死なれたのだな。
あさ　へえ。
小山　そんなら今度出來た子供こそは丈夫に育てなくつちやならないぢやないか。
あさ　さうでごぜえます。
小山　それだのに何故殺してしまつたのだ。
あさ　（大聲をあげてわつと泣き出す）
小山　これ、どうしたんだ。
あさ　（泣き伏し乍ら）旦那方にはとてもお分りにはなりません。
小山　どうして。
あさ　わし等の子供は、生かしておくよりも死なした方が却つて功德なのでごぜえます。なまじ苦しい浮世を見せるよりは何にも知らずに死なす方が、思ひやりが深いのでごぜえます。
小山　おまへ氣がどうかしてやせんか。
あさ　いゝえ、そんなことはありません。だつて旦那樣、さうぢやごぜえませんか。看護一つ出來ねえで病人を寢かしておくのは可哀さうでごぜえます。全く可哀さうでごぜえます。
小山　しかし丈夫な赤ん坊を殺してしまふのはもつと罪ぢやないか。
あさ　そりやさうでごぜえますが、あの子だつてどうせさうなつちまうんです。今もまた赤坊の直ぐ上の奴がうちに寢てゐる位なんですから。
小山　しかし何も殺すには當らんぢやないか。
あさ　へえ。わしも何度それを考へたかしれません。それで考へては止め。考へては止め、つい今迄經つてしまつたんです。實は腹にあるうちおろさうかと思つたんですが、そんなことをしちや自分の身體がたまらねえと思つ

て――いゝえ、決して生命が惜しいんぢやごぜえません。わしは死んだ方がどんなに樂かしれませんが、わしはどうしても死なれねえんです。わしが死なうものなら、病氣の子供と年取つた親爺とを餓死させなくちやなりません。

小山　するとうちには子供の外に年寄があるんだな。

あさ　はい。

小山　年寄は老年で働けないのか。

あさ　へえ、ですからどうしてもわしが働かなくちやならねえんでです。わしは働きました。子供の生れる前の日まで一生懸命に働きました。旦那の前でですが赤ん坊が生れて見ると、いくら貧乏してゐたつて子供はやつぱり可哀うごぜえます。碌すつぽ乳もやらねえのに、わしの顏を見てはにつこり笑つたりなんかすると、食ひつきたい程可哀うごぜえます。

小山　それはさうだ。

あさ　けれど世間樣のやうに子供にかまけてゐた日にはわし達は口が乾上つてしまひます。それも自分だけならようごぜえますが、年寄や病氣の子供がそんなことでは過しては行かれません。

小山　ふム、それでは赤ん坊がゐると働く邪魔になるので殺したといふのか。

あさ　はい。邪魔といふ訣ぢやありませんが、あれがゐた日にはとても手足纏ひで稼ぐことは出來ません。

小山　ふん、さうか。(と太息をする)

あさ　旦那、どうも誠に申譯がごぜえません。

小山　併し考へがなさ過ぎたな。殺せば罪になるつてことはおまへ知らないのぢやあるまい。

あさ　はい。

小山　それなら何故こんなことをするのだ。

あさ　他にしやうがなかつたのでごぜえます。

小山　誰かに子供をくれたらいゝぢやないか。

あさ　くれるつたつて旦那、たゞはくれられません。今どき金のつかねえ赤ん坊なんか誰が貰ふもんですか。貧乏人はどこまでみじめなんか分りません。旦那、全く惡い氣でしたのではごぜえませんから、どうかお赦しなすつて戴きます。

小山　事情を聞くと氣の毒だが、わしの職務としてこれを聽いて內分に濟ますといふ訣はいかない。

あさ　そこをどうか旦那、お願ひでごぜえます。

小山　どうもさういふ訣にはいかん。殊に死體でもあがつてをらなければ格別、赤子の遺骸が發掘されてゐる以上今更どうすることも出來ない。

あさ　え、赤ん坊が?

小山　さうだ。おまへは赤ん坊を竹藪の中に埋めたらうが。
あさ　あゝ、もう駄目だ。（と突伏して泣く）
小山　で、今となつてはありのまゝを包まずいふがいゝ。それが罪の輕くなる唯一の道だ。おまへの名は何といふのだ。（手帳を出して書き取らうとする）
あさ　（泣いてゐて答へない）
小山　おい、返事をしないと爲にならんよ、何といふ名だ
あさ　（泣きながら）　はい。おあさと申します。
小山　（手帳に記入し乍ら冷靜に訊問を續ける）　夫は。――およへの亭主は。
あさ　杉原定二郎。
小山　三ヶ月前に死んだのだね。それで職業は。
あさ　矢張り土方でごぜえます。
小山　住所、住所は。
あさ　下目黒。
小山　府下荏原郡目黒村下目黒と、何番地かね。
あさ　二千三百五十番地。
小山　二千三百五十番地。同居ぢやないんだね。
あさ　はい。
小山　それから赤兒の生れたのは。
あさ　先々月の十日。
小山　二月十日と。男の子だね。

あさ　はい。
小山　殺したのは。
あさ　（苦しさうに）　一昨日の晩でごぜえます。
小山　どういふ風にして殺したのだ。
あさ　今日と同じやうに爲事の歸りでごぜえました。赤ん坊を背負つて行人坂の近くへ來ると、赤ん坊が燒きつくやうに泣くんです。乳をやりたいにも乳はなし困つてしまひました。
小山　どうして乳がないのだ。
あさ　食ひ物が惡いせゐか、この五六日ばつたり乳が出なくなつてしまつたんです。
小山　それで。
あさ　それで爲方がねえから、乳は出なくつても乳房を口へふくませてやりました。
小山　それから。
あさ　それから暫く泣いてゐましたが、いつかお乳を離して眠つてしまひました。
小山　その時におまへはやつたのか。
あさ　（無言、がくりと首を前へ垂れて突伏す）
小山　で、何で殺したのだ。手拭か。
あさ　（無言）
小山　おい。何でやつたのだ。

（突然あさは腦貧血を起して仰向けに倒れてしまふ。小山は驚いて介抱しようとすると、表の硝子戸が開いてつぎが這入つて來る。）

小山　あ、丁度いゝ所へ歸つて來た。ちよつと手を貸してくれ。

つぎ　はい。

小山　おい、座敷へ上げるんだ。（つぎと二人がゝりであさを座敷へ寢かす）枕なんかいらない。頭を低くして、足の方を高くしてやるんだ。

（あさの足に踏臺を支つてやる。それからつぎはあさの土足の草鞋を解く。小山は水をコップについで來て、女の顏や胸に吹つかけてやる。）

つぎ　お父さん、繩を解いてやらなくつちや可哀さうですわ。

小山　さうだ。繩を解いてやらなくつちや。（といひ乍ら急いで繩を解いてやる）

つぎ（女の足をさすつてやり乍ら）　この人、可哀さうなんですわね。

小山　おまへ聽いてゐたのか。

つぎ　え、うちに這入りにくかつたもんですから、外に立つてゐましたの。

小山　さうか。世の中には氣の毒な人が澤山あるな。

つぎ　あつ、息を吹き返したやうですわ。

小山　まだそつとしておいてやれ。産後間もないのに烈しい勞働をやつたり、心配したりしたので、腦貧血を起したのだ。

つぎ　お父さん、矢張りこの人を連れて行くんですか。

小山　さうだ。さうしない訣にはいかない。しかし實際わしも同じ罪を犯してゐるのだ。

つぎ　そんなこと、お父さん！

小山　いや、この女は兒を殺したが、わしも子供や妻を殺してゐる。たゞ違ふところは直接手を下したかどうかといふだけだ。

あさ（急に起き返る）　はい。私が惡いのです。私が殺したんです。申訣がございません。

小山　お、氣がついたか。

あさ　はい。わたしは惡いことをしました。まつたく惡いことをいたしました。しかし旦那、これからはきつとこころをあらためます。どうかご勘辨なすつて下さい。

（つぎを認めて）あ、お孃樣。さつきはとんだ粗相をしました。嘸ぞびつくりなすつたでせう。申訣がございません。私は惡いことをしたものでございます。それでついおづ〳〵してゐたんです。本當に人は惡いことは出來ねえもので、知らない振りをして通さうと思つたんです

が、どうしてもそれは出來ません。赤ん坊の顏が夜も晝も私の頭にこびりついてゐて離れねえんでごぜえます。綱を持つて地形をしてゐると、埋めた赤ん坊の頭をこづいてゐるやうな氣がして、ゐても立つてもゐられねえやうになるんです。さうかといつて今捕つてしまつては大變ですから、旦那のところにお願ひに上つたのでごぜえます。（ふと自分の手を見て繩の解かれてゐるのに氣がつき、小山に）旦那、繩を解いて下すつたんですか。有難うごぜえます。有難うごぜえます。（と、さも嬉しさうに小山にお辭儀をする）

小山　（無言）

あさ　（つぎの方に向ひ）お孃さま。助かります。助かります。（と心から禮を述べる。つぎは困つて無言のまゝ首を垂れる）私は日に一圓五十錢しきや貰つてゐませんが、それでも私が働いてゐさへすりや、どうにかその日が送つて行けます。旦那、助かります。何にも申しません。有難うごぜえます。

つぎ　お父さん、あんなに言つてゐるんですから、何とかしてやる譯にはいかないんですか。

小山　（堅く目を閉ぢたまゝ首を垂れてゐる）

あさ　えつ。ぢや私はやつぱり。あゝ。（と泣き伏す）

（暫く重い沈默。）

あさ　（やがて泣き伏したまゝ涙聲で）旦那。どうか縛つて戴きます。

つぎ　今縛られては、おまへさん困りやしないの。

あさ　諦めました。もう諦めました。

つぎ　それでもね。

あさ　私のやうなものは一生縛られてゐるやうなものでごぜえます。どつちにしたつて同じことでごぜえます。

つぎ　だつて病氣の子供や年寄が困りやしないの。

あさ　それを思ふと。（しく／＼泣き出す）

小山　おい、うちへ寄つて、ちよつと子供に會つて行つてやれ。その位の手心ならわしにもしてやることが出來る。

あさ　（泣き乍ら）會ひますまい。會ふと却つて心殘りがいたしますから。

小山　それもさうだな。

あさ　旦那。

小山　何だ。

あさ　お願ひがあるんですが。

小山　どんなことだ。

あさ　こゝに日當の殘りがごせえますが、うちへ届けて貰ふ訣にはいかねえでせうか。

小山　造作もないことだ。屆けてやらう。

あさ　有難うごぜえます。ではお願ひいたします。（と財

布を巡査に渡す)

小山　よし。わしが預つた。確かに屆けてやるぞ。

あさ　はい、有難うごぜえます。

(間。)

あさ　旦那。

小山　うム。

あさ　何年位牢にはいるのでせう。

小山　さうだな。はつきりしたことは分らないが二三年はくふかも知れない。併し事情が事情だから、場合によつては執行猶豫でそのまゝさがれるかもしれない。何でもありのまゝを正直にいふがいゝ。

あさ　有難うごぜえます。(間) 旦那。

小山　うむ

あさ　もう一つ訊いても宜うごぜえますか。

小山　何でも訊くがいゝ。

あさ　赤ん坊が掘り出されたつてますが、今どこにをりませう。

小山　あれは村役場に引渡した。

あさ　もう一度會へねえでせうか。

小山　いや、それは會はない方がいゝ。

あさ　さうでごぜえませうか。

小山　會ふとおもひが殘つて却つていけない。

あさ　さうでごぜえますね。だが埋める時かうぢいつと怨めしさうな眼付をして穴の中から私を睨んでゐましたがあゝ、あれを思ふと!

(間。)

あさ　旦那、お繩を。

小山　いやそのまゝでいゝ。

あさ　(心のうちで厚く小山に感謝する)

小山　ぢや、ちよつと本署まで行つて來るから。

つぎ　はい。

(小山はあさを引立てゝ去る。つぎはぢつとそれを見送る。さあと寂しい音を立てゝ雨が降り出す。)

——幕——

生命の冠（三幕）

人物

有村恒太郎　罐詰製造所主
同　昌子　その妻
同　欽次郎　恒太郎の弟
同　絢子　その妹
麻生宜夫　銀行員
片柳玄治　久富商會社員
鳳間辨藏　網元
杉本得平　有村家に世話になつてゐる老人
同　お鶴　その娘
西田紀　醫師
外に
橇の馭者
雇人數名
漁夫數名
罐詰職人數名
女中
使の者
郵便配達夫
電報配達夫
人夫數名
屑屋
古道具屋

場所
樺太西海岸マウカ

時代
現代

第一幕

有村罐詰製造所の内部、家の構造は大體露助作りで丸太を組合せて作つてある。
正面奥、右手寄りに疊敷きの日本間がある。所謂店座敷で、障子を隔てゝ奥に通ずるやうになつてゐる。これを除く外は凡て板敷きの土間。
正面奥、中央に出入りの硝子扉がある。その奥に二重になつて入口の扉がある。なほ正面に硝子窓が一つ。それから扉の上の空間には四五尺もある大蟹の甲良が額のやうに掛けてある。

家の左右に出入口が各一つ宛ある。左側の口はその扉の眞上に打附けてある「罐詰製造場」といふ木札で、何處に聯絡してゐるか直ぐ知ることが出來る。また右側は日本式の引戸になつてゐて、勝手の方に通じてゐる。

土間の稍左手寄りに鐵製のストーヴが置いてある。その周圍に椅子が二三個。

三月の中頃だが內地と違つて、外は雪が盛に降つてゐる。

（左右は見物席から見て）

得平の娘お鶴は自分の乳呑子を背負つて、小聲に子守唄を歌ひながら土間をあちこち步いてゐる。外には誰も人がゐない。橇を走らせる鈴の音が聞える。やがてそれが此家の前で止る。と、中央の入口から立派な紳士が這入つて來る。續いて鞄を持つて馭者が隨ふ。紳士は馭者に賃金を與へる。

紳士　ご苦勞だつた。

馭者　どうも有難うございます。（去る）

紳士　（お鶴に）有村君はおゐでゝすか。

（お鶴は紳士が這入つて來た當初からけゞんさうに眺めてゐたが、問はれても答へないで、猶じろ〳〵と見てゐる。）

紳士　ご主人はお留守なのですか。

（お鶴はなほ答へない。）

紳士　お留守なら、誰でもいゝ、うちの人を呼んでくれませんか。うちの方を。

（ふと左手の製造場から主人の弟欽次郎が出て來る。）

欽次郎　（客を見て）どなた樣でございますか。私は當家の者でございますが。（丁寧に辭儀をする）

紳士　おい欽次郎君、僕だよ。そんなに改まつちや困るぢやないか。麻生だよ。

欽次郎　あ、君か、宜夫君か。分らなかつたよ。馬鹿に立派になつたな。何處の若樣がやつて來たのかと思つた。

麻生　はゝゝゝ。

欽次郎　おどかすね。先觸もなく突然やつて來るなざあ樺太の雪そつくりだぜ。だがよくやつて來てくれたな。それはさうとその後變りはなかつたか。姉さんも達者かい。お母さんも丈夫だらうね。

麻生　さう疊みかけて一どきに訊かれちや返事が出來やしないよ、君。

欽次郎　さうだつたな。ハ、、、、。だが久しく會はなかつたから話が咽喉につかへる程溜つてゐるぜ。まあ、掛けてゆつくり話さうぢやないか。（ストーヴの傍の椅子を示し）さあ掛けてくれ給へ。樺太は寒いからね。スト

ーヴを離れちや鳥渡もゐられないよ。もう東京ぢやぽつぽつ櫻が咲く時分だね。それがどうだい。こつちぢや毎日白い花ばかり降つてゐるんだからやりきれないよ。（二人掛ける）

（お鶴はぼんやり二人の話を聞いてゐたが、此時急に異樣な笑聲を發して中央の扉から外へ出る。）

麻生　あの女はどうかしてゐるのかい。

欽次郎　白痴なのだ。

麻生　さうか。道理で變だと思つた。併し素晴しく美人ぢやないか。

欽次郎　それだから猶いけないのさ。子を生まされたりなんかして。今赤ん坊を脊負つてゐたらう。

麻生　うん可哀さうに。

欽次郎　まあそんな話はどうでもいゝや。時に。（ストーヴの石炭バチーンと大きな音を立てゝ撥ねる）おい。撥ねやしなかつたか。

麻生　いや、大丈夫だつた。

欽次郎　さうか、それならいゝけれど、こゝいらは石炭が惡いもんだからね。（ふと麻生の外套を見て）いゝ外套を着てるな。矢張都の者は違ふね。

麻生　そんなことはありやしないよ。

欽次郎　高商を出ると君は直ぐに菱非銀行へはひつたつてことは聞いてゐたが、こんなに豪勢を極めてゐるとは思はなかつた。あゝいふ大銀行になると月給もいゝだらうし、ボーナスなんかうんとつくだらうな。

麻生　なあにそんなものは大したことはないよ。たゞ僕は銀行でも貸附の方に廻つてゐるものだから、ちよい〳〵餘德があるといふものさ。實は今こつちに來たのもその方の用向きでやつて來たのだ。

欽次郎　それぢや貸附の調査に來たのか。

麻生　さうだ。少し大口の申込みがあつたので派遣されたのだが、僕の報告一つが先方に取つては死活問題だから、借手はやつきとなつて僕にすがりついて來るのだ。

欽次郎　そこで君の所謂餘德が生ずる訣だね。

麻生　まあさういつたやうな勘定だ。

欽次郎　旨くやつてゐるな。

麻生　君の前だが、拵へるのは今のうちだからね。

欽次郎　そりやさうだ。全く今の内に拵へてしまはなくちや一生駄目だ。

麻生　勿論僕だつてコンミツションを取ることはよくない位は知つてゐる。併し月給だけ正直に貰つてゐたのではいつになつたつて鐵鎚の川流れで生涯頭の上る時はありやしない。少しはね君、上手に立廻らなくつちや。

（此家に厄介になつてゐる得平老爺がよぼ〳〵と勝手

口から土間を横ぎる。）

得平　お話のなかをお邪魔いたします。はい、〳〵、〳〵。

欽次郎　爺や。外へ行くのかい。

得平　今年は雪が深くつて困ります。

欽次郎　（麻生に）耳が遠いのだ。

（老人は中央の扉を開け外へ出る。二人は無言のまゝ老人を見送る。）

麻生　廢殘の老人だね。

欽次郎　「二人の邪魔者の常に我身に附き纒ふあり、其名を稱して正直と云ふ。」英國の何とかいふ男がこんな事をいつてゐたね。

麻生　元はよかつた人なんだらう。

欽次郎　大きな主人だつたのさ。それが正直なばつかりにみんな誤魔化されてしまつたのだ。

麻生　實際正直も善し悪しだね。

欽次郎　あれがさつきの白痴の娘の父親だよ。

麻生　あの老人にあんな若い娘があるのか。

欽次郎　なあに娘といつても實子ぢやないんだ。後妻の連れつ子なんだ。しかも置ざりにされて行つた。

麻生　置ざりとは。

欽次郎　後妻はあの馬鹿な娘を殘して、若い男と逃げてしまつたのだ。

麻生　ひどい女があつたものだね。

欽次郎　餘り可哀さうだから縁も所縁もない人だけれど、兄がうちへ引取つて世話することにしたんだ。

麻生　奇特なことだね。それはさうと兄さんといへば恒太郎君はどうだい。

欽次郎　相變らずだ。

麻生　相變らず謹直なんだらうな。

欽次郎　少し馬鹿正直なんで困る位だ。

麻生　君の兄さんの謹直なのでは僕は少なからず驚いてゐることがあるんだ。

欽次郎　何だ。

麻生　いつか二人で田舎に徒歩旅行に出掛けたことがあるんだ。するとある鐵橋の所に出たんだね。遠くに汽車がやつて來るのさ。そこで僕は旅の一興にかういふ案を提出したんだ。二人とも鐵橋の眞中まで歩いて行つて枕木にぶら下らう。さうして汽車をやり過して見ようとかういふのだ。

欽次郎　成程君の考へさうな悪戯だ。それで旨くいつたかい。

麻生　ところが恒太郎君は川の中へ落つこちてしまつた。

欽次郎　何のこつたい。意氣地のない。

麻生　そんなことをいふが君一度やつて見給へ。貨物列車

か何かの長い奴に出週つた日には、汽車が通り拔けないうちに手の方が參つてしまふよ。それでも兄さんは汽車が通過する間はぢつと枕木にぶら下つてゐたよ。そして汽車が通り切つた後で、ぎゆつと腕に力を入れて上らうとしたんだが、もう肩に力がないからどうしても駄目なんだ。それでたうとう落ちてしまつたのだ。

欽次郎　ところで君の方はどうしたんだい。

麻生　僕は落ちなかつたさ。

欽次郎　君はそんなに腕が丈夫なのかい。機械體操は上手ぢやなかつたがね。

麻生　機械體操は昔から下手だが落ちなかつたよ。

欽次郎　どうして。

麻生　僕は初めから枕木にぶら下らなかつたのだ。そして工夫の逃げ込む避難場に立つてゐたのだ。

欽次郎　狡いね君は。

麻生　なあに狡いことはありやしない。君の兄さんが、まつたう過ぎるんだ。あんな危いことをやるものがあるものか。

欽次郎　だつて君がいひ出したんぢやないか。

麻生　そりやさうだが、まさか兄さんが正直にぶら下るとは思はなかつたんだ。それで僕はすつかり感心してしまつたのさ。時に恒太郎君はゐないのか。

欽次郎　四五日前豊原へ出掛けたのだ。併し今にも歸つて來るだらうと思つてゐるのだ。是非歸つて貰はなくつちやならない事があつて、電報を何本も打つてあるのだから。

罐詰工　（製造場から首を出し）旦那、〳〵。

欽次郎　何だ。

罐詰工　ちよつと見て戴きたいんですが。

欽次郎　よし〳〵。今行く。

（罐詰工首を引込める。これと殆ど同時に右手の勝手許で妹の絢子（あやこ）の聲が聞える。）

絢子　兄さん〳〵。大變だわ。

欽次郎　どうしたんだ。

欽子　早く來て手傳つて頂戴、よう兄さんてば。（引戸を少し開けて姉さん被りのうひ〳〵しい顏を出す）あらお客様。少しも知らなかつたわ。（直ぐ戸を閉す）

欽次郎　なあにおまへの知らない人ぢやないから、ちよつとおいで。

絢子　（戸のうしろから）だつてあたし、

欽次郎　はにかむことはないぢやないか。外（ほか）の人ぢやないよ。麻生君だ。宜夫さんだ。

絢子　だつて犬が鷄（とり）をこんなところへ追込んでしまつたんですもの。

欽次郎　何だまた「丸」が鶏を追掛けたのか。爲様のない奴だな。
罐詰工　（また首を出し）旦那、ちよつと。
欽次郎　直ぐ行くよ。
麻生　ぢや犬の方は僕が見てやらう。
欽次郎　おい絢子、麻生君が見て下さるとさ。（さういひ乍ら製造場に這入つてしまふ）
絢子　（戸のうしろで）あら、いけないわ、〳〵。そんなこと。
麻生　僕ぢやいけませんか。
絢子　さういふ意味ぢやありませんのよ。
麻生　そんならいゝぢやありませんか。（戸を開けようとする、併し開かない）おや、戸を押へてゐるんですか、絢子さん。
絢子　だつて困るわ、あたし。
麻生　困ることなんかありませんよ。
絢子　でも、こんな服装してゐるんですもの。
麻生　そんなことをいつてゐると鶏を食べられてしまひますよ。（力を入れて戸を開く）さうら開いた。
絢子　あら、あたしどうしませう。
麻生　（向うの室に這入つて）犬は何處にゐるんです。
絢子　そこにゐますわ。

麻生　あ、大きな犬ですね。しつ、しつ。少しも逃げませんね。
絢子　え、樺太犬は强情ですから。
麻生　兩方の耳が立つてゐて、恐い顔をしてゐますね。
絢子　あら、あなたがそんなことを仰しやつてはなほ逃げませんわ。
麻生　ぢやかうしてやりませう。畜生、〳〵。（携へてゐるステツキ用の洋傘で犬を追ふ）さうら、たうとう逃げてしまひました。
絢子　有難うございました。
麻生　あゝ、いゝ運動をやつた。（といひ乍らストーヴのところへ戻つて來て掛ける。）
絢子　（猶勝手許に殘つたまゝ）トウ、〳〵、〳〵、〳〵。（と鶏を呼んでゐる）
麻生　鶏は上から下りませんか。
絢子　え、恐はがつてゐて下りて來ませんわ。
（欽次郎再び製造場から出て來る。）
欽次郎　犬は逃げたかね。
麻生　やつと逃げた。（壁に掛けてある大きな甲良を見て）君、こゝらではこんな大きな蟹がとれるのかね。
欽次郎　うん、かういふ奴はさうはとれないが、それでもとき〴〵はとれるよ。

麻生　こんな奴を食ふのは何だか氣味が惡いね。
欽次郎　そんなことはないさ。それに罐詰では足の外は使はないから大きい奴ほどいゝんだ。何しろ五寸以下の奴は仔蟹といつて使つていけないことになつてゐるんだからね。
麻生　そんなことがあるのかい。なか〳〵面倒なもんだね。だが、兎に角蟹つて奴は旨いものだ。
欽次郎　それは旨いさ。ちよつと此位風味のいゝものはないからね。だから外國の上流社會では蟹が素的に賞美されるんだ。それに近年向うでロブスターが餘りとれなくなつたものだから、その代用にこちらのものが非常に輸出されるんだ。
麻生　それぢや君のところは大分景氣がいゝんだね。
欽次郎　實は英國から五千函二十四萬罐といふ大口の註文があるんだ。それで今は小口を皆斷つてこの分だけを製造してゐるんだが、これをやり了せれば少しは樂になるわけだ。
麻生　英國から直接の註文なのか。
欽次郎　さうだ。今迄は一旦横濱なり神戸なりの貿易商の手を經て、大部分米國に輸出されたのだ。そしてそれを又米國から英國や佛蘭西に轉送してゐたのだが、併しこんなことでは二重にも三重にも仲介者に利益を占められてしまふだけだから、英國の商人も考へたと見えて直接僕の所に註文して來たのだ。
麻生　それの方がお互ひにいゝからね。
欽次郎　ところがそれではよくない奴があるんだ。
麻生　仲介業者か。
欽次郎　さうだ。直接に取引を始められた日には仲介業者は上つたりだからね。そこであらゆる妨害を試みようとしてゐるのだ。
麻生　卑劣ぢやないか。
欽次郎　卑劣とも惡辣とも言語道斷の行爲だ。而も彼等はそれを以て自己の商賣を維持し、權利を擁護する行爲だと思つてゐるのだから慾々手がつけられないのだ。
麻生　そりやどこ迄も爭ふがいゝね。
欽次郎　無論僕は戰ふ覺悟だ。どんなことがあつたつて彼等に降參するやうなことはしないよ。
（絢子はこの少し前から來てゐたが物恥かしさうに默つてゐる。）
欽次郎　（ふと絢子を見て）　おまへそこにゐたのか。
絢子　え。
欽次郎　何だ。着物なんか着換へて。
絢子　だつてあたしまだご挨拶もしないんですもの。
欽次郎　ご挨拶なんかよりご馳走が肝腎だよ。なあ麻生君。

麻生　さう〳〵、久し振りで絢子さんのお料理をご馳走になりたいもんですね。
絢子　あの、しばらくご滯在なすつてもおよろしいのでございますか。
麻生　昔馴染に五六日ご厄介になりたいと思ふのですが。
絢子　まあ嬉しうございますこと。どうかごゆつくり。
（雇人中央の戸口から入つて來る。）
雇人　旦那、漁船が上りました。
欽次郎　さうか、直ぐに行く。どうだ、漁はあつたか。
雇人　へえ、大分あつたやうです。
欽次郎　さうか、それはよかつた。
絢子　兄さん、濱へ行くんですか。
欽次郎　鳥渡行つて來なくつちやならないから、おまへ麻生君のお相手をしてくれないか。
（絢子困つたやうな恥しいやうな樣子をする。）
麻生　僕のことならどうかおかまひなく。
欽次郎　君大變失敬だけれど、直ぐ歸つて來るから奧でゆつくりしてくれないか。
麻生　有難う。
欽次郎　ぢやちよつと行つて來る。
（欽次郎防寒具をつけて濱へ出掛ける。）
（麻生と絢子は暫く間の惡い沈默。）

絢子　あたし田舍染みてしまつたでせう。
麻生　そんなことがあるもんですか。私の姉の家から學校に通つてゐた頃と少しも變りがありませんよ。
絢子　あらお揶揄ひになつては厭ですわ。でもあの頃は樂しうございましたわね。あなたには每日お目にかゝれるし…
麻生　何故あなたは音樂學校を止めてしまつたのです。折角入學が出來たのに。もう一度東京へ出て見る氣はありませんか。
（奧で赤兒のけたゝましい泣聲が聞える。）
絢子　え、それはもう私だつて。――あら、ご免下さい。赤ん坊が泣いてをりますから。（奧の女中に）つぎや、坊やをこちらへ連れておいで。
（女中は赤兒を抱いて來る。絢子はそれを受取つてあやす。）
麻生　上の兄さんのお子さんですか。
絢子　え、乳が出ないもんですから泣いて爲樣がないのです。
麻生　お母さんがご病氣なんですか。
絢子　え、長いこと臥つてをりますの。私が學校を止めたのもそのためですわ。誰も家のことをする人がないんですもの。

麻生　ぢやあなたは當分出られないんですか。
絢子　出られないつて？
麻生　僕はね絢子さん、近い内に家を持たうかと思つてゐるのです。
絢子　まあ、それは結構でございますこと。
麻生　それでね絢子さん。
絢子　はい。
（突然中央の扉を排して神戸の久富商會の出張所長片柳玄治が這入つて來る。）
片柳　ご免。ご主人はおゐでゞすか。
絢子　あの、不在でございますが。
片柳　では若大將にお目にかゝりませう。
絢子　下の兄もちよつと出かけましたのですが。
片柳　留守をおつかひになるのではありますまいね。
絢子　いゝえ、そんなことはございません。
片柳　若しそんなことをなさると却つてお宅の爲めにご損ですよ。
絢子　私決して嘘などは申上げません。
片柳　少しご相談したいことがあつてわざ〳〵上つたのですが、お留守とあれば止むを得ません。また明日でも上りませう。
絢子　左樣でございますか。

（片柳去る。）
麻生　いやな男ですね。何ですあれは。
絢子　神戸の久富商會つて貿易商の方ですの。
麻生　あ、罐詰の仲介業者ですか。
絢子　えゝ。あつ、鈴の音が聞える。兄かも知れませんわ。
（犬橇の烈しい鈴の響が聞えて、間もなく家の前で止まる。白痴の娘お鶴が先づ這入つて來る。）
お鶴　旦那が歸つて來た。
絢子　さう。（立上つて戸口に行く）
（有村恒太郎毛皮の防寒具に身を固めて中央の戸口から這入つて來る。）
有村　酷い雪だ。西が吹くから今夜は荒れるかもしれない。
絢子　さぞおひどかつたでせう。
有村　うん。まるで雪の上を轉がつて來たやうなものだ。
絢子　あの麻生さんがいらつしやいましたわ。
有村　なに宜夫君が。それは珍らしい。（麻生に）こんなところへ、君よく訪ねて來てくれたね。
麻生　なに少し用事があつたもんだから。
有村　さうか。どうかゆつくりして行つてくれ給へ。
麻生　有難う。
お鶴　犬に鮭やらうか。
有村　さう〳〵。すつかり忘れてゐた。ヘヴィーを掛けた

ので犬はみんな疲れてゐるんだ。おまへ直ぐに小屋に連れて行つて鮭をやつてくれ。
お鶴　あい。（戸外に出て犬を呼び乍ら去る）
麻生　白痴だといふのによく働きますね。
絢子　え、兄さんのことだと何でもいたしますのよ。
有村　店の者はゐないのか。
絢子　え、船が上りますんでみんな濱へ行つてをりますの。
有村　さうか。（赤兒を見て）おい坊主、寢てゐるのか。今日は珍らしく泣かないな。
絢子　さつき迄泣いてをりましたの。今やつと寢入つたところですわ。
有村　おい絢子、麻生君は船で疲れておゐでだらう。奥にご案内して直ぐに風呂をお勸めするがいゝ。
絢子　えゝ、さうでしたつけ、つい話に氣をとられてゐたもんですから。
麻生　寒い時には風呂は何よりだ。遠慮なしにご厄介にならう。
有村　さあ、どうか。
麻生　ぢやあ、ご免蒙つて。（日本間に上る）
絢子　むさ苦しいところですけれど、どうかこちらへ。（絢子麻生を奥へ案内する。）

有村　犬の奴め無性に駈けやがるもんだから、體が綿のやうに疲れちやつた。あゝ。（伸をする）
（雇人漁夫等數名蟹を木製の擔荷様のものに載せて濱から運んで來る。そして中央の入口から這入つて左手の製造場へ運ぶ。）
有村　（漁夫等に）や、ご苦勞〳〵。吹雪になつて來たから濱はさぞ難儀だらう。漁は大分あつたかね。
漁夫　まづ、いつもよりはいゝ方です。
有村　さうか。それは結構だ。どれ、どんなのがとれたい。ちよいと見せてご覽。
（漁夫擔荷を下において見せる。）
有村　大分大きなのがとれたね。こゝいらのをとるにはもう可なり沖の方へ出かけるかね。
漁夫　なあに、まだ一里半かそこいらのところで大丈夫です。
有村　（蟹を見てをり乍ら不審さうに）おい、ハイカラ蟹がはひつてゐるぢやないか。
（雇人漁夫の袖をひく。漁夫無言。）
有村　何だつてこんな奴を入れるんだ。（愈不審さうに）をかしいね。下の方には雌や仔蟹が澤山はひつてゐるぢやないか。
漁夫　そりや何です。雌でも仔蟹でもみんなとつて來いつ

て、さう云はれたもんで。

有村　誰に。欽次郎にか。まさか弟はそんなことはいひはしまひ。雌や仔蟹を濫獲したら蟹は根絶やしになつてしまふ。こいつを採つて來ることは禁令になつてゐるぢやないか。

漁夫（無言）

有村　かういふ奴が網にかゝつたら何故直ぐに逃がしてやらないのだ。そんなことはおまへ達も十分しつてゐることぢやないか。それに第一こんな蟹は一等品罐詰には使へやしない。これから氣をつけてくれなくちや困る。うちの名前にもかゝはることだから。

雇人（その場を救はうとして）兎に角これは向うへ運んでおきませうか、旦那。

有村　さうだな。まあ運んでおくさ。おい十吉、製造場へ行つたなら、今日出來た罐詰を二つ三つ持つて來い。

雇人　へえ。

（雇人漁夫等擔荷を擔いで製造場に這入る。）

（漁夫等は間もなく出て來て外へ去る。）

（雇人罐詰を二三個有村のところへ持つて來る。）

有村（罐を叩いて見たり何かして仔細に點檢する、そして雇人に）おい罐切。

（雇人罐切を渡す。有村罐を開く。有村の顏には驚愕の色が浮ぶ。）

有村　欽次郎は居ないのか。

雇人　もう間もなくお歸りになるでせう。（表の扉をあけて外を見る）あ、丁度お歸りになりました。

（弟濱から歸つて來る。）

欽次郎（兄を見て）お歸んなさい。途中はひどかつたでせう。

有村　ウム。（と膠なく答へる）

欽次郎　電報は見ましたか。

有村　見た。

欽次郎　癪に障ることが勃發しましたね、私は一人でむしやくしやしてゐましたよ。

有村（雇人に）十吉、おまへは製造場の方を手傳つてやれ。

雇人　はい。（製造場に這入る）

有村（弟に）おい、もつと近くへ寄らないか。

（欽次郎兄に近寄る。）

有村（開いた罐詰を弟に示し乍ら少し嚴かに）これはおまへの指圖か。

欽次郎　さうです。

有村　英國へ送るやつだらうね。

欽次郎　さうです。外のなざあとても手が廻りませんから

ね。

有村　おまへイリス會社との契約は承知してゐるのだらう。

欽次郎　無論知つてゐます。

有村　あれは一等品といふ契約だよ。

欽次郎　その通りです。

有村　それだのにこれはどうしたのだ。雌や仔蟹がはいつてゐるぢやないか。

欽次郎　雄の大きいのがとても間に合はないのです。

有村　そりや今度は大口だから、うちの持船で採れるだけぢや足りやしない。併しその爲めに約束船の契約がしてあるのだ。その方からいくらでも引取れるぢやないか。

欽次郎　ところが一疋も手にはひらないのです。

有村　そんな譯はない。前貸の金を渡してちやんと約束をしたことだ。その船で採つて來た蟹は全部こちらのものぢやないか。

欽次郎　併し破約だといふのです。兄さんが豐原へ立つた翌日みんな金を返しに來たんです。

有村　破約！　そんな馬鹿なことはない。破約だなどといつても承知しなければいゝ。

欽次郎　そりやさうです。けれどもそんなことをいつて言ひ爭つたところが、肝腎の蟹が今直ぐ手にはひらないことには何の役にも立ちません。短い期間に多數の品を拵へなくつちやならないんですから。

有村　それはさうだ。だが破約だなどといふのは要するに約束船の値を上げさせようといふ網元の魂膽なのだ。それに違ひない。今が丁度附込み時だからな。爲方がない値を上げてやらうぢやないか。何といつても今は爲事を早く運ばなければならないのだから。

欽次郎　兄さんは一體私の電報を見たんですか。

有村　見た。見たから直ぐに返電を打つたぢやないか。

欽次郎　「ネヲアゲテヤレ」といふ奴ですか。私はあれを見ると直ぐに長文の電報を打つたのですが。その方は見ないのですか。

有村　長文の電報などは受取らない。

欽次郎　をかしいですね。

有村　雪がひどいから通じなかつたのかもしれない。

欽次郎　あれを見てゐなくつちや何も知らないのは無理もない。

有村　何か隱れた事實があるのか。

欽次郎　さうです。兄さんはこの破約を網元等が値を上げたさのストライキ位に思つてゐるやうですが、決してそんな簡單なことぢやないんです。實は私も初めはさう思つたのですが、併し間もなく眞相が分りました。

有村　どういふのだ。
欽次郎　兄さん、綱元等はいくらこつちで値を上げてやつたつて、決して破約は取消しませんよ。
有村　どうして。
欽次郎　一體うちの今年の約束船は外より餘程高く極めてあるでせう。それだのに破約だなどといふ無謀なことをいふのは何か理由がなくつちやなりません。
有村　ふむ。
欽次郎　それだけなら兎も角、いくら値上げしたら破約を解くかと掛合つても、綱元等は決して値を切出さないのです。兄さん、分るでせうこれで。蟹をこちらに引渡さないのは綱元等の魂膽ぢやなくつて、その後に黑い奴がついてゐるんです。
有村　そんな妨害をするのは一體誰だ。
欽次郎　神戸の久富商會です。
有村　久富商會！　私はあすこから怨みを受ける筈がないと思ふが。
欽次郎　英國と直接取引した事が向うでは不足なのです。そんなことをされちや仲介業者は立ち行かないのです。
有村　併しそれは小口ではあるが今迄だつてやつてゐた事だ。今度に限つてそんなことはないぢやないか。
欽次郎　ところが今度は五千函といふ大口ですから、それを引受けた事が向うぢや羨ましいんです。それでけちをつけようとしてゐるんです。
有村　ひとがすつかり準備をつけて出て行つたのに、こんな妨害をするとは何んといふ話だ。第一そんな事をしたつて向うぢや何の得にもならないぢやないか。
欽次郎　いゝえ、さうぢやありません。妨害をやつてゐる内には屹度こつちがへたばるから、さうしたら此爲事を全部奪ひ取らうといふ算段なんです。
有村　ふん、そんな底意があるのか、それでこつちの約束船をみんな横取りしてしまつたのだな。
欽次郎　それでね兄さん。こちらが向うの壓迫に屈服すればよし、若し屈服しなければ一層烈しい妨害を加へて、あなたがどうしても賠償金を拂はなくつちやならないやうに、爲事を躓かせようとかゝつてゐるのです。兎に角どこで聽いたのか、萬一契約を違へた際はこちらが多額の賠償金を出さなくつちやならないつてことを、向うはすつかり知つてゐるのです。
有村　惡魔のやうな奴だ。もう妨害位ではない。暴虐だ。併しそんなことをしてこちらを苦しめようといふならわたしにも覺悟がある。見事妨害が爲敢せられるか。こちらが横暴を壓倒するか、戰へる限り戰はないでおくものか。

欽次郎　兄さんだつてさうでせう。こんなことをされちや誰にしたつて默つてはゐられません。そこで私は約束船のやつなんか一疋も使はなくつたつて、持船のやつ丈で間に合はせてしまはうと計畫を立てたんです。さつき兄さんは雌や仔蟹を使つたつて怒つてゐたやうですが、かういふ場合であつて見れば爲方がないぢやありませんか。

有村　いや、それはいけない。一等品といふ約束に等外品を送ることは契約違犯だ。約束船が破約になつたのなら爲方がないから外の船からよい蟹を買ふより外はないぢやないか。

欽次郎　しかし兄さん。わたしもちよつと當つて見たんですけれど、うちが英國から註文を受けてゐることは他の網元も知つてゐますから、それを附け目にみんな法外な高いことをいつてゐるのです。それを言ひ値通りに買はうものならいくら損をするか知れたものぢやありませんよ。

有村　困つたな。

欽次郎　なあに少しは惡いのがはひつたつて分りやしません。罐詰だから中は見えやしませんからね。函の上つ側だけいゝ奴を列べておけば大丈夫です。

有村　（無言。沈思してゐる）

欽次郎　兄さん、あなたは不賛成なんですか。併しかうでもしなくつちや、罐が多いのに期日が短いんだからとても間には合ひませんよ。

有村　おい暫く默つてゐてくれ。少し考へて見たいから。

欽次郎　さうですか。何の事だ。私は機敏にやつたと、あなたが歸つたら褒められるつもりでゐたのだに。

（二人暫く沈默。突然有村立上る。）

欽次郎　何處へ行くんです。網元のところですか。そんなら無駄です。私が今迄にどの位掛合つたかしれないんですから。私だつて何も好んでハイカラ蟹なんか使ひたくはありません。止むを得ないからした事なんです。あなたがお出でになつたつて同じことですよ。

有村　さうかも知れないが、兎に角私が行つて見る。

（有村外へ出掛けて行く。欽次郎一人殘る。顔に不滿の色が見える。樺太の春は暮れやすく四邊が薄暗くなつて來る。間もなく中央の戸から網元風間辨藏が入つて來る。）

風間　や、こんちは、お久しぶり。

欽次郎　あ、辨藏さんか。――此間はご愁傷のことだつたね、おかみさんが。

風間　有難うおまへさんの前だが已あ泣いちやつたよ。

欽次郎　それは無理はないとも。

風間　時におまへさんとこの約束船はみんな破談になつたつて本當かい。
欽次郎　本當だ。
風間　それは神戸の仲買が糸を引いてゐるのか。
欽次郎　どうもさうらしいんだ。
風間　太い奴だ。己はさういふ話を聞くと打つくらはせてやりたくなるね。それぢやおめえさんの所では蟹が入用ぢやねえか。
欽次郎　入用にも何にも咽喉から手の出る程欲しいんだ。
風間　それぢや己のところから持つて來たらいゝや。
欽次郎　そりや有難いね。だが値のところはどうなのだい。
風間　そんなことを心配することはねえよ。己あ他の奴のやうに附込んで高くするやうなそんなけちな男ぢやねえ。
欽次郎　本當か。助かつた。有難う。（と眞實込めて風間の手を握る）
風間　（よろ〳〵として）おい、突つ突いちやあいけねえ。己の足はぐら〳〵してゐるんだから。ハ、、ハ。
欽次郎　あなたの方で蟹を供給してくれゝば、うちは大助かりだ。あゝこれですつかり安心しちやつた。辨藏さん。一杯飲まうよ。一つ附合つてくれないか。

風間　うん、飲みに行かう。だが今日は妹ごはゐねえのかい。
欽次郎　奥にゐる。併しお客があるもんだから忙しいんだ。
風間　さうか。――
欽次郎　妹なんか爲方がない。それよりか向うに行けば綺麗なのが澤山ゐるよ。さ、行かう〳〵。
（欽次郎は風間を連れて外へ出掛ける。室内はいよいよ暗くなる。女中が這入つて來て吊ランプに火をつける。それから製造場の戸をあけて「みなさん御飯ですよ」と呼ぶ。雇人たちは舞臺を横切つて勝手口に這入つて行く。暫くして有村が悄然と歸つて來る。そして日本間に腰を掛けて沈思してゐたが、やがて靴をぬいで上に上り、帳場机に倚つて帳簿を繰つて見たり、計算を始めたりする。麻生が奥から出て來る。）
麻生　帳合ひかね。そんなに稼いぢや殘つてしようがないだらう。
有村　あ、麻生君か。ついお相手もしないで失禮した。少しごた〳〵したことがあつたものだから。
麻生　いや、遠慮なくご馳走になつたよ。だがそのごたごたといふのは神戸との一件かね。
有村　君、もう知つてるのか。

麻生　さつき欽次郎君からちよいと聞いた。

有村　さうか。――君がもう知つてゐるのなら何もかも打開けた話をするが、實はそのことで非常に困つてゐるのだ。どうだらう、突然だけれど君のところの銀行で少し融通が願はれまいか。

麻生　さうだね。

有村　君が銀行に出てゐるからといつて、久し振りで來た君にこんな話を持出すのは厚かましいが、僕は今非常に苦しいんだ。

麻生　そんなに困つてゐるのかい。

有村　何しろ向うは金の力で壓迫して來るんだから、それに逆つて契約通りを履行しようと思ふと僕は破產するより外はないんだ。

麻生　破產！　そんなことになつちや堪らないぢやないか。

有村　だからそこをどうにか切拔けたいのだ。

（裏で犬の聲が頻りに聞える。）

麻生　君、大層犬が吠えるね。

有村　また熊が來たのかもしれない。雪が深くなると餌がなくなるもんだから時々里に出て來ることがあるんだ。

麻生　熊だつて。

有村　なあに心配しなくつたつていゝよ。家のなか迄やつて來やしないから。だが今の話はどうにかならないだらうかね。

麻生　さうだね。

（裏で烈しい物音がする。）

麻生　おい、熊ぢやないか。

有村　なあに雪崩の音だよ。

麻生　さうか。それならいゝけれど。何だか樺太つて物騷なところだね。

有村　はじめての人にはさうかもしれない。

麻生　そこで君の話だが、それには何か抵當でもあるのかい。

有村　船とか罐詰の機械とかはあるけれ共とても十分といふ訣にはいかないかもしれない。それに少し借出してもあるからね。

麻生　君はもう大分出來てると思つてゐたのだが、ぢやそれ程でもなかつたんだね。

有村　商人(あきんど)の身上なんてものは洗つて見ると大抵こんなものさ。

麻生　兎に角この話は僕の一存にはいかないから、一つ訊いて見ることにしよう。

有村　さう。何分頼むよ君。

麻生　（聽耳立てゝ）おい、何か音が聞えやしなかつたかい。

有村　いゝや、君の耳鳴りだらう。
麻生　（顫へ乍ら）　あゝ、馬鹿に寒い。
有村　湯冷めがしたんだらう。直ぐ寢るといゝ。
麻生　さうしよう。
有村　（奥へ）　おい絢子、麻生君はおやすみだ。床をとらないか。
絢子の聲　はい。もう取つてございます。
麻生　さうか。ぢや僕はご免被らう。
有村　それぢやゆつくりやすんでくれ給へ。
（麻生辭儀して奥へはひる。幽かに汽笛の音が聞える。得平老爺がお鶴に手をひかれて這入つて來る。）
有村　おい爺や。
（お鶴得平に合圖をする。）
得平　（有村を見て）　お、旦那さま、お歸りになりましたね。逢坂の峠はさぞご難儀でございましたでせう。
有村　爺や。
得平　はい。
有村　爺やが店をしまつたのはどうしてだつけね。
得平　はい左樣でございます。吹雪になりましたから外を歩く方は全く難澁いたします。
有村　耳の聞えない老人と相談したところが爲方がないな。
得平　はい娘のことでございますか。私はこれのことを思ひますと……
有村　爺や、今日は考へごとがあるんだもうあつちへ行つてくれ。
お鶴　（得平の耳に口をあてゝ）　お父さん。もうあつちへ行けとさ。
得平　さうか。はい。お邪魔をいたしました。はい／＼。
（二人勝手もとに這入つて行く。）
（汽笛の聲また聞える。有村は土間に下りて中央の扉を細目に開け外を見る。開いたところから雪が盛んに吹き込む。絢子奥から出て來る。）
絢子　麻生さんおやすみになりましたわ。
有村　さうか。
絢子　今夜は大變汽笛が鳴るのね。
有村　沖で汽船が惱んでゐるのだらう。
絢子　何か見えますか。
有村　いや何も見えない。
絢子　兄さんご飯をあがつて下さい。勝手許が片附かなくつて困りますから。
有村　さうか。ぢや直ぐ食べよう。
（汽笛の響また物悲しげに斷續して聞える。）

――靜かに幕――

第二幕

第一幕と同じ場面。その翌日の午前。外は雪が上つて日光がきら〳〵と輝いてゐる。

雇人や罐詰の職工や漁夫などが四五人窓際に立つて外を見てゐる。白痴の娘お鶴は子を脊負つたまゝちよこなんとストーヴの傍に腰掛けてゐる。

漁夫　（指さし乍ら）丁度この見當だな。

雇人　どれどこいらに。

漁夫　濱へ出ると見えるんだが、こゝからぢやよく見えねえかもしれねえ。

罐詰工一　あの黑いのがさうかね。

漁夫　いゝや、船なんざあ見えやあしねえよ。たゞ帆柱だけが出てゐるんだから。

雇人一　すつかり沈んぢやつたのかね。

漁夫　うん、あすこは岩が多くて浪の荒い所だから、西をくつちやたまらねえよ。

罐詰工二　昨夜いやに汽笛が鳴ると思つたらたうとうやられちやつたんだな。可哀さうに。

雇人二　でも何かい。人はみんな助かつたかね。

漁夫　爲合せに死人はなかつたやうだ。だが怪我人は二三人あつたらうよ。西田さんが行つたから。

雇人一　お醫者の西田さんかい。

漁夫　さうだ。

罐詰工一　（ふとお鶴が獨りでストーヴに當つてゐるのを見て）やあお鶴さん、獨りで當つてゐるのか。嗳たまるなら二人で嗳たまらうぢやねえか。

お鶴　いやだよ。おまへなんか。

雇人二　おい、お鶴さんを口說いちやいけねえぜ。親爺さんに叱られるぞ。

漁夫　（罐詰工二に）この馬鹿に子を生ましたのはおめえぢやねえか。

罐詰工二　馬鹿なことをいつちやいけねえ。己かそんなことをするもんけえ。

罐詰工一　おい大きな聲ぢやいはれねえが、お鶴を孕ましたのはうちの旦那だつてぢやねえか。

雇人一　旦那つて、上の旦那かい。

罐詰工一　何しろお上さんが長いこと病氣だからな。

雇人二　旦那に限つてそんなことがあるものか、なあ十どん。

雇人一　そらあ、わつしが保證すらあ。

漁夫　下の旦那だつて噂もあるぜ。あの人はまだ獨りだからな。

雇人一　いやそれも嘘だ。人は何とか惡口がいつて見たい

もんだよ。

漁夫　だがあんな聾と馬鹿を何んでもなくたゞ世話するものがあるもんか。

罐詰工二　そりやさうだ。どうも少し變んなところがあるよ。

（得平老爺と他の漁夫と話し乍ら勝手口から出て來る。）

得平　そりや本當の話か。また揶揄ふんだらう。

他の漁夫　嘘なもんか。全くおみつつあんが歸つて來たんだ。（得平の耳に口を當てゝ大聲に）おめえのお上さんが歸つて來たんだよ。

得平　駄目だ〳〵。騙したつてわしはもう擔がれやしないよ。

他の漁夫　ぢや勝手にするがいゝや。

得平　（獨り言のやうに）だが彼女ほんたうに歸つて來たのかしら。可哀さうに男に捨てられたんだらう。そりやもう分つた話だ。この寒いのに着物もみんな無くしてしまつて顫へてゐるに違ひない。さう思ふと可哀さうだな。（漁夫に）德松つあん、おみつはどこにをりましたい。

他の漁夫　お上さんかい。（得平の耳に）濱で泣いてゐたよ。

得平　濱に。（それを聽くとのこ〳〵と戸口の方へ歩き出す）

他の漁夫　行くのかい、得平さん。

得平　行つて見る。行つて見る。

（得平中央の扉から外へ出て行く。）

漁夫　（他の漁夫に）本當に歸つて來たのか。

他の漁夫　（笑つてゐて答へない）

雇人一　また騙したのかい。年寄を罪ぢやないか。

他の漁夫　だつて揶揄ふと面白いからさ。

罐詰工一　可哀さうに。

（奥の座敷から麻生が出て來る。續いて欽次郎と絢子とがそれを見送つて來る。）

麻生　ぢやちよつと用達しに行つて來ます。

欽次郎　なるたけ駈足で用を濟まして、早く戻つて來給へ。今夜は是非一しよに飲まう。

絢子　何にもございませんけれどお待ちしてをりますから、どうぞ。

麻生　いや、どうか何にも用意なんかしないで下さい。ではちよつと行つて來ます。

（麻生中央の戸口から表へ去る。妹は麻生を送り出すと直に勝手口に這入る。）

罐詰工一　（欽次郎に）旦那、昨日とれたハイカラ蟹を使

つちやいけねえんですか。

欽次郎　さうだな。兄が留守だからそれは少し待つて貰はう。

罐詰工一　あれをやらねえと、少し手が隙くんですがね。

欽次郎　もう間もなく戻つて來るだらう。そしたらどちらかに極めるから。

罐詰工一　へえ。

（罐詰工雇人等製造場へ引込む。漁夫は外へ去る。）

（久富商會の片柳中央の戸口から這入つて來る。お鶴はそれを見ると急に片柳に飛附かうとする。）

片柳　何をするんだ馬鹿。爲樣のない女だな。

欽次郎　（お鶴に）お客樣に失禮なことをしてはならない。あつちへ行つとれ。

（お鶴不承々々に表へ去る。）

片柳　昨日上つたら御留守でしたが、今日は大大將もおゐでゞすか。

欽次郎　いや、兄はちよつと出掛けてをります。

片柳　さうですか。ぢやあなたにお願ひして行きませう。

欽次郎　何ですか。

片柳　實は米國から二千函許り送つてくれといふ註文なんです。一つあなたのところでやつて戴きたいのですが。

欽次郎　折角ですがそれはお引受け出來ません。

片柳　どうしてゞす。

欽次郎　少し大口の註文があるんで、他はみんなお斷りしてゐるのです。

片柳　大口の註文！　一體それはどこから出たのです。

欽次郎　ロンドンのイリス會社です。

片柳　イリス會社。さうですか。だが有村さん、わたしどもを差置いて外國と直接に取引なさるのは少しひどいではないですか。

欽次郎　成程先方があなたのところの取引先であつたら惡いでせうが、イリス會社は確かあなたの店の得意先ではない筈です。あすこは私どもとは特殊の關係のあるところなのですから、直接に捌いたつてよいと思ひますが。

片柳　理窟をいへばそんなものかもしれませんが、今迄あなたの所の品は多く私の店から輸出してゐたのです。それだのに今度突然大口の取引を直接にやられちや仲介業者は立つて行きませんよ。

欽次郎　御尤ですが、あなたの店とイリス會社と取引がないとすれば、直接にやつたつて關はないぢやありませんか。それに私共では直接取引は致しませんといつて、あなたのところと約束をした筈はないんですからね。

片柳　そりやさうですが、今度かうだから位の一應照會はあつてもいゝでせう。

欽次郎　一々あなたのところの許可を得なくちや取引は出來ないんですか。私どもはあなたの店の下受ぢやありませんよ。

片柳　併しこちらに色々都合がありますからね。私共ぢやあなたの所の罐詰を輸出する。あなたの所ぢや私共に罐詰を供給する。お互ひに持ちつ持たれつぢやありませんか。それだのに照會もなしに直接取引を始められちやこちらは敵ひません。それぢや自分さへよければ關はないといふ主義です。あなたも學校を出た方ぢやありませんか。少しは商業道德を守つて貰ひたいのです。

欽次郎　商業道德ですつて。あなたに商業道德がお分りですか。人の約束しておいた船を悉く橫取りしてしまつて、私共の商賣を邪魔しておきながら、それが一體商業道德ですか。

片柳　あなたは何をいつてゐるのです。

欽次郎　品物はあなたの店へばかり供給してゐたのではありません。今迄だつて直接取引は何回もやつてゐました。その時は何ともいひもしないで、今度大口の註文を受けたら、妬ましさの餘り急にそんな難癖をつけて來るなんて、實に卑劣ぢやありませんか。併し若しあなたが商業道德を口にされるのなら、斷然陰險な妨害は止めて貰ひませう。輸出は國家的の事業ですからね。私の店が違約をすればそれは私の店だけでは濟みません。日本の不名譽になることです。日本商人全體の不信用になることです。あなたもどうか考へて下さい。

片柳　默つて聽いてゐると、あなたは妨害だとか卑劣だとかいはれますが、わたしはそんなことをした覺えは毛頭ありません。

（網元の風間が酒に醉つて這入つて來る。そして這入りしなに入口の扉にどたんと突當る。二人の話がちよつと中斷される。）

風間　いやあ、今日はえらい人が來てゐるな。

片柳　いきなり何をいふのだ。

風間　たゞ、えらい人が來てゐるといつたゞけさ。

片柳　餘計な事なんかいはなくつてもいゝ。おまへさんの口を出す所ぢやないんだから默つてゐて貰ひませう。

（欽次郎に改めて）有村さん。お互ひに爭つたり、いがみ合つたりするのは商人には不向きなことです。下らぬことは捨てゝしまつて、一つ改めて相談し合はうぢやありませんか。

欽次郎　それは私も望むところです。

片柳　それでね有村さん。手つ取早くいへばあなたのところは製造が主だ。また私共は輸出が專門だ。今更分業の利を說くぢやないが、どうでせう分擔してやつちや。そ

の方がお互ひに利益ですぜ。
欽次郎　その話ならお斷りします。契約はあなたの店からではなく、私のところから直接送品することになつてゐるのですから。
片柳　ぢやあなたはご相談をなさる心算はないんですか。
欽次郎　その相談なら打切りにしませう。
片柳　ではあなたはどこ迄も獨力でやるのですね。
欽次郎　無論です。
片柳　それならそれでいゝ。いや失禮しました。
（片柳中央の戸口から去る。）
風間　ひでえ奴があつたもんだ。すつかり買ひ占めちやつて、おめえさんの方に手も足も出せねえやうにしてしまつておき乍ら、さてご相談をしませうとはづう〳〵しいにも程があらあ。だがおめえさんの應對は立派なもんだつたぜ。尤も已のところから蟹が來るとなりや腰が强え訣だけれども。うゝい、あゝ咽喉が渇いちやつた。水を一杯くれねえか。
欽次郎　（勝手口の方に）おい、誰かゐないか。
絢子の聲　はい。
欽次郎　水を一杯持つておいで。
絢子の聲　はい。
（絢子コップに水を入れて持つて來る。）
絢子　兄さん、水をお上りなさるの。
欽次郎　いや、辨藏さんが飮むのだ。
風間　（絢子に）いつも綺麗だね。
絢子　あら厭やですわ。そんなことを仰しやつて。
風間　まあさういはねえで、茲迄水を持つて來ておくれよ。
（絢子風間のところに水を持つて行く。）
風間　（受取り乍ら）そんなに顫へなくつたつていゝやね。何も恐いことはありやしねえよ。そ、そ、そうれ、水をこぼしちやつた。やあ外套を濡らしちやつたぞ。
絢子　どうも濟みません。
風間　外套を濡らした傺手に咽喉もかうぎゆつと濡らしてやれ。さうすりや依怙贔屓がなくつていゝや。（水を飮む）あゝ旨かつた。
（中央の戸口から車夫體の男が這入つて來る。）
使の者　ご免なさい。
絢子　はい。
使の者　この方から頼まれて來たんですが、どうか鞄をお渡しなすつて。（名刺を出す）
絢子　さうですか。ちよつと待つて下さい。（欽次郎に）兄さん、渡してもいゝでせうか。麻生さんの名刺を持つて來てゐるのよ。
欽次郎　それならいゝだらう。

絢子　(使の者に)　あなた鞄ですね。鞄の中の何かぢやないんですか。それなら私出して上げますわ。
使の者　いゝえ、鞄のまゝ持つて來いつていはれました。
絢子　さう。ぢや待つてゝ下さい。
(絢子奥に入つて鞄を持つて來る。使の者はそれを受取つて歸る。)
風間　おい心配しねえがいゝぜ。片柳の奴がどんな邪魔をしたつてちつともびくつくことはありやしねえよ。蟹は己がちやんと間に合せるから。己のところで足りなけりや仲間からいくらでも持つてくらあ、もう少し過ぎりや船が上るから、さうしたらみんなこゝへ持つて來させることにしてあるんだ。なあさうして片柳に一つ鼻をあかしてやらうぢやねえか。
欽次郎　辨藏さん、その持つて來ることは、まだ待つて貰ひたいね。
風間　どうして。おめえのとこぢや蟹がいるんぢやねえか。
欽次郎　そりやどうしてもなくつちやならないものだが、おまへさんには條件があるからね。
風間　條件だつて何でもねえぢやねえか。
欽次郎　兎に角その事はわたしの一存にはいきません。本人に訊いて見なくつちや。
風間　本人だつて兄貴が嫁けといつたら、嫁かねえことはあるめえ。
絢子　兄さん、それ何の話。
欽次郎　おまへは默つてゐるがいゝ。
風間　いやかういふ話なんだ。實はおめえを己が嫁に貰ひてえんだ。
絢子　まあ、いやだ。
風間　なに、いやだ。そんなことをいつちやおめえ義理が立たねえぜ。おめえが己のところへ來さへすりやおめえの家は安泰だが、首なんか振ると家のためにならねえよ。
欽次郎　辨藏さん、さういふ話は妹にはいはないで貰ひませう。
風間　うん。そんならその事は何にもいふまい。だがかう見えても己には船が三艘、藏も二戸前ある。おめえを貰つたからつて一生不自由はさせはしねえよ。それにさ、今度のやうな時は人の弱味に附込んで他の奴はみんな法外もねえ値を言ひ出すが、己は相場よりもずつと安く蟹を持つて來ようといふんだ。これでも人情の一通りは心得てゐるよ。え、おめえどうだい。
欽次郎　兎に角辨藏さん。この話はまだ本人にも兄にも話してないんだから、此方で相談の上追つて返事をします。
風間　追つてかね。併し遲れると損をするのはおめえさん

の方だぜ。己あ妹を貰はねえ内は鐚は送らねえからね。
欽次郎　分つてゐます。
風間　（少し不機嫌に）さうか、ぢや己はうちで返事を待つてゐるぜ。
（風間中央の戸口から歸つて行く。）
絢子　兄さん、あなた何かあの人と約束したんですか。
欽次郎　いゝや、まだ何も約束はしてゐない。たゞ昨日あの男がやつて來て、おまへをくれないかといふ相談を受けたゞけだ。
絢子　あたしあんな人のところへ行くのはいやですわ。
欽次郎　そりや無理はない。
絢子　それに約束といふ程ではありませんけれど……。
欽次郎　うん、それは兄さんも知つてゐる。
絢子　うちにどういふ事情があるかしれませんけれども、どうかこのことだけは、兄さん、あたしに我儘をさして下さいな。
欽次郎　いゝとも〳〵。店のことは店でする。おまへに心配はさせやしないよ。
（製造場から雇人が出て來る。）
雇人　旦那、ちよつと見て戴きたいんですが。
欽次郎　何だ。
雇人　何ですか。ちよつと旦那につて。
欽次郎　さうか。
（欽次郎雇人と共に製造場に這入る。お鶴表から這入つて來る。手に手紙を持つてゐる。）
お鶴　（絢子に）これ頼まれて來たよ。（と手紙を渡す）
（絢子封を開いて手紙を讀む。讀んで行くうちに絢子の顏色が變る。）
絢子　おまへこれ誰に頼まれて來たの。
お鶴　昨日來たお客さんに。
絢子　そしてこれを何處で渡されたの。
お鶴　あのう、欅屋の前のとこで。
絢子　たつた今渡されたのかい。
お鶴　あゝ。
（絢子手紙を手にしたまゝ外へ駈け出す。）
（間）
（醫師四田弘がはいつて來る。）
（そして店座敷の前で「ご免」と案内を乞ふ。女中奥から出て來る。）
女中　あゝ先生でいらつしやいますか。どうかお上り下さいまし。
（四田女中に導かれて奥に通る。）
（お鶴は勝手許へ。）
（有村表から悄然と這入つて來る。そしてストーブの

傍に腰を下す。欽次郎製造場から出て來る。）
欽次郎　あゝ兄さん、いつ歸つて來たんです。
有村　今歸つて來たのだ。
欽次郎　どうでした。アラカイの方は。
有村　矢張り法外のことを云つてゐて、とても手が出せない。
欽次郎　人の足許を附込むなんて、どいつもこいつも厭な奴ばかりだな。いやな奴といへばさつき久富商會の片柳が來ましたよ。
有村　それからどうした。
欽次郎　人を思切り壓迫しておきながら、しらばつくれたことをいつて來ましたから面と向つてうんといつてやりました。
有村　さうか、火蓋を切つたか。
欽次郎　え、やつゝけました。とても默つちやゐられませんから。
（罐詰工製造場から出て來る。）
罐詰工　旦那、雌や仔蟹はどうしませう。
有村　あれは使つちやならないといつてあるぢやないか。
罐詰工　ですけれどもあれを使はなくつちやとても間に合ひません。
有村　間に合つても合はなくても、あんな蟹は一切使つちやならないといふのに。
罐詰工　ぢやどうしませう。蒸釜は煮立つてゐるんですが。
欽次郎　まあいゝ。こちらから言つてやるから。
罐詰工　へえ。（製造場へ去る）
欽次郎　兄さん、あなたの樣に嚴重な事をいつてゐたら、とても間に合ひませんよ。
有村　併しこれから繁殖する雌や仔蟹を使ふことは出來ないぢやないか。
欽次郎　さういひますがね、兄さん。あれを濫獲しない限りいゝぢやありませんか。一度網にかゝつて來た以上、假令船から直に捨てゝやつたつて、もう網にからまつた奴は足を痛められてゐますから、少なくとも半死か、大抵は死んでしまふのです。どうせ海に放してやつたつて死んでしまふのなら、雌だつて仔蟹だつて使つてもいゝぢやありませんか。
有村　それ許りぢやない。雌や仔蟹はアルカリ性が強いから黑變する恩ひがある。
欽次郎　なあにそれも製造法を少し氣をつけて、硫酸紙を丁寧に敷きさへすれば防げますよ。
有村　いや第一品質が劣るからいけない。あんなものは一等品には使へないぢやないか。

欽次郎　その點も罐詰のことですから、何とか誤魔化しがきくぢやありませんか。

（郵便配達夫「郵便」と手紙をおいて行く。）

欽次郎（それを受取つて讀む）やあ、また値上げだ。

有村　どこから來たのだ。

欽次郎　東洋製罐です。罐がまた三割値上げだといふのです。

有村　弱つたな。

欽次郎　蟹は高い。罐は上がる。かう何もかも高くつちやとてもやり切れやしない。兄さん、もう非常手段を講ずるより他ありませんよ。

有村　非常手段とは品を落して、どこまでもうちの持船で間に合はせようといふのか。

欽次郎　さうです。さうでなかつたらとてもやつて行けようがないぢやありませんか。昨夜も遲くまで二人で計算を立つて見たでせう。他から蟹を買つてやつた日には何萬つて損をするんですからね。その上罐が三割も値上げになつたとすりや、いくら損するか分りませんよ。

有村　併し一等品といふ契約に等外品は送れないからね。

欽次郎　そんなことといつたつて今の場合爲方がないぢやないですか。

（醫師の西田が女中に送られて奥から出て來る。）

西田　いやもう構はんでくれ。構はんで。

（兄弟は醫師の言葉を聞きつけて話をぴつたりと止める。）

有村　あ、先生がおいでになつてゐたのですか。少しも知りませんで。

西田　いやお構ひ下すつては困る。時に奥さんは今日は少し熱が低いやうだ。あの分なら心配のことはありません。

有村　いろ／＼有難うございます。

欽次郎　今日は先生は朝の御回診ですか。

西田　いや、昨夜、そら汽船が沈沒したらう。あの乘組員に病人が出來たといつて呼びに來られたものだから、今その歸り道さ。丁度お門を通つたからお寄りしました。

有村　あ、さうですか。それはどうもご親切に。

欽次郎　汽船といへば氣の毒なことをしましたね。でも運送船とかでお客が乘つてゐなかつたのはせめてもの幸ひでした。

有村　乘組員はみんな助かつたんですか。

西田　みんな助かつた。たゞ船長が可哀さうなことをしましたよ。

有村　どうしたのです。

西田　船と一しよに沈んでしまつたのだ。

欽次郎　あ、船長は亡くなつたのですか。私はみんな助かつたと聞いてをりましたが。

四川　さうです。乘組の船員すらさう思つてゐたのです。ところが後になつて船長のゐないことが分つたのだ。

有村　どうしたのです。

四川　今わたしはその話を聽いて涙をこぼしてしまひました。かうなのです。沈沒した北海丸は小樽から荷を積んで、浦鹽に行く船だつたのです。ところが途中で嵐に遇つたものだから、それを避けようと思つてこのマウカにやつて來たのです。それでテーヤの沖まで來ると、あすこいらはあの通り暗礁の多いところだ。そこを吹雪は烈しい、船は小さいと來てゐるから。船員は必死となつて働いたけれども、たうとう暗礁に乘り上げてしまつたのです。で、あつといふ間もなく水はどし〳〵船に浸入して來たので、船長はもう爲方がないから、「全員甲板へ。」「ボート降し方。」を命じたのです。そして全員ボートに乘り移つたところが、船長だけはまだ船に殘つてゐるのです。

欽次郎　あゝ、それでたうとう船と運命を共にしてしまつたのですか。

四川　いや、さうぢやない。話はこれからなのです。それで船長がまだ甲板に殘つてゐるから、ボートに乘つた者は早く降りて來るやうに勸めたのです。すると船長は「おい、ちよつと待つてくれ、忘れ物をした。」といつて、飛ぶやうにデツキを下へ駈け下りて行つたのです。

欽次郎　ほう。

四川　何しろ浪は逆卷く。夜は暗い。ボートに乘込んだ連中は氣が氣ぢやなかつた。併し船長は間もなく甲板に歸つて來ました。そして「いゝか、下りるぞ。」と大聲でどなつて、闇の中をずる〳〵と降りて來たのです。そこでボートは直ぐに本船を離れて、死にもの狂ひに突進したのです。で、やつと陸に着いて見ると船長はゐないのです。

有村　どうしたのです。

四川　あとからボートに降りたのは船長ぢやないのです。

欽次郎　ぢや誰れなのです。

四川　料理の皿洗ひをやつてゐたボーイなのです。どうして此男が一人乘りおくれたかといふと、此男は二三日前に船の中で人の物を盜んだのださうだ。それでこの男は物置のやうな一室に監禁されてゐたのです。ところが今船が暗礁に乘り上げて沈沒するといふ時には、誰だつてわれ勝ちに逃げようとするから、一人としてこのボーイのことなぞ考へてゐたものはありやしない。船長自身さへも危く忘れるところだつたのだ。ふと下から早くボー

トにお乘んなさいといはれた時に、はじめて監禁したボーイのことを思ひ出したのです。そこで「忘れ物があるからちよつと待つてくれ。」といつて、急いでボーイを救ひ出して來たのです。

有村　そして自分は船に殘つて、船と共に沈んでしまつたのですか。

西田　さうです。

有村　實に立派な人格者ですね。

西田　船長なんてものは船頭の親方みたいな者だが、偉い奴がゐたもんです。

欽次郎　北海丸に限らず、沈沒なんて時はいつも船長は立派な行爲をやりますね。

有村　私たちから見ると、人のやれないことをやつた樣に思へますが、船長自身にとつてはあれが自分のやる當り前のことだつたのでせう。

西田　いや、その當り前のことがなか〳〵やれないのだ。偉い人といふのは大きな爲事をやつた人ではない。爲すべきことを敢然として爲した人だ。

有村　さうもいへますね。

西田　(時計を出して見て)　これは長話をしました。私は他へ廻はらなくつちやならない。

欽次郎　お歸りでございますか。

西田　ご病人をお大事に。

有村　有難うございます。

(西田中央の戸口から表へ去る。)

欽次郎　(兄のところに進み寄り)　兄さん、やつゝけませう。

有村　やつゝけるとは。

欽次郎　仔盤を混入することです。

(電報配達夫大きな聲で「電報と。」叫んで、一通の電報をおいて行く。二人はその聲にちよつと驚く。有村電報を開いて見る。顏に不安の色が動く。)

欽次郎　どこから來たのです。

有村　英國だ。(電報を弟に渡す)

欽次郎　(電報を見て)　急ぐから期日を違へないやうにつてんですね。

有村　さうだ。

欽次郎　兄さん。いよ〳〵やつゝけるより外ないぢやありませんか。

有村　(無言、首を垂れてゐる)

欽次郎　二十四萬罐を八十日でやつてしまふには、どうしたつて、日に三千宛製罐しなくつちやなりませんからね。兄さんのやうに、これを使つちやいけないの、あれを入れちやいけないのといつてゐたら、とてもその半分

も出來やしませんよ。
有村　(無言)
欽次郎　少し品が落ちたつて期日さへ違へなかつたらいゝぢやありませんか。兄さん、もう考へてゐる時ぢやありませんよ。どん／＼運ばなくつちや。
有村　(敢然と立上り)　よし、やらう。
欽次郎　さうですか。それでわたしも安心した。
有村　おい欽次郎。店の者を直ぐにアラカイにやつてくれ。
欽次郎　何ですつて。
有村　もう爲方がない。いくら高くつてもアラカイの蟹を買ふより他はないぢやないか。約束した船の方はとても引取れる望がないんだから。
欽次郎　兄さん、それは正氣の沙汰ですか。
有村　何だつてそんなことをいふんだ。
欽次郎　そんなことをしたらこの家はどうなるんです。少し位の損なら忍べますが、兄さんのいふやうなことをしたら、この家は立つてはいきませんよ。
有村　わたしは契約に背いて惡い品を送ることは出來ないのだ。
欽次郎　併し家を破産させても關はないんですか。
有村　おい欽次郎、潔く討死しようぢやないか。今度のやうにかう四圍の事情が惡くつちやどうにもしやうがない。併しこれつきりぢやない。まだ秋の漁期もある。來年もある。翌來年もある。それ迄にはきつと恢復がつけられるから。
欽次郎　さう旨くいくもんですか。殊に兄さんのやうなやり口ぢや。
有村　わたしはおまへによくいつてゐたぢやないか。ほんたうの商業は眞の說教、眞の戰鬪と同じやうに、場合によつては自ら進んで死をも、損失をも辭せないものでなくてはならないつて。さうだ。昨夜沈沒した北海丸がいい例だ。おまへが若しあの船長だつたら、おまへはあの際どういふ處置をとる。
欽次郎　無論あの船長と同じやうにやります。
有村　此有村の店は丁度今沈沒しかけてゐる汽船ではないか。そして私とおまへとはその船長だ。
欽次郎　沈沒する時はわたしは無論あの船長に劣らないつもりです。併しそれは最後の最後の瞬間のことです。今船はまだ沈沒はしません。沈沒しない前に死を急ぐのは無智な自殺者が死場所を探してゐると同じです。
有村　おまへは暗礁に乘り上げてゐても、まだ危險に氣がつかないのか。
欽次郎　船を沈めることは船長の務めではありません。船

を浮び上げることが、船を進行させることが船長の第一の務めです。

有村　水が甲板を浸してもおまへはまだそんなことをいつてゐるのか。おまへは船長としての明察がない。船長としての資格がない。

欽次郎　或はさうかもしれません。しかし沈める事はいつでも出來ます。わたしは是非浮び上らせたいのです。船も助かり、船員も助かり、そして私も助かりたいのです。

有村　それは誰だつてさう思はないものはない。併し船が沈みかけてゐる時そんな蟲のいゝことをいつてゐたら、自分許りか凡てのものを失はなければならない。それこそ救ふべからざることが出來する。

欽次郎　いゝえ、確かに助かります。たゞそれには兄さんの頭さへ變つてくれゝばいゝんです。

（奥で赤ん坊の泣き聲がする。）

欽次郎　あゝ、あの聲が聞えませんか。兄さん、あなたは子供を飢ゑさしても關はないんですか。

有村　（無言、首をうな垂れる）

欽次郎　嫂さんは長いこと寢てゐる。それだのにその病人の寢てゐる家をなくしてしまつても、あなたはいゝといふんですか。

有村　いや、家内のことは……

欽次郎　まあお聽きなさい。嫂さん許りぢやありません。妹にしたつてさうです。妹は上の學校に行きたいのですけれど、事情が事情だから、女學校だけで止めにして、家の手傳ひをしてゐるぢやありませんか。そして若い娘にも似あはず、襷掛けでせつせと働いてゐるのは何の爲です。家を大事だと思つてゐるからぢやありませんか。またわたしだつてさうです。兄さんの前だが、わたしはうちの雇人より先に起きて、夜も遲く迄働いてゐます。嫁をといつてくれる人もありますが、もう少し、もう一辛抱、もうちつと家が樂になつてからと思ふものですから、未だに貰はないでゐるんです。誰にしたつて家を思はないものはありません。そして働いたお蔭には漸く運が向きかけて來たんです。その今一息といふところへ來て、兄さんのやうなことをいひ出されては、わたしは働き甲斐がなくなつてしまひます。

有村　そりやおまへたちには本當に濟まない。

欽次郎　誰にしたつて、あゝ金が溜つて行く。今月はいくら殘つた、來月はいくら儲かる、とさう思へばそこ働く氣にもなれるんです。損する爲ならわたしはもう働くことはご免です。

有村　おまへのいふことにも無理はない。併し商人の務め

は儲けるばかりが能ではない。そこをよく了解してくれなくつちや困る。

欽次郎　それで家族はどうするんです。

有村　たとへ子供が飢ゑてゐるとしても、不正な金でわたしは乳を呑ませたくない。契約を誤魔化した金で家族のものを養ひたくない。正しいことをして貧乏をするなら爲方がないぢやないか。これは家族のものも屹度我慢してくれるに違ひない。

欽次郎　(稍興奮して)　あなたは緣の遠い外國人の信用を落さない爲めに、近い身内のものを滅すのですか。家の者には飯は食はせなくつても他人には見えを張らうといふのですか。

有村　(これも興奮して)　見えなぞぢやない。また遠いとか近いとかの問題ではない。たゞしなければならない事をするだけのことだ。

欽次郎　破產はしなければならないことではありません。しないやうにするのが正當です。

有村　(愈々激して)　極つたことだ。而もそれをせねばならぬ破目に陥つてるのではないか。さうするのが正しいことなら爲方がないぢやないか。

欽次郎　(烈しく)　破產しなくつて濟むものを。わざ〳〵破產するなんてそれが何で正しいのだ。肉親のものを痛めるのが何が正當だ。

有村　おまへはまだそんなことをいつてゐるのか。

欽次郎　兄さんこそ考へて下さい。

有村　考へ直さなけりやならないのはおまへの方だ。

欽次郎　(侮蔑的に)　馬鹿正直にも程があらあ。

有村　(聞き咎めて)　なに。

欽次郎　何が何です。

有村　貴樣こそ何だ。

(二人殺氣立つて掴み合ひを始めようとする。)

(これより先き絢子は打萎れて歸つて來たが、兄弟が論爭してゐるのを見て室のなかに這入らず、入口の硝子扉の前に暫く立つてゐたけれども、この時急に扉を排して家に入り、兄弟の間にはいる。)

欽子　まあ兄さん、待て下さい。待つて下さい。

(さういひ乍ら絢子、欽次郎を側らに連れて行く。)

絢子　(しんみりと)　兄さん、私ゆきますわ。

欽次郎　ゆくとは。

絢子　あたしあの辨藏さんのところへゆきますわ。

欽次郎　なに、何だつて。

絢子　私がゆきさへすれば、今のやうに兄さん同志で爭ふやうなこともなくなりますし、家もこのまゝ續いて行きますわ、ですからあたしもう諦めました。兄さん、どうか

辨藏さんにさういつて下さい。（すゝり泣く）

有村　一體それは何の話だ。

欽次郎　まだ兄さんにはお話しませんでしたが、實は昨日あの網元の風間がやつて來て、絢子をくれるなら蟹を安く供給しようといつて來たのです。

有村　値を上げない代りに女を取らうといふのか。

欽次郎　さつきもまたやつて來て頻りにそれをいつて行つたのです。絢子はそれを聽いてゐたんです。

有村　併し絢子、おまへはどうしてあんな者のところへ行く氣になつたのだ。

絢子　（泣き乍ら）どうしてつて、あたし……。

欽次郎　おまへそんなことをしては、麻生君に濟まなかないか。

絢子　そんなことはありませんわ。

欽次郎　おまへ別に約束なんかしてはゐなかつたのか。

絢子　（わつと大聲に泣き出す）兄さん、これを見て下さい。（と手紙を渡す）

欽次郎　何だ。麻生からの手紙か。うちへ泊つてゐながら手紙を寄すとは變な奴だな（讀んでみる）何だつて。

、「前略、用事の都合にて急に他へ出發することゝ相成候間失禮乍ら書中を以て昨夜の御厚情深く御禮申げ候。樺太へ重ねての渡來は困難の儀に候へば、これが永久のお別れかと存ぜられ候。何卒お身大切にお暮し被遊度候。猶御令兄様にも御挨拶申述べず不本意に候へ共……」あいつ默つて立つてしまつたのだな。

有村　麻生のやりさうなことだ。他へ出發といつて行先を書かないなぞも麻生式だ。

欽次郎　書いてあつたつて誰があんなものを追駈けるものか。おい絢子、泣くことはない。こんな奴はこつちでご免だ。（手紙を切裂く）

絢子　いゝえ。あたしが馬鹿だからですわ。

有村　いや、その罪はあたしにあるのだ。

絢子　いゝえ、そんなことはありませんわ。

有村　いや、わたしがつい信用してうちの窮狀を話したのだ。それでうちの財產狀態が分つたものだから急に逃げ出したのに相違ない。

欽次郎　何で逃げたつて鬪ふものか。あんな奴に未練なんぞありやしない。

絢子　え、あの人にも誰にも、あたしも未練も希望もありませんわ。わたしは何もかも諦めました。何もかも忍びませう。ですから兄さん、どうかあの辨藏さんのところへやつて下さい。

欽次郎　おまへ自暴自棄なんかおこしちやいけないよ。

絢子　いゝえ、あたしこれ捨てばちでいつてゐるんぢやあ

りませんわ。どうせ嫁に行くんなら家の役に立ちたいと思ふからです。よう兄さん、どうかさうして下さいな。あたしお願ひいたしますわ。

欽次郎　そりやおまへが嫁つてくれゝば家ぢやどんなに助かるかしれないけれど。

絢子　それなら私喜んで嫁きますわ。それで家が救はれるものなら。

欽次郎　（妹の手をとり）絢子。（といつたが、もうあとの言葉が出ない）

絢子　兄さん。（と欽次郎の胸に泣き伏してしまふ）

欽次郎　おまへ犧牲になるこゝろか。

絢子　（泣き乍ら）え。

有村　（奮然と）そんなことはわたしには許せない。

絢子　だつてそれぢやうちが困るぢやありませんか。

有村　假令どのやうに困るとしても、そんなことは斷じて出來ない。沈沒の際に北海丸の船長は盜みを働いたボーイをさへ救ひ出してゐるぢやないか。それを如何に危急の場合だからといつて、肉親の妹を賣つて家を助からうなぞとは思ひもよらないことだ。

（罐詰職工製造所から出て來る。）

罐詰工　どうしたもんでせう。旦那。蒸釜が煮立つてゐるんですが。

有村　よろしい。今大蟹を取寄せるからそんなことは心配しないでいゝ。

罐詰工　他から蟹が來るんですか。

有村　さうだ。おい、そちらに店の者がゐないか。直ぐに來るやうにいつてくれ。

罐詰工　へえ、畏りました。（去る）

欽次郎　ぢや兄さん、どうしてもやるんですか。

有村　外に手段がないぢやないか。

欽次郎　兄さん、どうかもう一度考へ直して下さい。

有村　もう考へ盡したことだ。これ以上考へる餘地はない。

欽次郎　（捨てばちに）こんなことになるなら、賠償金を拂ふ方が餘程增しな位だ。

有村　商人の本務は契約を守ることだ。品物を支給することだ。たゞそれだけだ。損害金を出すことぢやない。

（店の者入り來る。）

店の者　何かご用ですか。

有村　うん。おい十吉、おまへ直ぐアラカイへ行つてな。いひ値通りでいゝから直ぐに蟹を屆けてくれつてさういふんだ。

雇人一　畏りました。

有村　急いで行つて來い。

雇人一　へえ。（直ぐに表へ駈け出す）

有村　それから倉次郎と富三は二三日來製造した品の惡い罐詰を選り分けろ。

二人　へえ、あの別にしちまふんですか。

有村　さうだ。よく氣をつけてな。それに製造場の者にも立會つて貰ふがいゝ。

二人　畏りました。（製造工場に這入つて行く）

有村　それから定吉、おまへは犬橇の用意をして。

雇人四　へえ。（直ぐに去る。）

（絢子は兄が雇人たちに次から次へと用事を言附けてゐるのを聞いてゐると、何故か急に泣きたい氣に襲はれてわつと泣き伏してしまふ。）

（兄弟もお互ひに避けるものゝやうに言葉を發しない。そこへ表から得平老爺がしを／＼と這入つて來て無言のまゝ勝手口へ通り抜ける。）

（表口では雪の上を走る喜ばしさに犬が跳り上るのでその度に橇の鈴がちりん／＼と鳴る。人が犬を制する聲も聞える。やがて、雇人の定吉が這入つて來る。）

雇人四　旦那。橇の用意が出來ました。

有村　さうか。おい欽次郎、おまへ銀行へ行つて預金を引出して來てくれないか。さうして……。

欽次郎　今日はご免を蒙りませう。わたしは今は働く氣がありませんから。

有村　さうか。ぢやわたしが行つて來よう。（金庫から銀行の預金帳を出す。絢子に）おい、何だつてそんなところに泣いてゐるんだ。見つともないぢやないか。よさないか。

絢子　はい。（とはいふが猶すゝり泣く）

有村　（欽次郎に）ぢや行つて來るからな。ずつとアラカイから他の方へも廻るつもりだから少し遲くなるかもしれない。おい。欽次郎。氣を直してくれなくつちや困るよ、え。

（さういひながら有村は表へ出て、橇に乘つて出掛けて行く。犬橇の勇ましい鈴の響きが暫くの間聞える。）

（欽次郎は默然としてストーヴの傍に腰を掛けてゐる。）

お鶴　鈴の音がすら。旦那また出掛けたんかな。

（そこへお鶴が勝手口から出て來る。）

欽次郎　（お鶴を見て）　おいお鶴、酒を持つて來てくれ。

お鶴　お酒かい。

欽次郎　冷でいゝんだ。

お鶴　あい。

（お鶴勝手に行つて酒をコップに入れて持つて來る。）

（欽次郎それを飲み干すと、コップをお鶴に渡す。）

お鶴　もう一杯かい。
欽次郎　さうだな。もう止めにしておかう。おいお鶴。
お鶴　何だい。
欽次郎　そのコツプを土間に叩きつけてくれ。
お鶴　ぶつこはれるぢやねえか。
欽次郎　かまはないからやつて見ろ。
お鶴　かうかい。
（とコツプを土間に投げつける。玻璃器は悲しい音を立てゝ粉微塵に壊れる。）
（欽次郎は腕を眼にあてたまゝすゝり泣く。）

――幕――

第三幕

有村罐詰製造所の裏手。
左手に家の背後の外側だけ見える。そこには裏の出入口がある。その建物にくつつけて、舞臺の稍奥に葺下しの小屋がある。それは得平親子のゐるところで、正面が出入口になつてゐる。右手は濱で、向うに海が見える。濱には網を干す杙があつちこつちに立つてゐる。その外立樹が二三本。
前幕から半年ばかり後のある日の夕暮。もう地面に雪なぞは見えない。

絢子は物思ひに沈んで小屋の傍の石に腰を掛けてゐる。夕日が寂しく彼女の小鬢を照らす。
家のなかで「これも矢張り船に積むんですか。」「え、どうか。それからこれも擔いで行つて下さい。」などといふ聲が聞える。やがて人夫が二三人荷物を擔いで舞臺の後方を濱の方へ行くのが見える。
續いて裏口から古道具屋がテーブルだの籐椅子だの火鉢だの其他のガラクタ物を外へ運び出して、家の隅に積み重ねる。それから家のなかに向つて。
古道具屋　旦那、濟みませんが島渡こゝへ置いといて戴きます。今車を持つて來ますから。
（欽次郎家の中から出て來る。）
欽次郎　あ、いゝとも〳〵。併しなくなるといけないぜ。
古道具屋　なあに大丈夫です。直ぐにとりに參りますから。ではご免下さい。どうも有難うございます。（去る）
（欽次郎は得平の小屋の戸をあけてなかへ這入る。そして大きな聲で老人に話しかける。併し得平の聲は外へは一言も聞えない。）
欽次郎　どうだい爺や。今日は少しはいゝかい。ウム、痛みが止まらないつて。そりやいけないな。お鶴はどこへ行つたんだい。ゐないのか。お父つあんが怪我したといふのに、看病もしないで遊びに出てしまつては爲樣がな

いな。（少し大聲に）どうだい爺や、湯でも上げよう か。ウム、いらないか。さうか。外に何にも用はない か。ぢやまた來るから靜かに寢ておゐで。

（欽次郎はさういひ殘して外へ出て來る。そしてふと石に腰をかけてゐる絢子を見る。）

欽次郎　おい絢子。どうしたんだ。こんなところに腰をかけてゐて。

絢子　（無言）

欽次郎　今夜船で立つんぢやないか。みんな荷物のことや何かで忙しい思ひをしてゐるんだ。

絢子　濟みません。

欽次郎　いや濟むも濟まないもないが、おまへあんまり考へごとなんかしないがいゝぜ。

絢子　（氣がなささうに）え。

欽次郎　おまへまた麻生のことを考へてゐるんぢやないか。

絢子　そんなことはありませんわ。

欽次郎　あんな奴は蚤と同じことで、どこへでもぴよんぴよん跳ねて歩いてゐるんだ。人間が蚤の行先なんか考へるのは馬鹿らしいぢやないか。

絢子　（無言）

欽次郎　そんな心配をするのは蚤に喰はれて赤くなつた跡を掻いてゐる樣なものだ、何の役にも立ちやしない。掻き壞してもすると大變だ。考へないがいゝ。考へないがいゝ。

絢子　（泣きながら）もう兄さん、そのことは何にもいはないで頂戴。

欽次郎　ウム、さうか。俺が惡かつた。却つて思ひ出させるやうなことをいつてしまつたな。兄さんが惡かつた、惡かつた、宥してくれ。

絢子　あら兄さん。そんなこと……（あとは涙で消えてしまふ）

欽次郎　おい泣くな。泣くな。兄さんはおまへの心はようく分つてゐる。それはおまへは辛いさ。察しるよ。併し己だつて辛いのだ。泣きたいのだ。どんなに泣きたいかしれないのだけれど己は涙を抑へてゐる。どうかおまへもこらへてくれ、なあ。

絢子　はい。（しやくり泣く）

欽次郎　もう半年以上になるが、いつか大兄さんとやり合つた時己はもう働くまいと思つた。己の意見は大兄さんとはどこ迄も違ふのだから。そしてそれは今だつて變りやしない。己は實際損するために働くのはいやだからな。あの時己がいつた通りにうちはたうとうこんなことになつてしまつた。今夜は己たちはみんなこゝを引き拂はな

くつちやならない。今迄働いてゐた家も、今迄使つてゐた機械もみんな人手に渡してしまふのだ。あの時あゝしなかつたら、あゝしなかつたらと己は何度思つたかしれない。己はそれを考へると口惜しくつて、口惜しくつて堪らないのだ。大兄さんが己のいふ通りにしたら決してこんなことにはなりはしなかつたのだ。併しそれだからといつて、己は決して爲事を怠けはしなかつたぞ。兄さんは矢張り働いてゐたぞ。己が働かなかつたらうちは猶猶惡くなるばかりだからな。

絢子　えゝ。

欽次郎　たとひ意見は違つても、騙されても、人は自分のすることだけはしなくつちやいけない。Doing nothing is doing ill だ。何にもしないのは惡いことをしてゐるのと同じだ。おい。兄さんは働いてゐるぞ。おまへも氣を腐らせちやいけない。そんな風たとなほ／＼氣が沈んで行くばかりだ。

絢子　はい。私が惡うございました。私これから氣を引立てるやうにいたしますわ。

欽次郎　ウム。どうかさうしてくれ。人は此の世に生きてゐる以上辛抱しなければならないものだ。氣に添つても添はなくても、自分のやることはやらなくつちやいけない。いゝか。分つたか。そりやおまへも辛いだらうが、己も辛いのだ。併し諦めようよ。みんな辛抱し合はうよ、なあ。

絢子　はい。

欽次郎　さあ涙をふいて、涙をふいて。こんなところにゐないであちらへ行かう。

絢子　はい。（立上る）

欽次郎　おい、石があるぞ。

絢子　はい。

（二人連立つて家の方へ歸らうとする。と、家の中から片柳が出て來るのに出遇ふ。）

片柳　（欽次郎を見て）やあ、若大將、いよ／＼お別れですね。

欽次郎　君なんかと言葉をかはす必要はない。たゞ一つ訊きたいことは君は今わたしの家から出て來たね。

片柳　え、あなたの家から出て來ました。それがどうしたのです。

欽次郎　（激しく）君は何だつてひとの家へ無斷で這入つて來たのだ。

絢子　兄さん。（と欽次郎の袖をひかへる）

片柳　何だつてとは何ですか。這入つて來べき理由があつたから這入つて來たのです。

欽次郎　こゝはわたしどもの家だ。君のやうな人に斷りも

なく這入つて來られることは迷惑です。
片柳　あなたは今自分の家といつたやうだがこれはあなたの家ですかい。此家はもう人手に渡つた筈でせう。
欽次郎　（投げるやうに）そんなことには誰がしたんだ。
片柳　誰がしたかわたしが知るもんですか。大方頑固な偏屈がさせたのでせうさ。併しそんなことはどうでもいゝ。買つた以上はこちらのものだ。這入るのに仔細はないぢやないですか。
欽次郎　なに買つた。此家を買つたのは君ぢやない。
片柳　あなたはどこ迄お目出度く出來てゐるのだ。自分の家の買手も知らないのですかい。
欽次郎　此家を買つたのは斷じて君のところぢやない。第一そんなものには間違つたつて賣るものか。
片柳　ところが間違つてこちらの手に這入つてしまつたから不思議ですよ。成程あなたの家を買つた時の名義人は別の人だつた。併しこちらで又直に買取つてしまつたから、今ぢやわたしどもの會社がその所有主さ。お氣の毒のことさね。
欽次郎　ウム、手を廻はしてそんなことをしやがつたのだな。畜生。併し何が不足でさう執念く附纏つて來るのだ。うちでは君の方に不義理一つした筈がない。迷惑一つかけた覺えがない。それだのに何だつてこんなひどいことをするんだ。
片柳　あなたの家のやうなことをやられちや輸出業者は立つて行きませんからね。だがあなたもう泣きごとですか。家屋敷を取られちや泣きごともいひたくなりませう。（態と落ち着いて）併しね有村さん、わたしの方ぢや何もあなた方を目の敵にしてゐる譯ぢやありません。それよりもあなたの方が惡いのだ。
欽次郎　（むきになつて）何が惡い。何が惡いのだ。
絢子　兄さんもうお止しなさいつてば。
欽次郎　まあいゝ。おまへは默つてゐろ。（片柳に）さあ何が惡いんだ、それを訊かう。
片柳　あなたは直ぐ喧嘩腰になる。それがいけないのだ。だがもう何にもいひますまい。左樣なら。（落つき拂つて歸らうとする）
欽次郎　まあ待て。
絢子　兄さんといつたら。（止める）
欽次郎　うるさい。（片柳に）待てといつたら待たないか。君にはまだ訊く事があるんだ。
片柳　何を訊かうといふのです。
欽次郎　無斷で人のうちに這入つて來ながら、何故挨拶をして行かない。
絢子　もうそんなつまらないことお止しなさいつてば、よ

う兄さん。

片柳　あなた方は今夜引拂ふといふから、私は久富商會の代理人として檢分に來たのです。挨拶する譯はありません。殘して行くべき器物が一品たりとも不足してゐては責任上手落ちになるから見に來たんです。それに不思議はないぢやないですか。

欽次郎　檢分！　山猫！　ぢや貴樣はわたし達を泥棒とでも思つてゐるのか。

片柳　君は家をとられたので上氣してゐるのだな。馬鹿なことをいふと承知しませんぜ。

欽次郎　何が承知しないのだ。

片柳　なに。

（二人つひに摑み合ひを始める。絢子はそれを止めようとしたが力が及ばないので大聲をあげて人を呼ぶ。）

絢子　誰か來て下さい。大變です。よう大兄さん、大兄さん。誰か居ませんか。

（有村裏口にあらはれる。そして二人の取つ組み合つてゐるのを見て、直ぐに駈けつけて二人を引き分ける。そして有村は片柳を妹は欽次郎をとめる。）

有村　（着物の塵を拂ひなどしてやりながら）　どうも濟みません。どうか宥してやつて下さい。

片柳　君の弟さんは實に亂暴ですね。

欽次郎　何が亂暴だ。（有村に）　兄さん、そんなものにあやまる事なんかありませんよ。

有村　いゝからおまへは默つてをれ。（片柳に）　どこもお怪我はありませんでしたか。

片柳　怪我はしませんけれども……。

有村　さうですか。弟はどうも氣が荒いので困ります。しかしどうか私に免じてお宥しなすつて下さい。

欽次郎　ちえ。兄さんは實に弱いな。

片柳　あなたがさういふのでなければ私は此分にはしないのですが、今日はまああなたに免じてこのまゝ引きとることにしませう。

有村　それはどうも有難うございます。

片柳　（欽次郎に）　此後は少し氣をつけろ。

欽次郎　もう貴樣なんかに會ふものか。

有村　おい、止さないかといふのに。

（片柳は去る。有村は片柳に禮を述べながら見送る。）

欽次郎　（つかつかと兄のところに行き）　兄さん、あなた口惜くはないんですか。

有村　おまへ今日は大層激してゐるね。無理はない。住み慣れたところを立つんだからな。併し餘り興奮しちやいけないぢやないか。

欽次郎　いゝえ、興奮してるんぢやありません。あいつを

處罰してやらなくつちやならないことがあるんです。

有村　いや、そんなことをしちやいけない。そんなことをすると世間では何といふと思ふ。有村は家を取られたので喧嘩を吹つかけたのだといはれるぢやないか。

欽次郎　何といはれたつてかまひやしません。あいつは罰せられるだけの惡いことをしてゐるんですから。兄さんお鶴に子を生ませたのは誰だと思ふんです。

有村　片柳だといふのか。

欽次郎　さうです、兄さん、このことぢやわたしもあなたも隨分いやなことをいはれましたね。併しよく訊して見るとそれはみんな片柳がいはせたことなんです。そしてそれによつて自分の罪を蔽ひ隱さうとしたんです。

有村　だがそれは片柳だといふ確かな證據があるのか。

欽次郎　そりや證據といつては相手が白痴の女ですから、さうはつきりしたことは分りませんが、併し色々の事情を綜合して見ると……。

有村　おい、欽次郎、惡評なんてものは道ばたの泥のやうに誰にだつてくつゝくものだ。現に其泥はおまへやわたしにもはねかつたぢやないか。噂で人は責めないがいい。

欽次郎　（泣き出しさうに）ぢやわたしのいふことは噓だといふんですか。

有村　ほんたうかもしれない。併し分らないことだ。

欽次郎　分らなくつたつて本當のことです。片柳はそんなことはやりかねません。

有村　併したとひ片柳がそんな惡い事をしてゐるとしてもおまへに罰する權利はない筈だ。なあ、さうぢやないか。兎に角擲ることなんか止さうよ。

（欽次郎目に腕をあてゝしく／＼と泣き出す。）

有村　おいおまへどうしたんだ。神經がひどく昂ぶつてゐるな。無理はない。無理はない。

（家の中から女中の「旦那／＼」と呼ぶ聲がきこえる。）

有村　よし今行く。（欽次郎に）おい今水をもつて來てやるから氣を落ちつけなくつちやいけない。いゝか。

（さういひながら有村は家の中に這入る。）

欽次郎　己はどうしてこんな事をやつてしまつたのだ。

絢子　そりや今日は兄さんの方が惡いわ。どうしてあんな事をなすつたの。兄さんにも似合ひませんわ。

欽次郎　己は今口惜しいのだか、笑ひたいのだか、泣きたいのだか分らなくなつてしまつた。あゝ何だか涙がぽろぽろ出てしやうがない。

絢子　兄さん。諦めませうよ。辛抱しませうよ。さつき兄さんは私にさういつたぢやありませんか。私はもうどんな事でも忍ぶ積りですわ。兄さんも辛いでせうがさうし

て頂戴な。

欽次郎　ウム、己はさつきおまへをさう云つて慰めたつけな。それだのに己はもうこんなことをしてしまつた。何といふ馬鹿なことだ。己が惡かつた。勘辨してくれ。勘辨してくれ。

絢子　あら勘辨だなんて、兄さん。

欽次郎　しかし口惜しいからな。いや、もうよさう。もうよさう——今夜はもうこゝを立つんだ。さうしたらつまらない事はみんな忘れてしまふだらう。だがこゝから永久に離れるのだと思ふと何だか寂しい氣持ちがするね。こゝに五年もゐたのだからな。（ぢつと海の方をながめて）あゝ、鷗が飛んでゐる。（また浪の音に耳を傾け乍ら）あの浪の音も懷しいな。（濱の石を拾つて）それからこの石つころだつて……（石を頰にすりつけて）おい別れをいふぞ。

絢子　（すゝり泣く）

欽次郎　（立樹の側に行き幹をさすりながら）おまへも亦舊いお馴染だね。おい、いつ迄も丈夫でゐてくれ。あ痛つ、しまつた。

絢子　あらどうなすつたの。

欽次郎　いや、木が別れを惜しんだ己に食ひついたんだ。木にも矢張り情はあるんだね。

絢子　まあ、をかしい兄さん。刺が入つてやしなくつて。

欽次郎　何だか少し痛いやうだ。ちよつと見てくれ。

絢子　（兄の指を見る）

欽次郎　どうだ。とれたかい。

絢子　まだよ。刺がよく見えないんですもの。

欽次郎　何だい。おまへ淚を一杯ためてゐるぢやないか。それぢや見えない筈だ。

（有村は裏口から片手に小さな風呂敷包みを下げ片手に赤ん坊を抱きながら妻の昌子と一緒に出て來る。昌子は病後なのでたど／＼しい步き振りである。）

有村　どうだ大丈夫か。

昌子　え、步けますわ。

有村　そろ／＼步いて來るがいゝ。

昌子　えゝ。

有村　（道具屋の置いて行つた椅子を見て）あゝこゝにいものがあつた。鳥渡借りてやらう。（籐椅子を持つて來て昌子に）さあ、おかけ。（掛けさせる）

昌子　矢張り外は氣持がようございますね。

有村　さうか。それはよかつたな。（赤ん坊を妻に渡しそれから欽次郎の方を見て）おい、そこで何をやつてゐるのだ。

欽次郎　いや、今ちよつと。

絢子　あ、やつととれましたわ。兄さんこんなのが入つてゐたことよ。
欽次郎　さうか大分はいつてゐたな。あゝ、咽喉が渴いちやつた。（有村に）兄さん、水を持つて來てくれましたか。
有村　いや、水よりももつといゝものを持つて來た。（といひ乍ら道具屋の置いて行つた卓子を皆の前に据ゑる）
欽次郎　何です。
有村　これだ。（風呂敷包みを卓の上に置く）
欽次郎（風呂敷包を開く）やあ、「風呂敷をひろげれば柿の轉げけり」か。こいつはいゝな。
昌子　もう柿が出たんでせうか。
有村　珍しいからといつて古川さんがさつき持つて來てくれたのだ、餞別に。
欽次郎　さうですか。これはいゝ。早速やらうぢやありませんか
有村　うむ，みんなして食べよう。
絢子　嫂さんもお上りになりませんか。
昌子　え、少し戴きますわ。
絢子　ぢや半分づゝ食べませう。あたし剝きますわ。
有村　おい、ナイフをやらう。（ナイフを出して妹に渡す）
欽次郎　己はこの方が早いや。（柿を嚙る）こりや旨い柿だ。
有村　別れの晩餐つてことはあるやうだが、別れの柿嚙りといふのはないやうだな。
絢子　でもこんな風にしてゐると、何だか今夜立つやうな氣がしませんわ。
欽次郎　立つといへば嫂さんは大丈夫ですか。
昌子　え。私汽船に乘つたら直ぐ横になりますわ。
絢子　汽船はあたしも本當にいやだわ。
欽次郎　兄さん、荷物の方はもう片附いたんですか。
有村　片附いた。もう艀さへ持つて行けばいゝのだ。しまつた。うムウ。
昌子　どうなすつたんです。何か忘れものがあるんですか。
有村　なあに、柿の種を呑んでしまつたのだ。あゝ、苦しかつた。
絢子　まあ、いやな兄さん。
有村　柿で思ひ出すが、子供のころ兄さんは柿の木からおつこちたことがあるが、そりや痛かつた。
絢子　柿をとらうと思つたんですか。
有村　おい欽次郎，おまへ覺えてゐないか。何でも二人で

やつたんだぜ。

欽次郎　（氣乘りがしないやうに）私覺えてゐませんね。

有村　さうかね。何でもわたしが十三四だから、おまへが十歳位の時だつたよ。うちの庭にいゝ柿の木があつたのだ。秋になると丁度お饅頭でもつるしたやうに、甘い實が一杯に熟るのさ。そこでわたしや欽次郎は食べたくつて爲樣がないから、「柿を採つておくれ、〳〵。」と毎日のやうにせがんだものだ。併しお母さんは「まだ早い。」とか「まだ澁い。」とかいつてなか〳〵取つてくれないのだところが「まだ早い。」「まだ澁い。」といふのに平氣でとつて食つてゐる奴があるのさ。

絢子　まあ、それ誰？

有村　それがおまへ烏なんだ。

昌子　ホヽヽ。

有村　烏の奴め己たちが採つてはならないつていはれてゐるものを、澄し込んで食つてゐるのだ。二人は口惜しくつてね。癪に障つて堪らないもんだから石を拾つて投げつけてやつたのだ。併し烏はカア〳〵と二三度羽撃きをする位で平氣なのさ。そして「どうだ、こんな旨いものをおまへたちは食へないだらう。」といふやうな面つきをして、小首をちよつと傾けながら己たちを見下すのだ。その小づら憎さつたら。そこで己はたうとう堪らなくなつて、木に登つて行つたら、滑つておつこちてしまつたのさ。これが本當の落し話だな。ハヽヽヽヽ。

欽次郎　（稍ぶり〳〵して）兄さん、そんな話はもう止めて下さい。

有村　どうして。

欽次郎　兄さんは人の機嫌なんかとることはないぢやありませんか。

有村　わたしは別にさういふことはしはしない。

欽次郎　いゝえ、してゐます。嫂さんや妹が沈んでゐるからといつて、又わたしが興奮してゐるからといつて、そんな座興めいたことをするのは兄さんには似合ひませんよ。

有村　自分はそんな積りではないんだがね。

（昌子しく〳〵泣き出す。）

有村　おい、どうしたんだ。

昌子　いゝえ、何でもありませんのよ。

有村　泣いたり何かすると體にさはるぢやないか。おい絢子、おまへも泣いてゐるな。そんなに泣くと涙も洟もみんな一しよになつてしまふ。涙をふかないか、え。

絢子　は、はい。（すゝり泣く）

欽次郎　（その場の話をそらせようとして）あゝ子供になりたい。子供が一番だ。

有村　全くだ。子供の時程いゝものはない。しかしその當時は自分はさうは思はなかつた。早く子供でなくなればいゝ。早く大人になつて見たいと思つてゐた。何故といふのにわたしが疎相をして茶碗を壞すと、わたしはひどく親父に叱られたものだが、親父が茶碗を壞はした時は誰も親父を叱る者がないのだ。それで大人位いゝものはない、親父位勝手なものはない、とかう思つてゐたのだ。だからあの時分は誰にも叱られない家長の地位に早く立つて見たいものだと子供心に感じたのだ。

欽次郎　兄さんはその家長の地位に立つたぢやありませんか。

有村　立つた。立つて始めて知ることが出來た。誰にも叱られない地位はどんなに責任があるものか、どんなに苦しいものであるかといふことを今度はやうやく了解した。そして父を怨んだことが今更怨めしくなつて來た。

（昌子や絢子は聲を上げてしく〳〵泣き出す。）

有村　かうしてみんなを泣かせるのはわたしの罪だ。私は申訣なく思つてゐる。

絢子　（泣きながら）いゝえ、そんなことはありませんわ。

有村　さうだ。欽次郎には欽次郎の意見があつた。おまへにはおまへの希望があつた。そして妻にも亦妻で、それぞれ考があつたことだらう。それにも係はらず、かういふ結果を招いたのは……

絢子　もう兄さん、何にもいはないで下さい。私たちは決して兄さんを怨んでなんかゐやしないんですから。

昌子　それは絢子さんがいつた通りですわ。私は病氣さへ長いことこらへて來ました。今度どんなに貧しくなつたつて、私それをこらへられないことはございません。病氣になつたからといつて誰を怨むことも出來ないやうに、貧しくなつたからつて不足をいふ筈はございませんもの。

絢子　嫂さん、よくいつて下さいました。わたし達はみんな辛抱し合ひませう。大兄さんのやつたことは正しいことなのですもの。

有村　有難う。おまへたちがさういつてくれると、わたしはどんなに氣が安まるか知れない。あゝ、あの當時は隨分辛かつたけれど、「イマ罐詰五千函オクツタ。」と英國へ電報を打つた時の喜びはなかつたからな。

欽次郎　その十何字の電報を打つために……。

絢子　もう兄さん、何にもいはない筈ではありませんか。

欽次郎　うム、さうだつたな。己は馬鹿だ。今日は片柳と喧嘩をしたり、石つころと話をしたり……。

（醫師西田裏口から出て來る。）

西田　家のなかには誰もゐないと思つたら、みんなこちら

へお引越しか。
有村　あ、先生がおいでになつた。
昌子　ぢや、あちらへ參りませう。（家の方へ行かうとする）
西田　まあ、お待ちなさい。それよりもうしろの光景を見たらどうです。
（一同うしろなふり返る。）
（太陽が今將に海に沒しようとしてゐる。）
（人々は無言のまゝ日沒の光景を眺める。）
欽次郎　誰も何ともいふものがないんだな。
西田　あの大きなものゝ沒落の前に、誰が何といへるものですか。
有村　先生、どうかお掛け下さい。（椅子をすゝめる）
西田　（立つたまゝ昌子に）如何です。
昌子　はい。有難うございます。お蔭さまで。
西田　今夜の船は大丈夫ですか。
昌子　この分なら大丈夫と存じます。
欽次郎　先生、柿は如何です。
西田　有難う。わたしはまだもう一人お見舞をしなければならない人がある。（得平の小屋に這入つて行く）
有村　さういへば、爺やはどうしたらうな。
欽次郎　さつき見てやつた時は、半分うと〳〵してましたが。
昌子　ねえあなた、爺やはどうなさいますの、今夜立つのに。
有村　いやそのことなら心配しなくつていゝ、西田先生が爺や親子のことは面倒を見て下さることになつてゐるから。
昌子　あゝさうですか、ぢや後のことは心配はありませんわね。
欽次郎　だが爺やの病氣は氣にかゝるな。
（絢子は家に這入つて、手洗ひの水とタオルとを持つて來る。）
（やがて西田は小屋から出て來て、手を洗つて卓の傍につく。）
有村　どうでせう、先生。爺やは。
西田　年寄の怪我はどうも癒着が遲くて困るのです。其上あの老人のやうに老衰してゐてはね。
昌子　とても駄目でございませうか。
西田　何しろ心臟が弱つてゐますからね。あの儘だと今夜にも危いかもしれません。
有村　えつ。そんなに惡いのですか。
（昌子や絢子はそつとハンケチで眼を覆ふ。）
欽次郎　先生。正直なものがどうしてこんな悲慘な目に遇ふんでせう。

四田　さあ、それは醫者の方のことではない神樣の方のお係りだ。

欽次郎　それはさうですけれども先生はどうお思ひになります。あの爺やのやうな一生正直に過して來たものが、年をとつて馬に蹴られて、身寄り頼りもない、こんな離れ島で死んでしまはなくつてはならないといふのはどういふ譯なんでせう。

四田　實にいたはしいことだ。

欽次郎　佛敎の方では善因善果惡因惡果なぞといふやうですが實際の世の中を見ると、よい事をした人が必ずしもよくなつてをらず、惡いことをしてゐるものが却つてよくなつてゐるといふ實例は澤山にあるやうです。私はかういふことに遭遇する度に何が何だか分らなくなつてしまひます。そして正しいことをするのは馬鹿らしいやうな氣がしてならないのです。

四田　左樣、さういふ不合理の事實をわれ〴〵は屢目擊しますね。

欽次郎　わたしはたつた今も憤慨したのですが、ある男がある白痴の女を辱しめてゐながら、その男は少しも罰せられてゐないのです。今の世の中は證據さへ摑まれなければどんなことをしてもかまはないといふ風です。この儘なら上手に惡いことをするものが榮えて、正直にやつてゐる者はみんな亡びるといふことになつて了ひます。

四田　併しそれだからといつて正直を捨てゝしまふのはどんなものでせう。成程正直にやつてゐては損をすることが多いかもしれません。この人達には不正の人がやるやうな惡どいことは出來ませんからね、けれども一方不正の者は正義の士でなくては使用し得ない、正しい行爲をやるといふ事は夢にも出來ません。不道德家には嘘はつけるかもしれないが、敢然として爲すべきことを爲すといふ尊い勇氣を持つてゐません。ですから此意味からすれば正直者は一番突込んだ爲事をするといふものです。

欽次郎　併し先生、それをやれば成功するんですか。

四田　あなたのいふ意味が世間普通の成功といふ意味ならば、それは必ずしも成功するものとはいはれません。

欽次郎　それでは善因善果といふ訣にはいかないんですね。

四田　私は善いことをすればよい報いがあり、惡いことをすれば惡い結果が從ふものと固く信じてをります。併し世の中のことは餘りに複雜で餘りに深いから、私が信ずる通りに行はれてゐません。從つてその問題は私にはとても分りません。けれどもたゞ一つ私に分つてゐることがあります。それはよい結果が來るからよい事をするの

てなく、惡い結果が來るから惡い事をしないのではない。結果の如何に係はらず、人はしなくてはならない事を、しなければいけないといふ事です。なあ有村さん、さうではありませんか。

有村　いや、私は敗軍の將です。申すことは何にもありません。

（赤子が泣き出したが、昌子があやすと泣き止んでしまふ。）

昌子　今のやうなお話は私には六づか敷くつてよく分りませんけれど、正直にやつてゐて不幸になつたとしても、私はそれを運命だと思つてどこ迄も忍びます。けれどこの小さな者の上にも矢張りいつかさういふ苦しみが廻つて來るのでございませうか。

西田　おいたはしいけれどさうです。人の世が今のまゝである限りこの不合理は續くでせう。

昌子　私はどんな苦しみを受けてもかまひません。どんな不幸に遇つても忍びます。けれどもこの子にだけはそんな苦しみは受けさせたくございません。（泣く）

有村　おまへがさういふのは無理はない。わたしもそれを思ふとたまらない。

（お鶴、濱の方から大聲で笑ひながら馳けて來る。そしてなほ濱の方へ向ひながら。）

お鶴　やあい、馬鹿。出來ねえだらう。黄金蟲食へねえだらう。

絢子　まあ、お鶴、おまへまた蟲を食べてゐるのかい。

欽次郎　そんなもの食ふんぢやない。捨てゝしまはないか。

お鶴　いやだい。これおれのおまんまだ。ハヽヽヽヽ。

絢子　そんなにはしやいでゐるものぢやないよ。爺やは病氣ぢやないか。

昌子　お鶴、おまへ少し看護してやらなくちやいけないよ。

お鶴　いやだあ、父怒るんだもの。

西田　どうも心配になる。もう一度診て來よう。

（西田は立つてまた小屋に這入る。）

（有村と欽次郎も後に續く。）

（夕暮の色がやうやく濃くなつて來る。小屋のなかに明りがつく。）

（昌子と絢子は戸の外から心配さうに内の樣子を見てゐる。）

絢子　兄さん、どう。（内からの返事を聽いて）まあ！

昌子　どうなんですの。

絢子　脈はあつても、ごく幽かなんですつて。

昌子　もう駄目でせうか。

絢子　（内から何か命ぜられて）え？　水ですか。はい。

（絢子家に入つて水を持つて來る。）
（右手から古道具屋が荷車を挽いて來る。）
古道具屋　先程のを戴いて參ります。
昌子　ちよつと椅子を借りましたよ。
古道具屋　いゝえ、よろしうございますとも。どうかお使ひなすつて。
（さういひながら道具を荷車に積み重ねる。積みながら道具が一つ車から落ちて烈しい音を立てる。）
絢子　（小聲で道具屋に注意する）
古道具屋　へえ、さやうで。それはどうも。
（古道具屋靜かに車を挽いて行く。）
（と、小屋の裏手で犬が物におびえたやうに二聲三聲けたゝましく鳴く。）
欽次郎　（そつと小屋から出て犬を制する）　しつ、しつ。吠えるんぢやない。まる、まる。
（犬鳴き止む。）
有村　（小屋のなかゝら）　お鶴はゐないかい。
絢子　お鶴、呼んでゐるよ。
お鶴　いやだ、こはいから。（臂込みする）
絢子　息を引取つたのですか。
（有村默つてうなづく。）
欽次郎　お鶴、お父つあんに水を上げるんだ。

（欽次郎お鶴の手をとつて小屋のなかにはいる。）
（夕暮の色いよ／＼濃くなつて來る。人々のすゝり泣く聲がかすかに聞える。）

——幕——

「……爾死に至るまで忠信なれ、然れば われ生命の冕を爾に賜へん」

約翰默示錄二、十。

女親（三幕）

人物

由比昌一　法科大學生（二十六歳）
同　保子　その母（四十五歳）
堀　俊子　昌一の妹堀家に嫁す（二十歳）
余田達馬　昌一の從兄醫學士（二十九歳）
竹内富三郎　昌一の舊友（二十七歳）
横倉丈助　鷄買（五十歳位）
ひ　で　その娘由比家の女中（十九歳）
す　ゞ　由比家の女中
お　か　ね　雛呉服

時期

秋

場所

關東の某市

第一幕

由比家の住居

二階建の家で上は昌一の居間。下は客間になつてゐる。二階には腰高窓があつて内部はよく見えない。客間の前は庭。その左手に垣根があつて庭と裏地とを限つてゐる。垣根の向うに鷄買の丈助親爺が立つてゐる。

時間は薄暮から夜にかけて。

梯子段の上り口で女中のお鈴は上を向いて大きな聲で呼んでゐる。

すゞ　おひでさん。おひでさん。（おひではコーヒー盆にあいた茶碗を載せて默つて二階から下りて來る。）

すゞ　あら居たの、居たんなら返事をしてくれゝばいゝのに。

ひで　そんなに大きな聲で呼ばなくつてもいゝわ。直ぐに下りるんですもの。

すゞ　だつて何處にゐるのか分りはしないわ。

ひで　若旦那樣のところへコーヒーを持つて上つたら、お手傳ひをしろと仰しやるので片付けものをしてゐたのよ。

すゞ　でも下ぢや忙しいのよ。余田先生がいらしつてゐて。

ひで　どうも濟みません。

すゞ　それからね、あなたのお父つあんが來てゐてよ。

ひで　さう。

すゞ　お臺所口でさつきから待つてゐるわ。
ひで　あら、どうも有難う。
（二人話しながら去る。）
（間もなく臺所口におひで現はれる。）
ひで　お父つあん。
丈助　おひでか。
ひで　よつぽど待つたんですか。濟みません。ご用があつたもんですから。
丈助　なあに大して待ちはしない。實は少し相談したいことがあつて、商ひの歸りに寄つたのだが、お邸は忙しいんだらうな。
ひで　え。相談て何、お父つあん。こゝでは出來ない話。
丈助　なに出來ないこともないが、それおまへも知つてゐるだらう。あの仲間の佐十な。あれの次男が今度分家をするんだ。それで分家をするについちや嫁が欲しいといふのだ。
ひで　お父つあん、先にいつておきますがあたしお嫁にはいかなくつてよ。
丈助　さうせつ勝ちなものいひをするなよ。返事をするなら話をみんな聽いてからしたらいゝぢやないか。何しろ分家だから姑はなしさ、それにたんとぢやあるまいが財産も分けるといふのだから……
ひで　もうお父つあん澤山ですよ。
丈助　そんなことをいふがこの鷄買つて商賣ぐらゐ儲かるものはありやしない。幸ひ向うは同商賣だし……
ひで　あたし鷄買なんか大嫌ひだわ。
丈助　親父の商賣の惡口をいふ奴があるか。どうもかういふお邸に上つてゐると氣位ばかり高くなつて爲様がないな。
（これより先き女中のお鈴は一葉の名刺を持つて二階の昌一の室に上つて行く。）
（昌一は女中と一緒に下りて來ながら「玄關に待つてゐるのか。」といひつゝ玄關の方へ急いで行く。やがて友人の竹内と話し乍ら下座敷に這入つて來る。）
ひで　（座敷の話聲を聞いて）　あら、お客さんだわ。
丈助　おまへどうしても嫁く氣はないのか。いゝ口なんだがな。
ひで　もうその話なら止めにして頂戴つてば、お父つあん。
丈助　ぢやこの話はまたにしよう。だがさう六剛ケ敷いことをいつてゐたら折角の年頃を臺なしにしてしまふ。よく考へておかなくつちやいけねえ。
ひで　え、考へては見ますけれど、あんまり當にしないでゐて下さい。ぢや氣をつけてね。お父つあん。
（丈助は鷄を入れた鷄籠を擔いで裏口から歸る。）

（座敷では昌一と竹内とが話し合つてゐる。）

昌一　實際君が來るとは思ひがけなかつた。いつこつちへ歸つたんだ。

竹内　一昨日着いた。何しろ久しぶりで日本に歸つたんだから見るもの聞くものみんな懷しくつてね。聞くと君はまだこつちにゐるといふから、早速やつて來たよ。

昌一　うん、學期の始めだからまだずべつてゐたのだ、だがよくやつて來てくれた。さあ君。どうかこちらへ。

竹内　席なんかどうだつていゝ。昔のまゝで行かうぢやないか。

昌一　さうか。だが今日はゆつくりしていつてくれ給へ。丁度余田も來てゐるから。

竹内　余田君？　うん君の從兄の、あの元氣のいゝ。

昌一　さうだ〳〵。あれが今ぢやモーニングなんか着込んで藪醫者になりすましてゐるのさ。

（奥から余田達馬と昌一の母が來る。）

余田　おい聞えたぞ。聞えたぞ。

昌一　何だそこにゐたのか。はゝゝ。

保子　まあお珍らしいお方がお見えになりましたこと。それでもまあお變りもなく。

竹内　有難うございます。

保子　何年におなりです。あちらへいらつしやつて。

竹内　四年になりますよ。早いもんですな。

昌一　お母さん、何か支度をしてくれませんか。

保子　あ、さうしませう。達馬も差支へないでせうね。

余田　ご馳走ならいつでも結構ですな。

保子　では何にもありませんけれどもごゆつくり。

竹内　ちよつと上つてとんだご迷惑をかけますな。

保子　いゝえ、何にもお構ひが出來ませんで。

（保子奥へ這入る。）

余田　時に何だつて君はメキシコなんかへ飛出したんだい。高等學校を止めてしまつて。

竹内　さうだな、まあ金の林檎を探しに行つたとでもいふのかな。

昌一　まるでお伽噺だね。

竹内　さうさ、人生はお伽噺で始まるにきまつてゐるぢやないか。君、こゝに赤い林檎と金の林檎とあつたら君はどつちをとる。

昌一　さうだね。

余田　僕は醫師として忠告するが、金の林檎なんか食ふと腹をこはすよ。第一そんなものは噛ることさへ出來ないぢやないか。

竹内　ところが、僕はさうは思はなかつたんだ。何しろ金の林檎の方が高尙で立派だからね。何かの本でメキシコ

のことを讀むとすつかり心醉しちやつてね。メキシコの銀山やコーヒー畑や棕櫚の林を自分獨りで童話化しちまつたんだ。そして桃太郎の鬼が島征伐といふ意氣込みで出掛けて行つたんだ。

昌一　それで金の林檎は旨く捲ぎとつたかい。

竹内　いゝや、捲ぎとるどころか、金の林檎は食へないものだといふことを向うに行つて始めて知つたよ。

余田　さう九見給へ。赤い林檎の方が旨いだらう。

竹内　いや、食べて見たら酸つぱかつた。

余田　ぢや君は赤いのぢやなくつて、青い林檎を嚙つたんぢやないか。

竹内　さうかもしれない。併し僕が食つた奴はどれも酸つぱかつたよ。

昌一　人間が靑いうちは靑い林檎ばかり食はされるものかね。

竹内　ハ、、、、。

（前の會話の間に女中のおひでが酒肴を持つて來る。三人はチャブ臺を眞中にして酒を始める。おひでは客の前に皿を列べ終ると一旦奧へ這入る。）

竹内　今のは君の妹さんだつたかな。

昌一　いゝや、ありやうちの小間使だよ。

竹内　さうか併し馬鹿に美人だな。

余田　メキシコから來るとみんな美人に見えるだらう。

竹内　人を劣等人種扱ひにするなあ不都合だね。

昌一　妹といへば、おい、俊子の病氣はどうだらう。

余田　何にも心配はない。姙娠中はよくあんなことがあるもんだ。二三日たつとすつかり直るよ。

竹内　妹さんは何處かへ片附いたのか。

昌一　うん、海軍士官のところへ。今産前なんでちよつと歸つて來ちやゐるが。

竹内　さうか。そりやお大事に。

余田　それはさうと竹内君。さう酸つぱい林檎ばかり食はされちや、もうメキシコは懲り〳〵だらう。

竹内　ところが直ぐ歸らなくつちやいけないんだ。今度はほんのちよつと歸朝したんだから。

昌一　何か仕入に來たのか。

竹内　まあ一種の仕入れだね。

余田　いやに濁すぢやないか。

竹内　ハ、、、。分るだらう。

余田　ちつとも分りやしない。

竹内　今に分るよ。まあ君一杯。（盃をさす）

余田　盃をさして話をそらさうとするのは可哀らしいね。はゝあ分つた。細君を探しに來たんだらう。

竹内　さう追求するな。だがこの間東京で二重橋に行つた

ら洋服を着た下等な男が十二三人旗を立てゝ俥でやつて來たが、僕はあれを見たら冷やりとしたよ。
昌一　それは米國から細君を探しに歸つて來た連中ぢやないか。みんな女に餓ゑてるつて顏をしてゐるね。
竹内　さうこつびどくやらないでくれ。僕の心を寫眞に撮るとあの旗を立てゝ歩く連中そつくりなんだから。
余田　はゝゝゝ。今度は內地に赤い林檎を捥ぎりに來たのか。
（女中おひでは次の料理を運んで來る。つゞいて母の保子が再びおあいそに出て來る。）
保子　どうも何もございませんで。
竹内　いや、すつかりご馳走になつてしまひました。
余田　伯母さん、この鯉こくは結構ですね。
竹内　實際日本料理はいつやつてもようござんすな。
保子　いゝえ、洋食をと思つたんですが、外國からお歸りの方には却つてこの方がおよろしいかと存じまして。
竹内　それはどうも。一つ如何です。（保子に盃をさす）
保子　有難うございます。私はもう夕食を濟ませましたから。
余田　伯母さんはやりやしないよ。クリスチヤンだから。
竹内　さうでしたつけな。これは失禮。
保子　いゝえ。私こそ不調法で。竹内さん、何かメキシコの面白いお話はございませんか。
竹内　さうですね。何しろ餘り開けないところですからお話するやうなものはありませんな。土地ではスペインの遺風を傳へた鬪牛が隨分盛ですが、僕なんかには鰐狩の方がよつぽど面白いですね。
保子　そんなに鰐が居りますんですか。
竹内　え、をりますとも。ティエルラ・ブランカなんて熱帶部に行くと、水邊にはうよ〳〵ゐますよ。
昌一　それぢや人間がやられることがあるだらうね。
竹内　うん、時をり土人が喰はれることがあるやうだ。あすこの土人は世界一綺麗好きなんで、よく河へ水浴に行くんだが、その時尻尾でぴしやんとやられるんだ。何だつて鰐にかゝつちやかなはないからな。
保子　ほんとに鰐は殘酷でございますからね。
余田　伯母さん、さういひますがね、鰐は腹が空つてゐたから喰つた迄ですよ。鰐自身は殘酷だとも何とも思つちやゐないでせう。
保子　だつて人間を食べるなんて隨分殘忍ぢやありませんか。
余田　そりやわれ〳〵が人間だからさう思ふだけで、公平に考へたらわれ〳〵の方が得手勝手ですよ。さうぢやありませんか。人間が鰐を殺すときは鰐狩だなんて平氣な

ことをいつてゐながら、鰐が人を喰ふと、鰐は殘忍な動物だなんてそんな理窟はないぢやありませんか。

昌一　成程かうして見ると、鰐の方から考へたら人間位殘忍なものはないといふかも知れない。はゝゝゝ。

余田　はゝゝゝ。

竹内　理窟はつけやうだね。（保子に）もう酒は十分です。ご飯を頂戴したいんですが。

保子　まだおよろしいぢやありませんか。もう少しお過しなさいまし。

竹内　いゝえ、もういけません。

保子　さうですか。ではご飯を。（と傍のおひでに目くばせする）

（おひではご飯をつけて三人に出す。）

竹内　松茸飯ですね。

保子　お嫌ひですか。

竹内　いゝえ、大好物。

保子　それならよろしうございますが、召上らないやうですと。

竹内　食はないものなざありませんよ。親父（おやぢ）の脛さへ嚙つたんですから。

昌一　はゝゝゝ。

余田　それにこの味噌汁つて奴がこたへられないね。

竹内　さうだ。かういふものはメキシコぢやとても食へない。

保子　およろしかつたらどうかご遠慮なく。

余田　お代りをしてもいゝんですか。ぢや一つ。（と椀を出す）

竹内　僕にもどうか。（とこれも椀を出す）

余田　君のむしやぶりついて食つてゐるところを見ると一高の賄を思ひ出すね。

昌一　「賄めし」か。はゝゝ。（と笑ひ乍ら茶碗を出して飯のお代りをする）

保子　かうして皆さんが召上つて下さると、こしらへ甲斐がございますわ。

竹内　どうもとんだお客が飛び込んで來たものですな。

余田　何かんといつて盛んにぱくついてゐるぢやないか。

竹内　君だつてやつてゐるぢやないか。

余田　はゝゝ。だが竹内君、君は飯を食ふことは殘忍だとは思はないかい。

竹内　僕はそんなこと思つたことがないね。

余田　君はそんなに食つてゐながら殘酷とも思はないなぞは、不都合極まるね。

竹内　馬鹿いつちやいけない。飯を食ふのが殘酷だなんて奴がどこにあるものか。

余田　それぢや訊くが、君は飯を食ふ前にさつきこんなことをやつたらう。（十字を切る眞似をする）あれは一體何だい。うちの伯母さんもやりますね。

保子　あれは神樣への感謝です。

余田　感謝ですか。

竹內　さうさ。神が今日も吾々によき糧を與へ給うたことを感謝するんぢやないか。

余田　それなら感謝なんて利己的だね。

昌一　感謝が利己的でもどうでもいゝが、飯粒は飛ばさないでくれ。

余田　や、失敬〳〵。だがさうぢやないか。自分は今日の食物を得て有難いなぞといふのは自分の腹のことばかり考へてゐる利己的な奴のことで、食はれる食物のことについては少しも顧慮してゐないのだ。

竹內　（おひでの方に茶碗を出し乍ら）ご飯を輕く。

保子　輕くなんて仰しやいませんでどうか澤山お上り下さいまし。

余田　由比君も先刻いつたね、鰐の話をした時、人間ぐらゐ殘酷なものはないつて。その通りだよ。鰐が人間を食ふのが殘酷なら、人間が他のものを食ふのも亦殘酷な訣だからね。

竹內　それで。

余田　人間は、或は廣く生物はといつてもいゝが、自分の一番大事な生命を維持して行くためには、他の一番大事な生命を奪つてゐるのだ。そこにあらゆる罪惡の芽があるのだ。

保子　おまへのいふのはつまり菜食論なの。

余田　いゝえ、あんな不徹底なんぢやありません。鳥や魚を食はなくつても、菜つ葉や大根を食つてゐれば生きものを殺すことは同じですからね。

保子　そんなことをいつてゐたら何も食べられなくなつてしまふぢやありませんか。

余田　さうです。食べられなくなる訣です。實際可哀さうですからね。僕はとき〲考へることがあるんですが、今吾々が食つてゐるこの米にしたつてさうぢやありませんか。人間は隨分ひどいことをしてゐるんですよ。稻が實る迄は肥料をやつたり、水をやつたり、田の草をとつたりして親切さうに世話をしてやるが、さて米が出來たとなるとどし〳〵苅りとつてしまふのです。さうしてかうやつてムシヤ〳〵食つてしまふのです。人間位ずるい奴はありやしません。お爲ごかしぢやありませんか。一種の詐欺ぢやありませんか。掠奪ぢやありませんか。

（昌一は妙な顏をし乍ら口を動かしてゐる。）

保子　（昌一を見て）どうしたの、ご飯に石でも這入つて

ゐたんですか。
昌一　いゝや、あんな話をするもんだから飯の味が變になつてしまつた。茶を下さい。
余田　（昌一に）君、もうお仕舞ひか。
昌一　お仕舞ひだ。
余田　そんならそのおかずをこつちへ寄こさないか。僕のはみんな平げてしまつたから。この料理はなか〳〵旨いね。
竹内　どうもご馳走様。（箸をおいて余田に）余田君、君は食ふ事は殘忍だなんていつてながらよく食ふね。
余田　（平氣で）うん、よく食ふよ。食はなきや生きてゐられないからね。女中さん、飯をもう一杯。（とまた茶碗を出してお代りする）
保子　それではおまへのいふことは少しも筋が通らないぢやありませんか。殘酷だ殘酷だといひながらご飯を食べてゐるんですから。
余田　ちやんと通つてゐますよ。だから殘酷でも何でも人間は食はなきや生きてゐられないといふんです。
竹内　感謝もしないでか。それなら感謝して食事をする方がよつぽど立派ぢやないか。
余田　いや、感謝よりも前にもつと大事のことがあるんだ。
昌一　生きる事は殘酷だといふのか。先づそれを感じなくつちや駄目だといふのか。
余田　さうだ。それが第一だよ。それが分らない以上神だの感謝だのと體のいゝ事をいつたつて何になるものか。實際人間一人が生きて行く爲めにはどのくらゐの殺生をするものかと思ふとぞつとするね。君はさう思はないかい。
竹内　思はないね。飯を食つてぞつとしたのは風邪をひいた時だけよ。
余田　ハヽヽヽ、冷かしちやいけない。だが考を突詰めると、そこ迄行くぢやないか。
竹内　併しさう思つたところが、飯を食ふ限り殘酷なことは同じぢやないか、君のいふ通りなら。
余田　さうだね、同じといやあ、まあ同じやうなものだが……。
昌一　それなら君は食はずにゐるのが正當ぢやないか。
余田　そこだ。君のいふ事は徹底してゐる。けれども人間は食はずにゐろつたつて食はずにはゐられない。併し食へば殘酷になる。然も殘酷と知り乍ら生きてゐなきやならない人生はいよ〳〵殘酷さ。だがこゝだよ。こゝに生きる妙味がなくつちやならないぢやないか。
竹内　そこで又一杯かい。

余田　いや、もうお茶だ。あゝ腹が一杯になつちまつた。

昌一　更に痛切に人生の殘酷を感じやしないか。はゝゝゝゝ。

余田　（お茶を飲み終へて）　いや、どうもご馳走さま。

保子　お粗末さま。（おひでに）　ぢやおまへこゝをお片附け。

ひで　はい。（と食卓の上を片附ける）

竹内　君の議論はどうもずるいね。

余田　ずるかないさ。みんなかうして生きてゐるんぢやないか。これは議論ぢやない。事實だよ。

昌一　（立上り）　腹ごなしに一つ自彊術でもやるかな。

（縁側に出て運動を始める。）

余田　その運動法のなかには四つん這ひになるやつはないかい。

昌一　あるよ。かういふやつが。（四つん這ひになつて見せる）

余田　ふう、すつかり動物の恰好だね。

昌一　さういはうと思つてひとを四つん這ひにさせたのかい。

余田　いや、さういふ訣ぢやない。實は外國でもその四つん這ひが盛んに流行してゐるんだ。all fours（オールフォアズ）　つて云つてね。竹内君、君なんかも知つてゐるだらう。

竹内　メキシコぢやまだそんな新らしいものは流行つてゐないね。

余田　なあに決して新らしい事ぢやないよ。動物はみんなやつてゐることなんだから。たゞ人間だけは立つて歩くやうに出來てゐるからやらないが、その爲に腸が下つて爲方がないんだ。腹部にいろんな故障が起るのはこれに起因することが多いんだ。そこでこれを防ぐにはどうしても動物の形に返つて四つ這ひになる必要がある。かうやつてね。（自ら四つ這ひになる）　これで砂を舐めて歩けば申分なしなんだ。

保子　まあ穢い。何をするんですね。達馬は醉ふと本當に爲樣がない。

余田　これでも醉つぱらつてやつてゐるんぢやありません。體育上の眞面目な話なんですよ。米國あたりぢやこれを sandcure（サンドキユーア）　と稱へて大いに行はれてゐるんです。sand（サンド）は砂、cure（キユーア）は治療でせう。つまり砂を食ふ療法なんです。これも動物は夙にやつてゐるところなんで。犬にしたつて鷄にしたつて、砂を一しよに食つてゐます。これが體にはなか／＼いゝんですね。

昌一　（體操を止めて）　そりやほんたうか。

余田　ほんたうさ。これを以て見ると一面人間はだん／＼動物に返つて行く傾向があるね。

昌一　（心のうちでぎよつとする）

竹内　「だから人間はいよ〳〵殘酷になる」か。はゝゝゝ。

余田　はゝゝゝ。

保子　竹内さん、果物を一つ如何。

（おひで食後の果物を持つて來る。）

竹内　はあ、有難うございます。頂戴しませう。（林檎をとつて剝く）この邊りは夜は靜かですな。

保子　え、秋はわけてよろしうございますの。

竹内　庭で蟲が鳴いてゐますね。

保子　え。

（汽車の音が聞える。）

竹内　あ、汽車の音かしら。

保子　さうですの、遠汽車の音つて寂びのあるものですわね。達馬、おまへさん林檎はどう。（達馬の居眠りして居るのを見て）まあ、たわいがない。あんなに喋つてゐたのに。

昌一　はゝゝゝ、無神論者がいつの間にか神樣になつてしまつた。

余田　（目を醒まして）神樣がどうした？

昌一　林檎を食べないかつていふんだよ。

余田　さうか。これはご馳走さま。

竹内　（時計を見て）おや、こんなに遲いかしら。すつかり長居をしてしまつて。

昌一　まあ、いゝぢやないか君。

竹内　有難う。遲いからまた上ることにするよ。（保子に）どうもご馳走さまになりました。

保子　さうですか、ちつともおかまひ致しませんで。

余田　いや、僕もご馳走さま。俊子さんをお大事に。

（竹内と余田歸る。昌一等は送つて行く。間もなく昌一と保子歸つて來る。）

保子　ほんたうに達馬にも困つたものですね。

昌一　どうしてゞす。

保子　あんな分らないこと許り喋べつて私はら〳〵してしまひましたよ。

昌一　さうですか。併し余田の議論はなか〳〵面白いところがあるぢやありませんか。

保子　何が面白い事があるものですか。神樣の惡口なんかいつて。あんな事をいつたらおまへ少しやり込めてくれる位でなくつちやいけませんね。

昌一　そんなことをいつたつて爲方がないぢやありませんか。

保子　それだからおまへはどうもおつとりしてゐ過ぎるといふんですよ。そんな風だと……

昌一　どうもお母さんは何にでも勝氣なんだからな。

保子　いゝえ、そんな事ぢやありませんよ。おまへには分りませんか。お父樣がをられた時と今と。
昌一　そりや隨分違ひますさ。
保子　だから私はそこをいふんですよ。ゐる人がゐなくなると世間ぢや直ぐこちらを輕く見ますからね。
昌一　そりやお母さんのひがみですよ。
保子　いゝえ、そんなことはありません。ご覽なさい。達馬にしたつて、お父樣のゐた時は、うちに來ても小さくなつてゐたのに、それがもうあの通りなんですよ。親戚の者迄があゝなるんですからね。甥になんか馬鹿にされると思ふと私むつとしますよ。
昌一　なにもお母さんを輕蔑したといふ訣ぢやなし、そんなに腹を立てることはないぢやありませんか。
保子　いゝえ、怒つてゐる譯ぢやありません。唯少しでも氣を弛めてはゐられないつていふんです。だからおまへが本當にしつかりしてくれなくつちやならないんですよ。
昌一　（無言）
保子　それはさうと、おまへはまだ東京へ行かなくつてもいゝんですか。學校はもう始まつたんでせう。
昌一　學期の始りだからまだ大した事はありませんよ。
保子　さう。それならいゝけれど、學校だけはおまへ眞面目にやつて下さい。
昌一　え。
保子　お父さんのない後はおまへばかり賴りなんですからね。
昌一　（小さい欠伸をかみ殺す）お母さん、もう寢ませう。
保子　さうですね。やすみませう。誰かゐませんか。（と奧へ向つて呼ぶ）
（「はい。」といつてすゞとひでが一緒に出て來る。）
昌一　おいひで、床をとつてくれないか。
ひで　はい。
保子　すゞは戶をお閉め。
すゞ　はい。
（すゞは戶を閉め始める。ひでは二階に上つて昌一の床をとる。）
昌一　お母さんおやすみ。
（昌一は母に挨拶して二階へ上つて行く。）
（やがて下座敷はすつかり戶が閉められてしまう。）
（二階でおひでは床をとつてから、窓の雨戶を閉めようとすると、戶が固くつて動かないので困つてゐる。そこへ昌一が上つて來る。）
昌一　どうしたんだ。戶が閉まらないのか。
ひで　この間のおしめりで木がふえたと見えまして。

昌一　どれ僕が手傳つてやらう。
ひで　いゝえ、大丈夫でございます。あ、やつと出ました。（戸袋から戸を引出して一枚だけ閉める）
昌一　今日おまへのところへ誰か訪ねて來やしなかつたかい。
ひで　はい、あの父がまゐりました。
昌一　何かいゝ話でもあつたかい。
ひで　（下を向いて默つてゐる）
昌一　何故默つてゐるのだい。
ひで　でも、あんまりをかしい話なんですもの。
昌一　どうして。
ひで　私にお嫁に行けつて申しますの。
昌一　それでおまへどうしたい。
ひで　どうつて、若旦那さまご存じぢやありませんか。
（間。）
ひで　（突然びつくりしたやうに）あら、いけませんわ。若旦那さま。
（下座敷の雨戸のくゞりを開けて保子は手水鉢で手を洗つてゐたが、この聲を聞いて二階を見上げる。）
（窓の戸がするするど閉まる。）
（雨戸を漏れる光が不安さうに立つてゐる保子の姿を黑く浮かし出してゐる。）
（虫の音が降るやうに繁い。）

――幕――

第二幕

由比家の茶の間。
第一幕より二月ほど後。午後。
保子と昌一の妹の俊子とが、羅呉服のおかれが背負つて來た古着の模樣物を見てゐる。俊子は姙娠してゐるけれどあまり目立たないやうに巧にそれを隱してゐる。
おかれ　（縮緬の模樣を見せながら）それではこれは如何でございませう。之ならきつとお宜しいと存じますが。
俊子　まあ、いゝ模樣だこと。お母さま、これがよかないこと。
保子　さうね。併し折角買つてやるんなら本人に見せていいのを取らせた方がいゝでせう。
俊子　あ、さうですわね。ぢや呼びませうか。（奥へ向つて）おひで、おひで。
ひで　はい。（奥で返事をする）
俊子　ちよつとおいで。
ひで　はい。
（ひでが這入つて來る。髪を高島田に結つてゐる。）

保子　ひで、どれがいゝ。おまへに買つて上げようと思ふんだけれど。
ひで　いゝえ、私のならもう何にも。
保子　遠慮おしでない。おまへのお祝ひに上げるんだから。
おかね　おひでさん、お目出度うございますこと。今度お嫁にいらつしやるんださうですね。
ひで　有難うございます。
保子　（おひでに）これどうだらう。おまへに似合はないかしら。
ひで　私こんな立派なものを戴きましては。
俊子　お母さん、矢張りこれがよかないこと。この波が銀絲になつてゐるところが大變いゝわ。
おかね　左樣でございます。このお模樣なら品があつて、お召しになるとそれや引立ちます。
保子　ではこれにきめておきませうか。ひで、おまへもこれでいゝでせう。
ひで　どうも奥樣有難うございます。
俊子　ひでが着るときつと似合ふわ。
おかね　ほんたうにいゝ花嫁樣がお出來になりますよ。
保子　ゆきはいくらになつてゐます。
おかね　六寸五分でございます。
保子　さう、では直ぐに間に合ひますね。何しろ話が急にきまつたものですから。
おかね　えゝ〳〵、それはもう今お召になりましても大丈夫でございます。
保子　ほんたうにね。それから今日は新物（あらもの）は持つて來てゐませんか。
おかね　はい、少々は持つてをりますが、どういふお品で。
保子　男の兵兒帶。縮緬か錦紗の。
おかね　では、丁度持つて參つてをります。これは如何でせう。（と兵兒帶を四五種出して見せる）
俊子　お母さま、誰の。兄さんの。
保子　あゝ。
俊子　お母さまは直ぐ兄さんのものね。
保子　そんなことといふが、おまへさんだつて子供が出來てご覽。直ぐさうなるから。
俊子　子供つてそんなに可哀いゝものかしら。私何だかうるさい樣な氣がしますわ。
おかね　お若いうちはみんなさうお仰しやいます。
保子　ところが自分の子となるとどんな面倒なことでも苦にならないものよ。（兵兒帶をいぢり乍ら）これどうでせう。
俊子　いゝ色ですわね。兄さんにはそれがようございますわ。

保子　ぢやこれを戴いときませう。
おかれ　有難う存じます。何か外にお入用は。
保子　今日はそれだけにしておきませう。
おかれ　左樣でございますか。どうも有難うございます。
（品物を片附け始める）
保子　子供といへば、あなたの息子さんはどうしました。
おかれ　伜でございますか。伜のことを思ひますと私は涙がこぼれて爲方がございません。
俊子　どうかしたんですか。
おかれ　はい。
保子　息子さんは何處かへ奉公に行つてゐたんぢやありませんか。
おかれ　はい。町の田丸屋さんへ參つてをりました。ご主人樣が十五年奉公すれば支店を出してやると仰しやいますので、十三の歲から今年で丁度まる十五年勤めさせました。
保子　まあ、よく辛抱しましたね。
おかれ　いゝえ。ところが伜が馬鹿だものでございますから、ごく固い性質なのでございますが、惡い友達に誘はれまして惡所通ひを始めたのでございます。それでつい使ひ込みをいたしまして。
保子　まあ、折角勤め上げたものにね。
おかれ　私は泣いても泣き切れません。こんなに年をとつて荷物を脊負つて步いてゐるのもみんな伜一人が樂しみだからでございます。これから少し樂をしようと思つてゐましたのに、そんな風に橫道にそれてしまひまして……
俊子　まあ、お氣の毒な。
おかれ　子供を持ちましてもこんな伜では何の役にも立ちません。却て親泣かせでございます。
保子　それではあなたもご心配ですね。
おかれ　何ですか氣も張りも拔けてしまひました。（氣を變へて）これはとんだ愚痴をお聞かせ申しまして相濟みません。ではご免下さい。（歸りかける）
保子　ご苦勞さまでした。
おかれ　どうも每度有難う存じます（去る）
俊子　可哀さうね、年をとつて子供があんなだと。
保子　ほんたうに子供つていつ迄心配しても心配のしきれるものぢやない。（ひでに）ひで、おまへのお父つあんはまだ來ないかい。
ひで　はい、あのお臺所にまゐつてをります。
保子　あ、さう。それなら早く通せばよかつたのに、では直ぐにこゝへお呼び。
ひで　はい。（去る）

（おひでに伴はれて父親の丈助は恐る〳〵這入つて來る。そして保子の前に丁寧に辭儀をする。）

丈助　どうも此度はお禮の申上げやうもございません。何から何までお世話に預りまして。それにまた只今は娘に高價な品をお祝ひ下さいましたさうで。重々お禮を申上げます。

保子　これでひでも身がかたまることですから、おまへさんも一安心ですね。

丈助　はい、全く左樣でございます。私もお蔭樣で氣が樂々いたしました。實は何でございます。二月ほど前に嫁の口がございまして娘に相談しましたんですが、てんで私のいふことを取合ひませんので困つた奴だと思つてをりました。併し今考へて見ますと其方が却つてよかつたので、今度のやうなよいところへ參れるなんて、娘は本當に爲合せ者でございます。

保子　前にそんな話があつたのですか。

丈助　はい。併し奥さんのことなら娘は何でも「はい〳〵」と申しますが、私のいふことでは一向きいてはくれませんので、尤無理はないのでございます。私は娘にいゝことをしてゐないんですから。

保子　手が廻らないでせうね。おかみさんは無し、子供衆が大勢なんだから。

丈助　左樣でございます。そんな訣だもんでございますから娘はたゞもう奥樣におすがりいたしてをりますやうな次第で。

保子　面倒を見て上げたいとは思つてゐるんですれど、なか〳〵思ふやうにいきませんでね。今度は丁度いゝ口があつたもんだから話をしたんですが、先方でもよいといふし、おまへさんたちの方も不承知はないといふんだから、私も世話のしがひがあるといふものです。そこであちらでは日がないのですから大變に急いでゐて、極つた以上は明日にも式を擧げたいといつてゐるんですけれど、まさかさういふ訣にもいかないから、明後日といふことにしたんですがね。

丈助　はい、いろ〳〵とお骨折を戴きまして。

保子　何しろ向うへ行くのには旅行免狀つてものが入るんですから、それにはどうしても早く式を濟ませて屆けを出しておかなくてはなりませんからね。

丈助　左樣ださうでございますな。

保子　で、今日はひでを迎ひに來たんですか。

丈助　はい。少しばかり買物をしたいと思ひまして。

保子　それに色々話もあるでせうしね。では直ぐに連れて行つたらいゝでせう。併し前にもいつた通り支度は何もしない方がようござんすよ。向うでも入らないといつて

ゐるんですし、外國では樣子も違ふでせうからね。

丈助　いゝえ。何も出來はいたしませんです。

保子　それに式を擧げると、直ぐに東京から鎌倉の方に新婚旅行に行くといつていらつしやいましたから、旦那樣に東京で買つて貰ふ事ですね。ホ、、、、ねえひで。

丈助　へ、、、、。これだから今時は夫婦仲がよくなるんでございますな。

（女中のすゞが這入つて來る。）

すゞ　あの奧樣、お電話でございます。

保子　何處から。

すゞ　婦人會のお方から。

丈助　ではお暇をいたします。

保子　日がないんだからおまへさんたちも忙しいわね。では早く用をお片附けなさい。

丈助　有難うございます。

ひで　奧樣どうも永々お世話さまになりまして。

保子　ぢや體を大事にね、それからこれはおまへへお祝ひなのだから。（と模樣物をやる）

ひで　はい、では頂戴をいたしてまゐります。

すゞ　奧樣、あのお電話が。

保子　あ、さう／＼。

（保子奧へ這入る。）

（丈助とおひではは俊子や女中に挨拶して臺所口の方へ去る。女中はそれを送つて行く。）

（俊子は障子の向うの日當りの緣へ出て編物をしてゐる）

（やがて保子が奧から出て來る。そして緣側に坐つてゐる俊子を見て。）

保子　おまへそんなところに坐つてゐてはいけませんよ。

俊子　どうして。

保子　どうしてつて、腰が冷えると大變よ。

俊子　大丈夫だわ。座布團を敷いてゐるから。

保子　おまへまだお産の苦しみを知らないから平氣でそんなことをいつてゐるけれど、そりや初産は大事なんだから氣を附けなくつちやいけませんよ。

俊子。はい。（座を立つ）けれどをかしなものね。そんなに苦しい思ひをして産んだ子供が一番可哀くなるなんて。

保子　何をいつてゐるのおまへは。まあ憎いものか可哀いものかその時になつたら分りますよ。

（女中のすゞが餅を入れた籠を持つて來る。）

すゞ　奧樣、これどういたしませう。

俊子　それ、何。

すゞ　餅でございます。おひでさんのお父つあんが持つて來たんでございます。

保子　あ、さう。併し生ぢや惡くなつてしまふね。
俊子　燒いておきませうか。お母さま。
保子　さうしておいてくれるといゝね。
俊子　ぢや直ぐ燒いときますわ。
保子　わたくしちよつと婦人會へ行つて來ますからね。相談會があるといひますから。
俊子　あ、さうですか。行つていらつしやい。
（保子去る。女中送つて行く。間もなく女中は手紙を持つて來る。）
すゞ　お手紙が參りました。
俊子　私に？
すゞ　はい。
俊子　（手紙を讀みながら）おまへ鮒を串にさして頂戴。私が燒きますから。
すゞ　畏りました。
（女中は鮒を串にさす。俊子は手紙を讀み終つたが、それを無雜作に卷きをさめて魚を燒き始める。しばらくして昌一が這入つて來る。）
俊子　（昌一を見て）あら、兄さん。
昌一　休みが續いたからちよつと歸つて來たよ。
俊子　さうですか。ぢやすつかり行違ひになつてしまつたのね。

昌一　どうしたんだ。
俊子　いゝえ、何でもないんですけれど、寒くなつたからつて昨日お襦袢や何か小包で出したのよ。
昌一　さうか。
俊子　お母さまはお忙しいんですけれど、兄さんの物だからつて、ご自分でせつせとお縫ひになつたのよ。
昌一　ふむ。お母さんは？
俊子　婦人會へいらつしやつたわ。
昌一　相變らずだね。僕は腹が空つてゐるんだけれど直ぐご飯にして貰へないかね。
俊子　ぢやすゞ、おまへ直ぐに支度をおし。
すゞ　はい。（去る）
俊子　兄さん、手が汚れてお氣の毒ですけれど、その籠の中に殘つてゐる魚を串にさして頂戴な。
昌一　僕がか。
俊子　もう少しつきりないぢやありませんか。二串か三串なんですから鳥渡さして下さいな。
昌一　二串でも三串でも僕はいやだ。此頃頭が惡いんだからそんなことをやると猶惡くなる。
俊子　兄さんは魚に食付かれるとでも思つてゐるの。隨分弱蟲ね。
昌一　うん、己は弱蟲だ。おまへのやうに殘酷ぢやないか

らね。
俊子　まあ隨分だわ。私いつ殘酷なことをして。
昌一　それ、今やつてゐるぢやないか。まだピク〳〵動いてゐる魚を串ざしにして其上火炙りにするなんて、これより虐い事はないだらう。まあこの煙を見ろ。ひどい臭ひだ。
俊子　だつてかうして燒いて置かなかつたら魚は腐つてしまふぢやありませんか。
昌一　そりやさうだ。おまへのいふことは間違つてゐない。その方が實利的だからな。
俊子　また女の惡口をいふおつもり。
昌一　女つてものは實用のためにはどんな事もやつゝけるんだから實際怖しいよ。
俊子　兄さんは私の顏さへ見れば女の攻撃をなさるのね。そんなに女を目の敵にしてゐるんなら、あんなことをなさらなければいゝのに。
昌一　なに。
俊子　おひでとあんなことをかしいぢやありませんか。
昌一　ほら魚が焦げるぢやないか。人のあらを探す前にまづ自分の方を見ろ。
俊子　だつて兄さん串にさしてくれないんですもの、さしたり燒いたり兩方やるのは隨分骨だわ。

昌一　それはさうだらう。
俊子　まあ、それはさうだらうなんて澄ましてゐるのは隨分だわ。ちよつと兄さん、串にさすことはようござんすから、その代り手紙の上封を書いて頂戴。
昌一　よく色んなことをいふな。己は頭が惡いんだからそんな雜務は勘辨してくれ。おまへ自分で書けるぢやないか。
俊子　だつて拙いんですもの。それに軍艦ぢや女から手紙が來ると啣らせられるんですつて。だから兄さん、上封だけ書いて下さいな。
昌一　變なところへ理窟をつけるな。堀のところへ出すのかい。
俊子　え、先刻手紙が來たのよ。私返事を出さなくつちやならないんだわ。
昌一　何と書くんだい。
俊子　横須賀鎭守府港内朝日艦士官室ニテ堀弘太郎殿でいいわ。
昌一　（書く）これでいゝだらう。
俊子　有難う。あら兄さん鎭守府のじゆの字が違つてゐるわ。守つて字を書くのよ。それから堀も違つてるわ。三水ぢやない土偏よ。
昌一　うん、さうだ〳〵。僕もをかしいと思つた。併し堀

は水に緣があるからな。
（書きかへる。）

俊子　だつて土を掘つてこしらへるんですもの。土偏にきまつてゐるわ。私の苗字を間違へるなんて隨分ひどいわ。兄さん、本當に頭がどうかなすつたの。

昌一　うん、どうも此頃變なんだ。（奥へ向つて）おい、ひで水を一杯くれないか。

俊子　もうひではゐないんですよ。水ならこゝにありますわ。（茶簞笥から水さしとコップを出す）

昌一　ゐない。どうしたんだ。

俊子　どうしたんだつて。

昌一　ひでを出してしまつたのか。

俊子　いゝえ、もつとお目出たいことなのよ。お嫁に行くの。

昌一　嫁に？　何故嫁になんかやるんだ。

俊子　だつて女ですものお嫁に行つたつていゝぢやありませんか。

昌一　それなら何故僕に相談をしないのだ。

俊子　女中のことなんか兄さんに相談する必要はないぢやありませんか。第一おひでのことは兄さんに相談は出來ませんわ。

昌一　僕の反對を怖れてこつそりやつてしまつたのだな。よく小細工をやる女達だ。襦袢でもこしらへる樣に切つたり縫つたりおまへたちは雜作もなくやつてしまふのだ。

俊子　兄さんは不服なんですか。

昌一　成程かうして見ると、女が朝から晩まで離したことのない庖丁と針と鋏とは、言はず語らずのうちに女つてものゝ本性を現はしてゐるんだ。

俊子　女の惡口は何といつたつてかまひませんけれど、かうしなかつたら兄さんの名譽にかゝはるぢやありませんか。

昌一　（默つて水をがぶ〳〵飮む）

俊子　あら兄さん、そんなに水を飮んぢや毒ですわ。

昌一　餘計なお世話だ。ひとのことには立入つて貰ふまい。

俊子　だつて毒ぢやありませんか。

昌一　女は髮の毛は長いが、智慧は足りないんだよ。
（手荒く障子を開けて奥へ行く。）

俊子　まあ兄さんてばぷん〳〵怒つてゐるのね。
（俊子は魚を燒き終へたのでそこらを片附けてゐる。保子が表から歸つて來る。）

俊子　お歸んなさい。大層お早いんですこと。

保子　私口惜しくつて〳〵爲方がない。

俊子　どうなすつたの、お母さま。

保子　幹事會があるといふから行つて見たら、相談も何もあつたものぢやない。伊村さんと大崎さんの奥さんが勝手に切り廻して、私なんかの言葉は少しも受けつけないんですよ。
俊子　まあ、隨分なんですわね。お母さんを差しおいて。
保子　そりや伊村さんも大崎さんも近頃は旦那さまの羽振りがいゝから何だけれど、あの會は元々私が起したんですからね。お父さまが知事の時代に。それだのに私のいふ事は一つも用ゐないなんてあんまりの仕打だから歸つて來てしまつたの。ほんたうにゐる人がゐないと情けないものね。それにつけても早く昌一が立派になつてくれなくつちや。
俊子　あの兄さん、歸つて來てゐますよ。
保子　え、歸つて來た。いつ。
俊子　つい先刻よ。今奥へ行きました。何だか頭の工合がよくないとかいつてましたわ。
保子　それぢや醫者を迎ひにやらなくつ ちや いけないだらう。
俊子　え、さうですね。
昌一　（ぼんやり出て來る）　どうしても眠れない。
保子　どうおしだい。頭痛がするつて醫者に見せなくつてもいゝのかい。
昌一　なあにそれ程ではないんです。たゞ頭がぼうつとするだけなんです。
保子　矢張り時候のせゐですよ。でも醫者にかゝる程でないのは何よりです。出來ることなら達馬になんか診て貰はない方がようございますからね、いつ來てもいやなことばかりいつて。
昌一　（少しきつとなつて）　お母さん。ひでは嫁に行くんですか。
保子　（輕く）　あゝ、いゝ驪梅にね、嫁の口があつたもんだから。
昌一　それはやめる訣にはいかないんですか。
保子　そんな訣には行きませんとも。もうすつかりきまつてしまつたんですから。
昌一　併しそれは僕不承知です。
保子　おまへは何にもいふことはないぢやありませんか。女中のことなんかに男は口を出すもんぢやありません。
昌一　いや、僕は默つてはゐられません。
俊子　（たしなめるやうに）　兄さん。
昌一　いゝからおまへは引込んでおゐで。お母さん、僕はひでを愛してゐるのです。だからこの話は中止して下さい。
保子　昌一、おまへは由比家の相續人なんですよ。少し考

へてものをおいひなさい。
昌一　勿論僕はでたらめをいつてゐるんぢやありません。眞面目に考へていつてゐるんです。
保子　それならあなたは默つていらつしやい。お母さんは惡い樣にはしませんから。
昌一　併し自分の關係した女を平氣で他人に押付けてしまふやうなことは僕には出來ません。
保子　押付けるのぢやありません。先方が貰ひたいといひ、こちらが嫁きたいといふから成立つた話なんです。
昌一　そりや先方が何にも知らないからです。若し本當の事を知つたら貰ふとはいはない筈です。それとも一切のことを向うに話してあるのですか。
保子　そんなことが話せるものですか。おまへの名にもかかはるぢやありませんか。
昌一　併し若し先方がこの話を後で知つたらどうします。そしてその爲めにおひでが離婚されるやうなことがあつたらどうします。
保子　そんな事は絶對にありません。此事を知つてるものは外に誰もないんですから。
昌一　そんなことをいつたつて惡いことはいつ露はれるか知れません。一體ひでを貰はうと云ふ人は誰なんです。
保子　（無言）
昌一　誰だかいつたつていゝでせう。
保子　（思ひ切つて）それは竹內さんです。
昌一　なに、竹內君ですつて。
保子　おまへも知つてゐる通り、竹內さんはお嫁を探しに歸つて來たんですが、當にして來た話は見ると聞くとは大違ひで、詰り間にはいつた人のぺてんにかゝつてしまつたのです。それからあれのこれのと隨分探したやうですが、中々思ふ樣な人が見つからないのです。そりやさうですよ。一月か二月の間に見附けて歸らうつていふんですからね。
俊子　その內に日はなくなつて來るでせう。さうすると爲方がないから、どんなものでもいゝ、貰はずには歸れないつて、さう竹內さんは仰しやるんですつて。
保子　あんまりお氣の毒ですから、それでひでの話をして上げたのです。さうしたら非常に喜んでね……
昌一　併し竹內に世話してやるんなら、何も鷄買の娘なんか世話してやらなくてももつと適當な女があるでせう。
保子　おまへにそれがお分りかい。それがお分りならひでのことなんか兎や角いふことはないぢやありませんか。
昌一　何ですつて。
保子　竹內さんはメキシコなんかへ行つて働いてゐる人です。ひでがその奧さんにさへ不釣合ならおまへにはもつ

と不釣合だといふことが分りませんか。

昌一　いゝえ、それは違ひます。僕は‥‥

保子　おまへはひでとは關係があつたからといふのですか。併し一旦さういふ事になつたものは必ず一しよにならなければならないと限つたものではないでせう。第一おまへのやうな身分のものが女中と結婚することは本當に幸福なことでせうか。さういふ夫婦がいつ迄も長續きするものかどうか、おまへだつて大抵分る筈です。今の內は若いからそんな熱に浮かされたやうなことをいつてゐますが‥‥

昌一　いゝえ、僕は熱に浮かされていつてゐるんぢやありません。

保子　それなら猶更のことです。まあ、お聽きなさい。ようございますか。おまへのお父さまは名知事として歌はれた人ですよ。それだのにその息子は家の女中に手をつけたなぞといふことが知れたら、世間は何といふでせう。おまへも子供ではなし、少しは家のことも考へて下さい。

昌一　（無言）

保子　それでなくつてさへ、お父さまのゐない後は兎角世間から輕蔑まれ勝ちなのに、今大學を卒業するといふ先にこんな輕はずみなことをされては‥‥

昌一　（無言）

保子　いゝえ、私は決しておまへのことを怒つてゐるんぢやありませんよ。あのやうなことは若い時にはあり勝ちのことです。併しそれが誤りだと知つたら直ぐ改めてくれなくつては困るぢやありませんか。

昌一　僕が惡うございました。申訣がありません。併し一旦關係した以上男として責任を持たない訣にはいきません。

俊子　兄さん、あなたお母さまの心のなかも察して上げなくつちやお氣の毒よ。この事ぢやお母さまはどんなにご心配なすつたか知れませんわ。兄さんにはこんなに心配してゐることがお分りにならないの。若しか此不名譽なことが世間に知れてご覽なさい。兄さん一人の不名譽ぢやありませんよ。お母さんはもう交際社會に出られなくなつてしまひますわ。

昌一　（無言）

俊子　ねえ、兄さん、あなたはこれから爲さらなくつちやならないことが澤山におありなんでせう。それだのに女中風情のことにかゝはり合つてゐてどうなさるの。お母さまにしたつて、私にしたつて兄さんにはお父さま以上に偉くなつて戴きたいと、たゞそれ許り思つてゐるんぢやありませんか。頼りにするのは兄さん一人なんですから、どうか本氣になつて下さいよ、ねえ兄さん。ご覽な

さい。お母さまは泣いていらつしやいますわ。

昌一　濟まない。僕が惡かつたのだ。併し自分の名譽を穢さない爲めに、自分の愛した女を平氣で他人に押付けてしまふなんて、そんな殘酷なことは忍べないよ。

俊子　殘酷なんてことはないぢやありませんか。穢多や非人のところに嫁くのではなし兄さんのお友達のところに嫁くんぢやありませんか。

昌一　だから猶いけないのだ。自分の罪を隱さうとして友人を手段に使ふなんて、最も卑劣なことぢやないか。

保子　ではおまへはどうしようといふのです。

昌一　（すつと立上り）自分のことは自分で解決をつけます。（出て行かうとする）

保子　（昌一を引留めて）おまへは何處へ行かうといふんです。

俊子　兄さん、竹内さんへいらつしやるんですか。

昌一　さうだ。さうして竹内君に一切を打明けて解決をつけるのだ。

保子　おまへはそんなに迄して自分の恥がさらけ出したいのですか。

昌一　勿論好んでやる訣ぢやありません。併し事がこゝまで運んでゐる以上爲方がないぢやありませんか。

保子　けれどおまへがそれを打ち明けたからといつて誰も得をするものはないんですよ。家の不名譽はいふ迄もなく、女は傷ものになるし、竹内さんは嫁を貰へずにすごすご歸るより外はないんですからね。つまり誰のためにも一番愚かなことなんですよ。

昌一　それはさうかもしれません。けれども此の儘知らないふりをして、暗から暗に葬るやうなことは私には出來ません。

保子　（少し冷やかに）おまへはそんなに意氣込んでゐるけれど、ひでの方ではおまへをそんなに思つてゐるかどうか分らないぢやありませんか。

昌一　そんなことはありません。

保子　そんなら嫁には行かない筈です。

昌一　それはお母さんが嫁けといつたからです。あゝいふ女には自己を主張することなぞは出來ませんからね。少し恩になつた主人にさういはれりや直ぐさうなつてしまひますよ。

保子　私はそんな事はいひません。

昌一　いゝえ、無理に押付けたのに相違ありません。それでなくつてひでが行く筈があるもんですか。こんな風にしちやひでが全く可哀さうです。

俊子　それぢや兄さんは、お母さまをお可哀さうだとはお思ひにならないんですか。

昌一　いゝや、それだから僕はこれから出掛けて行つて、誰にも適當な處置をとつて來るといふのだ。

（行かうとする。）

保子　まあお待ちなさい。ぢやおまへはどうしても竹内さんへ行くんですか。

昌一　さうです。卑劣なことをして僕は友人を失ひたくありませんからね。大丈夫ですよ。竹内君は僕の友人です。僕の私行を言ひ觸らして歩くやうな男ぢやありません。

保子　ではかうしたらどうです。

昌一　どうするんです。

保子　竹内さんにうちへ來て戴いて、その上でおまへから話をなさい。さういふ話を他人のうちへ行つてして、うつかり誰かに聞かれでもすると困りますからね。

昌一　え、それなら竹内君にこつちへ來て貰つてもようございます。どこでしたつて、ほんたうの話をしさへすればいゝんですから。さうして一切の話をした上で、それでも竹内君は貰ふといひ、ひでも嫁くといふんなら、僕は二人を握手さしてやります。そしてこの事については僕は以後何もいひますまい。併しこつそりやつてしまふやうなことは人間として最も恥づべき事だと思ひます。

保子　おまへのいふことはよく分りました。では來て戴くやうに私から話をしませう。

昌一　ではお母さんからいつて戴きます。併し日が迫つてゐる事ですから急いで下さい。

保子　無論早くしますとも。話がかういふ風になつたのですから。

（女中のすゞが這入つて來る。）

すゞ　あの、ご飯のお支度が出來ました。

昌一　いや、飯はいらない。二階へ床をとつてくれ。

――幕――

第三幕

由比家の應接間。

前幕の翌日。午後。

昌一はひとり默然としてソーフアに腰をかけてゐる。外には誰もゐない。

やがて俊子がはいつて來る。

俊子　あら兄さん。こゝにゐたんですか。頭痛がなさるんぢやありませんか。起きていらしつてもいゝの。

昌一　（口が重さうにうつ向いたまゝでゐる）

俊子　それから今電話をかけたら、達馬さん、直ぐいらつしやいますつて。

昌一　いや、醫者には及ばないよ。

俊子　だつてお母さんが電話をかけろつて、仰しやつて行

つたんですもの。
昌一　お母さんはまだ竹內から歸つて來ないのかい。
俊子　え。
昌一　今日も留守なんぢやあるまいな。
俊子　そんなことはないと思ひますわ。
昌一　どうしてかう手間がとれるんだらうね。ちよつと竹內君に來て貰ひさへすりやいゝことなんだからね。
俊子　いろ〳〵あちらにも都合がおありになるんでせう。
昌一　併し明日結婚だといふのにさうぐづ〳〵してゐては間に合はなくなつてしまふよ。あんまり面倒のやうなら僕が出掛けて行つた方が早いんだがね。
俊子　だつて兄さんはお體が惡いんぢやありませんか。それに外の話と違ふんですもの、來ていたゞいた方がようございますわ。
昌一　お母さんがたつてさういふから來てもらふことにしたけれども、僕は少し不安になつて來たんだ。
俊子　だつてお母さんが行つてゐるんですから惡いやうに計らふ氣遣ひはないぢやありませんか。兄さんのことつていふと、お母さんはそりや熱心なんですもの。
昌一　（冷かに）いや、その熱心が恐いんだ。
俊子　兄さん、そんなことを仰しやつちや勿體ないわ。お母さんは兄さんのことをどんなにおもつてゐるかしれません。
昌一　そりやよく分つてゐる。併しそれだけにまた不安も大きいんだ。
俊子　どうして。
昌一　女親つてものは自分の子の爲にはどんなことでもやりかねないからね。（間）だが、おまへも間もなく母親になるんだね。
俊子　（寂しく）え。
昌一　おや、おまへ泣いてゐるね。
俊子　（すゝり泣きながら）いゝえ。
昌一　これは僕が惡かつた。
俊子　あたしお腹にあるせゐか、兄さんの仰しやることも、お母さんのお心持もどちらも無理がないと思ひますわ。今のあたしには兩方ともよく分りますの。
昌一　そりやさうだね。
（女中が這入つて來る。）
女中　あの若奧樣。
俊子　何か用？
女中　はい、ちよつと。
俊子　今行きます。ぢや兄さん、二階でやすんでいらつしやいな。もう直き達馬さんが見えると思ひますから。
（俊子と女中去る。）

（昌一は獨り默然として居る。）

（暫くして女中に案内されて余田が這入つて來る。）

余田　やあ。暫く。いゝ天氣だね。

昌一　（默つたまゝ挨拶する）

余田　どうしたい。頭痛がするさうだね。どれ一つ。（昌一の傍に掛けて脈を見る）ふん、少し脈が多いね。痛むのは後頭部かね。

昌一　（無言）

余田　食事はどうだい。

昌一　（無言）

余田　通じは？

昌一　默つて診察は出來ないものかね。

余田　それなら獸醫を頼むんだね。獸醫なら決して患者に容體は訊ねやしないから。

昌一　僕を犬か馬と思つて診てくれたらいゝぢやないか。

余田　君は何か不平があるね。

昌一　犬や馬に不平はないさ。

余田　僕は醫者としていふが、そんなつまらぬものはみんな下痢さしてしまつた方がいゝね。何なら後で下劑を寄こすから飲み給へ。ハヽヽ。ちよつと胸を見せて貰ひたいね。

（聽診器で胸を見る。）

昌一　君はいつか生きる事は殘酷の事だつていつたね。

余田　何だつて急にそんなことを聞くんだい。

昌一　だが、君は本當にさう思つてゐるのか。

余田　そりや思つてゐる。實際人間は萬物を殺す機械だからね。生きてゐる限り至るところで殺戮を行つてゐるのだ。

昌一　ぢや實際人間をそんな殘酷なものと思つてゐるのか。

余田　思ひたくはないが止むを得ないよ。事實だから。

昌一　併し君もその人間なんだよ。

余田　さうだ。

昌一　それで君苦しくはないか。

余田　苦しいつたつて爲方がないぢやないか。

昌一　だがそんな風に考へてゐながら、よく生きてゐられるね。

余田　うん、この通りぴん〳〵してゐる。

昌一　君の殘酷は口ばかりだね。

余田　ぴん〳〵してゐるからかい。けれども殘酷だから殘酷だからといつて、飯も食はず爲事もしないでゐたつて爲方がないぢやないか。

昌一　ぢや生きる爲には犧牲は止むを得ないといふのか。

余田　いや、犧牲が止むを得ないんぢやない。そんなに犧

牲を拂はしてゐるんだから、人間はほんたうに生きなくつちやならないといふんだ。

昌一　本當に生きる？　本當に生きるつてどうすればいゝのだ。誰だつてみんな生きようとしてゐるんぢやないか。それにも係はらず生きようとすればどうしても他人を虐げることになつてしまふのだ。自分の生きることが何故他人の生きることの妨げになるんだ。なぜ誰もが生きて行くことが出來ないのだ。

余田　だから誰もがさういふ生活を望んでゐるのだ。

昌一　望んでゐたつて、永久に與へられることはないぢやないか。人間はどういふ意味においても食はなきや生きてゐられないのだ。それにも係はらず食ふことは殘忍だといふ。それなら一體どうすればいゝのだ。食はずにゐろといふのか。殺生しろといふのか。殺生しながら正しく生きて行けなんて、こんな矛盾したことがあるか。こんな馬鹿げた不合理を何故神は平氣でいつ迄も續けておくのだ。

余田　だが生きる有難味はそこにあるんぢやないか。なるほど生きることは君のいふ通り非常な矛盾だ。併しその矛盾が矛盾のまゝに意義があるんだから實に面白いぢやないか。飯をいくら食つたつて生き方一つで食つたことが殘酷にもなれば、食はれたものが成佛もするんだ。君、耶蘇にしたつてお釋迦樣にしたつて飯は矢張り食つてゐたんだからね。それが殺生になるかならないかは千番に一番の兼合ひさ。僕は一念こゝに至ると手を合せて拜みたくなるね。

昌一　君は年中矛盾したことばかりいつてゐる。

余田　どうして。

昌一　いつか君は感謝は利己的だといつて、母や竹内をやつゝけたことがあるぢやないか。それでゐながら君は感謝をするのかい。

余田　するね。

昌一　だから矛盾してゐるといふんだ。

余田　さう見えるかね。

昌一　無論さう見えるぢやないか。

余田　さうかね。だが君はひどく興奮し過ぎてゐるよ。ちよつと熱をとつて見よう。（檢温器を昌一に渡す）

昌一　どなた？　竹内君か。

（さういひながら入口のところに行つて扉を開ける。）

（鷄買の丈助が女中のすゝに案内されて這入つて來る。昌一は氣が拔けたやうに傍の椅子に掛けて、檢温器を腋の下に入れる。）

（丈助は大分醉つてゐるらしいが昌一の前だけにそれを隱さうと努めてゐる。そして恭しく切口上で禮を述

べる。）
丈助　此度は一方ならぬ御世話に相成りまして。
すゞ　あの、この方はおひでさんのお父つあんなのでございますが、若旦那さまにお目にかゝつて是非お禮が申上げたいつて、さう申しますものですから。
昌一　あ、さうですか。（とはいつたけれども何となく心苦しさうな面もちで、丈助から顏を反ける）
丈助　どうも娘のことにつきましてはお手厚いご心配を戴きまして何ともお禮の申しやうがございません。
余田　（昌一に）もう君いゝだらう。
（昌一默つて檢温器を腋の下から出して余田に渡す。）
余田　（檢温器を見ながら）ふむ、少し熱があるね。
昌一　さうか。
余田　これでは安靜にして寢てゐなくちやいけないね。
（女中のすゞが再び手洗の水を持つて這入つて來る。）
（そして余田に。）
すゞ　あの先生。
余田　僕ですか。
すゞ　はい。おたく樣からたゞいまお電話で、直ぐお歸り下さいますやうにつてお言傳でございます。
余田　あ、さうですか。それは有難う。（昌一に）では僕は失禮する。それから粉藥と水藥を寄こすから粉藥の方は直ぐ飲んでくれ給へ。ぢやお大事に。
（余田は歸る。女中も去る。）
丈助　私もお暇をしませう。どうもとんだお邪魔をいたしました。お蔭樣で娘も滯りなく婚禮を濟ませましたから、鳥渡ご挨拶に上りましたやうな次第で。ではご免下さい。
（歸りかける。）
昌一　少し待つて下さい。あなた今何といひました。
丈助　（少しうろたへながら）は、はい。何かお氣に障りましたか。どうも不調法をいたしまして・・・
昌一　（せきこんで）いゝえ、そんなことぢやないんです。あなた今婚禮とかいひましたね。
丈助　は、はい。
昌一　誰が結婚したんです。
丈助　誰がつて若旦那さま、手前の娘でございます。
昌一　いつ結婚したんですつて。
丈助　今日でございます。
昌一　おまへさん、醉つてゐやしませんか。
丈助　はい。申訣けございません。實は少々ばかり。
昌一　あなたの娘さんが結婚するのは明日の筈でせう。飲み過ぎたので日を間違へやしませんか。
丈助　いゝえ、間違へやしません。いくら醉ばらひましても娘の嫁入の日を間違へるやうなことはございませ

ん。第一この醉ばらひましたのもその婚禮があつたからでございます。娘が人になるんだと思ひますとつい嬉しかつたものでございますから、たうとう飮み過ぎてしまひまして、まことにどうも申訣けがございません。
昌一　併し結婚は明日の筈ぢやありませんか。
丈助　はじめはさういふ話でございましたが、昨日急に模樣が變りましたんで、へえ。善は急げつてことがございますから、私もその方がよからうと思ひましてさういたしたんですが……
（昌一は丈助がくど〳〵喋つてゐるのに耳を貸さず、あわたゞしく呼鈴の鈕を押す。）
（女中が這入つて來る。）
すゞ　お召しでございますか。
昌一　お母さんはゐないか。
すゞ　あの、まだお歸り遊ばしません。
昌一　それぢや俊子でもいゝ。直ぐに呼んでくれ。
すゞ　はい。（退く）
昌一　式はもう濟んだのですか。
丈助　はい、ついたつた今濟みました。
昌一　それぢや竹内君はうちにゐますね。
丈助　いゝえ、もうをらないだらうと思ひます。
昌一　どうして。
丈助　新婚旅行に出掛けますんで、へえ。實は送つてやらうと思ひましたら新婚旅行は二人だけのものだといひますんで、送らないでこちら樣へ上りましたやうな訣でございます。
昌一　何時の汽車か分つてゐますか。
丈助　さうですな。何でも四時いくらかといひました。
昌一　（置時計を見ながら）それならまだ一時間はあるな。
丈助　いゝえ、そんなことはございません。式が濟んだのが三時でございましたから。（置時計を見乍ら）おや、をかしいな。まだ二時だな。それなら私の考へ違ひかしら。どうも今日は少し醉つてをりますものですから、へゝゝゝ。これはとんだ長居をいたしました。ご免下さい。（去る）
（俊子這入つて來る。）
俊子　兄さん、何かご用。
昌一　おまへまたぺてんにかけたね。
俊子　まあ兄さん、いきなり何を仰しやるの。
昌一　そんなにしらばつくれたつて駄目だ。もう何もかも分つてしまつたのだ。
俊子　何が分つてしまつたの、兄さん私には何にも分りはしないわ。
昌一　おまへたちは何故ひでを結婚さしてしまつたのだ。

俊子　結婚ですつて。それは兄さんとご相談の上ぢやありませんか。

昌一　さうさ。あれ程堅く約束しておいたのに僕をたうとう騙してしまつたのだ。

俊子　兄さん、それ本當ですか。

昌一　ぢやおまへも全く知らないことなのか。

俊子　え、少しも知りませんわ。

昌一　ぢやまたお母さんの魂膽なんだな。どうもこんなことになりやしないかと思つてゐたのだ。

俊子　けれど兄さん、お母さまのことを惡く思つちやお氣の毒ですわ。お母さまがさうなすつたのはよく〳〵のことなんでせうからね。

昌一　おい、俥をいつてくれ。

俊子　どこへいらつしやるの。

俊一　どこへ行つたつていゝ。俥を直ぐいつてくれといふのだ。

俊子　だつてお體が惡いぢやありませんか。無理をなすつてどうなさるの。

昌一　いゝから俥をさういはないか。

俊子　だつて兄さん。そんなことをなすつちや。

（二人言ひ合つてゐるところへ保子が這入つて來る。）

保子　まあ二人で何をやつてゐるの。

俊子　あ、お母さま。

保子　（昌一に）おまへ達馬に診て貰ひましたか。工合はどんな風てしな。

昌一　（つか〳〵と母の近くへ歩み寄つて）お母さん。

（とはいつたけれど暫くは後の言葉が出ない。）

保子　（やさしく）おまへどうしたんです。大層顔の色が惡いやうですね。

昌一　それよりもお母さんこそどうなすつたのです。何故僕を出し拔いて竹內とひでとをこそつり結婚させてしまつたのです。

保子　おまへ體が惡いといふのに、そんなに興奮してはいけないぢやありませんか。

昌一　そんなことをいつて話をそらさないで下さい。僕はお母さんが怨みです。何故約束通り竹內君に會せてくれなかつたのです。

保子　それにはいろ〳〵訣があるのですけれど、今日はおまへは大層氣が立つてゐるやうですから、あとでゆつくり話しませう。

昌一　いゝえ、ゆつくりだなんていつてはゐられません。今直ぐに伺ひます。

保子　そんなことをいつたつて、おまへ困るぢやありませんか。私のやつたことが惡いのなら惡いて、お母さんが

あやまりますから、どうか氣を靜めて下さい。おまへ今日は熱があるんでせう。
昌一　（嚴に）お母さん、このことは重大なことですよ。僕一人の問題ぢやありません。何人もの運命に關することです。どうか眞面目に話をして下さい。
保子　（落着いて）ですから私は誰にも一番いゝと思ふ方法をとつたのです。
昌一　ではあなたはかういふ事をなすつても疚しいとはお思ひにならないのですか。
保子　外に方法がないんですもの爲方がないぢやありませんか。
昌一　いゝえ、ないことはありません。もつと正當な方法があります。
保子　おまへは何もかも話を打明けてしまはうといふのでせう。そんなことをしたら、折角纒まつた話もみんな壞れてしまふではありませんか。
昌一　壞れたら壞れたでいゝではありませんか。もと〳〵押付けようといふのが無理な話なんです。
保子　おまへはそれでもいゝかもしれませんが、お母さんには今更になつて急に壞すやうなことは出來ません。自分で勸めておきながら。
昌一　だから僕がいつて話をして來るといふのです。
保子　昌一、おまへには私の心が分らないんですか。お母さんは何よりもおまへの不始末を人には知られたくないんです。
昌一　そりやお母さんの心持ちはよく分つてゐます。分つてゐる位ぢやありません。心から感謝してゐます。
保子　それならもう何もいふ事はないぢやありませんか。
昌一　併しお母さん、僕の不始末を隱すためなら、何もこんな陰險なことをして二人を結婚させることはないぢやありませんか。
保子　おまへは陰險の何のといひますけれど、二人は喜んで一しよになつたのですよ。おまへさへ何にもいはなかつたら、二人は永久に仕合せなんです。おまへが竹内さんを本當に友達と思ふなら、このまゝ默つてゐることが二人のためではありませんか。そしてそれはまたおまへにとつても本當に仕合せなことなんですよ。
昌一　僕には少しも幸福ぢやありません。
保子　併しおまへのいふやうにしたつて何のいゝこともないぢやありませんか。
昌一　では知らん振りをして何處までも友達に女を押付けてしまへといふんですか。
保子　おまへは直ぐ角立つたもののいひをするんですね。
昌一　あゝ、これが親の愛だらうか。僕はこんな人を母親

に持ちたくありません。

俊子　まあ、兄さん、何といふことを。

保子　私はおまへのためを思ふばかりに、こんなに、こんなに苦勞をしてゐるのに、そのおまへにそんなことをいはれては‥‥（泣く）

俊子　兄さん、いくら何でも言葉は謹まなくつてはいけませんわ。それに此頃のお母さんのお心遣ひといつては一通りではないんですよ。そりや兄さんとしてはいろ〳〵仰しやりたいこともおありでせうけれど、この上ご心配をおかけしては、お母さんがあんまり可哀さうですわ。

保子　俊子はかうやつて歸つて來てゐます。お產を目の前にひかへてゐるといふのに、そのさ中にもつてつておまへは何うしようといふのです。少しはお母さんの心にもなつて下さい。

昌一　いや、今の言葉は僕がいひ過ぎました。

俊子　ぢや氣を直して下さるのね。兄さん。

昌一　（無言）

俊子　兎に角お母さんとやり合ふことだけは止めて下さいな。あたし傍にゐてはら〳〵してしまひますもの。

（昌一はぢつと默つてゐたがやがて無言の儘立上る。）

俊子　あら兄さん、何處へいらつしやるの。

保子　竹内さんへ行くんですか。竹内さんならもうゐやしませんよ。

昌一　四時の汽車で立つといふことだからまだ時間は十分あります。

俊子　もう兄さん、四時はさつき打つてよ。

昌一　（置時計を指しながら）　そんなことがあるものか。これをご覽。

保子　その時計は遲れてゐます。（帶の間から懷中時計を出して見ながら）今四時十分ですから、竹内さん夫婦の乘つた汽車はもう發車した頃です。

昌一　ぢや誰か時計を狂はしておいたのだな。

保子　多分遲れたんでせう。それは兎に角、もう汽車の時間には間に合ひませんし、よし間に合つたところが二人はあゝして一しよになつてしまつたのですから、もう何といつたつて追付かないぢやありませんか。

昌一　あゝ、自分で行けばよかつたんだ。お母さんに任せたばかりに‥‥

（と、汽車の進行して來る響が聞える。三人は思はずそれに耳を傾ける。）

（間。）

（突然昌一は殆ど無意識的につか〳〵と窓のとこへ走つて行く。）

保子　あれは上り列車ですね。二人はあれに乘つてゐるん

ですよ。折角樂しい新婚旅行に旅立つたのですから、何もわざ〳〵いやな話を持つて行つて、二人の氣持を壞はすことはないぢやありませんか。

（昌一は母の言葉には少しも耳を傾けず、窓からぢつと外を眺めてゐる。）

俊子　（母と兄とを氣づかひ乍ら）兄さん窓を閉めませう。風に當るといけませんわ。

（昌一は猶默つたまゝ外を見てゐる。）

（汽車の響が次第に遠退いて行く。）

――幕――

坂崎出羽守（四幕）

人物

德川家康
その孫娘、千姫　豐臣秀頼の室、十九歳。
本多佐渡守正信
本多上野介正純
金地院崇傳
坂崎出羽守成正　石州津和野の城主、二十八、九歳。
家老三宅惣兵衞
家臣松川源六郎
坂崎の近侍數名
同小姓二名
同家臣大勢
南部左門
刑部卿の局
本多平八郎忠刻　勢州桑名の城主、本多忠政の嫡子、二十三、四歳。
茶道二人
本陣の幕僚數名
本陣の使番二名
池田の使番
前田の使番
藤堂の使番
松平の使番
物見の兵
その他軍兵大勢
忠刻の近臣二三名
駿府城内の茶道
同腰元

時代

元和元年五月より翌年九月まで

第一幕

茶臼山に於ける家康の本陣。
三方に竹矢來が結つてあつて、それに葵の紋の幔幕が張り渡されてある。上手に家康の座所があるが、幔幕が二重に張つてあるので見物席からは見えない。その近くに旗や馬印などが立つてゐる。舞臺中央竹矢來のほとりに小高い樹木がある。樹上には物見の兵が登

つてゐる。その下のところに鎧櫃を臺にして二三の幕僚が地圖をひろげて何事をか畫策してゐる。

あわたゞしい陣屋内の氣分が凡てに漲つてゐる。砲聲やどよめきの聲が絶間なく聞える。

元和元年五月七日の夕刻。

入口のところに立つて、一人の武者が高らかに法螺を鳴らしてゐる。それと共に幕が上る。

本營の執政、本多上野介正純が二人の使番の騎士に傳令の書狀を渡してゐる。一人の騎士は既に馬に跨つて居り、もう一人の者も亦馬に乘らうとしてゐる。

正純　では、貴殿は直ぐに岡山のご陣所へ。（と一人の騎士にいふ）

騎士一　承知仕る。ご免。

（直ぐに馬で驅け去る。）

正純　（もう一人の騎士に）貴殿は井伊殿に見參の上、この「書附」を直々に、お手渡し下さい。

騎士二　承知いたした。ご免。

（と、續いて馳せ去る。これと殆ど引違ひに表から軍兵一が這入つて來る。そして正純に。）

軍兵一　只今池田武藏守樣からお使者でございます。

正純　なに。武藏殿からお使者！　急いでお通し申せ。

（軍兵一、畏つて退出する。つゞいて池田の使者が導かれて這入つて來る。）

正純　お使ひご苦勞でござる。して武藏守殿のご口上は。

池田の使者　手前がたの人數河を渡り天神橋のほとりまで押出したい結構にございますが、お指圖を仰ぎまゐれと主人からの申附けでございます。

正純　（地圖を案じて）成程。至極のご分別。併し一應大御所樣に申上げますからしばらくお控へ下さい。

（正純は上手の天幕の中に這入つていつたが、また直ぐに出て來て使者に答へる。）

正純　大御所樣からも、お許しが出ました。早速そのお手配をおとり下さい。

池田の使者　承知いたしました。

（使者急いで去る。）

（と、遠くで烈しい砲聲と共に鬨の聲が聞える。）

正純　（きつとなつて物見の兵に向ひ）物見の者、先手の模樣は？

物見の兵　砲煙と人馬の砂煙にさまたげられて、しかとは判じかねますが、味方が勝色でございます。

正純　ではこちらの旗が進み出したか。

物見の兵　はい。越前家のご陣と覺えます。白吹貫に二つ引き輌の馬印がずい／＼敵方の方に押進んでをります。

正純　（地圖を案じながら）して、越前家の進軍の方向は。

物見の兵　仙波口から黒門の方へ雪崩をうつて攻寄せてをります。
正純　なに、仙波口から黒門へ。（地圖から目を離し）眞先かけてをるのは越前家のご陣だけか。
物見の兵　いえ〳〵、南の方に當つて、二蓋傘の上に鳥毛をつけ、中に金の切裂つけたる馬印の突進する樣が、夕日を浴びてきら〳〵とわけても目立つて見えてをります。
正純　うむ、それこそ水野日向守が馬印。さすがは日向殿ぢや。して岡山口の樣子はどうだ。
物見の兵　井伊殿のご陣と覺しく、赤備の一隊が稻荷堂の前面にて敵と烈しくわたりあつてをります。
正純　まだ勝負は決しないか。
物見の兵　はい。勝負の程は……いや〳〵前田筑前守殿の手の者が横合ひから突きかゝりました。敵は狼狽の樣子にて、旗や馬印が右往左往に混亂いたしてをります。あれあれ城方は見るまに城門をさして退き始めました。
正純　では味方は直ぐ追撃に移つたらうな。
物見の兵　岡山口も天王寺口も味方は一齊に攻めかゝりました。中にも先手の一隊はもう三の丸の柵内に亂入した模樣に見受けられます。
正純　めでたい〳〵。なほ油斷なく見張つてをれ。
（軍兵二がはいつて來て正純に。）
軍兵二　佐渡守樣がお越しになりました。
正純　なに、父上が。
（本多佐渡守正信が這入つて來る。）
正純　父上、味方勝利でございますぞ。
正信　うん、この旗色ならば城の落ちるのも間もあるまい。大御所もさぞご滿足に思召さう。時に內々で御意得たい儀があつて急いで參つた。
正純　何かご密談でも。
（正信うなづく。正純、正信を案內して上手の幔幕の中にはいる。）
軍兵三がはいつて來る。そして幕僚に取次ぐ。）
軍兵三　申上げます。只今坂崎出羽守樣がお出でございます。
幕僚一　出羽殿のお使者か。
軍兵三　いえ〳〵、ご自身にお越しでございます。
幕僚一　これへご案內申せ。
軍兵三　はつ。（と畏つて去る）
（坂崎出羽守成正がはいつて來る。）
幕僚一　出羽殿にはようこそ。
幕僚二　直々のご出馬は何か火急のご用事でも。
成正　折入つてお願ひ申したい節あつて推參いたしました。大御所樣にお取次が願ひたい。

幕僚二　畏つてござる。併し只今佐渡殿とご密談中ですから、しばらくお控へ下さい。

成正　承知いたした。

（軍兵、成正に牀几をすゝめる。）

幕僚一　陣中とて粗略の段はお宥し下さい。

成正　それはお互のことでござる。

（軍兵四が急いではいつて來る。）

軍兵四　前田筑前守殿からご急使でございます。

幕僚三　急いでこれへ。

（軍兵四、畏つて退く。まもなく前田の使者入り來る。）

前田の使者　詳しくは「書附」を以て申上げますが、當家の人數黒門口より攻め入り、三の丸を乘取りましたから取あへずお知らせいたします。

幕僚三　いや、それはお手柄。早速大御所樣に申上げるでござらう。お使ひご苦勞でござつた。

前田の使者　ではご免を蒙ります。（去る）

（幕僚三、上手の幔幕の中に這入つて行く。）

成正　（獨ごとのやうに）もう三の丸が落ちたのか。

（軍兵五がまた這入つて來る。）

軍兵五　藤堂和泉守樣からお使者でございます。

幕僚一　なに、和泉守殿から。直樣これへ。

（軍兵五、畏つて退く。引違ひに松平の使者がはいつて來る。）

藤堂の使者　追つけ和泉守罷り出でますが、取あへず「書附」を以てご披露いたします。何卒ご上覽にお供へ下さいますやう。（と書附を差出す）

幕僚一　畏つてござる。（と書附を受取つて奧へはいる）

幕僚四　貴殿はお疲れでござらう。馬を休ませておいでなさい。

藤堂の使者　辱うござる。（次へ去る）

（と、突然樹上の物見の兵が叫ぶ。）

物見の兵　やあ、二の丸もまた落ちました。

成正　（きつとなつて）なに、二の丸も。

物見の兵　攻入つたのは何れの手か定かには分りませぬが、二の丸のあたりから黒煙がもう／＼と立上つてをります。

幕僚二　先手は息もつかせず、ひた押しに押してゐると見える。（幕僚四の手をとらへ）吉田氏愉快でござるな。

幕僚四　かうやす／＼勝つとは思ひませんでしたな。（二人手をとつて嬉ぶ）

（その間に幕僚の一と三が庭に戻る。と、越前家の騎士が幔幕の側近く馬を乘りつけて來る。）

松平の使者　松平三河守の陣所から罷り越しました。

幕僚二　お使者大儀でござる。

（松平の使者は馬から下りると、鞍に結びつけて來た二つの首桶を取つて幕僚に渡す。）

松平の使者　この首級を大御所様の見參にお供へ下さい。

幕僚四　早馬を以てのご披露は大將軍の首級と見えますな。

松平の使者　ご推察の通りでござる。手前の陣中では朝からの手合せに三千六百餘級打取りましたが、この二つは別けても名あるもの故取あへずお目にかける次第でござる。こちらは御宿越前守政友、こちらは眞田左衛門尉幸村の首級でござる。

成正　なに、眞田を討取つたと申しますか。

松平の使者　如何にも。手前方の西尾仁左衛門が討取りました。

幕僚二　大御所様からお訊ねがあるかもしれません。ご同道下さい。

（幕僚二は首桶を抱へて使者と共に奧にはいる。）

幕僚三　昨日は木村長門、薄田隼人、後藤又兵衛が討死いたし、今日はまた名に負ふ眞田、御宿が討たれては城方は最早人なしでございますな。

幕僚一　殊に三の丸、二の丸も陷つた上からは落城は目前でござる。（成正に）出羽守殿、ご同慶の儀でござるな。

成正　某は少しも嬉しくござらぬ。

幕僚三　これは出羽殿のお言葉とも覺えませぬ。味方の勝利が貴殿には喜ばしくないと申されるのか。

成正　されば、今日は某後控へに置かれましたから、明日こそは是非とも先陣を承はり、一働きをと念じをりましたに、越前家を始めとして先手の面々にさう功名をせしめられては某の働くところがなくなつてしまひました。それが殘念でたまりませぬ。

幕僚四　そこもとはいつもながら負けず嫌ひでござるな。

成正　あゝ、腕が呻る。腿の肉がびり／＼する。

幕僚　出羽殿、さうあせることはありますまい。いくさはこれが終りといふではなし、また功名を立てるよい時節もありませう。

成正　あゝ、胸がむかつく、某はこれでお暇いたします。

（不滿さうに立ちかける。）

幕僚三　大御所様にお目通りは？

成正　眞田が死に、二の丸、三の丸が落ちたとあつては、もう先陣の願ひも無用になつた。こゝにゐて他人の手柄顏や、功名話を聞くことは、某には堪へられませぬ。拙者はこのまゝ立歸りますから、大御所様へよろしくお傳へ下さい。

（正成元氣なく歸つて行く。）

（砲聲が殷々として聞える。）

（突然物見の兵が樹から滑り下りる。）

物見の兵　本丸に火がかゝりました。

藩士一　なに、本丸に。

藩士二　おう、あの物凄い煙はどうだ。

藩士四　では、直ぐにご前へ。

藩士三　いや、大御所樣がこちらへお成りでございます。

（家康は本多佐渡父子、金地院崇傳その他を從へて出て來る。）

正純　（心地よさゝうに）あゝ、燃える、燃える。

正信　不落とうたはれた名城も、今日限りに落城ときまりました。一同お喜びを申し上げます。

（並みゐるものみな家康に辭儀をする。家康はしばらく無言のまゝ燃え上る城をぢつて見てゐたが、ふと落涙する。）

正純　大御所樣にはご落涙を！

家康　萬感胸に迫つて思はず涙を落した。

正信　お味方勝利の折柄にご落涙は心得かねます。

家康　ゆるせ。余が惡かつた。併し余も年をとつたの。あの城をぢつと見てゐると、秀頼につかはした孫女のことが氣にかゝり出したのだ。嫁いだ先とは申しながら千姫もあの火の中で果てるのかと思うたら、不憫になつたのだ。

崇傳　（今更のやうに）おゝ、さう申せば千姫君がご城内においでぢや。城のおちぬ先に姫君樣だけお迎へ申さなくつては！

正信　いや、そのご心痛はご無用にございます。

家康　なに氣遣ひないと申すか。

正信　某の手の者を豫て城内に入れておきましたから、追つけ城を拔け出で、姫君をこちらにお伴ひ申すでございませう。

崇傳　いつもながら佐渡殿は何事にもぬかりがございませんな。

（軍兵六が這入つて來る。）

軍兵六　佐渡守樣に申上げます。南部左門と申すもの、お目通りを願ひをります。

正信　おゝ、それこそ城内に入れておいた忍びの者。直ちにこれへ。

軍兵六　はつ。（と去つて去る）

（南部左門が這入つて來る。）

正信　左門、首尾よういつたか。

左門　殿、殘念にございます。

正信　なに、では御簾中をお伴ない申さないのか。

左門　申訣けがございませぬ。實はお言附けの通り刑部卿

の局と力を合はせてお落し申さうと謀りましたが、關東方の人質を逃してはならぬと淀殿が少しもお側を離れませんので、何とも手の下しやうがございませんでした。

家康　その模様では落城のまぎはには、余を怨む餘り必ず姫をさいなむであらう。

正純　そのやうなことがあつては一大事ぢや。

崇傳　直ちに姫君をお救ひに行く方はありませぬか。今の內ならばまだ間に合はぬことはございますまい。

家康　姫を伴ひ參つた者には重い恩賞をとらせるぞ。

正信　左門、その方いま一度城中にとつてかへせ。

左門　は、はゝ。(といふが臂込みの樣子)

(と、大いなる爆聲つゞけざまに聞える。)

幕僚一　あゝ、天守に火の手が！

崇傳　こりや寸刻も猶豫がなりませぬ。あゝ、誰か城中に飛入る勇士はありませぬか。

正純　全軍に觸れを出しませうか。

左門　併し何を申すもあの猛火では。

(その時幔幕の蔭から突然坂崎成正が走り出る。)

成正　その使ひは何卒某に仰せつけ下さい。

幕僚三　あ、出羽守殿？　まだそこにおゐでゞござつたのか。

成正　いや、落城のお喜びを言上する爲め、途中からとつて返しました。

正純　して、只今の話はお聞きでござるか。

成正　あらましお次で伺ひました。

正信　では、貴殿はあの猛火を冒して城內からご簾中をお救ひ出し申しますか。

成正　某、生命のある限りは屹度お伴ひ申します。

家康　うむ、その方に申しつける。早く行け。恩賞は望みにまかせる。

成正　はつ。(とお受けして直ぐ立上る)

家康　いや、待て。

成正　はつ。

家康　その方はまだ獨身であつたの。

成正　はい。

家康　見事その方が助け出したら、姫はその方の妻に取らせるぞ。

成正　有難う存じます。

(と、飛鳥のやうに駈け出して行く。一同あとを見送る。)

――幕――

第二幕

桑名から宮へ渡る船の中、舞臺一面船の甲板。船な

艫の方から見た形で、舞臺にあるのは前半身だけである。

中央に大きな帆柱がある。それに風を孕んだ、眞白い、大きな帆が殆ど舞臺を中斷するほど一杯に張られてゐる。その爲めに、はじめは船や、舳のそばに立つてゐるご座の屋形はまるで見えない。

兩側の船べりには間をおいて葵の紋を染拔いた幔幕が張つてある。帆の前側とうしろに船底へ通ずる昇降口がある。船の外はすべて海。

同じ年の秋。成正は船べりの欄に倚つてうつとりと海を見てゐる。顳顬にかなり大きな火傷の跡がある其側に大阪陣で一眼を失つた松川源六郎が跪いてゐる。船の上には人影が見えない。たゞ千鳥の鳴く聲が聞えるだけである。

成正　海の眺めはまた格別だな。

源六郎　ひろ〲としてよい心持でございます。

成正　向うに霞んで見えるのはあれは何處だ。

源六郎　さやうでございます。何處に當りますかな。どうも手前不案内でございまして。

成正　さうか。――だが、姫君を守護して今日この海を渡らうとは思はなかつた。

源六郎　全く落城の當時を思ふと夢のやうでございます。

成正　その方はあの折よく働いてくれたな。併し眼をやられて氣の毒なことをいたした。

源六郎　いゝえ、これしきの手傷。殿様のお働きに比べてはお恥しうございます。――月見櫓の前まではたしかにお伴いたしたのですが、燃えさかる猛火と黒煙のために、殿様のお姿を見失ひましたときはぎよつといたしました。

成正　その時余はまつしぐらに猛火を突き拔けて行つたのだ。併し櫓の向うの石垣のかげに千姫君がをらうとは思はなかつた。そのやうに早く姫君を救ひ出せるとはわれながら思つてゐなかつた。

源六郎　殿様が、姫君をお負ひ申してお歸りになつた時は餘りの神速に手前どもさへ信ぜられない位でございました。

成正　それに面も變つてゐたからな。併し皆のものにいはれるまでは、傷のことは少しも氣がつかなかつた。氣が張つてゐたせゐだな。

（突然船底の方から騒がしい聲が聞える。）

成正　（きつとなつて）あの騒ぎは何だ。

源六郎　舟子どもが何か爭をはじめたのかもしれません。

成正　姫君がご座あるのに心ない舟子どもだ。源六郎、直ぐに參つて取鎭めえ。

源六郎　畏りました。

（源六郎急いで船底へ下る。）

（と、舳の方から千姫づきの茶道が二人やつて來る。）

茶道一　出羽守さまにはこちらにおゐでてでございましたか。

（成正默つて稍横柄に二人の方を振りかへる。）

茶道二　手前どもは殿様にあやかりたいと存じましてお探し申してをりました。

成正　なに、余にあやかりたい。

茶道二　さやうでございます。火の中へ飛込んで姫君をお救ひ申すなどといふことは、お伽の草紙にも滅多にない趣向でございます。それを殿様はやす〳〵とお果たし遊ばしたのですから手前どもは全く膽をつぶしてしまひました。それにはどのやうな祕法がございますものか、どうか手前どもにお敎へを願ひたいと存じまして。

成正　（少し得意になつて）はゝゝ、何の祕法もあるものか。たゞ火の中に飛込んだまでだ。

茶道一　ところがその飛込むと申すのが容易のことではございません。

成正　それならその方たちもう少し強くなつたらよいではないか。はゝゝゝ。

茶道一　これは恐れ入りました。

茶道二　併し武勇勝れた方は數多くございますが、殿様のやうにはでやかな方はございますまい。やれ賤ケ嶽の七本槍の、どこそこの一騎討ちのと申しましても、殿様の華やかさには及びません。まづ美しい姫君をお救ひ申す。つゞいて姫君を警護して駿府へお屆け申す。それからやがて御臺様としてお迎へ申す。いや、男としてこれ以上の果報はございますまい。

茶道一　へゝゝゝ。手前も殿様のやうになりたいものでございます。

成正　控へろ。

茶道一　へえ。

成正　言葉が過ぎるぞ。その方なぞが余と同じになれると思ふか。

茶道一　へえ、これは〳〵とんだ不調法を申上げました。どうか平にお宥しを。

（船底からまた騒々しい聲が聞える。）

成正　（いよ〳〵むつとして）えゝ、またしても。何といふ船頭どもだ。

（さういひ捨てゝ、成正は荒々しく船底へ駈け下る。）

茶道一　（口眞似して）いや、なんといふお人だ。

茶道二　姫君をお救ひ申したことを鼻にかけて、いやに威張り散らしますな。

茶道一　併しあれだけのことをしてゐると、誰にしたつてつい御得意になりたがるものですよ。
茶道二　ですがあの顏ではどうも……
茶道一　あんな男のところへお輿入れ遊ばすのでしては、全く姫君樣がお氣の毒でございますな。
茶道二　（舳の方を見て）しつ。（たしなめる）
（千姫は刑部卿の局その他を從へて出て來る。）
刑部卿の局　姫君樣、かうして廣い海をお眺め遊ばしますと、幾分かお氣鬱が散じませう。
千姫　（無言）
刑部卿の局　姫君樣、さうふさいでばかりおゐで遊ばしましては、おからだに障ります。（ふと白鳥を見て）そら、ご覽遊ばしませ、白鳥が帆柱にとまりました、おゝ、また飛んで行つてしまひました。
（と、船底で騷がしい聲が聞える。）
刑部卿の局　騷がしい。何事でございます。
茶道一　（艫の方を眺めながら）何か船頭どもがいさかひをいたしてをるやうでございます。
茶道二　（昇降口から船底を見ながら）いや、出羽守さまが船頭を叱りつけてをるのでございます。
刑部卿の局　近ごろ出羽守さまは何ぞといふと直ぐお叱りになるやうですが、船のことなぞは舟子にお任せになつておいたらよろしかりさうなものでございますな。
茶道一　さやうでございます。
（と、本多平八郎忠刻が無言のまゝ姫に會釋して船底へ通り拔ける。間もなく騷ぎが止んでしまふ。）
茶道二　おゝ、すつかり騷ぎが治まつてしまひました。
茶道一　お若いのに平八郎樣は實に見上げたお裁きやうでございますな。
千姫　今こゝを通つたのは？
刑部卿の局　本多平八郎忠刻殿でございます。當桑名のご城主美濃守のご嫡子で、四天王のご一人平八郎忠勝殿にはお孫に當る方でございます。この海を渡ります時はいつも桑名の藩主が船を爲立てることになつてをりますので、今日は警護の爲に供奉いたしてをるのでございます。
千姫　おゝ、さうであつたか。
刑部卿の局　平八郎殿はこのあたりのことには詳しいかと存じます。お呼び遊はして地理をお訊ね遊ばしては如何でございませう。屹度興のあることゝ存じます。了齊どの、大儀ながら平八郎殿を。
茶道一　畏りました。（急いで昇降口を降つて行く）
（間もなく本多平八郎忠刻が茶道と共にやつて來て手をつかへる。）
忠刻　お召でございますか。

刑部卿の局　妾たちは土地不案内でございますから、あなた様から姫君へこのあたりの景色をお物語り遊ばして戴きたうございます。

忠刻　何のご用かと存じましたら、おやすいことでございます。ではお話し申上げませう。まづこの桑名から宮への渡は古くからございますので、京からあづまへ下りますには必ずこゝを通りましたものでございます。業平朝臣の伊勢物語にも出てをりますくらゐ有名な渡でございます。この間が七里ありますところから俗に七里の渡と申しますがまた間遠の渡とも申します。古歌に「有明の月に間遠の渡して里に急がぬ夜の舟人」なぞ申してございますが、こゝは夜も船が通ひます。ご覽遊ばしませ、向うに高い櫓が立つてをります。夜はあの櫓に灯がはひりますので格別景色がよろしうございますが、それがまた船人には夜の目じるしになるのでございます。

刑部卿の局　平八郎殿のお話を聞いてをりますと旅の憂さを忘れてしまひます。あなたさまのやうなお方と道中をいたしましたらさぞ面白いことでございませうな。

忠刻　どういたしまして、拙者は至つて無骨者でございますからお相手なぞはとてもかなひません。

刑部卿の局　ほんにこの渡だけでなく、すつと駿府までお供遊ばすのでしたら、どんなによいかしれませんのに。

忠刻　いえ〳〵、ご警護には武勇勝れた出羽守殿がおゐでのことゆゑ、拙者のやうな未熟者の出るところではございません。

刑部卿の局　併しご道中は武勇ばかりでもな。

忠刻　（言葉をそらして）たゞ今の先をご案內申しませう。向うに遠く霞んで見えますのが志摩の國の出鼻でございます。それからこの見當に當つて——こゝではよく見えません——どうかこちらへお廻りを願ひたう存じます。（帆の向う側に廻る）——　この邊が二見ケ浦になつてをります。伊勢の大廟はその右のところでございます。

（一同忠刻に從つて帆の向うにはいる。舞臺空虛。と、突然昇降口から松川源六郎が血相を變へて飛出して來る。つゞいて三宅惣兵衞が追ひかけて來てそれを止める。）

惣兵衞　これ、控へませぬか。控へませぬかといふのに。

源六郎　いゝや、ご家老さまの仰せではございますが……

（猶振切つて行かうとする）

惣兵衞　大事のご場所ですぞ、お愼しみなさい。

源六郎　いゝえ、決して殺害はいたしません。たゞ不具にいたしてやるだけです。さうしてわれ等の心持がどういふものか思ひ知らしてやるだけです。

惣兵衞　そのやうなことをしたら警護の役にある殿樣にど

のやうなご迷惑がかゝらうもしれませぬ。お控へなさいと申すに。

源六郎　併しあの本多奴は自分の美貌を賣物にして、婦女子の歡心を買はうとする武士の風上にもおけぬ奴です。不具になつたら…

惣兵衛　これ。（と、また止める）

源六郎　いや、そればかりではない。殿がお指圖をなさると、彼は陰に船頭をそゝのかしてお言附けに背かせ、自分がその間にはいつて虚名を得ようとする卑怯者です。一體殿が船頭たちといさかひをなさるなぞと申す事はいつにもないことではございませぬか。それにも係はらずあのやうなことを遊ばしたのは、突然あの平八郎奴があらはれたからです。そしてあののつぺりした顔とさかしらの辯口とを振撒いて歩いたからです。口重な殿樣がいらいらし出すのはご無理ではございません。警護は殿樣ご一人でこと足るに、あの小倅が…

惣兵衛　いや、それは廻はり氣といふもの、こゝの渡しはいつも本多家で船を爲立てる慣例になつてゐることゆゑ、決して殿のお役目を邪魔するものではありませぬ。

源六郎　では、ご家老樣に伺ひますが、あなた樣は一體殿のご家老でございますか。殿より外の者が幅をきかしてゐてもご恥辱とは思召しませんか。

惣兵衛　拙者はたゞ事なかれかしと願ふばかり。駿府へ姫君をお送り申すには、まだ半分の道のりしか參つてをらぬのに、途中に事があつては、姫君に對しても、また殿にとつても一大事ではござらぬか。たゞ何事もないのが重疊と申すもの。

源六郎　そのやうなお考だから本多にしてやられるのです。あの小倅は女の心を捕へる事が巧みゆゑ、そのやうにしてゐると彼は供奉の役を奪ふばかりか、つひには姫君をも奪ひかねません。

惣兵衛　いや、そのやうな氣遣ひはない。大御所樣が殿にお約束なすつたことは天下周知のことゆゑ、本多殿がいかなる御仁であらうともそれを覆へすやうな大それたことは出來ますまい。こちらはたゞ落着いてをればよいまでのこと、必ずともにせいてはなりません。

源六郎　併し落着いてゐよと仰せあつても、傍にあゝいふ卑劣な男がゐては…

惣兵衛　源六郎殿、たかゞ七里の渡し。たゞその間の辛抱ではござらぬか。本多殿とても船から先きはよもや供奉はなさいますまい。こゝは大事のところですから十分愼しまなくてはなりません。殿はそれでなくつてさへ逸り氣のお方ゆゑ、そのもとが傍からあせつては、どのやうなことにならうも知れません。お控へなさい。お控へな

さい。

（と、そこへ成正がはいつて來る。）

成正　源六郎、そこにをつたか。

源六郎　はい、何かご用でございましたか。

成正　船頭どもに釣竿の用意を申附けえ。

源六郎　はあ。

成正　姫君のお慰みに釣をご覽に入れようと思ふのだ。

源六郎　なるほど、それはよいご趣向でございます。急がぬ旅でございますから船中のお慰みにはこれに越したお催しはございません。實は先程から殿樣を差置いて、あの本多殿が姫君樣のお相手をしてをるのを見ると、心外でたまりませんでしたが、これでやうやく胸が落着きました。

成正　はゝゝ。氣にとめる程のことはないが、彼ひとりがさかしらの辯口を振つてをると、何となく余は物知らずのやうに見えて心苦しいから、ふと思ひついたまでのことだ。

源六郎　ご尤でございます。丁度風がなくなりましたから絲を垂れますには好都合でございます。では直ぐに申附けるでございませう。

（源六郎、昇降口から降りて行く。）

成正　惣兵衞、その方は先程から默つてをるが、釣は不同意か。

惣兵衞　いえ〳〵、結構なお催しと存じてをります。併し……

成正　併し、何ぢや。

惣兵衞　あまりおせきにならぬ方がよろしいやうに考へられます。

成正　うむ、心得てをる。心得てをる。

（と、忠刻が先に立つて案内しながらやつて來る。千姫その他のものもそれについてはいつて來る。）

忠刻　あれが木曾川の河口でございます。こちらが鍋田川、向うに見えますのが庄内川の落口でございます。あれを過ぎますと間もなく宮へお着きでございます。

刑部卿の局　大儀でございました。お蔭でところの地理に詳しくなりました。

忠刻　お言葉で痛み入ります。

（と、成正がすゝみ出る。）

成正　申上げます。船の中では姫君樣さぞご無聊と存ぜられます。釣などご覽遊ばされては如何でございませう。

刑部卿の局　なるほどそれはよいお慰みでございます。早速お申附け下さいますやう。

成正　承知いたしました。

（成正、惣兵衞にさゝやく。惣兵衞更に家臣にさゝや

く。家臣去る。）

刑部卿の局　このあたりではどういふ魚がとれますな。

成正　さやうでございます。このあたりでは……（とはいつたが、困つて後がいへない）

忠刻（すぐにあとを受けて）こゝは內海でございますから、大きい魚はとれませんが、やがら、あいなめ、ちぬ鯛などがかゝつてまゐります。

（源六郎は船頭に釣竿を何本も持たせて上つて來る。そしてそれを成正や、忠刻やその他のものに分ける。）

茶道一　どうか手前にも釣らせて戴きます。

（茶道までが釣竿を手にして、何人かゞ船べりから絲を垂れる）

茶道一　や、引いてゐますぞ。あつ、餌をとられてしまつた。

（と、忠刻は直ぐ一尾釣りあげる。）

茶道二　お、平八郎樣はもうお釣上げになりましたな。見事なちぬ鯛でございますな。

（忠刻は糸を垂れると直ぐにまたかゝつて來る）

茶道二　いや、またお釣りになりましたな。どうもあざやかなことでございますな。

（つゞいて、他の一、二人も釣上げる）

茶道一　釣りましたぞ、釣りましたぞ。手前もこんな大きなのを釣りました。（と、見せびらかし乍ら、成正に）出羽守さまも何かお釣り上げになりましたか。

（成正は自分だけが釣れないのでいら／＼してゐたがそれには答へないで無言のまゝ釣場を變へる。その間にも忠刻はまた數尾を釣り上げる。）

（源六郎も竿を下ろしてゐたが、さつぱり釣れないのであせつてゐると、偶々一尾かゝつたので手早く竿のまゝそれを成正に渡す。成正は急いで竿を引上げる。）

茶道二　出羽守さまもお釣り上げになりましたな。やあ、妙な魚ですな。口が三寸もありますな。何といふ魚でせう。

忠刻（丁度その時小鯛を釣上げたが、それを見ると稍冷笑的に）それが「矢がら」です。こゝの海にはざらにをる魚です。

刑部卿の局　平八郎殿のお釣りになつたのは小鯛でございますか。實に見事なお手際でございますな。

（千姫ははじめから忠刻の方ばかり見てゐたが、餘りに上手に釣るのでいよ／＼見とれてゐる。）

千姫　同じ餌なのにどうしてあゝよく釣れるのであらう。

刑部卿の局　全く不思議なやうでございますな。

忠刻　恐れ入ります。（ふと帆柱を見上げて）おゝ、あの帆柱の上に白鳥が止つてをります。一つ射落してお目に

かけませう。(自分の近臣に) 半弓を持て。
(近臣直ぐに半弓を持つて來る。忠刻弓を射ると白鳥が船の上に落ちて來る)
刑部卿の局　あざやか〳〵、本當に平八郎殿は何事もご堪能でございますな。
成正 (それを見ると) あゝ、釣は駄目だ。某も白鳥を射てお目にかけませう。半弓を。
(源六郎畏つて退く)
茶道一　あゝ、風がまた出て來ました。釣は止めにいたしませう。
(一同釣を止める。その間に源六郎は半弓を持つて來る)
成正　止つてをる鳥ては興がございません。某は飛鳥を射止めませう。
(成正は空中の飛鳥を狙つて矢を放つ。併し當らない)
源六郎　おゝ、もう少しのところだつた。殘念なことをしましたな。
成正 (少しいらだつ。ふと帆柱を見上げると白鳥がゐる) おゝ、また帆柱の上に白鳥が一羽止つた。平八郎殿、貴殿が射落すか、某が射落すか、あれを二人同時に、射ようではござらぬか。
忠刻 (競爭を仕掛けられると知つて、稍興奮しながら)なるほどそれは面白うございます。ではお手並を拜見しませう。
刑部卿の局　これはまた一段と興がございますな。
(二人とも緊張しながら弓をしぼる。併しどちらも自重して容易に矢を放たない。なみ居るものも固唾を飲んで注視してゐる。と、突然二人は殆んど同じ瞬間に切つて放す。)
茶道一　あ、鳥が落ちた。
茶道二　どなた樣の矢があたりました。
(茶道等駈けて行つて帆の向う側に落ちた鳥を拾つて來る。)
茶道二　白い方の矢がさゝつてをります。
(成正はそれを聞くと無念さうに半弓を捨てゝしまふ。一同はじめて忠刻の射止めたことを知る)
成正 (いよ〳〵あせつて、忠刻に)見事のお腕まへ、感服仕りました。そのお腕前では嘸かし劍道もご熟練でござらう。某お手のうちを拜見したうござる。
忠刻　仰せではござりますが、船中のことゆゑご免を蒙ります。
成正　では本多殿はお逃げなさると見えますな。
惣兵衞 (先刻から成正のいらだつてゐるのを見て心配してゐたが堪りかねて) 殿、殿。(と、袖をひかへる)

成正　え、うるさい。控へてをれ。
刑部卿の局　（成正を負かしてやれといふ腹で）平八郎殿、おやり遊ばしては如何でございます。
忠刻　しかし姫君のご前では。
千姫　いえ〳〵、妾もそなたの手並が見たうございます。
忠刻　では、ご免を蒙りまして。（近侍に）木刀を。
（近侍は木刀を持つて來る。二人試合を始める。成正はやがて忠刻の木刀を打ち落して、したゝか小手を打つ。今度ばかりはまんまと勝ちおほせたので大いに得意になる。）
千姫　（ふと忠刻の手首から血が流れてゐるのを見て）平八郎が怪我をしてをる。局、すぐに手當を。
刑部卿の局　畏りました。（介抱してやる）
千姫　平八郎、傷口が痛みませぬか。
忠刻　いゝえ、さしたることはございません。
千姫　直ぐに休息をした方がよい。妾も部屋に戻りませう。
（千姫は腰元等を連れて舳の方へ行く。つゞいて忠刻もそれ〴〵去る。）
（成正ははじめて自分の腕を見せることが出來たので、姫から何かお言葉があると思つてゐたのに、忠刻にだけ言葉を賜つたまゝ直ぐ去つてしまつたので、得意の色も忽ち消えてしまふ。そして前よりも一層苦しい不安が胸に襲つて來る。）
源六郎　（むら〳〵としてきつと立上る）
物兵衛　また輕はずみな。
源六郎　併し本多の小倅にだけお言葉を賜つて、殿には一言のご會釋もないとは！
物兵衛　そのもとなぞの差出るところではない。しづまりませぬか。
源六郎　（しぶ〳〵と）は、はい。
（物兵衛は試合の時成正が傍においた刀をとつて、無言のまゝ渡す。）
（成正もまた無言のまゝ刀を受け取る。成正の眼には熱い涙がたまつてゐる。）
成正　（力なく）今日は何故こんなことをしてしまつたのだ。
物兵衛　殿、お氣遣ひ遊ばすことはございません。殿は大御所樣から確かなお言葉を承つてをるのでございます。大御所樣のお言葉にご違背はございませんから、どうかお心を大きくお持ち下さいますやう。
（成正默つてうなづく、と、船が港にはいつたらしく船内から着船の合圖が鳴る。）
源六郎　あゝ船がついたらしい。
（と、大きな帆がぎり〳〵と下ろされて、舳の方がすつかり見えるやうになる。その向うに宮の港町が見え

る。そして舳のところに千姫と忠刻とが港の方を見ながら後向きに立つてゐる。）
（成正はそれを見るとむつとする。惣兵衞が袖をひかへる。やがて成正はそこにゐたゝまれないので、無言のまゝ急に船底へ駈け下りる。）

――幕――

第三幕

第一場

駿府城内の小さな茶座敷。前は庭。前の幕から餘り日數のたつてゐない秋の日。午後のうらゝかな光が室のなかに差し込んでゐる。

家康は千姫に茶をたてゝ貰つて飮んでゐる。表向きの場合と違つて、かうして奥で茶を啜つてゐる時は、家康とて家庭の只のお祖父さんである。そして千姫は思切つてお祖父さんに甘へる孫娘である。

家康　いゝ時候ぢやな。おゝ、百舌が鳴いてをる。
千姫　お祖父さま、また鷹狩にお出かけでございますか。
家康　近いうちに出掛けよう。少し外に出ないと身體によくないからね。時におまへの氣鬱病はどうした。近頃大分よいやうだな。
千姫　はい、この頃はすつかりよくなりました。
家康　それは何よりだ。一時はわしも心配してゐた。
（腰元がはいつて來て手をつかへる。）
家康　何ぢや。
腰元　坂崎出羽守様がお越しでございます。
家康　（少し困つた樣子で）なに、出羽が參つた？
腰元　はい。
千姫　お祖父さま、お會ひになるのでございますか。
家康　さうぢやな。
千姫　會つたらまたあの話をなさるのでございませう？
家康　それで態々來たのであらうから、しないといふ訣にもゆくまい。
千姫　でも、妾はあのお話は不承知でございます。
家康　（困つた顏をしながら、腰元に）兎に角あちらに待たしておけ。
腰元　畏りました。
（腰元去る。）
家康　姫、そなたはそんなに出羽が嫌ひか。
千姫　はい、嫌ひでございます。
家康　醜いからか。
千姫　いゝえ、それはそんなにも思ひません。
家康　それならよいではないか。
千姫　でも、出羽は强がらうとするからいやでございます。

家康　今の世の中では强いのは何よりでではないか。
千姬　その癖强がるほどは腕が出來てをりません。
家康　いや、そんなことはあるまい。
千姬　いゝえ、本當のことでございます。この間下向の折でございました。桑名の海を渡りまする間に、船の上でいろ〳〵の武術をいたしましたが、出羽はさつぱり腕がさえてをりません。
家康　あの男に限つてそんな筈はないと思ふが。
千姬　でも魚を釣りましても。
家康　魚が釣れなくつても武士の恥にはならないさ。
千姬　それから白鳥を射損じたり、試合にきたない手をつかひましたり。
家康　そんなに色々のことをやつたのか。
千姬　本多平八郎がをつたものですから、出羽はやつきとなつて平八郎に色々のことを申込むのでございます。
家康　うん、出羽が嫉妬したのぢや。自分獨りでおまへを警護して來たのに横合から美しい平八郎が出たのであせり出したのだ。
千姬　あんなこま〴〵した、落着のない人は武士らしくございません。妾は嫌ひでございます。
家康　いや、さうとつては可哀さうだ。出羽としてはたゞおまへに腕が見せたかつたのだらう。

千姬　それなら落城のときでもう十分分つてをるではありませんか。
家康　分つてをつても、己はもつと强いといふことを、男は女の前に出ると兎角見せたがるものだ。わしにしても若い時分には覺えがあるよ。
千姬　だつて白鳥さへ射落せなくつては駄目ではございませんか。
家康　恐らくあせつてゐたのだらう。平生腕のあるものでもさういふ時といふと、すつかり調子が狂つてしまふものだ。併しその爲めに出羽は腕が鈍いとか、落着きがないとかいふのは心やりがなさ過ぎる。
千姬　お祖父さまは大層出羽のかたをおもち遊ばしますこと。
家康　いや、かたを持つ訣ではないが、その爲めに出羽がいやだとあるなら、それはそなたの思ひ違ひだから、ひととほり言ひ解いたまでだ。どうぢや出羽のところに嫁入つてやらぬか。
千姬　いやでございます。
家康　そんな我儘をいつては困るではないか。
千姬　我儘なのはお祖父さまの方でございます。
家康　何故わしが我儘ぢや。
千姬　さうではございませんか。祖父さまはご自分の戰ひ

の都合で、妾をあちらへお嫁にやつたり、こちらへやつたり、勝手なことをなさるではございませぬか。
家康　(少しうろたへる)
千姫　世の中に妾ぐらゐ不幸な女はございません。まだ物心つくかつかぬうちに、たゞお祖父さまのご都合一つの爲めに大阪の内府さまのところにお嫁にやられてしまひ、大阪が落ちると、今度は今までに見たことも聞いたこともない人のところに嫁入をせえなんて、こんなひどいことがありませうか。(ヒステリカルに泣く)
家康　おい。さう泣き出しては困るではないか。
千姫　妾はこんな話を聞く位ならいつそ落城のとき、城方の人と一緒に燒死んで了つた方が增しでございました。
家康　そんな無茶なことを。
千姫　妾はお祖父さまの策略の進物になつて、あちらこちら貰はれて歩くのはいやでございます。
家康　いや、決してそんなことはない。そなたの身の上を案じて心配してゐるのだ。どうしてもそなたがいやだとあれば爲方もないが、併し出羽は顏こそ醜いが今時には珍しい武勇の勝れた若者だぞ。
千姫　いゝえ、何といはれても妾はいやでございます。
家康　では改めて訊くが、そなたを大阪の城内から救ひ出したのは誰だ。
千姫　出羽でございます。
家康　それなら出羽はそなたのいのちの恩人ではないか。
千姫　それは申されるまでもなくよく存じてをります。
家康　それならその恩人のところにいつてやるのが道ではないか。
千姫　お祖父さまのお言葉でございますが恩人には恩人に對する道があるかと思ひます。いくら恩を受けたからといつて妻にならなければならない義理はないと存じます。若し恩を受けた人には妻にならなければならないのでしたら、女はいくつからだがあつても足りません。
家康　どうも若いものには理窟ではかなはないの。併しわしはそなたをやると約束したのだ。
千姫　お祖父さまはお約束をなすつても妾はそんな約束はいたしません。本當にお祖父さまは氣早でございます。妾に一こと聞いてからでも遲くはなかつたではございませぬか。
家康　どうもお姬は手におへないな。日本六十餘州余の命に服さぬものはそなた一人だけだ。
千姫　お祖父さまはそんなことを仰しやつてまた威すのでございますか。
家康　いや、もう止めた〳〵。そなたがそんなにいやなら、實はわしとても强ひてやりたい譯ではないのだ。

千姬　それならはじめからさう仰しやればよろしうございますのに。

家康　實はな。出羽がそなたを救ひに出かける時、おまへを妻にやるといつたけれど、心の中ではおまへをやるつもりはなかつたのだ。併しその位のことをいつておいてやらぬと、何しろ猛火を冒して敵中へ飛込むのだから、なか〳〵本當には救ひ出して來ないからな。

千姬　まあ、ではお祖父さまははじめから噓をついてゐでなすつたのですか。

家康　噓といふ訣ではないが、元氣をつけておいてやつたのだ。

千姬　お祖父さまがそんなお心なら、妾はいつそ出羽のところへいつてやりませうかしら。

家康　（少しうろたへ乍ら）なに、ゆく。

千姬　え、あんまりあの人が可哀さうですもの。

家康　おまへ、本當にゆく氣か。

千姬　いつでもいゝんですけれど、どうも……（言ひよどむ）

家康　どうも、どうしたのだ。

千姬　（默つて恥しさうに顏を隱す）

家康　はゝゝゝ、外に嫁きたい人でもあるのか。

千姬　（いよ〳〵顏を隱してしまふ）

家康　そしてそれは誰だ。

千姬　（顏を隱したまゝ恥しさうにきゝとれぬ程の小聲で何かいふ）

家康　なに、少しも分らないではないか。もつとはつきり……（あらかた察して）はゝゝ、うん、あの平八郎だな、あの小伜なら成程おまへの好きさうな男だ。さういふ意中のものがあつては、こりや出羽のところにゆかぬ筈だ。（間）ところで出羽が先程から待つてをるが　何とか挨拶をしてやらねばなるまい。併しどうも弱つたな。

（家康は少し思案してゐたが間もなく手をたゝく。）

（腰元が出て來る。）

家康　崇傳をこれへ呼べ。

（腰元畏つて退く。）

（間もなく金地院崇傳がはいつて來る。）

崇傳　お召しでございますか。

家康　崇傳、困つたことが出來たよ。

崇傳　何事が出來いたしました。

家康　實はの、そちも知つてゐる通り、出羽守にお姬をやる約束をいたしてあるが、姬はどうしても行くのはいやぢやといふのだ。

崇傳　はい〳〵。

家康　ところが出羽が今日やつて來てをるのだ。出羽は無

論くれえといふであらうし、お姫はいやぢやといふのだから、余は今度といふ今度はほと〳〵弱つたよ。關ケ原、大阪陣以來の苦戰ぢやわい。はゝゝゝ。そこでそちを呼んだのだが何か名案はないかの。
崇傳　さやうでございますな。
家康　兎に角余は病氣の體にして、そち代つて會つてくれ。
崇傳　畏りました。
家康　そちのことだから何かよい思案があるであらう。
崇傳　はい。咄嗟のことでございますから、これといつて何も浮びませんが、併し出羽殿はご承知の通り一本氣(ほんぎ)のご仁でございますから、それだけに話よい樣に存ぜられます。
家康　ではその方よいやうにはからつてくれ。
崇傳　承知いたしました。

第二場

同じく城內表座敷の一室。出羽守成正がひとりぽつれんと坐つてゐる。前に茶菓などがおいてある。
暫くして崇傳がはいつて來る。
崇傳　これはこれは出羽殿にはようこそお越しなされた。いつもご健勝で恐悅申します。
成正　崇傳長老にもお變りなく、大慶に存じます。
崇傳　さて大御所樣がお目にかゝる筈でございますが、二三日來ご不快に渡らせられますから、ご用談でしたら愚僧までお傳へ下さい。お取次ぎ申し上げませう。
成正　(少し困つたといふ顏で)　なに、大御所樣にはご不例！　餘程ご重態でございまするか。
崇傳　いや、さしたることもございませんが、御引籠り中にございます。
成正　少しも存じをりませんで……實はこの間ご加增に預りましたから、お禮を言上いたしたいと罷り出でましたやうな次第にございます。
崇傳　それはご念の入つた事。大御所樣へは御出府の趣愚僧から篤と申上げるでございませう。それはさうと、そこもとの大阪表のお働きは目醒ましいことでございましたな。ご加封はこりや當然のことでございます。
成正　いえ〳〵、お恥しうございます。ときに長老は大奧の事については萬(よろづ)ご承知の儀と存じますからお訊ね申上げますが、手前方におきましてもそれ〴〵用意もございますから、姬君はいつ頃お下し相成りまするか　前以て承つておきたうございます。
崇傳　(少しとぼけて)　姬君！　姬君と仰せられますと。
成正　千姬君のことでございます。某に賜ると大阪陣の折大御所樣が仰せられました。その席には長老もたしかお

ゐでゞあつたと存じてをります。

崇傳　あゝ、あのことでござるか、それならそこもとのところに既にお使ひが參つた筈と心得ますが。

成正　いえ〱、何のお使ひも何のご沙汰もございません。

崇傳　はて、それは何とした手落であらう。篤と取調べさせるでございませう。

成正　（少し不安さうに）そのお使の趣こゝで承る訣にはまゐりませぬか。

崇傳　まだご存じでなくば愚僧からお傳へ申しませう。それはかやうでござる。申上げるまでもなく、千姫君は大阪內府樣のご寵中ゆゑ、落城とともに內府樣御他界の後は、兎角ご氣鬱にてご氣分が勝れませぬ。これは姫君樣としてご無理のないことゝ存じます。ところがこのごろ更に內府樣のご冥福をお祈り遊ばすために、髮をお下ろし遊ばしたいとの仰せでございます。

成正　なに、尼君になると仰せられますか。

崇傳　さやう、近々愚僧のもとにお越しなつて、黑髮をお斷ちになることに定つてをります。そのことがまだそこもとへはお傳へがしてございませぬか。これは何といふ手ぬかりな。

成正　それはまことでございますか。

崇傳　愚僧が何しに僞を申しませう。

成正　では姫君を賜はることは……

崇傳　只今申上げました樣な次第でございますから、どうかお諦め下さいますよう。

成正　（少しむつとして責めるやうに）併し大御所樣は大阪陣のみぎり確に某に賜はると仰せ遊ばされました。

崇傳　それは仰せなさいましたが、如何に大御所樣のご威勢でも、佛道にはいると御意あるものを、無理にも引止めてお輿入を强ふるといふ訣にはまゐりません。

成正　お言葉ではございますが、匹夫野人の申すことゝは違ひ、天下のしめくゝりを遊ばします大御所樣の仰せに、ご違背があつてはご政道の表如何かと存ぜられます。

崇傳　一應ご尤の仰せではござるが、內府樣の菩提をお弔ひ遊ばすといふものを、强ひて他に緣組おさせ申すことは無道のことかと存ぜられます。なる程一旦お約束はなさいましたものゝ、人倫の上より見て不倫と思召すときは、お取消しに相成る方が、これこそ却つて政道をしろしめす方のとるべき道ではございますまいか。

成正　（言ひつまる）

崇傳　（柔らかに）いや、これは表向きの理窟と申すもの。そこもとのご胸中をお察しいたしますとまことにお氣の毒に存じます。併し外のことゝは違ひ、姫君が佛の道にはいることでございますから、どうか快くご承引が願ひ

たうございます。

成正　(無言)

崇傳　事實そこもとに對しては何とも申訣のない儀でござ
います。大御所樣に於ても決してあだには思召してをら
れますまい。この間二萬石ご加封に相成つたのも恐らく
その邊の意味合ひも含まれてをるものと拜察されます
が、次第によりましては、なほ大御所樣へ愚僧からお心
のうちをご傳達申上げるでございませう。

成正　いや、この上のご加封は分に過ぎます。それはご辭
退申上げます。(少し碎けて)ときに長老、近ごろ卒爾の
お願ひでござるが、某貴僧の金地院へ何がな寄進をいた
したいと存じます。お受け下さいませうか。

崇傳　それはご奇特なお志、何なりと受納いたします。

成正　忝うござる。では取あへず黄金の燭臺一對寄進いた
します。なほくさぐヽお納めいたしたいと存じますが、
その代り曲げて某のお願ひお聽入れが願ひたうござい
ます。

崇傳　して、願ひと仰せあるのは。

成正　(眞面目に)　貴僧のおはからひによつて、何卒姫君
を某に賜はるやうおとりなしが願ひたうございます。

崇傳　(屹となつて)　出羽守どの。たゞ今の仰せはそりや
ご本心でございますか。

成正　(少しあわてゝ崇傳を見る)

崇傳　(頭から成正を壓へつけようとして)　出羽守どのと
もあらうお方がそのやうなことをなされてはお名にかゝ
りませぬか。寺に御寄進の志は尊いが、たゞ今のご一言
によつてそこもとの胸中が見えすきました。寄進にこと
よせ、拙僧を籠絡して姫君を乞ひ受けようとは淺ましい
お考でござる。賄賂によつて愚僧が動くと思召されるか。

成正　(あゝ惡いことをいつたと思ふと、急に席をすさつ
て)これは不調法をいたしました。長老の手前をも憚ら
ず卑劣なことを口走りました段、平に、平にご宥免下さい。

崇傳　(成正の恐縮したのを見ると)　いや、たゞそこもと
にご注意を申上げたまでのこと。お手をお上げ下さい。

成正　それではこちらが痛み入ります。

崇傳　あゝ、心が、亂れて……

崇傳　ご心中はお察しいたします。

(間。)

成正　(突然ひたと手をついて)　長老、拙者は今どうした
らよろしいものか、お慈悲にはどうかそれをお教へ下さ
い。

崇傳　敎へよとは。

成正　(眞實こめて)　只今は無躾なことを申しまして申譯
けがございません。併し某は姫のことが諦めきれないの

です。それであのやうなことを申しましたが、あれは全く不調法でございました。以後は屹度愼みませう。就きましてはどうしたら姫君が髮をお下ろし遊ばすことをお止りになるか、どうしたら某の願ひが叶ひますか、どうかそれをお敎へ下さい。今となつてはたゞ長老におすがりするより外に道がございません。某は無骨者で禮をわきまへませんから、どうお願ひしてよろしいのか分りませんが、たゞ思つてをる通りをありのまゝ申上げます。どうか長老の德を以て某をお救ひ下さい。（と手をつく）

崇傳　（困つて）併しそれは……

成正　大御所樣の仰せのない前は何とも思つてをりませんでしたが、賜はるといふご一言を伺ひましてからは、どうしても姫君のことが忘れられません。それからといふものは某はたゞ姫君のことの外は何にも考へないやうになりました。事實、拙者は姫君をお救ひ出し申す爲めには火の中に飛込んで行きました。（顏を指し）これご覽下さい。この痕はその折受けた火傷でございます。いゝえ、これは決して功をいひ立てるのではございません。拙者の心の程を申上げるのでございます。それだけに姫君のことは、諦めろと仰せられても、某にはどうしても諦めきれません。長老、どうかこのあはれな心をお汲みとり下すつて、某にご助力下さい。

崇傳　（無言）

成正　長老が火の中に飛込めといへば火の中にも飛込みます。水の中にも這入ります。どんな苦しいことでも、姫の爲めなら決して厭ひはいたしません。實は拙者は今まで婦人のことでこんなにいのちがけになつたことはたゞの一度もございません。拙者が眞劍になりますのはたゞ戰場に出た時ばかりでございます。それが今度ばかりは、お恥しい次第ですが夢寐にも忘れられないのです。かやうなことを申しましたら、人はさぞ笑ふでございませう。併し某は恥も外聞も恐れません。たゞ姫を賜はりさへすれば……

崇傳　お心のうちは十分分つてをりますが、これはどうも愚僧の力には及びません。それにそこもとがそれ程懸命にお思ひになつてをるとしても、姫君はご他界遊ばされた內府さまの外にお心が傾かぬ時は、折角のご婚儀も不緣になりはいたしますまいか。その邊も篤とお考になつて然るべきやうに思はれます。

成正　（無言）

崇傳　出羽どの、これはお諦めになつた方がお爲でございませう。大御所樣も屹度このまゝにはなさいますまい。

成正　（無言）

崇傳　殊に姫君が他へお輿入れ遊ばすといふではなし、佛

門に歸せられること故、その許に於ても、お心が解けるといふもの。どうか今までのことは夢とお諦め下さい。
成正　では姫君は最早どこへもお輿入れなさるやうなことはござりませぬか。
崇傳　尼君におなりになる上はそのやうなことはございませぬ。
成正　くどいやうでござるが、屹度お輿入れはなさいますまいな。
崇傳　（少し恐ろしくなつたが、きつぱりと）確になさいませぬ。
（坂崎は首を垂れて默然としてゐる。）
崇傳　（氣の毒に思ひながらも）では、御承引下さいまするか。
成正　（無言）
崇傳　（かぶせて）ご承引下さいますな。
成正　（苦しさうに）承知いたしました。
崇傳　それはよくこそお諦め下さいました。大御所樣、姫君は申すに及ばず、黄泉の内府樣までそこもとを德とされるでございませう。
成正　（改まつて）長老どの、姫君は貴僧の金地院で得度されるのでございますか。
崇傳　さやうでございます。
成正　では、先程申上げました燭臺を改めて喜捨いたしたうございます。素より喜進の心でございますから、これには毛頭疚しい心は加はつてをりませぬ。どうかお受け下さいますやう。
崇傳　それは近頃ご奇特なこと。有難く受領いたします。
（崇傳手を鳴らす。茶道がはいつて來る。）
崇傳　申つけておいたお料理を。
成正　折角のおもてなしでございますが今日はご辭退いたします。
崇傳　（茶道に）では、せめてお茶など。
成正　有難う存じますが、氣分が勝れませぬから、これでご免を蒙ります。
（成正は崇傳に一禮して力なく座を立つ。）
（暮六つの太鼓が、とんきやうに響く。）
（崇傳はしてやりたりと思ひ乍らも氣のすまぬ面持。）

――幕――

第四幕

坂崎出羽守牛込江戸邸々内。成正の居間。
下手に次の間。室の向うに緣がある。緣の先きは庭。遠見に本鄉の高臺が聳えてゐる。但しはじめは室に障子が立てきつてあるから向うは見えない。

元和二年九月廿九日の午後から宵にかけて。外には雨がしと〳〵と降つてゐる。

近侍が二三人お次の間で話をしてゐる。

近侍一　毎日鬱陶しいお天氣ですな。

同二　お納戸役の廣澤様が發狂なすつたとかいひますが本當ですか。

同三　いや、發狂もなさいませうよ。毎日こんな天氣では、ときに今日のご上使はどなた様でございます。

同一　柳生但馬守様です。

同二　では、千姫君が今日本多家へお輿入れになるのについて、またもやお話においでになつたのでございますな。

同一　さやうかと存じます。

同三　いくらご別懇の但馬守様がおいでになつても、今度のことばかりは殿もおきゝ入れには相成りますまい。

同二　さやうでございますとも。誰にしろこれは承知が出來ません。髮を下ろして佛門に這入るからご縁組は出來ないといふ口の下から、他へお輿入れなさるといふことは、いくら將軍家の息女でも餘りご勝手が過ぎます。

同三　併しおかけあひをなさいますにしても、殿とお約束をなすつた當の大御所様がこの春ご他界なさいましたから、お話がしにくゝつて困りますな。

同一　それをまたよいことにして、殿のご承諾もない内に本多家と話をすゝめ、今日お輿入れをなさるといふのは、餘りにご當家をないがしろにした仕打ではございませんか。

同三　今日お輿入れといふのは本當でございますか。

同一　本當でございますとも。お輿は永井信濃守様、靑山大藏小輔様、お貝桶は安藤對馬守様のご守護ださうでございます。

同二　してそのお道筋は。

同一　牛込見附から當邸の側を通つて安藤坂に出て、本多家へ達する道順だとかいふことでございます。

同三　このお邸の側を通るのでございますか。それはいよいよ當家を踏みつけにしたなされ方でございますな。

同一　さういふ訣ではないかもしれませんが、お道順としてはどうしてもこゝを通らなくてはなりますまい。

同二　それならお伴揃ひの中に斬り込んで、お乘物を奪ふには却つて屈竟ではございませんか。

同一　併しそのやうなことは上へご謀反なさることも同じですから、うかつには出來ますまい。それこそお家は斷絶でございます。

同三　しかしこのまゝでは餘りに殿が。(とあとは言葉を呑む)

同一　さやうでございます。重役の方々もそこのところを

ご心配になつておゐでのやうでございます。それに但馬守樣が度々お訪ねになるのも、ご別懇の殿にお間違ひがないやうにといふお心添へからかと存ぜられます。

（家老三宅惣兵衞がはいつて來る。近侍等一禮する。）

惣兵衞　話は控へませんか。殿のお渡りですぞ。なほ申しておきますが、今日は容易ならぬ日ゆゑ、殿樣に粗相のないやう、わけても心をつけなければなりませんぞ。それからご酒は召上ると仰せられてもなるたけ差控へますやうに。

近侍等　畏りました。

（成正がはいつて來る。）

成正　咽喉がかわいた。茶を持て。

近侍二　はつ。（と畏つて座を立つ）

（惣兵衞成正の前に進み平伏する。）

惣兵衞　今日は格別のお慈悲を以て何事もご隱忍下さいまして、惣兵衞たゞ〳〵有難涙にくれて居ります。

成正　但馬が使にまゐつたのでなければ、余はこらへるところではないのだが……

惣兵衞　ご尤でございます。

成正　余が救ひ出した姫君を何のゆかりもない本多づれに取られては武士の一分が立たぬ。余が亡き後は兎も角も、生きて世にある限りは、姬の乘物は一寸たりとも本多の門内へは乘入らせまいと思つてゐたが、外ならぬ但馬の使ではあり、そちの切なる願ひもあるから、今日のところは思切つて辛抱いたした。

惣兵衞　今更ながら殿のご寛大、感佩の外はございません。

成正　しかし惣兵衞、余は口惜しいぞ。

惣兵衞　ご胸中お察し申します。併し今は何事もお鎭まりを。但馬守樣のことでございますから、決して悪いやうにはお取りはからひはなさいますまい。

成正　余もさう信じてをる。もう愚痴は止めにしよう。

（近侍二、茶を持つて來る。）

成正　これは何だ。（成正は茶を一啜すゝつたが、急に怒つて茶碗を近侍に叩きつける）

近侍二　（驚いて平伏し）お熱過ぎましたか。

成正　熱過ぎることを承知でその方は持つて來たのか。不埒者め。

惣兵衞　（近侍に）何故そのやうな粗相をなさるのだ。たゞ今も申し聞かせた許りではござらぬか。（成正に）汲みかへさせませうか。

成正　もうよい。

（家臣がはいつて來る。）

家臣　申上げます。松川源六郎がお目通りを願ひをります。

惣兵衞　今日は殿樣別してご疲勞にわたらせられる。明日

改めて伺候するようお傳へなさい。

家臣　是非とも今日お目通りを願ひたいと切りに申してをりますが……

成正　では、これへ呼べ。

家臣　はい。（退く）

（松川源六郎がはいつて來る。）

源六郎　格別の思召しを以て、お目通りを仰付け下さいまして、源六郎身にとり有難い緣合せに存じます。

成正　して用事と申すのは何ぢや。

源六郎　恐れながら、これをご覽下さいませう。

（源六郎懷から上書を出して捧げる。近侍の一人はそれを受取つて成正に渡す。）

成正　（上書を披いて見て）　こりや血書ぢやないか。

源六郎　はい。（恭しく平伏する）

成正　何故このやうなものを書いたのだ。

源六郎　某、決死のお願ひでございます。どうかご上覽をお願ひ申します。

成正　（讀んで行つたが急に上書を破つて源六郎に投げ返す）余にこのやうなことを勸めるとは不埒な奴ぢや。

源六郎　（心血をこめた上書が投げ返されたので、落涙をおさへながら）では、お願ひはご採用には……

成正　こんな思慮のないことが出來るか。余は女一人のために亂をおこすやうなそんな淺はかものではないぞ。

源六郎　（恐入つて）　は、はい。（と恐縮する）

成正　但馬が來る前であつたら、余の心も或は動いたかも知れぬが、今は無用のことだ。その方は公儀を恐れず、余に反逆をすゝめる不屆な奴ぢや。直樣手打にいたすところなれど今日はゆるしてつかはす。追つて沙汰をするから控へてをれ。

（源六郎なほ何かいはうとしてもぢ〳〵してゐる。）

成正　（源六郎の醜い片目を見ると非常に不快な氣がして來たので）えゝ、何といふ目付をするのぢや。その方のやうな醜い奴は目障りぢや。直に下れ。

物兵衞　殿の仰せぢや。お下りなさい。

（源六郎しを〳〵と去る。）

成正　穢はしい血書などを持ちくさつて。（ふと血書をいぢつた手を見て、急に思出したやうに）これ、すゝぎを持て。

（小姓が手を洗ふ水を持つて來る。）

（成正は手水をつかはうとして、小姓の持つて來た小盥に手を入れようとすると、ふと自分の醜い顏が盥に映る。成正はいはうやうない不快の感が胸に漲る。すると彼の顏はいよ〳〵恐ろしく見えて來る。小姓は成正のいら〳〵してゐる樣子とその恐ろしい顏を見て

は、一層おびえて手拭を差出す手もおのづと顫へる。）
成正　（それを見ると）余が恐いか。
（小姓は一言も答へられない。）
成正　（直に氣をかへて惣兵衞に）惣兵衞、余と只今參つた源六郞といづれが醜い。
（惣兵衞は返事のしやうがないのでもぢ〳〵してゐる。）
成正　（苦笑しながら）はゝゝ。これでは嫌はれるのも無理はないな。
（惣兵衞にはなほ返事が出來ない。）
成正　惣兵衞。余はふつゝりと思ひ切つたぞ。余のやうな醜いものが姫のやうな美しい女子と一緒になることは、これは何としても不釣合ぢや。余は姫を思ふほど姫の爲めに爲合せをはかつてやらなければならない。何ごとも姫の爲めぢや。余は喜んで諦めよう。
惣兵衞　そのお言葉を姫君がお聞き遊ばしたらどのやうに思召しませう。惣兵衞落淚をいたしました。（涙をふく）
（間。）
成正　（また思ひ出したやうに）併しかういふ顏になつたのも！
惣兵衞　殿、お諦めの筈ではございませんか。
成正　（苦笑しながら）はゝゝ。さうであつたな。

（間。）
惣兵衞　つれ〴〵に碁など遊ばしましては如何でございまする。
成正　うム、一石圍まう。
惣兵衞　（近侍を顧み）近侍の方々、お相手を。
（近侍の者碁盤を運んで來る。小姓等は手水の小盥などを片づける。）
近侍　お相手を仕ります。
成正　どうもその方とやると負けが込むな。
近侍一　恐れ入ります。
（二人碁を始める。小姓明りを持つて來る。しばらくして家臣がはいつて來る。）
家臣　申上げます。松川源六郞が切腹をいたしました。
成正　なに、源六郞が切腹した。（すると自分が侮蔑されたやうな氣がしてむら〳〵となる）あいつ余に面あての切腹をしたのだな。返す〳〵も不埒な奴だ。死體は八つ裂にして取捨てえ。それから彼の一家のものは悉く召捕つて殺してしまへ。
惣兵衞　併しそれは餘りに極刑かと存じます。源六郞は大阪のご陣の折には……。
成正　（惣兵衞の言葉を中斷して）なに極刑なことがあるものか。それでもまだ手ぬるい位だ。あいつ、姫の乘物

を奪へと血書を以て勸めたが、余が取上げないのでそれが不滿なのだ。いや、さうしないので余を腰拔けだと思つてゐるのだ。それでそんな面あてをやつたに相違ない、余の深い心を知りもせず、主を誹謗する憎い奴だ。

惣兵衞　いや、源六郎に限つてそのやうなことはございません。彼は生一本な正直者でございます。恐らく自分の意見がご採用にならなかつたので、それを恥ぢて切腹したものでございませう。何にいたせ手前が即刻取調べませう。暫くご免を蒙ります。

（三宅惣兵衞川人と共に急いで退出する。）

成正　愚な奴だ。出さなくてもよい餘計な血書なぞを書くから、こんなとになるのだ。あの男は一體早まつた奴だ。いつもあせり過ぎてゐる、自分の穴を掘るのは自分だといふがよくいつたものだ。源六郎のやうな犬死をするのも、あの男の平生の行ひにあるのだ。そちたちも愼めよ。

（近侍恭しく拜承する。）

成正　（相手の近侍に）その方の手ぢや。

（また碁なつゞける。そして暫く打ち續けてゐたが、成正は急に碁盤を引つくりかへしてしまふ。）

成正　へつらひ者め。

（近侍は恐懼する。）

成正　何故その方は今のやうな手をうつたのだ。何故逃げてばかりゐるのだ。余の石が切れるのに何故切らないのだ。その方はわざ負けをしようといふのだな。そんな碁は面白くないわ。

近侍一　いゝえ、つい見えなかつたのでございます。

成正　噓を申せ。その方はわざ負けをして余の機嫌をとらうと思つたのだ。余はそんなへつらひものは大嫌ひぢや。もと〳〵勝負ごとではないか。たとひ家來であらうとも、その方が强かつたら主を負かしたらよいではないか。切れるところがあつたら切つたらいゝではないか。それを上の者といふとびく〳〵してへつらつた眞似をする。見下げはてた奴ぢや。

近侍一　申訣けがございません。

（雨いよ〳〵しと〳〵と降り出す。）

成正　あゝ、いやに鬱陶しい天氣ぢやな。酒を持て。

（近侍等困つて顏を見合せてゐる。）

成正　酒を持つてまゐれといふに。

（近侍等爲方がなく酒肴を運ぶ。）

（成正酒を飮む。飮み干すとそれを近侍三に差す。）

成正　その方はいつも蔭日向なく仕へる忠勤者だ。盃をとらすぞ。

近侍三　有難う存じます。併し不調法でございまして。

成正　余のやうな腰拔け者の酒を受けぬと申すか。

近侍三　いゝえ、全く以てそのやうな訳では……。

成正　近侍の者にまで侮られるやうでは、余はよく／＼腰抜けと見える。笑へ、笑へ。余の意氣地なしを大聲で笑へ。併し余はそちたちが可愛いゝばかりに堪へてゐるのだぞ。そちたちが扶持に離れたらどうあらうと思ふと、それが哀れさについ我慢をしてゐるのだ。余の心のうちも知らないで……えゝ、そちが飲まなければ余が飲むわ。

（またぐいと酒を飲む。）

成正　あゝ、何となく蒸し暑い。障子を開けえ。

（近侍うしろの障子をあける。）

成正　あゝ、よい風だ。（更に盃を出して）もう一杯つげ。

（成正は心地よさうに盃を傾けてゐたが、ふと向うの本郷臺に夥しい松明の光が登つて行くのを認めて近侍に。）

成正　今頃あの夥しい光は何だ。

近侍　はい。

（近侍はもぢ／＼してゐて答へない。）

成正　あのもの／＼しい行列は何だ。

（成正は更に問うたが、それを見てゐる内に、自分にも直ぐ千姫の嫁入の道中といふことが分ると、急に荒荒しく。）

成正　障子を立てえ。

（近侍等はあわてゝ障子を閉める。）

成正　（しばらくの間ぢつと默つて考へてゐたが、急に大盃をとり上げて）酒をつげ。

（近侍はおづ／＼と酒をつぐ。）

成正　もつとなみ／＼とつげ。

（成正は盃に一杯になると、それをぐつと一息に飲み干して盃を捨てるや、急に立上つてつか／＼と敷居のところに行き障子を明ける。と、嫁入の行列の灯がしづ／＼と坂を登つて行く。）

近侍一　（成正に近づき）殿樣。

成正　（無言のまゝぢつと光を見てゐる）

近侍　殿樣、夜風がお障りになります。どうかお座へ。

（成正は近侍の言葉を耳にもかけず、やにはに長押に手をかけて槍をとると、鞘を拂ふなりばた／＼と縁側から外へ駈け出してしまふ。）

近侍等　（驚いて）殿樣、々々。

（と、その後を追つて行く。その聲を聞きつけて外の室からもばら／＼と人が飛び出す。惣兵衞も驚いて駈け出して行く。舞臺しばらく空虚。塀の外から人のどよめきが聞え、坂の上の提灯の列が亂れる。やがて惣兵衞等が成正を抱いて這入つて來る。大勢の家臣も一緒にはいつて來る。）

成正　えゝ、離せ、離せ。余は亂心者ではない。離せ。

惣兵衞　殿、お心をお鎭め下さい。（成正を座につかせようとする）

成正　（それに反抗しながら）あゝ、殘念だ。乘物をやり過してしまつた。一日でもいゝ。一夜でもいゝ。姫をこゝに入れぬ先きに、本多づれに取られては。

惣兵衞　殿さま〳〵。（猶鎭めようとする）

成正　え、止めるな。離せといふに。

（成正は抱き止めてゐる人々を力任せに拂ひ退ける。）

成正　（惣兵衞を見て）余を止めたのはその方か。

惣兵衞　はい。手前がまゐります前に但馬守さまがお止めになりました。

成正　では、余を亂心者といつたのはあの但馬だな。

惣兵衞　はい。

成正　（無念さうに）平生の入懇も忘れ、彼までが余を裏切つたのか。

惣兵衞　いえ〳〵、但馬守さまは殿樣のお爲めを思つて、さうお呼びになつたのでございます。

成正　何を申す。余は毛頭亂心者ではないぞ。

惣兵衞　それはよくご承知でございますが、後日殿樣にお咎めのかゝらぬやう、わざとさうお呼びになつたものと存じます。公儀に於ても殿のご胸中はご推察になつてをると申すことでございますから、さういひ遁れますれば必ず重いお咎めはございますまい。

成正　では、その方まで余を亂心者にいたしたいのか。

惣兵衞　いゝえ、決してさやうな儀ではございませんが、只今のやうに申開きをいたしませんでは……

成正　いや、余は氣が狂つて亂入したのではない。口惜しいから斬入つたのだ。腹立たしいから乘物を奪はうとしたのだ。

惣兵衞　しかしそのやうに仰せられましては、むざ〳〵お命を……

成正　その方から見たら、たゞ一言で助かるものをといふのだらう。しかし大御所の空な一言が余をこゝへ導いたことを思うて見い。余にはどうしても僞りはいへない。僞りをいつて助かる心は起らない。余は亂心者となつて助かるよりは正氣の人として死んだ方が心地よいのだ。

惣兵衞　殿さまとしてはさう思召しますのはご無理ではございません。

成正　惣兵衞、かういふことを爲でかした上は、今夜にも討手のものが向ふであらう。さうしたらこの火傷の首を上使の者に渡してやれ。

（成正脇差をとつて切腹しようとすると、ふと先刻自刃した源六郎のことが頭に浮んで來る。）

成正　源六郎の死骸は厚く葬つてやれよ。

（惣兵衞をはじめなみゐる者のすゝり泣きの聲が聞える。）

――幕――

指鬘緣起（三幕）

人物

マニバッダラ　波羅門、國王の師。登場せず

マヤ　その夫人

アヒンサカ　マニバッダラの弟子

ナラダ　その友

グブタ　夫人の侍女の頭

夫人の侍女

石窟の番人

老比丘

場所

印度舍衛城下

時代

古代

第一幕

夫人の部屋。正面に出入の扉がある。右手に小さい扉があつて、次の間に通ずるやうになつてゐる。左手に窓。窓の外は庭。建築も調度も華麗を極めてゐる。夜だけれど部屋の中は晝のやうに明るい。マヤ夫人はグブダと侍女Aに手傳はせながら、鏡のまへで着物を着かへてゐる。もう殆ど着終つたところ。

マヤ　もう少し締めて。

グブタ　この位でございますか。（帶を固くする）

マヤ　もつと強く。

グブタ　このくらゐ。

マヤ　あ、丁度いゝ。あたくし帶がぎゆつと締つてゐないと氣持が悪いの。お腹が締めつけられるやうでないと。

グブタ　ですがそれでは……

マヤ　だつて、恰好が悪かつたら厭ぢやないか。

グブタ　あの、瓔珞は？

マヤ　掛けます。

グブタ　（瓔珞を二つ出して）どちらのにいたしませう。

マヤ　さうね。兩方貸してご覽。

グブタ　はい。（マヤに渡す）

マヤ　（鏡に向つて瓔珞を自分の體につけて見ながら）どつちが似合ふかしら。

グブタ　どちらもうつりが宜しうございます。

マヤ　お前はお世辭がうまいね。——こつちにしておかう。

グブタ　さやうでございますか。（不用になつた方の瓔珞

を仕舞ふ)
マヤ　華鬘は出來てゐるかい。
グプタ　はい、出來てをります。
マヤ　さう、こつちへ頂戴。
(グプタ華鬘をマヤの頸へかけてやる。)
マヤ　今日の花は素馨だね。
グプタ　はい、さやうでございます。香が高くつて、こんなよい花はございません。
マヤ　けれど、いつも〳〵同じやうな色ばかりで面白くないね。
グプタ　わたくしはさうも存じませんけれど。
マヤ　何かかう變つたものはないだらうかね。
グプタ　さやうでございますね。奧樣の樣に何もかもお掛けになつてしまふと、もう當前のものではとても御意に召しませんから。
マヤ　ねえ。グプタ。人間の指を切つて、それに銀の絲を通して掛けて見たらどうだらう。
グプタ　まあ奧樣？
マヤ　ほゝ。それは冗談だけれど、掛けたらきつと綺麗だとおもふよ。
グプタ　でも奧樣、人間の指では華鬘ではなくつて、指鬘になつてしまひます。

マヤ　ほゝゝ、本當にさうだわね。
(侍女Bが少し前から入口のところに來て平伏してゐる。グプタはそれを見ると、すぐその傍にゆく。)
グプタ　ご苦勞さま。行つて來て下すつたの。アヒンサカ樣はおゐでになつて。
侍女B　はい。
グプタ　で、すぐにおいでになるつて。
侍女B　いゝえ、あの明朝上ると仰しやいました。
グプタ　まあ、お前さんも用の足りない人ね。そんな事ちや何にもならないぢやありませんか。
マヤ　(二人の方を向いて)どうしたの。
グプタ　いゝえ、何でございます。此人ではやつぱり無理でございました。あの、わたくしがちよつと行つてまゐります。
マヤ　來られないといふの。
グプタ　なあに、わたくしが參りさへすれば、すぐご一緒にお連れ申します。どうかちよつとお待ち下さいまし。
マヤ　あの、ちよつと。
グプタ　何でございます。
マヤ　(眼で何かいふ)
グプタ　大丈夫でございますよ。奧樣、わたくしが心得てをります。

（グプタ去る。つゞいて侍女Bも下がる。）
（マヤはなほ鏡の前で化粧をつゞけてゐたが、やがて侍女Aに。）
マヤ　あゝ。これでいゝ。――こゝをお片附け。
侍女A　はい。
（夫人の化粧道具を片づける。）
マヤ　それから睡蓮にもつと水を張つておゝき。
侍女　はい。
（侍女は小瓶から睡蓮の鉢に水を注ぐ。）
マヤ　あ。それでいゝ。
侍女　はい。
（侍女A去る。）
（やがてグプタが這入つて來る。）
グプタ　奥様。
マヤ　どうだつたい。
グプタ　お通れいたしました。
マヤ　（嬉しさうに）さう。
グプタ　先生がお留守だからと仰しやつて。なか〳〵おいでにならなかつたのでございますけれども……
マヤ　（微笑しながら）それでおまへ、どうしたの。
グプタ　奥様に急なご用がおありだからと申しまして、無理々々にお通れいたしました。

マヤ　グブタ。ご褒美を上げるよ。
グプタ　え、それはもう是非いたゞきませんでは。ほゝゝ。あの、そこにお待たせしてあるんですが。
マヤ　ぢや直ぐに。
グプタ　畏りました。少々お待ち下さいまし。
（グプタ去る。間もなく美しい青年アヒンサカを伴つて這入つて來る。）
（アヒンサカは夫人を見るとその足もとに平伏して恭しく敬禮する。）
マヤ　よく入らしつて下さいましたこと。あら、そんなになすつてはお話も何も出來ませんわ。お頭をお上げ下さいな。（しづかに男の手をとる。）
（アヒンサカは彼女の手を感ずると一層恐懼してあわたゞしく後すさりする。）
グプタ　アヒンサカ様。おらくになさいましよ。奥様は堅苦しい事はお嫌ひでいらつしやいますから。
アヒンサカ　は、はい。
（グプタは次の間に下つて、茶菓のやうなものを運んで來る。それから下の會話の間に、夫人にちよつと耳打ちをすると、邪魔にならないやうに退出する。）
マヤ　あなたは毎日何をしていらつしやいますの。
アヒンサカ　はい。

マヤ　お退屈でせう。あたくし退屈で退屈で困つてをりますわ。
アヒンサカ　わたくしはそれ程ではございません。
マヤ　さう。では法典を讀んだり、ヴェダを諳誦したりしていらつしやるのですか。
アヒンサカ　はい。
マヤ　でも、あんなこと隨分退屈ぢやありませんか。
アヒンサカ　しかしそれが私達の務でございますから。
マヤ　いくら務でも、あなたのやうなお若い方にはたまらないと思ひますわ。ほゝ、其上お留守居役ぢやなほたまりませんわね。
アヒンサカ　どういたしまして。
マヤ　實は先生は外の人をといつたのですけれど、留守中には信頼の出來るお方でないと困りますから、あたくしからお願ひして、あなたに殘つていたゞくことにしましたの、ほんたうにご迷惑でしたわね。
アヒンサカ　（何かいはうとするがいへないで無言のまゝお辭儀する）
マヤ　でもあたくし、あなたがゐて下さるので氣丈夫でございますわ。あの年寄の執事だけでは心細いんですもの。
アヒンサカ　いゝえ、少しもお役に立ちませんで。
マヤ　あら、そんなに一々お辭儀なんかしないで、もつとおくつろぎなさいましよ。
アヒンサカ　は、はい。
マヤ　本當に遠慮なんかぬきにして。
アヒンサカ　お言葉ではございますが、先生の奥樣は、われわれの奉ずる教理では母上も同じ事でございますから。
マヤ　まあ、厭ですこと。母上だなんて、あなたとあたくしとはたつた二つしか違はないんぢやありませんか。
アヒンサカ　それはさうでございますが……
マヤ　子供の時はよく一緒に遊びましたのね。その時分からあたくしはおはねで。あなたは弱蟲でしたわね。ほゝほゝ。
アヒンサカ　（無言）
マヤ　あなた覺えてゐて。そらいつか二人で森へ遊びに行つた時、あたくしが木の枝をこすつて枯草に火をつけたらそれが急に一面に燃え擴がつて、大きな椰子の木や何かゞめら〳〵燃え出したのを。あなたはあの時聲を出して泣き出してしまひましたのね。
アヒンサカ　（もぢ〳〵しながら）　あの、火急のご用と仰しやいますのは。
マヤ　まあ、そんなにせかなくてもいゝぢやありませんか。
アヒンサカ　はい。しかし夜が更けてまゐりますから。
マヤ　かまひませんよ。あたくし同鄕の人が一番懷しいん

ですの。ゆつくり子供の時の話でもしようぢやございませんか。
アヒンサカ　はい、しかし……
マヤ　しみ〴〵お話をしたいと思つてもつい折がありませんでしてね。あなたこちらに入らしつてからもうどの位になりますの。
アヒンサカ　半年ほどになります。
マヤ　まあ、そんなに前から入らしつてたの、あたくしはつい此間からかと許り思つてをりましたわ。
アヒンサカ　さやうでございますか。
マヤ　それならゐるつて事をちよつと知らして下さればようござんしたのに。
アヒンサカ　でもそのやうなことは。
マヤ　いゝぢやありませんか。ほゝ、あなたはいつになつてもはにかみやね。（ふとアヒンサカのかけてゐる腕輪な見て）まあ、頼もしいこと。あなたはまだこれをかけてゐて下すつたの。あら隠すことはありませんわ。これあたくしがこゝに來る前にお上げした腕輪でせう、こんなに汚れてしまつたのに、よくはめてゐて下すつたのね。
アヒンサカ　（無言）
マヤ　今度いらつしやる時には新しいのをこしらへておいてあげますわ。

アヤンサカ　いゝえ。私はこれで十分でございます。
マヤ　あら、遠慮なんかして。そんなこといはないで、こしらへて下さいつていふものよ。
アヒンサカ　（無言）
マヤ　ほゝ、あなたは……
（間。）
アヒンサカ　先生はどうしていらつしやるでせう。
マヤ　何だつて急にそんな事を訊くんです。
アヒンサカ　何つてことはありませんけれど……
マヤ　旅ですもの何をしてをりますか……
アヒンサカ　先生をそんな風にお考へになつては。
マヤ　どうしてあなたは、そんなに先生のことばかり氣になさるの。
アヒンサカ　いゝえ。あの……
マヤ　大丈夫よ、そんなに心配しなくつたつて。
アヒンサカ　奥樣。
マヤ　なに。
アヒンサカ　いゝえ、何でもないんです。
マヤ　あなたは人が惡いのね。
アヒンサカ　いゝえ、私、そんな……
マヤ　それなら今どうしたの。
アヒンサカ　全く、何でもないのでございます。

マヤ　まあ、をかしな人！

アヒンサカ　（無言）

マヤ　ねえ、アヒンサカ樣。明日はご一緒に何處かへ遊山に參りませうか。あら、何をそんなにそは〳〵していらつしやるの、もつとおくつろぎなさいましといつたら。

アヒンサカ　はい。

マヤ　いやですね。何だつてさう外ばかり氣にしていらつしやるの。

アヒンサカ　雨が落ちて來たやうでございますから。

マヤ　さうを。――あら、ほんたうに、まあ、いゝ雨ですこと。アヒンサカ樣、菩提樹の葉を打つ雨の音つていゝものですわね。

アヒンサカ　あの、奧樣、私、失禮をいたします。

マヤ　歸るんですか。

アヒンサカ　お急ぎのご用でございませんでしたら、お暇をいたゞきたうございます。

マヤ　ぢや、またにいたしますわ。

アヒンサカ　恐れ入ります。ではご免を蒙ります。

（アヒンサカは恭しく禮をなして歸りかける。しかし出口の戸を明けようとすると、どうしても明かないのでつい戸をがた〳〵させる。）

マヤ　どうしたんですの、

アヒンサカ　ご免下さいまし、つい戸が明かなかつたものですから。

マヤ　あら、締つてゐるんですか。どうしたんでせうね。グブタや、戸をおあけ。アヒンサカ樣がお歸りですよ。おや、誰もゐないのかしら。どこへ行つてしまつたんでせう。

（アヒンサカはまた戸をがた〳〵やつて見る。）

（マヤは立つて戸のところに行く。）

マヤ　あなた鳥渡退いてご覽なさい。

アヒンサカ　いゝえ、私がやります。奧樣を煩はしましては。

マヤ　いゝから退いてご覽なさいつてば。

（マヤはちよつと戸に觸つて見る。）

マヤ　（笑ひながら）アヒンサカ樣。これではいくらやつたつて駄目ですわ。――あなた締め込まれてしまひましたのよ。

アヒンサカ　えゝつ。

マヤ　ほんたうにお氣の毒さま。

アヒンサカ　奧樣、ご冗談はどうかお止め下さいまし。

マヤ　あたくし、何もしやしないぢやありませんか。

アヒンサカ　外の時と違つて、先生がお留守の際ではございますし……

マヤ　それだからどうしたの。

アヒンサカ　（眞面目に）奥樣！
マヤ　なに。――あら、こはい顏をして。あなた怒つてゐるんですか。え、もつと怒つて頂戴。あたくしあなたの怒つたところが見たいのよ。
アヒンサカ　私をお嬲りになるのでございますか。
マヤ　いゝえ、あたくしそれが好きなのよ、あなたが怒るとそりや初々しくつて、食付きたいほど可哀らしいんですもの。いつか調弄つたら、あなたあたくしの頰を打つたことがあつたわね。さ、あの時のやうに頰を打つて頂戴。蜥蜴ばれのする程ぴいんと打つて頂戴。
アヒンサカ　（急に哀願するやうに）私は田舍から出て來たばかりの畜生です。どうかこのまゝおかへし下さい。
マヤ　そんなことをいつたつて爲方がないぢやありませんか。あたくしが締めたのぢやないんですもの。
アヒンサカ　どうかそんなとこを仰しやらないで……
マヤ　ほゝゝ、あなた、こはいんですか。こはいことなんか何にもありませんよ。誰もゐやしないんですから……
アヒンサカ　奥樣、何を抑しやるのでございます。
マヤ　あなたは道德堅固ね。さすがは先生のお弟子だけあつて……
（アヒンサカは、人の言葉を聞かないやうにして、默つたまゝ別の戸口に行つて、戸をあけようとする。マヤはしばらくの間ぢつとアヒンサカのすることを見てゐたが、突然冷やかに。）
マヤ　アヒンサカ樣。
アヒンサカ　（無言）
マヤ　アヒンサカさま。……あなたどうしても歸るんですか。
アヒンサカ　どうかお暇を願ひたうございます。
マヤ　（むつとして）えゝお歸り、お歸りとも。嘘つき。畜生！
アヒンサカ　（驚いてマヤを見る）
マヤ　何だつてそんな眼つきをするの。嘘つきぢやないか、大嘘つきぢやないか。意氣地なし！
アヒンサカ　（無言のまゝ首を垂れる）
マヤ　おまへさんこゝへ何しに來たの。――先生のゐないことは分りきつた話ぢやないか。馬鹿！　ほんたうにおまへさんのやうな卑怯な男はありやしない。何故そんなしら〴〵しい顏をしてゐるの。いくら聖者ぶつたつてあたしにはちやんと分つてゐるんですよ。
アヒンサカ　奥樣。
マヤ　知りませんよ。おまへさんは恐いんでせう。恐いのにきまつてゐます。そりや婆羅門の妻と不義することは大罪の內の大罪だからね。さ、お逃げよ。早くお逃げと

いつたら。あゝ、こんなじれつたい人つてありやしない。
アヒンサカ　奥様！
マヤ　あゝくやしい。あたくしこんな恥しい目にあつて！（わあつと泣き伏す）
アヒンサカ　奥様。（傍に寄る）
マヤ　うるさい。あゝ、あたくし見そくなつた。こんな人とは思はなかつた。（起き上りながらヒステリカルに着物をびり／＼と破る）
アヒンサカ　そんなことをなすつては。
マヤ　お前の知つたことぢやない。お放し。あたしにこんな恥をかゝせるなんて。（と、また着物を裂く）
アヒンサカ　奥様。
マヤ　いゝからうつちやつといとくれ。ほんたうに、ほんたうに……
（マヤはそこらのものを手當り次第に壊す。）
アヒンサカ　どうなすつたのでございます。奥様。（また夫人に近づく）
マヤ　うるさい。お放しといつたら。
アヒンサカ（夫人の腕にしがみついたまゝでゐる）
マヤ　放さないのかい。……何故放さないの。邪魔をすると承知しないよ。

（マヤは振りもぎとつて戸口のところに行く。）
アヒンサカ　奥様。
マヤ（戸を烈しく叩きながら）誰かゐないかい。誰か。（遠くで「はあい」といふ返事が聞える。）
マヤ　こゝを明けとくれ。早く、早く。（と、一層烈しく叩く）
アヒンサカ　奥様。
マヤ　お退きといつたら。（突き放す）（やがて外から戸が左右に開く。）
マヤ（アヒンサカを眼下に見下しながら）さ、戸が明きましたよ。お歸り。早くお歸んなさいといつたら。
アヒンサカ（無言、うづくまつたまゝでゐる）
マヤ　何故逃げないの。戸を開けてやつたんだから早く逃げたらいゝぢやないか。
アヒンサカ（無言）
マヤ　煮えきらない人ね。こんなところに居ると立派なお前さんに傷がつきますよ。早くお歸りといつたら。
アヒンサカ　私が悪うございました。
マヤ　何をいつてゐるの。お歸りといつたら。
アヒンサカ　奥様。
マヤ　知りません。
（マヤはグプタが入口のところに立つてゐるのを見る

と、いきなりグプタの體に抱きついてわあつと泣き出す。）

グプタ　（びつくりして）まあ、奥様。どうなすつたのでございます。

マヤ　（抱きついたまゝ泣いてゐる）

グプタ　ほんたうに、どうなさいましたのでございます。

マヤ　あたくし、あたくし……

グプタ　まあ、そんなにお泣き遊ばしましては。

マヤ　あたくし……くやしい……

グプタ　（けげんさうにアヒンサカを見て）アヒンサカ様。これは一體……

アヒンサカ　は、はい。それは何でございます。……

マヤ　（泣きながら）駄目、駄目。その人のいふことなんか聞いたつて駄目。

グプタ　けれども奥様……

マヤ　（怒りつけるやうに）やかましいといつたら。

（間。）

グプタ　まあ、お部屋がこんなに散かつて……

マヤ　（悲しさうに破れた着物を見せながら）グプタや、あたくし、こんなに、こんなにされたんだよ。

アヒンサカ　まあ、奥様、何を仰しやるのでございます……

……

マヤ　さうぢやないか。さうぢやないか。おまへさんがかうしたんぢやないか。

アヒンサカ　とんでもない。外のことゝは違ひます。奥様、そんな……

マヤ　お默り、お默り。今になつて何をいふの。――あゝあたくし悔しい――グプタや、すぐに執事を呼んでおいで。

グプタ　（少し驚いて）執事さんでございますか。

マヤ　何をしてゐるの。はやく呼んでおいでといつたら。

グプタ　はい、（早足に去る）

（マヤはなほ泣きつゞけてゐる。）

――幕――

第二幕

かなり敗頽してゐる物置のやうな石窟の内部。天井が低くつて、部屋は餘り大きくない。正面に入口があるが、入口のところからしばらくの間は壁が狹つてゐる。入口には木造の戸ががつしり締つてゐる。

第一幕より數日後。夜。

アヒンサカは坐つたまゝぐつたりと部屋の柱に倚りかかつてゐる。と、片隅においてあるがらくた物の間からナラダがそつと首を出して　あたりをうかゞ

ふ。併しアヒンサカはその物音に氣がつかないのか、或は氣がついても動くのが面倒なのか、首を上げようともしない。

ナラダは盜み足をし乍らアヒンサカの所に行つて小聲に呼ぶ。

ナラダ　おい。

アヒンサカ　(やうやく首を上げる)

(ナラダは默つてアヒンサカの手を引張る。)

アヒンサカ　何をするのだ。

ナラダ　(小聲に)　いゝから己と一しよに來い。

アヒンサカ　君はナラダぢやないか。

ナラダ　さうだ。

アヒンサカ　どうしてこゝへやつて來たのだ。

ナラダ　そんなことはどうだつていゝ。おい、早く逃げるんだ。(アヒンサカの手を引張る)

(しかしアヒンサカは動かうともしない。)

ナラダ　おい、どうしたのだ。

アヒンサカ　(無言)

ナラダ　歩けないのか。

アヒンサカ　(默つて首を振る)

ナラダ　それなら直ぐに逃げようぢやないか。

アヒンサカ　(無言のまゝ動かない)

ナラダ　何だつてそんなにぐづ〳〵してゐるのだ。

アヒンサカ　駄目だ。

ナラダ　何が駄目なのだ。

アヒンサカ　(絶望的に)　どうかこのまゝにしておいてくれ。

ナラダ　おい、何をいつてゐるのだ。ちやんと手筈がしてあるんだから、君さへこゝを拔け出りや……

アヒンサカ　しかし……

ナラダ　そんなことをいつてゐたら、君はひどい刑罰をうけなくつちやならないぢやないか。

アヒンサカ　(無言)

ナラダ　罪もないのにそんなものを受けるやつがあるか。君が餘り氣の毒だから己はやつて來たのだ。

アヒンサカ　有難う。何とお禮をいつていゝか分らない。しかしおれには罪があるんだ。

ナラダ　つまらないことはいふな。大體のことは己だつて知つてゐるのだ。

アヒンサカ　(無言)

ナラダ　さあ、早く逃げよう。

アヒンサカ　駄目だ。おれは卑しい人間なんだ。

ナラダ　おい、君はどうかしてゐるのかい。

アヒンサカ　そんなことはない。

ナラダ　だつて君は昨日(きのふ)先生の前で調べられた時、奥さんの言葉を一つ／＼是認したといふぢやないか。

アヒンサカ　うむ。

ナラダ　何故そんな事をするのだ。何故奥さんが誘惑したのだと、本當のことをいはないのだ。

アヒンサカ　いや、奥さんのいふ方が本當なのだ。

ナラダ　君は何をいつてゐるのだ。出鱈目のことをいはれて、罪に落されてゐながら、それでもまだそんなことをいつてゐるのか。

アヒンサカ　事實なんだから爲方がない。

ナラダ　（突然友の手をとつて）おい、アヒンサカ。君は實に見上げた男だな。

アヒンサカ　（びつくりしてナラダを見る）

ナラダ　いや、君は罪をひつかぶらうといふんだらう。奥さんに道ならぬ事があつたといつては、奥さんばかりかひいては先生のお名前にもかゝはることだから、何もかも自分に引受けてしまつて、世間には口をつぐまうといふんだらう。

アヒンサカ　そんなことはない。

ナラダ　いや、如何にも君の考へさうなことだ。併し君がさういふ心なら、なほさら己は救ひ出さなくつちやならない。

アヒンサカ　君は買被(かひかぶ)つてゐる。おれは決してそんな高潔な男ぢやない。

ナラダ　ぢや一體どういふのだ。

アヒンサカ　どうか何にも訊かないでくれ。

ナラダ　おい、アヒンサカ。己だよ。この己に何も隱す事はないぢやないか。何故打明けた話をしないのだ。

アヒンサカ　濟まない。本當に君の親切を無にして…

ナラダ　君はまさか奥さんを思つてゐるのぢやあるまいな。

アヒンサカ　いゝや、そんなことはない。

ナラダ　さうだらう。あんな淫蕩(いんたう)な夫人におもひを寄せる筈はないからな。

アヒンサカ　（無言）

ナラダ　そんなら何も奥さんをかばつてやる事はないぢやないか。第一あの女は、そんなことをしてやつたつてちつとも有難いとは思ひやしないよ。

アヒンサカ　（そつと涙をふく）

ナラダ　おい、どうしたのだ。

アヒンサカ　いや、何でもない。――

ナラダ　己はね、此機會に是非奥さんをやつゝけたいのだ。先生を毒するのはあの夫人だからね。一體奥さんは

どんな事をしたんだ。まづそれを聞かせてくれないか。確證を握つてやつゝけさへすりや……。

アヒンサカ　止せ。そんなことをしたつて……

ナラダ　いや、これは君一人の問題ぢやない。實はね、今迄もこの手で二三人やられてゐるんだ。このまゝにしておいたらどんなことになるかしれやしない。

アヒンサカ　けれど……

ナラダ　君は何故さう止めるのだ。

アヒンサカ　君がいくらやつきとなつ　たつて駄目だからさ。

ナラダ　どうして。

アヒンサカ　さうぢやないか。どんなに君がいつたつて取上げられる筈はありやしないよ。相手は先生の夫人ぢやないか。弟子が百人かゝつたつて奥さんの一言にはかなひやしないよ。その上奥さんはあの通り口が達者だし、何といつたところでみんな言ひくるめられてしまふにきまつてゐるぢやないか。

ナラダ　ぢや君が爭はないのはそれなんだね。

アヒンサカ　（無言）

ナラダ　しかしこのまゝぢや……

アヒンサカ　いや、もう何にもいはないでくれ。——だが、どうしてわたしをすぐ所刑しないんだらう。もう先生も歸つて來たんだし、昨日調べも濟んだのだがね。

ナラダ　それはわれ／＼には分らない。

アヒンサカ　餓死させようといふのかしら。昨夜からこゝへ移すと同時に食事を運ばなくなつてしまつたのだ。

ナラダ　食事を運ばない。

アヒンサカ　うむ。こんなことをされるよりは、いつそ一おもひに殺して貰つた方が增しなんだが。

ナラダ　馬鹿なことをいへ。君を殺したくないばかりに、己はかうして來てゐるのではないか。

アヒンサカ　いや、殺されるのが當然なんだ。おれは實に卑しい人間なんだ。

ナラダ　何故君はそんなことばかりいつてゐるのだ。

アヒンサカ　（わあつと泣き出す）

ナラダ　おい、どうしたのだ。

アヒンサカ　さつきはいゝ加減の返事をしたけれども、實は己は奥さんのことをおもつてゐるのだ。

ナラダ　何だつて。

アヒンサカ　此間奥さんに烈しくやり込められた時から、おれは深くおもひ込むやうになつてしまつたのだ。

ナラダ　そんなことがあるものか。道念の堅い君に限つて。

アヒンサカ　いゝや、お恥しいがさうなんだ、自分ぢやはつきり氣がつかないでゐたが——さうだ。今おもふと、お

れは故郷にゐた時分から奥さんの魅力にかゝつてゐたらしい。おれがこゝへやつて來たのだつて、先生の名聲を慕つて來たのだか、奥さんがゐたから來たのだか分りやしない。

ナラダ　君は何をいつてゐるのだ。

アヒンサカ　それでなくつちや、いくら呼びに來られたつて、夜、然も先生の留守に、奥さんの部屋に行くなんてことがあるものか。おれは實に恥知らずだ。

ナラダ　すると奥さんが最初君を呼びに寄こしたんだね。

アヒンサカ　いや、奥さんには罪はない。おれが惡いんだ。おれが惡いんだ。（發作的に泣く）

ナラダ　だつて君は何も道ならぬことをした訣ぢやないんだらう。

アヒンサカ　いや、さう思つてくれ。さう思つてくれ。己はみだらな考にとりまかれてゐるのだ。梵天を穢したのはおれだ。敎を破つたのはおれだ。おれはどんなに罰せられたつて飽足りない男なんだ。

ナラダ　君はひどく興奮してゐるね。そんなに自分を責めゐ事はないぢやないか。君が考へてゐる位のことは……

アヒンサカ　いや、甘い言葉なんかかけないで、どうか酷く取扱つてくれ。其の方がおれは助かるんだ。この、この肉體が寸斷されるか、火炙にでもされない限り、おれの罪は亡びやしない。

ナラダ　そりや敎理の上からいへば邪淫の心は罪惡だ。併し君は少し大げさに考へ過ぎてゐる。そんなに自分で自分を苦しめなくつたつていゝぢやないか。

アヒンサカ　そんな事はない。そんなことはない。――おいナラダ。おれを蹴飛ばしてくれ。おれの手足をずた〳〵に引千切つてくれ。おれは人非人なんだ。人非人……

ナラダ　アヒンサカ。おい、氣をおちつけないか。

アヒンサカ　どうかひどい目にあはせてくれ。おれの身體をぎり〳〵にふん縛つて……

ナラダ　何をつまらないことをいつてゐるのだ。いゝからおれと一しよに來い。

アヒンサカ　駄目だ。駄目だ。

ナラダ　おい、アヒンサカ。こゝに拔穴があるんだ。狹いけれど、どうにかくゞれない事はない。さあ、行かう。

アヒンサカ　放つといてくれ。放つといてくれ。己は救ひ出されるやうな人間ぢやない。

ナラダ　そんな大きい聲をして、番人に聞えたらどうする。さあ。行かう

アヒンサ　駄目だ。駄目だ。放してくれ。放してくれ。

ナラダ　君は奥さんに會つてからすつかりどうかしてしまつたね。

アヒンサカ　どうなつたつていゝ。どうしたつていゝ。己は奥さんのために死ぬんなら本望なんだ。

（ナラダは急にアヒンサカの手を放す。）

アヒンサカ　（泣き乍ら）おれは、おれは人でなしだ。うつちやつといてくれ。うつちやつといてくれ。

（ナラダ怨めしさうに去る。）

（アヒンサカはナラダが去ると地上に突伏して暫くの間泣き續けてゐる。と、戸口のところで人聲がする。）

番人の聲　いゝえ、いけません。いけません。

グプタの聲　いゝからお明けなさいといつたら。外のお方ぢやないんですから。

番人の聲　いゝえ、どなたでもお入れすることは出來ません。

マヤの聲　グプタおどき。――おまへは依怙地な人ね。あたくしが分らないのかい。

番人の聲　（急に調子を變へて）は、これはどうも。

（やがて入口の戸が明いてマヤとグプタが這入つて來る。グプタは先きに立つて明を持つてゐる。）

グプタ　（アヒンサカのそばに寄つて）アヒンサカ様。アヒンサカ様。

アヒンサカ　（突伏したまゝでゐる）

グプタ　奥様がおいでゞす。奥様が。

アヒンサカ　（無言）

マヤ　アヒンサカ様。

アヒンサカ　（無言のまゝ首を上げる）

マヤ　あたくしですよ。分りますか。

アヒンサカ　（驚く）

マヤ　あら、そんなに驚くことはありませんわ。あたしお禮に來ましたのよ。

アヒンサカ　（けゞんさうにマヤを見る）

マヤ　アヒンサカ様。有難う。あたくしあなたのお蔭でほんたうに助かりましたわ。――ですが、あなたどうして先生の前に出た時本當のことを仰しやらなかつたの。あたくしは無論あの晩のことを何もかも喋られることゝ思つて、實は、はら／＼してゐたんですよ。ところがあなたはあたくしの悪い事を一言もいはないんですもの――本當に何とお禮をいつていゝか分りませんわ。

アヒンサカ　（無言）

マヤ　あなたあたくしの事を怨んでゐないんですか。あんな作りごとをいつたんですのに。本當に濟みませんでしたね。お詫びの申様もありませんわ。――まあ、おやつれになつたこと。無理もありませんわね。こんなところに入れられてゐるんですもの。それにもう食事も運んで來ないんですつてね。隨分お苦しいでせう。お察ししま

すわ。あの、あたくし少し蜜を持つて來たんですけれど、お上りになりませんか。
アヒンサカ　(無言のまゝ首を振る)
マヤ　お上りになりませんの。――力がつくんですよ――
アヒンサカ　(無言)
マヤ　あら、こはいんですか。そんなことはありませんよ。あたくし今夜はほんたうに濟まないと思つてお詫びに來たんですから。――まあ、涙なんか流して。どうしたんですの。(しづかに涙をふいてやる)
アヒンサカ　(無言のまゝ夫人の手を拂ふ)
マヤ　あなた怒つてゐるんですか。
アヒンサカ　(せつなさうに)　どうか歸つて下さい。歸つて下さい。
マヤ　さう仰しやられても爲方がありませんわ。あたくしが惡いんですもの。けれどかうしてお詫に來てゐるんですから、ね、アヒンサカ樣。……
アヒンサカ　そ、そんなお詫だなんて……
マヤ　いゝえ、あたくしあなたに宥していたゞかないと、苦しくつて、苦しくつてたまらないんです。
アヒンサカ　そんな事はありません。私は罰せられるのが當然なんです。私は、私は……罪障の深い人間なんですから。
マヤ　罪障が深いなんて仰しやられると、あたくしなほ恥しくなつてしまひますわ。あなたをこんなに陷れたのはあたくしなんですもの。ですからせめて……
アヒンサカ　いゝえ。私になんかかまはないで下さい。私になんか……
マヤ　ご遠慮なさることはないぢやありませんか。何にも上らなかつたらお疲れになりますわ。――あのね、アヒンサカ樣。こゝへは嚴しくつて何にも持ち込むことが出來ませんから、あたくし、體へ蜜を塗つて來ましたの。(ふくよかな美しい腕をアヒンサカの前に差し延べながら)　お舐んなさい。
アヒンサカ　(無言)
マヤ　あら、考へてなんかゐないで……かまはないんですよ。……お舐んなさいましといつたら。(强ひて腕をアヒッサカの口の前に持つて行く)
(間。)
アヒンサカ　(無言のまゝ、盜むやうにそつと夫人の腕に口を當てる)
マヤ　いゝからもつと〳〵お舐んなさいな。
アヒンサカ　(餓鬼のやうに蜜をすゝる)
マヤ　アヒンサカ樣。此間はどうしてあんなに頑固だつたの。……ほゝ、いくらか元氣づいたでせう。年上の人の

いふことは聽くものよ。

（間。）

マヤ　何をするの。（突然腕を引込める）

アヒンサカ　（またマヤにすがらうとする）

マヤ　いけませんといつたら。失禮なことをすると承知しませんよ。（アヒンサカを突放す）

（アヒンサカよろ／＼となつて力なく倒れる。）

（マヤは入口の方に立つてゐるグプタと顔を見合せてにつこりする。）

マヤ　あなたは今日はどうしたの。氣でも狂つたのですか。

アヒンサカ　（力なく）濟みません。濟みません。

マヤ　あたくしはマニバッダラの妻です。滅多なことをすると赦しませんよ。

アヒンサカ　（急に大聲をあげて泣き伏す）

マヤ　何を泣いてゐるの。あなたは本當に變な人ね。

（間。）

アヒンサカ　（苦しさうに）奥樣、どうか歸つて下さい。早く歸つて下さい。

マヤ　え、そりや仰しやられなくつても歸りますわ。あたくしのやうなものが長居をしてはご迷惑でせうから。

アヒンサカ　（くやしさうに）奥樣。

マヤ　なに。

アヒンサカ　あなたは私をお嬲りにおいでになつたのでせう。

マヤ　まあ、あなたは何をいつてゐるの。あたくしは先刻からお禮に來たのだと申してゐるのではありませんか。

アヒンサカ　いゝえ、嘘です。私をぢらしに來たのです。私をいら／＼させて、私の苦しむのを見てお喜びにならうつてんです。

マヤ　あなたは疑ひ深いのね。どうしてそんな風に考へるんです。

アヒンサカ　いや、そんな事はどうだつてようござんす。いゝから、すぐに、すぐに、歸つて下さい。

マヤ　お邪魔をしましたこと。ではアヒンサカ樣。さやうなら。

（マヤが歸らうとすると、アヒンサカは急に夫人の手を捕へる。）

マヤ　あら、あなたまた何をなさるの。

アヒンサカ　待つて、待つて下さい。

マヤ　どうしようてんです、あなたは道にはづれた事をなさるお方ぢやありませんわね。

アヒンサカ　奥樣。私はもう殺される體です。ですからどうか…

マヤ　いけません。グプタが見てゐるぢやありませんか。

今度こそあなたの方が惡いのよ。今度はちやんと證人がゐるんですから、先生に申上げるにしたつて……

アヒンサカ　奥様、どうしてあなたは……

マヤ　あたくしは女の道を守るだけよ。

アヒンサカ　それではあんまりです。あんまりです。さん〳〵人をぢらしておき乍ら……

マヤ　あら、どうしようつてんです。お放しなさいといつたら。放さないんですか。無禮なことをすると番人を呼びますよ。

アヒンサカ　もうどうなつたつて……

（アヒンサカは夫人を押倒さうとすると、グプタが急に走り寄つて、アヒンサカを突き離す。）

マヤ　まあ、何て事をするんでせう。むつゝりした人が一番こはいのね。（グプタと顔を見合せる）

（アヒンサカは突離されたまゝ倒れてゐる）

マヤ　（冷かに）アヒンサカ様。あなたはあたくしの事をそれ程おもつてゐて下さるのなら、何故この間お呼びした時……

アヒンサカ　あの時は……あの時……（泣く）

マヤ　ひとが首尾してやつた時はあたくしにさん〳〵恥をかゝせておき乍ら、今になつてそんなことをいつたつて……

アヒンサカ　あの時は私が弱かつたのです。併しもう生命がないと思ふやうになつたら……

マヤ　厭です。厭です。何といつたつていやです。かうなればあたくしも意地ですわ。あなたが剛情だつたんですから、あたくしも剛情を張り通しますわ。

アヒンサカ　（なほ縋らうとする）

マヤ　（つき放して）何をするのです。いやだといふと、なほしつこくするのね。

（間。）

マヤ　アヒンサカ様。あたくしはあなたを罪に陥れた女なんですよ。それだのにあなたはどうしてそんなに夢中になるんです。

アヒンサカ　いゝえ、そんなにして下さつたからこそ、私はなほ〳〵忘れられないのです。

マヤ　まあ、をかしいのね。

アヒンサカ　此間の晩、奥さんがお怒りになつた時、あの時はじめて、私は本當に嬉しいと思つたのです。

マヤ　何ですつて。

アヒンサカ　奥さんがあんなにお怒りになつたのは本氣だからです。本氣でなくつては、とてもあんなにお怒りになる筈がありません。あの時奥様があんまり眞劍だつたので、私は思はず自分が恥しくなりました。あの前まで

は調弄(からか)はれてゐるのか、嬲られてゐるのか分らなかつたから、實は何にも申上げませんでしたが…

マヤ　駄目です。そんな當推量なんかいつたつて駄目です。あたくしあなたの事なんかちつとも思つてゐるものですか。

アヒンサカ　奥様何故お隱しになるんです。奥様のお心の中は…

マヤ　お默んなさい。そんな出まかせなことをいつて。

アヒンサカ　ぢやあれも冗談だつたのですか。

マヤ　そんなことはどうだつていゝぢやありませんか。それよりもあなたが眞劍ぢやないからいけないんです。

アヒンサカ　だからこんなに申してゐるではありませんか。

マヤ　あなたはあたくしを思つてゐるといふんですか。それなら何故あたくしを憎まないの。ほんたうに思つてゐるのだつたら、相手が反いたら憎んで／＼憎み通すのがあたりまへよ。ところがあなたはあたくしをぐい／＼責めつけないで、有難くもない好意なんか見せようとするから氣に入らないんです。

アヒンサカ　いゝえ、あれはそんなつもりぢや…

マヤ　駄目、駄目。あなたはいつだつて、煮えきらないいんだから。

アヒンサカ　いゝえ、もうあんなことはありません。あんなことは…

マヤ　當になるものですか。

アヒンサカ　本當です、奥様。もうかうなれば人間は強いものです。私は奥様のためならどんなことでもいたします。

マヤ　まあ、あなた口がお上手ね。

アヒンサカ　奥様。どうか私を不便(ふびん)だと思つて下さい。

マヤ　あなたたうとう降參したの。

アヒンサカ　（首を垂れる）

マヤ　ほゝ、さうしてゐると可哀らしいこと。

アヒンサカ　奥様。

マヤ　ぢやあたくしのためならどんなことでもする。

アヒンサカ　え、どんなことでも。

マヤ　併しね、あなたぢや…

アヒンサカ　もう決してそんなことはありません。

マヤ　それではあたくしに指鬘を作つて下さらない。

アヒンサカ　指鬘と仰しやりますと。

マヤ　指(ゆび)の華鬘(けまん)よ。人間の指を斬つて頸飾を作つて戴きたいの。

アヒンサカ　そんなものをどうなさるのでございます。

マヤ　どうしたつていゝぢやないの。あたくしが欲しいん

だから。

アヒンサカ　では人を斬るのでございますか。

マヤ　そうれ、駄目でせう、あなたにはとても出來やしませんよ。

アヒンサカ　しかしいくら何でもそれは……

マヤ　道にはづれた事だといふのですか。それなら何故あなたは人妻に戀慕するのです。人妻に戀することは道にはづれてはいないんですか。

アヒンサカ　（無言）

マヤ　だからあたくし、お止しなさいつて、さつきから申してをりますのよ。こんなこと無理にして貰ひたいわけぢやないんですから。

アヒンサカ　（決然と）私、やります。

マヤ　いゝえ、お止しなさいよ。何にもならないことなんですもの。

アヒンサカ　いゝえ、どうかやらせて下さい。

マヤ　だつてあなたに出來ますか。

アヒンサカ　出來ます。

マヤ　ほんたうに。

アヒンサカ　きつとやります。

マヤ　ぢや、一人の人から指を一本づゝ百本とつて來て下さい。

アヒンサカ　百人斬るんですか。

マヤ　あたくしの體は百人の生命ぐらゐの値打はあるでせう。

アヒンサカ　え、ようございます。やりませう。

マヤ　それをとつて來て下すつたら、あたくしあなたのいふ通りになりますわ。

アヒンサカ　しかしこのまゝでは。

マヤ　劍ですか。そんなものはわけはありませんわ。——グプタ、ちよつと番人をお呼び。

（グプタ戸口のところに行つて番人を呼ぶ。番人が這入つて來る。）

番人　何かご用ですか。

マヤ　あ、あの、おまへのそこに下げてゐる劍をお貸し。

番人　これでございますか。

マヤ　あゝ。

番人　お言葉ではございますが、外のものと違ひまして、これは……

マヤ　おまへは何でも「はい」といふ返事が出來ないのね。

番人　いゝえ、さういふわけではございませんが、これだけはどうも……

（アヒンサカは矢庭に劍を奪つて、その場に番人を斬り倒す。）

マヤ　まあ、あなたは思つたよりも強いのね。さ、指をお落しなさい。

（アヒンサカ番人の指を斬る。）

マヤ　（頸飾をはづして、ある程の寶玉をばら〳〵と落してしまひ、白金の紐だけ渡す）これにお通しなさい。

（アヒンサカ無言のまゝいはれる通りにする。そして指を通した紐を自分の頸にかける。）

マヤ　あと九十九本よ。

アヒンサカ　あと九十九本。

（アヒンサカは血刀を下げたまゝ、蹌踉として木戸を明けて外へ出て行く。）

――幕――

第三幕

舍衞城附近の闍梨加林。

林の中を街道が通つてゐる。道は正面の中央から眞直ぐにずつと奥へ走つてゐるが、可成り先のところで右にうねつてゐる。

道の兩側は足も踏込めないほどいつぱいの立木と雜草。道ばたに死體が二つ三つ轉がつてゐる。アヒンサカも死骸の間に突つ伏したまゝ倒れてゐる。

第二幕の翌朝。未明、梢の方はいくらか白みかけてゐるが、地上はまだ眞つ暗である。

アヒンサカ　うむん。うむん。（倒れたまゝ呻いてゐる）

（黒い鳥が一羽、ものに驚いたやうに突然叢の中からばた〳〵と飛び立つ。）

アヒンサカ　うむん　うむん。

（アヒンサカはなほしばらく唸つてゐたが、急にむつくりと起き上る。血の氣の失せた蒼白い顔は、この世の人とは思はれない形相。頸には人間の指を何本も通した白金の紐をかけてゐる。彼は起き上つたけれど、何をするために起き上つたのかどわすれをしてしまつて、しばらくの間は血刀を下げたまゝふら〳〵としてゐる。突然薄明のうちに木の實を見つけると、「これだ」といはぬばかりにその方へ飛んで行つて、いきなり刀でそれを切り落す。）

（アヒンサカは果實を半分に割つて、その汁をだくだくと飲み初めたが、ふとまた何かを思ひ出したらしく、急いで木の實を捨てゝしまふ。）

（それから彼は身をこゞめて、恐る〳〵頸にかけてゐる指鬘に手を觸れる。そして切り取つた指を一本々々數へはじめる。）

アヒンサカ　（口の中でそつと）一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、九つ、……これつきりかしら。

（彼は寂しいやうな、もの足りないやうな氣持がすると、もう一度、前よりもずつとゆつくり數へ直す。）

アヒンサカ　一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、九つ、……（ためいきをつく）

（無言のまゝ彼はなほしばらくの間指鬘をいぢくつてゐる。そのうちに血みどろな人間の指なんか持つてゐるのに堪へられなくなつて、頸からはづす。）

アヒンサカ　えゝ、こんなもの。

（と、いきなり地上にたゝきつける。）

アヒンサカ　こ、こんなことが出來るものか。

（力なく街上に倒れる。）

（夜鳥の聲が間をおいて聞えると、街道を急いでこちらにやつて來る者がある。手に明を待つてゐるが、さう明くないので倒れてゐる人には氣づかないらしい。）

（アヒンサカは人の近づいたのを知ると、本能的に殺戮慾が燃え上つて、いきなり後から斬りつける。）

（男はばつたりと地上に倒れる。）

（アヒンサカはなほ劍をかまへたまゝ、ぢつとそれを見てゐたが、ある快感を覺える。）

（それから男の手を引つ張り上げて指を斬らうとする。併し斬れない。手を放してしまふ。けれどまた手を引き上げる。矢張り斬れない。斬ればいくらでも斬れる訣なのだが、どうしても斬れない。）

（急に「えゝつ」と死體を蹴飛ばしたなり。）

アヒンサカ　畜生。畜生。畜生。

（と、叫びながら、突然傍の木の枝や雜草を滅茶苦茶に切り飛ばす。）

（しかし切つても／＼心が癒えないので、つひに。）

アヒンサカ　駄目だ。

（と、地上にぶつ倒れる。）

（夜がだん／＼明けて來る。年老いた比丘がひとりしづかに歩いて來る。そして倒れてゐるアヒンサカを見て。）

老比丘　どうしたのです。

アヒンサカ　（たゞ泣きつゞけてゐる）

老比丘　（アヒンサカに近づいて）　どうなすつたのです。お怪我でもしたのですか。

アヒンサカ　（なほ泣いてゐる）

老比丘　氣をしつかりお持ちなさい。愚僧が見て上げませう。

（老比丘が抱き起してやらうとすると、アヒンサカは急に猛然として立ち上つて、老比丘を突き離す。）

アヒンサカ　駄目だ。

老比丘　どうしたのです。

アヒンサカ　駄目だ。助けてくれ。

（かう大聲に叫んで、血刀を振り廻しながら道のない森の中へ逸散に駈け込む。）

（そして叢の中を轉びつ、起きつ、なほ「駄目だ。助けてくれ。」と泣き叫びながら、どん／＼奥の方へ這入つてしまふ。）

（老比丘はアヒンサカの後姿をぢつと見送りながら無言のまゝ合掌する。）

（と、朝日の爽かな光が密林の間を漏れて流れ込む。）

（遠くから「助けて、助けて。」といふアヒンサカの悲痛な叫びがなほ幽に切れ／＼に響いて來る。）

――幕――

第一部　終り

同志の人々

人物

橋口吉之丞　寺田屋騒動に加擔した薩藩の士
谷元兵右衞門　同
林庄之進　同
有馬休八　同
堤小兵衞　同
是枝萬介　同
吉田淸左衞門　同
永山彌一郎　同
田中河內介　同、中山大納言の家臣
其息磋磨介　同
見張の役人

時代

文久二年五月一日。夕刻より夜にかけて。

場所

船の中。

第一幕

大きな和船の艫の間。

右側は艫の戸立、左側は隔の壁板で仕切られてゐる。壁板には出入の引戸がついてゐるが、外から堅く錠がおろされてゐる。

正面は腰の船板。その上部に四角い小窓が二つほど開いてゐて、そこから夕日があか／＼と差込んでゐる。部屋の中に太い柱が一二本。凡てが古びた感じ。

有馬は立つて小窓から外を眺めてゐる。橋口は腕をまくし上げて谷元に傷を卷きかへて貰つてゐる。堤は無聊さうに柱にもたれかゝつてをり、林と、永山は默然と端坐してゐる。是枝は入口から遠い、隔の方の柱の蔭に腹匍ひになりながら、金物のやうな堅いもので頻に床板を叩いてゐる。そしてまた床に耳を押し當てゝは、何かを聽き取らうとしてゐる。その近くに吉田がゐる。年齡は二十三四歲前後の者が多い。年長者の永山にしても三十歲は越してゐない。髮は皆薩摩風の小髻に結んでゐる。但し何れも無刀。

谷元（橋口の腕の晒を解き終へると、窓のところに立つてゐる有馬に）おい、有馬。

有馬（振りかへり）何だ。

谷元　少し寄つてくれ。蔭になるから。
（有馬無言のまゝ少し寄る。）
谷元　（傷口を見ながら）大分肉が上つて來たな。
橋口　（自分も見ながら）うム、お蔭で大變よくなつた。
谷元　併しまだ痛むだらう。
橋口　いや、もう大したことはない。今日は八日目だからな。
谷元　もうさうなるかな。あゝ、あの晩のことを思ふとむしやくしやする。
永山　おい、その話は止せ。もう過ぎたことだ。
（谷元話を止めて繃帶をしかへてやる。）
吉田　（床に耳を押しつけてゐる是枝に）どうだ。何か聞えるか。
是枝　駄目だ。
吉田　波が高いせゐかな。
是枝　これだけやつて居るのだから通じない筈はないのだがな。（又こつ〳〵と床板を叩く）
谷元　（晒を巻きながら）少しきついか。
橋口　いや、丁度いゝ。
谷元　さうか。――さ、これでいゝ。
橋口　有難う。
谷元　（有馬に）おい、まだ小豆島は見えてゐるか。
有馬　いや、もうとうに見えなくなつてしまつた。
谷元　ぢや間もなく備後灘だな。
橋口　（獨ごとのやうに）あゝ、あと幾日かゝるかな。
堤　（あくびをし乍ら）何處へ。鹿兒島までか。
橋口　うむ。
堤　汝は馬鹿だな。國へ歸れると思つてゐるのか。
橋口　己達は歸りたくなくつても、送り返されるのだから爲方がないさ。
堤　だからおめでたいといふのだ。汝は自分の行く先を知らないのか。
橋口　何をいつてゐるのだ。此船は眞直に薩摩へ行くのではないか。
堤　おい、國のことを考へるよりも、まあ、辭世の句でも考へておけ。
橋口　餘計な御世話だ。辭世なんか寺田屋へ集る前にちやんと書いておいた。
堤　ふん。寺田屋か。馬鹿々々しい。
橋口　何が馬鹿々々しいのだ。
堤　汝はあれを馬鹿々々しいとは思はないのか。
橋口　おい、堤。汝は眞面目でいつてゐるのか。あれは己達が生命がけでやつた爲事ではないか。
堤　だから一層馬鹿らしいといふのだ。己達はあんなに意

氣込んでゐたのに、其結果は何た。こんな風に押し込められてしまつたゞけではないか。

橋口　己は今のことをいつてゐるのではない。あれを企てた精神をいつてゐるのだ。

堤　駄目だ〳〵。そんなものが何になる。己達は勤王だの、討幕だのと大きな事をいつたつて、一體何をやつたのだ。何一つ爲出かしてゐないではないか。成程われ〳〵は幕府と内通してゐる九條關白を夜討するといつてこの間伏見の寺田屋に集つた。併し門口から一歩も踏み出さない内に、藩から取り鎭めに來た者のために、みんな叩き伏せられてしまつたのではないか。

橋口　あれは叩き伏せられたのではない。君命だといふから一時を忍んだまでだ。取り鎭めに來たのは高が八九人の小人數だから、斬り捨てゝ通るのは容易の事だが、彼等も「頼む、頼む。」と哀願するし、殊には殿樣にご憂慮をおかけ申してはと思つたから、一先づ思ひ止つたたけではないか。

堤　貴樣はあの時鎭撫使と斬合をやつて手痛い傷迄受けて居るのに、まだ目が醒めないのか。己達はこんなに幽閉されてしまつたのに、まだそんななまぬるいことをいつてゐるのか。

橋口　なに。

谷元　しつ。

（外で重たい錠を開ける音がする。人々は默つてしまふ。是枝も床を叩くことをぴたりと止める。やがて見張の役人が這入つて來る。）

役人　永山彌一郎は居るか。

永山　（昂然と）居る。

役人　お目附からお呼び出しだ。

永山　目附？――よし。（心に決するところあるものゝ如く出て行く）

（役人去る。續いて錠の締まる音。間。）

有馬　（不安さうに）何で呼び出されたのかしら。

堤　大抵分つてゐるではないか。

有馬　分つてゐる――そんなことが、そんなことがあるものか。

橋口　永山どんが殺されるといふのか。馬鹿なことをいへ。

有馬　さうだとも。堤は先刻からいやにおぢけづいて居るのだ。

橋口　若し己達が殺されるものなら、かうして國許に護送される筈はない。京にゐた間にとうに斬られてゐる筈だ。

堤　お前等は何處迄人がいゝのだ。こんなに欺かれ、陥れられてゐても、それがみんなに分らないのか。何よりも此間の寺田屋のいきさつを考へて見るがいゝ。君命だと

稱して已達を取り鎭めに來た使者たちは何といつた。「暫く待て、殿も固よりご同意のことであるから、一先づ邸へ歸つて殿にお目通をしてくれ。その上で打ち立たれても遲くはあるまい。」さう繰返し／＼賴んだではないか。相手は同藩の者であるし、殊に君命を帶びて來たのであるから、已達は心殘がしたけれど一擧を中止して、錦小路のお邸へついて行つたのだ。ところがどうだ。邸內に這入るや否や、殿にお目通を許されるどころか、直に座敷へ押し込められてしまつたではないか。それから四五日押問答をした揚句が、謹愼のまゝ國元へ護送だ。凡てがかういふ遣り口ではないか。それ故今度國許へ送るなぞといつても、何處へ送られるのか分るものか。

谷元　いや、それは考へ過しだ。當藩は先君以來勤王のお家柄だから、われ／＼の義擧に關しては必ず御憐察があるに相違ない。

堤　まあ、おめでたい夢を見てゐるがいゝ。(是枝が床板を叩いてゐるのを見て)うるさいな。いつまでそんなことをやつてゐるのだ。

是枝　(無言のまゝ首を上げる)

堤　止さないか。見張の者にでも見つかると厄介だぞ。

是枝　大丈夫だ。分らないやうにやつてゐるから。

堤　いくらそんなことをやつたところが下に通じるものか。

是枝　どうして。

堤　田中どんは船底にはゐやしない。

是枝　いや、そんな筈はない。河口で乘船する時、河內介どんと磋磨介どんが、この下の部屋に入れられるところを已は確に見たのだ。

堤　その時はどうあらうとも、もう居やしない。

是枝　汝は何でそんなことを言ひ張るのだ。

堤　田中どんはわれ／＼の同志だから、護送をするなら、此部屋に入れるのが當然だ。それをわざ／＼船底の別な部屋に押込めたといふのは、はじめから底意があるからではないか。それが汝には讀めないのか。

是枝　いや、それは思ひ違ひだ。田中どんは已達と違つて中山大納言殿のご家來だから、別の部屋に入れられるのに不思議はない。

堤　ところが今はその主にさへ見離された體ではないか。

是枝　いや、見離されたのではない。主人は公卿だから、幕府を憚つて引き取られないだけのことだ。併し幸に當藩で御庇護あつて、已達と一しよに薩摩へ護送されるからは……。

堤　おい、是枝。已達すら今は風前の燈火ではないか。他家の家來、まして主に離れた者が何で安穩の筈がある。

吉田　本當にもうやられたのかしら。

堤　うむ、とうにやられてゐるとも。
是枝　いや、そんなことはない。……そんなことがあつてたまるものか。
堤　いや、この推量に誤はない。何なら己は賭をしてもいい。
橋口　堤。何をいふのだ。人の患に賭をするといふことがあるか。
是枝　汝は一體田中どんに怨みでもあるのか。何故先刻からそんな事ばかりいつて居るのだ。
堤　いや、意趣も遺恨もない。それどころか實に落着いた立派な仁だと思つてゐる。寺田屋のあの騷動の最中にも、河内介どんは悠々と軍扇を使つてゐて、少しも動ずる景色が見えなかつた。己はそれを見てほと〳〵感服してゐる。しかしどれ程の器量人でも、行きどころがないやうになつては……。
是枝　もう止めてくれ、そんな話は。（また床を叩く）（間。）
谷元　大分しぶきが飛び込むな。
林　いよ〳〵備後灘にかゝつたのだらう。（間。風の音。波の音。）
吉田　おい、矢張何にも聞えないか。
是枝　（無言。たゞ叩いてゐる）
吉田　本當にやられてしまつたのかしら。
是枝　（無言）
橋口　通じないのか。――おい、己に貸して見ろ。
是枝　（元氣なく叩く物を捨てる。）（橋口代つて床板を叩く。）（間。）
是枝　永山どんはどうしたんだらう。大分長いな。
谷元　もう歸つて來さうなものだ。
有馬　さうだな。
堤　いや、今度は己達の番だ。
是枝　おい、泣きごとは止めないか。
堤　己は本當のことをいつただけだ。
是枝　何が本當のことがある。汝は生命が惜しいのでびくびくしてゐるのではないか。
堤　汝は生命が惜しくないのか。
是枝　なに。
堤　まあ、お互ひに後生を願はうよ。
是枝　あゝ、こんな奴が同志だと思ふと……。
堤　ふん、汝達はたゞ强がつてゐるのだ。
是枝　强がつてゐるとは何だ。
堤　さうではないか。內心では心配でたまらないのだが、强ひて空威張をして自分の弱さを隱さうとしてゐるのだ。

是枝　えゝ、いはしておけば。
堤　さうでなければ、何故永山どんの事をそんなに心配するのだ。歸つて來ようと歸つて來まいと平氣な筈ではないか。
是枝　無禮なことをいふな。（急に堤を擲りつける）
堤　何をするのだ。（擲り返さうとする）
有馬　（堤を止める）おい、止さないか。止さないか。
谷元　（是枝を止めながら）おい、是枝、是枝。
是枝　離せ。こんな腰拔は成敗しないと。
堤　腰拔とは何だ。
有馬　（堤を止めながら）おい、止さないかといふのに、お互ひに同志の者ではないか。
堤　もうかうなれば同志もくそもあるものか。
谷元　おい、何をいふのだ。是枝も止さないか。內輪喧嘩なんか見つともないではないか。
（强ひて兩方を引き離す。）
橋口　（けたゝましく）是枝。是枝！
（きまづい間。）
是枝　何だ。
橋口　おい、聞える。
是枝　聞える。本當か。（床に耳を押し當てる）
橋口　（床を叩くと、自分もまた耳を押しつける）ほら。

是枝　うむ、聞える。聞える。――どれ、己(おい)に貸して見い。（叩いて耳を當てる）うむ、確に聞える。――おい、みんな。田中どんは生きてゐる。下から合圖が聞える。
林　なに、田中どんが。
是枝　（床に伏したまゝ、船底に向つて大聲で叫ぶ）おうい、田中どん！
谷元　しつ、そんな大きな聲を出す奴があるか。
是枝　（心配さうに）見張に聞えたか。――まあ、谷元。ちよつと耳を當てゝ見ろ。本當に聞えるのだ。おい、みんなも聞かないか。
橋口　（伏せつたまゝ）おい、下でもどん〳〵叩いてゐるぞ。
是枝　さうか。ぢやこつちでもどん〳〵叩いてやれ。
（谷元等二三の者も耳を床に當てる。）
是枝　聞えるだらう。
谷元　うむ。
是枝　あゝ、何だか胸がどき〳〵して來た。
橋口　かうなるとこの位の合圖ではもの足りないな。
是枝　あゝ、こゝに穴を刳り明けて、礒磨介どんと話がして見たい。
谷元　（起き上り）確かに田中どんは存生だ。
是枝　おい堤。先刻の賭はどうした。
橋口　はゝはゝ、これは一言(いちごん)もあるまい。

堤　いや、糠悦といふこともある。
是枝　何をいふのだ。不吉なことをいふな。それ程疑はしくば床へ耳を當てゝ見るがいゝ。
（その時突然外で重たい錠をはづす音がする。一同緊張する。）
（戸が開くと、永山が沈んだ顏をして這入つて來る。やがてまた戸が締まる。）
是枝　どうだ。永山どんも歸つて來たではないか。
林　その爭はもう止めないか。（永山に）實はみんなお前のことを心配してゐたのだ。
永山　さうか。それはどうも……。
林　で、何の用事だつたのだ。呼び出されたのは。
永山　おい、車座になつてくれないか。談合したいことがあるのだ。
（一同車座になる。）
永山　實は日附から難題を持ちかけられたのだ。それで今迄押問答をしてゐたのだが、どうにも自分だけでははからひかねたから、お前等の意見を聽きたいと思つて歸つて來たのだ。
有馬　難題。それはどういふことなのだ。
堤　今更改まつてきく程のことはない。きまつてゐるではないか。
橋口　そんなにいひ澁ることはない。己達はみんな覺悟してゐるのだ。
永山　いや、われ／＼の身命にかゝはる事ではない。それどころか向後は却て寛大な取扱を受けることだらう。併しさうなるためには、己達はある非道なことを行はなければならないのだ。
有馬　一體何をしろといふのだ。
永山　この船底にゐる田中河內介殿父子を殺害しろといふのだ。
吉田　なに、田中どんを。
永山　さうだ。
是枝　（突然堤を睨みつけ）堤、それは何だ。
是　己は別に何にもしやしない。
是枝　噓をいへ。今「それ見ろ。」といはぬ許りの目附をしたではないか。貴樣は人の患を喜ぶのか。
永山　おい、控へないか。まだ話は濟まないのだ。
谷元　で、どういふ訣で田中どんを殺せといふのだ。
永山　それはいふ迄もなく幕府を憚つてのことだ。寺田屋の一件以來、田中どんは身を寄せるところもない有様であつたから、藩では行きがゝり上ひとまづ田中どんを引き取つて、己達と共に薩摩へ送ることにした。これはお前達も知つてゐることだ。ところが主すら引き取らぬ謀

叛人を、殊更藩で庇護するといふことは、幕府に對して如何にも事を構へるやうに聞える。だからどうしても田中どんを國に匿ふ訣にはいかないといふのだ。そこで向うに着かぬ内に是非とも己達に處分をしろといふのだ。

是枝　そんな理不盡なことがあるものか。獵師すら窮鳥が懷に入れば射たぬといふではないか。一旦田中どんを匿つておき乍ら、途中から變替をするとは何事だ。それこそ薩藩の名折ではないか。

永山　いや、それは己もどの位いつたか分らない。併しどうしても受けつけられないのだ。

堤　さうだらう。それが分る位なら、公武合體なぞと煮え切らぬことは唱へない筈だ。藩の重役どもは何といつても江戸が恐いのだから、田中どんなどはどう扱はうとも、幕府の機嫌を損ねない方が大切なのだらう。

永山　さうだ。何處までもさういふ肚なのだから己は實に困つてしまつたのだ。

吉田　さうでなければ己達もこんな風にはなりやしなかつたのだ。

橋口　いや、今は愚痴をいつて居る場合ではない。――永山どん、何故同志であるわれ〳〵に殊更田中どんを殺せといふのだ。己にはそれが呑み込めない。

永山　それはかうだ。表向藩で手を下せば、田中どんの主である中山家に義理が立たぬ。さうかといつていつまでもこのまゝにしておいては幕府の怨を買ふ。そこで同志の間に仲間割が起つて殺された體にすれば、藩としてはどちらに對しても不義理にならないで濟む。それ故是非とも己達の手でやつてくれとかういふのだ。それからなほ目附の話では、若し己達が此役目を果せば、自然幕府への義理合もよいから、歸國の上は寛やかな取扱……。

有馬　寛やかな取扱とは。

永山　歸國の上は二三ケ月の輕い謹愼で濟ませるといふのだ。

堤　そんな話は當てになるものか。

谷元　いや、それは差し迫つた問題ではない。それよりも己達はこれを引き受けるか、引き受けないか、それをきめるのが眞つ先だ。

林　若し引き受けなかつたらどうなのだ。

有馬　それこそ重く罰せられるだらう。

谷元　いや、己達のことは措いて、田中どんの身體はどうなるであらうといふのだ。

堤　己達が拒めば、それは役人どもが殺すまでだ。そして表向はどこまでも己達の爲業にされるだらう。

永山　さうだ。恐らくさういふことになるだらう。

吉田　では、田中どんはどちらにしても……。

永山　さうだ。
林　それならもう談合するせきはないではないか。
是枝　ないとは。
林　氣の毒ながら田中どんに犧牲になつて貰ふより外はない。
是枝　では、田中どんを殺さうといふのか。
林　どちらにしても助からぬ人なのだから、止むを得ないではないか。
是枝　いや、己は不同意だ。同志の者を殺して自分達の罪を輕くして貰はうなぞとは人非人の爲業だ。己にはそんな得手勝手なことは出來ない。
林　いや、これは決して自分の利得のためではない。己達が再擧をはかる上には……。
是枝　再擧！　こんな狀態で再擧なぞ計れるものか。
有馬　いや、謹愼さへ許れさへすれば、己達は又どんな働でもすることが出來る。やがては藩論を覆すことも出來よう。いや、是非とも天下を覆さなければならないのだ。
是枝　さうするためには猶更田中どんのやうな謀士が必要ではないか。己達は身代に立つても是非田中どんは生かさなくつてはならない。
堤　己は身代に立つことなぞは迷惑だ。第一そんなことは申し出しても取り上げられる筈がない。

是枝　汝は先刻から田中どんの死を祈るやうなことばつかりいつてゐたが、それでそんなことを唱へるのだな。
堤　己は小さな行きがかりでいつてゐるのではない。その證には外の者も皆同じ意見ではないか。
是枝　おい、みんな。何故今度に限つて、ひねくれた奴と一しよになるのだ。何故田中どんを殺さうといふのだ。
橋口　是枝どん、お前は田中どんとは別懇の間だから、不同意なのは無理はないが、併しかういふ事情であつて見ればもう爲方がないではないか。
是枝　爲方がないとは何だ。おい橋口、己達は生死を誓つた同志ではないか。生きるときは一しよに生き、死ぬときは潔く一しよに死ぬのが道ではないか。
永山　では、汝はどうしようといふのだ。
是枝　田中どんのために死んでやるのだ。田中どんを救ふために根かぎり戰つて、力が盡きたらみんな一しよに死んでしまふのだ。
谷元　いや、それは暴論だ。そんなことをして役人を傷けたところが何になる。たゞ寺田屋の二の舞をやるだけではないか。それで田中どんが助かるのならいゝ。田中どんも死に、己達も死に、同藩の役人たちも死ぬだけではないか。
是枝　汝達は今まで死を覺悟してゐたのではないか。それ

が二三ケ月の謹愼で濟むと聞いたら急に生命が惜しくなつたのだな。

林　おい、是枝、何をいふのだ。われ〳〵がかうした押し込めの恥辱を忍んで、今日まで切腹をしないで來たのは何のためだ。たゞ再擧を計りたいばかりではないか。寺田屋でこそ失敗をしたけれどこの次には、この次こそ皇國を安ずる偉業を成就させなくつてはならないのではないか。われ〳〵は大事を控へてゐる身體だ。大事の前には心を鬼にしなくつてはならない。そのためにはある時は同志をも、ある時は親友をもあやめる位の苦肉がなくつては、とても大業は出來やしないぞ。

是枝　それが同志の者の意見か。それでも汝達は田中どんと同志だといふのか。あゝ、己と同じ意見の者はないのか。一人もないのか。（永山の方を向いて）永山どん、あんたゞけはそんなことはありますまいな。

永山　（無言）

是枝　何故默つてゐるのだ……あゝ、貴殿も矢張……。

永山　外に思案はないではないか。己は目附から此話を聽かされた時既にさう思つた。併し自分だけでは計らひかねたからみんなの意見を求めたのだ。ところが多數のものも同じ意見である以上、もう引き受けるより外はないではないか。

是枝　（力なく座に突つ伏してしまふ）

堤　併し己達が引き受けるとして、誰が一體その任に當るのだ。

永山　さうだ。それが一番難關だ。

谷元　敵を斬るのは何でもないが、同志を斬りに行くのはたまらないな。

橋口　それは誰にしてもいやなことだ。併し引き受けるときめた上はやらない訣にはいかない。どうだらう。誰かれといふより籤を引くことにしては。

有馬　成程。それがいゝだらう。

林　では己が籤を作らう。だが、何人行くことにするのだ。

橋口　相手は二人だから三人もあつたらいゝだらう。

林　よし、それでは長いのを三本作るからそれを引いた者は行くんだぞ。

（林、紙を裂いて紙撚を作る。）

（間。船に當る波の音。風の響。）

林　さあ、出來たから引いてくれ。

橋口　どうも籤を引くつて、いゝ氣持のものではないな。——えゝ、思ひ切つて。（籤を引く）助かつた。短い。

林　では、その次ぎ誰か。（籤を前に出す）

是枝　（突然起き上つて籤をみんな奪つてしまふ）えゝ、止めてくれ、こんなもの。

林　おい。何をするのだ。
堤　卑怯ではないか。汝は氣おくれがしたのか。
是枝　いや、それは己が引き受ける。
吉田　汝と誰が。
是枝　己ひとりでいゝ。
吉田　けれども……。
是枝　こんなことは誰にしたつて厭なことだ。だから己ひとりで澤山だ。
橋口　だが、汝は田中どんを斬ることについては今まで不同意を唱へてゐたのではないか。
是枝　さうだ。
橋口　それだのに何故引き受けるのだ。
是枝　どうしても助からないものなら、己が殺してやりたくなつたのだ。
谷元　併し汝は田中どんとは親しい間柄ではないか。
是枝　うむ、それだから引き受けたいのだ。どうか己をやらせてくれ。己は二人を立派に死なせてやりたいのだ。
谷元　さうか。さういふ心なのか。
林　併しひとりで行くことは。
是枝　いや、大丈夫だ。きつと己がやつて見せる。どうか己に任せてくれ。
橋口　どうだらう。では、是枝に任せては。
堤　己に異存はない。外の者はどうだ――（見渡して）皆異存はないやうだ。
永山　それではこのことを目附に答へなくつてはならない。是枝も同道してくれ。
是枝　（無言のまゝうなづく）
永山　（戸のところへ行つて）お役人衆、ご面倒ながらお開け下さい。

（外で錠を明ける音がする。その間是枝はさつき合圖を取り交はした床のところに立つたまゝ、ぢつと下を見てゐる。やがて戸が開いて二人の姿が外に消える。また錠を締める音。小窓から差し込んでゐた光がもう薄れてゐる。烈しい風の音。）

――幕――

第二幕

同。船底の一室。

小さな、きたない部屋。天井に格子のはまつた、四角の穴がある外何處にも明いたところがない。そこが出入口でそのすぐ下に粗末な梯子段がついてゐる。
第一場と同じ日の夜。
外は風の音がすさまじい。
田中河内介とその子の磋磨介とが默然として坐つて

ゐる。二人とも無刀。礎磨介は床の上をぢつと凝視してゐる。しばらくそのまゝの狀態が續く。

河內介　礎磨介。

礎磨介　はい。

河內介　何をそんなに見てをるのだ。

礎磨介　はい。

河內介　どうしたのだ。

礎磨介　いや、あんな小さな體をしながら、あんな大きなものを運んでゐますから。

河內介　羽蟻を見てをるのか。

礎磨介　所在がないものですから、あれを何處へ運んで行くかと、先刻から見て居るのです。

河內介　この船も餘程古いな、羽蟻が湧くやうでは。

礎磨介　どうせわれ〳〵を護送するやうな船ですから、新しい氣遣はありません。……併しよく疲れないものですな。あんなに休まずにやつてゐて。

河內介　うム、實際根氣よく働いてゐる。

（間。二人ぢつと床の上の蟻を見てゐる。）

礎磨介　父上。

河內介　うム。

礎磨介　動いてゐるものを見ると羨しくなりますな。

河內介　（答へない）

（間。）

河內介　おゝ、また大分飛んで來た。

礎磨介　（突然扇でばた〳〵と羽蟻を叩き殺す）

河內介　何をするのだ。止せ。取り盡せるものではない。それにこれはさう刺しはせぬから大丈夫だ。

礎磨介　いゝえ、刺すからではありません。癪にさはるから殺してゐるのです。

河內介　何がそんなに癪にさはるのだ。

礎磨介　見てゐるうちに急に腹が立つて來たのです。

河內介　はゝはゝ、蟲に腹を立てる奴があるか。

礎磨介　いゝえ、蟲でも何でも、かうして自由に飛んだり、步いたりしてゐるのを見ると憎くなつてまゐります。

河內介　所在がないとつまらぬことにまで腹を立てるな。

礎磨介　どうもこんな奴に目の前を飛んで步かれると、面當をされてゐる樣な氣がしてたまりません。どうだ。大きな體はしてゐてもお前なぞは動けないのだらう。押し込めをくつてゐるのだらう。口惜しかつたらかうやつて飛んで見ろ、步いて見ろと、寄つてたかつて……えゝ、畜生。（と、また叩く）

河內介　蟲を嫉むやうになつては、われ〳〵の境涯もおしまひではないか。

礎磨介　併し父上！

河内介　いや、愚痴だ。愚痴だ。

（間。）

磋磨介　あゝ、かうしてゐると海の上を自由にかけ廻つてゐる、あの風が羨ましい。あゝ、自分もあゝいふ風に力強く駈け廻りたいな。

河内介　（ふと聞き耳たてして）磋磨介。

磋磨介　はい。

河内介　大勢の足音がするやうだな。

磋磨介　こちらへですか。

河内介　うム。

（二人耳を澄ます。）

磋磨介　いゝえ、何にも聞えやしません。

河内介　さうかな。

磋磨介　今時分誰も來る筈はないではありませんか。

河内介　聞き違ひかしら。

磋磨介　風の音でございませう。

河内介　（ちつと考へてゐる）

磋磨介　今夜はひどく吹きますな。嵐になりやしますまいか。

（間。磋磨介突然立ち上つて梯子のところに行き、上をのぞく。それからまた靜かに元の座へかへる。）

河内介　どうしたのだ。

磋磨介　いゝえ、何でもなかつたのです。たゞ烏渡もの音が聞えたやうな氣がしたものですから。

河内介　さうか。

（間。）

磋磨介　父上、もう何時でございませう。

河内介　おほかた四つ近くであらう。

磋磨介　もうさうなりませうか。

（間。）

河内介　磋磨介。

磋磨介　はい。

河内介　これはかねて話しておいたことではあるが……。

磋磨介　（突然）お待ち下さい。父上。人影が！

（天井の格子が明いて、上から人が下りて來る。磋磨介きつとなる。下りて來たのは是枝である。兩刀を帶してゐる。）

是枝　磋磨介どん。

磋磨介　おゝ貴殿か。誰かと思つた。――父上、是枝氏でございました。

河内介　おゝ、さうか。

是枝　（河内介に一禮し乍ら）ご安否は氣づかつて居りましたが、何しろ今の身の上なので……。

河内介　いや、それはお互ひのこと。貴殿もご息災で何よ

りに存じます。同志の方々もご無事でせうな。
是枝　はい。みんな健固です。
礒磨介　是枝氏、よく訪ねてくれた。――寺田屋以來だな。
是枝　うム始終別々に押し込められてゐたので、逢ふ折がなくつて殘念だつた。もつとも大阪で乘船の節、貴殿の後姿だけは見かけたのだが、場所が場所であつたから言葉をかけろ事が出來なかつた。
礒磨介　さうか。それは少しも知らなかつた。だが、貴殿は何處に入れられてゐるのだ。
是枝　この上の部屋だ。
礒磨介　この上？　では、先刻貴殿はこの天井を叩きはしなかつたか。
是枝　おゝ、叩いた。貴殿達の安否が知りたかつたので……
……。
礒磨介　さうか。矢張貴殿だつたのか。はじめは何だか分らなかつたが、餘り續けざまに音がするので、だん／＼不思議に思ひ出したのだ。それで何といふ譯なしにこちらからも叩き返して見たのだ。
是枝　いや、あれで己達はどんなに雀躍したかしれない。己が「田中どうん。」と、どなつたのは聞えなかつたか。
礒磨介　いや、それは聞えなかつた。併しあのこと／＼といふ音は、どんなに懷しかつたか分らない。素より貴殿が叩いてゐるとは知らなかつたが、二人ぎりで、こんな中に押し込められてゐると、外のものはどんなものでも懷しいのだ。あのびゆう／＼唸つてゐる風の音でさへしみ／＼戀しく思はれる程だ。外はどうなのであらう。世の中はどうなつてゐるのであらうと思ふと、無性に外のことが知りたいのだ。併しこゝは船のどん底だから空一つ見ることが出來ないのだ。
是枝　お察しする。お察しする。
礒磨介　庇護を受けてをりながら、かういふことをいつては恩を知らぬ樣に聞えるかもしれないが、併しこの頃の貴藩の扱には某は不服でたまらないのだ。これでは匿つてくれるのではなくつて、ほとんど罪人の扱だ。それで自分は毎日腹ばかり立てゝゐる。貴藩には今のところお禮をいひたいよりも、怨をいひたい心の方が、先に立つてゐる位だ。併し貴殿等はよもやかういふ扱を受けて居るものではあるまいな。
是枝　（無言）
礒磨介　はじめ京の藩邸に押し込められた時は、名は同じ押し込めでも、食事は五つ組の椀、毎日浴湯を賜はつて、實に鄭重を極めたものだつた。ところが薩摩へ護送するといつて此船に乘せてからは、待遇が全く違つてしまつたのだ。併しこれは恐らく小役人どもが考へ違ひをして

をるのだと思ふ。貴殿から上役の人へ何とか話をして貰ふ訣にはゆかぬものだらうか。

是枝　（困る。無言）

河内介　磋磨介、それは是枝殿に申すことではない。筋違のことだ。

磋磨介　併しこのまゝでは餘りにひど過ぎますから。

河内介　ときに是枝殿はもう謹愼は許れたのですか。

是枝　いや許れたどころではありません。

河内介　さういふお身でよくこゝへ來られましたな。

是枝　（いひにくさうに）實は、貴殿達にどうしてもきいて貰はなゝてはならないことがあつてやつて來たのです。

磋磨介　そんなに改まらなくつてもいゝではないか。で、頼みといふのは。

是枝　（一層いひにくさうに、もぢ／＼してゐる）

河内介　（すぐに洞察して）左樣か。――では、こゝに出向かれたのは貴殿ご一人ではありますまい。

是枝　いや、ひとりぎりです。

磋磨介　父上、それは何の話でございます。

河内介　何を申してをるのだ。分つてをる筈ではないか。

是枝　（兩手をついて）田中どん、まことに申しにくいことだが、どうか何にもいはずにこれで切腹をして貰ひたい。（脇差を二人の前に差し出す）

（間。）

磋磨介　なるほど、父上の豫測の通りだ。これではわれわれを虐遇するのも當前だ。併し某は理由もなく切腹するわけにはいかない。何の咎でわれ／＼は腹を切らねばならないのか、それを承らう。

河内介　磋磨介。今更そのやうなことを是枝氏に尋ねる要はないではないか。

磋磨介　いや、切腹といふなら檢使から申渡を受けるが定法だ。書付を讀んで貰ひたい。

是枝　磋磨介どん。どうかさう角目立たないでくれ。己は檢使ではない。書付なぞも持つてはゐない。己はたゞ貴殿達のためを思つてやつて來たのだ。大抵は貴殿も察しがついてゐることゝ思ふ。どうか何にもいはずに潔く切腹をして貰ひたい。

磋磨介　いや、上意でないなら切腹はお受け出來ない。如何に親しい間柄とはいへ、たゞ貴殿の言葉一つでさう易易死ぬことが出來るものか。

是枝　成程、貴殿がさういふのは無理はない。併しこの儘だともつと惡いことが起るのだ。

磋磨介　では、誰かわれ／＼を殺しに來るといふのか。

是枝　いや、どうかそんな風にはとらないでくれ。たゞ時

勢が悪いのだ。實際時勢がよくないのだ。どうかさう思つて諦めて貰ひたい。

磋磨介　それではゝじめの約束とは違ふではないか。貴藩では吾々を薩摩へ匿つてくれるといつたではないか、あすこなら安全だといつたではないか。それとも匿ふといつたのは、あれはわれ〳〵をおびき出す手段であつたのか。貴藩では、はじめからわれ〳〵を騙すつもりでかゝつてゐたのか。

是枝　いや、決してさういふ訣ではない、何度もいふとほり今の時勢がよくないのだ。藩では匿ひたくつても……實際板挾で苦しいのだ。――それや貴殿達はもつと切ないに相違ない。それは重々分つてゐる。けれども、みんな辛いのだ。己もこのことではどんなに苦しんだかしれない。どんなに爭つたかしれない。併しどうしても力が及ばなかつたのだ。

磋磨介　では、幕府に對する手前、われ〳〵を匿ふことは出來ないといふのだな。

是枝　まあさう思つてくれ。

磋磨介　さうか、分つた。――では、寺田屋の一件に關係の者はみんな殺られるのだな。……さうぢやないのか。

是枝　(無言)

磋磨介　是枝殿、何故返事をしないのだ。同志の者はみんな一緒に殺されるのだらう。……それとも貴殿等だけは助かるのか。……おい、何故默つてゐるのだ。

是枝　(なほ無言)

磋磨介　さうか。さうなのか。――併しどうして貴殿たちは助かつて、吾々父子だけ殺されるのだ。貴殿達もわれわれと同じことをやつたのではないか。若し罪があるとすれば兩方とも同じではないか。――父上、父上。何故先刻から默つてをられるのです。何故こゝを責めないのです。……いゝえ、某は默りません。某は生命が惜しくつてかういつてゐるのではありません。訣さへ分ればそれは隨分死にもいたしませう。併しある者は助かつて、われ〳〵だけ死ぬやうなそんな依怙の沙汰には服すことが出來ません。――それや成程われ〳〵は主から見離されてゐる。だから主のある人達とは境遇が違ふ。併し薩藩の重役はわれ〳〵を庇護するといつた。それは確にいつた。某はこの兩の耳でたしかに聞いた。某はそれを信じたればこそかうしてこの船に乘つたのだ。そして明い南國を毎日々々憧れてゐたのだ。……

是枝　磋磨介どん、貴殿のいふことは一つ〳〵もつともだ。併し今はどうにもしようがないのだ。だからどうかもう何にもいはないで潔く切腹してくれ。貴殿に立派に死んで貰ひたいと思つて、己は殊更この役を引き受けて

來たのだ。貴殿の介錯は外の人にはさせたくないのだ。今となつてはこれが貴殿に對する己のせめてもの志なのだ。

礒磨介　いやだ。國家のために死ぬのなら、素より身命を惜しまないけれども、理由もなしにこんな汚い船底で死ぬのはどうしてもいやだ。

是枝　潔く死ぬといふことは、決して場所についていつたのではない。死方の美しいのをいつたのだ。どうか武士らしく死んでくれ。

礒磨介　いやだ。何といはれても厭だ。死ぬ時は自分勝手に死ぬ。貴殿の指圖なぞは受けやしない。

是枝　おい、礒磨介どん、己は貴殿達二人だけを殺しはしない。己も一緒に死ぬ。だからどうか一しよに死んでくれ。

礒磨介　是枝氏、何をつまらない事をいつてゐるのだ。貴殿がわれ〳〵と一しよに死んだところが何になるのだ。たゞ死骸が一つふえるだけではないか。一體貴殿やわれわれは何のためにこゝで死なゝければならないのだ。そんな無意義な死方をしたところが、何の足にもならないではないか。

是枝　貴殿には己のこゝろが分らないのか。

礒磨介　分らない事もない。併しそんな見えや痩我慢はお互ひにもう止さうではないか。某は形ばかりの武士道なぞは大嫌だ。何も腹を切るばかりが武士の本分でもあるまい。今の世の中は男が何人あつても足りないのだから、こんな下らないことで死ぬのは眞平だ。

是枝　（訴へるやうに）礒磨介どん。

礒磨介　いや、某は卑怯でかう云ふのではない。生命が惜しくつてかういふのではない。死すべき時に本當に死にたいと思ふからだ。不正なものを倒して正しい世の中にしたいと思へばこそ、今の生命が惜しまれるのだ。回天の事業が成就しない內は某にはどうしても目をつむることは出來ない。少なくともその曙光が見えるまでは、どんなことをしても死にきれないのだ。見ろ、幕府はまだ傲然と構へてゐるではないか。そして天朝のために盡さうとするわれ〳〵を苦しめてゐるではないか。吾々が望んでゐる聖德の國はいつ來るのだ。まだその曙さへ見えないではないか。そんな時に、どうしてやみ〳〵死ぬことが出來るものか。われ〳〵が本當に働かねばならないのは寧ろこれからではないか。

是枝　さうだ。これからだ。同志の者もさう考へてゐるのだ。だから其偉業をやり終ふせることが出來るやうに同志の者のために犧牲になつて貰ひたい。それは實にいたはしいことだ。こんなことを賴むのは恥知らずのやうで

はあるが、どうか大業のために身を捨てゝ貰ひたい。
磋磨介　いや、その爲事は貴殿だけでやる事ではない。某もやりたいのだ。それをやりたいばかりに今日まで苦勞を重ねて來たのではないか。自分が本當に働くのはこれからなのだ。
是枝　さういはれると己は一層苦しくなるが、貴殿達はどうしても助からないのだ。そんな事にならないやうに、己はどんなに骨折つたかしれないのだけれど、どうしても……
磋磨介　是枝氏、某は何も助けてくれといつてゐるのではない。某はそんな卑怯な男ではない。たゞ働きたいといつてゐるのだ。
是枝　併しそれが出來ないのだ。出來る位ならこんなに賴みはしない。だからどうか……
磋磨介　いや、他人のために死ぬことなぞは何といはれてもいやだ。
是枝　己は武士の情で貴殿にこんなに切腹を勸めてゐるのに、貴殿はどうしても聽き入れないのか。
磋磨介　切腹が何で武士の情だ。一緒に事を起しておき乍ら、自分たちだけ助かつて、われ／＼父子を殺すのが、何で武士の情だ。貴殿は一體敵なのか味方なのか。それをまづ明白にして貰はう。
是枝　どうかそんなものいひはしないでくれ……己もつらいのだ。……これだけ賴むのだから……磋磨介どん……己のこゝろが分つてくれてもいゝではないか。
磋磨介　いや、分らない。そんな得手勝手な心は某には分らない。われ／＼は主に見離された證だと思つて、貴殿等は恐らくわれ／＼を蔑むのだらう。主に離れた奴なぞは犧牲にしてもかまはないと考へるのだらう。
是枝　さうものをひがんで考へられては……
磋磨介　ひがみ、何がひがみだ。一緒に事を起したのだから、どこ迄も一緒にやりたいといふのが何でひがみだ。おのれだつて地位をかへたら何といふか分るものか。少しはこちらの身にもなつて見ろ。こんなところでむざむざ殺される者の身にもなつて見ろ。
是枝　だから己もつらいのだ……だから己は爭つたのだ……併しどうしても駄目だつたのだ。……貴殿も切ないだらうが。己も……
磋磨介　何度同じ事ばかりいつてゐるのだ。おのれが何といつたつて、そんな信も義もない奴の犧牲になるものか。
是枝　ぢや、これほど賴んでも。
磋磨介　厭だといつたら厭だ。――や、刀に手をかけたな。某を斬るといふのか。斬れるなら斬れ。おのれは、寺田

屋の二階で書いた連名帳を忘れたのか。同志であるわれわれを斬るといふなら斬つて見ろ。殺されるのに、切腹なぞと恩を着せられて死ぬのは迷惑至極だ。さあ、殺しに來たのなら早く斬れ。

是枝　磋磨介どん。頼む。頼む。己も一しよに切腹するから、どうか、どうか己と一緒に死んでくれ。頼む。頼む。

磋磨介　いや、某はおのれの生命なぞは望んでゐやしない。切腹したければ勝手に切腹するがいゝ。おのれのやうなものは、もう今日から友とは思はぬ。信もおかぬ。（前においてある脇差を手早く手許に引き寄せながら）さあ、斬れるなら斬れ、某にも某の覺悟がある。斬れるものなら斬つて見ろ。

（是枝は耐へに耐へてゐたがその言葉が終るか終らぬうちに、いきなり磋磨介を拔打にする。）

磋磨介　うムむ、おのれ！（脇差で渡り合はうとしたが、深手なのでばたりと倒れる）

（河内介はぢつと瞑目してゐたが、急に磋磨介の傍に寄る）

磋磨介　（倒れたまゝ）うムむ。殘念だ。殘念だ。

河内介　磋磨介。手は重い。いま苦痛を鎭めてやるぞ。

磋磨介　うムむ、無念だ。無念だ。

河内介　（磋磨介の手から脇差を取つて）これ、磋磨介、父が介錯してやるぞ。

（河内介は息子の介錯をしてやる、そして刀の血を拭つて靜かに鞘にをさめ下におく。それから自分の羽織をぬいで息子の死骸の上にかけてやる。）

河内介　（是枝に）見苦しいところをお目にかけてお恥しう存じます。

（是枝は磋磨介に一刀を浴せるとすぐ二三歩すさつてぢつと身構へたまゝでゐたが、河内介の動作を見てゐるうちに、だん／＼その張がゆるんで來る。そして向うから言葉をかけられると、急に床の上に兩手をついてしまふ。）

是枝　田中どん。濟まなかつた。濟まなかつた。

河内介　（ぢつと是枝を見つめてゐる）

是枝　磋磨介どんの敵だ。どうか己を、この己を、存分に……

河内介　（たしなめるやうに）是枝氏。

是枝　己は此役を引受けた時からもう覺悟はきめてゐたのだ。殊に磋磨介どんを手にかけた上は……どうか、どうかご存分にしていたゞきたい。

河内介　是枝氏、何をいふのです。これ位のことにうろたへてどうなさる。回天の偉業を志すほどの者がそんなことでどうなさる。

是枝　けれど、己にはもう……

河内介　では貴殿はわれ〱を犬死させようといはれるのか。貴殿は伜の言葉を何と聞かれたのだ。あれをたゞ愚痴とのみ聞かれたのか。某は何度伜を止めようと思つたか知れませぬ。併し默してゐました。それはあんなにも此世に執し、維新の義擧に燃えてゐるものがあることをしつかり心に刻みつけておいて貰ひたかつたからです。某は一言も發しなかつたが、無念なことは伜に百倍してゐます。貴殿は何故われ〱のこのおもひを生かして下さらうとはなさらないのです。何故この心を成就させようとはつとめられないのです。これを生かしてくれることが、これを成就させることが、生きてゐるものゝ務ではありませぬか。

是枝　（聲を立てゝ泣き出す）

河内介　人ひとりの血を見た位でそんなに心が弱くなつてどうなさる。本當の悲壯なことに出會はれるのはむしろこれからですぞ。是枝氏、どうかしつかりして下さい。……これからは貴殿達の時代です。どうか、どうかしつかりやつて下さい。今となつては某の願はたゞこれだけです。——では、こゝでお指圖どほり切腹をしますからご面倒でもご介錯をお頼みします。

是枝　（無言）

河内介　どうしたのです。さ、立ち上つてご用意を。……是枝氏、是枝氏。……貴殿にはまだ某の言葉がお分りにはならないのか。

是枝　いゝえ、それは分つてゐます。

河内介　それなら。

是枝　では、是非がありません。（力なく立ち上る）

河内介　（切腹の用意をする）

是枝　何かご遺言は。

河内介　たゞ同志の方々によろしくとお傳へ下さい。

是枝　（涙をふき乍ら）承知しました。

河内介　ではご面倒ながらご介錯を。

（河内介、脇差を腹に突き立てる。是枝は後に立つて太刀を打ち下す。併し足許がしつかりしてゐなかつたか斬り損ふ。）

河内介　（苦痛を堪へながら）う、う、……うろたへるな……こ、こゝだ。（手で首のあたりを叩く）

是枝　（きつとなつて）ご免。

（首を落す。併し是枝は刀を下げたまゝ、放心したやうにしばらくの間立つてゐる。それから力なく、ぐつたりと坐つてしまつて、またしばらく茫としてゐる。）

（突然二つの首を引き寄せて抱くやうに兩腕の間へ抱へ込む。そして二人の顏をいつ迄も心に刻みつけてお

かうとするやうに、ぢつと首を見つめる。涙が止め度なく流れる。）

（やがて首を前において、開いてゐる眼をつむらせる。併しなか〳〵閉ぢないので長いこと瞼を押へたまゝでゐる。それから懐から紙を出して、首級の面に飛んでゐる血を靜かに拭きとつてやる。）

（外は風の音がいよ〳〵烈しい。）

――幕――

海彦山彦（一幕）

人物

海彦
山彦

太古に住んでゐた土人の兄弟。

極めて素樸な小屋の内部。

全體は土間であるが、寢るところだけは低い床が設けてある。土間の中央は火を焚くところになつてゐて、その眞上の屋根は煙出し代りに穴があいてゐる。部屋のなかには誰もゐない。蟲が鳴いてゐる。うす暗い夕方から夜にかけて。

海彦が外から歸つて來る。手に弓と矢とを持つてゐる。中に這入るなり、いきなり仰向けにどしいんと床の上に寢ころぶ。

海彦　あゝ、くたびれた。

（しばらく横になつたまゝでゐる。）

（程經て山彦も歸つて來る。併しすぐ小屋に這入らないで、兄が開け放しにして行つた入口のところから、盗み見るやうに中の樣子をうかゞふ。そして這入りにくさうにまた外へ戻る。）

海彦　（そのもの音に）山彦か。（半分身を起して）何だ。さうぢやなかつたのか。――やあ、暗くなつたな。

（起き上つて土間に下り、木をこすり合せて火を焚きはじめる。）

（山彦はまた歸つて來て入口のところをうろ〳〵してゐたが、海彦がうしろむきになつて火をおこしてゐる間に、拔足して中に這入り、手にしてゐる釣竿を部屋の隅にそつとおく。それから何氣なく兄の傍に寄つて。）

山彦　兄さん、己が起さう。

海彦　今か。遲かつたな。

山彦　うん。遲くなつた。――己、おこすよ。

海彦　いや、もうついた。大丈夫だ。

山彦　寒くなつたな。

海彦　うん、雪の來ないうちに、もつと燃物と食物を積み込んどかなくつちや。

山彦　さうだな。

海彦　おい、今日はひどい目にあつたぞ。

山彦　どうして。

海彦　うつかりおまへのいふ通りにしたものだから、とんでもない目にあつてしまつた。――ころげ落ちる。着

物は破く。手足は擦りむく。さん／＼だ。——見ろ、こんなだ。

山彦　鹿でも追ひかけたのか。

海彦　うん、こんな大きな奴がゐたんだ。占めたと思つて追つて行つたところが、向うは山の代物だし、こつちは慣れてゐないと來てゐるから、たちまち踏みはづしてしまつたのさ。……己はもう山はこり／＼だ。

山彦　さうかな、己は兄さんのことだからきつと大きな獲物をとつて來ると思つてゐたんだが。

海彦　いや、己だつて誰だつて慣れない事は駄目だ。おまへがたつていふから今日だけは爲事を取りかへて見たがもう明日からはご免だ。——だが、おまへの方はどうだつた。

山彦　何？

海彦　釣れたかつていふのさ。

山彦　（少してれて微笑してゐる）

海彦　駄目だつたのか。……でも、何疋か取つたんだらう。

山彦　（無言）

海彦　一疋もか。何だ、大きなことをいつて出かけて行きながら。

山彦　今日は潮の工合が悪かつたんだ。

海彦　相變らずだな、おまへは。

山彦　さうぢやないけれど……

海彦　まあ、怨みつこなしでいゝぢやないか。どつちも取れなかつたんだから。

山彦　そりやさうだ。

海彦　だが、己がいつたとほりだらう。魚釣が山に這入つたり、狩人が釣竿を持つたりするから、こんな馬鹿々々しいことになるんだ。今日はまあ慰み半分だからいゝやうなもの……

山彦　兄さん。

海彦　何だ。

山彦　ぢや、道具を取りかへるのは今日ぎりかい。

海彦　さうしようぢやないか。お互ひにつまらないから。

山彦　もう一日、これでやつて見ないかね。

海彦　今日の二の舞は困るよ。

山彦　あと一日でいゝから……

海彦　おまへ考へてご覽。こんな馬鹿な事をつゞけてゐやうものなら、口が干上つてしまふよ。

山彦　いや、今日はお互に慣れなかつたから失敗つたけれど、明日はこんなことはありやしない。

海彦　明日だつて同じことだ。

山彦　だつて道具を取りかへつこしてやつたら、お互に何にも取れなかつたなんて、癪に障るぢやないか。

海彦　おまへは妙なところに意地を張るね。そんなことはどうだつていゝぢやないか。
山彦　しかし口惜しいからさ。
海彦　いや、そんな冗談はしてゐられない。もう間もなく雪が來るから、今の內にせい〴〵魚を釣りためておかなくつちや。……
山彦　だから明日は己がうんと釣つて來るよ。
海彦　おまへはそんなことをいふが、釣だつて何だつて一日や二日でさうまくなるものぢやない。――おまへ、山がいやになつたのではあるまいね。
山彦　そんなことはない。
海彦　それなら銘々自分の獲手の事をやらう。その方がどんなに樂で獲物が多いかしれやしない。慣れない爲事なんかお互に骨ばかり折れてたまらないぢやないか。
山彦　しかしね、兄さん……
海彦　何故おまへそんなにいやがるのだ。
山彦　いやがる訣ぢやないが……
海彦　それならいふことはないぢやないか。
山彦　（もぢ〳〵してゐる）
海彦　おまへが何といつても、山はもうこり〳〵だから、兎に角この弓と矢は返すよ。そのかはり釣竿は己の方に寄こしてくれ。

山彦　（無言のまゝ尻込みする）
海彦　どうしたんだ。
山彦　いや、何でもない。――ねえ、兄さん、もう一日……
海彦　そんなことをしたつて何にもならないことはおまへにだつてよく分つてゐる筈ぢやないか。――さ、おまへの弓はこゝにある。釣竿をお出し。
山彦　（無言）
海彦　どうしたのだ。己の釣竿をどうかしたのか。
山彦　いゝえ、そんなことは……
海彦　それなら出したらいゝぢやないか。
山彦　（苦しさうに）兄さん。
海彦　何だ。
山彦　（默つて弓を兄の前に差出す）
海彦　（ちよつとそれを見て）己はもう道具を取りかへるのは厭だと、さつきからいつてゐるぢやないか。
山彦　いや、さうぢやないんだ。
海彦　それなら何だ。
山彦　いゝから取つておいて……
海彦　どうしろといふのだ。
山彦　いゝから兄さん……
海彦　そんなものは己はいらない。そんなものを持つてゐたつて己には何の役も足しはしない。

山彦　しかし……

海彦　何故おまへはそんなことをするんだ。急に己に物をくれるなんて。

山彦　別に何でもないんだ。たゞ……

海彦　おい、山彦。己は弓をくれなんて一度もいつた事はないぢやないか。それどころか山はもうこりごりだといつてゐるのに、おまへをかしなことをするね。どうしたんだ、今日は一體……

山彦　（無言）

海彦　おまへ何か隱してゐることがありやしないか。

山彦　（無言）

海彦　それなら釣竿を出したらいゝぢやないか。己は明日は早く出掛けるんだから、ちよつと見ておきたいんだ。おい、お出しといつたら。

山彦　兄さん。

海彦　おまへ出さないのかい。出さなけりや無理にも取つてみせるよ。おい、おどき。おどきといつたら。

（海彦は強ひて弟をわきへ押しやつて、釣竿を取り出す。）

（山彦は兄に背を向けて、焚火のそばにどしいんと腰を下ろす。）

海彦　（釣竿を調べて）こんなことをしてゐるんだ。己もどうせこんなことだらうと思つてゐたんだ。――鉤を亡くしておきながら明日もこのまゝやらうの、明日は澤山取つて來るのと、しら／＼しいことをいつて……よくもおまへあんなことがいへたものだな。

山彦　（無言）

海彦　おい、山彦。鉤を亡くしたのなら亡くしたと、何故お前すなほにいはないのだ。隱し立てをしたり、弓をくれて誤魔化さうとしたり、何故あんな變なことをするんだ。――一日延ばしたところが、どうにもなりやしなゝぢやないか。おまへはその間に細工をしようといふのか。本當にいやな奴だな。

山彦　（いよ／＼默りこくつてゐる）

海彦　だからいはない事ぢやないんだ。慣れないことなんかやると、お互に馬鹿を見るつて。それをおまへは無理にやらう／＼といふから、己も爲方なしに道具を取りかへたんだが、たうとうこんなことになつてしまつた。――それもおまへに釣れるやうにと思つて、己は一番いゝ鉤を貸してやつたのに、それを亡くされてしまつちや本當にしやうがないな。あれは己の取つておきの鉤なんだから。――おまへ今日は何處で釣つてゐたんだ。

山彦　（無言）

海彦　おい、何處で釣つてゐたんだ？

山彦 （無言のまゝ、いきなり劍を拔いて刄を火の中に突き込む）

海彦 何をするのだ。そんなことをして。馬鹿なことは止さないか。

（海彦は火の中から劍を引き出さうとする。弟は引き出させまいとする。）

海彦 おい、刄がみんな熔けてしまふぢやないか。

山彦 熔けたつていゝ。

海彦 剛情な男だな。そんなことをしてどうするのだ。

山彦 （答へない）

海彦 鈎をこしらへるつもりかい。おまへに鈎なんか出來るものか。

山彦 出來たつて出來なくつたつていゝぢやないか。鈎さへ返しやいゝのだらう。

海彦 なに。

山彦 鈎さへ返しや何でもないんだ。鈎の一本ぐらゐ何だ。

海彦 貴樣はひとの鈎を亡くしておきながら、そんなないひぐさつてあるか。

山彦 あんまりぐづ〳〵いふからさ。

海彦 （烈しく）山彦。

山彦 （わざと平氣で）何だい。

海彦 貴樣は鈎さへ返しやいゝといふのか。

山彦 さうぢやないか。

海彦 おまへにそれが返せるかい。

山彦 返せるとも。前のよりやずつといゝのを返してやらあ。

海彦 己は貴樣のこしらへる鈎をいつてゐるんぢやない。返すんなら元のを返せ。

山彦 元のだつてどれだつて、釣れさへすりやいゝぢやないか。

海彦 貴樣のこしらへた鈎なんか使へやしない。そんな鈎にや生きた魚は一疋だつてかゝつて來るものか。

山彦 かゝらなくつてどうする。（赤くなつた刄を引き出して金物で叩く）

海彦 おい、山彦。おまへには鈎なんか出來やしない。そんな風に叩いたつて駄目だ。止せ、止せといつたら。

山彦 （默つてトンチン〳〵と叩きつゞける）

海彦 おい、意地つ張りは止さないか。そんなことをしたつて指をつぶすだけだ。

山彦 うるさいな。今すぐに返すよ。（かまはず叩いてゐる）

海彦 そんなやくざな鈎は何千本こしらへたつて受取りやしないぞ。己はそんなものを欲しいといつてゐるんぢやない。貴樣が亡くしたのは己の鈎なんだから、己はそれ

を持つて來いといつてゐるのだ。

山彦　これだつていゝぢやないか。

海彦　いけない。

山彦　ぢや己がこんなにまでしてゐるのに。……

海彦　何がこんなにまでだ。意地つ張りばかりしてゐるくせに……そんな鈎が役に立つと思ふか。

山彦　えゝ、勝手にしろい。

（叩くものを急に土間に放りつける。）

海彦　勝手にしろとは何だ。返すといつた以上は鈎を返せ。

山彦　そつちが勝手に取らないんぢやないか。

海彦　己は元の鈎を返せといつてゐるのだ。さあ返せ。返せ。……どうだ。返せやしないだらう。口惜しかつたら持つて來て見ろ。……返せやしないだらう。返せやしないだらう。

山彦　（無言）

海彦　そうれ見ろ。大きな口ばかりたゝいたつて。

山彦　（口の中で）　畜生。

海彦　いゝから、あやまれ。

山彦　（無言）

海彦　あやまらないのか。

山彦　（無言）

海彦　おい、あやまらないのか。

山彦　あやまるもんか。

海彦　あやまらない。——そんなら鈎を持つて來い。

山彦　（無言）

海彦　おい。持つて來いといつたら。

山彦　持つて來るとも。

海彦　持つて來る。——きつとか。

海彦　ぢや己は明日の朝すぐに使ふんだから、それまでにきつと探して來い。

山彦　よし探して來るとも。

海彦　これは面白い。

山彦　（無言、泣き聲になつて）　探して來るとも。

（さうはいつても山彦はぢつと臀を落ちつけたまゝ立つ氣色もない。）

（海彦もまたそれ以上は追求しないで、しばらくの間默つたまゝでゐる。やがて懷から胡桃をばら／＼と出して、それを石でばちん／＼割つては默々として食べ始める。）

（かなり長い間。）

（突然山彦は立ち上つて出かけようとする。）

海彦　何處へ行くんだ。

山彦　（無言）

海彦　濱へ行くのか。

山彦　（無言）

海彦　行くんなら腹をこしらへてから行け。

山彦　己あ食ひたくない。

海彦　山彦。おまへは何故さう依怙地なことをいふのだ。

山彦　（泣き出しさうに）依怙地なのはそつちぢやないか。

海彦　いゝから食つて行けといつたら食つて行け。（强ひて弟を下に坐らせる）貴樣、腹がへつてゐるぢやないか。……おい、食へよ。

（山彦も胡桃を食べる。併し二人とも默つたまゝでゐる。たゞ石で胡桃を割る音と、時折はなをすゝる音が聞えるだけである。）

海彦　今日は何にも獲物がなかつたから、これを拾つて來たんだ。

（海彦はちよつと弟の顏を見たけれど、乘つて來ないので話を止めてしまふ。）

（二人また押し默つたまゝ胡桃を食べる。）

海彦　（柔かに）おまへは馬鹿だな。片意地もいゝ加減にしろよ。

（立つて行つて小屋の隅に束れてある、乾し固めた魚を持つて來る。）

海彦　今夜はこれを食はう。とつときの魚だけれど。

（魚を弟にやる。それから自分も食べる。）

海彦　（間。）あゝ、腹が張つた。今夜は早く寢るかな。

（入口のところへ行つて外を見る。）

海彦　星が澤山出てゐるな。明日も天氣だぞ。

（入口の戸を締める。）

海彦　おい、おまへも早く寢ろよ。

（床(ゆか)の上に簡單な寢どこを作つて横になる。）

海彦　（寢ながら）あゝ、寢るのが一番だ。

（長い間。）

（蟲が鳴いてゐる。）

（山彦はさつきから動かないで焚火のそばにぢつと腰を下ろしたまゝでゐる。とき／＼涙を拭く。）

海彦　（ふと目を醒まして）まだ寢ないのかい。

山彦　（無言）

海彦　なぜ寢ないんだ。寢たらいゝぢやないか。

山彦　（涙聲で）寢られるかい。これから探しに行かなくつちやならないんだ。

海彦　（突然飛び起きて）いつまで貴樣はそんなことにこだはつてゐるのだ。馬鹿。（いきなり弟を擲りつける）

山彦　何をするのだ。

海彦　貴樣のやうな奴はかうしなくつちや分らないんだ。

（弟を押へつけて擲る）

山彦　何をするのだ。(抵抗する)

海彦　まだ分らないのか。(ぐい〳〵押へつけて)どうだ。これでもか。これでもか。

山彦　(無言)

海彦　やい、何故默つてゐるのだ。これだけ擲られても感じないのか。馬鹿。――畜生、畜生、畜生、(また擲る)

山彦　(土間に突つ伏したまゝ何にもいはない)

海彦　剛情な奴だな。擲られたら何故泣かないんだ。何故「わあ」と泣かないんだ。そんなひねくれた根性だから、貴樣にはすなほな事が出來ないんだ。一こと「濟みません。」といひさへすりや何でもないことぢやないか。貴樣にはどうしてそれがいへないんだ。――さつきだつてさうだ。無理に物を返さうとしたり、出來もしないくせに鉤をこしらへようとしたり、何故あゝ逆らつた眞似をするんだ。そんな風に出られりや、亡くした鉤を持つて來いつて、ついいひたくなるぢやないか。己は何も元の鉤が欲しかつたんぢやない。あんなものは何本でもある。己はあんなことはいひたくなかつたけれど、貴樣の爲打があんまり癪にさはつたからだ。――それでも己は少しいひ過ぎたと思つたから、後から隨分機嫌をとつてやつたのに、貴樣はまだこだはつてゐるのか。貴樣はどこ迄ひねくれてゐるのだ。

山彦　(無言)

海彦　己は何も擲りたくはない。怒りたくはない。たゞおまへに「返しやいゝ。」といふ肚がある間は我慢が出來ないのだ。おまへは何でも償ひさへすれば濟むと思つてゐるのか。世の中には返さうつたつて返せないものがあるんだぞ。――亡くしたものなら亡くしたでいゝ。己はそれを咎めはしない。己だつて何度鉤を亡くすかしれやしない。殊におまへは慣れないのだから、鉤をとられるのはあたりまへだ。それをいやに隱したり、誤魔化さうとしたり、何故あんな妙なことをするのだ。自分でいひ出したことだけに、鉤を亡くしたとはいひにくかつたのか。それがそも〳〵氣にくはないのだ。何故もつとすなほな心になれないのだ。償はうつたつて償へないものには……

山彦　(無言)

海彦　いや、もう止さう。もう止さう。いくらいつたつて同じことだ。――さあ、いゝから寢ろ。

山彦　(突つ伏したまゝでゐる)

海彦　おい。寢ろ。……寢ろといふのに。(弟を引き立てる)

山彦　(急に泣き出す)

海彦　何を泣くんだ。馬鹿、寢ろといふのに。

（海彦は弟を叩き伏せるやうにして無理に寢かせる。山彦は床の中でなほ泣きつゞけてゐる。）
（海彦はちよつとそこらを片附けて寢床にはいる。二人は脊中あはせになつて寢る。）
（間。）
（蟲が鳴いてゐる。）
（ときをり夜鳥の聲がする。）
（山彦は急に床の上に起き上る。そして暫くの間ぢいつと坐つたまゝでゐる。それから靜かに横になる。）
（長い間。）
（焚火の火が弱くなつて煙が上らなくなる。上の穴から落葉が折々はら〳〵と舞ひ込んで來る。）
（山彦はまた眼を覺ます。そして寢たまゝ消えかかつた火をぼんやり眺めてゐる。やがて思ひ切つて土間に下りて焚火を見る。）
（弟がかさこそしてゐると、海彦もふと眼を覺ます。）

海彦　（寢床の中から、眠むさうな聲で）火が消えたのか。
山彦　うむ。
海彦　どうした。つかないか。
山彦　いゝよ、起きないでも。――
海彦　さうか。
山彦　もう大丈夫だ。
海彦　ぢや、うんとくべといてくれ。今夜は寒いから。
山彦　うん。
（海彦はそれなりまたぐう〳〵寢入つてしまふ。美しい火花が飛んで、火がまた盛んに燃えさかる。）
山彦　兄さん。――
海彦　……
山彦　兄さん。
（もう一度聲をかけたけれど、兄はすや〳〵と眠つてゐるので、山彦もすぐ床にはいる。）

――幕――

本尊（一幕）

人物

老僧
浮浪人
僧大勢

時代

問はず

場所

問はず

場面

ある寺の本堂の縁の下。

床が高いので、本堂の上部は殆ど見えない。たゞ分の厚い縁の板と太い縁の束と階段の一部が見えるだけである。その外は暗黒。

夜。

浮浪人が一人。床の下にはいつて、そつと火を焚いてあたつてゐる。

そこへ年寄の坊さんがやつて來る。

老僧　もし、もし。

（浮浪人はあわてゝ火を消さうとする。）

老僧　いや、おまへさん、消すには當らない。わしにもあたらしてくれないか。

浮浪人　何だ。此寺の人ぢやなかつたのか。――あゝ、びつくりした。

老僧　いや、わしはご覽のとほり旅の者だ。

浮浪人　威かしちやいけねえぜ。

老僧　そんなつもりぢやなかつたのだ――少し當らせて下さらんか。

浮浪人　（しぶ〳〵）内しよでやつてゐるんだからね。

老僧　一つお仲間入をさせて貰はう。（老僧縁の下に這入る）

老僧　（當り乍ら）いや、どうも有難う。寒い時はこれが一番だ。――今年は冷えが嚴しいやうですな。

浮浪人　うん。

老僧　お蔭でやつと指がきくやうになつた。

浮浪人　おめえさんはこれから何處へ行くんだい。

老僧　わしか。わしは何處と定まつてゐない。まあ、方々を行脚してゐるのだ。

浮浪人　そんなに年をとつて方々歩き廻ることはねえぢやねえか。

老僧　ふム、そんなものかな。
浮浪人　そんなものかなは、御挨拶だな。
老僧　ときにおまへさんは：・
浮浪人　なに己か。（急に聲をこごめて火を隠す）
老僧　どうしなすつたのだ。
浮浪人　しつ！
（間。）
浮浪人　おめえ見えねえのか。
老僧　何が。
浮浪人　そら、向うさ。
老僧　何かゐるやうだな。
浮浪人　こゝの坊主だよ。見つかつたら事ちやねえか。
老僧　なるほど。商賣柄だけあつて夜目はたしかだな。
浮浪人　馬鹿にするない。おめえは年寄のくせになか〳〵口が惡いな。
老僧　いや、人間の方はさうでもない。
浮浪人　どうだか分るもんか。――だが、こゝの坊主どもがあゝやつて行くのは何だか知つてゐるかい。
老僧　知らないな。
浮浪人　みんな女を買ひに行くんだぜ。
老僧　ふム。
浮浪人　毎晩代り番こに出て行つてやがる。なまぐさ坊主つたらありやしねえ。
老僧　おまへさんよく知つてるな。
浮浪人　そりやこゝにゐるから何でも知つてゐる。
老僧　だが、よくそんなに金があつたものだな。
浮浪人　そりやおめえ、いくらでもあるさ。
老僧　どうして。
浮浪人　おめえこゝの寺の繁昌を知らねえのか。
老僧　知らない。
浮浪人　そりや大したもんだぜ。毎日々々何萬といふ人出だ。
老僧　ふうん。どうしてそんなに流行るんかな。
浮浪人　どうしてつて、きまつてゐるぢやないか。本尊様があらたかだからさ。
老僧　ほう、こゝの本尊様に限つてあらたかだとは不思議だな。
浮浪人　おい、そんなことをいふと罰が當るぜ。
老僧　いや、それは恐い〳〵。が、何でそんなにあらたかなんだ。
浮浪人　この間この近所に大火事があつたんだ。そうれあの通りみんな燒つ原だらう。ところがこの寺ばかりは不思議に助かつたんだ。
老僧　なるほど。

浮浪人　あれだけの大火事にこゝだけ燒殘るといふのは、ご本尊様が餘つぽどあらたかなのに相違ねえぢやねえか。
老僧　なるほどそれで繁昌するのか。
浮浪人　そりやおめえ、毎日出る本尊様のお守の上りだけだつて大したものだぜ。
老僧　寺の奴うまい商賣を始めたものだな。――おい、火が消えさうぢやないか。もう少しくべるものはないのかい。
浮浪人　もう何もない。
老僧　少し寒くなつて來たな。
浮浪人　おめえ、もう出掛けるんだらう。
老僧　わしか。わしは出掛けてもいゝし、出掛けなくつてもいゝんだ。
浮浪人　のんきなことをいつてるな。
老僧　そこいらに何か燃すものはないかな。
浮浪人　もう燃えるものはこの間の火事でみんな燃えちまつた。
老僧　それは弱つたな。
浮浪人　――あゝほんとうに寒くなつて來た。
老僧　待て〳〵。いゝものがある。（外へ出掛ける）
浮浪人　外へ行つたつて何もありやしないよ。
老僧　細工は流々だ。まあ待つてゐるがいゝ。

浮浪人　おい、何處へ行くんだい。本堂のものなんか引つぺがしちや怒られるぜ。
老僧　大丈夫だよ。
浮浪人　おめえ見つからうもんなら……
老僧　わしのすることだ。まあ、安心してゐるがいゝ。
（老僧かたはらの階段を登つて、本堂に上る。やがて老僧は小脇に何かを抱へて下りて來る。）
老僧　あつたぞ。あつたぞ。
浮浪人　あつた？
老僧　うム、いゝものがあつた
浮浪人　そりやよかつた。己あ火を消さねえやうにと思つて、一生懸命に骨を折つてゐたんだ。
老僧　いや、ご苦勞〳〵。
浮浪人　何だか重さうなものだな。
老僧　なあに大したことはない。
浮浪人　よく見つからなかつたな。
老僧　そこはおまへさんが爲事をやつても捕らないのと同じ寸法かな。
浮浪人　馬鹿にするない。
老僧　どうだ。これなら少しは燃えでがあるだらう。（持つて來たものを前に出す）
浮浪人　や、これは佛様ぢやねえか。

老僧　うム、木像だからすぐに燃えつくよ。

浮浪人（あつけにとられて、茫としてゐる）

老僧　おいどうしたんだ。

浮浪人　どうしたんぢやねえ。こんな恐ろしいことが出來るもんか。

老僧　何が恐ろしいんだ。

浮浪人　おめえにもあきれたもんだ。いくら何だつて、佛様を盗み出して火にくべる奴が何處にある。

老僧（ニタ／＼笑つてゐる）

浮浪人　おい、笑つてなんかゐねえで、元のところへ返して來ねえ。

老僧　おまへさんは惡黨のくせに、案外弱蟲だな。

浮浪人　そりや、己も惡い事をしねえぢやねえが、まだお寺の物にや手をつけたことはねえ。

老僧　罰が當るとでも思つてゐるのか。なか／＼信心家と見えるな。

浮浪人　そんな事はどうでもいゝから、おい、その火にくべることは止めてくれといつたら。

老僧　いや、心配はない。まあ、愚僧に任しておきなさい。

浮浪人　冗談いつちやいけねえ。他の事と違ふぢやねえか。ねえ、おい、頼むから止めてくれよ。

老僧　そんなことをいつたら、焚火をすることが出來ないぢやないか。

浮浪人　いや、己は寒くつたつて我慢するよ。

老僧　おまへさんは若いから、我慢が出來るかもしれないが、愚僧は年寄だからとても辛抱が出來ない。

浮浪人　それなら木つ端か何か燃したらいゝぢやねえか。何も佛様を持ち出して……

老僧　佛様といつたところが、手は取れてゐるし、漆は剝げてゐるし、木つ端同然の代物よ。

浮浪人　だつて佛様には違ひねえぢやねえか。

老僧　併しわしはこれだと一番暖るやうだから。

浮浪人　どうも始末に終へねえ木菟入（つくにふ）だな。

老僧　ちよつと待つておいで、今すぐに燃えつくから。（口の中で經を誦し禮拜して佛像を火にくべる）

浮浪人　おい、そんなことをやつて本當にいゝのかい。

老僧　いや、こんなことは滅多にやるべきことぢやないが、まあ今夜だけはわしに免じて宥して貰はう。

浮浪人　わしに免じて？

老僧　はゝゝ耳ざはりだつたら勘辨してくれ。

浮浪人　おめえは一體どこから來た乞食坊主なんだい。

老僧　闇から飛び出して來たのだ。おまへさんよく知つてゐるぢやないか。

浮浪人　ちえつ！　この寺の奴にしろおめえにしろ、どうも坊主なんて爲方のねえ奴ばかりだな。
老僧　さうかな。……そうら、やつと燃えついた。今だんだん暖かになるぞ。
浮浪人　己あそんな火にや當らねえよ。
老僧　いやそんなことをいはないで、わしが折角おこしたんだから、あたつて貰ひたいな。
浮浪人　いやだよ。
老僧　おまへさんは妙な男だな。そんなところで顫へてゐたつて爲様がないぢやないか。――さあ、こつちへ來て何も遠慮することはないよ。
浮浪人　（もぢもぢしてゐる）
老僧　すつかり火が廻つたやうだな。火勢が馬鹿にいゝぢやないか。――はゝゝ、たうとう手を出したな。……いや、引つ込めることはないぢやないか。誰に氣がねもいりやしない。遠慮なくあたれあたれ。
浮浪人　どうもおめえさんにはかなはねえ。
老僧　何の彼のといふが、かうしてあたつてゐれば、やつぱり暖いだらう。
浮浪人　そりや暖いけれど……
老僧　冬の夜はこれに限るな。
浮浪人　そりやさうだ。――
老僧　おい、かうして尻をあぶらなくつちや駄目だ。本當に體が暖りやしないぞ。
浮浪人　どうもおめえさんといふ人は驚いた人だね。
老僧　どうして――いや、遠慮なんかすることはない。おまへさんも、やつたらいゝぢやないか。暖かいよ、そりや。
浮浪人　冗談いつてら。
老僧　いつもはやつてゐるんだらう。
浮浪人　そりやいつもはやつてゐるけれど……
老僧　そんならかまはないぢやないか。
浮浪人　勿體ない。そんなことが出來るもんか。佛様を燒いて尻をあぶるなんて。
老僧　はゝゝ。併し手をあぶつたつて同じぢやないか。――何だ。また急に引つこめるのか。おまへさんもあんまり利口の方ぢやないな。
浮浪人　どうも恐ろしい爺さんだ。
老僧　おまへさんに恐がられるやうぢや、わしは泥棒除になれるかな。
浮浪人　馬鹿にするない。畜生。
老僧　いや、さう怒るもんぢやない。今のは冗談だよ。
浮浪人　おい、一體この佛様は何んだい。己あ何だか恐くなつて來た。

老僧　これか。
浮浪人　うム。
老僧　こりや如來樣だ。
浮浪人　如來樣？
老僧　さつきおまへさんが話した本堂の本尊樣だ。
浮浪人　えつ！
老僧　どうだい。さすがにあらたかな御本尊だけあつて、この火の色がわけていゝぢやないか。おまへさんもお蔭でよく暖れたらう。
浮浪人　ほんたうにこれ本尊樣なのか、さつきおめえは、この佛の手がおつかけて、木つ端同然といつたぢやねえか。
老僧　本尊なんて、取り出して見ると大抵こんなものさ。——どうしたのだそんなに尻込をして。
浮浪人　己はもうご免だ。
老僧　はゝゝ。逃げ出すのか。往來はもう凍つてゐるから、滑らないやうにな。
（浮浪人無言のまゝ急いで駈け去る。）
老僧　はゝゝゝ。
（間。）
（寺僧が提灯をつけて夜廻にやつて來る。）
僧一　おい〳〵。
老僧　やあ、ご苦勞樣。
僧一　御苦勞樣ぢやない。そんなところで火を焚いちや困るぢやないか。
老僧　寒いもんだからちよつと暖つてゐるところだ。どうだね、一しよに當つちや。
僧一　馬鹿なことを。こゝは焚火をするところぢやない。この間のやうなことになつたら大變だ。
老僧　うん、さういへば大火があつたさうですな。よくここは助かりましたね。
僧一　そんな世間話はどうでもいゝ。火を消さないかといふに。
老僧　いや、わしが側についてゐるから大丈夫だ。よく間違が起るのは、これを焚きつぱなしで寢込んでしまふからいけないのだ。
僧一　おまへは出家ぢやないか。
老僧　あ、わしは雲水ぢやよ。
僧一　僧侶の身でこんなことをするといふ法があるか。
老僧　坊主だつて何だつて寒いときは寒いからな。
僧一　おい、消せといつたら、消さないか。
老僧　しかし水も何もないのだから……
僧一　剛情な奴だな。——おい、退け。退けといつたら。（火を消す）

老僧　おい、そんなことをすると餘計火の粉が飛ぶよ。
僧一　（消しながら）や、これは佛像ではないか。
老僧　さうだ。本堂のご本尊様だ。
僧一　なに御本尊。（驚いて火の中から、引き出さうとする）あゝ、もう、お姿もくづれてしまつた。
老僧　この間の火事にも燒けない、あらたかな御本尊と聞いたが、かうして見ると矢張り脆いものだ。あゝ、無常迅速、ご本尊も何もあつたものではない。
僧一　（あわてゝ本堂の階段に駈け上り奥の方に向つて大聲に呼ぶ）おい、大變だ。大變だ。みんな來てくれ。みんな。
（僧大勢出て來る。）
僧大勢　どうしたんだ。どうしたんだ。
僧一　この乞食坊主が本堂のご本尊を持ち出して燒いてしまつたのだ。
僧二　えつ、この老ぼれが！
僧三　言語道斷、破戒無慚の鉢坊主奴。（いきなり老僧を擲りつける）
老僧　何をするのだ。
僧三　何をする？　貴様こそ貴い佛像を燒くとは何事だ。
老僧　あらたかな御本尊だといふからわしは舍利を少し貰つて行かうと思つたのだ。
僧一　馬鹿。木像から舍利が出るか。
老僧　何だ、此の本尊は舍利も出ないのか。それならわしの尻を暖めた方が、却て功徳になるといふものだ。
僧四　貴様はこの寺が餘り繁昌するので、それを妬んで邪魔しに來たのだな。
老僧　はゝゝゝ。舍利も出ないやうな本尊なんか、わしは少しも羨しいとは思つてゐない。
僧三　生意氣なことをいふな。（また擲る）
僧一　さうだ。やつゝけろ。やつゝけろ。
僧二　叩き殺してしまへ。
（大勢で老僧を擲る。）
僧五　お待ちなさい。お待ちなさい。そんなことをして殺生戒を犯したらどうなさる。
僧三　いや、愚僧は殺生戒を犯しても悔いませぬ。
僧五　まあ、お待ちなさい。どう處分するにしても、一應は取調べなくつては手落になります。兎も角お引き下さい。お引き下さい。
（大衆手を引く。）
僧五　（老僧に）おまへは何處の者だ。
老僧　（無言）
僧五　何故默つてゐるのだ、返事をしないと爲にならないぞ。

僧六　おい、何故返事をしないのだ。
僧老　わしの名前などを聞いてどうするのだ。そんなことを問ふよりも、今のお前たちにはもつと大切な問題が迫つてゐるのではないか。
僧一　生意氣なことをいふな。
老僧　いやわしを打つといふなら、いくらでも勝手に打つがいゝ。併しお前たちは本尊が、なくなつてもまだ目が醒めないのか。
僧大勢　なに？
老僧　勿論わしのやつたことは常道ではない。併しおまへたちが不悧さにわしは勿體なくも佛像を燒却し奉つたのだ。おまへたちはあのご本尊があるばかりに、却て墮落してゐるのではないか。何故あゝいふもので人を迷はし、自らも迷ふのだ。おまへたちには火にも燒けず、斧にも碎けない本尊が捉めないのか。
（大衆逡巡する。突然僧五が前に進み出る。）
僧五　和尙！
老僧　何ぢや。
僧五　火にも燒けず、斧にも碎けぬ本尊とは如何。
老僧　喝！
（大衆はこの聲に微塵に打ち碎かれたと見ゆるばかりに、みな大地に畏伏してしまふ。）
（老僧は恭しく合掌する。）
（大衆も亦合掌する。）

――幕――

熊谷蓮生坊（三幕）

人物

熊谷次郎直實　後に僧蓮生
同小次郎直家　直實の子息
成木大夫守直　直實の伯父
百姓
その女房
僧盛蓮
同靜空
外に熊谷の家來數人

時代

鎌倉初期

第一幕

武藏國熊谷郷、直實の邸内。
質素な建物。前は庭。下手に矢場の土手があるこゝろ。
初秋。

直實は庭に下り立つて、弓の本弭を膝頭にあてたまゝぢつと向うの的を睨んでゐる。そのうしろに家來が一二人控へてゐる。

直實はやがて矢をつがへ、しづかに引きしぼつて、ひやうと放つ。的は見えないけれど、命中した音が氣持よく響く。

直實　矢を取つてまゐれ。
家來一　はあ。（立上る）
直實　それから的を取り換へ。
家來一　今度は四半的にいたしませうか。
直實　さうだな。――いや、九半的にいたせ。
家來一　畏りました。（的の方に走つて行く）
直實　あゝ、久々でやつたらいゝ氣持だ。
家來二　明日は騎射をおやりになつては如何でございます。
直實　うむ、それもいゝの。
（家來三が這入つて來る。）
家來三　たゞ今戻りました。
直實　おゝ、待ちかねた。どうだ。杭はことごとく打ち變へたか。
家來三　はあ、地境には久下方のものが少々をりましたがすぐに追ひ拂ひまして、もとの境界のところに改めて熊

谷領の標を打ち立てました。

直實　して、向うでほしいまゝに立てくさつた棒杭はどういたした。

家來三　殘らず引き拔いて燒き捨てましてございます。

直實　久下の方から別に押し寄せては來なかつたか。

家來三　何事もございませんでした。

直實　標の杭を引き拔かれながら、手出しも出來ぬとは意氣地のない者どもだな。

家來三　併し相手が相手ゆゑ、また如何なる奸策を施さうもはかられませんから、地境の要所々々は悉く人數を以て固めてをります。

直實　うむ、さうなくてはならぬところだ。萬一久下の手の者が不法を働いたら、用捨なくたゝつ斬つてしまへ。

家來三　承知いたしました。

直實　大儀であつた。一先づ休息するがいゝ。

家來三　有難う存じます。

（家來三、一禮して去る。）

家來一　（少し前に戻つて來てゐる）ご用意が出來ました。

直實　うム。

（直實はまた矢をつがへて放つ。今度も見事に命中する。つゞいて矢をつがへようとすると、そこへ家來四がはいつて來る。）

家來四　申上げます。成木大夫様がお越してございます。

直實　なに、伯父上が見えた。

家來四　はい。

直實　あゝ、うるさいな、また參つたのか。——的はそのまゝにいたしておけ。

家來一　畏りました。

（直實は氣がすゝまなさうに座敷に上つて表へ行く。やがて成木守直を導いてはいつて來る。）

直實　伯父上には度々のお運び、恐縮に存じます。

守直　うるさいやうではあるが、今一度談合したいと思つて出てまゐつた。

直實　やはりこの間のお話についてゞございますか。

守直　うム。このまゝでは何れの側にも不爲だから、是非とも和解を勸めたいのだ。

直實　その儀ならば憚りながらお打捨ておき下さい。このやうなことに御老體を煩はしましては……

守直　いや〳〵、某の方で和談が成り立つものならば、足を運ぶ位は些細なことだ。其方とても訴訟なぞは好むところではないであらう。

直實　もとより某は武人ですから、さういふ事は別して好みませんが、併し境界を犯され、あまつさへ、訴訟を持

ちかけられた上は是非がございません。

守直　何れが訴へ出でたにもせよ、兎に角久下は其方にとつては義理ある叔父だ。さういふ間柄でありながら、互ひに確執をつゞけることは面白からぬことではないか。

直實　いや、あのやうなものは叔父なぞとは思ひませぬ。

守直　併しその方は早く親御に離れたため、幼少の頃は何かと世話になつたではないか。

直實　それなればこそ某は長い事忍んでをりました。しかしもうさう／＼は默してをられません。殊に彼は某を庇護したなぞと申してをりますが、まことは某の幼若に乘じて所領を騙し取つた人非人でございます。

守直　その方はすぐ激したものいひをするが、もう少し穏かに話してはどうだ。

直實　いゝや　某ならずとも憤るのは當然と存ぜられます。伯父上は實情を御承知ないので、さやうに仰せられますが……

守直　話を聞いたら、それはいろ／＼あらうが、さういふ事は一切水に流して、どうだ、久下と淸く和解をしては。

直實　某には毛頭さやうな心はございません。

守直　今の場合その方としては和談はしにくいかもしれぬが、しかし一族の間に事があるのはわれ等の好まぬところだ。何れが傷ついても困るから、こゝは何とか折合ふ道はないものであらうか。

直實　……

守直　どうであらう。例へば今爭ひになつてゐる土地の內、佐谷田は熊谷領、葛岡は久下領といふやうなことにして、讓り合つては……

直實　いや、あれは何れも當方の所領でございます。

守直　それは久下方でもさう申してゐる。併しそれではいつになつても果しがないから、もうお互ひに我を折らぬか。久下方でも其方さへその心なら、話し合つてもいいとまで打ち解けてゐるのだ。

直實　いや、それは本心とは存ぜられません。假令久下が如何やうなことを申しませうとも、彼の言葉なぞは微塵も信をおけませぬ。某はその手で何度裏切られたかしれません。若しそれが本意ならば不法の所爲は當然手控へなくてはなりませんが、昨夜も闇に乘じて境界の杭を打ち變へさせたやうな腹黑い奴でございますから……

守直　しかし久下の方の話では、其方の手の者こそ猥りに地境の棒杭を引き抜き、狼藉を働くやうに申してをつたが……

直實　いえ／＼。そのやうな事はございません。なるほど、久下領と記した棒杭は今日も引き抜かせましたが、

それには引き拔かすべきいはれがあるからでございます。御承知の如く、久下領とは大部分荒川が境をなしてをるところから、向うはそれをよいことにして、洪水の度毎に堤を切つては流れを變へ、狡猾にも當方の領地を取り込まうとたくらんでをるのです。先日の洪水にもまた〳〵流域を變じて、境の杭を打ち變へましたから、某がそれを引き拔かせたに何の僻事がございませう。それよりも洪水を利用して地境を犯して來る久下方こそ理不盡ではございませぬか。

守直　ことごとにさういがみ合つてばかりをつては果しがないではないか。

直實　いや、某は事を好むのではございません。某は先年賜つた「武藏國舊領等久下直光の押領を停止し直實領掌すべし。」といふ安堵の下文に從つて、幼若の折欺き取られた所領をば取り戻したまでゞございます。然るに久下はそれを遺恨に思つて……

守直　事が入り組んでをるだけに雙方言ひ分があるやうであるが、併しそこを穩かに話し合つてはどうだ。

直實　言ひ分！　久下に言ひ分などあらう道理がありませぬ。掠められ、たぶらかされてゐるのは某の方です。當方には更に落度はありませぬから、讓り合ふべき理由なぞはございません。殊に某が本領歸符の許しを得たのは、久下のやうに口の先でごまかしたのではありません。生を賭してやうやくあがなつたものでございます。佐竹の冠者の追討といひ、一の谷の先陣といひ、無官の大夫を討ち取つたことゝ申し、烏滸がましくはございますが、何れもさうたやすいことではございません。若し強ひてこの土地が所望なら、弓矢を執つて押し寄せて來るのがいつちと近道と存ぜられます。事實某は腕で取つたところゆゑ、奪ふなら腕で來るのが本來です。もとより某も一戰は望むところでございますから……

守直　いや、そんな不穩なことを申しては相成らぬ。折角世の中がしづまつたばかりではないか。

直實　併し訣もなくたゞ掠められるのは忍べません。某は負けることは大嫌ひでございます。

守直　いや、其方に負けよといつてをるのではない。穩かに折合つてはどうかと申してをるのだ。

直實　お言葉ではございますが、某は生來武人として育つたせゐか、勝つか負けるか、殺すか殺されるか其外のことは知りません。當節は和解とか、話し合ひとか申すことが折々行はれるやうに聞き及びますが、それをする位なら、某ははじめから爭ひなどはいたしませぬ。

守直　なるほど、それはさうであらうが、しかし……

直實　某は片意地で申してをるのではございません。己の所領を、己の所領だと言ひ張るのは當然の事ではございませぬか。若し某が非分ならばことごとく奪ひ取らるゝとも、更に苦しくありませんが、當方の言ひ分が正しい上は、一尺、一寸の土地たりとも、故なく他に讓ることは出來ませぬ。

守直　では、その方はどこまでも爭ふこゝろか。

直實　外に思案はございません。

（間。）

守直　いま一應思ひ直して見る氣はないか。

直實　……

守直　次郎。

直實　はあ。

守直　某の顏を立てゝくれぬか。

直實　ご懇請にそむいて、心苦しう存じますが……

守直　では、どうあつても……

直實　（默然としてゐる）

守直　いや、さまたげをいたした。（立ち上る）

直實　何のおもてなしもいたさず、申訣がございません。

（守直去る。直實送つて行く。）

（やがて直實ひとり戻つて來る。）

直實　あゝ、氣がつまつた。

（また弓を取り出して弦を張る。）

（そこへ直家が旅裝のまゝ這入つて來る。）

直家　父上、相變らず弓でございますな。

直實　おゝ、小次郎か。

直家　鎌倉殿からご沙汰がございましたので、急いで歸國いたしました。

直實　さうか。それは大儀であつた。（弓をもとのところへをさめ）今朝立つたのか。

直家　はい。未明に出立いたしました。

直實　それにしては早く着いたな。大分馬を急がせたと見ゆるな。

直家　はい。

直實　鎌倉殿にはお變りがないか。

直家　近頃は別してご機嫌うるはしいやうでございます。

直實　それは重疊だ。して、仰せといふのは。

直家　來月十五日鶴ケ岡八幡宮で、戰歿した將士の冥福を祈る爲に、放生會を御奉仕になりますが、當日はその御法會のあとで、相撲、競馬、流鏑馬等の餘興をもお催しになります。つきまして父上にもその晴れの演武に御出場あるやうにとの御沙汰でございます。

直實　それは辱けない。直實、謹んでお受けいたします。
――放生會といふと鎌倉でははじめての御法會だが、定

めて盛大なことであらうな。

直家　某はよくは存じませぬが、百萬喉の魚鳥を買ひ集めまして、鳥は神前に於て、魚は放生川へ當日一せいに放つてやる式ださうでございますから、このやうに功德になる法養はございますまい。

直實　源家のために身命を抛つた人々もこれで瞑するといふものだ。扨その演武だが、某は無論流鏑馬の方であらうな。

直家　はい。

直實　射手は幾番だ。

直家　五番と聞き及びました。

直實　十騎だな。して、某の順は。

直家　はい？

直實　某は何番目の射手だといふのだ。

直家　はい。——あの、父上は射手方ではございません。

直實　なに、射手方ではない。では何だ。

直家　あの、的立の役でございます。

直實　的立？

直家　はい。

直實　的立！

直家　はい。

直實　たはけ者。某にそんな役が出來ると思ふか。

直家　お言葉ではございますが……

直實　いや、そんなご沙汰なら聞く要はない。

直家　父上。これは鎌倉殿から直々の仰せでございますぞ。

直實　たとひ誰の命であらうとも、そんな意氣地のない役が引き受けられるか。何故其方はこんなご沙汰を受けて來たのだ。匆々立ち歸つて斷つてまゐれ。

直家　……………

直實　また鎌倉殿も鎌倉殿だ、弓矢取つては東國に列びのない某を、的立に廻はすとは何事だ。直實怨みに存ずると、さう言上せえ。

直家　父上。それはお考へ違ひでございます。父上なればこそ此度の晴れの流鏑馬にお召し出しになつたのではございませんか。弓矢取る者は何百、何千あるか知りませぬが……

直實　それならば何故某を的立のやうな賤役に廻はすのだ。

直家　仰せではございますが、的立の役は決して賤役ではございません。あれは射手方と同格のものださうにございます。

直實　何が同格の事がある。一方は馬に乘つて矢を射るのに、こちらは徒歩で的を立てゝ歩くのではないか。優劣のあることははじめから明白だ。

直家　某もはじめはさう思ひました。併し承るところによりますと、新日吉祭の御幸の日に、的を立てるものは瀧口本所の衆だと申すことでございます。して見れば、的を立てるものは射手方よりも却て貴い位でございます。かういふ故實もあることでございますから……

直實　默れ〳〵。故實なぞが武士に何のかゝはりがある。そんなやくたいもない事は無用にいたせ。

直家　父上！

直實　其方に屹度申しおく。武士が故實なぞをつべこべ列べるやうになつては最早終りだぞ。東國の武士は東國の武士らしく。たゞ武を練ればそれでよいのだ。

直家　では父上はどうあつても……

直實　きまつた事だ。某は嘗て敵にうしろを見せたことはただの一度でもないではないか。然るに今度に限つて、人に矢を射向けられながら、おめ〳〵的を立てゝ歩くやうなそんな腑甲斐ない役が引受けられるか。

直家　父上のご氣性としてはこれはご尤ではございますが、併しこゝは考へどころではございますまいか。

直實　何が考へどころだ。

直家　父上は地境について、今久下と訴訟中ではございませぬか。

直實　それがどうしたのだ。

直家　此際上意に反くやうなことがあつては、その訴訟の上にも響くところが大きいかと考へられます。

直實　……

直家　父上の御不滿はご無理ではございませんが、只今の場合何事も御辛抱になるのが肝要かと存ぜられます。殊に久下方は鎌倉殿に御信任の厚い梶原殿と相引いて、內內策をめぐらしてをる様子でございますから……

直實　たとひ梶原が黨引するとも、理を非に曲げる事はかなはぬことだ。當方の言ひ分に一點の非もない以上、敗訴になる氣遣ひは毛頭ないわ。

直家　しかし鎌倉殿のみ氣色を損じましては……

直實　小次郎、其方は凡下になり下つたのか。訴訟は訴訟、的立は的立ではないか。某はただ損得づくで生きてをるのではないのだぞ。熊谷ほどの者が訴訟に勝つために的立の役を引き受けたとあつては、末代までの名折ではないか。たはけ奴。

直家　恐れ入りました。

直實　其方なぞの喙を入れるところではない。と〳〵鎌倉に立ち返つて、きつぱりとお斷りを申してまゐれ。

直家　はあ。

直實　急いで行け。

直家　畏りました。

直家　（直家去らんとして。）
直實　父上。
直家　何だ。
直實　ご前へは病氣の體に披露いたしませうか。
直家　いや、こしらへごとを申しては相成らぬ。直實不服だとあからさまにお答へいたせ。
直實　……
直家　かまはぬ。ありのまゝに言上せえ。
直實　承知いたしました。では、ご免。
直家　（直家去る。）
直實　待て。
直家　（戻つて來て）何かご用でございますか。
直實　馬は――栗の乘換に乘つて行くがいゝぞ。
直家　はあ、辱う存じます。

――幕――

第二幕

箱根の峠に近い、海道のある百姓家。その家の内部。土間にはところ狭いまでにいろ〳〵なものが積んである。女房は豆を碾いてゐる。
第一幕より何年かの後。ある冬の日の午後。
あるじの百姓が薪を山のやうに脊負つて歸つて來る。

百姓　（外から）おい、何をしてゐるんだ。みぞれが降つて來たぢやないか。鷄を入れないか。
女房　またみぞれが降つて來たのか。うるさいお天氣だ。
（女房は粉を碾くのを止めて、表に出してある軍鷄を籠のまゝ「とうとう。」と呼び乍ら家の中に追ひ込む。）
（軍鷄は二羽、別々の籠に入れられてゐる。）
（百姓は薪を下して爐のそばにかがむ。）
百姓　今日は馬鹿に寒いな。
女房　こんなに寒くつちや麥にさはりやしないかね。
百姓　なあに凍てやしない。あつたかいと却つて延び過ぎていけないよ。
女房　それもさうだけれど。
百姓　今年は戰はなし、米もよくとれたし、これで麥がよく出來りや申分なしだな。
女房　今日はもう休みかい。
百姓　たまに山にはひると、くたびれていけない。
女房　今のうちにせゐ〴〵骨休をしておいた方がいゝよ。
百姓　もう間もなく正月だな。
（栗毛の馬を牽いて直實が突然門口に現れる。）
直實　頼まう。頼まう。
百姓　（後向きのまゝ）誰だい。
直實　旅の者だが、宿を無心したい。

百姓　それならこれから一里許り行くと湯本の宿だから、そこへ行つてお頼みなつたがようございます。

直實　向うへ行ける位なら頼みはせぬわ。馬が少し怪我をしてゐるのだ。宿は其方に申しつけるぞ。

百姓（相手の劍幕に驚いて、あわてゝ門口に飛び出し、直實を見る）へえ、これはおいでなさいまし、――お馬が怪我をなすつてゐちやお困りでございませう。しかし御覽のとほりのあばらやでございますから……

直實　いや、苦しうない、今宵は厄介になるぞ。

百姓　へえ。むさ苦しうございますが、ではどうかこちらへ。

直實　これは厩へ牽いて行つて休ませてくれ。

百姓　厩でございますか。

直實　うム。

百姓　………

直實　何をためらつてゐるのだ。

百姓　わしんとこには厩はございません。

直實　なに、厩はない。

百姓　へえ、わし等は山家の百姓でございますから、とてもそんなものは持つてをりません。

直實　厩はなくとも、馬を入れるぐらゐのところはあるだらう

百姓　何しろこんな狹いうちでございますから……

直實　えゝ、そんなことを申してゐる暇に、馬を入れるところを早く工夫せえ。

百姓　さうですな。土間はこの通りでございますし、……ぢや、裏の松の木へでもちよつとつないでおきませうか。

直實　たはけめ。みぞれが降つてをるのに馬を外へつないでおけるか。

百姓　へえ、これはとんだ粗相を申上げました。――では、やはり湯本迄お越しになつては如何でございます、まだ太陽はありますし、あすこまでおいでになれば厩を持つてゐるやうな大きな家は幾許でもございますから……。

直實　分らぬ奴だな。そんな事が出來るか。馬が怪我してゐるのだと先程から申してゐるではないか。

百姓　へえ、しかし全く厩はないんでございますから……

直實　えゝ、面倒な奴だ。そこどけ（馬を家の中に牽き入れようとする）

百姓　お武家樣。何をなさるのでございます。

直實　いゝから、そこどけ。

百姓　しかし、お武家さま。

直實　そこをのかぬか。邪魔だてすると承知せぬぞ。

（直實は馬を牽いたまゝ家の中にはひつて來る。しかし馬は慣れない家なのでたじろいでゐる。）

直實　えゝ、何をしてゐるのだ。上らぬか。(手綱を引張つたまゝ馬を座敷に引張り上げようとする)
百姓　旦那樣。それはご無體でございます。
直實　えゝ、うるさい。――それ、上るのだ。上るのだといふのに。
百姓　旦那樣。
直實　いゝからどけ。どけ!
(たうとう馬を座敷に引上て手綱を柱に結びつける。)
直實　(百姓に)何をぼんやりしてゐるのだ。鞍をはづしてやらぬか。
(百姓恐ろ〳〵馬の背中から鞍をはづしてやる。)
直實　それから脚に怪我をしてゐるのだ。手當をしてやれ。
(百姓は手當をしてやらうとするが、馬は知らない人なのでなか〳〵近づけない。)
直實　何をしてゐるのだ。早く手當をしてやらぬか。
百姓　へえ。たゞいま。
(百姓は水を入れた桶を座敷の眞ん中に運んで馬に飲ませたり、藁をやつたりなぞして機嫌をとりながら、やつと脚の治療を終へる。それから、恐ろしいので土間の隅にうづくまつてゐる女房のところへ行つて、自分も亦うづくまる。)
(その間直實は放心したやうにたゞぢつと坐つたまゝでゐたが、やがて力なく鞍に倚りかかつて體を休める。しばらくして直實は何か急に思ひ出したやうにむつくりと起き上る。そして忙しげに懐から幾通かの書類を取り出して、それを一つ〳〵丁寧に披いて見る。讀む度に無念の形相が面にあらはれる。しかし彼はいきなりそれをずた〳〵に引き裂いて火にくべる。)
(間。)
直實　おい水を持て。
(隅にうづくまつてゐた百姓はこは〴〵器に水を入れて持つて行く。)
直實　(咽喉をうるほしながら)馬にも水をやつたか。
百姓　へえ。
直實　飼糧(かひば)もやつたか。
百姓　(默つて飼糧を食べてゐる馬の方を指す)
直實　うむ、よし。
(間。)
直實　雲はもう止んだのか。
百姓　へえ、止んだやうでございます。外は日が照つてをります。
直實　氣まぐれな天氣だな。
百姓　へえ、降つたり、止んだり。山家の天氣は埒がございません。

直實　こゝは何處だ。
百姓　こゝでございますか。
直實　うむ。
百姓　湯本の手前でございます。
直實　湯本。――すると、もう箱根だな。
百姓　さやうでございます。
直實　ふむ、そんなところまで來てしまつたのか。
百姓　今日はどちらからお越しでございました。
直實　何處から來ようとその方なぞに何のかゝはりがある。
百姓　へえ、これはとんだことを申上げました。どうかお宥しを願ひます。
直實　これ、もつと薪をくべえ。
百姓　へえ。
（百姓は薪をくべるとまた隅の方に引込んでしまふ。そして心配さうに女房とこそ／＼話をしてゐたが、やがて軍鷄を一羽籠の中から引張り出して裏口の方へ持つて行かうとする。軍鷄はけたゝましい聲を上げる。）
直實　騷々しい！　何をするのだ。
百姓　どうも申訣がございません。
直實　そんなことをしてどうするのだ。鷄をくびるのか。
百姓　へえ。
直實　何故そんな殺生なことをするんだ。
百姓　何にも差上げるものがございませんから……。
直實　はゝゝ、其方は可哀いゝ奴だな。飼つておく鷄をつぶして某に振舞はうといふのか。
百姓　……
直實　しかし某は今そんなものは欲しくない。
百姓　さやうでございますか。
直實　放してやれ。放してやれ。
（百姓また軍鷄を籠の中に入れる。）
直實　（鷄を見て）なか／＼立派な鷄だな。
百姓　へえ。
直實　どうしたのだ。眼をつぶしてゐるではないか。
百姓　へえ、この間蹴合をさせたものですから。
直實　蹴合？　ではこれは鬪鷄か。
百姓　へえ。
直實　強いのか。
百姓　へえ、なか／＼強うございます。此間片目にはされましたが、そのかはり相手の鷄をたうとう蹴殺してしまひました。
直實　向うにも一羽ゐるな。それも鬪鷄か。
百姓　へえ、この方はもつと強うございます。わしの自慢の鷄でございます。

直實　その方は鷄を爲込んでゐるのか。
百姓　別に爲立てゝゐる訣ぢやありませんが、このあたりは今蹴合がはやりだもんでございますから。――旦那樣もお好きのやうでございますな。
直實　うム。
百姓　何でしたら一つお氣晴に御覽に入れませう。これは何處の鷄と喧嘩させても負けたことはないんでございますから。
直實　いや、今日はそんなものは見たくない。
百姓　さやうでございますか。
　(間。)
百姓　旦那樣、こんな山家で、外に何にも差上げるものがないんでございますが……
直實　いや、そんな心配は無用にいたせ。
百姓　併しお馬で遠道をなさいましては。
直實　いや、何もいらぬ〳〵。
百姓　さやうでございますか。
　(間。)
直實　おい、その鷄を闘はせて見ろ。
百姓　へえ？　蹴合をご覽になりますんですか。
直實　うム。急に見たくなつた。やらせて見い。
百姓　ぢや、ちよつとお待ちなすつていたゞきます。すぐ近所の鷄を連れてまゐりますから。
直實　そんなとは面倒だ。いゝから共一つを蹴合せて見ろ。
百姓　しかしどうも内に飼つておきます奴は……
直實　つべこべいはずと、やれと申したら早くやれ。
百姓　へえ。
直實　今日はむしやくしやしてゐるんだ。氣の晴れる程うんと闘はせい。
百姓　へえ。
　(百姓は女房に筵を持たして土間を圍ふ。そして圍ひの中に軍鷄を一羽入れる。つゞいてもう一羽入れる。筵を動かす。)
　(軍鷄は入れられるとすぐ蹴合をはじめる。併し座敷の向うの地上で戰つてゐるので、見物には見えない。僅に烈しい羽ばたきの音が聞えるだけである。)
　(直實は座敷に坐つたまゝぢつとそれを見てゐる。)
直實　どちらも強いな。
百姓　へえ、このあたりでこれに敵ふ鷄はあんまりございません。
　(間。突然百姓は一羽の鷄を抱へ上げる。)
直實　何故止めてしまふのだ。
百姓　もう勝負はつきました。
直實　なに、勝負はついた。いや、そんなとがあるものか。

百姓　この「めつか」の方が逃げ出しましたから。

直實　いや。ちよつと後へすさつただけだ。ほんたうに負けたのなら悲鳴を上げる筈ではないか。もつとやらせえ。途中で止めるといふことがあるか。

百姓　併しもう逃げるやうですと、迚も駄目でございます。

直實　其方は自分の鷄なので惜しいのだな。そんな鷄なら何十羽でも償つてつかはす。さあ、早くやらせえ。やらせる以上は何處までもやらせえ。

百姓　へえ。

（百姓は抱へてゐる鷄を圍の中へ入れる。）

（二羽はまた烈しく闘ふ。）

直實　それ見ろ。あんなに闘つてゐるではないか。

百姓　畜生でございますな。向き合はせさへすりやすぐにやるんですから……

直實　片目の方もなか／＼强いではないか。

百姓　へえ、あゝ鷄冠を立てゝ向つて行くところは凄いくらゐでございます。

直實　また途中で止めると承知せぬぞ。

百姓　いゝえ、かうなつては、もう止めようつたつて止りません。

直實　それ、もつと上へ飛べ。頸のところを狙ふのだ。頸のところを。

百姓　あつ、やられた。

直實　（闘鷄の方には却つて眼をそむけながら）いや、それしき。もつとやれ、もつと戰へ。死ぬ迄戰へ。（眼にいつぱい涙をたゝへてゐる）

百姓　旦那樣。どうなすつたのでございます。

直實　いや、何でもない。何でもない。――いゝからもつとやらせえ。もつと。

百姓　こんなにやつてゐるぢやございませんか。

直實　もつと、もつと突きかゝれ。何處までも、何處までも戰ふのだぞ。

百姓　あつ、またやられた。

直實　怖れることはない。引くな、引くな。えゝ、逃げるのは卑怯だぞ。――これ、何でまた止めてしまふのだ。

百姓　旦那樣は見ておいでぢやないんでございますか。

直實　どうしたのだ。

百姓　もう「めつか」の方が倒れてしまひました。

直實　なに倒れた。それなら別なのを蹴合せい。某は血みどろになつて叩き合ひ、嚙み合ふ姿がもつと、もつと見たいのだ。

百姓　併し旦那樣は餘りご覽にならなかつたやうぢやございませんか。

直實　えゝ、その方たちの知つたことではない。いゝから

早くやれ。
百姓 では近所のを連れて參りますから、少々お待ちを願ひます。
直實 うム、そんな面倒なことなら止めにいたせ。これ、もう一羽の方をくびつてしまへ。
百姓 この方でございますか。
直實 そのおもひ上つてゐる樣が小面がにくいのだ。ぎゆつとやつてしまへ。
百姓 (なほもじ／＼してゐる)
直實 鷄の一羽や二羽何だ。
百姓 へえ。(爲方なく鬪鷄の首を締める)
(きまづい間。)
百姓 これ、どういたしませう。
直實 ……
百姓 片附けましてもよろしうございませうか。
直實 え、うるさい。片附けるなら默つて片づけろ。
(百姓一層恐怖する。)
(直實はしばらくの間ぢつと沈思してゐたが、突然。)
直實 あるじ。
百姓 へえ。
直實 これへすゝめ。
百姓 へえ。
直實 おそれることはない。こちらへまゐれ。
直實 (太刀をはづして) これはその方へつかはす。
百姓 へえ?
直實 あの馬もその方にやる。
百姓 へえ?
直實 それから厩がないといつたな。――それはこれで建てるがいゝ。(金包を出す)
百姓 へえ?
直實 いや、戲ではない。たしかにその方につかはすのだ。收めておけ。
百姓 へえ。
直實 心配することはない。某は不審のものではないぞ。
百姓 いゝえ、滅相な。
直實 はゝゝゝ。何にも知らぬその方が不審に思ふのはもつともだ。併し某は亂心してゐるのではない。一時前までは一尺一寸の土地も失ふまいと、無下に爭つてゐたのだが、今はもう何もかも欲しくなくなつてしまつたのだ。この太刀にしろ、その馬にしろ、手離しがたいものであるが、昔が思ひ出されて苦しいから、その方に遣はすのだ。遠慮することはない。取つておけ。
百姓 しかしこんなに頂戴いたしましては。
直實 いや、みんな不用になつたのだ。

百姓　さうでございますか。では、お言葉に從ひまして頂戴をいたします。
直實　先程は粗暴なことをして濟まなかつたな。むしやくしやしてゐたものだから、ついあのやうなことをしてしまつた。
百姓　いゝえ、とんでもない。そのやうに仰しやられますと。……
直實　眞一文字に驅けて來ると、此先の曲り道で、手綱をさばきそこねたので、急に馬の前足を折つたのだ。訴訟はうまくゆかず、みぞれは降つてゐる。何もかも癪にさはることばかりなので、腹立ちまぎれに、つい理不盡なことをいたしてしまつたのだ。宥してくれ。
百姓　勿體ない。勿體ない。そんなに仰しやられましては痛み入ります。
（間。）
百姓　旦那様。
直實　何だ。
百姓　無躾でございますが旦那様は……
直實　某か。某は通りがゝりの氣まぐれな一武人だ。たゞさう思つてくれ。
百姓　何かお氣にいらぬことがおありのやうでございますが……
直實　うム、氣に入らぬことだらけだ。
百姓　これからどこへお越しでございます。
直實　いや、何處へ行くといふあてどはない。たゞ鎌倉が氣にくはぬから飛び出して來たまでだ。
百姓　あゝ鎌倉からお越しでございましたか。
直實　某は今日鎌倉で對決をやつたのだ。數年來の爭ひを御前で一決したのだ。併し當方が正しいのにも係らず、たゞ辯舌が拙いばかりに某はみす〳〵……いや、こんな事をその方に申したところが何にもならぬ。――おい、そんなところにおいては目ざはりだ。馬を下せ。
百姓　いゝえ、よろしうございます。あのまゝでかまひません。
直實　いや、見苦しいから取り下せ。
百姓　さやうでございますか。
（夫婦は馬を下におろす。）
（直實は馬手差を拔いていきなり髮を切る。）
直實　あるじ。
百姓　へえ。
直實　これも不用の品だ。（馬手差を渡す）
百姓　（何かいはうとする）
直實　いや、何もいふな。何もいふな。
（間。）

直實　おい、もつと薪をくべえ。

百姓　へえ。

（百姓薪をくべる。外はもう日が落ちてゐる。）

――幕――

第三幕

京の吉水に於ける法然の禪房。その庫裡の内部。上手は板の間。下手は廣い土間になつてゐる。そこに掘ゑつけてある大きな竈には粥の鍋がかゝつてゐて、火が赤赤と燃えてゐる。板の間の方には天井から魚の形をした鮑（よう）が下つてゐる。

第二幕から一年ぐらゐあとの秋の明け方。外はいくらか白みそめたが、庫裡のなかはまだかなり薄暗い。

蓮生と盛蓮とが薪を割つてゐる。二人とも暗い中で默々として割つてゐる。暫の間斧の響だけしか聞えない。軈て盛蓮はくたびれたらしく斧の手をちよつと休める。

蓮生　（割りながらそれを見て）少し休まうか。

盛蓮　いや、休むことはない。（またすぐに割りはじめる）

蓮生　しかし疲れたのではないか。

盛蓮　いや、少しも。ご坊疲れたのならわしにかまはず休むがいゝ。

蓮生　いや、わしは少しも疲れてはゐない。

（蓮生は勢よくぽん〳〵割る。盛蓮はそれに負けぬ氣になつてやるが蓮生には及ばない。）

盛蓮　ご坊、力競（ちからくらべ）をするつもりか。

蓮生　いや、別にそんなことはない。

盛蓮　それならもつとゆつくりやつたらどうだ。

蓮生　はゝゝゝ。

盛蓮　そんなにやつたら疲れるではないか。

蓮生　わしはこんなことでは少しも疲れない。

盛蓮　依怙地な人だな。

蓮生　休まうといつてゐるのに、ご坊こそ休まないのではないか。

盛蓮　わしは休まなくつてもいゝのだ。

蓮生　それなら勝手にするがいゝ。

（間。）

蓮生　さあ、片づいたぞ。――あゝ。（伸をする）

盛蓮　人前で大ぎやうに伸をしなくつてもいゝではないか。

蓮生　これは惡かつた。併しわざとやつたわけではないのだ。――少し手傳はうか。

盛蓮　いや、ご坊のと一しよにされるのは迷惑だ。

蓮生　どうして。

盛蓮　ご坊のとは割り方が違ふ。

蓮生　さうかな。

盛蓮　わしはいくらか遅いかもしれぬが、みんな揃つてゐる。太いのや、細いのは交つてゐない。

蓮生　わしのだつてそんなに不揃なものは一本だつてありはしない。さうれ、どれにしたつてこのとほりだ。

盛蓮　何も薪を見せてくれとはいつてゐやしない。

蓮生　いや、別に見せびらかすわけではないが、たゞご坊が難癖をつけたからだ。

盛蓮　薪割なんかいくらうまくつたつて手柄にはなりはしない。

蓮生　何をつまらぬことをいつてゐるのだ。

（蓮生は竈の前に行つて火を見る。）

（そこへ年老いた靜空が外から歸つて來る。柿を澤山籠に入れて持つてゐる。）

蓮生　大變な柿ですな。

靜空　少し干柿をつくらうと思つてな。

蓮生　さうですか。串柿になさるのですか。

靜空　いや、串柿は面倒だから、繩でつるしておかうと思ふのだ。

蓮生　それなら繩はこゝにいくらでございます。

靜空　あ、有難う、有難う。

（靜空は柿を繩にとほす。）

蓮生　これが濟んだらお手傳ひしませう。

靜空　いや、一人で十分だ。繩をとほすだけだから。

蓮生　隨分大きい柿ですな。裏山のですか。

靜空　あ。――（しづかに耳を傾けてゐる）

蓮生　何です。

靜空　いや、ちよつと靜かに。

（間。）

靜空　あ、やはりさうだ。

蓮生　どうしたのです。

靜空　なあに、鳩がまた子を孵へしたらしい。

蓮生　あ、さうですか。

靜空　そら、可哀らしい聲でクウ〳〵いつてゐるだらう。……親鳥の間に交つて……

蓮生　あ、聞えます。……聞えます。

靜空　はゝゝゝ。鳩の聲つて閑寂なものだな。

（間。）

靜空　ときにご坊はきのふは大出來だつたな。

蓮生　いゝえ、お恥しうございます。

靜空　流石は東國一の弓取だけあつて、あゝいふ場所へ出

ても膽はすわつたものだな。禪定殿下は却てお褒めになつたといふではないか。
蓮生　お叱りを被るかと思つてゐましたところ、却て奥へお召しになりましたので、我ながら驚きました。あの折別段わめくほどのこともなかつたのですが、性來の短氣で、ついあのやうな非禮をいたしてしまひました。
靜空　いや、そこが他の人には出來ぬところだ。
盛蓮　(薪を割るのを止めて)　蓮生殿、ご坊はきのふ何をやつたのだ。
蓮生　いや、お話するほどのことではないのだ。
盛蓮　わしに話しては困ることなのか。
蓮生　そんなことは毛頭ないが、大した話ではないのだ。
――
盛蓮　そんなに卑下することはないではないか。
蓮生　いや、實は、昨日は師のご坊が月輪殿に上られる日だから、わしはその御法談を聞きたと思つて、推參にお供の列に加はつて行つたのだ、ところがお邸へ着くと師のご坊は奥へ招ぜられたが、供の者は沓ぬぎから先へは一歩も這入ることはゆるされないのだ。奥からはゆかしい香の匂がたゞよつて來るのに、尊い御談議は一ことも聞くことが出來ないので、わしは不平の餘り思はず聲高にくちばしつてしまつたのだ。「在家に差別のあることは知つてゐるが、出家がご法談を聞くのにもやつぱり差別はあるものだなあ。」からどなつてしまつたのだ。
盛蓮　それが禪定殿下のお耳にはひつてお召し出しになつたといふのか。それだけの話か。
蓮生　さうだ。
靜空　併しそれだけといふが、堅固な信念がなかつたら、高貴のお方のところで、どうしてそれがいへるものではない。――さあ、これで出來た。
蓮生　もうおとほしになつたのですか。
靜空　うム。――あゝ爽かな朝だ。どれ、一つ干して來てやらう。
(靜空はつるし柿を下げて外へ出て行く。)
(間。)
盛蓮　(なほ薪を割りながら)　蓮生殿。
蓮生　(默つて振り向く)
盛蓮　ご坊は一代の面目を施したな。
蓮生　(額を反ける)
盛蓮　いや、さうではないか。當代の關白殿と座を同じうして御法談を聞くなぞといふ事は、われ〳〵には望めぬことだ。ご坊は實に果報者だ。
蓮生　……
盛蓮　だが、ご坊は何故月輪殿でわめかれたのだ。

蓮生　それは先刻いつたではないか。

盛蓮　しかし禪定殿下のお館に上つて殊更わめくといふのはをかしいではないか。

蓮生　何故そんな妙なことをいふのだ。

盛蓮　いや、何故といふことはない。たゞご坊の肚の底に何か求むることがあつたやうに思はれるからだ。

蓮生　ご坊は、わしを疑つてゐるのか。

盛蓮　經文には名聞利養に執する者は惡魔の弟子だと書いてあるさうだ。

蓮生　默れ。そのやうなこともう一ことといつて見ろ。その分には捨ておかないぞ。

盛蓮　なに。わしはさう思つたといつたまでだ。それがどうしたのだ。

蓮生　おのれ！　まだいふか。（盛蓮を取りおさへようとする）

盛蓮　何をするのだ。（持つてゐる斧を振り下ろす）

（蓮生はすばやく身をかはす。）

蓮生　貴様のやうな奴は。

盛蓮　なに。

（二人長い間ぢつと相對峙してゐる。）

（突然蓮生は盛蓮の足下にがばとひれ伏す。）

蓮生　わしが惡かつた。

（盛蓮は斧を振りかざしたまゝ、それを見下ろしてゐたが、これも急に斧を投げ捨てゝ蓮生のわきに倒れる。そして「わあ」と泣き出す。）

（間。）

（靜空が這入つて來る。）

靜空　どうしたのだ。二人ともそんなところに。……おい、どうしたのだ。

盛蓮　申訣がありません。

靜空　一體どうしたといふのだ。

盛蓮　わしが惡いのです。わしが惡いのです。わしは勝たう〳〵として、ついこんな事をやつてしまつたのです。

靜空　勝たうとは。

盛蓮　一旦佛門に歸依した上は、源家もない。平家もない。平等一如の筈であるのに、わしは蓮生どのに怨みを持つてゐたのです。

靜空　なるほど、ご坊は……さうか。――

盛蓮　在家の折は蓮生どのは敵方でしたから、その頃のことを思ふとどうしても打ち解けられないのです。それでこと〳〵に反が合はなかつたのですが、先ほど月輪殿の一條を聞くと一きは嫉ましくなつたのです。新參な蓮生どのが禪定殿下のお褒めに預つたとあつては、無念でたまらないものですから、どうにかして蓮生殿を貶しめて

やらう、貶しめてやらうとはかつたのです。それでついこんなことになつてしまつたのです。わしは實に淺ましい人間です。

靜空 ……

盛蓮 私がこゝに這入つたのは深い信仰があつての事ではありません。主家が亡びたのでどうしても姿を隱さなくつてはゐられなかつたからです。併し師のご坊のお話を聞いてゐると、自分のやうなかたくなゝ者でも心がいつか和げられて、勝つたり負けたり、殺したり殺されたりする世の中がつく／＼いやになつて行きます。そしてさういふ爭ひのない、しづかな世界にはいりたいと心から思ふやうになります。併しいくらさう思つても、根が根ですから、何か事に當るとすぐ昔の闘諍の心が頭をもたげて來るのです。殊に今のやうな獲物なぞを持つてゐると、なほ／＼心は荒立ちます。いや、それは今の場合ばかりではありません。隨分己を抑へよう／＼と思つてゐながら、水を汲む時や、念佛を唱へる時にさへ、つい人よりも勝たう／＼と爭つてしまふのです。他人が水を三桶荷ふと、わしは四桶荷はうと思ふのです、一日千遍唱名する者があると聞けば、自分は二千遍、二千遍やるといふ者があれば、自分は二千五百遍唱へなければ氣がすまないのです。私のやうなものが修羅地獄に落ちてゐるといふのでせうか。――蓮生殿、わしが惡いのです。濟みません。／＼。

蓮生 いや、そんなことをいはれると却て苦しくなる。わしさへあらがはなければこんな事にはなりはしなかつたのだ。今ご坊がいつた言葉は一つ／＼わしの辭だ……わしは駄目だ。

盛蓮 ではご坊も。

蓮生 わしは家も捨て、妻子も捨て、武士も捨てたが、我慢の心ばかりはどうしても捨てられない。

盛蓮 蓮生殿！

蓮生 盛蓮殿！

盛蓮 我を捨てよ。己をおさへよ。そんなことはいはなくつてもよく知つてゐる。併し知つてゐながらどうしてもおさへられないこの心をどうすればいゝのだ。――靜空殿、わしは負けよう、負けようとつとめてゐるのですが……

靜空 二人の苦しみはわしも長いこと苦しんで來たことだ。併し盛蓮殿、強ひて負けようとすることはまた一つの勝つことではないか。

盛蓮 さうでせうか。

靜空 無理をせずとそのまゝにすゝみなさい。

盛蓮 それがわしには出來ないんです。

靜空　いや。もつともだ。併し今の人はたゞ矯めることを修業と思つてゐるやうであるが、修業といふものは、ないものをあるやうに見せることではない。早い話が馬は牛のやうに強くない。それを強くしようとしてもそれは無理な話だ。馬なら強いことよりも早いこと、道を踏みはづさずに歩むこと、それに力を盡せばいゝ。持つて生れたものを誤らないやうに進めて行く、それが修業だ。馬は馬でいゝ。牛になることはない。その代り牛には馬になることは出來ない。またその必要もない。萬物、人人、その柄、その氣稟のまゝに押し進んでいつたらそれでいゝのではないだらうか。それが自然法爾（じねんほうに）といふものではあるまいか。

盛蓮　そんな風にしたら一層我がつよくなりはしないでせうか。

靜空　深いことはわしにはよく分らないが、つきぬけたらいゝのだと思ふ。

盛蓮　併しわしのやうな勝氣なものは……

靜空　馬はその歩みのために、人はその氣質のために一生苦しむものだ。併しその間に……

蓮生　（突然立ち上る）

靜空　どうしなすつた。

蓮生　いや、何でもありません。（竈のところに行つて、釜を下ろす）

盛蓮　ご坊はこんな氣持でも働けるのか。

蓮生　わしには理窟はよく分らないのだ。

盛蓮　それはこんなことを長々と喋つてゐたところが何にもならないが併しわしには今は……

蓮生　いや、ご坊はさうしてゐるがいゝ。もうわしひとりで出來ることだ。（蓮生は板の間に上つて食卓を列べる）

靜空　あ、忘れてゐた。蓮生殿。濟まぬが、そこに豆があるのだがな。

蓮生　何處です。

靜空　うム、そこ、そこ。

蓮生　あ、ありました。

（靜空は豆を受け取ると、入口のところへ出て豆を撒く。白い鳩が澤山ばた／＼と庭に下りて來る。蓮生は食卓の用意を終ると、木の槌を取つて鮑（ほう）を鳴らす。その音に庭に下りてゐた鳩は驚いて、ちよつと飛び立つたが、すぐまた靜かになる。）

（蓮生はなほ鮑（ほう）を打ちつゞける。）

（外は朝日がまばゆきやうに輝いてゐる。）

――幕――

女中の病氣

一

山の手の勤人の家庭。
茶の間と勝手。
主婦は炊事服を着たまゝ茶の間で婦人雜誌を讀んでゐる。そばに赤ん坊が寢てゐる。
冬のはじめ。
　女中が裏から歸つて來る。

女中　たゞいま。
主婦　大變遲かつたぢやないか。どうしたのかと思つたよ。
女中　どうも濟みません。夕方だもんですから、電車が混んでなか／＼わたしたちには乘れないんでございます。
主婦　本當にこの頃の電車には困つちまふね。
女中　あのパンが少しつぶれたかもしれません、隣の人に押されましたから。
主婦　あら、あつたかいパンね。木村屋もずゐぶん混んでゐたらう。
女中　え、なか／＼買ひつからないんです。
主婦　バタは何處で買つたの。龜屋かい。
女中　はい。
主婦　いくらだい。
女中　一斤一圓七十錢。
主婦　十錢上つたね。
女中　え。
主婦　それから玉木屋にも寄つたかい。
女中　はい、お豆とつくだ煮も買つて參りました。
主婦　ずゐぶんあつちこつちだから大變だつたね。洗張は今度こそ出來てゐたらうね。
女中　あら。
主婦　どうしたの。忘れてしまつたのかい。
女中　どうも濟みません。
主婦　それが一番肝腎の用なんぢやないか。それが出來てゐなけりや明日お爲事にかゝることが出來やしないよ。
女中　もう一度行つてまゐりませう。
主婦　今から出て行つたつて爲方がないよ。夕方おまへに出られちやうちが困つてしまふぢやないか。だから洗張を忘れないやうにつて、あれほど念を押したのに、爲樣がないね。おまへこの頃どうかしてゐるよ。三つ用をいひつけると必ず一つは忘れるんだから。
女中　どうも濟みません。これから氣をつけます。

主婦　ほんたうに氣をつけてくれなくつちや困りますよ。明日は朝の內に洗張屋に行つておいで。
女中　はい。
主婦　ぢや、これをしまつて、ちよつとお風呂を見ておくれ。もう入れるだらうと思ふんだけれど。
女中　あら、奧さんがお焚きつけになつたのですか。どうも濟みません。
主婦　だつておまへ歸りがあんまり遲いから。ご覽よ、髮がこんなに塵埃だらけになつてしまつたわ。
女中　どうも濟みません。――では、これおつり。
主婦　そこへおいときな。――若しぬるいやうだつたら、あがり湯の方を廻しておいとくれ。
女中　はい。
（女中は買つて來たものをしまつて、風呂場に行き湯加減を見る。）
（その間に主婦はおつりを數へて火鉢の抽斗にしまふ。）
（女中が戾つて來る。）
女中　もうお召しになれます。
主婦　さうかい。いま何時だらうね。
女中　六時半でございます。
主婦　もう、さうなるかい。

女中　はい。
主婦　また他へお廻りになつたのかしら。
女中　旦那樣でございますか。
主婦　あ。――遲くなると坊やがむづかるから、あたし先へ入つてしまはうか。
女中　さうなすつた方がおよろしうございます。
主婦　さうしよう。また待ちぼうけを食ふとつまらないから。恒子はどこへ行つたらう。
女中　表で遊んでいらつしやいました。
主婦　さう。ぢやあたし坊やと一しよにはいるから、恒子を呼んで頂戴。
女中　はい。（表へ呼びに行く）
主婦　さあ、坊やちやん、おぶへはいるのよ。金魚浮かしてあげませうね。
（主婦は赤ん坊を抱き上げて風呂場に行く。）
（女中と一しよに女の子がはいつて來る。そして向ひの風呂場の手前で。）
女の子　お母さま、もうはいつてゐるの。
女中　え。――さ、着物をぬぎませう。
女の子　うゝん、自分でぬぐわよ。
女中　さうですか。まあ、お偉いこと。――お孃さまがおはいりになります。

主婦　(風呂の中から)　さうかい。早くおいで。――よしや、こつちはいゝから、おまへは臺所をやつておくれ。
女中　はい。お書に仰しやつた通りでよろしいんですか。
主婦　あゝ。
(女中臺所に下る。やつと我に返つたといふ様子。水道の水をたてつゞけに二三杯呑む。)
(それから水爲事にかゝる。とき〴〵頭をおさへたり、體を休めたりする。)
主婦　(風呂場から)　よしや。――よし。
女中　はい。
主婦　熱いから水をうめておくれ。
女中　はい。
(もの憂さうに立つて裏口にまはる。)
女中の聲　(水をうめながら)　この位でよろしうございますか。
主婦の聲　もう一杯うめて頂戴。
(女中は水をうめるとまた臺所に戻つて、だるさうに爲事をしてゐる。)
(長い間。)
主婦　(風呂場から)　よしや。――よし。
女中　(口の中で)　ツエツ、いやになつちまふね。――はあい。

主婦　坊やが上るから、おべゞを着せておくれ。
女中　はあい。
(また立つてタオルを持つて風呂場に行く。)
主婦の聲　さあ、いゝかい。
女中　(赤ん坊を受取りながら)はい、大丈夫でございます。
主婦の聲　よく體を拭いてね。汗知らずをつけてやつておくれ。
女中　はい。
(赤ん坊の露をとつて着物を着せてゐると、そこへ上の女の子も上つて來る。)
女の子　あゝ、のぼせちやつた。
女中　でも、お湯にはいると、いゝ氣持でせう。
女の子　うゝん、お母さま、出ちやいけないつて、いつまでもお湯ん中に漬かせておくんだもの、目がまはつてしまふわ。
女中　さうですか。
女の子　あゝ、アイスクリームが飲みたい。
女中　ほんたうに今日は何だか咽喉がかわきますこと。
女の子　あたし、お湯にはいつたからだよ、――でも、もうアイスクリームなんかないわね。
女中　アイスクリームでございますか。
女の子　もうないだらう。

女中　いゝえ、ないこともございませんでせう。
女の子　もうありやしないよ。
女中　こゝらにはなくなりましたけれど、まだあるところもございます。
女の子　何處に。
女中　さうでございますね。
女の子　何處にさ。
主婦　（風呂場から）よしや。――よし。
女中　はあい。
主婦　お風呂の火を見ておくれ。ぬるくなつてしまつたから。
女中　はい。
（女中また裏口にまはる。やがてまた出て來る。）
女の子　よしや。アイスクリーム何處にあるの。
女中　……
女の子　ありやしないんだらう。
女中　いゝえ、ございます。
女の子　そんなら何處にさ。
女中　銀座の方に。
女の子　銀座。あすこにだつてもうありやしないよ。
女中　いゝえ、あすこになら本當にございます。
女の子　そんなことはない。――ねえ、お母さま。（風呂場の方に大きな聲でいふ）
主婦　（風呂場から）なに。
女の子　まだアイスクリームある。
主婦　今時分そんなものはありませんよ。
女の子　そうれ、ご覽。お母さまだつてないつていつてゐるぢやないか。
女中　でも、ほんたうにあるんでございますよ。
女の子　噓よ。噓よ。
女中　わたし飮んで來たんですもの、今日。
女の子　ほんたう。
女中　え、ほんたうですとも。よしやは噓なんか申しませんわ。
女の子　（風呂の戸口のところへ駈けて行つて）ねえ、お母さま。
主婦　なに。
女の子　まだアイスクリームあるんですつて。
主婦　もうそんなものはありませんよ。
女の子　でも、あるつていふわ。
主婦　うるさいね。アイスクリーム、アイスクリームつて。そんなものどうだつていゝぢやありませんか。――そこをおどき、お母さま上るんですから。
女の子　だつてよしやは今日銀座で飮んで來たんだつて。

主婦　誰が。
女の子　よしや。
主婦　（風呂場から出て來る）よしやが。
女の子　え。
主婦　（鏡の前に坐つてお化粧をしながら、女中に）おまへそんなものを飲んで來たのかい。
女中　いゝえ。
主婦　ほゝゝ。坊やちやん、おとなしうございますね。――おまへ子供に餘計な事をいふもんぢやないよ。
女の子　うゝん、よしやは本當に飲んで來たんだつて。
主婦　併し今時分アイスクリームのあるところはさうはないと思ふがね。――
女中　……
主婦　隱さなくつてもいゝよ。飲んだのなら飲んだとおいひ。
女中　……
主婦　飲んで來たのかい。
女中　實はあんまり咽喉がかわきましたものですから……
主婦　それは何處で飲んで來たの。
女中　……
主婦　銀座かい。
女中　はい。

主婦　銀座の……
女中　あの資生堂へ……
主婦　資生堂。まあ、おまへあんなところへはいつたのかい、ひとりで。
女中　……
主婦　おまへは大膽だね。よくひとりであんなうちへはいれたね。そして何を飲んだの。
女中　アイスクリーム……
主婦　それから。
女中　それだけでございます。
主婦　併しいくら歩いたつて、もう暑い事はないぢやないか。アイスクリームを飲むほど。
女中　何ですか咽喉がかはいて爲方がなかつたものですから。
主婦　咽喉がかはいたらうちへ歸つてからお湯を飲んだらいゝだらう。資生堂なんておまへたちのはいるところぢやないんだよ。
女中　……
主婦　電車が混んだなんて、電車にかこつけてそんなところにはいり込むから……
女中　いゝえ、ほんたうに電車はなか／＼乘れなかつたのでございます。

主婦　そりや電車も混んだらうさ、夕方電車の混む事は分りきつた話ですよ。だから混まないうちに早く歸るやうにしなくつちやいけないぢやないか。アイスクリームなんか飲んでゐるから遲くなつたり、大事な洗張を忘れてしまふんです。

（主人が歸つて來る。）

主婦　あら、お歸んなさい。（女中に）これから氣をつけるんですよ。

女中　はい。

主婦　あつちへ行つてご用をおし。

女中　どうも濟みません。

（女中去る。）

主人　どうしたのだ。

主婦　まあ、あきれるぢやありませんか。あの子はひとりで資生堂へはいつたんですつて。

主人　はやりだからな。

主婦　いくらはやりだつて、女中の分際であんなところに行くなんて贅澤ぢやありませんか。

主人　自分の金で行くんなら何處へ行つたつていゝぢやないか。

主婦　そりや氷屋ぐらゐなら爲方がないと思ひますが、資生堂なんて、あなた。

主人　併し銀ぶらだの、資生堂だのつて話を聞いてゐりや若いんだもの、あの子だつてつい入つて見たくなるさ。

主婦　ほんたうに此節の女中の生意氣なのにはあきれてしまひますね。お給金を蓄めてお嫁入の支度にしようなんて氣はないんですからね。お嬢さんか何かのやうに、買物に出てアイスクリームを飲むなんて。見習に來て居ながらそんな風ぢや爲になりませんわ。

主人　そりあさうだが、今の女中は昔のやうにはいかないよ。

主婦　だつてあなた、そんな事をして歩かれたら、こつちの用が足りないぢやありませんか。

主人　併しあんまりいはない方がいゝよ。出て行かれでもすると困るから。

主婦　え、女中拂底の時ですから、そりやあたしいたはつて使つてをりますのよ。內ぐらゐいたはつてゐるところはさうはないと思ひますわ。お隣なんか隨分ひどいんですよ。朝、あつたかいご飯を炊いたつて女中には昨夜の殘りの冷いのしきや食べさせないんですつて。

主人　あすこは年寄がゐるからやかましいだらう。

主婦　それにお給金だつてうちより安いんですよ。

主人　うむ。

主婦　あら、ご免なさい。すつかり忘れてゐて。――あな

たお風呂は。
主人　沸いてゐるのかい。
主婦　え。
主人　ぢやすぐ入らう。
主婦　濟みませんでしたけれど、あたしお先へ頂きましたわ。坊やを寢かせなくつちやならないもんですから。
主人　いゝとも。
主婦　よしや。――よし。ゐないのかい。――よしや。
（立つて女中部屋をのぞく。）
主婦　おまへ、何をしてゐるの、そんな恰好をして。――旦那樣がお召しになるのよ。お風呂をみておくれ。
女中　はい。
主婦　どうしたの。體でも惡いのかい。
女中　少し頭痛がしたものですから。
主婦　だからいはない事ぢやないんだ。今時分アイスクリームなんか飮むからよ。――ご飯が濟んだら、今夜は早くおやすみなさい。
女中　はい、有難うございます。
（女中立つて風呂場の方に廻る。）

二

雨あがりの途方もなく天氣のいゝ朝。

主婦は襷がけで風呂場で洗濯をしてゐる。汚れ物がわきに澤山積んである。
女中は、壁で隔たつてはゐるが、風呂場のわきの小さな部屋に寢てゐる。
魚屋が裏口から入つて來る。
魚屋　こんちは。
主婦　（洗濯で夢中になつてゐる）
魚屋　こんちは。
主婦　誰。魚屋さん。
魚屋　へい。――あ、こつちか。今日は馬鹿に精が出ますね。
主婦　このお天氣にぢつとしてゐられるものかね。
魚屋　久しぶりでいゝお天氣になつた。ほんたうに幾日降つたこつたか。
主婦　昨日で三日よ。
魚屋　降つて許りゐられた日にや、くさ〳〵してしまはあ。かうからつと晴れてくれなくつちや……
主婦　それよりもうちなんかぢや洗濯が乾かなくつて困つてしまふわ。赤ん坊がゐると雨は何より禁物よ。こんなに汚物がたまつてしまつたのよ。
魚屋　そいつは大變だ。
主婦　その上女中に寢込まれてしまつたものだからうちの

なかはてんてこまひよ。
魚屋　おや、女中さん病氣なんかい。どうりで二三日見えねえと思つた。
主婦　なあに、大した事はないんだけれど、この陽氣に外へ出てアイスクリームを飲んだつていふんでせう。大抵のものはお腹をこはしますよ。
魚屋　そんなものをやつちやいけねえな。何しろあつちにもこつちにも惡い病がはやつてゐるから、氣をつけなくつちや……
主婦　ほんたうにチブスにでもなられた日にはかなはないからね。でも、すぐ腸の藥を飲ませておいたから、もう大分いゝだらうと思ふんだけれど。
魚屋　奥さんひとりぢや何にしても大變だね。
主婦　ご飯から拭き掃除から、子供の世話から洗濯まで、何もかもあたしひとりきりなんでせう。そりや腕が十本あつたつて足りはしないわ。——今日は何を持つて來たの。
魚屋　鮪にはうばう、なま鮭に鰺、鰯さんま——そんなもんだね。
主婦　さうね。
魚屋　はうばうどうだね。いきがいゝぜ。
主婦　うちぢやはうばうは嫌ひよ。——ぢやなま鮭でもおいて行つて頂戴。
魚屋　なま鮭。いくつだい。
主婦　さうね。よしやがいらないから三切もあればいゝわ。
魚屋　よしきた。（鮭を切る）奥さん。濟まないが皿を。
主婦　さう〳〵、お皿。——あゝ、立つのが面倒くさい。（立ち上つて臺所から皿を持つて來る）いきは大丈夫だらうね。
魚屋　おれの品だ。保證つきだよ。——有難う。さいなら。
（魚屋歸る。）
（主婦は魚をしまつて、また洗濯にかゝる。）
（赤ん坊が眼を醒ましたと見えて奥で泣き出す。）
主婦　しやうがないね。折角お洗濯をはじめたのに。——いゝよ、いゝよ。そんなに泣かなくつてもいゝでせう。いま行きますよ。ほんたうに坊やちやんにも困つてしまひますね。ママさんが洗濯をしないと、坊やちやんが着られるおべゝはもう一枚もないのよ。——いま行きますよ。どうしてそんなに泣くんです。しやうがないね。
（やけにごし〳〵洗濯をしてゐたが、急にやめて奥へ行く。）
（女中は主婦の言葉が耳にはいる度に、寝てゐるのが辛くて何度か起き出さうとしたけれど、やつぱり氣力がなくなつてそのまゝ横になつてゐたが、主婦が

奥へ行つたのを知ると、無理々々に起き上つて、壁や障子につかまりながら、風呂場に下りる。そして主婦が洗濯しかけてゐた赤ん坊の着物を洗ひはじめる。だるいのと息苦しいのをこらへながら。）

（主婦は赤ん坊を寢かしつけて、臺所にやつて來る。）

主婦　あら、おまへ、いつ起きたの。風にあたるといけないよ。寢ておいで。

女中　もう大丈夫でございます。

主婦　だつてぶりつ返しでもすると困るぢやないか。

女中　これつまみ洗ひでよろしいんですか。

主婦　あゝ、いゝの。けど、おまへそんなことをして大丈夫なのかい。

女中　はい、大丈夫でございます。

主婦　でも無理をするといけないよ。

女中　いゝえ、寢てをりましても退屈でございますから。

主婦　それもさうね。ぢや氣まゝにやつておくれ。（奥でまた赤ん坊が泣く）あら、また眼を醒ましてしまつたのかしら。——坊やちやん、坊やちやん。さうおつぱいばかり飮んでゐちや爲樣がありませんね。ママさん今日は忙しいんですから。——どうしてさう泣くんですの。今行きますよ、今。

女中　これも洗つておくんですか。

主婦　あゝ、それぢやついでにそれもちよつとやつておいておくれ。ざつとでいゝんだよ。

女中　はい。

（主婦奥へ行く。）

（女中は我慢しながら洗濯をつゞける。やがて濯いだものを抱へて外へ出て、物干竿に通す。それから竿を三つ股に挾んで物干の上の段に掛けようとすると、ぐらぐらと眩暈がして竿を取り落す。）

三

夕食のあと。

主人は茶の間でチヤブ臺に倚つたまゝ煙草をふかしてゐる。

主婦は臺所で茶碗や何かを洗つてゐる。

女の子がその傍で泣いてゐる。

主婦　いけませんといつたら——何故お前さんはさう分らないんです。何だつてさう大きい聲をして泣くの。坊やが眼を覺すぢやありませんか。もうお止めなさい。泣き止まないと、お母さまひどうございますよ。

主人　もういゝ加減にしないか。おまへがそんなことをいふからなほ泣き止まないんだ。

主婦　さうやつて煙草をふかしてゐるんなら、子供の面倒

でも見て下さい。

主人　馬鹿々々しい。子供になんか當つたつてしやうがないぢやないか。——だから早く代を頼めといつてゐるのだ。

主婦　女中がゐないからいつてゐるんぢやありません。

主人　兎に角さうがみ／＼いつたつて爲方がないよ。

主婦　あたしはもう女中なんかこり／＼です。うつかり代なんか頼めるものですか。

主人　おい、恒子、恒子。

女の子　……

主人　こつちへおいで。お父さまとご本を見よう。さあ、ご本を持つておいで。

（女の子はまだしく／＼泣きながら父のそばに繪本を持つて行く。）

主人　泣くんぢやない。泣くんぢや——。何だこれは。「ピーター先生鼻まがり。」つてのか。なるほど隨分鼻が曲つてゐるな。

女の子　お父樣、何て書いてあるの。

主人　これかい。「ピーター先生横へと歩く。なぜに眞つすぐ歩いてゆかぬ。」つてんだ。

女の子　それから。

主人　それから——「ピーター先生の仰しやるには、いゝえ、外のお人と同じよに、わしはお鼻の通りに歩いてる。」

主婦　（臺所を片附けて茶の間に來る）あなた。

主人　さあ、こんだは何てのかな。（繪本をまくる）

主婦　あなた。

主人　うむ。

主婦　そこにおいといた請求書見て。

主人　見た。病院のだらう。

主婦　え。——どうなさるの。

主人　どうするつて……はゝゝ。こいつはをかしいな。自動車のお化けだね。

女の子　自動車ぢやないわ。河馬がお車に乘つてゐるのよ。

主人　あゝ、さうか。

主婦　あたしいやになつてしまつたわ。

主人　なに、あの請求書かい。

主人　え。

主人　實際少し驚いたね。雇人なんだからもう少し安くしてくれてもいゝと思ふんだが。

主婦　ずゐぶんそれをいつたんですが、傳染病だから安く出來ないんですつて。でも、一割は引いてくれるさうですけれど。

主人　一割ぐらゐぢやいくらでもないからな。

主婦　だからあたし、避病院へ入れた方がいゝつていつたんですわ。
主人　だつて滿員なら爲方がないぢやないか。
主婦　そりやあの時は滿員でも一晩待ちさへすりや。あきが出來るつて話だつたんでせう。
主人　たとひ一晩だつて、傳染病と分つたものを少しでもうちにおけるかい。
主婦　でもあの時までおいといたんぢやありませんか。
主人　そりや病氣が分らなかつたからさ。併しチブスと分つた以上は少しだつておけやしないよ。子供にでもうつつて見ろ。どうするんだ。いや、子供ばかりぢやない。己たちにだつていつ傳染するか分りやしないぢやないか。
主婦　……
主人　それにお前は新聞に出ることを一番恐がつてゐたぢやないか。避病院に送ればどうしたつて區役所の方から新聞に知らせるからね。おれはそれも考へたから、少し金はかゝると思つたけれど、私立に入れることにしたんだ。
主婦　だつて二百圓もかゝつちや堪らないぢやありませんか。あたし今日はあの請求書を持つて來られたんで一日氣持が惡いわ。
女の子　お母さま。クレイヨン頂戴。
主婦　自分で持つていらつしやい。おしまひしてあるでせう。
女の子　え。（クレイヨンを持つて來ておとなしく畫を描く）
主婦　ねえ、あなた。よしのうちの方からもいくらか出させたらどうでせう。
主人　病院の費用かい。
主婦　え。半分までゞなくつても、三分の一出させたんでも、こつちはそれだけ輕くなるわけですわ。
主人　しかしまさか女中の親から取れもしまい。こつちで入院させたんだから。
主婦　けれど、何もうちで惡くしたわけぢやないんですからね。勝手に淺草なんかへ行つて五もくなんか食べるから惡いんですわ。
主人　さういやそんなもんだが、實際何があたつたのか分りやしないよ。
主婦　いゝえ、さうですよ。内のものは誰も惡くならないんですもの。——本當に馬鹿ですね。大道のものを食べるなんて。あんなところのものには何がはいつてゐるか分りやしませんわ。あたしアイスクリームが惡かつたのかとばかり思つてゐたら、あの時はもう潛伏期だつたの

ね。それであんなに水ものを欲しがつたのね。

主人　だからおれは早く宿へかへせといつてゐたんだ。

主婦　わたしだつてそれを知つてゐればすぐにもかへしましたけれど、分らないんですもの爲方がありませんよ。ちよつと頭痛がしたくらゐで一々女中をうちに歸してゐたら大變ですわ。一體あの子がいけないのよ。はつきりしたことをいはないで我慢ばかりしてゐるから。

主人　その後どうなんだい。

主婦　あたしは恐いから病院には行きませんけれど、先刻あれの親が來ての話にこゝ二三日が峠だつていつてゐましたわ。

主人　やつぱり熱は高いのかね。

主婦　三十九度から四十度ですつて。それはさうと病院の拂ひ、どうなさるの。明後日が勘定日よ。

主人　さうだね。

主婦　だから先刻いふやうにしていくらか出させてはどう。女中を病院に入れてやるなんてうちはなか〱外にはありませんよ。向うでも隨分濟まなく思つてゐるらしいから、話をしたら少しは出すと思ふわ。

主人　入院つたつて、あの病氣は入院させないわけにはいかないからね。

主婦　だつて女中の病氣に二百圓も出すなんて馬鹿らしいぢやありませんか。

主人　そりあこんな事に金を使ふのはたまらないが……親父つていふのは金があるのかね。

主婦　娘を女中に出すくらゐですから、さうあるとは思ひませんけれど……

主人　さうすると氣の毒だね。

主婦　いゝえ、氣の毒がられるのはこつちですよ。あんな病氣を持ち込まれて、ほんたうにうちこそ大迷惑だわ。

主人　だが、女中の親から出させるのはどうも聞えがよくないね。

主婦　でも、これつきりならようござんすけれど長い病氣なんですからね。こつちだつてさう〱はたまりませんわ。

主人　實際早く歸してしまへばよかつたね。

主婦　またそんなことをいつて。今更しやうがないぢやありませんか。

主人　そりや愚痴だけれどもさ。……

主婦　あすこを退院させて・施療の病院の方へ移すつてわけにはいかないでせうか。

主人　そんなことといつたつて、今動かせやしないよ。

主婦　それはさうね。

主人　どうだらう。この間話したやうに年期で返させたら。

主婦　お給金から差引くんですか。
主人　直つたらよく話して、長く勤めるやうにさせるんだね。そしていくらづゝでも返させたら……
主婦　でも、よしは直るかどうか分りませんよ。
主人　さうかね。
主婦　あゝいふ風に肥つた子は、心臓が弱いからどうも危いつてことですわ。それに今日聞いた話の工合ぢや……
主人　さうすると入院料は香奠になるかも知れないね。
主婦　だつて二百圓も香奠なんて。それも長くゐたんなら爲方がないと思ひますけれど、まだ一年とちよつとでせう。あたしいやになつてしまひますわ。何だつてこんな病氣を脊負ひ込んで來たんでせうね。
主人　兎に角弱つたね。

四

ある私立病院の三等室の一室。
患者が何人も寢てゐる。女中もその中にゐる。
看護婦は床に床を敷いて寢てゐる。
深夜。

女中　早く／＼。
（間。）
女中　もし／＼。
（間。）
女中　早くとり込んで下さいよ。
看護婦　（眼をさまして起る）何です。——水ですか。
女中　早くとり込んで下さいといつたら。
看護婦　どうしたんです。そんなに荒れちや……
女中　濡れるからさ。——あんなに雪が、雪が……
看護婦　さ、水をおあがんなさい。おちつかなくつちやいけませんよ。
女中　有難う／＼。——あ、まつ白。——
看護婦　何をそんなに見てゐるんです。——外はいゝお月夜ですよ。
女中　あゝ、あんなに、あんなに……
看護婦　寒氣がするんですか。湯たんぽが二つもはいつてゐるんですがね。——あら、こつちはさめてしまつた。今とりかへて來て上げますわ。
（看護婦は湯たんぽを出して取りかへに行く。）

——幕——

スサノヲの命（二幕）

人物

スサノヲの命
クシナダ姫
ある男
タヂカラヲの命
オホゲツ姫
その他

第一幕

舞臺暗黑。

大勢の人々がスサノヲの命の手足を壓へて地上に組み伏せてゐる。そのわきにタヂカラヲの命が立つてゐる。

スサノヲの命　やい、何をするのだ。放せ。放せ。

タヂカラヲの命　いゝからもつとしめつけろ。

スサノヲの命　くそ。貴樣等に。

タヂカラヲの命　もつと壓へつけろ。首の動かぬやうにしつかりと地べたに壓へつけてしまへ。

スサノヲの命　うーム。（呻る）

タヂカラヲの命　（側の者に）鋏は持つて來てあるだらうな。

家來　は、こゝにございます。

タヂカラヲの命　よし。それで髮の毛を切つてしまへ。

家來　はあ。（併し躊躇してゐる）

タヂカラヲの命　恐れることはない。すぐに切つてしまへ。

スサノヲの命　なに、己の髮を切る。そんなことをして見ろ、たゞはおかないぞ。ウーム。（力をこめて壓へてゐる人々を撥ね飛ばさうとする）

タヂカラヲの命　命、あなたはまだ荒ばれるのですか。神妙になさらないと、爲になりませんぞ。

スサノヲの命　生意氣なことをいふな。

タヂカラヲの命　まだそんなことをおいひになる。それならかうしますぞ。（自身で壓へつける）

スサノヲの命　（呻る）

タヂカラヲの命　どうです。これでも反抗しますか。

スサノヲの命　するとも！

タヂカラヲの命　これでも。

スサノヲの命　くそ！

タヂカラヲの命　起きられるならお起きなさい。どうです。

スサノヲの命　畜生！
タヂカラヲの命　（家來に）足の方をもつとしつかりおさへてゐろ。――何をおづ〳〵してゐるのだ。早く切つてしまはぬか。――おい、貴樣も頭のところを壓へてをれ。ぎゆつと押しつけてゐるんだぞ。動かないやうに。――（鋏を持つてゐる者に）さあ、早くやれ。
スサノヲの命　な、な、何をするのだ。
タヂカラヲの命　もういくら荒ばれたつて大丈夫だ。さあ、どん〳〵切つてしまへ。
（家來スサノヲの命の髮を切る。）
スサノヲの命　畜生、畜生、畜生。
タヂカラヲの命　手をゆるめては駄目だぞ。ぎゆつとしめつけてゐるんだ。――そこだけでなく、そつちも切つてしまへ。――何故、動くのです。神妙になさらぬか。――それから鬚も、鬚も切るのだ。――うム、それでいゝだらう。
スサノヲの命　畜生、畜生。何の怨みがあつて貴樣等はこんなことをするんだ。
タヂカラヲの命　あなたがあんまり荒ばれるからです。
スサノヲの命　おれは正當のことをしただけだ。
タヂカラヲの命　何が正當のことです。畔をこはしたり、溝を埋めたり、あなたのやることはよくないことばかりではありませんか。
スサノヲの命　おれが畔をこはしたのは、水のない田に水を送るためだ。おれが溝を埋めたのは一方にだけ水をためないためだ。それが何でよくないことだ。貴樣等は自分さへよければ、外はどうあらうとかまはないといふのか。
タヂカラヲの命　そんなことはありません。あなたはあすこにだけ水を送ればそれでいゝと思つてゐるやうですが、水を送らなければならないのはあすこだけぢやありません。あなたは全體を見ないからいけません。
スサノヲの命　それなら何故貴樣たちはそれをしないのだ。
タヂカラヲの命　大神のなさることに依怙のご沙汰はござりません。大神は萬民のためをはかつておゐでゞす。一方に厚く一方に薄いといふことはありません。ですからあなたは殊更異を立てゝ高天の原を攪亂することはないではありませんか。
スサノヲの命　馬鹿なことをいへ。貴樣等のやうにぐづぐづしてゐたら田はみんな干上つてしまふ。おれがやつたことは正當のことなのだ。
タヂカラヲの命　それなら何故服屋（はたや）の屋根をこはして、大神が機を織つておいでになるところへ逆剝（さかはぎ）にした馬なぞ

を投げ込むのです。

スサノヲの命　それは姉上やおまへたちがおれのやつたことに難くせをつけるからだ。正しいことをしてゐるのに不正だといはれゝば誰だつて癪にさはる。癪にさはればあの位のことをやるのはあたりまへだ。

タヂカラヲの命　それだから亂暴だといふのです。あなたは自分の意見が通らないと、すぐに手荒なことをなさる。そんなことをなさらないで何故穩かに話をなさらないのです。

スサノヲの命　そんなことでは貴樣等に分らないからだ。

タヂカラヲの命　いゝえ、さうぢやありません。あなたは力があるのをいゝことにして、すぐ人を虐げ、秩序を亂さうとなさるのです。さういふ理不盡のことをなさるから、かういふ所刑を受けるのです。さあ、これをしほに心をお改めなさい。

スサノヲの命　改めるものか。

タヂカラヲの命　改めない？

スサノヲの命　おれは改めるやうな惡いことはしてゐない。おれのやつたことは天地に耻ぢないことだ。

タヂカラヲの命　何處までかたくなゝのだ。これだけ罰せられてもまだお分りにはならないのか。

スサノヲの命　馬鹿！　こんな目に逢ひながら、その上宥しを乞ふやうなそんな意氣地なしが何處にある。おれはもつと荒ばれてやる。うーム。（力をこめて起き上らうとする）

タヂカラヲの命　あなたはまだそんなことをされるのか。よし。それなら命の爪をみんな引き拔いてしまへ。

スサノヲの命　なに、爪を拔く。

タヂカラヲの命　（部下に）何を恐れてゐるのだ。いゝから手足の爪を一本々々引き拔いてしまふのだ。

スサノヲ命　貴樣は何の權能があつてそんなことをいふのだ。貴樣にはそんなことを命ずる資格はない筈だぞ。

タヂカラヲの命　いや、これはわしの獨斷ではない。八百萬の神々のご協議を經たものだ。實ははじめからさうするやうに言ひ附かつて來たのだが、餘りにおいたはしいから差控へておいたのだ。併しもうそんな斟酌は無用のことだ。さあ、すぐに取りかゝれ。

スサノヲの命　そんなことをきめた神々に呪あれ。おれのやうな正しいものを罪する貴樣等に呪あれ。

タヂカラヲの命　あなたは神々を呪ふ前に自分の腕力を呪ふ方が正當です。あなたは力があるばかりに亂暴を働くのです。あなたのためにはそれがなくなる方がいゝのです。

スサノヲの命　餘計なお世話だ。そんなことに貴樣等の指

罰を受けるものか。
タヂカラヲの命　それ、じたばたしないやうにしつかりと足をおさへてしまへ。大神の命令に反くものはたとひ誰なりとも容赦はないのだ。さあ、足から先に拔け。
（家來足の爪を拔く。その度に命苦しさうにうなる。）
タヂカラヲの命　どうです。もう大抵おもひ知つたでせう。
スサノヲの命　誰が。
タヂカラヲの命　あなたはまだそんなことをいふのですか。あなたはおとなしくはなれないのですか。人間らしい氣持には返れないのですか。
スサノヲの命　それはそのまゝ貴樣等にいふことだ。
タヂカラヲの命　かうするのはあなたを憎むからではありません。あなたに眞人間になつて貰ひたいからです。あなたの體は罪で穢れてゐます。かうしてあなたの體内の穢れを引き拔いて上げるのです。今秡へをして上げますから神妙にしておいでなさい。
スサノヲの命　何を馬鹿なことをいつてゐるのだ。そんな愚なことは止めてくれ。
タヂカラヲの命　あなたは秡へを侮蔑なさるのですか。
スサノヲの命　侮蔑するとも。
タヂカラヲの命　よし。そんな不遜なことをいふならわしがおもひ知らしてやらう。——手をこつちへ引つぱり出せ。二人でも三人でもかゝつて引つぱり出せ。——うム、ぎゆつとおさへてゐるのだぞ。（手の爪を拔く）どうだ。
スサノヲの命　うーム。
タヂカラヲの命　（また拔く）　どうだ。
スサノヲの命　うーム。
タヂカラヲの命　どうだ。
スサノヲの命　うーム
（つひに十本の爪を拔いてしまふ。スサノヲの命の呻り聲はだん／＼力なくなつて行つて、しまひにはごく幽かになつてしまふ。）
タヂカラヲの命　どうだ。これでもまだ言葉をかへすか。——何といふ剛情な男だ。——さあ、これで秡へをして高天の原から追放してしまふのだ。
（人物消える。）

（暗黑の中に呻聲が聞える。）
（オホゲツ姫が灯を持つてやつて來る。）
オホゲツヒメ　あゝびつくりした。誰、そんなとこに呻つてゐるのは。——お起きなさいよ。そんなとこに倒れてゐないで。病氣なの。（近寄つて）まあ、スサノヲの

命様ではございませんか。どうなすつたのでございます。こんな所にお横になつていらしつて。ほゝゝ、そんなに顔をお隱しになることはありませんよ。私ですから。――あなた様は千位置戸を負されてご追放になつたのですね。本當に餘り亂暴がお過ぎになりましたわ。これからは屹度おつゝしみなさいましよ。そのうちにわたくしがお取りなしゝてあげますから。

スサノヲの命　やかましい。

オホゲツヒメ　まあ、何てことを仰しやるの。ひとが折角親切にいつて上げるのに。

スサノヲの命　おまへはオホゲツヒメだな。

オホゲツヒメ　え。

スサノヲの命　けがらはしい。そんな奴は早く向うへ行け。

オホゲツヒメ　えゝ、行きますとも。追放された人のところになんかゐるのはわたくしの方で眞平ですわ。――あら、何だらう、べと〱して――まあ、血！　どうしたんだらう。こんなにいつぱい。おゝ、いやだ。着物にまでついてしまつたわ。――あら、あなたは血だらけね。どうなさいましたの。爪を剝がれたんですか。まあ隨分ひどい目におあひになりましたのね。――血をお洗ひなさいましよ。そこに川がありますわ。

スサノヲの命　うるさい。

オホゲツヒメ　あなたお洗ひになりませんの。それなら勝手になさる方がいゝわ。――本當にいやになつてしまふ。こんなに血なんかつけられて。（急いで川で手や着物を洗ふ）

スサノヲの命　おい。

オホゲツヒメ　……。

スサノヲの命　おい。

オホゲツヒメ　何です。

スサノヲの命　水をくれ。

オホゲツヒメ　水ですつて。

スサノヲの命　う。咽喉が渴いてたまらないのだ。

オホゲツヒメ　勝手なことばかり。さつきはあんな惡口をいつておきながら。

スサノヲの命　おい、早くくれ。

オホゲツヒメ　少しお待ちなさいな。これをゆすいでしまはなくつちや。

（やがてオホゲツヒメは川の水をすくつて命に飮ませる。）

オホゲツヒメ　はい。

スサノヲの命　もう一杯くれ。

オホゲツヒメ　うるさい人ね。

（オホゲツヒメ川に行つてまた水をすくつて來る。）

スサノヲの命　（飲まうとして）何だ。これは。
オホゲツヒメ　どうしたんです。
スサノヲの命　どうしたんぢやない。血がはいつてゐるではないか。
オホゲツヒメ　そんな筈はありません。わたくし、よく手を洗つたんですもの。
スサノヲの命　嘘をつけ。貴樣はゆすいだ、きたない水をわざと汲んで來たんだらう。
オホゲツヒメ　神かけてそんなことはございません。
スサノヲの命　いや、それに違ひない。こんなきたない水をさつきも己に飲ませたんだな。
オホゲツヒメ　いゝえ、違ひます。違ひます。それはあなたの指のが垂れたのです。ほら、また垂れたぢやございませんか。
スサノヲの命　ごまかすな。貴樣ははじめから濁つた水を汲んで來たのだ。
オホゲツヒメ　まあ、あなたはひどいお方ね。わたくしに水を汲ませておきながら、そんないひがかりをつけるなんて。
スサノヲの命　何がいひがゝりだ。濁つた水だから濁つた水だといふのだ。貴樣はこんなことをしておれを嘲弄するのが面白いのか。傷いた追放人をもてあそぶのが愉快なのか。
オホゲツヒメ　そんなこと、そんなことはありません。それはあなたのひがみです。わたくしは、わたくしは……
スサノヲの命　默れ。その位のことが分らなくつてどうする。女なんて奴は落ち目になつたものを見ると、すぐこんないたづらをするのだ。世界中で一番罪の深いのは貴樣のやうな女だぞ。えゝ、おのれといふ奴は。（オホゲツヒメの手を捻ぢあげる）
オホゲツヒメ　あ、いた、た。何をなさるのです。それは無法です。よく調べもなさらないで。――あなたは考へ違ひをしてゐるのです。
スサノヲ命　もういひわけなんか聞く耳はない。――おれは人々のためをおもへばこそすゝんで事に當つたのに、そのおれを侮蔑するとは何事だ。こ、こんな奴にまでさげすまれたと思ふと……えゝ。（力をこめて女を擲りつける。そのくせ自分の方もひどく痛かつたので、爪のはがれた拳をそつとおさへる。）

（人物消える。）

イヅモノ國、スガ。

木立の間を通して強い光が差し込んでゐる。
そこらに澤山根こぎにされた木が倒れてゐる。
スサノヲの命は木を枕にして眠つてゐる。
春の日の午後。鳥が囀つてゐる。

しばらくしてスサノヲの命はむつくりと起き上る。そしてぼんやりあたりを見廻す。

スサノヲの命　もう少しやるかな。
（命は「うんしよ〳〵」わめきながら兩手をかけて木を搖り動かす。やがて一本根こぎにしたので、ふとわきを見るとクシナダ姫がいつの間にかそばに立つてゐる。）
スサノヲの命　おまへ、やつて來たのか。
クシナダ姫　え。お歸りが遲いから、お探しにまゐりましたの。
スサノヲの命　よくこゝが分つたな。
クシナダ姫　でも、あなたのお聲がしましたもの。
スサノヲの命　さうか。——おい、おれはこゝに家を建てることにきめたよ。
クシナダ姫　もうおきめになつたのですか。今日は地面を見るだけかと思つたら。
スサノヲの命　おれはやらうと思つたらすぐにやらないと氣が濟まないんだ。おまへだつてこゝなら不同意ぢやないだらう。かういふ林の間だと風の當りも靜かだし、それに山水がすぐそこに落ちてゐるから……。
クシナダ姫　あなたなか〳〵考へていらつしやるのね。
スサノヲの命　そりやおれのやうな奴だつて、自分の家となればその位のことは考へるよ。どうだい。向うを見てご覽。
クシナダ姫　まあ、いゝ景色ですこと。海が見えますのね。
スサノヲの命　あれが見える方がいゝと思つて、そこのところを少しすかしたのだ。
クシナダ姫　ぢやこの立木はあなたがみんなお倒しになつたのですか。
スサノヲの命　うム、それに家を立てるところも開かなくちやならないからな。まだ大分拔かなくちやならないが、（棒で地上に線を描きながら）家はこゝのところへ立てるつもりなんだ。
クシナダ姫　あら、そんなに大きく。
スサノヲの命　大き過ぎるかい。
クシナダ姫　だつて二人ぎりなんですもの。
スサノヲの命　ぢや、この位でいゝかね。（棒でまた線を

引く〉

クシナダ姫　それでもまだ大きいくらゐですわ。

スサノチの命　そんなに小さかつたら、風で吹き飛ばされてしまふよ。

クシナダ姫　あら、そんな。

スサノチの命　はゝゝゝ。

クシナダ姫　わたくし、家は向うむきの方がいゝと思ひますわ。

スサノチの命　うム、その方が景色もいゝし、日當りもいいな。

クシナダ姫　いつ頃出來るでせう。

スサノチの命　なに、家か。そりやすぐだ。柱や何かはそこに引き拔いた奴を使へばいゝんだから。

クシナダ姫　あ、さうですわね。ぢやもうぢき建ちますわ。

スサノチの命　うム、わけはないさ。

クシナダ姫　まあ、嬉しい。

スサノチの命　おれは一度も家といふものを持つたことがないのだが、おれのやうなものでもいよ〳〵自分の家を持つとおもふと樂しみだ。——おい、炊事の道具なんかは落ちのないやうにしてくれよ。

クシナダ姫　え、その方は大丈夫ですわ。

スサノチの命　どれ、もう少しやらう。

クシナダ姫　あなたおひとりでおやりになるんですか。

スサノチの命　人に手傳つてもらふなぞは面倒だ。これくらゐ何でもない。

クシナダ姫　ぢやわたくしはこゝを片附けませう。

スサノチの命　さうしてくれ。

〈命はまた「うんしよ〳〵」搖りながら立木を引き拔く。〉

クシナダ姫　まあ、汗がいつぱい。〈額の汗を拭いてやる〉ずゐぶんお疲れになるでせう。

スサノチの命　なあに、大したことはない。おれは力を出すと却つて淸々するのだ。——本當は、こんなものでない、向うからのしかゝつて來るやうな奴であつたら、それこそもつと張合があるのだが。さういふ上では八俣の大蛇のやうな奴がまた出てくれば面白いと思つてゐるのだ。あんな奴と引つ組んで思ひ切り鬪つたら、ほんたうに生き甲斐があるやうな氣がするよ。

クシナダ姫　まあ、わたくしあんな目には二度と逢ひたくございませんわ。

スサノチの命　うム、おまへはさうだな。

クシナダ姫　あの時、折よくあなたがおいでになつたからようございましたものゝ、若しおいでがなかつたら、わた

くしは今頃どうなつてゐたかしれませんわ。
スサノヲの命　おれは高天の原を追放されてあてどもなくこゝにやつて來たのだが、考へると夢のやうだな。
クシナダ姫　ほんたうに不思議でございますわね。二人がかうなつたことを思ひますと、何といつたらいゝのかしれませんが、かう、隱れた力とでもいふやうなものがわたくしにはしみ〴〵おもはれますわ。
スサノヲの命　世の中にそんなものがあるものか。
クシナダ姫　でも、わたくしには何かさういつたやうなものが、あるやうに思へて爲方がありませんわ。それでなくつては見も知らない二人が一しよになれる筈はありませんもの。
スサノヲの命　それはたゞ偶然の引き合せだ。力といふものはこれだけだ（腕を振りながら）この外にはありはしない。
クシナダ姫　男の方はさうお思ひになつておいでのやうですが、わたくしのやうな弱いものは……
スサノヲの命　力はこれだけだ。そしておれはそれを持つてゐるのだ。おれを信じてゐるがいゝ。――うーんと。（また木を根こぎにする）だが、おれはこの力があるばかりに、人から却つて嫉まれてゐるのだ。高天の原から追はれたのも、こゝの者からうとまれてゐるのも、おれが強いからだ。
クシナダ姫　あら、うとむなんて。
スサノヲの命　いや、おまへと、おまへの親たちがおれを信じてゐることは知つてゐる。併し外の奴はさうぢやない。あいつ等はおれがこゝの者でないので心からおれを尊敬してはゐないのだ。いや、そればかりでない。おれと一しよになつてゐるおまへまで侮辱されてゐることも、おれはよく知つてゐる。併し本當はおれがこゝの種族の者でないから尊敬しないのではない。それが不平なので奴等は頭が上らないから、それが不平なのだ。だが嫉む奴には嫉ましておくより外はない。おれはそのために弱くなる必要はないからな。――おい、あすこに一本立ちの太い、大きな松の木があるだらう。おれはあれだ。どんな風が吹いて來ようとも、どんな嵐が押し寄せて來ようとも、おれはびくともしやしない。おれはあゝいふ生活を送つて來たのだ。おれはそれでも少しも寂しくない。おまへもあれに慣れなくつてはいけない。
クシナダ姫　でも、人とつき合はないのは……
スサノヲの命　おれがゐるからいゝではないか。
クシナダ姫　それはさうですが、……では、あなたはお國が戀しいなんてことはございませんの。
スサノヲの命　高天の原か。あんなところを戀しいなんて

思つたことがあるものか。おれは一生あすこを呪つてゐるのだ。
クシナダ姫　どうしてそんな風にお考へになりますの。生れたお國ぢやございませんか。
スサノヲの命　生れた國だつて何だつて、手足の爪を剝いで人を追ひ出すやうなところに誰が愛着を持つもんか。おれは死んだつて姉と和解なんかしやしない。
クシナダ姫　それはあなたのお心持は分りますけれど……
スサノヲの命　おれがかう考へるのは無理はないだらう。
クシナダ姫　ですけれど、あなたこだはつていらつしやるんぢやないでせうか。もう今までのことなんかお忘れになつてはどう。
スサノヲの命　そんなことが出來るものか。それこそおれを引つ捕へて責めつけた奴等に、どうも有難うございましたといふやうなものだ。それもおれが惡いことをしたのなら爲方がない。併しおれのやつたことは正しいことなのだ。そりや多少過激に走つたところがないぢやないが、その根本は正しいことなんだ。それにもかゝはらずおれを罪人扱ひにするのは言語道斷ぢやないか。
クシナダ姫　ぢやあなたはお國のことなんかもうちつともお考へになりませんの。
スサノヲの命　それが妙なんだ。

クシナダ姫　どうなんですの。
スサノヲの命　おれは厭で〳〵たまらないくせに、あすこのことが時々おもひ出されて爲方がないんだ。口惜しいけれどさつきもふいと夢に見たのだ。
クシナダ姫　それなら戀しくおもつてゐるんぢやありませんか。
スサノヲの命　馬鹿なことをいへ。あんなところが戀しくつてたまるものか。
クシナダ姫　あなたはひとりで强がつていらつしやるのね。今更戀しいとはいひにくいものだからそんなことをいつてゐるのでせう。だつていつたつてかまはないぢやありませんか。生れたお國ですもの戀しいのが當りまへですわ。戀しいと思はなければその方がよつぽど不思議ですわ。現にあなたは夢にさへ見たくらゐなんでせう。
スサノヲの命　それは戀しいから見たんではない。口惜しいから見たのだ。
クシナダ姫　まあ、あんなことを。あなたは心とうらはらのことをいつていらつしやるんですわ。
スサノヲの命　そんなことはないさ。
クシナダ姫　どうしてさうひとりぼつちになりたがるんでせう。依怙地になつていらつしやるのね。
スサノヲの命　さうぢやないといつたら。

クシナダ姫　いゝえ、さうよ〳〵。

スサノヲの命　そんなことをいふおまへの方こそよつぽど依怙地だよ。

クシナダ姫　ほゝゝゝ。

スサノヲの命　おい、話ばかりしてゐちやちつともはかがいかないぢやないか。

クシナダ姫　あら、ほんたうに。――わたくし一生懸命にやりますわ。（片づける）

スサノヲの命　おれもやるよ。（また「うんしよ〳〵」木を揺ぶる）

（鳥の聲が長閑に聞える。）

――幕――

第二幕

前幕から幾月か立つた後。

同じ場所ではあるが人の力が加はつたので樣子がかなり變つてゐる。

よきところに家が立つてゐる。

併し入口は向う側にあるので家の後ろだけが見える。

スサノヲの命はわきの畑を耕してゐる。

家のなかから夕餉の煙がゆるく立ちのぼつてゐる。

クシナダ姫　（家のなかから出て來て）あなた。あなた。

スサノヲの命　うム。

クシナダ姫　もうお濟みになりますか。

スサノヲの命　もうおしまひだ。

クシナダ姫　ではお夕飯になさいませんか。

スサノヲの命　しよう。――さあ、これでよしと。かういふ爲事は却つて疲れるな。

クシナダ姫　あなたにはさうでせうね。

スサノヲの命　（山水で顏や手を洗ひながら）あゝいゝ氣持だ。――どうだい。今日も呼んで見るかい。

クシナダ姫　え、さうした方がいゝと思ひますわ。困つてゐる人があるとお氣の毒ですもの。

スサノヲの命　では、呼んで見よう。

（スサノヲの命は家の前の少し小高いところに立つて、向うむきに谷の方に向つて大聲に呼ぶ。）

（クシナダ姫は家にはいつて食事の用意をする。）

スサノヲの命　おうい。路に迷つてゐる人はないかあ。食物や水に不自由をしてゐる人はないかあ。――おうい。路になやんでゐる人、餓ゑてゐる人、咽喉がかわいてゐる人はこゝにやつて來るがいゝぞう。

（一人の男が家のうしろの方にそつと現はれる。併しまたすぐに姿を隱す。）

スサノヲの命　今日もまた一人もないな。

クシナダ姫　（家の中から）　さうですか。でももう一度お呼びになつて見たら。

スサノヲの命　さうだな。――おうい。路に迷つてゐる人はないかあ。食物や水に不自由をしてゐる人はないかあ。――おうい。路になやんでゐる人、餓ゑてゐる人、咽喉がかわいてゐる人はこゝにやつて來るがいゝぞう。――やつぱり一人もないよ。

クシナダ姫　こゝはあんまり人が通りませんのね。

スサノヲの命　却つて二人のはうがいゝ。水入らずで。ぢや、食べよう。

クシナダ姫　どうか。

（スサノヲの命も家の中にはいる。）

（間。）

（前の男が又忍び足で家のうしろに現はれる。中の様子をうかゞつて向うに廻はる。しばらくすると、突然。）

スサノヲの命　何をするんだ。貴様は。

（といふ聲がすると共に、ばた／＼と人の取組合ふもの音が聞える。）

（やがて命は男を引き据ゑて出て來る。）

スサノヲの命　貴様は何故あんなことをするんだ。貴様は腹がへつてゐるのか。腹がへつてゐるなら何故あたりまへに食を乞はないんだ。貴様はおれがさつきそこでどなつた言葉を聞かなかつたのか。聞かなかつたのなら聞かなかつたでいゝ。併し默つて人の物に手をつけるのはよくないぢやないか。おれは惜しいんでいふんぢやない。おまへが欲しいといふならいくらでも喜んでやる。けれども無斷で持つて行かれるとなると、默つて見てゐるほどおれは人がいゝ人間ぢやないんだ。どうだ。もう今のやうなことはしないか。二度とすると承知しないぞ。おれはもういふだけいつた。おまへは腹がへつてゐるんだらう。さあ、食ふがいゝ。

ある男　……

スサノヲ命　何故食はないんだ。今度はいくら食つたつてかまひやしない。さあ、お上り。

ある男　……

スサノヲの命　あゝ、これは泥がついてゐる。（クシナダ姫に）おい、あつちのを持つておいで。

（クシナダ姫は別のものを持つて來る。）

スサノヲの命　さあ、やらないか。

ある男　（しく／＼泣き出す）

スサノヲの命　おい、どうしたのだ。

（クシナダ姫水を持つて來る。）

スサノヲの命　こゝに水もあるよ。自由にやるがいゝ。おれたちはあつちへ行つてゐるから。

（二人家の中にはいる。）

（男は暫らく首を垂れたまゝでゐたが、やがて食べ初める。）

（食べ終つたころスサノヲの命が出て來る。）

スサノヲの命　もう少しどうだ。

ある男　（默つて首を振る）

スサノヲの命　遠慮することはない。澤山やつてくれ。

ある男　有難うございます。もう十分です。どうもたゞ今はほんたうに濟みませんでした。

スサノヲの命。もうそんなことはいゝよ。

ある男　わしはほんたうに耻しくなりました。

スサノヲの命　おまへさんは何か不平がありさうだね。

ある男　どうしてそれがお分りです。

スサノヲの命　顔を見りや大抵分るよ。

ある男　さうですか。やつぱり相に出てゐるんですね。實はわしは人のためにひどい目に逢つたので、世の中が癪に障つてたまらないのです。それ以來わしは人のことが信ぜられなくなつてしまつたのです。さつきあなたが食物の欲しい人はないかと呼んだ時、わしはあれをよく聞いてゐたんです。併しこゝの家に餘分の食物があるなとはおもひましたが、本當にくれるのだかどうだかそれは信ぜられなかつたのです。いや、信じようとしなかつたのです。それでついあんなことをしてしまひました。申譯がありません。

スサノヲの命　おまへさんは何處の人だい。

ある男　山二つ向うのものです。

スサノヲの命　それがどうしてこんなところへやつて來たのだ。

ある男　そこを追ひたてられたのです。

スサノヲの命　追ひたてられた。それは氣の毒だな。一體どうしてそんな目に逢つたのだい。

ある男　…

スサノヲの命　話して惡いことなら何だけれど…實はおれも追放された一人なのだ。故郷にいれられないで。

ある男　あなたも。さうですか。…わしは今も申し上げた通り、山二つ向うのものですが、ある日友だちと一しよに部落の長の劍を磨いてゐたのです。友だちは中身を、わしは鞘を磨いてゐました。ところがどうしたはずみか友達が磨いてゐるあひだに劍が半分に折れてしまつたのです。わしたちは接ぐことも出來ないし、さうかといつてこのまゝ隱すといふわけにもいかないので、友だちは泣き出してしまひました。これが知れりやひどい處刑になりますからね。その上友だちには年をとつた母親があるんです。それで母のことをいひ出しては一層歎く

ものですから、わしも可哀さうになつて、……それにもともとわざとやつたことではないんですから、――わしが代りに罪をひき受けてやらうといつてやつたんです。

スサノヲの命　うム。

ある男　で、わしは長の前に行つて過失を詫びて、宥しを乞うたところ、長はひどく怒つていきなりわしを擲りつけたのです。それからさん〴〵笞打たれて半死半生のやうになつて歸つて見ると、友だちはゐないのです。わしが處刑を受けてゐるのを見て恐くなつたのか、それともわしが本當のことを喋つてしまふとでも思つたものか、兎に角母を連れて逃げてしまつたのです。あいつの身代になつてやつたのに、禮もいはずに逃げてしまつたと思ふと、癪に障つてたまらなかつたものですから、わしはある心やすい友達に實際のことを話したのです。ところがいつの間にかその話が長に知れて、引きずり出されました。そして貴様はゐなくなつた奴に罪をなすりつける不屆な奴だと、またひどい處刑に逢ひました。そりやわしが身代になるといつておきながら、後で喋つたのはよくないと思ひますが、併し友の爲打があんまり憎らしかつたものですから、つい喋つてしまつたのです。あいつ母をかせにして、わしにすつかり罪を着せてしまつたのです。――ご覽なさい。この身體の傷を。これが友のために盡してやつた報酬です。

スサノヲの命　それはひどい目に逢つたものだね。

ある男　え、全く馬鹿を見ました。それ以來、わしは人を信じないやうになつてしまつたのです。

スサノヲの命　その心持はおれにもよく分る。

ある男　有難うございます。さういつて下すつたのはあなた一人です。

スサノヲの命　おまへさんとは事情が違ふが、おれも國を追放された時、道端で罪もない女を擲りつけたことがある。そんな目に逢ふと、むしやくしやして理非の別がなくなつてしまふのだな。

ある男　いや、世の中にはもと〳〵理非の別なんてないんぢやないでせうか。

スサノヲの命　そんなことはないさ。

ある男　併しわしがいゝ例です。

スサノヲの命　おまへさんはいゝことをしたのに、と考へるんだらう。それはおれも何度思つたことかしれない。併しさう考へることはいゝ報を求めることだ。そりやさもしい考だよ。

ある男　ぢやあなたはいゝ奴がぶん擲られても不都合だとは思はないんですか。

スサノヲの命　それはおれも不當だとは思ふが、世の中の

ことはどうも正義だけで押して行かうとしては片がつかないものがあるんだと思ふね。
ある男　だからわしはいつてるんです。道理もくそもないんだから、ごまかして渡るのが一番なんだつて。
スサノヲの命　おまへさんは酷くひねくれてしまつたね。
ある男　だつてさうぢやありませんか。いゝことをする奴ほど馬鹿を見るんですから。
スサノヲの命　そこに赤い花があるね。
ある男　あ、これですか。
スサノヲの命　そいつの實はこんな小さなもので、黒いやつだ。割つて見たつて中には赤いものも青いものも何にもありやしない。それが地に落ちると、こんな赤い花や、青い葉を出すんだ。黒い土の中から、そして黒い種子からどうしてかういふ綺麗なものが生えるのか、おれにはどうしてもそれが分らないのだ……
ある男　それはわしにも分らない。
スサノヲの命　分らなくつても、土に育まれると赤い花が咲くことは確かなことだ。おれはこゝに住むやうになつて、かういふものをしみ〴〵見てゐる間に、理窟や何かを越えた、もつと深いものがあるやうに思へてならなくなつて來たんだ。
ある男　わしは花のことなんかどうだつてかまひません。
スサノヲの命　さうか。――おい、おれの腕をちよつと見ないか。どうだ、がつしりしてゐるだらう。腕力にかけてはおれは負けた例がないのだ。それだけにおれはこれを自慢にもしてゐたし、またこれで何でも片をつけてゐたのだ。だからおれにとつてはこれが無上のものだつたのだ。ところが世の中には力もなにもないのに逞しいものをどん〳〵手なづけていくものがゐるので、おれは驚いてしまつたのだ。
ある男　それは何です。
スサノヲの命　女だ。早い話があれは狼のやうな野獸を家畜にしてしまつたぢやないか。か弱い女の何處にさういふ力があるのか。おれはそれが不思議になり出したのだ。――はゝゝ、おまへさんは笑つてゐるな。おれをおめでたいと思つてゐるのだらう。さう思ふならさう思つてもいゝ。併しおれのいつてゐることは本當のことなのだ。
ある男　だが狼は犬になつてからは弱くなつてしまひましたね。
スサノヲの命　はゝゝ、男は家庭を持つて弱くなるといふのか、けれども強いだけぢや世の中は分らない。おれは今まで馬鹿だつたよ。たゞ獨りでどなり廻つてゐたのだ。たゞひとりで宇宙の苦を荷つてゐたのだ。併しおれは一人で脊負はないで、二人で脊負はうと思ふのだ。二

人で脊負へないものはみんなして脊負はうと思ふのだ。さうすればみんなが輕くなる。それをおれひとりで無理に脊負はうとしたのだ。そして脊負ひきれないで不平をいつたり、荒ばれたり、泣いたりしたのだ。おれの不平の度は恐らくおまへさんよりもつと强かつたらう。もつとひどくすねたらう。おれは野中の一本松を理想にしてゐたのだ。どんなに風が吹かうが、雨が降りかゝらうが、おれはそれと戰はうとしたのだ。併し殊更孤獨をえらび、殊更風を受けて曲りくねることはないやうに思ふ。この頃では林の中のやうに、まはりのものと一しよに眞直に延びて行きたいと思つてゐるのだ。

ある男　けれども一本立ちの松のやうな生活だつていゝちやありませんか。

スサノヲの命　うム、それはあゝいふ生き方もある。併し林のやうな生活もあることを知らなくつてはいけない。何でもかでも自分と同じやうでなくつてはいけないと思ふのは狹い了簡だ。ところがおれは前にはさうだつたのだ。他を見ないで自分だけが正しいと思つてゐたのだ。併し他人が分らないやうなものは自分も分らない奴だ。自分以外のものを認めないといふことはやがて自分を認めないことだ。

ある男　さうですかね、わしは自分も認めませんし、他人も認めません。たゞごまかしが眼につくだけです。

スサノヲの命　おまへさんの氣持には同情するがひねくれるのはよくないね。

ある男　併しわしのやうな目に逢つたものはどうすりやいいんです。

スサノヲの命　さうだ。おれもさういふ風に考へた。そして凡てを敵とした。併しいつの間にか今のやうな考になつたのだ。

ある男　わしにはなれません。

スサノヲの命　これは理窟ぢやない。憎みや、爭ひを越えた大きな事實だ。――さう〳〵、おまへさんは大分傷をしてゐたね。この谷に熱い泉が湧いてゐるんだが、それにはいつて見る氣はないか、しみるけれども傷にはよく效くよ。

ある男　さうですね。

スサノヲの命　面白いぢやないか。それは鹿に敎はつたのだ。敎はつたといふと妙だけれど、手負の鹿がそこに浸つてゐたので、おれたちに分つたのだ。だが傷に效くなんてことを鹿は何處で知つたのだらう。あんな奴だつてなか〳〵輕蔑は出來ないね。――一つ、その泉につかつて見ないか。そりや心が延び〳〵するよ。

ある男　有難うございます。わしはぼつ〳〵出かけることにしませう。

スサノヲの命　もう夜になるぢやないか。
ある男　なあに、寢るなあ、何處にだつて寢られます。――今いつた熱い泉つてのは何處にあるんです。
スサノヲの命　そこに行くのかね。それならそこを下りてあすこの谷間の左の方だ。
ある男　そこに行くかどうか自分にも分りませんが……では、どうも大變ご迷惑をかけました。（家の前の入口のところで中にゐるクシナダ姫に）どうもご馳走さまになりました。

（男は谷の方に下りて行く。クシナダ姫が家の中から出て來る。）

クシナダ姫　あの人、何處へ行くんでせう。
スサノヲの命　多分泉へ行くんだらう。氣の毒な人だ。おれもあゝなるところだつたのだ。
クシナダ姫　あなたいつからさつきのやうなお考になりましたの。
スサノヲの命　なに、今、あの男に說いたことか。――人間て妙なものさ。苦しんでゐるものを見ると、何とかしてその苦みを和げてやりたくなるのだ。それで自分ぢやさう確かに分らなくつても、その場ではどうしてもあゝいはなくつてはゐられないのだ。そしてさういつてゐる間に自分もだん／＼自分のいつてゐることを本當に信じゐるやうになつてしまふのだ。殊にあの男のやうに無闇にひねくれたことをいふと、おれは一層やつきとなつて說き伏せよう／＼とかゝるものだから、つい熱中してしまつたのだ。はゝゝゝ。おれは人と話をする時でも何でも、相手をいひ負かさうとするのはをかしいな。――だが、おれはいゝ贖悔のことをいつたわけぢやない。今までぼんやりしてゐたものが、あれではつきり形をとつたのだ。
クシナダ姫　前からすると、まるで別な人のやうね。
スサノヲの命　まあ何のことはない、栗の實が熟れて、刺刺した、荒い毬が割れたやうなものだな。併しこれはおまへのお蔭だよ。
クシナダ姫　あら。そんなこと。
スサノヲの命　いや、ほんたうだ。おれはおまへによつて今まで分らなかつたものが分つた。――あゝ、何だか今日は結ぼれが解けたやうな氣がする。（劍をはづして）おれは明日これを姉のところに屆けてやらう。
クシナダ姫　天叢雲の劍をですか。
スサノヲの命　うム、これはおれにもおまへにも思ひ出の深いものだが、それだけに姉にはいゝ贈物だ。おれはかういふものを持つてゐると、兎角要もないのにものをぶつた斬りたくなるから、却つて手もとにおかない方が

いゝ。

クシナダ姫　お姉様もあなたから贈物が屆けばきつとお喜びになりますわ。

スサノヲの命　うム、そりや喜ぶとも。おい向うを見ろ。いゝ景色ぢやないか。

クシナダ姫　まあ、ほんたうに。

スサノヲの命　夕日を浴びて雲が綺麗だな。あんなにもくもく重なつてゐる。

クシナダ姫　あら、あちらからも雲が湧いて來ましたわ。

スサノヲの命　おい、かういふのはどうだ。

クシナダ姫　え。

スサノヲの命　やくも立つ。

クシナダ姫　やくも立つ。

スサノヲの命　いづも八重垣つまごみに。

クシナダ姫　いづも八重垣つまごみに。

スサノヲの命　八重垣つくるその八重垣を、といふのだ。

クシナダ姫　まあ、いゝ歌ですこと。

二人　八雲たつ
　いづも八重垣
　つまごみに
　八重垣つくる
　その八重垣を。

（二人相寄りながら雲を見てゐる。）

——幕——

雪

Scenario の形を借りて

ご覧。
溝の中のかげろふだつて
みんな天を目差してゐる。

一 行かう〳〵

1 夜の大空を雪がさら〳〵と降つてゐる。
2 年寄つた猫が丸くなつて炬燵の上にうづくまつてゐる。
3 夜の大空を雪がさら〳〵と降つてゐる。

行かう〳〵。
お山に
花が
咲いたとさ。

踊らう〳〵。
はやく行つて
踊らう。
さつさ。

4 夜の大空を雪がさら〳〵と降つてゐる。
5 その雪の一ひら〳〵がいつの間にか白い薄絹の服を着た。小さい〳〵男女の踊子に變る。そして大空を縱横無盡に踊り狂ふ。なかには二人腕を組んだり、踊りながら口づけをしたりするものもある。

二 雪の夜

1 野良はもう一面の雪である。
2 農家の背戸に降りかゝる雪。
3 圍爐裏の赤い火と黒い大きな鍋。
4 圍爐裏のまはりに、手をかざしてゐる百姓夫婦や、子供たち。

いゝ雪だな。
今年も豐年だぞ。
ぶくつ、ぶくつ。
ぐつつ、ぐつつ。

圍爐裏の上で、
「のつぺ」が、
歌をうたひ出した。

5 圍爐裏の端。女房の手が鍋の蓋を取る。白い湯氣がぽうと立つ。
6 鍋の中。芋や大根がぐつ〱煮えてゐる。
7 子供たちの食べたさうな顏。
8 鍋の中。箸が鍋の中をかき廻はす。それから醬油が注がれる。
9 子供たちの食べたさうな顏。

三 いたづら

1 雪のつもつてゐる電線に雀が何羽か寒さうに止つてゐる。雪は少しも降り止まない。
2 電線はいつの間にか次の童謠の音符に變る。

雪やこん〱

霰やこん〳〵
もつと降れ〳〵
どん〳〵つもれ

3 またもとの電線に返へる。雀は一しよにぱあと何處かへ飛び去る。
電線にはいよ〳〵雪が積るばかりである。

4 電線は見てゐる間にいつか機械體操の太い鐵の棒に變る。そしてその鐵棒のまはりに、白い、ふくふくした毛糸のジヤケツを着込んだ無數の少年が腰をかけたり。ぶらんこをしたりして遊んでゐる。外の者の肩の上に乘るもの、膝にぶら下るもの、少年の數は增加するばかりである。

5 電話機。電話をかける。

6 卓上電話。手が受話器を取り上げる。

7 電線の上の少年達の遊戲。彼等の重みで線がだん〳〵しなつて來る。

8 電話機、交互に。話がよく聞えないらしく、かける方も聞く方もやたらに大口をあいたり、ベルを鳴らしたりする。

9 電線の上の少年たちの遊戲。あるものは手を叩いて拍子をとりながら歌を合唱し、あるものはぶら下つて電線をぎし〳〵ゆすぶる。

雪やこん〳〵。
霰やこん〳〵
もつと降れ〳〵
どん〳〵つもれ。

10 たうとう電線が切れてしまふ。
そしてその上に乘つてゐた少年たちは大半墜落する。

11 電話機。兩方とも頻りにベルを鳴らしてゐる。

12 切れた電線がだらりとぶら下つてゐる。
雪はなほ小やみなく降りしきる。

四 ものおもひ

1 美しい令嬢が居間で本を讀んでゐる。
2 窓の外の雪。
3 令嬢の顏。眼は文字の上を走つてゐるけれど、心は何か遠い、美しいものを追つてゐる。
4 雪が一ひら二ひら部屋の中にまぎれ込んで來る。その一つが令嬢の手に觸れる。
令嬢はびつくりする。
5 美しい手の上の美しい雪の一ひら。
6 それを眺めてゐる令嬢の顏。

7 令嬢呼鈴を押す。
8 女中がはいつて來る。
9 手の上の雪。
10 令嬢女中に締りを氣をつけるやうにいふ。
11 きちんと締つてゐる窓。
12 ちやんと締つてゐる欄間の小障子。
13 女中何處にも隙間のない旨を答へる。
『何處から這入つて來たんでせう。』
14 令嬢と女中不思議さうな面持。
15 女中去る。
令嬢はまた本を取り上げる。けれどすぐまた下におく。そしてたゞぼんやりと机に倚つてゐる。
16 令嬢の夢見てゐるやうな、うつとりしたまなざし。

お嬢さま、

ご免なさい。
私はつい……
でも、私のこゝろ
あなただけは……

17 夢見てゐるやうな令孃の顏。
雪がまた一ひら二ひら散つて來る。

五 銀の兜

1 都會の雪景色。
2 山野の雪景色。
いつの間にか白銀の甲冑に身を固め、白銀の采配を持つた將軍が白馬銀鞍に跨つてそこに突つ立つてゐる。
將軍はさつと采配を振る。
3 白銀の采配。右に振られる。
4 雪が悉く右に降る。
5 白銀の采配。左に振られる。
6 雪は急に方向を變へて左に降る。
7 白銀の采配。輪を描くやうに、上下左右に盛に振られる。
8 雪、まんじ巴のやうに烈しく降りしきる。

どうだ。
もうすつかり
おれの世界だ。
野も山も
街も人も。

9 馬上の將軍につこりとする。やがて吹雪する廣い／＼原野を心地よささうに馬で駈け廻る。

六 烏

1 雪を持つた枝が灰色の空の中にぎゆつと横から突き出してゐる。それに大きな烏が一羽とまつてゐる。

もう雪は降つてゐない。

おい、
馬鹿なことをいつちやいけねえ。
世界は
おめへたちのために
作られたものぢやねえんだよ。
このおれが見えねえのか。
カア、カア。

2 大きく羽ばたきをして烏は飛んで行く。

七 路上

1 往來の雪の上を下駄や長靴や馬の脚なぞが（體の上部は見えない）通り過ぎる。

2 積つた雪の切斷面。ゴム人形のやうな、ふはふはした白衣の小さな雪人が幾重にも／＼折り重なつて横つてゐる。

大きな高足駄がぐざつと、、、彼等を踏みつける。小さな雪人は眼を白黑させて苦しむ。足駄が拔けると、多くの雪人が齒の間に挾つて一しよに連れて行か

れてしまふ。そのために上層にぽつかり凹形の窪みが出來る。

3　雪の路面。歯の間はいつぱい雪の詰つた高足駄が通る。

足駄がよろける。

4　太い電柱。歯の間の雪を落さうとして、足で下駄をこつ〳〵電柱にぶつ突ける。

併しうまく落ちないので、今度は足駄を脱いで、それを手に持つてこん〳〵電柱を叩く。

5　下駄の歯の間に、息苦しさうに詰つてゐる雪人。電柱にぶつつけられる度毎に頭や耳を押へる。やがてすぽうんと歯の間から地上へ抛り出される。

おれたちは
何故こんなに
踏みつけられなければならないのだ。
いつたい
おれたちに
何の罪があるんだ。

6　往來の雪の切斷面。重り合つて倒れてゐる例のゴム人形のやうな雪人はみんな憤然として起ち上らうとする。そこへ大きな車の車輪が通りかゝつたので、悉くぐにやりとなつてしまふ。

八　大　空

1　竹藪の中。雪の重みで地上にしなつてゐた二三本の竹が「ぱあん〳〵」と勇しく起きつ返る。そしてその度に積つてゐた雪を烈しく拂ひ飛ばす。

どんよりとした夕暮。

と、地上の雪の中からすうと影のやうに身をもた

げたものがある。前の將軍である。併し甲冑は破れ、身には數多の手傷さへ負うてゐる。そして何處へ行つたのか、あたりには乘馬さへ見えなければ、白銀の采配も見えない。彼は怨めしさうなまなざしをして天を見上げる。

2 大空。しづかに星がきらめいてゐる。

3 竹の葉が風に大きくゆれる。

4 將軍は雪の中にぢいつと立つてゐる。

5 大空。しづかに星がきらめいてゐる。

6 將軍はなほぢつと立つたまゝでゐたが、次第にその首がうなだれて來る。そのうちにいつかその姿も雪の中に吸ひ込まれてしまふ。

そしてまたもとの竹藪に返へる。

竹の葉がしきりに搖ぐ。

九 地上にゐる間は

1 路端。路上の雪が雪搔きで端の方に搔き寄せられてゐる。

2 溝。搔き寄せられた雪が溝の中に突き落される。そして雪搔きの先でこつん〳〵突つ突かれて、出來るだけ多く詰め込まれる。溝の中は雪でいつぱいになる。

3 臺所の流し。女中が何かを洗つてゐる。汚れた水を流しへ流す。

4 流しの落口。汚水が溝へ流れ落ちる。

5 溝。汚水が溝の中に流れて來る。併し雪がいつぱいなので、その一部は往來へはみ出す。

6 溝の中の小さな雪人。雪搔きで頭をこづかれたり、汚水で純白な體や服を汚される。

地上にゐる間は

地上の務めを果さう。
どんなに
どんなにつらくつても。

若しひよつと天上に歸れたら
その時は天上の樂みを樂まう。
けれど地上にゐる間は
地上にゐる間は・・・

7　溝。汚水がます／＼流れて來る。そして溝の中の雪は次第にその色に染められて行く。

一〇　いづみ

1　薄明の空に天文臺の丸い高い屋根が黒く聳えてゐる。

2　その日の天候の信號標。快晴。

3　光をいつぱいに浴びて、金色の波をたゞよはせながら、こん／＼と溢れてゐる泉。

こゝでは
もう
春が、
もつくり、もつくり
もちやがつてゐる。

4　あふれてゐる泉。

5　ふくよかな娘の笑顔。

6　泉のそば。娘桶を下げて泉に水を汲みに來る。
娘は水を汲まうとしてちよつとよろける。

7　娘の足もと。滑つた足あとが大きくそこについてゐる。

8　娘のきまり惡げな微笑。

9　再び足あとのついた雪の面。次第に雪を被つた土の下が現れて來る。ゆるんだ雪がじゆく／＼土の中に滲み込む。いつの間にかその水分は水色の服を着た小さい小さい人に變る。彼等は土の中を下へ下へと下つて行く。

10　土中の木の根。その尖端の毛根は見てゐる間に人間の手に變る。そして水の人が下りて來ると、出迎へるやうに慇懃に手を差し延べる。兩者は固い握手を交はす。

11　地上の木。今の根の幹。大部分雪を被つてゐるが、靑い葉がその間から覗いてゐる。

12　かなり下層な土の中。滲み込んだ水がいくらか一しよに集まつて、土の中や岩の裂け目を流れて行く。

13　その流れがいつとはなしに水色の服を着た小さい人の行列になつてあらはれる。やがて彼等はぽうんと縄梯子を下して、とん／＼とんと勢ひよく駈け下りる。

14　彼等は大きな巖に突き當ると、ポケツトから小さな鑿や槌を出してとんかん／＼叩き出す。

掘れ／＼。
腕つ節の續く限り
掘り下げろ。
トンカン／＼。

おや、
どつかで
ハツパをかけてゐるな。

どれ、

ちよつと汗を拭いて
もう一爲事。

15 大きな巖を掘つてゐる小さい〳〵水人の群。

16 地球の內部の眞つ赤に燃えてゐる熔岩。

17 大きな巖を掘つてゐる小さい〳〵水人の群。

18 再び娘の立つてゐる足もとの地面。泉の水が溢れてゐる。娘は泉に姿を映す。

19 水の面に映つた娘の顏。娘、髮を直す。

清水よ。清水よ。
長いこと
暗い土の中を
くゞつて來た清水よ。

20 もく〳〵と溢れてゐる美しい泉。娘水を汲む。

二 雪 だ る ま

1 光の射しつけてゐる軒先。屋根の雪が解けて、その水が軒を傳はつては大きな雫となつて落ちてゐる。

2 軒下。雫の落ちるところだけ幾つか穴が掘れてゐる。その近くに雪だるまの後姿が見える。

3 雪だるまの正面。

しづくが
ぽたりつ。
ぽたりつ。

あゝ、いゝ天氣だな。
おれは何だか
馬鹿に眠つたくなつて來た。

しづくが
ぽたりっ。
ぽたりっ。

4 軒下。雫が「ぽたりっ〳〵」落ちてゐる。

5 ぽか〳〵日が當つて暖かいものだから、雪だるまは全身から白い息を吐いてゐる。

三 めぐれ〳〵

1 溝。溝の中にまだ解け切らない雪の塊もあるにはあるが、多くはもう水に解けてゐる。明るい午後。溝の水から水蒸氣がかすかに立ち上つてゐる。

ご覽。
溝の中のかげろふだつて
みんな天を目差してゐる。

2 溝の中。そこから立つてゐる、見えるか見えないくらゐの、細い煙のやうな水蒸氣の先から、ひよいと白い服を着た、小さな子供が飛び出す。何人も〳〵飛び出す。そしてそれがみんな、天へ飛んで行く。

3 そのうちいつの間にか兩側の溝板は立派な天上の宮殿の壁となり、溝板を押へてゐる小さな杭は宮殿の美しい柱に變る。そして昇天した澤山の小

さい子供たちは、その宮殿の中で歌をうたひながら、手をつなぎ合つて圓い輪をつくり、遊戯をはじめる。

4 立ち木。葉からほか〳〵と水蒸氣が立つてゐる。

5 繁華な街路。雪がぐちや〳〵に、こねつ返されたぬかるみ、しかも休みなしに車馬の通るその中をほのかに遊絲が立つてゐる。

6 火鉢の上の鐵瓶。その口から白い湯氣が勢よく上つてゐる。

7 雪だるま。もう大分解けて、鼻が缺けたり、頭が歪んだりしてゐるが、なほ盛んに白い息を體中から吐き出してゐる。

8 天上の宮殿。後から〳〵と小さい子供たちは增えるばかりである。そのうちのあるものは手を延ばして下から上つて來るものを引張り上げてやつたりする。

めぐれ〳〵
水ぐるま
夜でも晝でも休みなく
上へ行つたり降つたり
お水を汲んだりこぼしたり
その度杵床踏んまへて
　バツタン〳〵
お米を白く舂いとくれ。

9 天上の宮殿。小さい子供たちは輪になつてぐるぐるめぐりながら歌をうたつてゐる。人數はいよいよ增すばかりなので、廻つてゐるうちに輪はいつか一かたまりの圓い集團になる。

10 と、思ふ間もなく、その集團はたちまち天上のふは〳〵した白い雲になつてしまふ。

11 地上に於ける街上のせはしない雜沓。

12 靜かな大空に白い雲がふうはりと浮いてゐる。

（一九二五、一）

父親

一

山の手の閑雅な隱宅の居間と茶の間。茶の間から一方は玄關へ、一方は臺所と女中部屋へ通じてゐる。

緣側の硝子戸越しに庭が見える。

外は雨がしと〳〵と降つてゐる。初春の眞晝。

主の老人は片手に「棋道」か何かを持ちながら、居間でひとり石を列べてゐる。

老人　え、黑廿三……黑廿三と。……あ、これか。そこで白がこつちへ延びると。なるほどな。（ふと、聽き耳立して）どなたです。——何でもなかつたのか。馬鹿に遲いな。どうしたのかしら。（煙草を一ぷくする）……それからと、黑廿五と押す。廿六とつぐ。黑廿七と。……はゝあ、こつちへ行くのか。なるほど、かうこすむところが手なのだな。廿五と押して、つがして、こすむ。さうか。

（婆やがはいつて來る。）

婆や　たゞ今。

老人　あ、婆やか。ご苦勞だつた。外は路がひどいだらう。

婆や　はい。この邊はそんなでもございませんが、鹽瀨の前あたりは自動車が通るものでございますから。

老人　おまへあつちの方まで行つたのかい。

婆や　はい。橋本からはそんなでもございませんから、ちよつと廻つてまゐりました。あすこの小倉草紙はお孃樣がお好きでいらつしやいますから。

老人　さうか。それは大變だつたな。

婆や　もうお見えになりさうなものでございますね。

老人　さうだな。もう來なくつてはならない時分なんだが。

婆や　何か急にご用でもお出來になつたのでせうか。

老人　それなら何とかいつて來るだらう。

婆や　さやうでございますね。ですが旦那樣、もう十二時過ぎでございますよ。

老人　（時計を見ながら）うム、廿分過ぎだな。ほんたうにどうしたのかな。

婆や　わたくし橋本には「大急ぎで」つて申してまゐりましたが、では、ちよつとお向うの電話を拜借して、少し待つて貰ふやうに申しませうか。

老人　いや、鰻は手間が取れるから、その位にいつておいて丁度いゝよ。その內にはやつて來るだらう。

婆や　さやうでございますか。
老人　何しろ雨が降ると女は出入りが厄介だから、どうしたつて遲れがちだよ。
婆や　それはさうでございますね。ほんたうにあいにくのお天氣でございます。ですがこの頃お孃樣は少しお足が遠のきがちでございますね。
老人　はゝゝゝ、婆やまでがやいてゐるのか。
婆や　いゝえ、さういふわけではございませんが……
老人　嫁にやればさうこつちの自由にはならないさ。まあ、里を忘れるくらゐの方が安泰でいゝ。
婆や　ほんたうにご夫婦仲がおよろしうございますから。
老人　だがな、婆や。たまには娘が泣き込んで來るやうなことがあつてもいゝな。いろ〳〵なざんぞを聞いた上で、なだめて歸してやるといふやうな一場も時々は欲しいと思ふよ。
婆や　さうでございますとも。たまにはそのくらゐの事がございませんと、あんまりお寂し過ぎます。
老人　夫婦仲がよくつて親父がすつかり忘れられてしまふ。親父としちやそれが何よりの安心ともいへるが、少しもの足らない氣持がするよ。
婆や　ほゝゝゝ。全くでございます。
老人　しかし忘れられるといふことも惡くないな。するだけのことをしてしまつて、世間からも子供たちからもぽうと煙のやうに忘れられて行くのもいゝ氣持かもしれない。わしはさういふのも嫌ひぢやないよ。
婆や　あの、ちよつと電話をおかけして見ませうか。
老人　淑子のところへかい。いや、そんなことはしない方がいゝだらう。催促するやうに聞えてもいけないから。
婆や　さやうでございますね。
老人　年をとるとこんな愚痴をいつてゐるのがまた一つの樂しみさ。毎日同じことを繰返してゐるのだが、いはゞ子供がキヤラメルをしやぶつてゐるやうなもので、かうしてゐれば口寂しくないのだな。はゝゝゝ。こんなことをいつてる間に、今に淑子がくしやみをしながらひよつこりやつて來るよ。
婆や　本當に早くおいでになるとよろしうございますね。併し旦那さま。おなかがおすきになりはいたしませんか。
老人　うム、實は少し空いたが、もう大したこともあるまいから待つてゐよう。
婆や　では、これをちよつと召し上りましては。（今買つて來きたものを出す）
老人　ぢや、わしが毒見をしようか。――うム、これはなかなかいゝね。
婆や　お孃樣がそれはお好きなのでございます。

老人　婆やも一つどうだ。
婆や　有難う存じます。
（婆やちよつと立ち上らうとする。）
老人　何だい。
婆や　いゝえ、何でもございませんでした。
老人　待つてゐるつて氣がゝりなものさな。
婆や　あちらでもお急ぎになつてはいらつしやるでせうが……
老人　だが、何だな。娘を嫁にやるぐらゐつまらないことはないな。はゝゝ。また年寄のキヤラメルになつてしまつたが……
婆や　いゝえ、ほんたうでございますとも。折角お綺麗にお綺麗にとお育てになつて、やつとお綺麗になつたと思ふともう人樣のとこにおやりになつてしまふのですから。
老人　全く、誰のために綺麗にしてやつてるのか分らないな。――今だからいふがな、婆や。わしは家内に先立たれてゐるだけに、淑子ぢや人一倍苦勞したよ。いつか音樂會に連れて行つたら、あの子の着物が流行遲れでな。「やつぱり女親がないと……」つて蔭口をきかれて、わしはたまらないおもひをしたことがある。それからつてものはわしは淑子の身なりぢやどの位氣を配つたかしれない。恐らくわし位吳服屋の陳列窓を覗き込んで步いた男はさうはあるまい。
婆や　でも、お片づきになつた先が結構なお宅で、ご安心でございます。
老人　まあ、この分なら安心だが、嫁にやつた當座はわしは心配で眠れなかつたよ。今だからいふがね、婆や。わしは婚禮の晩には泣いてしまつたよ。式を濟ませて歸つて來ると、今迄簞笥や長持がいつぱい置いてあつた部屋にはもう何にもないんだらう。さうして疊の目にくつきり簞笥の跡だけが殘つてゐるのを見たら、急に胸がいつぱいになつてしまつて……わしはしばらくそのがらあんとした部屋に坐つてゐたが、涙が無性に出て仕方がなかつたよ。何だかひとり取殘されたやうな氣がしてな。
婆や　それはもうさうでございましたらうとも。
老人　人間つて勝手なものさ。一郎に嫁を取つたときは別に何とも思はなかつたくせに、自分の娘を片づけると每日こんなことばかりいつてゐるのだからな。
（臺所の方で「お待遠さま。」といふ聲がする。）
婆や　おや、おうなが來たのかしら。（立つて臺所の方に行く）今日は大へん早いのね。
出前持の聲　へえ、大急ぎで持つて參りました。
婆や　そんなに急がなくつてもよかつたのに。
出前持の聲　さやうでございましたか。――どうも每度有

難う存じます。左樣なら。
婆や　（出て來る）旦那さま。どういたしませう。おうなが參つたのでございますけれど……
老人　さうだね。
婆や　冷めるといけませんが、困りましたね。
老人　ひとりで食べてもうまくないしな。
婆や　ほんたうにどうなすつたんでございませう。まさかお忘れになつたわけではございませんでせうね。
老人　そんなことはないとも。たしかに今日來るといつて來たのだから。――ちよつとその亂筥にはいつてゐる手紙を取つてご覽。
婆や　これでございますか。
老人　さう〳〵。（手紙を廣げて讀んで見る）十二日といふんだから今日に違ひないだらう。
婆や　はい。今日は十二日でございます。
老人　『……十二日には晝少し前に上ります。久々にて父上樣とお晝をご一しよにいたゞけることが、何より樂しみでございます。……』かう書いてあるんだからな。
婆や　それならもうたしかでございますね。
老人　途中に間違ひがあつたわけでもあるまいな。
婆や　そんなことがおありになるとは思ひませんが、わたくしちよつとそこらまで見に行つてまゐりませう。

老人　さうだね。停留所のあたりまでちよつと行つて見て貰はうか。
婆や　はい。畏りました。
（婆や臺所口から出掛けて行く。老人は碁盤を片づける。それから殊更氣を落ちつけようとつとめるが落ちつかないでもぢ〳〵してゐる。）
（間。）
（玄關で「ご免下さい」といふ女の聲がする。）
老人　どなたですか。（さういひながら玄關に出て行く。）
女中　あの、小山から上りましたのですが。
老人　あ、今電話をかけようと思つてゐたのだ。
女中　それはどうも、あの若奥樣が少しお加減がお惡いので、實はあがるおつもりでお支度まで遊ばしたのでございますが……
老人　淑子が病氣。
女中　はい。多分お風邪なんだらうと存じますが、少しお熱がございますので、大事をおとりになりまして。併しほんのお風邪でございますから、どうかご心配遊ばしませんやうにと、若奥樣からくれ〴〵もおことづけでございます。
老人　あ、さうですか。
女中　こちら樣でさぞお待ち遊ばしていらつしやるだらう

から、早速電報をなんて申しましたのですが、電報では却てご心配をおかけすると存じましたので、わたくしが上りましたやうなわけでございます。
老人　それはどうもご苦勞さま。雨の降るところを。
女中　いゝえ、どういたしまして。
老人　ちよつと待つて下さい。
女中　はい。
老人（茶の間で散財袋に小金を入れてからまた玄關に行き）それぢやわたしはすぐ後から見舞に行くとさういつて下さい。これはほんの心ばかりだが。
女中　どうも恐れ入ります。――あの、お路の悪いところをご隱居樣にお運びをいたゞきませんでも、ご容體はまた知らせに上りますし、それに別段お氣遣のことはございませんと存じますから……
老人　いや、わしは用のない體だし、病氣とあればまさかうつちやつてもおけないから。
女中　さやうでございますか。
老人　兎に角あとからすぐ出掛けるとさういつて下さい。
女中　畏りました。では、ご免下さい。
（女中去る。）
（老人が茶の間へ戻つて來ると、婆やが少したつて臺所口から歸つて來る。）

婆や　あの、どうもお見えになりませんが。
老人　いや、今使が來たよ。病氣なのだとさ。
婆や　まあ。
老人　わしはこれからすぐに行つて來るからな。
婆や。でも旦那さま。お晝を。おうなが參つてをりますから。
老人　あ、さうだつたな。ぢやそれをやつてからにしよう。一つは婆やがお上り。
婆や　有難う存じます。

二

數日後の夜中。
前と同じ場面、老人は居間に寢てゐる。
婆やは向うの女中部屋に寢てゐるところ。
老人の枕許にぼんぼりがおいてある。併し仕込んである電球の燭光が弱いから部屋の中は至つて薄暗い。
突然、表で。
「電報、電報。」
と、いふ聲がする。つゞいて。
「――さん、電報」
といふ聲と共に烈しく門を叩く音がする。それに交つて番犬の吠える聲。

老人　(目を覺まして)　うちかしら。「電報、電報。」
老人　うちらしい。――婆や〳〵。
婆や　はい。
老人　電報らしいよ。
婆や　はい?
老人　電報だよ。
婆や　あ、叩いてをりますね。――はい〳〵。今明けますよ。
(婆やはもそ〳〵起き出して電燈をひねる。向うの部屋が明るくなる。それから玄關の方に行つて戸を明けたが、すぐまたぴしやりと締めて返る。但婆やの行動はすべて向うの部屋だけで、こちらには姿を見せない。)
老人　どこから來たのだい。
婆や　いゝえ、うちぢやございません。
老人　さうかい。
婆や　お隣りでございます。
老人　さうだつたのか。そりや氣の毒したな。折角寢ついたところを。
婆や　いゝえ、こゝはお隣りが近うございますから、よく間違ひます。
老人　まだ叩いてゐるね。お隣りぢや起きないと見えるね。

婆や　お若い人たちばかりですから。あ、やつと起きたやうです。
老人　お年寄たちはお留守なのかい。
婆や　はい。何でもご病氣で先月から葉山へ行つておいでのやうです。
老人　さうかい。――今夜は大分風が強いね。
婆や　さやうでございます。どうも春先は……
老人　婆や、はやくおやすみ。風邪でもひくといけないよ。
婆や　はい。おやすみなさいまし。(明りを消して寢る)
(長い間。)
(風の音。をり〳〵犬の遠吠が聞える。)
(老人は床の中に起きつ返つて大きなあくびを一つする。それから枕もとの煙草盆を引き寄せてぷかり〳〵煙草を吸ふ。やがてまた枕をつけて寢る。)
(長い間。)
(老人は寢返りを打つたりして床の中でもごもごしてゐたが、たうとう起き出す。そして茶の間の戸棚を明けて何かごと〳〵探し物をする。)
婆や　(その物音に目を覺して)　旦那さまでございますか。
老人　あ、わしだよ。カルモチンは何處へしまつてあつたかな。
婆や　あ、あれはたしかもうございません。

老人　さうかい。なくなつたかい。
婆や　ついあとを買つておきませんで。あれはなるたけ差上げないやうにつて、お孃樣から仰しやられてをりますものですから。
老人　淑子がそんなことをいつたのかい。なあに、あの藥は少しも害はありやしないんだよ。
婆や　おやすみになれないのでございますか。
老人　うム、さつきの電報ですつかり目を覺まされてしまつた。――葡萄酒があつた筈だね。
婆や　はい。そこのお戶棚にはいつてをります。
老人　こゝかい。
婆や　左の方でございます。
老人　さうか。――いゝよ、起きなくつても。あ、あつたあつた。
婆や　もういくらもございませんかもしれません。口をつけない方なら向うにございますが。
老人　いや、これでいゝ。――婆や。起きることはないよ。眠藥の代りに二三杯飲んだら、わしもすぐに寢るから。
婆や　さやうでございますか。ぢやご免を被りまして。
老人　お隣ぢや旦那さまが惡いのかい。
婆や　はい。そのやうでございます。
老人　夜中電報をよこすやうぢや急に容態でも變つたんぢやないかね。
婆や　さうかもしれません。
老人　わしはまた淑子のところからと思つて吃驚したよ。
婆や　わたくしもさうかと思ひました。まあさうでなくつて何よりでございます。
老人　昨日行つた工合ぢや急變はないと思ふが、何しろ寢ついてからもう一週間にもなるからね。
婆や　さやうでございますね。
老人　醫者も風邪だといふから、さうかとは思ふが、どうも風邪にしちや少し長過ぎるね。
婆や　わたくしもさう思つてをるんでございます。
老人　第一、あゝ熱が下らないのはをかしい。七度五分ぐらゐの熱だからさう高熱といふわけぢやないが、幾日たつても下らないのはどうも變だ。それにどうしてあゝ食慾がないのかな。あゝ何も食べないでゐると體が衰弱してしまふ。わしはそれが心配だよ。
婆や　さやうでございますね。
老人　あのうちは平生はさうでもないが、今度のやうな時はてんで駄目だ。まるで手當が行き屆かないのだからな。一體風邪だ位に考へてゐるのが間違つてゐる。本來からいふとこつちへ引き取つて養生をさせるのがいゝのだが、今動かすのもどうかと思ふからな。少しよくなつ

たら是非さうしなくつてはいけない。さうしなかつたらあの衰弱はなか〳〵恢復しやしない。

婆や。……

老人　何のかのいつても、他家へ出てはどうしたつて氣がねがあるからな。それに淑子はまだ行つて一年にもならないんだから、さう思ふやうにはいかないし、向うのお母さんの手前もあるからな。――さうだよ。あのお母さんがもう少し氣がついてくれるといゝんだが、どうも舊弊でな。殊にあの圭助と來た日には、お坊ちやんでさつぱりおもひやりがないんだから。（くしやみをする）

婆や　旦那さま、お風邪を召すといけませんよ。

老人　なあに、どてらを着てゐるから大丈夫だ。わしまで風邪をひいてしまつちや大變だ。

婆や　春になりましても、夜分はまだ寒さが強うございますから。

老人　うム、いま寢るよ。――もう少しでこれがおしまひになるから、明けてしまはうと思つてな。あゝ、大分いい氣持になつて來た。ときに、婆や。

婆や　はい。

老人　大井先生に行つて貰つちやどうだらう。

婆や　大井先生でございますか。

老人　うム。どうも向うの醫者だけぢや賴りないのだ。病氣ばかりは今まで見つけてゐた醫者でないと分らないところがあるからな。そこへ行くと大井先生なら子供の時から見てゐるんだから確かなものだ。

婆や　さやうでございますね。

老人　併しこちらから醫者をやつちや出過ぎてゐるかな。醫者が呼べない家ぢやないのに、こちらから醫者を差向けたとあつては面あてのやうに聞えるかな。淑子がそのために居にくいやうだと困るがどうしたものだらう。實はこの間淑子にこの話をしたんだが、淑子はどうかそんなことはしないでくれといふのだ。若し悪いやうならこちらでどうにでもして貰ふから、お父さんからは何にもしないでくれ。里からといふと當りさはりがあつていけない。と、かういふのだ。あの子のいふのが尤だと思ふし、たゞ何事もあの子のいふなりにするのが一番いゝと思つたから、わしはそのまゝ歸つて來たが、併しどうもこのまゝでは心配でならないんだ。手遲れになつてからでは間に合はないからな。あれの母なんかも、風邪だ〳〵といつてゐるうちに、たうとう肺炎になつてしまつて、ついあんなことになつてしまつたんだが、そんなことになつては大變だからな。

婆や　さやうでございますとも。

老人　わしはな、昨日見舞ひに行つた歸りに、よつぽどお

みくじを取つて見ようかとそんな考さへ起した位だよ。併しそんなことをして凶でも出た時は却つて心配を増すやうなもんだと思つたから止めてしまつたが、實をいふとわしはどうしていゝか心配でたまらないんだ。
婆や　そりやもうわたくしもお案じ申してをりますんですが……
老人　なあ、婆や。
婆や　はい。
老人　醫者をやつちや悪いかな。
婆や　さやうでございますね。
老人　見舞にカステラの折を持つて行くくらゐなら、醫者を見舞に出したつて何も悪いことはないぢやないか。大げさといへば大げさかもしれないが、これが本當のお見舞だ。なあ、さうぢやないか、理窟からいや、淑子に相談なんかしてゐると、氣がねばかりしてゐて手遲れになつてしまふから、いつそわしの獨斷でやつてしまつた方がよくないかな。若し何處からか文句が出たら、「わたくしが悪いのでございます、わたくしが年を取つてをりますものですから、つい娘が可哀いゝ餘り餘計なことをいたしました。はい、申訣がございません。どうか御勘辨をと。」さういひさへすりや濟むんぢやないか。さうだ。さうしよう。それが一番だ。たゞうつら〳〵考へてゐたつて何にもなりやしない。明日は早速さういふことにしよう。いゝかい、婆や。明日は大井先生のところへ行つて往診をお願ひして來るんだよ。
婆や　はい。
老人　あゝ、これで肩の凝りが解けたやうな氣がした。これでいゝ。これでいゝ。丁度葡萄酒の瓶も空いた。さ、いよいよ寢るとしよう。婆や、今夜はとんだお相伴をしてしまつたね。
婆や　いゝえ。
老人　あゝ、いゝ氣持に廻つた。これならぐつすり寢られるだらう。では、婆やもおやすみ。
（茶の間の明りを消して床にはいる。しばらくして時計が眠むさうにチーンと一つ鳴る。）

三

その翌日。
前と同じ場面。うららかな光が、庭口から硝子戸越しに縁側にいつぱい差し込んでゐる。
主と婆やが茶の間で話をしてゐる。
老人　さうかい。それはご苦勞だつた。それぢや午前の診察が濟んだら、すぐに行つて下さるのだね。

婆や　はい、眞つ先に往診して下さるさうでございます。
老人　ぢや、もう二時間もしたら自動車をいつておくれ。わしがお迎ひに上ることはお話してあるのだらうな。
婆や　はい。よく申上げてございます。
老人　ではこつちの用意はそれでよしと。あとは先生に見ていたゞくばかりだ。大井先生に見ていたゞけば實際安心だからな。
（玄關に「速達」といふ聲が聞える。婆やが急いで取りに行く。）
老人　速達？　何處から來たんだい。
婆や　お孃さまからのやうでございます
老人　なに、淑子から。どれ〳〵
（老人急いで端書を讀む。妙な顏をする。）
婆や　お惡いんでございますか。
老人　いゝや、直つたから、二三日したらやつて來るといふのだ。
婆や　まあ、そんなに急におよろしくおなりになつたのでございますか。
老人　委細はその折にと書いてあるが、何しろ端書だから簡短で分らないよ。併しどう考へて見たつてさう急によろつとする筈はありやしない。嬉しがらせなんだよ。わしを心配させまいとしてこんなことをいつて來るんだ。

婆や　さうでございませうか。
老人　さうだとも。心配させまいとするのはいゝが、こんな餘計なことをいつて來られると、こつちは却て氣がもめてかなはない。
婆や　しかし…
老人　どうも女なんて仕方がないものだ。何も氣がねすることはありはしない。幾日寢てゐようと病氣なら止むを得ないぢやないか。それをもう一週間も寢てゐちや義理が惡いなんて、下らない考へを起して、起きつ返つたりなんかするから、餘計重くしてしまふのだ。しかし他家へ行くとさう〳〵寢てはゐられないからな。――兎に角大井先生に早く見ていたゞいて、場合によつてはこつちへ引き取らなくては…
婆や　併し旦那さま。そんなにお惡いんならおはがきをおよこしにはならないと思ひますが。
老人　ことによつたら何かな。わしが大井先生〳〵といつてゐたから、先生でもよこされると困ると思つて、先廻りをしてこんな手紙を書いたのかな。併し昨夜きめたことをいくら淑子だつて知る筈はあるまいし…
婆や　このお端書もお孃さまのお手でございますから、わたくしはきつとおよろしいんだと存じます。
老人　さうかな。それなら何よりだが。

婆や　およろしいんだとすると、大井先生に行つていたゞくことは如何でございませう。

老人　いや、中途で少し位よくなつたなぞと思つて安心するととんだ目に逢ふ。ぶり返しが來た日にはそれこそ大變だからな。よし、いくらかよくなつてゐるにしても見ていたゞいておく方が安心だ。それにお願ひした以上は見ていたゞくのが法だからな。

婆や　それはさうでございますね。

老人　あゝいふ經驗の深い老先生の診斷には間違ひがないからな。內科にかけてはとても駈け出しの博士などの及ぶところではない。わしはあの先生の診察を聽かぬうちはどうも安心が出來ないのだ。

婆や　でも、旦那さま、ちよつと電話をおかけしてご樣子をお聞きになりましては。

老人　うム、樣子だけは聞いてもいゝな。ぢや婆や、お向うに行つて電話を借りて聞いてくれないか。

婆や　畏りました。

老人　いや、待つてくれ。わしがかけよう。その方がいゝ。

婆や　さやうでございますか。

老人　ちよつと下駄を出して吳れないか。

婆や　はい。

（玄關から出て行く。）

（間。）

（しばらくして老人が歸つて來る。）

婆や　如何でございました。

老人　何のこつた。まるで狐につまゝれたやうなものだ。

婆や　どうしたのでございます。

老人　電話をかけるとな。この間使に來た女中が出たのさ。容體を聞くと、もう起きてゐるといふのだ。それなら電話口に出られるかと訊いたら「はい、伺つて見ませう。少々お待ち下さい。」さういつて女中が引つ込んだと思ふと、いきなり「お父さま」といふ言葉が耳もとでりいんと響くのさ。わしは思はずはつとしたよ。はゝゝ。何のことはない。戀人の前に出た青年といふ恰好だな。しばらくはどぎまぎして言葉が出なかつた位だ。

婆や　まあ、電話にお出になれるほどおよろしくおなりになつたのでございますか。

老人　うム、それから「熱は下つたのかい。」と訊くと、「えもうありません。」といふのだ。しかし無理をするといけないよ。」「いゝえ、もう大丈夫です。」それはもうはきはき返事なのだ。けれども、わしは「大井先生をお願ひしたから診察していたゞき。」と、昨夜からの一條を話したところ、いやどうもひどく叱られてしまつてな。

婆や　まあ、ほゝゝ。

老人　でも、わしにはさう早く癒つたわけが、どうしても呑み込めないから、それを訊ねると、笑つてゐて答へないのさ。こつちが眞面目に訊いてゐるのに、笑つてゐるんで、わしは少しいら／＼して「一體何處が惡かつたのだ。」と訊き返すとな。「何處つて大抵お分りでせう。」つていふのだ。分らないから訊いてゐるのに、お分りでせうといはれたつて分る筈はありやしないと。もう一度訊き返したら「だつて電話ぢやいへません。」といふんだ。わしにはなほ分らなくなつた。いへない病氣、何病だらう。そんな病氣はどうしたつて見當がつきはしない。「おい、小さい聲でいつてくれ。お父さんには分らない。お父さんは心配なんだ。」さういつたら、何か答へたらしいんだが、話が遠くつて聞えないのだ。「もつと大きな聲でいつてくれ。」わしはもう一遍催促するとな、「まあ、いやなお父さま。」とやられてしまつたよ。

婆や　さやうでございますか。わたくしもどうもさうだと思つて居りました。

老人　婆やには前から分つてゐたのかい、

婆や　いゝえ、分つてゐたわけぢやございませんが。

老人　それなら早くさういへばいゝのに。

婆や　でもこれはお醫者様でも、ご本人でもなか／＼はつきりしたことは分らないものなんですから。併しはじめがそんな工合ではきつとお輕うございますよ。

老人　さうかね。

婆や　旦那さまおめでたうございます。

老人　さういはれると、そんな氣もするが、何だかわしはぼんやりしてしまつたよ。

婆や　それはさうでございませうとも。あんまりご心配をなさいましたから。

老人　あたり前といやあ、これよりあたりまへのことはないんだが、こつちぢやまだ子供だ／＼と思つてゐるうちに……

婆や　本當にお早いものでございますね。――さうしますと、あの、大非先生の方は。

老人　さう／＼。その方を早く斷らなくつちや。

婆や　それぢやすぐに行つて參りませう。

老人　さうして貰はう。何のこつた。賴みに行つたり、斷りにいつたり、年寄のやることはいつもこんなことばかりだ。

婆や　でも、お醫者様ばかりはお斷りするやうなら結構でございます。

老人　何れわしがお伺ひいたします、とんだお騷せをいたしまして、と、よくいつておくれよ。

婆や　畏りました。

老人　ぢや、急いでな。

婆や　はい。

（婆や急いで出掛ける。）

老人　何だか急にぽか〳〵して來たな。

（椽側の硝子戸を一二枚ガラ〳〵と開けて風を入れる。）

（ふと涙がにじむ。）

老人　一つお茶でも入れよう。

（急に氣を變へて長火鉢のわきに坐つて茶を入れる。）

（一九二五、八、一三、一四、一五）

嘉門と七郎右衞門（二幕）

人物

辻　嘉　門
尾辻七郎右衞門
深　見　左　京
そ　の　他

時代

戰國時代（天文七年十二月）

場所

薩摩國川邊郡加世田

第一幕

第一場

加世田城を遠卷にしてゐる島津（貴久）勢の陣營の一部。部將尾辻七郎右衞門と深見左京と雙六の盤を中に挾んで勝負を爭つてゐる。その兩側に供の者が太刀を持つて控へてゐる。うしろの兜立には兜が掛つてゐる。士卒も端の方に固まつてまた手慰みをしてゐる。中には樹木に倚りかゝつて居睡りしてゐるものもある。

七郎右衞門と左京はかはる〴〵に筒を取つては盤の上に骰子を振り、石を動かす。

七郎右衞門退屈さうに欠伸をする。

左京　どうした。
七郎右衞門　どうも退屈だな。
左京　おのしの退屈しないのは戰の最中だけだ。はゝゝゝ。
七郎右衞門　永陣ぐらゐ齒がゆいものはない。おれはもう倦き〳〵した。
左京　さう不足をいふまい。おかげで雙六が出來るのではないか。さ、おのしの番だ。
七郎右衞門　（筒を振りながら）どうせやるなら城を乘取つてからゆつくりやりたいよ。
左京　乘取つてからやるのもいゝが、乘取らぬ內にやつてゐるのも餘裕があつていゝではないか。
七郎右衞門　おのしは好きだな。
左京　貴公も嫌ひではないではないか。
七郎右衞門　うム、おれは勝負事は何でも好きだ。併しばた〳〵とやつつけてしまふのでなくつては面白くない。城を取卷いたまゝ毎日〳〵うだ〳〵してゐるやうな

のは大嫌ひだ。

左京　おのしはせつかちだな。城一つさう易々落せるものではない。

七郎右衞門　攻めずにゐれば落ちぬまでよ。

左京　攻めるには法がある。たゞひた押しに押すといふわけにもいかぬ。お側には嘉門殿のやうな戰に明るい人もゐる。まあ、滯陣の間はゆつくり骨を休めるに限る。

七郎右衞門　いや、おれはあの嘉門が地體氣にくはぬのだ。このだらけ切つた戰法は何だ。

左京　人のことを誹謗するより、手もとの石が蒸されぬやうに氣を配る方が肝腎だ。

七郎右衞門　何をしやらくさい。今に見てをれ、いやといふほどきめつけてくれるぞ。

左京　ほんに、たまには負けて見たいものだ。

七郎右衞門　大きなことをいふな。かうはいつてくれるぞ。（石を動かす）

左京　好きなやうに動くがいゝ。

七郎右衞門　えゝ、また砂を吹きつける。（士卒に）おい、幕をもつとしつかり張つておかぬか。

（士卒等陣幕の吹上らぬやう直ほす。）

左京　七郎右衞門。さう當り散らすな。

七郎右衞門　（また、欠伸をしながら）あゝ、篭陣はいやだ。いやだ。

左京　おい。切るぞ。

七郎右衞門　なあに、それしき。

左京　かうはいつたらどうする。

七郎右衞門　なあに、それしき。

左京　いま無地勝にしてみせるぞ。

七郎右衞門　そんなことにさせてたまるものか。

左京　今度はどうだ。

七郎右衞門　驚くものか。

左京　（骰子を筒に入れ上向にして振りながら）『どう〳〵火にちよろ〳〵火、親が死ぬとも盞とるな。三六さがつて猿ねぶり』と。――さうれ、三六が出た。

七郎右衞門　おれは重五を出して見せるぞ。――『さつと散れ山櫻』――えゝ、出をらぬ。

左京　『五四〳〵と啼くは深山のほとゝぎす』と。（振る）

七郎右衞門　え、よく出くさる。貴公は運が向いてゐると見える。

左京　おのしは運が向いてゐないと見える。

七郎右衞門　莫迦にするな。

左京　さあ、上るぞ。

七郎右衞門　上らせてたまるものか。

左京　さうれ。どうだ。

七郎右衛門　さうれ、どうだ。
左京　今度はどうだ。
七郎右衛門　なにくそ。
左京　今度はどうだ。
七郎右衛門　なにくそ。
左京　今度こそどうだ。
七郎右衛門　まだ〳〵。
左京　今度こそ。
七郎右衛門　まだ〳〵。
左京　さうれ、上つた。
七郎右衛門　え、またやられたのか。
左京　無地勝だぞ。それみんな二つづゝ並んでゐる。こつちに三つと。どうだ。
七郎右衛門　今日はよく〳〵と見える。
左京　骰子に仕掛なぞはしてないぞ。
七郎右衛門　大丈夫だ。おれは負けても難癖はつけはせぬわい。
左京　では、約束どほり二千文貰はう。
七郎右衛門　さて弱つた。すつぱり取られてしまつて一文も殘つてをらぬ。――何を出さうぞ。えゝ、まゝよ。この兜をくれよう。
左京　なに、その兜を。
七郎右衛門　この兜なら二千文には過ぎてある。異存はあるまい。
（七郎右衛門供の者に命じて兜立に立掛けてある自分の兜を左京に渡す。）
七郎右衛門　莫迦〳〵しい。戰がないばかりに兜まで取られてしまふわ。
左京　その代り城攻めがはじまつたら敵の首を山ほど取るさ。――この間京から下つた者の話に、陣中で雙六に負けて物具そつくり取られてしまひ、紙子の羽織はかりを着て、左の手に扇を持ち、右の手に刀を振り上げ、「愛宕詣りに袖ひかれた」といふ小歌をうたひながら、眞先かけた剛の者があつたさうだが、お主も一つそれをやつて見たらいゝではないか。はゝゝゝ。
七郎右衛門　え、おかぬか。――左京、もう一番行かう。
左京　まだやる氣か。
七郎右衛門　いくらでもやる。
左京　併しおのし、まだ賭けるものがあるのか。もう兜まで出してしまつたのではないか。
七郎右衛門　さう人を見くびるな。
左京　では、その太刀を賭けるがいゝ。
七郎右衛門　太刀、いや、これは賭けられぬ。これはおれの生命より大事なものだ。――それなら嘉門奴の太刀を

賭けよう。

左京　嘉門殿の太刀。

七郎右衞門　うむ、あの太刀なら文句はあるまい。

左京　併しそれは他人のものではないか。

七郎右衞門　他人のものであらうと、誰のものであらうと、おれが賭けるといつたからには屹度間違ひない。負けたら異變なくおぬしに渡す。

左京　いや、おれはそれを危ぶむのではない。これが町方の土藏とか、寺社の庫ならまだしも、嘉門殿の太刀は迷惑なのだ。おれは何も嘉門殿の太刀が所望なのではない。何か外のものに變へてくれ。

七郎右衞門　いや、おれはどうしても嘉門の太刀を賭ける。

左京　おのしは何でそんなにあの仁の太刀を賭けたがるのだ。

七郎右衞門　いや別に仔細はない。たゞあいつには、太刀は入用があるまいと思ふからだ。

左京　何をいふのだ。世の中に太刀の入らぬ武士があるものか。

七郎右衞門　いや、さうでない。あいつは生得臆病だから、そんなものは入らぬ筈だ。若し太刀が入用の男なら、こんな小城をいつまでも遠卷にしてゐるものか。

左京　こんな小城といふが周圍十八町。高さ十五尋といふ堅城だ。たゞ攻め寄せたとてさう容易く落ちるものではない。

七郎右衞門　いや、昨日おれが獻策した戰法を用ゐれば、落城は瞬く間だ。

左京　おのしの戰法は突拔だらう。

七郎右衞門　さうだ。

左京　それはこゝに攻め寄せた時すぐにやつたではないか。併し先手が三百人も討たれてしまつて….。

七郎右衞門　たかが三百や四百の死傷が何だ。屍を踏み越え踏み越え、屍を梯子にして城内に乘入つてしまふのだ。突拔ではまだ手ぬるい。繰拔だ。繰拔をやつつけるのだ。

左京　そんなことをしたら手負死人がいくら出るか分つたものではない。

七郎右衞門　左京、おのしも少ししつかりせえ。手負や死人がこはくつて戰が出來るか。戰は殺すか殺されるかだ。

左京　それはさうだが、併し死傷は出來るだけ少いのをよしとしてある。

七郎右衞門　そんなことは分りきつた話だ。けれども相手はこの城一つではないのだぞ。城方には出水から援兵が來るといふ專の噂ではないか。その援兵が到着してわれわれのうしろを突いて來たらどうするのだ。一たまりも

ないではないか。おれはそれを考へると……いや、考へまい。考へまい。それを考へ始めたらぢり／＼して來る。そんなことよりは骰子だ。骰子だ。さあ、早くやらう。

左京　まあ、七郎右衞門。待て。

七郎右衞門　いや、よせ／＼。いくらわれ／＼が、氣をもんだところが無駄な話だ。おれはもう……

左京　いや、さうではない。それについては何か思案があるのだらう。仕寄を控へてゐるのも恐くはそのためではあるまいか。お側の人もまさかその邊に手ぬかりはあるまいと思ふ。

七郎右衞門　いや、そのお側の輩が賴りにならぬから、おれはやきもきしてゐるのだ。たま／＼策を獻ずれば、ただ膽をつぶしてゐるだけで用ゐる景色も見えはせぬ。あいつ等には踏込んだ戰なぞは出來ないのだ。あゝ、お側にゐるものがあんな腰拔どもでは。

左京　おい、言葉が過ぎるぞ。

七郎右衞門　いや、腰拔だ。腰拔に相違ない。死をおそれる奴はみんな腰拔だ。なかにも嘉門ときたら腰拔の棟梁だ。あんな奴は太刀を取り上げて土百姓にたゝき落してしまふのが分相應だ。

左京　おのしは嘉門殿を目の敵にしてゐるが、何がそんなに氣にくはないのだ。おのしの獻策を却けたからか。併しそれは嘉門殿が却けたのかどうかはつきりしないではないか。それともあの一條か。あれならもう忘れてくれ。あれはおれの家での出來事だ。あれから事が起るとおれはいかい迷惑をする。

七郎右衞門　いや、おのしに難儀はかけはせぬ。併しあの一件だけを考へて見てもあいつの腰拔なことは明白ではないか。おれが陣刀は三尺がいゝといふと、あいつは二尺四寸がいゝとぬかす。そんなに短かくつては敵が切れぬといへば、そんなに長くつては戰場ですぐに刀が拔けぬなぞとけちをつける。そして往古はかうであつたの、あゝであつたのと物知り顏に太刀の講釋を長々とはじめやがる。しかし戰は講釋ではない。生きるか死ぬかだ。千百の言葉よりも實地に勝るものはない。三尺の太刀がいゝか。二尺四寸が果して手頃か、眞劍の爲合をしようといへば、言を左右に託して立ち上らうともせぬ。

左京　併しそれはさう輕々しく出來ぬよ。おのしはすぐに事に激するが……

七郎右衞門　何が激する。おれは自分の言葉に責めを負うてゐるのに、あいつは口先だけで逃げようとするからおれは腹を立てるのだ。さうではないか。まこと自說を重ずる武士ならば、あの場ですぐに立合ふのが當然だ。それ

が出來ぬといふのはそも〳〵生命が惜しいからよ。こんな奴がいくらかゝつたつて何で城が落せるものか。あゝ、こんな奴がお側にゐるのだとおもふと……駄目だ、駄目だ、駄目だ。――さあ、左京、おれは嘉門の太刀を賭ける。おのしは何を賭けるのだ。

左京　おい、今日はもう止さうよ。

七郎右衞門　いや、止さぬ。さあ、おれは嘉門の太刀を賭ける。貴公は何を賭けるのだ。

左京　……

七郎右衞門　どうしたのだ。貴公やらないのか。

（突然、陣幕のうしろから辻嘉門が現はれる。）

嘉門　その勝負、おれが代つてやらう。

左京　や、嘉門殿。

嘉門　七郎右衞門。貴公はおれの太刀を賭けるといつたな。面白い。おれは貴様の首を賭けよう。

七郎右衞門　なに。

嘉門　おれは貴様の首を賭ける。しかしおれには雙六などはまだるくつてやつてをられぬ。腕で來い。

左京　嘉門殿。嘉門殿。

嘉門　いや、止め立てするな。こんな奴は成敗せぬと陣中の掟が立たない。

（この有様を見て七郎右衞門の手の者は得物を取つて嘉門に向はうとする。）

七郎右衞門　（泰然として）これ、手向ひすると承知せぬぞ。おのれ等の出るところでない。おれ一人で澤山だ。控へえ〳〵。

左京　（嘉門を止めながら）そこもとにも似合はぬ。まづ、おしづまりを〳〵。

嘉門　いや、先程からの雜言、みなあれで聞いてゐたのだ。もう用捨はならない。さあ、七郎右衞門。尋常に立合へ。

七郎右衞門　うむ、そんなことがいへるだけ貴公にしては大出來だ。よし、やるとも。――が、待てよ。おれは今日は止しておかう。

嘉門　なに、立合はぬ。おのれ、急に生命が惜しくなつなのだな。

七郎右衞門　いや、生命なぞもとより惜しくはいが、今敵を前に控へてゐながら、味方同志私に刄を交へるのは殿に對して恐れ多い。戰が濟んだら相手にならう。

嘉門　卑怯者奴、お館の蔭にかくれて立合ぬとは何事だ。先刻の大言に似もやらず、急に弱音をふくとは笑止至極。腰拔とは貴樣のことだぞ。

七郎右衞門　無禮なことをいふな。

嘉門　それが口惜しかつたら立合へ。人に爲合を挑んでお

きながら、今になつて逃げるとは卑怯であらう。さあ、貴樣のいふとほり三尺の刄が手頃か、二尺四寸が扱ひいいか。互の議論を實地に決する時が來たのだ。さあ、立合へ、どうだ。どうだ。

七郎右衞門　（つか〳〵と立向はうとしたが止める）

嘉門　立合はないのか、臆病者奴。これで戰略がどうのかうのとほざくなぞは片腹痛いわ。貴樣の獻策はおれが一言のもとに撥ねつけてしまつたのだ。今時あんな古手な戰法がものゝ役に立つと思ふか。

七郎右衞門　えゝ、いはしておけば……

嘉門　貴樣はこの太刀を賭けるといつたな。併しおれはこの太刀をかうしてしつかり腰に帶してをるのだぞ。見事この太刀が賭けられるか。賭けられるものなら、この腕から取つて見ろ。

七郎右衞門　なに。

嘉門　取れるものなら取つて見ろ。

七郎右衞門　え、取らいでか。

嘉門　取る。

七郎右衞門　取つて見せるとも。太刀ばかりか貴公の首まで取つて見せるわ。

嘉門　これは面白くなつて來た。

七郎右衞門　さあ、來い。（身構へる）

嘉門　待て、こゝは陣中だ。外へ出ろ。

七郎右衞門　何處へでも行くとも。

嘉門　それならあの城の眞つ下へ行つてやらう。

七郎右衞門　城の下。

嘉門　こんなところでやつても面白くない。どうせやるなら誰にも見えるあの處つばでやらう。

七郎右衞門　うム、あすこなら爲合には屈竟の場所だ。よし、行かう。

嘉門　さあ、すぐ來い。

七郎右衞門　行くとも。

左京　七郎右衞門。

七郎右衞門　いや、止めるな。止めるな。

（二人陣外へ出て行く。）

（他の者は手の下しようもなく茫然としてゐる。）

第二場

高みにある城と陣營との間にある小さい雜木林の盡きやうとするところ。

嘉門と七郎右衞門とが林の中から連れ立つて出て來る。

七郎右衞門　この先がいゝだらう。

嘉門　……
七郎右衛門　何故默つてゐるのだ。もうこゝらでいゝではないか。
嘉門　貴公はせつかちだな。
七郎右衛門　おれはぐづ〳〵してゐるのは大嫌ひだ。片をつけるものは早く片をつけてしまひたいのだ。
嘉門　まあ、待て。
七郎右衛門　おのしは今になつて臆せたのか。
嘉門　たはけたことをいふな。
七郎右衛門　それならすぐに始めよう。
嘉門　さう急くなといふのに。
（二人また歩きつゞける。）
嘉門　七郎右衛門。
七郎右衛門　何だ。
嘉門　やる以上は生命のやり取りだぞ。傷ぐらゐで止めはせぬぞ。
七郎右衛門　きまつたことだ。
嘉門　たしかだな。
七郎右衛門　くどい。
嘉門　實はこれはいはうか、いふまいかと考へてゐたことだが……
七郎右衛門　（さげすむやうに）遺言なら今のうちにいつておくがいゝ。
嘉門　七郎右衛門。おのしに一つ頼みがあるのだ。
七郎右衛門　頼み。今更になつて何の頼みだ。
嘉門　立合ふ前に誓言がして貰ひたい。
七郎右衛門　何の誓言だ。
嘉門　二人のうちのどちらか生き殘つた者は敵方に降參することにしたいのだ。それを誓つて貰ひたい。
七郎右衛門　おのし、氣が狂つたのか。
嘉門　いや、おれは眞實こめていつてゐるのだ。外のことと違つてこれは眞劍勝負だ。おれは必ず勝つて見せるつもりだが、萬に一つ負けないとも限らない。それで頼むのだ。
七郎右衛門　莫迦なことをいへ。そんなたはけたことが誓言出來るか。
嘉門　おのしがさういふのはもつともだ。併しこれは味方のためなのだ。
七郎右衛門　なに。
嘉門　二人のうち一人は死に、一人は降人に出れば味方にとつて大利があるのだ。
七郎右衛門　そ、そんなことがあるものか。
嘉門　これは秘中の秘だ。漏らすまいとは思つたが、騙しておのしを殺すのは寢醒めが惡いから何もかも話すの

だ。

七郎右衛門　いや、おれは貴公などに殺されるものか。

嘉門　さ、それだから、その場合にとおれはいふのだ。おのしがおれに勝つても、おれがおのしに勝つても、兎に角名ある味方のものを殺して降人に出れば敵は必ず容れるに違ひない。降人となつて敵城に入り込めば、あとはいくらでも策があるではないか。

七郎右衛門　おれは策略は大嫌ひだ。殊にそんなことを考へ出すやうな奴は蟲が好かぬ。もう止めてくれ。さあ、勝負だ。勝負だ。

嘉門　待て、それはおれだつて好んで使ひたくはない。併し尋常の手段ではこの城はどうしても落ちないのだ。それで考へ拔いた擧句の苦肉の策だ。そりや突拔や繰拔の戰法がないではない。併しそんなことをすれば徒に兵を損ずるばかりだ。それも城方に加勢の來ない時ならいい。今はその方に對して多くの兵を分けなければならない時だ。援軍は日に日に近づいて來る。しかも城は何としても落ちない。おれはぢつとしてゐられなくなつた。あの手で行かうか、この策を用ゐやうか。併しどれも駄目だ。おれは思案に盡きて茫然としてゐると、ふとおのしのことが浮んで來たのだ。おれは豫ておのしに爲合を挑まれてゐた。さうだ。丁度いゝ折だ。それをこゝで果すことにしよう。表向は私の斬合だが、今度ばかりはそれが意外の役に立つ。若しこの策が圖に當れば。

七郎右衛門　いや、そんな策は成就せぬ。

嘉門　まあ、聞け。若しこの策が圖に當れば私鬪が私鬪でなくなる。死ぬ者も犬死にならない。おれはさう思つてこの策を撰んだのだ。そしておのしの陣營に出て行くと、おのしは丁度おれのことを罵つてゐる。これはうまい時に來合はせた。おれはさう思つて殊更爲合を挑んだのだ。

七郎右衛門　では、おれを道具に使ふつもりでこゝまで引つ張り出したのだな。

嘉門　いや、道具ではない。爲合は何處までも爲合だ。併しその爲合をたゞ私の斬合に終らせたくないと思つたからだ。もちろん刄をとつて向き合ふ以上おれはおのしだとて容赦はない。おのしにしたつてまたその通りなことはきまつてゐる。けれどもその爲合の果てたあとは、どちらが勝つてもこの策を用ゐるとにしたいのだ。おれは考へに考へた末この案を立てたのだ。七郎右衛門、是非これだけは承引してくれ。萬一、己が負けたとしても、おのしなら屹度これをやり了ほせると思つたからだ。

七郎右衛門　いやだ。おれにはそんなことは引受られない。おれは勝つのなら晴々と勝ちたいのだ。きたないこ

とをして城を乘つ取つたところが何の手柄だ。

嘉門　きたないとは何だ。切迫した今の場合、かうするより外に切拔ける道はないのではないか。

七郎右衛門　ないことはない。おれがいふやうにすれば何でもないではないか。多少時機は失したが、まだ間に合はぬことはない。加勢が來ぬうちに遮二無二城を乘つ取つてしまふのだ。さうすれば敵の援兵なぞは戰はずして四散してしまふに相違ない。

嘉門　さう都合よくいくものなら、おれはこんなに苦しみはしない。それが危いと見て取つたから……

七郎右衛門　何が危いのだ。たゞ繰拔て進めばいゝのだ。

嘉門　そんな戰法はとれないから、おれはこんなに頼んでゐるのだ。

七郎右衛門　いやだ。

嘉門　では、貴様はどうしても承知しないのだな。

七郎右衛門　きまつたことだ。

嘉門　よし、それならもう頼まぬ。そんな奴はこつちも却てたゝつ斬り易いわ。

七郎右衛門　小積なことをいふな。

（二人急に斬合を始める。）

併し林の中ではお互に不自由なので、その向うの廣い原に出る。）

（二人しばらく戰つてゐたが、とゞ嘉門は七郎右衛門に斬りつけられて倒れる。）

（七郎右衛門はその上に馬乘りになつて首を搔かうとする。）

嘉門　（下から）七郎右衛門。頼むぞ。頼むぞ。

七郎右衛門　な、なにをいふのだ。

嘉門　た、たのむ。頼むぞ。

七郎右衛門　えゝ、おれの知つたことか。

――幕――

第二幕

加世田城内の一部。

第一幕から幾日かあとのある夜。

幅の廣い土石の壘壁が黑く地上を這つてゐる。その向うは猛火がいつぱいに燃え廣がつてゐてその焰は天を焦してゐる。

壘壁の彼方では劍戟の響が喧しいが、こちら側には一兵もゐない。

郭の中から七郎右衛門が壘壁の頂に匍ひ上つて來る。そしてそこを滑り下りて、ふと空を見上げると、城の上の空一面がいつの間にか大きな嘉門の顏になつてゐる。

遠くで敵を追ひ散らす勇ましい叫び聲が聞える。
空の顏は少し口をゆがめて微笑する。
七郎右衞門はそれを見るとむつとして、體を前にすゝめ、空を睨みつける。と、いつともなしに嘉門の顏が消えて、またもとの空になる。
七郎右衞門はなほぢつと見つめてゐる。

左京がやつて來る。人のゐるのを見てきつとなつたが、やがて

左京　七郎右衞門ではないか。――七郎右衞門だ。七郎右衞門だ。
（七郎右衞門の手を取る。）
七郎右衞門　誰だ。左京か。
左京　よく無事でゐてくれた。よく無事でゐてくれた。
七郎右衞門　何だ。おれがやられたとでも思つてゐたのか。
左京　おのしのことだから大抵大丈夫とは思つたが、併し何しろ敵の眞つたゞ中にゐたのだからな。館もおのしの安否はそれは〳〵案じて居られた。さあ、すぐに行つてお目通りをするがいゝ。館はどんなにお喜びになるか分らないぞ。
七郎右衞門　いや、おれは行きたくない、おれは人に面を見られたくないのだ。
左京　何をいつてゐるのだ。おのしは今度の戰の第一の勳功者ではないか。おのしがゐなくてどうするのだ。が、敵中にゐてよくあゝうまくやれたものだな。敵はすつかりおのしを信じてしまつたのか。僞つて降人に出たとは誰も氣づくものはなかつたのか。それでなくてはあゝ巧に矢文を放つたり、火を掛けたりすることは出來なかつたらう。
七郎右衞門　そんなことはどうだつていゝ。
左京　いや、さうでない。そのお蔭でこんなに容易く城が落ちたのではないか。ほとんど一兵を損せずして城を乘つ取るなぞといふことは今も昔もないことだ。
七郎右衞門　あゝ、莫迦〳〵しい。
左京　何が莫迦〳〵しいのだ。
七郎右衞門　かう事もなく落ちてしまつてはおれにはどうも面白くないのだ。
左京　張合がなくつてか。はゝゝゝ、おのしは相變らずだな。いや、それだからたゞひとり敵中へはいつて行く事が出來るのだ。
七郎右衞門　おい、追從は止せ。
左京　追從。何が追從だ。われ〳〵の攻めあぐんだ加世田の堅城を一夜のうちに陷れた殊勳者はどんなに取はやし

たつて取はやし過ぎることはない。この抜群の戰功者：……。

七郎右衞門　それはおれぢやない。おれぢやない。

左京　何故そんなに卑下するのだ。少しも卑下するところはないではないか。

七郎右衞門　あれはことごとく嘉門の手柄だ。嘉門が考へた計略なのだ。

左京　いや、さすがは七郎右衞門だ。おのしは死んだ嘉門殿に功を譲らうといふのだな。

七郎右衞門　そ、そんなことではない。

左京　それはおれも嘉門殿のことは聞かぬでもない。併しおのしがなかつたら……

七郎右衞門　おい、そんなやくたいもない話は止せといふに。

左京　何がやくたいもないのだ。おのしが嘉門殿の首を抱へて降人に出なかつたら、かういふ勝利は得られなかつたのではないか。

七郎右衞門　左京、何故止めないのだ。おれはそんな話を聞くとなほむしやくしやしてたまらないのだ。

左京　をかしな男だな。戰に勝つてむしやくしやするものが何處にある。

七郎右衞門　……

左京　地體おのしは何をそんなにぶり〳〵してゐるのだ。

七郎右衞門　癪にさはつてたまらないのだ。

左京　だから何が癪にさはるのだ。目ざす敵城を陥れて、しかも大半はおのしの力で落してゐながら、何がそんなに面白くないのだ。

七郎右衞門　おのしは勝ちさへすればそれでいゝのか。

左京　勝つたらこれよりいゝことはないではないか。

七郎右衞門　莫迦。

左京　なに。

七郎右衞門　それなら双六をして人から助言をされて勝つたのでも、おのしはやつぱり面白いか。

左京　……

七郎右衞門　他人がある案を考へておいた時、その案通りに筋が運んだとしたらどうだ。筋を立てた當人は定めて興が深いであらうが、その筋書どほりに動かされたものはどんな氣持だと思ふ。

左京　なるほどおのしの氣性としてはさうあらう。併しつづまりは誰の策であらうとも勝てばよいではないか。

七郎右衞門　だから貴公はたはけだといふのだ。

左京　併しをかしいではないか。それほど他人の案を嫌ふなら、何故おのしは嘉門殿の考へた策を用ゐたのだ。何故他人の考をそのまゝ行つたのだ。

七郎右衞門　そこだ。それをいはれると、何故おれはこんなことをしてしまつたのか口惜しくつて／＼たまらないのだ。おれは死んでもあいつの考へたことなどはやるまいと思つてゐた。あんな卑劣な策略はやるまいと思つてゐた。おれにはおれの考があつたのだからな。それにも係はらず、自分の考を捨てゝしまつて、自分が最も蔑んでゐたあいつの策を却て遂行してしまつた。何よりやりたくないと思つてゐたことをやつてしまつた。おれは莫迦だ。莫迦だ。

左京　が、そんなにやりたくないものをどうしてやつてしまつたのだ。

七郎右衞門　あいつは切に頼む／＼といつた。併しおれは耳にもかけなかつた。あいつを斬り倒して首を擧げるまでは、それは實にいゝ氣持であつた。「態を見ろ」と叫びたいくらゐであつた。それだのに、畜生／＼。

左京　それでどういふのだ。

七郎右衞門　おれにも分らない。どう考へても分らない。おのしはおれがあいつの首を持つて城の中に駈け込んだのだと思つてゐるだらう。うム、おれはたしかに駈け込んで行つた。併しおれは首を持つて行つたのではない。首に引きずられて行つたのだ。

左京　首に引きずられて。

七郎右衞門　さうだ。生きてゐる内はあいつは何かくだくだいつてゐた。併し首になつたら、もう何にものをいはなくなつてしまつたら、その何にもいはぬ口もとに、あいつが千萬言を費したよりも遥に／＼深いものが溢れてゐるのだ。おれはそれを見るともう何の分別もなくなつて、たゞ眞つしぐらに飛び出してしまつたのだ。

左京　うム。

七郎右衞門　ところが城にはいつてからはじめてしまつたと氣がついたのだ。併しもうかうなつてはあいつの策を行ふより外に道はないではないか。

左京　なるほど。

七郎右衞門　あいつは實にずるい奴だ。おれに首を渡しやがつて、あべこべにおれをこき使ひやがつた。あんないやな奴はありはしない。あいつは死んでまで策を弄しやがるのだ。畜生／＼。

左京　七郎右衞門。それは違ふ。嘉門殿に限つて……

七郎右衞門　いや、さうだ。さうだ。あいつはさういふ男なのだ。あゝ、おれはあいつにははかられた。あゝ、おれはしてやられた。その上あいつの計つたことは、ことごとくあいつの考へたとほりの結末になつたのだから、おれは一層いきどほろしい。――あゝ、あいつ、またおれ

を笑つてゐやがる。畜生。畜生。

左京　いや。嘉門殿は決してそんな淺はかな仁ではない。心から國を憂へて……

七郎右衞門　止せ、止せ、おれはそんなこと聞きたくない。

左京　ウム、止さう。併しこれだけはいつておきたい。おのしはあの仁の志を成就したのだ。嘉門殿もきつと心安く瞑目してゐることだらう。

七郎右衞門　えゝ、止さないかといふのに。――あゝ、畜生、畜生。駄目だ。（すすり泣く）

左京　七郎右衞門。

七郎右衞門　………

左京　おい、どうしたのだ。

七郎右衞門　………

左京　おのしはそんなに口惜しいのか。

七郎右衞門　口惜しい。

左京　おのしはすぐ激する。それは無理はない。おのしの心持はよく分る。が、併しどちらも同じ味方なのだ。おのしが負けた。嘉門殿が勝つたといふことはないではないか。

七郎右衞門　そんなことぢやない。そんな勝負(かちまけ)のことなんかぢやない。違ふ〳〵。

左京　ではなんだ。

七郎右衞門　畜生〳〵。――あいつは。あいつは。

左京　あいつがどうしたのだ。

七郎右衞門　あいつは死にやがつた。あいつは死にやがつた。

左京　うん。嘉門殿は死んだ。

七郎右衞門　駄目だ。駄目だ。おのしは分らない。おのしには分らない。

左京　何が分らないのだ。

七郎右衞門　畜生、おれはやられた。あいつは。あいつは。

左京　だから嘉門殿は何だといふのだ。

七郎右衞門　畜生。捨身になつてかゝつて來やがつて。……さうやられゝば誰だつて參つてしまふ。貴樣はずるいぞ。貴樣は。（泣く）

左京　おい、七郎右衞門。

七郎右衞門　貴樣はずるいぞ。さうしておいて貴樣はおれを笑はうといふのか。笑へ、笑へ。畜生。あゝ、おれは莫迦だ。おれはやられた。畜生、畜生。

左京　それはおのしの考へ過しだ。それでは嘉門殿がいたはしい。

七郎右衞門　えゝ、何にもいふな。何にもいふな。しばらく默つてゐてくれ。おれにはそれがよくいへない。

左京　何が。何がだ。
七郎右衞門　あゝ、あいつは。あいつは。
左京　七郎右衞門。さう激するな。氣を休めろ。氣を。
七郎右衞門　畜生、畜生。あいつは死にやがつた。あいつは……

（いくらか空が白みそめて來る。）
（火の手も大分下火になる。）
（空の上にまた嘉門の顏がほのかに浮び出る。そして寂しげにほゝ笑む。）

——幕——

（一九二六、五）

菊池寛篇解說

齋藤龍太郎

小傳

菊池寛氏は、明治二十一年十二月二十六日、香川縣高松市七番町に生る。

家は代々藩の文學であつて、その祖先のうちからは、天保時代の漢詩人として聞えたる菊池五山の如き名家を出してゐる。氏が幼少の頃より文學を好愛し、また、屢々その才能の片鱗を見せたのも、故なきではない。尋常小學四年にして、既に「文藝倶樂部」の如き雜誌を耽讀し、尾崎紅葉、幸田露伴、廣津柳浪、江見水蔭、泉鏡花等の諸作家の作品に親しみ、しかも、尚、よく之らを鑑賞し得たと云はれる。

儒家の後とて家計豐かではなかつたが、香川縣立高松中學に入學。常に弊衣破帽。しかし終始拔群の成績をかち得てゐた。

明治四十一年同校を成績優等で卒業し、直ちに校長の推薦によつて、東京高等師範學校に無試驗入學した。しかし、氏の藝術家的素質は、この學校の劃一的な規律に容れられず、僅かに在校一年餘にして、放縱不羈の行動が學校の忌むところとなつて、遂に除名放校處分にあふ。

しかし、この不幸なる事件は、氏の生涯にとつては重大な意義を有してゐる。何故ならば、これが氏の生涯の Turning Point を成したからである。

明治四十三年、斷然方向を轉換して、第一高等學校文科を受驗し入學した。こゝに氏の藝術家たらんとする芽は植ゑつけられたのである。氏が、或は上野の圖書館に、或は日比谷の圖書館に通つて、日々文學書を渉獵讀破したのはこれからである。傍々、歌舞伎芝居や當時勃興しかけた新劇等への瞥見を怠らなかつた。氏の歌舞伎芝居へ對する造詣及び、劇作上の實際的手法へ對する智識等は、恐らくはこの當時に養はれたものであらう。

この頃の氏の思想的傾向は、可なりオスカア・ワイルドの耽美主義に影響されてゐたやうに思はれる。しかし、ひとたび、バアナアド・ショオを知るに及んで、人生觀上一大轉機を來さざるを得なかつた。後年、氏が劇作乃至小説創作に於て見せたところの、倫理問題、戀愛問題、英雄主義、その他種々なテーマを取扱ふ場合の、あの明快な、パラドキシカルな、アイロニカルな、それでゐて涙ぐましき迄にシリアスな物の觀方といふものは、たしかに、この時に受けたショオの影響が力強く働いてゐるのに相違ないことを思はせるのである。一時はワイルドに傾倒したといはれ

る氏の後年の作品なり言說なりに、ワイルドらしきものの僅かしか現はれてゐない代りに、ショオらしきものはあらゆる部分に見られることを思へば、氏がショオから受けた感化影響の、決して僅少でないことが想像される。

氏はこの時代に、芥川龍之介、久米正雄と知つた。

大正二年四月、卒業の三ケ月前、氏は些細なる動機から友人の犯した罪に累せられて、止むなく學校を退かねばならなかつた。この間の消息は氏の「靑木の上京」等に現はれてゐるが、この時にとつた氏の態度は徹頭徹尾犧牲的行爲であつた。

その年の九月、氏は上田敏博士を私淑して京都帝國大學英文科の選科に入つたが、翌年、高等學校檢定試驗を受けて及第し、正式に本科に移つた。

翌年二月、東京の芥川龍之介、久米正雄、豐島與志雄等の發議によつて、第三次の「新思潮」を與すことになつたので氏も加名した。しかし、發表する作品には何れも本名を用ひず、草田杜太郎の變名をもつてした。もつとも、芥川龍之介もこの頃は柳川龍之助といふ名を用ひてゐた。ただ、本名を用ひてゐたのは久米正雄だけだつた。

この頃、氏は交友から離れ、孜々として硏究を續けてゐた。氏の心を引きつけるものはアイルランド文學だつた。イエーツ、ハイド、ジョンソン、ホッパア、バァロオ、ムウア、グレゴリイ、マアティン、シング、ダンセニイ等、ケルト文學に關するあらゆるものは之を讀破し、京都帝國大學圖書館に氏の眼に觸れざりしアイルランド文學書は一册もなしとまで傳へられてゐる。氏の廣汎な學殖はこの時代に蓄へられたものだと云つても、大した誤りはないものと信ずる。

この時代の作品に「玉村吉彌の死」「弱蟲の夫」「恐ろしい父恐ろしい娘」等の戲曲がある。

大正五年二月に、芥川龍之介、久米正雄、松岡讓、成瀨正一等と共に第四次「新思潮」を起す。この頃より氏の藝術的天分著しく顯はれて、名作「屋上の狂人」等を發表するに至る。同年七月京都帝國大學英文科を卒業。次いで東上し、十月時事新報社會部記者に就職し、傍、「父歸る」その他の名篇を續々「新思潮」に發表したが、少しも認められることなく、ために、筆を轉じて小說に專念し、「惡魔の弟子」「ゼラール中尉」「盜みをしたN」「大島の出來た話」「若杉裁判長」等を發表して、その主題の取扱ひ方に於て、その手法の簡素なる點に於て、その作風の明快新鮮なることに於て、獨特の境地を行く作家として、漸く一般の注目を惹くに至つた。

が、氏が眞に新進作家としての地位を確立したのは、大正七年七月に「無名作家の日記」を「中央公論」に、次い

で九月「忠直卿行狀記」を同誌上に發表して、一世の賞讃を博してからである。その後の氏は、所謂流行作家たる域に入り、諸雜誌は爭つて氏の作品を求むるに至つた。「恩讐の彼方に」「永瀨博士の晩年」「我鬼」「藤十郎の戀」「ある抗議書」「順番」等が現はれたのはこの當時である。

氏の處女出版「心の王國」が上梓されたのは大正八年一月で、かくて作家としての地位確立するや、二月時事新報社を退き專ら創作に從つた。同時に、大阪每日新聞社の聘に應じ社員となり、同紙へ作品の發表を約す。九月同紙へ連載されたものが「友と友との間」である。續いて、翌年十月から「大阪每日」「東京日日」兩紙へ「眞珠夫人」を連載するに至つて、兩都の人氣を一身に集め、氏が所謂通俗小說に對しても非凡の才能を有することを認めしめた。

且つ、同月、市川猿之助が新富座に於て、「父歸る」を演ずるや、その徹底せるリアリズムを基調とした戲曲の眞價が、初めて一般の了解するところとなり。一躍氏の戲曲家としての立場も確立さるるに至つた。そして、「屋上の狂人」「海の勇者」「奇蹟」「順番」「藤十郎の戀」等を初めとして、他の諸作も相次いで上演され、氏の信奉せるリアリズムは、その所期の成果を充分收め得た。

その後氏は多くの作品を書いてゐる。例へば、大正十年には「啓吉の誘惑」「蘭學事始」「入れ札」「亂世」「慈悲心鳥」「流行兒」「おせつかい」「溫泉場小景」「俊寬」「船醫の立場」その他を發表して、最早動かすことの出來ぬ大家たる地位を築いた。殊に、氏にとつてこの年に特記すべきことは、德田秋聲、加能作次郎、山本有三諸氏と計り、小說家の相互扶助、權利擁護等を目的とする小說家協會の創立に盡力し、今日の文藝家協會の基礎を作つたことである。この協會の設定によつて、小說家が對社會的に、在來よりもより以上に存在權を主張し認めしめ得たる意味に於て、氏の功績は僅少でない。

大正十一年以後氏は、「茅の屋根」「火華」「新珠」「貞操」「浦の苫屋」「戀愛病患者」「第二の接吻」「結婚二重奏」その他多くの作品を發表して今日に至つてゐるが、その間、或は「文藝春秋」を創刊して幾多有爲の新進を輩出せしめ、或は「演劇新潮」を興し又は「新劇協會」を扶けて、新劇のためにつくし、或は「映畫時代」の創刊によつて映畫藝術の向上を計り、或は「文藝講座」を刊行して文藝の普及を期する等、內に外に文藝及文藝家の向上と文藝の社會化とに努めて來てゐる。

氏の如く、文學者として最も良き素質を發揮した上に、激越な戰鬪的意志を持して、文學と文學者とのために、社會へ呼びかけた文學者は古往今來稀である。かつて、倫敦モーニング・ポストは社說を掲げて、菊池寬氏の驚異とす

べき戯曲の中には西歐人の學ぶべき或ものが存在してゐる、これらの作品は皆深刻な意義と美との偉大な藝術であつて、もし、日本に菊池寛氏の如き戯曲家が更に多くあるとすれば、日本は確かにその現代劇を世界に向つて誇るに足るであらう。日本人はあへてバアナアド・ショオやジョン・ゴルスワアジイを今更學ぶ必要はない、といふことを特筆した。(一九二六年三月三十一日モーニング・ポスト社說、"A DRAMATIST OF JAPAN")

しかし、氏の仕事はこれで終つたのではない。まだ、幾多の意義ある仕事が、今後も尙成就されて行くにちがひない。

戯曲

「父歸る」

大正六年一月、第四次「新思潮」に發表されたもので、氏の數ある戯曲中最も傑作とされるべき作品であらう。氏自身も、他の作品は滅びてもこれだけは殘るだらうと云つてゐる。大正九年十月、新富座に於て市川猿之助一派によつて上演されて以來、今日までに數知れず脚光を浴びてゐる。

「海の勇者」

大正五年、作者が京都帝國大學英文科を卒業せるの七月、第四次「新思潮」に發表されたもので、作者が愛蘭文學に傾倒せる時代の記念すべき反映の作とも見られる。特にシングの「海に騎り行く人々」("Riders to the Sea")に負ふところの多いものであらう。大正十一年四月、市村座に於て尾上菊五郎・河合武雄合同にて初演さる。昭和三年十一月松竹キネマ・スタディオによつて映畫化された。

「屋上の狂人」

大正五年五月「新思潮」に發表。當時少しも認められなかつたものであるが、しかし今日に於ては氏の傑作の一つであらう。大正十年二月、帝國劇場に於て守田勘彌・市川猿之助等によつて上演され好評を博した。

「藤十郎の戀」

氏の戯曲のうちでは最も華美なもので、恐らくはオスカア・ワイルドの耽美主義に影響された時代に胚胎せる心境を見せるものではなからうか。大正八年四月「大阪毎日新聞」に連載せる小說を、後に脚色せるもので、大正八年十月中村鴈次郎によつて、大阪浪花座に上演されて以來屢々復演されてゐる。現在では鴈次郎の當り藝として彼の家の藝の一つに數へられてゐる觀がある。

「暴徒の子」

大正五年三月「新思潮」にて發表。當時は「裏切」の表題をもつてしたが、後に改題。大正十一年新富座で、中村歌右衞門、中村福助等によつて演ぜられたのが最初である。

「奇　蹟」

大正五年八月「新思潮」に發表したもの。初演は大正十年五月、市村座にて尾上菊五郎、守田勘彌等の一座によつてなされた。その後他の劇團にも屢々上演されてゐる。

「溫泉場小景」

この作は氏が既に作家としての地位が確立した頃、即ち大正九年十月「新潮」に發表したもので、圓熟せる手法をみる。大正十一年十月明治座に於て澤田正二郎一座が初演。

「順　番」

大正八年九月「中央公論」に於て發表せるもの。大正十年二月、有樂座で舞臺協會の手によつて上演されたのが最初である。

「敵討以上」

最初は小說「恩讐の彼方に」として大正八年一月「中央公論」に發表したものであるが、その後脚色して上演臺本としたのである。大正九年三月、帝國劇場に於て守田勘彌の文藝座一派の手によつて上場され、續いて澤田正二郎その他によつても演じられ、何れも好評を博したものである。

「義民甚兵衞」

大正九年七月「中央公論」に發表した小說「義民甚兵衞」を脚色したもの。大正十二年五月、帝國劇場で澤村宗十郎一派が上演したのを最初とする。

「貞　操」

大正十二年八月、雜誌「女性」にて發表せるもの。

「岩見重太郎」

大正十一年四月「中央公論」にて發表。大正十二年一月淺草公園劇場に於て澤田正二郎一座が初演した。

「茅の屋根」

大正十一年一月「改造」に發表したものを、翌大正十二

年四月市村座で、尾上菊五郎一派が上演した。

「玄宗の心持」

大正十一年九月「中央公論」誌上に掲載さる。次いで十月有樂座に於て、市川猿之助一派が上場した。

「時勢は移る」

大正十一年一月「中央公論」に發表したものであるが、未定稿のまゝになつてゐる。幕末維新、明治、大正、と三時代の推移を現出せんとする意圖によるものであるが、現在では幕末維新の一時代しか書き下されてゐない。が、これだけでも獨立した演劇を形成するに充分である。大正十三年三月、京都南座に於て市川猿之助一派が初演してゐる。

「袈裟の良人」

大正十二年一月「婦女界」誌上に發表せるもの。

「震災餘譚」

大正十三年一月、震災直後に「中央公論」に於て發表せる作。之を澤田正二郎一座が同年三月淺草公園に天幕劇場を急造し、罹災民慰安の目的によつて演じたことのある思ひ出深い作品である。

「浦の苫屋」

大正十三年三月「演劇新潮」に掲載された。西鶴からヒントを得て作られたものらしい。同月本鄕座に於て市川左團次一派によつて上場された。

「時の氏神」

大正十三年七月「婦女界」誌上に發表されたもの。ほゝゑましきファースである。澤田正二郎一座が初演した。

「眞似」

大正十三年一月「新潮」誌上に掲載されしファース。畑中蓼坡の新劇協會が上演して好評を得た。

「丸橋忠彌」

大正十三年六月「改造」にて發表。同月赤坂演技座に於て澤田正二郎一座が初演した。

「入れ札」

大正十年二月小說として「中央公論」に發表したものを、大正十四年十二月戲曲に改作して同誌に掲載された。次いで、大正十五年一月、市村座に於て片岡仁左衞門、尾上菊五郎合同一座で上演。

「仇討出世譚」

雜誌「苦樂」に發表せるもの。十五年八月澤田正二郎一座が帝國劇場に於て上演した。

「戀愛病患者」

大正十三年八月「主婦の友」誌上に掲載。次いで十三年十一月演伎座で澤田正二郎一座が上演した。

「兄の場合」

大正十四年十一月「文藝春秋」戲曲號にて發表。「戀愛病患者」の姉妹篇。澤田正二郎一座が十四年十二月邦樂座で初演して以來、屢々この兩者を連續上演することによつて、特殊な效果を擧げて好評を博してゐる。最も大膽な、最も簡素な舞臺技巧を示してゐる作品であらう。

「舞臺に立つ妻」

大正十一年夏、澤村宗之助、森律子によつて帝國劇場で初演されて以來、數回上演されてゐる。尤も、花柳章太郎、藤村秀夫が之を演じた時には「盆栽」と改題したことがある。

「世　評」

大正十三年一月「女性」誌上に掲載されしもの。

「ある兄弟」

大正十年十一月帝劇で守田勘彌、大川友右衛門一派で上演したことがある。

「相　似」

大正十四年四月「女性」誌上に發表。次いで翌五月、帝國劇場に於て澤田正二郎一座が演じた。

菊池寛年譜

明治二十一年

○十二月二十六日、讃岐高松市七番町に生る。寛と命名。家は世々藩儒なり。幼少より文學を好む。

明治四十一年

○高松中學校卒業。直ちに校長の推薦により東京高等師範學校に入學。

明治四十二年

○在校一年餘、自由を欲する氣質が學校當局の忌む所となり放校處分にあふ。

明治四十三年

○第一高等學校文科に入學。この頃より各圖書館に通ひ、多數の文學書を涉獵讀破す。オスカア・ワイルドを知り、その耽美主義を渴仰す。次いで、バアナアド・ショオを發見し、人生觀上に大なる感化を與へらる。間もなく、久米正雄、芥川龍之介、松岡讓、成瀨正一等と相知る。

大正二年

○四月。友人の罪に累せられて止むなく學校を退く。卒業前三ケ月なり。

○九月。京都帝國大學英文科選科に入る。

大正三年

○檢定試驗を受け、英文科本科に入る。

○二月。芥川龍之介、豐島與志雄、久米正雄等と共に同人雜誌を與す。第三次「新思潮」なり。

○五月。草田杜太郎の變名を用ひて脚本「玉村吉彌の死」を「新思潮」に發表。

○八月。戲曲「弱虫の夫」を同誌へ發表。

○九月。戲曲「恐ろしい父、恐ろしい娘」を同誌へ發表。

大正五年

○二月。芥川龍之介、久米正雄、松岡讓、成瀨正一等と第四次「新思潮」を起す。

○三月。「暴徒の子」を同誌へ發表。

○四月。戲曲「不良少年の父」(新思潮)發表。

○五月。戲曲「屋上の狂人」(新思潮)發表。

○七月。京都帝國大學英文科卒業。文學士。戲曲「海の勇者」(新思潮)發表。

○八月。「奇蹟」（新思潮）發表。
○九月。「身投救助業」（新思潮）發表。
○十月。時事新報社社會部記者となる。月給二十五圓を受く。この頃千葉龜雄氏に知らる。「江戸ッ子」（新思潮）發表。
○十一月。「三浦太郎右衞門の最後」（新思潮）發表。

大正六年
○一月。「父歸る」（新思潮）發表。
○二月。「道を訊く女」（帝國文學）發表。
○四月。同鄕の奥村包子氏と婚す。
○十二月。「群衆」（雄辯）發表。

大正七年
○一月「惡魔の弟子」（帝國文學）、「ゼラール中尉」（新公論）發表
○三月。「勳章を貰ふ話」（文章世界）發表。長女瑠美子生る。
○四月。「病人と健康者」（帝國文學）發表。
○五月「盜みをしたN」（新小說）發表。
○六月。「大島の出來た話」（新潮）「死者を嗤ふ」（中央文學）「若杉裁判長」（新時代）發表。
○七月。「無名作家の日記」（中央公論）「海の中にて」（大觀）發表。
○八月。「敵の葬式」（新小說）發表。
○九月。「忠直卿行狀記」（中央公論）發表。
○十月。「父の模型」（新潮）發表。
○十一月。「青木の上京」（中央公論）「愛嬌者」（文章俱樂部）發表。
○この頃より評判よく、殊に「無名作家の日記」及び「忠直卿行狀記」は好評にて、異色ある作家として、認めらる。かくて、漸く新進作家としての地位確立す。

大正八年
○一月。「恩讐の彼方に」（中央公論）「永瀨博士の晩年」（新小說）發表。同月、處女創作集「心の王國」新潮社より出版さる。
○二月。時事新報社を退く。次いで大阪每日新聞社社員となる。
○三月。「我鬼」（新小說）發表
○四月。小說「藤十郎の戀」（大阪每日）「たちあな姬」（太陽）「ある抗議書」（中央公論）發表。
○五月。「まどつく先生」（文章世界）發表。
○九月。「順番」「中央公論」發表。同時に「友と友との

間」を大阪毎日に連載。
○十月。「簡單な死去」（新潮）發表。

大正九年
○一月。「神の如く弱し」（中央公論）「勝負事」（新小說）「出世」（新潮）「死床の願」（婦人公論）發表。
○四月。「盜者被盜者」（中央公論）「M侯爵と寫眞師」（解放）發表。
○五月。「笑ひと極樂」（改造）「名君」（文章俱樂部）發表。
○七月。小說「義民甚兵衞」（中央公論）發表。
○九月。「祝盃」（電氣と文藝）發表。
○十一月。長篇小說「眞珠夫人」を東京日日及び大阪毎日の兩紙に連載し始む。

大正十年
○一月。「蘭學事始」（中央公論）「啓吉の誘惑」（新潮）「妻の非難」（人間）發表。
○二月。小說「入れ札」（中央公論）發表。
○三月。「島原心中」（新潮）發表。
○四月。「亂世」（中央公論）發表。
○五月。長篇「慈悲心鳥」（母の友）を連載す。
○六月。「流行兒」（中央公論）「仇討三態」（改造）「R」（野依雜誌）發表。
○七月。小說家協會創立に努む。
○九月。「おせつかい」（小說俱樂部）を連載す。
○十月。「將棋の師」（新小說）「溫泉場小景」（新潮）「俊寛」（改造）「船醫の立場」（中央公論）發表。

大正十一年
○一月。「茅の屋根」（改造）「時勢は移る」（中央公論）「中傷者」（新潮）「澄子の一生」（婦人公論）「非望」（良婦の友）發表。
○二月。「父母子」（改造）。同月單行本「文藝往來」出版さる。
○三月。「惡因緣」（新小說）發表。
○四月。「火華」を東京日日及び大阪毎日へ連載し始む。「特種」（新小說）「岩見重太郎」（中央公論）發表。
○五月。創作集「中傷者」出版さる。
○六月。長篇小說「慈悲心鳥」出版さる。
○七月。「頸縊り上人」（改造）發表。
○九月。「玄宗の心持」（中央公論」を發表。
○十月。長篇小說「火華」出版さる。

大正十二年
○一月。「肉親」（新潮）を發表。また、この月「文藝春秋」を創刊す。
○三月。「遊女の天國」（女性）を發表。
○六月。「獅子と道化師」（局外）「身邊雜事」（中央公論）を發表。
○七月。長篇「新珠」を（婦女界）連載。ウィリアム・ル・キュウ原作「妖姫」（主婦の友）を連載。
○八月。「貞操」（女性）を發表。
○九月。「乳」（改造）「盗み」（中央公論）を發表。この月大震災に遭遇し、生活第一を叫び、有事の日に藝術の無力なるを嘆ず。
○十月。長男英樹(ひでき)生る。
○十一月。「石本檢校」（文藝春秋）を發表。

大正十三年
○一月。「震災餘譚」（中央公論）「眞似」（新潮）「世評」（女性）「ある記錄」（文藝春秋）を發表。又、長篇「新珠」「妖姫」創作集「貞操」等出版さる。
○三月。「浦の苫屋」（演劇新潮）「堀部安兵衞」（苦樂）を發表。
○五月。「夫婦」（改造）「微苦笑」（中央公論）を發表。長篇小説「陸の人魚」を東京日日新聞へ連載。
○六月。「丸橋忠彌」（改造）「羽衣」（女性）「石橋山」（苦樂）を發表。
○七月。「時の氏神」（婦女界）を發表。
○八月。「戀愛病患者」（主婦の友）を發表。
○九月。「墨」（文藝春秋）を發表。また創作集「肉親」出版さる。
○十月。創作集「戀愛病患者」「時の氏神」出版さる。
○十一月。「名君」「陸の人魚」等出版さる。

大正十四年
○一月。「妻」（改造）「自讃」（新潮）「不幸」（文藝春秋）を發表。
○九月。「亡兆」（文藝春秋）を發表。
○十一月。「兄の場合」（文藝春秋）を發表。
○十二月。戲曲「入れ札」（中央公論）を發表。また長篇「第二の接吻」出版さる。

大正十五年
○一月。「戀愛結婚」（中央公論）「澤村田之助」（改造）「歡待」（文藝春秋）を發表。「赤い白鳥」（キング）を連載しはじむ。

○三月演劇を創刊
○四月。「戰國父子」（改造）を發表。
○七月。「返り討」（改造）を發表。「映畫時代」を創刊す。
○八月。「敵薬」（文藝春秋）を發表。
○十月。「安樂椅子」（文藝春秋）を發表。創作集「時と戀愛」出版さる。

昭和二年
○一月。「蠅フライ」（文藝春秋）「あの道此道」（婦女界）を發表。
○三月。「結婚二重奏」を報知新聞へ連載。
○四月。「小學生全集」の刊行に着手す。
○七月。親友芥川龍之介の死に遭ふ。

昭和三年
二月。最初の普選施行さるゝや、東京第一區より社會民衆黨公認として立候補せしも惜敗す。

山本有三篇小傳及解説

山本有三氏は明治二十年七月二十七日早朝栃木縣栃木町に生れた。(戸籍上の誕生日は九月一日になつて居る。) 有三はペンネイムで、本名は勇造である。

父君は宇都宮の藩士であつたが、維新の瓦解後裁判所の書記などを勤め、有三氏が生れた當時は呉服商を營んで居た。そのため、氏は小學校を卒業すると直に東京へ丁稚奉公に出された。けれども、元來氏自身が商人たらんと希望した訣ではなかつたので、一年半ばかりすると其處を逃出して歸郷し、父君に學問の道に進むことの話しを乞うたが容れられず、しばらくは家業の手傳ひをして居つた。

父君との數回の痛ましい衝突の後、氏が再び上京してABCをはじめて學んだのは十九の春であつた。翌年神田東京中學校の五年級第二學期の編入試驗に合格し、爾來引きつゞき變則な學歴を踏んで、竟に大正四年東京帝國大學獨逸文學科を卒業した。

卒業後數箇月間新派劇に關係し、井上正夫氏等と共に劇場の實際に携つたが、深く感ずる處があつて、幕内の生活と絶縁し、心を傾けてストリンドベリイの「死の舞踏」の飜譯に從事した。もとより氏の文學に對する情熱は幼少の頃からあつたに相違ないが、眞摯に文學に志すやうになつたのはむしろ此轉機以後と見るのが當つて居る。

氏は大正六年早稻田大學の聘に應じて獨逸語の教鞭を執るやうになり、かたはら孜々として創作上の精進を續けた。氏の名をなさしめた津村教授以下同志の人々に至る初期の諸作は此間に執筆されたものである。大正十二年春早稻田大學辭任以後の氏は全く創作家として生活して居る。

大震後創刊された「演劇新潮」の編輯を擔當したが一年にして退いた。

氏の戯曲以外の著作には、未完の長篇小說「生きとし生けるもの」、感想集「塵勞」及「途上」、飜譯集「死の舞踏」(ストリンドベリイ) 及「情婦殺し」(シュニツツレル) 等がある。

さて、山本有三氏の戯曲の總數は十九篇であり、此戯曲集に收められたものはそのうちの十五篇であるから、殆どその全作品を集成したものといふことが出來る。但し最近の力作「西鄕と大久保」(三幕) は該作品の出版書肆改造社への作者の遠慮から遺憾ながら本集に收めることが出來なかつた。

氏の處女作は「穴」(一幕) で、これは氏がまだ高等學

校在學時代の明治何年かに川村花菱氏の手に依つて「歌舞伎」誌上に發表され、間もなく同氏の試演劇場に依つて上演されて居る。戯曲集「坂崎出羽守中」に採録されて居るもので、當然著作及初演年表中に加へるべきではあるが、匆卒の際正確な年月を詳にすることが困難であつたので表中には姑く缺けたまゝにして置かねばならなかつた。

氏が文學的活動を續けたのは、津村教授執筆の大正七年から起算して、今日までの處約十年間であるが、此間數篇の飜譯と長篇小說「生きとし生けるもの」とを除けば、その戯曲の作品數は二十篇に滿たない。一年平均二篇にも足りない上に、此作品中には二三十枚程度の小篇も幾つか含まれて居るのであるから、誠に寡作家だといはなければならない。して見ると、此作家は執筆して居ない時は何をして居るのであらうか。氏は現實に筆を執つて居る時間よりも思索して居る時間の方が多いのである。勿論常に作品のテーマ、構想に腐心して居るといふのではない。一言にしていへば、自分の心の姿を、心に映つる人生若しくは宇宙の姿を凝視して居るのだ。そして其處から作品のおのづと生れ出づるを待つて居るのだ。藝術はあらはれだといふのが氏の持論である。（「塵勞」所載、「藝術はあらはれなり」參照。）その意味は作家の内生活が十分に醱酵し充實し切つた時に作品は自然の勢で堰を押破つて奔出して來べきものだといふにある。然し、漫然、無爲にして待つたとてあらはれは決して生じない。氏は偉大なる努力と精進とを以つてその内生活が表現にまで高められるのを常住に待ち望んで居る作家である。これが日本の現代作家の一般に比して氏が寡作家である所以なのだ。

本戯曲集の作品配列は嚴に制作年代順に依つたものであるから、氏の思想の發展を跡づけるには都合よき筈である。私は今簡單に之等の作品に依つて語られる氏の思想に就いて考へて見たい。

山本有三氏の思想の中心をなすものは、理想(ゾツレン)が現實(ザイン)と果てしなき爭鬪を續け、常に前者が後者に阻まれて行く姿である。氏はまづ此相剋を個人の内生活のうちに覩た。戀愛の問題に於て互ひに敵となつた二人は、その戰を終つて勝者敗者となつた時にも、舊來感じ合つて居た友情を損つてはならぬ。津村教授は此理想(ゾツレン)を振りかざして進まうとするが、自分の競爭者(ライヴアル)にして弟子たる辻令一が憎いといふ現實(ザイン)をどうしても征服することは出來ない。彼は結局その醜い現實(ザイン)を兎にも角にも認容しなければならなかつたのだ。

だが、理想(ゾツレン)の實現を阻むものは自己心内の現實(ザイン)ばかりとは限らないのだ。「嬰兒殺し」の女主人公杉原あさは、自ら産んだ嬰兒を愛(いとほ)しみながら、却つて之を絞(くび)り殺して居る

けれども、之は彼女の內に愛したいといふ理想と殺したいといふ現實とがあつて相剋した結果ではなかつた。彼女の嬰兒を愛したいといふ理想は社會制度といふ冷嚴な現實に正面から衝突して破滅の運命に陷らざるを得なかつたのだ。「生命の冠」、「女親」以下、（海彥山彥等二三作を除けば。）「嘉門と七郎右衞門」に至る何れの作品に就いても同樣の對立を指摘することが出來ると思ふ。意志と意志とが交錯する處に、一種不思議な運命の意志ともいふべき別個の力が生じて來て、個人の意志は無慘に蹂躪されて行く。悲劇は求められざるに生れて來て居るのだ。

　此理想と現實との相剋といふ見方はやゝ抽象的であるが、最近河合哲雄氏は、山本有三氏の中心思想は「生存の殘酷」といふ點に存在するといふ意見を發表して居る。此解釋も明らかに山本氏の思想の極めて重要なる一核心を捉へて居る意見に相違ない。此思想が最も具體的に表現されて居るのは「女親」第一幕及第三幕の余田達馬の言葉に於てゞあつて、之を作者自身の言葉と見ることには、私も亦全く異存はない。「生存の殘酷」といふ思想は少しく物を考へる人なら一度は必ず逢著する思想である。如何に殺生禁斷を說く釋迦も、自らの生命を支へるためには、亭々たる巨木となるべき木の實の運命を中斷しなければならなかつた。愛の福音を傳へるべき洗禮のヨハネさへ、蝗の生命を奪ひ、蜜蜂の勤勞を掠めなければ、その生命を續けることは出來なかつた。此大事實は一應は何人の心をも擊つに違ひない。けれども一應では駄目である。此事實を知識的に認識したといふことだけでは大した意義はない。此「殘酷」を經驗し、體得しなければ何の甲斐もない。山本氏はたしかに之を經驗し體得し、常住に「生存の殘酷」を感じて居る人である。從つて河合氏の指摘して居る通り殆ど何れの作にも此「生存の殘酷」の感じは濃く滲み出して居る。河合氏の評論は、新聞に揭載された今日の分、卽ち第三回までしか讀むことが出來ないのでどういふ風に、發展するものか想像することは許されないのだが此「生存の殘酷」感を感ずることから、若し山本氏の思想が厭世的に傾き、悲觀說の色彩を帶びて居ると斷ずるのだとすれば、私には些か異論がある。なる程、「生存の殘酷」感は論理的には必然的に悲觀說に導かるべきものである。然るに山本氏の諸作は一見非常に暗澹たる色調を湛へて居ながら、不思議にも一脈奕々たる希望の光明に貫かれて居るのである。これは、「津村敎授」、「嬰兒殺し」、「同志の人々」等のあの陰慘極まりない作品の讀後に於ても讀者の心が一槪に暗くばかりはならないといふ事實が雄辯に語つて居る處である。

　何故山本有三氏は、當然その觀察者を絕望に導くべき事

象を見極めながら、なほ且つ悲觀説の暗い淵へ陥ち込まないで居られるのであらうか。之は理窟の問題ではない。その人の氣質の問題である。強い意志に燃えて居る氏の氣質が、此矛盾相剋の人生に救ひを來たさうといふ努力を捨てないからである。氏は幾度理想(ゾルレン)が現實(ザイン)の前に打ち倒されても、再び之を立ちあがらせようとする。「生存」と「生存の殘酷」の間に調和をはからねばやまぬ熱意を強く把持して居る。さうだ、調和、之が氏の進路の目標なのだ。

「生存の殘酷」――氏の思想の中心をかういふ點に求めることは、やゝ具體的であるだけに氏の思想の全般を包含せしむるには少しく言葉の狹い憾みがある。氏の心眼に映じたものは、自己心内の不調和、宇宙、人生の不調和であつたのだ。理想(ゾルレン)と現實(ザイン)の相剋、「生存の殘酷」といふも此不調和の諸相の一つに過ぎないのである。

此處で私は山本氏の思想がそこまで進んで來た徑路に少しく注意して見たいと思ふ。私の見る處に依れば、先づ氏の思索の對象に選ばれたものは個人の心理であつた。勿論氏自身がその選ばれた個人のうちの最も重要な一人であつたには相違ないが、氏はその周圍に氏と交渉を持つ個人の生活心理に深い洞察を加へることに思索の第一歩を踏み出したのであつた。此思索的發足は「津村教授」をはじめ氏の初期の數多くの戯曲が證明して居ると思ふ。かくて各個人の內生活が如何に矛盾扞格し、不調和混沌を極めて居るかを見た氏は、此不調和の説明を求めようとして、眼を宇宙的現象、自然界動物界の現象に放つた。すると其處にも多くの爭鬪と不調和とが氏の眼を待ちうけて居た。けれども氏は其處では不調和そのものゝ上に一種の調和が靜に行き亙つて居ることを感じた。氏の抱いた此感じは「雪」一篇を熟讀する讀者の胸には必ず強く觸れるに相違ない。個人の心理の矛盾から宇宙的な現象に心を惹かれて、其處に不調和は不調和なりに何氣なく調和して居る姿を見出した氏は、同じ調和を見出す希望を以つて、此度は人生へ、社會へ眼を移して見た。だが、人類社會の爭鬪と不調和とのうちに、宇宙、自然にあるやうな調和を見出さうといふ氏の希望はたやすく叶へられさうにもない。此心持は長篇小説「生きとし生けるもの」のうちに、また「西鄕と大久保」のうちに十分に窺ふことが出來るのである。

山本有三氏の思想は結局人生の不調和のうちにそのまゝでの調和を求めて居るものだといひ得るであらう。かゝるが故に究極の點に於ては「誰でも、斷えず努力して居るものは、われ等が救ふことが出來る。」といふゲーテの樂觀説と一脈相通ずるものがあるので、凡そ悲觀説とは緣遠いものだと信ずる。氏の感想集「途上」のうちに「正方形と圓」といふ短い一文がある。氏の母校である東京中學校の徽章

が正方形を二つ重ねたものだといふことを述べて、「正方形を幾つも〳〵重ねて行くと、最後には圓に達するといふところから、創立者である前校長、故、上野先生が考案されたものであると聞いて居る。―中略―。正しきものゝ表象ともいふべき正方形を理想としないで、圓を最後の目標にして居るのはさすがに先生である。私にはそこが限りなく嬉しい。」と結んで居る。氏は此場合圓を愛の表象として居るのであるが、私の今の考へかたにあてはめて、之を大きな調和の表象と解しても大した間違ひはあるまいと思ふ。要するに氏は、理想の受難を説き、「生存の残酷」を語りながらも、何處かで人生を肯定しようと努めて居るのである。要するに、絶えず個の問題に執して居るやうに見えながら、常に個を通じて全を見ることを忘れないのだ。

　山本氏の思想に就いては極めて大まかながらも凡そ述べた。次に氏の作風に就いて少しく語り度いと思ふ。前にも述べた通り氏は「藝術はあらはれなり。」との持論をもつて居るが、創作の實際の場合にあつては氏の作品は決して樂々とあらはれて來るのではない。勿論出來るだけ此原理に從順であらうとはして居るのであるが、氏の作品の多くは見るも痛ましいやうな異常な苦心と努力とに依つてその姿を與へられたのである。氏は所謂天才型の作家ではなくて、組織し構成する建築師型の作家である。思索生活の途上一つのテーマがあらはれて來る、氏は之を心の中で根氣よくはぐくみ育てる、十分に醗酵して來るのを氣長に待つ、さてそれからこれに最もふさはしい表現形體を與へるのに氏は並々ならぬ勞苦を惜まないのだ。氣に入るまでは幾度でも書き替へる、練れるだけは何處までも練る、かくして生れて來るのが氏の藝術である。若し作者の思想感情を眞實に傳へ得る表現を掴むといふことが所謂技巧の眞義であるとすれば、氏は實に此意味に於て技巧に凝るのである。用意深く、抜目なく、一歩一歩と氏は讀者を自分の思想の深みへと導いて行く。之は氏の作品の總てに就いて言ひ得ることである。

　だが、氏の作品の總てが思想的であり、構成的であるといふのではない。「海彥山彥」、「大磯がよひ」、「父親」、「雪」等には思想人としてよりもむしろ詩人として作者の一面がより色濃くあらはれて、それ等を特に愛すべく親しむべき作品として居る。わけても「海彥山彥」は、僅二日の日子を費したのみで、氏が理想とする通りに樂々と作者の情緒が流れ出でたもので、その高い藝術的香氣、柔さしい濕ひ、溫い和やかさ、全作品に漲るペーソス等は此作品を氏の最大の傑作の一つたらしめて居る。然もかくの如きは氏の持味の一つで、すでに感想集「塵勞」の中に「兄弟」といふ小品の中に立派にあらはれて居るのである。「海彥山彥」を

愛する人々は、これを生んだ母體ともいふべき此小品を一讀されんことをおすゝめする。

吉田甲子太郎

昭和三年三月

附言　不敏その任でない上に、時間が十分なかつたので非常に蕪雜なものとなつて了つたことを、讀者と山本先生とに深くお詫び致します。

著作及初演

津村教授

大正七年十二月作　發表　同八年二月「帝國文學」　同九年十月　於帝劇　勘彌の文藝座に依りて

嬰兒殺し

大正八年七月作　發表　同九年四月「第一義」　同十年三月　於有樂座　幸四郎宗之助等に依りて

生命の冠

大正八年十月作　發表　同九年一月「人間」　同九年二月　於明治座　井上正夫等に依りて

女親

大正三年三月作　發表　同九年九月改作「人間」　同十一年二月　於帝劇　勘彌猿之助補導の女優劇に依りて

坂崎出羽守

大正十年八月作　發表　同九月「新小說」　同九月　於市村座　菊五郎一座に依りて

指鬘緣起

大正十一年八月作　發表　同九月「改造」　同十月　於大阪浪花座　我童魁車等に依りて

同志の人々

大正十二年三月作　發表　同五月「改造」　同十四年三月　於邦樂座　菊五郎吉右衞門等に依りて

海彥山彥

大正十二年五月作　發表　同七月「女性」　同十三年四月　於大國座　勘彌宗之助に依りて

本尊

大正十二年十月作　發表　同十三年一月「サンデー毎日」

熊谷蓮生坊

大正十三年一月作　發表　同六月「改造」　同年九月　於邦樂座　同志座に依りて

大磯がよひ

大正十三年八月作　發表　同九月「新潮」

女中の病氣

大正十三年九月作　發表　同十月「演劇新潮」

スサノヲの命

大正十三年九月作　發表　同九月、十月「婦女界」

雪(シナリオ)

大正十四年一月作　發表　同三月「女性」

父親

大正十四年八月作　發表　同九月「改造」

嘉門と七郎右衞門

大正十五年五月作　發表　同六月「文藝春秋」　昭和二年

五月　於帝劇　新劇協會に依りて
　西郷と大久保
昭和二年四月作　發表　同五月「文藝春秋」
　霧の中(ラヂオ・ドラマ)
昭和二年七月作　發表　同十一月「キング」

日本戲曲全集・第四十六卷
現代篇第十四輯・第一回配本

昭和三年三月二十日印制
昭和三年三月二十三日發行
（非賣品）

著作者　菊池寛・山本有三
發行者　和田利彦
印刷者　島源四郎
製本者　高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目
發行所　春陽堂
電話京橋　六五二
四四一五
振替東京　一六一七

東京市小石川區久堅町・共同印刷株式會社印刷